

ログ・ホライズン ～高笑いするおーるらうんだーな神祇官～

となりのせとろ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

デポーチエリ・ティーパーティ

〈放蕩者の茶会〉 かつてそれはレイドコンテンツ攻略を目的としたサーバートップのギルドに引けを取らず対等に渡り合ったギルドでもなんでもない伝説のプレイヤー集団

一癖も二癖もある〈茶会〉のメンバーの中でもレイドのたびに本当か嘘かもわからない噂が生まれる一人のプレイヤーがいた

これはそんな彼が〈大災害〉に巻き込まれ非日常に巻き込まれながらも仲間たちと成長していく物語

はてさて今度はどんな噂がたつことになるのやら？

※注意点※

1. この作品は改稿作品ですが、改稿前の作品に出ていたキャラクターの性格などが変わっていたり、改稿前は出ていたキャラクターが出てこないなどのことがあります。

それを踏まえた上でこの作品を読んでいただけると幸いです。

2. この作品は原作を読んでもいない人でも楽しめるように作っているつもりではありますが設定など細かい部分がわからないことがあります。あり得るかもしれません。

実際に原作を読んでいる方が楽しめることは確かですので原作をあらかじめ読んでおくことができるのであれば読んでからこの作品を読むことをおすすめします。

2月22日：一部の話のタイトルを変更しました

目次

おまけ

〈高笑い〉の奏 | 1

〈紅き名探偵〉クイン | 8

正月記念 | 13

〈日常〉の奏 | 17

〈日常〉の千菜 | 21

Milky Way | 27

Happy birthday | 37

〈完璧凡人〉《おーるらうんだー》の奏 | 47

第一笑 始まりの高笑い

第一話 非日常との衝突 | 52

第二話 何一つ変わらないもの | 62

第三話 氷山の一角 | 69

第四話 俺の屍を越えて行け？はっ、俺の道にてめーの死体なんか
転がしてんじやねーよ | 75

第五話 二人は | 82

第六話 アキバへの帰還 | 92

第二笑 騎士たちの高笑い

第七話 初夏の夜に溶ける笑み | 99

第八話 できないこととやらないこと | 110

第九話 動き出す腹黒と高笑い 遊び心を忘れずに | 120

第十話 革命の風 | 127

第十一話 姫と剣聖 | 135

第十二話 高笑いと名探偵 | 143

第十三話 覚悟もない拳 | 151

第十四話 明かされる真実 | 167

第三笑 砂浜と宮廷に響く高笑い

第十五話 新たなるメガネ | 178

第十六話 エルノと奏 | 189

第十七話 千菜の合宿日和 | 198

第十八話 奏の宮廷日和 | 206

第十九話 奏という名の男の心理 | 218

第二十話 必殺の白と赤 | 229

第二十一話 まるで永遠の二番手 | 241

第二十二話 全開姫モード | 249

第二十三話 先駆者 | 256

第二十四話 出せる力を振り絞って | 264

第二十五話 大団え： | 269

第二十六話 流麗絢爛な海 | 283

第二十七話 出張隣のギルドホーム | 291

第四笑 祭りに響く高笑い

第二十八話 秋風に誘われて | 299

第二十九話 姫様の悩み事 | 309

第三十話 おいでよアキバの街 | 316

第三十一話 千菜の顔 | 324

第三十二話 ワレワレハ リアジユウヲ ユルサナイ 〈前編〉

332

第三十三話 ワレワレハ リアジユウヲ ユルサナイ 〈中編〉

345

第三十五話 さすが貴族！やることが汚い！

第三十六話 西の狐は笑う

第三十七話 月に馳せる思いは未だ消えず

第三十八話 おーるらうんだーな神祇官

第二部 予告

第二部予告

第五笑 その手に失せた夢の欠片

第三十九話 雪に散る深紅の花

第四十話 否定者と人斬り

第四十一話 いい人ですよ？胸焼けするくらいに

第四十二話 鬼が出るか蛇が出るか

第四十三話 異端児は礼を忘れない

第四十四話 紅の名探偵の宣戦布告

第四十五話 フジの神域

第四十六話 嘘にまみれた

第四十七話 リベンジ

第四十八話 龍神の手ほどき

第四十九話 奏儂八枝という名の男の心理

第五十話 みんなあなたのことが好きだから

第五十一話 燕が地を飛び雨が降る

第五十二話 戦場に一輪の花を

第五十三話 黒幕を演じてみれば

第五十四話 叶うならばその先へ

第五十五話	アキバレイド	566
第五十六話	不幸の象徴	573
第五十七話	終わらせる	580
第五十八話	大丈夫。	590
第五十九話	あの日見たもうひとつの光景	601
第六十話	投影剣宣	605
第六十一話	結末	615
第六十二話	君と共に歩くのは永久の道	623
第六笑	愉快に響くが高笑い	
第六十三話	早起きは三文の得されど時は金なり	629
第六十四話	罪人の近況	642
第六十五話	お礼参り	649

おまけ

〈高笑い〉の奏

名前：奏 レベル：90 種族：法儀族

職業：神祇官 サブ職業：陰陽師（レベル90）

戦場での役割：接近戦闘 後方支援 後方攻撃

HP : 10923

MP : 11873

身長：176cm

法儀族の特徴である刺青は左肩に

装備使用中の鎧：和風専用装備

装備使用中の白兵武器：刀 魔法具 古武術

二つ名〈高笑い〉

いい人バージョンの奏



デホーチェリテイパーテイ
放蕩者の茶会出身。見た目はぱつと見、好青年。でも、怒ると恐いらしい（千菜談）身内に甘いが他は割りとどうでもいい。お人好しだけれど性格はそこそこ悪い。

見た目は、髪を肩の少し上で束ねている。そこまで長くはなく、肩にかかる程度。左利き。目は切れ長。細身で筋肉はそれなりにしかつけていない（いわゆる細マッチョの一步手前）

幼少期から視界に不思議なものが見え本人はそれをなんなのかはつきりと認識出来ていない。

その眼に写っているものは霊や妖などといった意思の疎通がとれるものではなく土地の力、生き物のもつエネルギー、オーラのようなものではないかと奏は考えている。

〈放蕩者の茶会〉の中でもわりと古参な方のメンバーだった。奏、KR、インテイクスの三人はいわゆるカナミの信者仲間としてよくつる

んでいた。

〈放蕩者の茶会〉解散後は〈D・D・D〉や〈西風の旅団〉、などのレイドコンテンツに参加する大手ギルドに籍を置き、大規模戦闘に参加していた。

一時期、〈陰陽師〉の特技〈加護付与〉(その名の通りアイテムに加護を付与するもの)を使い商売をしていた。

結果は、高レベルの〈陰陽師〉の少なさもあり大成功したが、あまりの忙しさに嫌気がさして三ヶ月でやめた。今でも知名度は高く、復活を望む声も多い。大災害後は〈加護付与〉を行うともものすごく疲れる(本人談)らしく、奏はさらにやる気を無くした。



サブ職業

陰陽師

〈エルダーテイル〉のサブ職業の中では比較的稀有な類いの称号系のサブ職業

〈占術師〉の派生上位職で神祇官カンナギしかなることのできないもので、アンデット系のモンスターを討伐することでのみ経験値が入る使用になっている。レベル上げのハードルの高さからカンストさせるまでいくも者は少数しかいない。

〈パルムの深き場所〉に程近い〈恐魔山〉でのレベルリングが効率的ではあるが、〈恐魔山〉に出てくるモンスターのレベルは高いためやはり〈陰陽師〉の敷居の高さは低く見ることは出来ない

特技

〈陰陽札作成〉

魔法を封じ込めた陰陽遁の札を作成する特技

性能は自家の〈妖術師ソウサライ〉や〈森呪遣ドレイド〉の火力や回復に引けをとらない札もある。が、そこまでの性能となると制作費も相応に高くなってしまうため多用しすぎるのも考えものである。

自家よりも優れた点があるとすれば、それはMPを消費することなく使用できることと、札を使用することのみで呼び出すことのできる召喚獣のランクが〈ミニマム〉ランクではなく〈ノーマル〉ランクの

モンスターであることである。

召喚獣の呼び出し中は常時MPを消費し続けるので召喚術師サモナーのよ
うな半永久的に出し続けることは出来ない。

〈加護付与〉

武器やアクセサリなどに付与効果を付ける特技

本来の能力に加えて自由に1つ効果を付与することができる。

ただし〈陰陽師〉のレベルが90になったとしても〈幻想級〉や〈秘
法級〉のような強力なものが付与できるわけではない。

それでも能力を自由に付与させることができるのは十二分に有用
なもので大規模戦闘に参加するようなトッププレイヤーは知り合い
に〈陰陽師〉がいるならば付与してもらおうと思う者は多い。

〈聖域結界〉

その場に広がる力を集めて結界を展開する。展開すると外と内を
遮断する。結界内は簡易的なゾーンとなる。展開する結界の範囲に
よって展開時間も変わるため永久的にゾーンを発生させることはで
きない。それにゾーンの設定を操作するメニューがないため一時的
な小休憩をとるために使うぐらいしか用途はない。

フレイバーテキスト

陰陽の道を極め続ける者たち

自然の理を学び霊や妖、聖獣と関わることを生業とする。その技術
は専門家として様々なものを学び探求し続けた末のものである

使用アイテム

夜刀 風月玄沢

かつて行われた十二職業それぞれの最強を決めるPVPでの優勝
報酬。職業によってルールの違いはあったが、どの試合も白熱したも
のだった。

基本攻撃力の高さ、攻撃速度の高さもさることながら、注目すべき
は神祇官カンナギの特技に対する補正の多さにある。一職業最強の者が持つ

武器として文句なしの業物である。

1. 〈ダメージ遮断魔法〉の遮断ダメージ量、効果、持続時間+10%

2. 〈ダメージ遮断魔法〉の詠唱時間-10%

3. 神祇官〈カンナギ〉の特技によるダメージ量+15%

4. 回復呪文の回復量+10%

5. 呪文詠唱時間、消費MP-20%

フレーバーテキスト

夜の空を照らし続ける月の光と会うことのできない者へと募らせる想いが混じりあい1本の黒刀となった。

想いに比例し刀の力は強く強く純度を増していく

偽光届かぬ佰式の儀式杖

夏の深夜限定レイドクエスト〈語り部集いし佰物語〉の神祇官専用幻想級の絶対数も少ないレイド産品アイテム

奏がまだ〈夜刀 風月玄沢〉を手に入れる前に使っていた杖

武器としての性能は特筆するような高いものではないが回復職としての神祇官〈カンナギ〉の力を強化する上では最高峰の能力をもつ杖

1. 装備者が敵に与えたダメージ量の約30%分、パーティーでトップヘイトになっているプレイヤーのHPを回復する。

(パーティーに誰も参加していない場合は自分が回復する)

2. 戦闘開始時に〈禊の障壁〉がパーティー全員にMP消費なしで自動付与される。(効果は本来の〈禊の障壁〉の60%となる)

3. 〈ダメージ遮断魔法〉の付与時に付与されたプレイヤーの全体HPの10%を回復する。(この効果は2の特殊効果発動時にも反映される)

4. 装備者が状態異常になった場合、10%の確率で反射し、20%の確率で無効化、30%の確率で効果を半減する。

フレーバーテキスト

太陽の光を吸収し続けることで力をため続け百の術式を成し遂げるため百年樹の枝を素材として作られた儀式杖

蓄積された魔力は無尽蔵に増幅し周囲の生命にまで影響を与えてゆく

黎明の胴衣

長編クエストへ復讐の夜を明けてをクリアすることで手に入れることの出来る〈秘宝級〉の和風専用装備。布鎧でもあるために防御性能は低いが耐呪、耐魔性能が全防具中でもトップクラスの品、他の耐性も多く何より回避性能に大幅な補正がかかるため手に入れようとする者も少なくない。

クエスト内容が深い怨みを持って死んだ王族の姫の復讐を止めるという内容で、ラスト以外は内容がとても暗くクリアするには強い精神力が必要。その分最後は晴れやかな内容で終わるため、感動して涙を流したプレイヤーも少なくない。奏も思い入れが強くこの装備を気に入っている。

1. 耐魔・耐呪 特大
2. 耐毒・耐冷気 大
3. 回避性能×1.5

フレーバーテキスト

復習に囚われた姫の哀しみが染み込んだ衣は同種の哀しみや苦しみを引き寄せ吸収する。

苦しみ続けた姫は長き夜の悪夢から目覚めるために痛みを受けとめ涙を流して歩み始める

長い夜はいつか明けるのだと信じることで

天虎の高下駄

天空を駆け回る伝説の虎から与えられた〈幻想級〉のアイテム。高い回避性能に加え、MPを消費することで移動中でも魔法を使用可能

にする効果を持っている。しかし、奏は魔法札があるのであまり多
しない。

1. 回避性能×2
2. 移動速度上昇 大
3. MPを2倍消費することで移動中でも魔法を使用可能に

フレーザーテキスト

自由を誰よりも愛す虎は空を駆けることを願い神をも喰らう力を
得た。

虎は夢を追うものを愛し見続け信じるものを追う者のみに力を貸
し助言をし続ける

そんな虎の願いと意思が込められたが込められた空を駆けるため
の翼

竜玉の腕輪

大地を支配する伝説の龍から与えられた竜玉を加工した〈製作級〉
アイテム。中央に緋色に輝く大きな宝玉が嵌まっている。MP増加
やHP・MP自動回復などの長時間の戦闘を支えてくれる頼もしいア
イテム。一日一回MPを全快させる特殊効果も持っている。

1. MP+1000
2. HP・MP自動回復 中
3. MP全回復（一日一回）

フレーザーテキスト

空を駆けることのできなくなった龍は歩みを止めることはなかつ
た。

怠慢なものを嫌い空を駆けることを奪った者を恨むことなくただ
ひたすら目の前に立ちはだかる邪魔者を喰らい尽くす

そんな龍の渴きを満たさんとするがその渴きは常に生まれ続ける。

燈籠の外套

防御力にはマイナス補正までかかるが声を曇らせばやかし装備している人間の声を変えろ効果まである隠密性能に特化しきつた防具。全身をすっぽり覆うような黒い外套で光を反射しないように創意工夫がこなされており、フードをとらなければ魔法で顔が見えることはない工夫が施されている。ステータスも名前が表示されなくなり一部のものしか表示されない。かわり戦闘系の特技が全て使用不可能になる。

本来は町中で遊びに使うぐらいしか使用用途がないが、取得難易度はわりと高い。奏はKRと一緒に面白半分で行って二人揃って痛い目をみて帰ってきた。

乙姫の盃

漆塗りの美しい大盃。本来は秘法級のアイテムではあるが攻撃魔法にしか補正がかからず神祇官の奏にはどうしても余してしまいう品であったため奏は好きな酒を飲むときにしか使用することがない。

綺麗な見た目からも性能からも奏は扱いきれないことを残念に思っている。

譲渡可能な珍しい類いの秘法級のアイテムでもある



元々は典型的な「祈祷師型」型（後方支援を重視する型）だったが、カナミとか、カナミとか、カナミとかが大規模戦闘でも構わず突き進み回復が間に合わないことが少しばかり有ったため、だったら俺も前線に出て追いかければいいと考え、「戦乙女」型（接近戦闘を想定した型）に変更した。だが場合によっては後衛専用装備に切り替えて戦うこともある。〈ホネステイ〉のギルドマスター、アインスと同じく「戦乙女」「弓巫女」という称号に不満があり、アインスとはその件で大いに盛り上がった。

現実の方で、古武術、剣術を習っていた経験があり、今は古武術の体捌きや歩法を刀の扱いと組み合わせている

〈紅き名探偵〉クイン

名前：クイン レベル：90 種族：ヒューマン

職業：付与術師 サブ職業：交渉人（レベル90）

戦場での役割：後方支援 後方攻撃

HP : 9423

MP : 12873

身長：164cm

装備使用中の鎧：布鎧

装備使用中の白兵武器：短杖

二つ名〈紅き名探偵〉



〈モルグ街の安楽椅子〉のサブギルドマスターを〈大災害〉によりいなくなつたサブマスの代わりに務める少女。見た目は年の割には幼く見られがちではあるが一応は十九歳。普段から一貫して深紅の衣装に身を包んでおりなにかしらのこだわりを持ち合せている。また赤面症の気があり少しの思わせぶりな態度などで恋愛小説などから得た当てにならない知識をふんだんに使い込んだ妄想をして顔を真っ赤に染めるため奏によくからかわれている。

見た目は黒髪のボブカット。銀の眼に仕事中は銀の縁なし眼鏡をかける。体は細く胸はあまり大きくない。本人も胸がないことを気にしているが、貧乳はステータスだ希少価値での言葉を支えにして日々を過ごしている。両利き。

高校の頃に奏とは出会い、そこからずっと兄妹ぐるみでの付き合いがある。奏の姉とは昔、なにかしらの因縁らしいものがあるのか仲がすこぶる悪い。〈エルダーテイル〉も奏たち兄妹の影響で始めた。

〈付与術師〉の中でも珍しい〈スプリングラー〉所謂攻撃重視のビル

ドをとっておりお世辞にも^{エンチャンター}〈付与術師〉としての腕は一流とは言えない。よくて二流の上位程度。戦闘能力はあくまで平凡ではあるがクエストやモンスターなどに対する情報収集能力においては一流ギルドの斥候たちと遜色ない働きをしてみせる。

◆ レイド参加経験は片手が数える程度にはありはするが全て難関と言われるようなハードクエストではなく〈ゴブリン王の帰還〉のようなレイド初心者用のレイドしか経験したことはない。

サブ職業

交渉人

◆ 〈エルダーテイル〉の中でも行商をメインに楽しむプレイヤーたちが比較的好んでなるロール系のサブ職業。本来はNPCの商人との売買を行う際に補正がかかり市場価格よりもアイテムを安く買い取れたり、高く売り払えたりするようになったりクエストのクリア条件を一部難易度を下げたりと幅広かつ確かな活躍をする人気職でもある。しかしクインの場合は探偵としてのロールプレイの一環としての意味合いが強い。

使用アイテム

^{ワン・ハンズ・ポテンシャル}
〈可能性を紡ぐもの〉

◆ スプリングラーとしては必須と言っても過言ではない追加効果付与の能力を有する短杖。形状は銃そつくりで作られているがあくまでも杖であることに変わりなく構造は銃弾を発射できるような構造にはなっていない。欧州サーバーやアメリカサーバーではこれと似た装備がいくつもある。

追加効果はダメージ増加とは異なるダメージ追加という点がみそであり通常攻撃とは別にひとつの攻撃にヒット数が2になる(ダメージ追加で相手に与えるダメージはランダム)。

1. 魔法攻撃に追加効果ダメージを付与する。ダメージ値は10

0〜500でランダム決定する。

2. 攻撃魔法に限り消費MPをー7%

〈フレイバーテキスト〉

夢を見るのは子供の権利。じゆう

夢を叶えるのは大人の権利。じゆう

夢のために無鉄砲に進めるのは子供の権利。じゆう

夢を諦める理由いいわげができるのが大人の権利。じゆう

最後に選択する自由けんりは全員みんなのものに違いない。

〈紅恋外套〉くれんがいとう

端から袖まで燃えるような真紅の〈制作級〉のコート。コートの内には〈魔法の鞆〉と同じアイテムを重量関係なしに収納できるポケットが存在している。ただし収納容量は〈魔法の鞆〉とは比べるべくもなく半分以下に設定されている。ゲーム時代では〈魔法の鞆〉を**持つ**ば十分に役目は事足りていたので需要としては低かったが〈魔法の鞆〉のようにかさばらないためデザインの良さ、一定の性能もあって〈新妻のエプロンドレス〉同様に〈大災害〉以降に需要を伸ばしてきている。

1. 冷気耐性大
2. 火炎耐性中
3. 70 kgまでのアイテムを重量なしで収納可能。ただし、装備の耐久値が20%を下回った場合にはこの効果は一時的に発動しなくなる。

〈フレイバーテキスト〉

おしゃべりでお調子者のダザネフの弟子がたまたま偶然なんの奇跡か作り上げてしまった魔法のコート。師匠のダザネフもこれには驚くよりも先に呆れる。もしかすると弟子には才能があるのかも？

不良品があったとしたらごめんなさい。

〈レプラコーンの幸せを呼ぶブーツ〉

〈エラリーじいさんの靴工房〉というクエストのクリア報酬により手に入る〈魔法級〉のブーツ。モンスタートロップ増加や金貨のドロップ増加に高い能力を持ち、非戦闘時にはMP回復率の補正がかかる優秀な装備。

強いて難点をあげるとすれば、戦闘そのものに直接効果を発揮する効果を持ち合わせていないことであるが、戦闘は基本専門外であるクインにとってはさしたる問題はない。

1. モンスタートとの戦闘によるドロップアイテム及び金貨のドロップ率増加
2. モンスタートとの戦闘による獲得経験値×1.15
3. 非戦闘時、装備者のMP回復率×1.2
4. 非戦闘時、任意で無音効果スネークを発動

〈フレバーテキスト〉

おじいさんとレプラコーンが共に作った最初で最後のブーツ。たまたま現れる妖精はブーツを大事に扱っているかを見に来ているから。いつのまにか妖精の姿は消えているけど妖精が消えた後のブーツは新品のようにぴっぴかぴか。

〈燈籠の外套〉

防御力にはマイナス補正までかかるが声を曇らせばやかし装備している人間の声を変える効果まである隠密性能に特化しきった防具。全身をすっぽり覆うような黒い外套で光を反射しないように創意工夫がこなされており、フードをとらなければ魔法で顔が見えることはない工夫が施されている。ステータスも名前が表示されなくなり一部のものしか表示されない。かわり戦闘系の特技が全て使用不可能になる。

本来は町中で遊びに使うぐらいしか使用用途がないが、取得難易度

はわりと高い。奏が持っていた〈灯籠の外套〉を見て無理矢理駄々をこねて奏に取得の手伝いを付き合わせさせたのはクインにとってはいい思い出。



〈口伝〉

〈貴方と歩くのは永久とわの道〉

五感の共有を実現する非戦闘系の〈口伝〉。ただし発動条件にいくつもの誓約、手順があり発動できる場面、対象が限りなく狭くなっている。クインが使うことができるのは奏、千葉らの親しい仲の人物かミノリやトウヤなどのクイン自身が気に入っている人物が精々だろう。本来は存在しない『好感度に依存する』という誓約を付け加えたとしてもきつとなんら問題はないだろう。

正月記念

◆Q & A

『冒険者になって良かったことは?』

トウヤ

A. 自分の足で走り回れるようになった
クイン

食べても食べてもダイエットしなくてよくなった
シロエ

A. 100m走っても足が吊らなくなった

感想

奏

クイン、シロエ、

お前ら、トウヤに謝れ

Q. 『冒険者になったときどう思いましたか?』

アカツキ

A. 夢の高身……特になにもない。

ソウジロウ

A. 今なら馬車にも走って追い付いて飛び乗る自信がありませんっ!

ウイリアムⅡマサチューセッツ

A. テンション上がりすぎて覚えてない、です。
感想

奏

お前らが幸せそうので何よりだ。

Q. 『今の職業はどうして選びましたか?』

ミノリ

A. トウヤが前衛職サムライを選んだので私はトウヤを守る回復職《カンナギ》を選びました。

直継

A. 仲間をズババーンと守ってカツチヨいと思ったから祭り
奏

A. 代々仏教徒なので
感想

千菜

兄さん神社生まれでしょ

Q. 『戦闘時に気を付けてることは何かありますか?』
奏

A. 刀で直接攻撃を受けないようにしてます。
にゃん太

A. 常に冷静さを欠かないようにしてますにゃ。
クラスティ

A. 返り血を浴びて出来るだけ高揚するようにしています。
感想

高山三佐

ミロード、お戯れが過ぎます。

Q. 『へエルダーテイル』をやる前はどんなゲームをしましたか?
また、それはどんなゲームでしたか?』

千菜

A. 『とびだせ! 社畜の森』

村の村長だからという理不尽な理由でポケットマネーを使って村
のあらゆる事業を行うゲーム。ちなみに給料は出ない。

奏

A. 『ポケモン』

そだてやの前の一本道を無限に往復する十歳の少年少女がマフィ
アや環境保安団体、ウソっぱちだらけの宗教団体、新世界を作ろうと
するキチガイなんかを叩き潰し、あらゆる絶滅危惧種や希少動物を乱
獲するゲーム。

感想

リーゼ

それ、面白いんですの…？

Q. 『円卓会議にこれから先求めることは？』

通りすがりの大地人Lさん

A. 何よりもっと低レベルの者でも活躍できる場、もしくは低レベルで一人での活動をしているものに講習などで情報の提供をしてもらいたいな。

直継

A. おパンツの開示

奏

A. 全女性冒険者の黒ニーソ着用義務

感想

クイン

前者の方、素晴らしい意見を感謝する。ぜひに〈円卓会議〉でもその議題は上げて検討していきたいと思う。これからも有意義な意見を期待している。

後者の二人、後でギルド会館裏集合な

Q. 『円卓会議の中心ギルドの中でどんな仕事をしているのか気になるギルドは？』

奏

A. ホネスティ

クイン

A. ホネスティ

マリエール

A. ホネスティ

アキバの住人百人に聞きました

アキバの街の住人の99%が選んだのは、

ホネステイでした

感想

アインス

知ってますよ…私たちの影の薄さくらい…

でも、マリエールさんっ!?アナタは同じ〈円卓会議〉の仲間でしょっ

!! (泣)

Q. 『デミクアスのニックネームを考えて下さい』
てとら

A. 「デミデミ」

奏

A. 「綺麗な嫁さん持ち」

千菜

A. 「綺麗な声のお嫁さん持ち」

クイン

A. 「かかあ天下 (笑)」

感想

夫妻者のデミクアス (笑)

おおいつ!!くそお!てとらア!!

なんで会ったこともねえ奴にまでバレてんだア!!

あとなんだっ!?この夫妻者のつてえ!?ナメてえ…

デミクアスさんは感想の回答中に奥様に連れていかれてしまったため途中までの回答を記載させていただきます。

〈日常〉の奏

名前：奏

年齢：21

武器：人の心を見抜く観察眼

得意技：ムカつく笑顔

誕生日：1月1日

好物：れんこんのきんぴら

アイテム1：〈藍染めの浴衣〉

〈第八商店街〉のカラシンに頼み探してもらった肌触りのよいなんのへんてつもないただの浴衣。日々新しいものが生まれるアキバの街ではあるがやはり和服の絶対数は少なく奏の気に入るものはなかなか見つからなかったのでやっと見つけたお気に入り。奏は寝巻き兼部屋着に着用している。

アイテム2：〈竜髭の筆〉

竜の髭を用いた〈製作級〉アイテム。丁寧な作りに書き心地の良さから奏の愛用の品。〈陰陽札〉の作成には欠かせない一品。

アイテム3：〈フウモンスイカの押し花の葉〉

アサクサにいた時の小さな友人ウイルから貰った花束の一輪を押し花にして栞にしたもの

小さな紫の花の花言葉は『憧れ』

《奏のとある1日》

05:00 起床。バチリと目が覚める。今日の夢にはカナミが出てきた。朝からテンションが上がる。

05:30 アキバの街へとランニングへ。もちろん高下駄ではなくて普通の靴

06:00 アキバの街の広場で型稽古。最近朝のランニングをするアカツキとトウヤと出くわす、一緒に型稽古をする。でもトウヤはたまに寝坊していないことも。

07:00 ギルドホームに帰る。さらりとシャワーを浴びて千菜の部屋に侵入。最近侵入設定の解除なんておちやのこささいさい。寝顔を見ながらニヤニヤする。

07:30 千菜を起こす。なんで勝手に入っているのかと殴られる。頭にたんこぶができる。

08:00 朝食。ギルメンみなでいただきます。今日の朝御飯は白ご飯、味噌汁、鮭の塩焼き。

08:35 最近発行されるようになった新聞もどきヘアキバDAYSを熟読。発行元はヘモルグ街の安楽椅子デーブな内容でR-15指定。

09:00 明日架に頼まれて小竜と一緒に倉庫の整理を手伝う。倉庫の奥になぜか^{ダークマター}暗黒物質を発見。汚物は消毒だー!! 千菜に焼いてもらう。

10:00 今日は^{ダークマター}へ記録の地平線のギルドホームでミノリとトウヤに授業。途中で五十鈴とルンデルハウスも参加する。

10:50 授業の休み時間。にゃん太の淹れてくれたアップルティーでホッと一息。

11:00 接近戦闘訓練。ハンデをつけてトウヤと組み手。一発入れられ弟子の成長に染々と感慨深いものに浸る。気を抜いてしまってもう一発食らう。朝、千葉に殴られたところにジャストミート、痛い……

11:30 ミノリにダメージ遮断呪文の最適投射のコツをレクチャーする。実験台に直継を使う。八つ当たりでわざと鎧通しを使う。

12:30 昼御飯をぐちそうになる。にゃん太師匠のご飯はやっぱり美味しい。シロエの愚痴を聞く。

13:00 レイネシア姫のところへ様子を見に行く。最近顔パス。エルノの大切な姪妹つ子。悩み相談を受ける。クラスティの愚痴へと話題がシフトする。

14:00 へモルグ街の安楽椅子のギルドホームへ。椅子に座って眠りこけているクインの顔に落書きをする。途中でマイクロフトも参加。

14:30 クインが起きる。落書きはバレていない。そのまま下らない話を駄弁る。

16:00 へ三日月同盟のギルドホームに帰る。マリエールの書類仕事を手伝う。ヘンリエッタに甘やかしすぎるなど釘を刺される。でもヘンリエッタもなんだかんだで書類仕事を手伝う。

18:00 入浴。お風呂場ではのんびりと。騒ぐ馬鹿どもには鉄拳制裁。

19:00 入浴後のストレッチ。異様な体の柔らかさに一番下のメンバーの子に尊敬される。

19:30 みんなで夕食。ギルメン全員揃ってる。今日あったことをみんなで話す。

20:00 自室で魂魄の扱いの特訓をする。いつの間にか2時間が経っている。汗がダラダラ。

22:00 もう一度風呂に入ると千葉と鉢合わせする。そのままなぜか一緒に入ることになががあった……。

22:30 自室に戻って〈陰陽札〉の作成をする。

…つもりだったが素材が足りなかった。明日取りに行こうとメモをする。

23:00 就寝。今日もあの頃茶会の頃の夢が見れますように

〈日常〉の千菜

名前：千菜

年齢：19歳

武器：姫モード

得意技：ウチのにいちやん強いんだぞ！

好物：牛乳

誕生日：8月7日

桜色のキャミソール

千菜が寝巻きにしているキャミソール

寝るときはこれに短パンを履いている

〈三日月同盟〉の若い男の子たちには刺激が強くてしようがない。そこは千菜もわきまえて自室を出るときはきちんとこの上に若草色のパーカーを着ている

それでも魅力的な生足を惜しげもなくさらしていることには変わらないし、実の兄には普通に部屋に侵入されて見られているのだからしようがない

兄妹お揃いのマグカップ

青と緑の色違いのマグカップ。青は奏のもので緑は千菜のもの。食器専門生産ギルド〈瀬戸物屋〉で奏と一緒に買い物へ出た時にたまたま見つけて買ったもの

奏が選んでくれたもので緑茶を飲むときでもお酒を飲むときでも使うお気に入り

でも奏からは雰囲気崩れるから酒を飲むときだけは止めろと不評を買っている

コスプレ小物セット

ヘンリエッタの影響を受けて最近集め始めた小物セット

猫耳から鬼のパンツまで揃ってるけれどどこに需要があるのかわ

からないアイテムもちらほら見える

最近では生産系ギルドを回ってこういうアイテムを探すのが趣味になってきているけれどその姿をたまに見かけるアカツキはなんとか別のところに行くようにと必死に話を逸らそうとしている

千葉のとある一日

7:30 起床。頬をつつくような感触で起きる。目を明けると目の前には奏の顔がビツクリしてついぶん殴る。

骨にひびを入れたような感触を感じる。アレ？ヤバくない？

08:00 みんなで朝食。チラチラと奏の様子を探ってみるけどいつもと変わらない？大丈夫かな？

そんなことを考えていたらみんな食べ終わっていた。片付け当番の子に急かされる。

08:30 こつそりと奏を観察。大丈夫かな？

09:00 奏に倉庫に呼ばれる。ヤバいお仕置きにエツチなことされる！

わけもなく、倉庫の奥に暗黒物質ダークマターが発見されたらしい、焼き払う。汚物は消毒だー！

09:15 ごちやごちや考えても仕方ない。クインに相談しにへモルグ街の安楽椅子のギルドタワーへ行く。

徹夜明けらしいクインを寝かせることなくそのまま相談

09:50 ロデ研に行けばなにかいい道具を貸してくれるかもとアドバイスを受けてへロデリック商会に向かう。もちろんクインも一緒に。

「寝かせてくれ」というクインの声は聞こえない。だってあそこに

知り合いなんていないもん。

10:30 「それならこれなんかどうでしょう？」ロデリックから
なんかブクブクと泡立つ注射器を進められる。

「こんなもん使えるか！」

10:40 「ではこれなんてどうでしょう？」

頭に怪我をしているならバレないように隠してしまえ。

髪の毛が十メートルくらい伸びて直立する薬『これで君も○ンさん』

いい加減にしないとそのメガネがち割るぞ

10:50 「はい。スミマセン。真面目にヤリマス」

自己治癒能力を高める入浴剤をもらう

ただしお湯に使った二人目までにしか効力がないから使う時は注意が必要と注意を受ける

11:00 よかったよかった、問題解決。せつかくなのでロデ研
の中を見学させてもらう。面白いアイテム（失敗作）がたくさんあつた。いくつかお土産ももらう。

12:00 お昼御飯。クインの知っている雰囲気の良いカフェで
サンドイッチとオレンジジュースをいただきます。

クインが目の前でこっくりこっくりと船を漕ぎ始めた。

12:30 〈モルグ街〉のギルドタワーにクインを送り届ける。お
礼はまた今度

13:00 さて、お風呂の時間まで暇だな。アキバの街でもぶら
つくか。

（お風呂が男女別で別れていて男子がたくさんいることにまだ気づい

ていない)

14:00 アカツキと街中で出会う。あんぱんを買って〈記録の地平線〉のギルドタワーと一緒に向かう。

14:30 トウヤが奏から一本とったことを興奮して話してくる。最初はニコニコと聞いていたけど話を聞くうちに木刀が入ったところが朝にぶん殴ったところと同じっぽい

冷や汗がダラダラ

15:30 にゃん太に勘づかれて朝にあった出来事をみんなに話す。ちゃんと解決策を用意したことも話すけれどミノリに男子は一斉にお風呂に入るんじゃないかと指摘を受ける。

冷や汗が止まらなくなる

15:40 もう素直に謝った方がいいんじゃないかと言われるけれどそうもいかない。

癪だしなんか恥ずかしいし

みんなで解決策を話し合う

16:00 仕事の息抜きに出てきたシロエが話を聞いて妙案を出してくれた。

流石〈茶会〉の鬼畜ドS参謀、腹が黒いを通り越して漆黒だ。誉めたつもりがへこまれてしまった。

とにかくお礼を言ってアカツキとミノリに慰められるシロエを後目に退散

17:00 ギルドホームに帰りつく。厨房の手伝いをする。

もちろん〈新妻のエプロンドレス〉はつけてるよ？

19:00 食堂に食器を運んでいるときにリビングルームで奏が

最年少の子にじゃれつかれているのを見て微笑ましく思う。けど、奏の頭に触れないかヒヤヒヤする

19:30 夕御飯。みんなでいただきます。ヘンリエツタさんに今日ロデ研で貰ったお土産の話をする

20:00 奏が自室に入って魂魄のコントロールの特訓をし始めた。

作戦開始！へ千紫万紅の大薙刀を使つて奏の部屋に熱を送る。人形が現れてそんなくだらんことに我を使うなど怒られるけど、抱きついてお願いしたら許してくれた。

チヨロイン

リリアナに何をしてるんですか…と怪訝な目で見られる
しーっ

22:00 奏の修行が終わつてお風呂に行く準備をし始める。よし、お風呂場に行つて入浴剤を溶かそう

ヘンリエツタさんに捕まった。ロデ研で貰ったお土産について根掘り葉掘り聞かれる。

急がないと奏がお風呂に入ってしまう。

お土産セットをヘンリエツタさんに押し付けてお風呂場にダツ
シュ

22:10 お風呂場に駆けつけた時には時すでに遅し
もう上半身は脱いでた。ぐぬぬ、どうするべきか。

……………一緒に入ろう。

無事に入浴剤を混入完了

ミツションコンプリート…

12:00 就寝。

したいけど、奏の引き締まった体が脳裏にちらついて顔が火照って
眠れない…

02:00 就寝

Milky Way

七月七日

日本ではそれは言わずとしれた七夕の日。

天の川を隔てて離ればなれへとなくなってしまった織姫と彦星が年に一度だけ会うことが許された約束の日。短冊に一人ひとつの願い星に捧げるロマンチックな日だ。

そして〈記録の地平線〉の一人の少女アカツキの誕生日でもある

「クエストか？」

「そ、クエスト。しかも結構難関のね。ちよつとその日は〈三日月同盟〉の人手がちょうど出払っててさ、協力要請んだけどどうかな？」

七夕の前日、〈記録の地平線〉のギルドホールのリビングホールには来客がいた。その来客の男はこの世界ではさして珍しくない程度の漆のように艶やかな黒い長髪を首元の後ろで一本にまとめ、切れ長の目で対面に座る依頼主がアカツキの瞳を覗き込むような形で尋ねた。「それは構わないが…、わたしやバカ直継はともかく、主君や老師は厳しいかもしれない」

アキバの街は落ち着いてきたとはいえまだ〈円卓会議〉が成立してからそう時間が経っているわけではなく、〈円卓会議〉の議員であり同時に創設者という肩書きを持つ〈記録の地平線〉のギルドマスターであるシロエはまだまだ〈円卓会議〉の仕事が日々突発的に舞い込んできているはずだ。クエストの内容を聞いてみればクエストは夜限定という期間制限付きのものらしく、いつ仕事が飛び込んでくるかわからない現状、休める時に休めるようにできればシロエもしたいはずなのである。

そして、にやん太はそれとは別の理由がある。彼は〈記録の地平線〉唯一の〈料理人〉、〈記録の地平線〉は確かに人数も一桁しかない零細ギルドではあるが、全員が依頼者から聞かされたクエストに参加できるだけのレベルマージンを超えた人材で構成されているわけではない

いのだ。その年少組をほっぴらかして全員がクエストに参加するわけにはいかない。ご飯もない中留守番させるなどあまりにも酷すぎる。

「ああ、それは大丈夫。二人にはもうきちんと話を通してあるから。トウヤとミノリについても問題なし。〈三日月同盟〉で預かるよ。別に全員が全員出払うわけじゃないしね」

というわけで明日の夜、夜の午後八時にギルド会館前に集合ね。明日はよろしく、アカツキちゃん。

来客は湯呑に入ったほうじ茶をあおって飲み干し、椅子から立ち上がりながら言ってニコリと笑いながらアカツキに手を差し出した。

それにアカツキも

「ああ、こちらこそよろしく頼む、奏」



「はい！それじゃあ全員集まったところで始めさせてもらおうよ」

夏とはいえ太陽はさすがに沈みきり鈴虫の声がどこからともなく聞こえてくる中大きな声で声を上げたのは今回のクエストの発案者〈三日月同盟〉の奏だった。集まったのは奏、シロエ、直継、アカツキ、にゃん太、クインの六人だった。

「主君、主君、今回のクエストの概要は詳しく知っているのか？」

「うん？ああ、実はそこまで僕も詳しくは知ってるわけじゃないんだよね。話だけだったら聞いたことはあるんだけど。クインさんだったら知ってるんじゃないかな？一応情報屋ギルドの人だし」

アカツキがシロエの長いローブの袖を後ろから引つ張りながら上目つかいにシロエを見上げながら尋ねる。それにシロエも正直なところを話して自分も詳しくは知らないことを伝えた。それでも今回のクエストには珍しい顔があるのでその人なら知っているかもしれないと件の人の方へと目を向けた。

「確かに知ってはいるが別にそう難しい内容ではないぞ。よくあるモンスターがポップする道を駆け抜けていくタイプのクエストだ。ゴールへの到達タイムで報酬が変わるから難易度はまちまちといっ

たところだな。狙っている報酬でピンからキリだ」

視線を向けられたことに気づき察しよく返事を返すのは目を引くほどに真つ赤なスプリングコートを羽織った黒髪の少女。流石情報屋ギルドのサブマスということもあってかいつまんでクエストの内容だけを説明していく

「はい、その主従コンビと赤面探偵。クエスト内容は今からちゃんと説明するからちゃんと聞いとけよ。

クエスト名は〈天を駆けるための大橋〉。

まあ言うところの期間限定クエストってやつだな、しかも公表されずに追加された隠しクエ。人数規制は6人のワンパーティー規制。敵mobのレベル帯は平均78。こっちの世界で戦うにははわりと高めだが、このパーティーならなんとかなるでしょう。

戦場としては空へと昇る長い階段。階段で戦闘を行うわけだから階段にもある程度の幅はあるけれども階段から落ちた人間は死にはしないが、バフが付けられて入口にテレポート戻されるから気をつける。なにより入口に戻されるのが痛い。昇る距離がそこそこあるから終盤で離されると、最悪合流するまでは一人で敵と戦闘することになる。加えて戦力が落ちれば最悪パーティー全体が戻らざるおえなくなるからできるだけ落ちないように。

特にエンチャンターへ付与術師二人、お前らは気をつけるよ、単体戦闘能力はどうしても他より低いんだから」

「おい奏、質問があるんだけどいいか？」

「なんだねおパンツ騎士くん」

「お前そんなこと言ったらちみっこに…、なんで蹴られないんだ？おパ、ビベシツトツツ!!」

鮮やかな膝蹴りが“あるワード”を言いかけていた戦士然とした鈍色の光を反射する重厚な鎧を着込んだガタイのいい青年へと突き刺さる。

「主君、あの変態に膝蹴りを入れてもいいだろうか？」

「事後承諾するなよっ！てゆーか、ちみっこ！奏も言ってたじゃないか！不公平だ!!異議を申し立てるぞー！」

「ハハッ、直継、安心しろ。これは信頼の差というんだ。不公平でもなんでもない」

「そうだな、だからお前が信頼するわたしが直々に折檻すれば不公平でもなんでもないな」

カチャリ、と金具が引かれる音が奏の背後からした次にはパァンツ、と乾いた発砲音が響く。突然の後頭部の衝撃に両手で後頭部を抑えてうずくまる奏

「痛い！頭の中が痺れるように痛い！しかも継続ダメージ入ってる!?!
おい、衛兵はなにしてる！仕事しろよ、コイツよりもよつて魔^{〈マインドボルト〉}法
使いやがった」

「ああ、衛兵さんたちならさつき月見団子買って屯所にワープしていくところを見かけたよ」

「金返せ！あの税金泥棒！」

別に〈衛兵システム〉を管理する供贄一族は〈冒険者〉から徴収された税金で働いてるわけではないし、むしろ〈冒険者〉は税金など払ってはいなかった。ただ働きをさせられているのだから七夕の夜くらは月見団子くらいは食べてもバチはあたらないだろう。

衛兵さんいつもご苦労さまです。

「奏ち、こうやって鈴虫の声に耳を傾けながら雑談というのも悪くはありませんが、はやくしないと時間だけが過ぎていきますにや」

「そうだつ！おい直継、質問ってなんだ！はやくしないと時間^{有効期限}ぎれになる」

うずくまっていた体勢からガバリと勢いよく立ち上がって直継と呼ばれた青年へと問いかける奏。

「ああ、いやな。そんな一直線な階段を昇るならなんで千菜を連れてこなかったのかと思って」

「あいつ高所恐怖症なんだよ。昔高い高いしすぎて天井に頭ぶつけて床にまで落ちたもんだからそれ以来高いところダメなんだ」

「ああ…、そうなの」

高い高いのしすぎでなぜ天井に頭をぶつけてそのうえ床にまで落ちるのだろうか？そしてそれでなぜ高所恐怖症になるのだろうか？その

疑問を直継は苦笑いしている友人へ問いかけることはしなかった。ただ身の丈を超える大薙刀を振り回す友人の妹につくづく同情した。

「それじゃ、これ以上質問がないなら行こうか」

奏が腰の後ろに下げた魔法の鞆マジックバックへ左手を突っ込み探り当てるような動作をする。そして目当てのものを探して探してたらしく一気にその左手を引き抜く。その手に握られていたのは小さな小瓶。小瓶の中にはきらめく青い砂のようなものが入っていた。

奏はその小瓶の蓋を開け、ギルド会館の屋上にも届きそうなほどに、天高く小瓶を放り投げた。もちろんそんなことをすれば小瓶の中身はばらまかれるわけで中から溢れだした青の砂は月の淡い光を反射しながら舞い散っていく。降ってくる青のカーテンに触れた奏たちワンパーティーは転移のわずかな浮遊感に襲われた。

「なるほど、専用ゾーンってわけね」

ゲームの頃と違ってリアルな階段で戦うわけになるから、高低差とかには気をつけないとね。奏の言う通り階段の幅には縦も横も結構余裕があるけど足を踏み外したら目もあてられない」

シロエは目の前に広がる真っ暗な星のまたたきだけが光源となる星空の空間とその中で存在感を放つ幅の広い階段と階段を前にしながらすでにゾーンの考察に入っていた。そこは伝説の〈デポーチエリ・テーパーパーティー〉の参謀担当であっただけあって慣れたものだった。

「奏は今日はいつもの刀じゃなくて杖なのか」

「ん、ああ。まあね、このパーティー回復職〈カンナギ〉の俺しかいないし、今日の主役は俺じゃないからね。全力でサポートさせてもらうから安心して駆け回っていいよアカツキちゃん」

「?よろしく頼む」

普段使っている夜の空のように黒い黒刀を魔法の鞆マジックバックへとしまい込み代わりにシロエの持つ杖と同じくらいに長い純白の上に金の装飾が施されたそれでいて決して煩わしさを感じられない杖を引っ張り出す奏。

「みんな、準備はいい？このスタート地点を出ればすぐにモンスターがポップし始めるそうならばもう立ち止まってる時間はないからね。それじゃあ、行こう！」

「おおお!!」

パーティーの指揮を執るシロエの号令と共に^{ガーディアン}〈守護戦士〉である直継を先頭にしていっきに駆け上がる。十メートルと進まないウチにポップした鳥型のモンスターたちの第一陣と接触した。

「しゃあっ！飛ばしていくぜ！〈アンカー・ハウル〉!!」

直継が接触そうそうにモンスターたちのタゲをとるために剣と盾をぶつけ合い唸り声をあげて挑発する。

それと同時に後方で待機していた奏がカン、と杖を階段へと強く突きたてて杖の能力を発動させる。杖の効果により本来よりは幾分か性能は落ちながらも奏のMPを消費することなくパーティーの全員に〈ダメージ遮断魔法〉が投射され、それと同時にアツカーであるアツキとにやん太が前へと飛び出した。

「パラライズブロー」

「ヘクイックアサルト」

アツカー二人が前へ飛び出せば二人の邪魔をしないようにクインが〈ヘマインドボルト〉を振りまき死角から迫るように飛びかかってくるモブをひるませ散らしていった。その隙にシロエは前衛三人にそれぞれパフを振りまいていき攻撃力や速度を底上げしていく。底上げされた能力値にレベル90のパーティーのアツカー二人にかかればいとも簡単に鳥型モブの嘴を切り裂き、翼を貫いて絶命に追いやっていった。

クインが散らし切らずに攻撃が通ってしまふことがあっても奏が張る〈ダメージ遮断魔法〉がダメージを抑え、障壁が壊れた瞬間にはすでに次の障壁が貼り直されていく。

その理想的なパーティー戦闘は順調に進み、星空の中宙へと浮く白銀の階段を半分以上を登り詰めてなお、パーティー全員のHPが八割を切ることは一度たりともなかった。そしてそのまま奏たちは階段を駆け抜けていく。

「かー！もう、鳥どもたんたんど沸きすぎだろ。だんだんうざったくなってきた」

「発案者のくせに一番にめんどくさくなつてどうするのだ、ば奏」

「こいつらもう俺焼き鳥と唐揚げにしか見えなくなつてきた。焼き鳥と唐揚げが飛んでるよ、超うまさ」

「何匹か捕まえて帰ったら調理しますかにやー。甘酢だれとマヨネーズをつけてチキン南蛮というのもいいですよにやー」

「師匠マジさいこー。アカツキちゃん何匹かパラライズブロウで麻痺させてこつちによこしてよおー！」

「心得た。老師、私は唐揚げにレモンの付け合せも所望する」

「わかりましたにやー」

「僕はチキンカレーがいいな！」

「シロエち、流石に夜にそれは重すぎますにや」

戦いながらもそんな風に雑談をするくらいには全員に余裕があった。これでも全員が武器を振るいながら話しているのだから手に負えない。

「^{アサシネイト}へ絶命の一閃！」

アカツキが宙を跳ぶ鳥めがけてさらにその遙か上をとり^{アサシン}へ暗殺者の最効火力を誇る一撃を叩き込むことでまた一羽祝勝会のおかずが増えたところで直継が声を上げた。

「おい、あれってゴールじゃね？！」

見上げる先には階段の終着点と見える大きな空間が存在しその中央にはワープゲートと思われる光の門が見えていた。

これを見た奏はニヤリといい笑みでニヤけてみせた。ゴールが見えたことによる歓喜の笑みではない。それはイタズラを考えている子供のような笑みだ。

準備は整ったと言わんばかりに奏は^{アサシン}へ四方拝を使い直継とにやん太、クインに目配せをおくる。三人とも合図にアイコンタクトで返事を返すとすぐに行動へと移った。

「アカツキちゃん、ちよつとごめんよ」

悪びれもしない声でそんな風に声をかけられたアカツキがなんの

ことかと奏の方を振り向こうとした時にはもう遅かった。アカツキの小柄な身体がその一回り以上大きな奏に抱き抱えられる。いわゆるお姫様抱っここというやつだ。

「ほわっ！奏なにをする!?!」

「はいはい後で膝蹴りでも^{アサシネイト}へ絶命の一閃でも喰らうから。今は口閉じてたほうがいいよ、舌噛むからねえ。じゃ、師匠先行お願いします。」

「心得ていますにや」

「老師！これはどういうことか!?!主君!?!主君!?!」

アカツキが最後の砦である主に助けを求めようと奏に抱き抱えられた大勢で首だけを必死に動かしてシロエを探した。そしてアカツキが見たのはクインの拘束系呪文によって縛り上げられ直継によって抱えられるシロエの姿だった。

アカツキとシロエの目がバツチリと合う。お互いがアイコンタクトで伝えあった。

(助けて！アカツキ！／主君！)

双方無理な話である。

「それじゃあ、いきますにやあ」

「ごめんねアカツキちゃん。流石に女の子を・あんな風には運べないからさ」

にゃん太がへエンドオブアクトをを使いいつきに階段をゴールへと走り抜け、目の前に現れる敵を片っ端から切り裂いていき、その後ろをアカツキを抱えたままへ天足法の秘技とクインのへフオーステツプの併用でなんとかにゃん太の後ろを追走していく。

そしてその後ろから、奏のへダメージ遮断魔法だけを頼りにシロエがその身体を飛ばされた。

「へシールドスマッシュ!」

「あああああああ!!」

「しゅくうううん!!」

直継に特技の力を使って投げ飛ばされF1カーさながらに奏たちを空中で追い抜いていったシロエは目標通りにゴール地点のワープ

ゲートへと吸い込まれるように飛んでいきフツとその姿を消した。無事に転移できたらしい。着地についてはきつとへダメージ遮断魔法がなんとかしてくるだろう、たぶん。

「つてことでアカツキちゃん、誕生日おめでとう。ささやかながら俺たちからのプレゼントだよ。さながら織姫と彦星のようにたつぷりといちやついてくるといい」

ぶっ飛んでいったシロエとは対照的に安全にそして速やかにワーブゲートの前まで運ばれたアカツキは奏からそんな風に言われて光の門へとゆつくりと放り投げられた。

転移する前に最後にアカツキが見た奏の顔はぶん殴りたいほどにとってもいい笑顔だった。

「さてとふたりがゆつくりできるように二十分くらいは持ちこたえて見せようか。」

クイン、そのために連れてきたんだからしつかり働けよ赤面探偵赤面探偵「誰にもものを言っている。ここから先の甘い空気にわたしが耐えられるわけがないだろう。ぜつたい持たせてみせる」

このクエストはパーティーメンバー全員がゴールしなければクリアにはならない。そのうえゴールゾーンから階段の方へと戻ってすることはできない仕様になっている。

つまり、階段で四人が居続ければそれだけふたりを綺麗な星空のもと二人きりにできるわけである。

◆◆◆これがささやかではあるがアカツキへのバースデープレゼント

◆◆◆「大変な目にあっちゃったね」

「そうだな、主君」

天の川。

まさにその例えが一番適当な表現になる場所だった。三百六十度見渡す限りに煌く星たちについて目を奪われそうになりつつも、シロエは目の前にいる自分の後から追うようにして入ってきた黒曜石のようになめらかな綺麗な目を持つ少女へと視線を向ける。

少女は見つめられていると気づくと目をそらすことはせず、そのまま真っ直ぐにシロエの目を見つめ返してきた。

その動作にシロエはドキリとしてしまう反面で奏たちからきつちり祝ってこいと丸め込まれたことを思い出し、自分の魔法マジックバッグの鞆へと手を差し込む。

ヘンリエッタに引つ張られて入った女性が好んで使うような店で周囲の視線に耐えながら必死の思いで購入してきたかんざしを取り出した。

「誕生日おめでとう

——アカツキ」

「~~~~ッ!!」

アカツキの頬が嬉しさが気恥ずかしさが赤く染まる。

礼を伝える声はどうしても小さくなってしまい顔も俯いてしまう。嬉しいと気持ちいを伝えたいのに、ちゃんと目を見て話したいのにな。どうしても恥ずかしさに耐え切れない。

そんな風にして顔を見上げることができないアカツキの頭の上にポンと大きくて暖かな感触が乗った。

「はっごめん！っいつ…」

見るに見かねたのか、本当についやってしまったのか、たぶん後者のだろう。この朴念仁はそんな器用な気の利いたことができる人間じゃないから。アカツキは知っている。知っていてそういうところも好きだから。

少し前なら怒っていただろう。年下に扱われるようなそんな扱いに、でも、それでも、こんなふれあいも最近では悪くないと思うようになった。

アカツキのどうしようもない恥ずかしさはもうどこかに消えていた。残ったのはあつたかい嬉しさだけ

「ありがとう、主君。主君からのプレゼントとても嬉しい」

少女の素直な気持ち。

空に浮かぶは天の川。織姫と彦星が微笑むように瞬いた。

Happy birthday

「なあ、今年のシロの誕生日、どうする？」

ここはアキバの街の中心から僅かに離れた郊外に建つ雑居ビルのひとつ。へ円卓会議の代表ギルドのうちひとつでもある^{ログ・ホライズン}〈記録の地平線〉のギルドタワーの一室である。

そこには部屋の広さを考えるといささか窮屈に感じられる人数が集結しており、どうにもひとりひとりの距離が近い。さすがに全員分の椅子があるわけはなく何人かは壁に背中を預けたり、床にあぐらをかいて座り込んでいる者もいる。そんなせまっくるしい中でひとり仁王立ちで声を上げたのが直継だった。

「どうって…、普通に祝えばいいんじゃないやね？」

去年は二十四時間耐久レイド巡りに行ったけど、今はそんな馬鹿できんだろ」

「あれは流石に二度とやるべきものではないと思いますにや…」

『なんで誕生日プレゼントを自分で取りに行かなきゃいけないのさ！しかも参謀は変わらず僕だし！』

プレゼントを伝えた時のシロエの至極まっとうでもっともな意見を奏は覚えている。どこぞの狂戦士ならともかくさすがにレイドそのものを誕生日プレゼントにされて喜ぶ程シロエの価値観は歪んではいなかったわけで、勿論二十四時間とは名ばかりのこれまでシロエが参謀を務めたレイドのプレイ動画を編集した再生時間二十四時間の大作動画を贈った。

大変喜んでもらったと同時に動画作成に加わりたかったと苦言を呈されたことも奏は覚えている。ちなみに動画の大半はやらかしちゃった集とレイド間の休憩時間に撮ったで構成されていてナイスプレイング集などの真面目に参考になるようなパートは少ないので表に出せるような代物ではない、身内ウケしかしないものだ。伊達にプレゼントを計画した人間の大半が二十四時間などという長時間動画の編集作業に地獄を見たわけではないのだ、終始真面目な内容などやってられたものではなかった。それを知らないシロエは一回あの

地獄絵図を見てみればいいと逆に全員に言われたのだった。

「主君の誕生日、それは盛大に祝うべきだ」

「そうですね！シロエさんには日頃からお世話になりっぱなしですし」

長い間の連れである面々の渋い顔とは裏腹にアカツキとミノリのふたりはやる気まんまんにシロエの誕生日計画を練ろうとしている。「どこか広い会場でも貸し切ってパーティーというのはどうかね？それはもう盛大にぱーっと」

「ルデイ、そんなお金どこにあるのよ、まずわたしたちだけしかないのに準備が間に合わないじゃない」

「む、ダメか」

ルンデルハウスがこれ妙案と意見を出す^がそれを五十鈴が諫める。確かに準備という面では言う通りだ、部屋いっぱい^に人がいるとはいえ所詮は直継の自室。零細ギルドの^{ログ・ホライズン}の地平線の^の人員ではパーティー会場の準備を一から十までこなすことは不可能だろう、それ以前にシロエにばれる。

「いやー、悪くないぞルンデルハウス。まあパーティー会場つてのはちつと無理かもしれないがどっか適当に店でも貸し切つてしまえばいいだろ」

「必要なら人手も〈三日月同盟〉から出しますわ」

「そやそや、シロ坊の誕生日やもん。ウチらもお手伝いさせてえな」

パチンと指を鳴らして直継はルンデルハウスの意見を支持する。直継の脇に控えるマリエールとヘンリエツタもにこやかに笑いかける。

「貸切！貸切ですか！ほうほう、それなら歌の歌える場所にしましょう！銀河系アイドルのオンリーマイステージ！ボクのすばらしい歌声という一生の思い出に残るプレゼントにシロエさんもメロメロ間違いなし！」

「うおっ！お前どこから湧いてきた」

「あ！いいな！ステージ」

「プレゼント…」「メロメロ…」

耳ざとく貸切の言葉に反応して直継の背後からによつきりと生えてきたのは自称銀河系アイドルピンク色の頭をしたてとら。てとらの言葉に賛同の声をあげるように五十鈴も立ち上がる。

同じくてとらの言葉になにかしら感じ取ったのか先程まで熱心にふたりで話し合っていたアカツキとミノリがブツブツとなにかを嘆いている。

「あー、おおよそそんな感じでいいんじゃないかね？どっか店貸切。ステージ付きならなお良し。へ

ブルームホームへ辺りかなあ、あそこのオーナー人がいいし。安くで貸してくれんだろ」

「じゃあ、奏は店の用意な」

「極めて了解」

余計なことを口走ったために店の用意なんて一番面倒なことをさりと押し付けられた奏だったが今回は文句を言うようなことはない。せつかくのシロエの誕生日というのもあるが、こういうサプライズパーティーのような下準備はきらいじゃないのだ。

「んじや、各自プレゼントはそれぞれ用意しとくってことで。くれぐれもシロエには内密に迅速かつ徹底した準備祭りを。皆の者健闘を祈る」

「お前が一番にバレそうだけだな」

仰々しくまるでどこかの黒幕のように会議を締めた直継のキメ顔は、奏には我慢ならなかった。



「これは、ひどいな…」

「どうしてこうなることがわからなかったんだ、奏」

奏の独白にシロエが応答する。ふたりの声には生気がかけている。

「ボエエー」

ふたりの視線の先はへブルームホームのステージ。もちろんステージに立つのはこの人、銀河系アイドルてとらその人だ。

途中までは大成功だったのだ。

シロエの仕事も皆で分散して片付けシロエが一日休めるようにす

るのが誕生日プレゼントかのように見せかけその上で夕方からシロエを連れ出して（ブルームホーム）のパーティー会場に連れて行った。知り合いに声もかけてシロエの入場に合わせて盛大にクラッカーを鳴らしたときのシロエの驚きようはみんなして声をあげて笑った。

各々準備したプレゼントを片手にシロエにおめでとうという言葉をかけてプレゼントを渡していった。

トウヤとルンデルハウスからは共同で『超強そうなヒーローメガネ』あまり詳しくはないが、丸サングラスというやつでどちらかというとマフィアのドンあたりがかけていそうな代物だったのではないかと記憶している。隣で見えていたリーゼちゃんとミカカゲちゃんも微妙な顔をしていたのを覚えている。

続いてはプレゼントを渡したのは直継だ。机うつぶせ専用枕なる珍妙なものをいい笑顔で贈りやがった。そんなものを渡すくらいならベッドで寝れるようお前が仕事の手伝いをしてやれという話だ。一緒にプレゼントを渡しに来たマリエちゃんからも怒られていた。当たり前だ。

そして直継を叱り終えたマリエちゃんのプレゼントはクッキー。しかもメガネクマ？となかなか食べるのが惜しくなる完成度の一品だった。作るのにやん太師匠の手伝いを借りたらしい。

にやん太師匠からはパーティー会場でシロエの大好物の特製「スペシャル茄子カレー」が振舞われた。うまかった。セララもそれに連なって「柿と梨のフルーツサラダ」。セララは着々と料理の腕を上げていていいお嫁さんになるだろう。

ヘンリエッタさんからは目薬と目元を温めるアイマスク。直継とは違い実に実用的だヘンリエッタさんらしいともいえるが、さすがに目元を温めながらお説教は誕生日の日くらい勘弁してあげればいいのかと思った。

ヘンリエッタさんのお小言が一区切りついたところで肩を落としたルンデルハウスを引き連れて五十鈴ちゃんが登場。ルンデルハウスはこつてりと絞られたのだろう、同情するがさすがにあればないだろうと俺も思うので自業自得だった。五十鈴ちゃんのプレゼントは

ギルドマスター専用櫛。ルンデルハウスが自分の使う櫛と随分違うと首を傾げていたが当たり前だ。お前の櫛はもともと馬用だ。

ここで一区切りがつくことになる。さてさてこのままなごやかに進んでいけばよかつたのだが、やらかしやがったあの自称アイドル。てとらが誕生日プレゼントにシロエに贈ったのはバースデー歌謡ショー12曲リサイタル。オープニングは「恋のささくれラバー」。しかし^パ吟遊詩人^ドでも音楽系のサブ職業についてるわけでもないてとらが歌う曲がもちろん上手いわけもなく、むしろ普通であるわけなく。

「ぼえー」

今に至る。

頭が痛い。こめかみの辺りからズキズキとする。ひどい音痴だ、これでだれか^パ吟遊詩人^ドとセッションでもしていれば幾分まじだったのだろうが失敗した。なにが「恋のささくれラバー」だ、本当にささくれさせてどうする。

「今、何曲目だっけ？」

「に、二曲目の終わり」

「ダメだ、これ以上は誕生日が命日に変わりかねない。

てつてとらさん！せつかくだけどさすがに十二曲は長いから一旦切り上げよう。せつかくたくさんの人に集まってもらったんだしひとりひとりともっと話したいんだ！」

二曲目がちょうどおわりてとらがさあ次の曲とマイクを振り上げた時にさせてたまるかとシロエが待ったをかけた。

「えー、まだ二曲目ですよ！これからのにー！」

「今度！今度じっくり聞かせてもらおうから！ね？ね？」

「やーん！シロエさんったら大胆！銀河系アイドルのてとらちゃんを独占したいからってそんな必死にならなかつたっていいのに！でもごめんねボクは誰かのものにはなれないの、だって超絶銀河系アイドルですから！ボクがだれかのものになつちやつたらボクのファンが暴動起こしちゃう！シロエさんが磔にされちゃう！」

でもでもお、わつかりました!!そこまでいうならてとらちゃん無理

を押し通しちやいますっ！また今度ふたりっきりの特別ライブをやっちゃいませよー!!」

「いいからさっさとステージから降りろエセアイドル」

「むー！奏さんそんなこと言っちゃうんだー！ボク怒ったぞー、くらえ」

てとらがステージから飛び降りて組みかかってくるが、素人さんの動きに翻弄されるわけもなく適当にいなしてマリエちゃんと仲良く談笑している直継に擦り付ける。俺なんかよりもおいしい餌を与えられたてとらはもちろん直継の方に優先を変えて組みかかっていた。

「命日が伸びたなシロエ」

「背に腹は変えられないよ、今を楽しまなくちゃ」

「…自棄になるなよ」

「いままでこんな無理難題いくらでも超えてきた」

「そんなあのエセアイドルといまままでの苦労を同列に扱われてもな…」

実に締まりがない。しまったと言うべきなのかもしれないが。

「あーシロエさん」

「ん、ああどうもロデリックさん、それにミチタカさんにカラシンさんもお揃いで」

声をかけてきたのは生産系ギルドの三大ギルドのギルマストリオ。

「あれの後にこんなものをお渡しするものなんだかあれなんですけど、どうぞこれ」

「なんですか？これ」

「三日分の眠気がポンとなくなるお薬です。いけますよ三日は」

「勘弁してくださいっ！」

にやにやと三人で指差しポーズを決めてサムズアップをした後に祝いの言葉をかけて離れていく三人。

勘弁してあげてやれ、てとらのリサイタルにしろ、徹夜の仕事のどちらにしてもだ。

そんなこんなで身近な人間からたくさんプレゼントを受け取るだけでは飽き足らずススキノから大量の書類と花束や差出人不明の

「いもむし安全クッションぐるみ」などなどプレゼントを受け取ったシロエはプレゼントを見ては頬をほころばせていた。

さてさて、これで残るプレゼントを渡していない人物があと二人。ミノリンとアカツキちゃんだ。先ほどからちらちらとこちらの様子を伺うような視線を向けている二人にそろそろプレゼントを渡してはどうかと手に持つワインの入ったグラスを置いて手招きする。それを見てやっと決心がついたのかアカツキちゃんがミノリに一度頷いてみせて率先してこちらに出向いてきた。

「あ、あ、しゅっしゅ」

「シロエさん！」

あー、せっかく頑張ったのにミノリンに先を越されたアカツキちゃん。どこかの着ぐるみの名前を言っているうちにアカツキちゃんに踏ん切りを見せられちゃって慌てたミノリンに後から追い抜かれる形になっちゃったよ。

「シロエさん！お誕生日おめでとうございませしゅ！」

しゅ？

盛大に囁んでしまったミノリンの顔がそれはもう真っ赤に染まっ
ていく。

「大丈夫大丈夫。落ち着いて、続けて」

ミノリンの肩をポンと叩いて笑いかけてやれば、彼女はアカツキちゃんに先を越されて乱されたペースも落ち着きいつもの自分のペースを取り戻してスラスラと祝いの言葉を述べていく。

うむ、それでこそ俺の自慢の教え子なり。

「第八商店街で見つけてきた封蝋セットとインクです！」

「うわあ！すごいなミノリこのインク結構な高級品じゃないか。こんな無理なんかしなくてよかったのに」

「大丈夫です！シロエさんはわたしの先生ですから、こんなのでんぜんへんへいちゃらです」

「そっか、ありがとうミノリ。大事に使わせてもらおうね」

まだまだ可愛らしい言動を残す彼女だが、白董のような澄んだ笑顔で微笑むミノリに思わず目を奪われてしまう。ほんとに最近のミノ

りの成長っぷりは目覚ましい。まさか中学生の娘に一瞬でも見蕩れてしまうとは思わなかった。

「えへへ」

さつきまでの董のような小さな可憐な笑みから打って変わって今度は年相応な笑顔が咲きこぼれる。うんよきかなよきかな。でも、

「ミノリ、そろそろ俺の足からどいてくれ、ヒールで踏まれ続けるのはそろそろ辛いぜ」

「え!?!あつすみません奏さん! ぜんぜん気づかなくて! 足大丈夫ですか」

「ぜんぜん。ミノリは軽いからな」

いままで緊張していて気づきもしなかったのだろう、ミノリンがぱつと俺の足から飛び退く。いつの間にかヒールまで履けるようになったちやつて、勧めたのは誰だろうか? 五十鈴ちゃん辺りかと思うがあの娘はあんまりヒールとか動きにくい履物は履かなさそうだ。ヘンリエツタさんか千葉だろうか。なんにせよよくやったと賛辞を受け取ってもらいたい。

「主君!」

アカツキちゃんが声をあげる。気のせいだろうか? 目が燃えている、それはもうメラメラと。

「主君、誕生日おめでとうだ!」

「うん、ありがとう」

シロエが嬉しそうに微笑んで礼を言う。それに釣られたようにアカツキちゃんの顔にも笑顔が生まれる。

「それでだな、主君。わたしからのプレゼントはこれだ」

アカツキちゃんが手渡したのは小さな箱と大きな袋。どちらも丁寧に若草色のリボンで包装されていてリボンを解いてしまうのがもったいないくらいだ。受け取ったシロエはそれでもアカツキちゃんに了承をとり包装を丁寧に解いていく。

「わあ」

シロエの口から思わず感嘆の声が漏れた。

小さな箱に入っていたのは和風の根付、大きな袋の中に入っていた

のは普段シロエが羽織っていい白の外套コートとは真逆の黒を基調としたインバネスコートだった。変わった形をしたコートではあるがセンスがあると思う。

「わたしの誕生日に主君がプレゼントを選んでくれたらどう？だからわたしも自分で一生懸命選んだんだが、どうか？気に入らないか？」

少し不安そうに自身なさげにシロエに尋ねるアカツキちゃん。その首を傾げる仕草に髪を止めているかんざしの飾りが僅かに揺れた。

「そんなまさか！すごく嬉しいよ！僕はあんまり服とか気にしないからさ、こんなかつこいいのなかなか持ってないんだ」

「そ、そうか！それはよかった。すごく悩んだのだ。本当に色々見て回って、それなら主君に似合うと思ったのだ！」

嬉しそうに、心底嬉しそうに声を弾ませるアカツキちゃん。

おつといけない。そういえば肝心の俺自身がプレゼントを渡していなかったじゃないか。いけない、このままではあの苦労が無駄になってしまう。

「シロエ、これやるよ。ミノリやアカツキちゃんのものなんかと比べたらちよつと寂しいかもしれないが、誕生日プレゼント」

「これは？」

手渡したのは一枚のチケット。もちろん肩たたき券とかお手伝い券とか一回だけお願い聞いてあげる券とかそういうチープなチケットなんかではなく、商品券とか冷めて夢のないものでもない。

「RADIOマーケット」のこの系列のメガネ屋があるんだ。そこ
のメガネどれでも一点だけだにしちやいます券。茜屋のじいちゃんに将棋十三局対局して四週目で勝てた。頼むからいいもん貰ってこいよ

個人的にはセンスのないシロエ君はセンスのいいアカツキちゃんと先生思いのミノリちゃんに付き添ってもらって明日にでも決めてくるといいとアドバイスする

「ええ、センスないって思ってるならこんなチケット渡さないでよ」

「無茶いうな、俺の眼は特注品だ。視力なんて落ちたことなんて一度もねえ。ダテでもメガネなんてかけたことねえよ」

「はあ…。じゃあ、アカツキ、ミノリ、悪いんだけど明日にでもちよつと付き合ってくれないかな？あ、でもちよつと急だよね」「いやいやそんなことないぞ主君っ！」「そうだよシロエさん！むしろ明日じゃなくちや駄目です！」

「そっそう？じゃあお願いしようかな」

食い気味にシロエに詰め寄る二人にウィンクを送る。明日はたっぷり楽しんできてくれ。俺は基本的にはシロエの味方よりもアカツキちゃんやミノリの味方をしたいんでね。

それでも、

「Happy birthday dear my friend」

遠目に三人の様子を見守りながら小さく照れ隠しも混ぜながらそう締めくくった。まだまだパーティーは賑やかに続く。

〈完璧凡人〉《おーるらうんだー》の奏

名前：奏 レベル：95 種族：法儀族

職業：〈神祇官〉 サブ職業：〈陰陽師〉

口 伝：〈壊れることなき理想の世界〉、〈投影 剣 宣〉、
〈その手に失せた夢の欠片〉

HP： 11213

MP： 12053

戦場での役割：オールマイティー

装備可能武器：魔法具、長杖、刀

装備可能防具：布鎧

秋の日の永夜を過ごし、地獄を終え、龍神の助けを借り、一人の少女の告白を聞き、またもう一度立ち上がることを彼は決めた。姉への答えを返したことで一つのけじめとしもう一度走り出す。

百恵と比べられることへの抵抗が消えたことで競り合うことへの抵抗も同時に消え刀で攻撃を受けることも自身の身を傷つけることへの覚悟を決めることも出来るようになった。アサハナから授かった結界術に対する知識と祖父の教えからくる剣術を主軸にした戦い方はいままでのような全てを同時にこなそうとする戦い方とはまったく別のものへと変質した。ただし技術や知識を捨てたわけではないのでその広さからくる戦闘技術は日々絡み合い停滞を取り戻すかのように凄まじい速度で進歩し続けている。

〈装備品〉

〈脇差し〉 風月玄沢・成就

ポツキリと根本から折れてしまった〈夜刀 風月玄沢〉をアメノマの〈刀匠〉多々良に打ち直してもらった作品

本来の長さに直すことはできず攻撃力、性能も若干落ちざるおえなかったがその代わりに取り回しのしやすさが向上した。

フレーバーテキストの効果によって奏の思いは切れ味に変わり切

れ味は本来のそれよりも遙かに鋭い。また百恵との戦いで見せたような刀身をあくまで刀の範疇ではあるが半透明化、伸縮に形状変化もできる。

フレーバーテキスト

夜の空を照らし続ける月の光と会うことのできない者へと募らせる想いが混じりあい一本の黒刀となった。

折れようとも曲がろうとも想いに比例し刀の純度は増し何度でも主人の力となるために舞い戻る。

〈十得虎耳草〉
じゅとくはるゆきのした

龍神アサハナの物質創造能力で創られた幻想級の刀。

無銘にして名刀、龍神アサハナの髪と霊気によりできている神刀。性能は〈夜刀 風月玄沢〉にも勝るとも劣らずの奏専用ユニークの装備。龍の一部を使ってできている刀のためひと振りで魔力を生み場の魔力を整える。

〈真光とどき満ちた全式の儀式杖〉

龍神アサハナので光を浴び続け本来の力を取り戻した儀式杖。媒体にすればいかなる儀式の術式さえも行使を可能にする幻想級の長杖。

全体性能は大幅に上昇し耐魔、耐呪に対して絶大の効果をみせ、そのうえで〈神祇官カンナギ〉の特技、魔法に様々な付与効果を付与する能力が新たに増えた。

フレーバーテキスト

太陽の光を吸収し続けることで力をため続け百の術式を成し遂げるため百年樹の枝を素材として作られた儀式杖。

蓄積された魔力は無尽蔵に増幅し周囲の生命にまで影響を与えてゆく。

〈昇り龍の羽織り〉

朝日を背景にしてたちのぼる昇り龍を思わす真っ赤な羽織り。防

具には珍しく攻撃補助の効果が多く備わっており、火炎耐性から氷耐性、ブレス耐性まで満遍なく優秀な耐性能力を有している。

〈黎明の胴衣〉

あの頃から変わらずに身につける蒼の胴衣。

いくつもの戦場を駆け抜けたその胴衣は目に見えなくとも残り香のように戦場の魔力を残している。

その残り香を懐かしむようにして奏は今日も胴衣に身を包む。

フレーバーテキスト

復讐に囚われた姫の哀しみが染み込んだ衣は同種の哀しみや苦しみを強く引き寄せ吸収する。

苦しみ続けた姫は長き夜の悪夢から目覚めるために痛みを受けとめ涙を流して歩み始める

長い夜はいつか明けるのだと信じることで

〈天駆ける虎の高下駄〉

〈天虎の高下駄〉が天虎の祝福を受けてさらに進化した〈幻想級〉のブーツ型の高下駄。ゲーム時代のような実際の動きやすさを度外視したもものから動きやすさまで考慮されたつくりに変化した。これによりもともと得意だった体術にもキレが増した。移動速度、回避速度への補正だけでなく行動阻害への耐性まで大きく強化された。

フレーバーテキスト

自由を誰よりも愛す虎は空を駆けることを願い神をも喰らう力を得た。

虎は夢を追うものを愛し見続け信じるものを追う者のみに力を貸し助言をし続ける、そんな虎の願いと意思が込められたが込められた空を駆けるための翼

〈龍虎の腕輪〉

虎と龍の2体の強者から加護を一身に受けた腕輪。

本来あったMP継続回復効果に加えて継続MP消費時に対する継

続消費MPの減少効果が加わり、〈陰陽札〉による召喚獣を以前よりも長時間召喚できるようになった。

〈口伝〉

〈壊れることなき理想の世界〉

〈陰陽師〉の特技〈聖域結界〉の応用と封印術の知識を組み合わせたことよって編み出した口伝。ゾーン設定を利用、応用することで境界内のみの限られた空間のみで作用するルールを設けることができる。縛りの大きさや数が増えれば増えるほど持続時間は短くなるが数を絞り単純な縛りであればあるほど効果と持続時間は大きくなる。設けた縛りは敵味方自身関係なく結界内にいる全員に平等に作用するので一対一もしくは一対多の状況で使用するのが好ましい。〈黄金領域〉や〈偽全死合〉も枠組み上は〈壊れることなき理想の世界〉の中の一つとして数えられる。

〈投影剣宣〉

〈夜刀 風月玄沢〉のフレイバーテキストの応用による口伝。想いを刀に注ぎ想いを刃へと変える口伝。発動すると刀の刀身をほぼ不可視の状態にするうえ、刀身の透過もすることができる。透過は相手の武器や盾などの物理的なものに対しては透過することはできるが神祇官カンナギが使う〈禊の障壁〉を例とする〈ダメージ遮断呪文〉などの魔法的障害を透過することはできない。

また、奏は〈投影剣宣〉の発動時に独自の詠唱を行うが龍神アサハナが行うような自身の力の増幅するなどの効果はなく、魔法的な意義もない。あくまで奏自身が自らの内面のスイッチを切り替えるためだけの意味合い、自己暗示の類いでしかない。

〈その手に失せた夢の欠片〉

ザントリーフでルンデルハウスを救うために使った〈魂呼びの祈り〉を媒体にし作ったイメージである霊体の腕を伸展させ発現させた口伝。アストラル系などの実体を持たないいわゆる霊体のモンスターなどに高い効果を発揮し高い拘束能力を持つ。実体に対しても

触れることはできるが肉体を持っている分霊体に比べるとその力は格段にさがり奏（回復職）と同程度の腕力しか発揮できないが同レベル帯の相手には僅かな時間であれば拘束もできる。

第一笑 始まりの高笑い

第一話 非日常との衝突

ごくごく普通の俺たちの日常の中に突然として起きた非日常的な出来事。

いつも通りに朝起き、日課の昔からやってる古武術の型稽古をし、いつも通りに妹を起こしに行き、家族全員で朝御飯を食べ、出掛ける妹たちを見送り、実家の神社の境内を掃き掃除をして、自室に戻って長年やってるオンラインゲームをやるうとするが、そういえば今日はアップデートで午前中はログイン出来ないだと気づき、しょうがないからネットで海外の友達にいきなり連絡をとって怒られ、ふて腐れて馴染みの古本屋さんに遊びに行き、昼御飯を父と母と祖母と食べ、アップデートに備えて色々と準備を妹たちの分までわざわざ用意してやったと自己満足に浸り、ゲームにいざログインしてみたら非日常にぶつかった。

ごくごく普通の日常から何を間違えたのか非日常にぶつかった。

20年以上も続く大人気老舗オンラインゲームへエルダーテイラーと魔法の存在する幻想の世界」

十二番目の拡張パックへノウアスフィアの開墾が導入されたその日、俺たち日本人ユーザー三万人が幸か不幸かゲームの世界に取り込まれた……

非日常が日常になった

「んん？どいつ、ハハハ……？」

目の前に広がるのは、どこかで見たことのある今にも崩れ落ちそうな廃ビル郡とそれを覆う膨大な草木と青い空と白い雲、ファンタジーチックな全身鎧や法衣を着込んだコスプレの男女たち。

それと、昔っからの長い付き合いのフワフワと周囲を漂う煙のような液体のようななんか意味不明な色とりどりのナニカ

由緒正しいとはいわないでもそれなりに歴史ある神宮の家系である家はこういった靈感のようなものが強い人間が多い。

俺は幽霊は見えないが、なんかこういうフワフワが見える。未だに俺はこのフワフワがなんなのかは詳しくはわからない。ただ、パワースポットみたいなどころではこのフワフワはたくさん見えるのでなんか霊的な力みたいなの？と考えている。

「うわあ、ここなんかパワースポット並みにナニかがフワフワしてるよ。日本にこんなところあったっけ？って済ませたいところだけど絶対にこれなんかちがうわ」

普通だったら夢で済ませたいところだけど、生憎物心ついた頃から夢の中ではこのフワフワは見えない。これリアルっすわ。だからって、いきなり荒廃した未来の地球に飛ばされたーなんて思えないけど。

というかよくよくみたら、俺もなんかコスプレしてるし。

「つて!!俺っ、刀差してるじゃん!やべえよ!!モノホンだっすげえーあれっ…これって…：：：〈夜刀・風月玄沢〉…か?」

今、自分の目の前に抜かれてるこの黒刀、〈エルダーテイル〉の俺の装備品じゃ…。

よくよく見てみると自分の身に付けている藍色と蒼色の胴着も高下駄も紅い宝玉が嵌まった腕輪も〈エルダーテイル〉の俺のアバター〈奏〉の装備品に酷似している。

着物をはだけさせ肩を覗いて見れば〈奏〉の種族の法儀族の特徴の紋章が刻まれてる。

「はっははっ…：：：異世界トリップてか…?ここアキバの街?なんでやねん…」

〈エルダー・テイル〉は〈ハーファリア・プロジェクト〉といって世界を半分の縮小して再現しようという計画を進めていた。

日本サーバーも例外ではなくファンタジーの世界観を崩さないように荒廃した町並みを遥か昔に栄え滅びた神代としてゲームの設定では語られている。

口からほろりと出た嘆きも空気に溶け込むだけで、その弱々しいツツコミに反応を返す者はいない。

虚しく風が吹き、それに乗って人のヒステリックな叫び声が聞こえてくる。

多分同じように現状に気づいた奴が少数だが現れ始めたんだろう。投げられた石は水面に波紋をうみ、広がっていく。悲鳴のような声は徐々に共鳴し大きくなる。恐怖や不安は連鎖する。

「よしっ!!とりあえず元気出そうっ!!落ち込んでてもなんにもならん!!

ここがへエルダーテイルだっというんだったらそれはそれでいいじゃねえか。この体はへ奏のものみたいだし。だったら強くてニューゲームだ」

無理矢理根拠のない自信を奮い立たせ、頬を叩いて気合を入れる。

「ここがへエルダーテイルならステータスも見れるはずだけど…つとああ、こうやるのか」

ステータスよ出てこいと念じたらこれまた見慣れたステータス画面が頭の中に浮かぶ。

目についたのはへ念話の表示。

すぐさま選択し、いくつかの名前を探す。一つに念話を入れる。出ないっ。次にまた念話をかける。でたっ!

『兄さんっ!?!』

「千菜っ、今どこにいる?」

『へ三日月同盟のギルドホーム。へ三日月同盟のみんなはいったんここに集まろうって。』

兄さんもこっちに来なよ。マリエールさんもヘンリエツタさんも他のみんなも多分兄さんがいてくれたら心強いだろうし…』

千菜の不安そうな声が目をつく。

「わかったよ。確かギルド会館の四階だったよな。今からそっちに向かうわ」

『うん…』

千菜との念話が切れる。

念話の一覧から知り合いの名前をさらりと見直し、何人かには念話をかける。

落ち着いた反応を返すやつもいたが少なからず全員がパニックに陥っていた。

わかっていることを情報共有しあい、共通の知り合いの無事を確認し合う。

それにしても…これは正直キツいな…。

ギルド会館へ向かう道はギルド会館がアキバの街の中心にあることもあって比較的人の多い大通りを通ることになる。

今のアキバの街にいる人間は、NPCの大地人じゃなければ全員がついさつきこの世界に呼び出されたばかり。

パニックに陥って負の感情をばらまいてる。

その負の感情に影響されたナニカは、ドロドロと見ていて吐き気をもよおすぐらいに気持ちが悪い…。

ツライ…。気分が悪くなり、頭の後ろらへんがギスギスする…

我慢できなくなった俺は路地裏に駆け込み、吐いた。

この体では胃のなかに何も入ってなかったのがよかったのか吐くとだいぶ楽になった。けれど少し吐き気が残る。

「ちよつと遠回りしても…人の少ないところを通ろう…。」

何度か休憩を挟みつつ遠回りをして、ギルド会館の〈三日月同盟〉のギルドホームについたときはなんかもう満身創痍だった…。

入り口に着いたのはいいが、ギルドホームは〈三日月同盟〉が借りている〈ゾーン〉のため俺は勝手な出入りが出来ない。

念話で来たことを伝えて中から誰か来てもらわないと。千菜に念話を繋ぎ、

「千菜…悪い、着いたから入れてくれ…」

『っ！わかった！すぐ行くから』

俺の情けない弱々しい声を聞いたからか千菜が慌てて扉を開けてきた。

女性であるにも関わらず170ある長身に腰の辺りまである長い黒髪を七部辺りで結っている。

身を包んでいる蝶の描かれた美しい緑の着物に似合う大きな紅い瞳がこちらを捉えてもともと大きな瞳がさらに大きく見開かれる。

「兄さんっ!!」

「マリエールさんっ!!兄さんがっ!」

千菜のただ事ではない大声が聞こえたのだろう。ドタドタと中から何人も出てくる。

みんなアワアワと慌てだし「どうしようっ」「寝れる場所を用意しろっ」「水っ水っ」「救急車呼べっ!!」「バカっ救急車がこの世界にあるかっ」と大騒ぎになった。

「うわっ!?カナ坊っどうしたんっ!?あわわっ、どないしよどないしよっ。救急車っ。110やっ。あわっ念話じゃ呼べへんやんっ」

「全員落ち着きなさいっ。マリエ、救急車は119です。それ以前に救急車なんてこの世界にはありませんっ。飛燕、今すぐ台所に行つて水枕を作ってきてください。小竜は寝れる場所を準備して。マリエの部屋で良いでしょう。明日架とマリエはヒールをかけてあげてくださいまし。千菜、ゆつくりと奏様をマリエの部屋に」

「「イエスツマムツ!!」」

ギルメンどころか巨乳のエルフギルマスまで大騒ぎを始めたところでピシヤリと落ち着いた声が響きこの場にいる全員を落ち着かせ指示を飛ばす。

「はははっ…相変わらず賑やか」

「そんな死人もびつくりな青白い顔してるのに笑える余裕があるのは相変わらずタフですな奏様」

若干あきれた風に言葉を返す秘書風の女性。

さっきの巨乳の関西弁お姉ちゃんことマリエールとそのおっちゃんこちよいギルマスを支える冷静沈着なギルドの会計担当ヘンリエツタ。

この二人がいるお陰でこのアットホームなギルドは成り立ってるんだらうな。

「とりあえず今はゆつくりと休んでくださいまし。話はそれからですわ」

千菜に支えられて、しつかりと休めと寝かされて俺が起きたのは次の日に日付は変わって日が昇る頃だった。

◆ 「ナニコレ…マズ…」

目の前には食欲をそえられるような色とりどりのサラダ、魚の塩焼き、味噌汁、白いご飯がある。

なぜか匂いは感じ取れない。なぜか口の中の感触が変わらない。なぜか食べ物の味がしない。

「なんじゃこりやつー!? ナニコレ新手のイジメか!? いきなり来ていきなりぶっ倒れて身を迷惑かけたのは悪いとは思うけど、俺、こういうのはいけないと思うなっ! うん。人として」

「カナ坊っ落ち着いてえな。別にカナ坊のことが迷惑だなんてウチら思うてへんて。ただ、こつちの世界ではなんか料理に味がないみたいなんよ…」

バツの悪そうにうつ向きがちに告げるマリエちゃん。

はいっ? 料理に味がない?

「ヘンリエツタさん、厨房、貸してください」

「ええ、それは構いませんけど…後悔しますよ? 多分」

厨房に入り、さらっと準備を済ませる。簡単なものしかつくれないけど、実験だからいいだろう。

奏さんの三分クッキングだ。

—30秒後—

「質問です。コレ、なんなんですか?」

「〈暗黒物質〉かなにかじゃないでしょうか?」

「俺にっ〈暗黒物質〉なんて作れる才能はねーよっつ!!」

「ゲル状のモザイク物質を残飯かごに向けて全力でスパークキング!! 〈暗黒物質〉は消滅した。」

「おわかりいただけましたか? この世界ではコマンドで作った料理に味がなくて、直に作っても意味不明なゲル状の物体が出来上がるだけです」

「素材アイテムには味があるんやけどね」

腹黒メガネとか、狂戦士とか、紅き名探偵とか、二つ名だけでも近づきたくなさがビンビンだ。

この人もぼつと見普通だけど、可愛い子には目がないし…正直あの詰め寄るときの形相は小さい子には恐怖以外のなにものでもないよな。

「あら、私にはなにもしなくてもよろしいんですか？」

「前に俺のもう一つのアバターもみくちやにしたでしょ…俺はもうあんな恐怖は味わいたくないです」

「私が興味があるのは可愛いものだけですわ。今の奏様はちいつちやくも可愛くもないですから、安心していいですわよ？」

「そりやどうも」

— 閑話休題 —

「なあ？カナ坊、ウチのギルドに入らへん？」

「んな？」

味のない文字通り味気ない食事をモツグモツグと食べているとマリエちゃんが唐突に、いや、この現状だったら別に唐突でもなんでもないな。

こんな世界にいきなりなにもわからずほっぽり出されたんだったら群れを作って大きく固まろうとするのが生物としての当たり前前の生存本能だ。

テーブルの向かい側に、クッションをギユツと抱き締め、マリエちゃんは言葉を続ける。

「ウチらのギルドはええギルドや。」

カナ坊やつたら、へD・D・D・Dとか大手のギルドさんにもコネとかあったりするやろから、別にそっちの方に行ってもらってもかまわへんのやけど。むしろそっちの方がよかったですと思っくんやけど。

今、このわけわからへん状況でソロでやってくのは正直キツいんちやうかな？

だから……」

「ごめん。マリエちゃん。」

とりあえず俺はアキバの街を離れるわ」

「えっ!? そんなんどこ行くつもりなん? ミナミか? シブヤか? ミナミの方は遠いし、シブヤの方はアキバよりうーんと不便やで?」

「アサクサ」

「アサクサはへ大地人〳の町ですわよね? こんなときに行く必要はないのではないんですか?」

俺の答えにマリエちゃんは驚いた表情をつくり、ヘンリエツタさんはアサクサなんかに行く必要はないのではと問いかける。

「今のアキバはさ、こっちの世界に来たばかりでみんな混乱してる。周りのやつらに当たり散らすやつもいるし、その隙に犯罪まがいのことをやろうとするやつもいるだろうな。多分:P Kもやるやつも出てくるだろうな…」

「そんなつ P K やなんてつ」

「いや、出るね。十中八九、100パーセント、絶対に。」

人間てのは弱いから。死んでもゲームと同じように大神殿で復活するかどうかはわかんないけど…生き返ることが出来るなら、絶対に P K は現れる。

俺はそういうのは見てられない。そういう人を殺すことが出来るやつは生理的に受け付けない。

多分この世界にいる誰よりも」

「俺のギリギリまで譲歩としても俺の周りで人を殺すことをしないとだ。」

俺のいないところでだったらまだ許せる。俺の知らないところだったらまだ大丈夫。

でも俺がそれを知ってしまったたら絶対に正常ではいられるかもしれないけど平常ではいられなくなると思う」

「だから、

アサクサに行つてほとぼり冷めるまで、色々しながら過ごしてくよ。」

アキバが落ち着いたら戻ってくるわ」

「そうか…うん。わかった。」

カナ坊はなんや色々考えとつたんやね。

偉いわ。よし、お姉さんが抱きしめたるわ。むぎゅーやで」

納得してくれたのか、うん。と一回頷いたマリエちゃんはパアアと満開の向日葵のように一度笑うとこっちに詰めより思いつきり抱きしめてくる。

この人のこういうところは俺は大好きだ。別に抱きついてくるところとかじゃないぞ？もちろんそういうところも好きだけでも。

マリエちゃんのきちんと俺の話聞いて受け入れてくれて満面の笑みを向けてくれる。そういうところが俺は大好きだ。

多分〈三日月同盟〉の全員がそうだろう。

「こらー・マリエ、はしたないから止めなさい！奏様も困ってらっしゃるでしょう」

「むう」

ヘンリエッタさんに首根っこを捕まれ猫のように引剥がされるマリエちゃん。

さすが武器攻撃職の〈吟遊詩人^{バード}〉人一人だったら片手で簡単に引きずれるらしい。

「千菜は連れてくん？」

「あー、どうしようかなあ。別にアイツは俺みたいに見えるわけじゃないからなく」

まあ、本人がついてくるって言ったら連れてくわ」

「出発はいつ頃に？」

「明日の朝イチで人がいないうちにさっさと街を出ようかと」

「それなら少しになりますますがなにか準備をさせましょう」

「遠慮せず貰いますよ？」

「それが奏様の美德ですね」

俺の答えに愉快そうにコロコロと笑い返すヘンリエッタさん。

明日は早いし準備も適当に済ませなければ。千菜にも俺とアサクサに行くかどうか聞かなければ。

こうして俺たちの非日常の物語が幕をあげた。

第二話 何一つ変わらないもの

忌まわしく苦々しいあの事件からはや2週間から3週間？が経った。

人間というのは不思議なものでどんなに異常な事態が起きても時間がある程度経つと何事もなかったように腹は減るし習慣は抜けずに朝早くに目が覚める。

日付は十日を過ぎた辺りから数えるのを忘れていた。いつのまにかなんか2週間以上過ぎてね？と思うようになってしまった。

カレンダーを最初に作った人はつくづく偉大だ。

当たり前の物だけどあれを作るのはなかなか骨が折れるはずだ。まず便利だとは思っても個人では作ろうとは思わないよな。労力に結果がシヨボすぎる。

話はそれだが、俺たちがこの世界に飛ばされた事件は〈大災害〉と呼ばれるようになったらしい。まんまだわ。

ある程度の落ち着きもアキバでも見えてきたらしい。活気はないらしいが。

それから〈大災害〉2週間以上も経つと色々な情報が出回るようになった。

一つ目は、死んでも大神殿で復活が出来ること。

これについては良かったと手放しで喜んでいいだろう。〈大災害〉に巻き込まれた人間はよくも悪くも全員が日本人だ。海外の方で同じような現象が起きてるのはかは知らないが、俺たち日本人は根本的に戦闘には慣れていない。よくてちよつと喧嘩慣れしてるような奴がいるぐらいだろう。

はつきりいつてしまえば、毎月それなりの金を支払わないといけなかったへエルダー〈テイル〉をやるのは大体が高校生辺りからだろう。要するにゲーマー連中がほとんどだということだ。小中学生はほとんどいないだろう。

平和ボケした日本のしかもゲーマーとなれば残念ながら…ねえ？これ以上は反感を買うだろうから控えよう。

二つ目は、俺たちの体は〈冒険者〉仕様で痛みが現実世界よりも大きく軽減されてること。

これも手放しで喜んでいいだろう。HPがいつきに半分以上も減るような攻撃をするような奴と戦っていないからなんとも言えないが、多分現象世界で車に弾かれたときの痛みは骨にヒビが入るぐらいの痛みぐらいには軽減されてるだろう。

しかも傷の治りも早い。少しくらいの切り傷だったら半日もせずに跡も残らず治ってしまう。

三つ目は、さつきちよろつと出たが戦闘はなんとか可能だということ。

ただ、これは問題点がいくつかある。一つ目はフィールドマップが見れなくなったこと。これのせいでモンスターや：PKの接近に気づきにくくなってしまったこと。

二つ目は視野の狭小化。

ゲームのときはパソコンの画面から自分のアバターを見ながら広く周囲を見渡せたが、今の俺たちは自分たちの目に写るこの視野が限界だ。だいたい正中線を中心にして160度くらいだろう。

三つ目は、戦闘そのものに対する恐怖。

これが一番の問題だろう。現実世界では見たことのない巨大な生物や恐怖を増長させるようなモンスター、

自分を殺そうとするその殺気。

少なからず戦うことを諦める人間は現れるだろう。戦うことができてもゲームの頃のように自分と同じレベル帯と戦える人間は大きく減る気がする。

どれも慣れるしか克服方法がないところが厄介なところだ。

そして四つ目大地人が俺たちとなんら変わりない普通の人間だということ。

これは俺個人の発見だ。

NPCだと思っていた大地人にもきちんと心があつてそれぞれの考えがあつて俺らとなんら変わらない事がわかった。

アサクサに来てつくづく実感させられた。

俺の眼に見えてる大地人のフワフワも大きさや質、に差はあれども、俺ら〈冒険者〉と根本的なところはなんら違わなかった。

ともかくにもこれが俺たち〈冒険者〉の現状といったところだった。



アサクサ近くのひとつのフィールド。

大きな川が水の流れる音を奏ながら流れ、その周囲の川辺には現実世界でも滅多に見ることのできないような背の高い草葉が風に揺られ擦れあいサワサワと河川のせせらぎと混ざりあい解け合う。

そんな情緒溢れる中に耳障りな羽音と地面を蹴る無粋な二つの音が響く。

片方の羽音を放つのは異質な姿をした異形のもの。

太い丸太のような胴体に透き通る薄い大きな羽。ただし、片翼は刃物で斬りつけられたような痕を残し少しかけている。

そして一番に目を引くのはその頭。その形は空想の産物。誰もが一度は創作物の中で目にするドラゴンの頭を鱗を纏った胴体から生やしていた。

名前をヘドラゴンフライ〈大事なところを間違えてしまっている滑稽なモンスター〉である。

ただしその危険度はなかなか高い。

姿は滑稽なものでも頭はドラゴンだ。顎は強靱で噛みつかれればただではすまないし、ブレスを吐くこともある。

ゲーム時代の適正レベルは中堅を越えるための登竜門扱いだったが、今はレベル90には及ばずともそれなりの実力がなければ撃破は苦しいだろう。

相對するのは、これは見た目は普通の髪の高いのとちよつと背が高いぐらいが特徴の青年だった。ただ、格好を見てしまうとこのコスプレ野郎だかと偏見の目で現実の世界では見られてしまう格好だ。

だが、この世界では彼の身に付けているものは全て憧れの的となる。

幻想級の高下駄と黒刀。長編クエストの末に手に入る秘宝級の藍色から蒼色に徐々に変わっていく深海を催すような和装装備。幻想クラスの素材を使った秘宝級にも引けをとらない製作級の腕輪。

どれも生半可な覚悟では手にいれることのできない一級品の装備たちである。

このことからわかるが彼はゲームのときから最高難度の最前線で戦い続けるコアなプレイヤーらしく中堅プレイヤーたちがパーティーを組んで苦勞して相手取るヘドラゴンフライをソロで、しかもこの現実となった世界で余裕をもって相手取っていた。

「ギュキュイヤツ!!」

「気持ち悪いんだよ。このなんちゃってドラゴンが。ここ最近夢にまでお前らの顔が出てくるんだよっ!責任とれやっ!!」

大きな大顎を開き青年に噛みつかんと突進を仕掛けてきたヘドラゴンフライ。

それになかなか自分勝手な暴言をぶつけて噛みつきを躲しつすれ違い様に〈露払い〉を飛んでいるヘドラゴンフライの羽を斬りつけバランスを崩させる。

〈露払い〉を羽に当てられスタンしてしまったヘドラゴンフライその僅かな隙を見逃さず青年は〈犬神の凶祓い〉を発動し紅の気を纏った黒刀をその大きな頭に降り下ろした。

威力の上がっている〈犬神の凶祓い〉による一太刀を頭に受け流石のヘドラゴンフライもその命を散らすのだった。

刀に着いた血を一振りすることで飛ばし漆塗りの真っ黒な鞘にその黒刀を納めた青年は、息をふうと吐いてさっきまで張っていた集中の糸を切った。

「あー疲れた…」

もう今日は終わりにしよ。

このあとはもつと疲れることになるわけだし」

辺りになにもいないことを確認し背伸びをする。

魔法の鞆から木彫りの意匠のこなされた笛を取り出し、まだ真ん中を過ぎた辺りの日が照らす空に甲高い笛の音を響かせる。

笛を吹きならずとどこからかさっきのヘドラゴンフライとは比べ物にならない羽の羽ばたきと空気を震わす鳴き声が聞こえてきた。

鷲の上半身にライオンの下半身その姿は幻想の生物グリフォン

グリフォンの背中に付けられた鞍に高下駄とは思えない跳躍を見せ跳び乗る。主人の乗ったことを感じ取ったグリフォンは羽ばたき空へと飛翔する。

目的地はそこまで遠くない十分も飛べば今拠点にしているアサクサには着くだろう。

広い石畳の大通りを中心に左右には一棟の建物が長く構えている所謂、江戸時代の長屋みたいなものだが中身は部屋がいくつか存在し、ところによつては商品を並べ威勢のいい声で客引きをしているところもある。

俗に言う商店街と住居のハイブリットというやつだ。

アキバの街とは活気が明らかに違う町が大地人が住む町アサクサだった。

「おーうー! あんちゃん、今お帰りか? 今朝取れ立てのアサクサみかんだ。一個持つてけー!」

「あら、奏君。今日も狩りに行つてたの? 毎日凄いわね〜」

「あつ! 奏の兄ちゃんだ〜! お帰り〜! お昼食べ終わったら遊びに行くねー!」

「おーい!! 奏さーん! この前の薪割りのお礼にばあちゃんが花茶でも飲みに来いってさ」

聞いているの通りいい町だ。

歩いているとあちらこちらからグイグイ寄ってくる。それぞれにぼちぼちと答えを返して進んでいく。

「ただいま〜!」

「あらあら、奏君おかえりなさい。今日も長かったわね〜。あんまり無理しちや駄目よ? <冒険者>さんだからっていつてもまだまだ若いんだから〜」

「おばさんだつてまだまだ全然若いじゃないですか」

「あらあら、奏君はお世辞が上手ね。こんなおばさん誉めたつて何も出ないわよ？・上着脱ごうか？」

「大サービスじゃないか」

「おいコラ奏。てめえ居候の分際でウチのママに手出したら殺すぞ」

「まあ、パパったら嫉妬？嬉しいわく」

「ふふつ、今夜は寝かせねえからな？」

「他所でやってくれよ…あんたら…」

出迎え早々いちやつきまくっている体格のいい熊みたいな大男とあらあらまあまあが口癖の見た目十代にも見えるほんわかエプロン姿の女性は俺と千菜がアサクサに来て寝床に困っていたところを居候させてくれた夫婦だ。

「千菜どこにいますか？」

「あん？嬢ちゃんなら坊主どもと一緒に裏の空き地で遊んでんじやねえか？」

「そうすか。ああ、それとおやつさんはい。これ。」

魔法の鞆から金貨の入った布袋を取り出しておやつさんに手渡す。

「おいおい、こりやいくらなんでも多いぜ？別に俺たちは金が目当てでお前らを泊めてるわけじゃないんだからよ」

「いいのいいの。これぐらいしか俺たちが形にして返せるものなんてないんだから。宿代、食事代、とその他もろもろの感謝の印」

「お前らがそれでいいんだつたら貰っておくけどよう、お前ら色々な町のこともやってくれるじゃねえか。それで充分どころか倍ぐらいにして返してくれてるぜ？」

「気持ちの問題だつてば。それにぶつちやけそんなのはした金だし」

「ガハハハッ。言いやがるじゃねえか。ありがたく受け取つとくよ」

おやつさんは愉快そうに大笑いすると懐に布袋を入れて俺の背中をバシツと一発はたいた。

おばさんはあらあらまあまあと言いながらありがとねくとお礼を言うと言つて飯の準備をしにパタパタと戻つていった。素直に受け取ってくれるあたりがありがたい。

家の裏手に回りただだっ広いだけの空き地を目指して歩いていく。空き地に近づくにつれキャツキャツキャと子供の元気な声が大きくなって「あはははっあは」…訂正しよう。大きな子供も混ざっているようだ。

広場を見ると、群がる近所の子供たちとそれをいなして持ち上げたり投げ飛ばしたりとしているわが愛する妹がいた。

もちろんマジのものじゃなくて遊びの範疇のものだ。

本気で殺りにいってこんなキャツキャツキャと騒げたらどこの狂戦士だといえる。子供の遊び。プロレスごっこだ。

真ん中にはもちろん千葉がいて子供たちに囲まれて襲われているが子供らと同じような笑顔で楽しそうだ。

兄さんのこと心配だから、と二つ返事で俺とアサクサに行くと決めたけれど本当は千葉も結構無理をしてたと思う。

今のところ近くにいる身内なんてのは俺だけだ。大切な家族と離れたくなかったのだろうけど無理させてしまったと思うと兄として情けない。

こんな風にあつちと変わらない笑顔を見せてくれて嬉しい。

「じゃあっ…俺も混ぜろー!!」

追記しよう。俺もたいがいガキだ

第三話 氷山の一角

「かー。疲れた…子供の体力つてのはなんであんなに無尽蔵なのかね？」

「体力的には私たちの方が絶対に多いはずなのにね？」

散々暴れまわった後（一時間くらいでこっちの体力が切れた）昼ご飯を食べるためにみんな家に一旦帰っていった。大人二人はふらふらと子供らは元気爆発で。午後からまた遊ぼうと約束をして。

「奏兄も千菜姉も情けねえなく俺たち相手にこんなになられちゃまって。この調子だったら俺っちが二人を追い抜くのも近いぜ」

「ありや？ぬかすじゃん。私たちに追い付こうなんて百年早いわよ」

「ふふーん♪強がりしてもムダたぜ？父ちゃんが俺が十歳になったら稽古つけてくれるんだ。そしたら二人なんてすぐに追い抜いちゃうぜ」

「ジャリボーイ、鍛えてもらおう前から自慢してどーすんだ。強くなつてからそういうのは言うんだな」

「アデッ」

隣を歩いていたらところからトタトタと俺たちの前に走り出て子供特有の自慢顔を見せるガキンチョにデコピンをかましてやる。

「夢は大きくて構わんが実力を身に付けてからでかい口は叩くんだな。」

「むうー。そのジャリボーイって呼び方止めろよ。ていうかジャリボーイってなんだ」

「俺が一番好きな三バカ小悪党がガキンチョを呼ぶときの呼称だよ」

「こしよう？」

「その調子だったら勉強の方もしないとねー？」

千菜にいれられたチャチャに言い返せなくて、うぐつとつまらせられるガキンチョ。違うわい。

「あつーそうそう兄さん。シロエさんたちへパルムの深き場所へまで行っちゃって」

「へえ。まあ結構早いペースだな。ことがことだし早いに越したこと

はないけど」

「マリエちゃんたちのギルド〈三日月同盟〉は現在総員25名。ギルドとしては中堅層どいったところだろう。」

「〈大災害〉直後この〈三日月同盟〉のメンバーのほとんどは幸いにもアキバの街にいた。」

「5大都市を繋ぐ転移装置〈都市間トランスポートゲート〉が原因不明で停止している今、メンバーが5大都市にバラバラに〈大災害〉の被害を受けてギルドそのものが自然消滅してしまったところも少ない現状ではこれはとても運のいいことだったのだ。」

「しかし、ものごとが完璧に進むことなど早々あるわけもなく…」

「新人プレイヤーのセララという〈森呪遣い〉の少女が北の最果てスキノに一人取り残されてしまったらしい。」

「しかもスキノの治安は悪く〈ブリガンティア〉とかいうネーミングセンスゼロの名前の糞ギルドが大地人を虐げながら支配しているらしく、更についてないことにセララは〈ブリガンティア〉に目を付けられてしまった。」

「それを見過ごすわけにもいくはずがなくマリエちゃんたちはススキノ遠征をするところを何があったのか、ゲーム時代、俺が所属していた〈所屬していたというよりなんか勝手に集まった〉レイド攻略集団〈放蕩者の茶会〉の参謀だった旧友〈腹黒メガネ〉ことシロエと同じく〈茶会〉出身の〈おぼんつ戦士〉直継、あとシロエの知り合いのアカツキという〈暗殺者〉の娘が救出に行くことになったらしい。」

「その時は俺も千菜も一緒に行こうかと考えたが、シロエから、
「奏はアキバより治安の悪いススキノでまともに動けるとは思えないし、千菜は派手すぎるから今回の隠密行動には土台向いてないから」と丁重にお断りをいれられてしまった。」

「参謀の判断はもつともで俺たち兄妹は従う他なかった。」

「それでも気になる俺たちはマリエちゃんを通じてちよくちよく定時報告を聞いているのだった。」

「ただいまー」

「あらあら、三人ともお帰りなさい。千菜ちゃんと奏君はなんだかお

疲れね〜？温かいお茶でも飲む？」

「あー、いただきます」「私も」

温かいお茶といってもこの世界では素材アイテム以外は全部味がないんだからなんとも言えないんだが味はなくとも効能的なのはあるのでありがたく貰っておく。

「はい。どうぞー。もう少ししたらお昼ご飯出すわねー」

現実世界では、祖母も母も料理上手だったからか、この世界での食事にはうんざりする。

特に美味しい食べ物を探めていろんな店を回っていくのが趣味な程の千菜にはこの生活は俺のそれより何倍もつらいと思うと可哀想になってくる。

俺の場合は素材アイテムでも結構ガマンできるけど…ただなあ…肉は、食べたいよな。誰か頑張って味のある料理作ってくんねえかなあ。

そんなことを考えていると昼ご飯の準備ができ、おやつさんにおばさん、ガキンチョ、千菜、俺で一つのテーブルを囲んで昼食を食べる。おやつさんは食事はながあっても家族全員で食べることに決めているようだ。

そういうのは、いいと思う。

みんなで食卓を囲って午前中にあつたことを話す。大したことないとりとめのない話題。近所のじいさんがボケ始めたとか、お魚唾えただら猫追っかけて裸足で駆けてく隣の家のサエザさんとか。

最近ようゴブリンどもが多くて困ってんだよな、おやつさんがポツリと漏らした話題が気になった。

「ゴブリン…こら辺にも出てくるようになったの？」

たしかアサクサの近くにはゴブリンはエンカウونتすることはなかったはずなんだけどな…？

「ああ、最近よくこら辺をうろちよろしてんだよ。なんとか追っ払おうとかするんだけど、あの…なんだ…なんか頭に頭蓋骨乗せてる奴がよ、魔法撃ってきやがるもんだからなかなか押し返せなくてな」

「ゴブリン・シャーマンね」

こんなところにゴブリン・シャーマンまで連れてきたゴブリンどもが出てきてる？

千菜も不思議に思ったのか首を傾げて眉を八の字にしてうーんと唸っている。

困ったもんだ、と両手を挙げて冗談めかしていうおやつさん。

「おやつさん、明日でも俺たちが出張ってゴブリン退治でもしてくるよ」

「ほんとうか！すまん。助かる」

おやつさんは本当に悩みの種だったのだろう俺たちが様子を見に行くと行ってシワのよっていた眉間が緩み安心したようにする。

さて、ゴブリン・シャーマンなんてここらじゃ見ないやつらが出てきてるなんて何が起きてるんだろうね？



「セエエエヤッ!!」

掛け声と共に朱の焰が花卉が散るが如くゴブリンたちを焼き尽くし振るわれた薙刀の斬撃が無慈悲にゴブリンの小さな体を消し飛ばす。

千菜のメイン職〈武士〉の攻撃力は全十二職中高位に当たるがある理由で千菜のそれは武士を越えるどころか全十二職中最高の物理攻撃力を誇る〈暗殺者〉を凌駕している。

そののせいでなかなかスリリングな戦闘を繰り広げているのだが、そこは〈神祇官〉の俺がカバーできる。

何度見ても美しいと思ってしまう。

蒲公英のように軽く、桜のように舞、薔薇のように情熱的に、向日葵のように派手に、椿のようにあっさり scatter する。

これまでに驚嘆するような戦い方は何度もあれど、美しいと見蕩れてしまうのは千菜のそれだけだ。きつと後にも先にもこれつきりだろう。突き詰めた剣は芸術性も伴う。

「兄さん！敵増援アリ！」

「了解。敵増援確認。数は…六。半分は足止めする。残りは消しておく。補助は継続」

「了解」

すぐさま後ろに下がり、増援で来たゴブリン六体のうち前方に出ている二体を手早く詠唱し終えた〈剣呪の呪印〉で空虚から表れた無数の剣を飛ばし切り刻む。少し後ろを走っていた残りの四体を怯ませるたところに近づき一体に斬りつけ頭から一刀両断する。三体。

我に帰った残りのゴブリンたちは一斉に飛びかかってくるが…

「伏せてっ!!」

片手と足を大きく開いて方膝を地面につけ、上半身を落とすように伏せる。

頭上を身を焼き刻むような熱量を持った地獄の業火が通過する。飛び上がっていたゴブリンたちはなすすべもなく斬り飛ばされるしかないのだった。

「お前！あぶねえだろっ！掠りでもしたら俺の頭が消し飛ぶだろうが！」

「そんなに馬鹿力じゃないわよ。せいぜい上半身が丸焦げになるぐらいじゃない？」

「範囲が広がってる分なお悪いわ」

「あと禿げ上がる」

「お前最低だな!!」

実の兄をハゲの驚異にさらす実の妹。どんな関係の兄妹だ。

「兄さんだったら絶対に私がどう動くかわかっていると…ごめんなさい」

しょんぼりと俯いて謝ってくる千菜。むう、こんなの怒れるわけがないじゃないか。つくづく俺もシスコンだ。

「ああっ、もういいよ。一休み入れようぜ？ちよつとさつきは数が多かったし」

「うん！」

千菜は安心したようにニコニコと笑って後ろを小走りについてく

る。

戦闘があつた場所から少し離れたところに小さいが開けた場所があつたのでそこで一休み入れることにした。

「〈聖域結界〉」

サブ職業〈陰陽師〉の特技〈聖域結界〉を発動して一帯に簡易的なゾーンを発生させる。

この〈聖域結界〉とにかく便利なのだ。

使用可能な時間に制限や本来のアキバの街なんかで購入出来るゾーンに比べれば劣ってしまうが、個人がゾーンを発生させることが出来るので十二分に役に立つ。

ゾーンというのは一種の仕切りなのだ。あちらとこちらは干渉し合うことのできない。

戦闘中にはメニュー操作では発動出来ないから活用出来ないが、こういった小休憩をとるとき奇襲を警戒することなく安心して休めるのはモンスターの闊歩するこの世界では圧倒的なアドバンテージになるのだった。

「にしても本当に多いな。ゴブ」

「うん、アサクサの回りってゴブリンのエンカウント率はほぼ皆無だったよね。それが連戦でゴブリン。」

所詮ゴブリンだから大したことはないけど大地人のアサクサのみんなが相手取る分にはちよつと数が多すぎるよ」

ゴブリン・シャーマンもいるみたいだし、と千菜も水筒の水を口に含みながら同意する。

ほい、と放られた水筒を受けとり水を飲む。千菜の武器の特性もあつてか喉が乾く乾く。

二十分ほど小休憩を取った後、俺たちはまた探索を再開し途中何度かゴブリンの小隊と出くわすもなんなく蹴散らして進んだところで俺たちは驚くべきものを発見することになった。

作りはお世辞にも上手いとは言えないが高い木の城壁で囲われた大量のゴブリンがいるゴブリンの集落を発見したのだった。

第四話 俺の屍を越えて行け？はっ、俺の道にてめーの死体なんか転がしてんじやねーよ

破壊された城門。耳障りな奇声が広く雑踏とした集落に飽和する。居候の恩義があるおやつさんの困り事を聞き、調査に乗り出した俺と千菜。

幾つものゴブリンとの戦闘の末の探索で発見したのはゴブリンたちの大規模な集落だった。

〈式神遣い〉で小鳥を飛ばし簡単な偵察を済ませた俺たちは相談の末に集落に侵入することにした。

千菜は正面から堂々と城門をぶち破り適当にゴブリンをあしらいつながら隠れてやり過ぎし、俺は千菜にゴブドもが意識を向けている間に裏から堂々と隠れて入らせてもらっていた。

隠密行動はあまり得意じゃないけど、そこはアイテムの力で誤魔化せる。索敵能力は俺の眼は一級品。力場を視ればどこになにがいるかなんて手取るように分かる。かくれんぼの天才（おに限定）と言われているのも伊達じゃない。

正々堂々正面から不意打ちって魅せよう



「うーん、ちょっとこれはきついかなくなんてね……」

目の前というか四方八方をゴブリンたちに囲まれ威嚇の奇声を浴びせられる千菜。

四面楚歌っていうんだらうけど、どうもゴブリンじゃ迫力に欠けちゃうな、などところこの軍勢に囲まれてもどこ吹く風で独白するがそんな呑気なことを言ってもらえるような優しい状況じゃない。

「女の子相手に大勢で囲んで威嚇なんかしちゃって……」

手にそれぞれの武器を持ったゴブリンたちはジリジリとにじり寄り今にも襲いかかろうと距離を詰めてくる。

ほんの少しでも千菜が動けば回りを囲んでいるゴブリンたちは躊躇なく飛びかかるだろう。

それでも千菜は気にした風もなく両の手に持つ紅の薙刀へ千紫万紅の大薙刀をぐるりと一回転させてゴブリンたちを挑発するように啖呵を切る。

「舐めてんじやないわよ。姫の御前よ。頭が高いわ。ひれ伏しなさい」

スイッチが切り替わったように剣呑な目付きに代わりゴブリンたちを睨み付け、飛びかかろうとするゴブリンよりも早く身の丈を越える紅の薙刀を大きく振るい咲き狂う極炎の花と触れたものをなんの躊躇もなく切り裂く斬撃を容赦なく浴びせる。間合いに入ったものから肉片に変えられ灰と化す。

その攻撃力は〈冒険者〉の域をはみ出していた。〈冒険者〉でありながら 〈冒険者〉を逸脱していた。

千菜のサブ職業は〈極者〉だった。ロール系のサブ職業の中でもトップクラスの変わり種のサブ職である。

特技の種類はサブ職の中でもっとも少ないたったの一種類。

〈ステータス変質〉

冒険者には様々な能力値というものがある。

筋力値、敏捷値、回避値、防御値、魔法値、e t c.

この様々な能力値が複雑に絡み合い干渉し合うことで攻撃の速度、破壊力や魔法に対するダメージが決まったりする。

本来ステータスというのはレベルの上昇や減少、サブ職のボーナス効果、装備の効果、アイテムの効果でしか変化することはない。

それぞれのメイン職で基本ステータスというのは固定されているのだ。あとは自分のビルドに合わせた装備やサブ職を利用することで個性を出していくものなのだ。ステータスそのものを変質させる特技は〈極者〉しか持ち合わせていない。

理屈は単純明快、ただ削って付け足すだけ。

自分のいずれかのステータス値を削り、自分の好きなステータスに削った分だけ足し合わせるのだ。

千菜はただ純粹に攻撃力が上がるようにステータスを割り振った。ダメージ量は攻撃の速度と重さに影響を受ける。

防御力も回避性能も魔法すらも切り捨て攻撃に一点特化した超攻撃型ビルドが千菜の選んだ道だった。

武士の派手な一撃特化の特技との相性もあいあまりその攻撃はレイドボスにもっとも近い唯一無二のものへとなっていた。

その壮絶なる破壊力からつけられた二つ名が〈覇姫〉

あまりに突拍子もない話に信じるのは実際にその破壊力を見た一部のレイダーのみだったが〈覇姫〉というただならぬ二つ名から千菜が只者ではないことは大きくプレイヤー間に広がっていた。

勿論、〈極者〉の実装時、同じようにいうところの極ぶりをしなかったプレイヤーがいなかったわけではない。ピーキー過ぎてネタにしかならなかったが。

防御力に特化すれば火力が足りなさすぎてヘイトを保ちきれずに仲間がやられ、MPがそこをつけば敵に延々と殴り続けられる生き地獄を味わい。

回避に特化すれば、単純に火力足らねえ、防御も足らず、必中攻撃の低火力な一撃も相殺できずにお陀仏と何がしたいのかわからない結末を呼び。

普通に攻撃力に振る以外使い道がないと考え攻撃力に振っても一対一ならともかく敵が複数だと一体に気を使ってるうちに他のやつから意識が少しでも離れるとやられるため普通に戦った方が効率良いと単純明快な答えに行き着く始末

千菜が〈極者〉を使いこなすほどになったのも、自分の胆力とダメージ遮断魔法をノータイムで途切れることなく扱う神祇官カンナギの兄とその周囲にいた二刀流の接近魔法使いなんかの常識とはかけ離れたプレイヤーがいたお陰だろうと、千菜本人は考えているのだった。

「ほら、もっとシャキツとしなさいよ。腰が引けてちゃ私には一太刀も入らないわよ。死ぬ気で来なさい」

伝わっているかはわからないがゴブリンたちにいい放つ千菜。既に戦闘にはいつて身の丈を越える薙刀を全力で振るう数はいくつになつたか覚えていないが薙刀に一切の衰えはない。

けれども肉体的には余裕綽々だとしても精神の方はそうはいかない。

斬つても斬つても一向に減る様子もない敵。周囲を常に囲み続ける敵意。少しでも気を抜けば儂く散る命。

集中力は人並み以上にある。それでも一人で相手取るのには限界がある〈冒険者〉のそれを越えられても人の限界は越えられない。いずれ限界がくる。だから…

「全員静まれええ!!」

「やつと来た…まったく、遅いんだから…」

張りのある怒号がビリビリと空気を揺らす。

声の出所の方角には黒の外套を羽織った奏が立っていた。だが、いきなり現れた第三者よりもゴブリンたちにはその手に握られた鎖に簧巻きにされたものに視線を集めさせられた。

鎖に簧巻きにされていたのは彼らのトップ。この集落のリーダーであつた。

全身が傷だらけではあるがまだ死んではない。まるで加減されたようにかすり傷や殴打の跡しか身体にはみる限りでは見当たらない。

その姿にゴブリンたちは動きを止まらざるおえなくなる。ゴブリンの世界は階級社会。自分よりも階級の上のもの命を犠牲にするような行動はとらない。

そこを奏と千菜は利用した。真つ正面から挑んだらたつた二人の〈冒険者〉じゃこの集落にいるゴブリン全てを討伐することなんて出来やしない。

一騎当千なんて物語の中だけだ。

現実には質より量。たかだか二人腕のたつ〈冒険者〉がいたところでその何十倍もの敵を全滅させるなんて不可能だ。

だから集団のトップを捕まえてしまおうと。

千菜が真つ正面から乗り込み雑兵を引き付け、裏から忍び込んだ奏が正々堂々正面から不意打ちつてトツプを叩く。

作戦は成功。この集落のゴブリンのトツプ、ゴ布林村長と呼ぼう。ゴ布林村長は無事に奏たちの手に落ちた。

「さて、お前らよく聞け！そして少したりとも動くんじやねえ！動けば即座にコイツの首をはねるからな！」

奏は腰の黒刀を抜き放ちゴ布林村長の首に据える。いつでも首をはねることが出来ることをアピールする。

「これから、今すぐにこの集落を捨てこの地から去れ！さもなければコイツの命はない！全員がこの集落を出ればコイツも一緒に解放してやる！」

恐喝

言葉が通じているかは定かではないがニュアンスは伝わっているのだろう。ゴ布林たちは武器をその場に置き集落の裏口へと散っていく。次々とゴ布林たちは集落から立ち去っていき集落は空っぽになっていく。残っているのは奏と千菜とゴ布林村長だけ。

ゴ布林村長は歯を食い縛り奏を憎しみの籠った眼で睨み付けたまま目線を外さない。

奏はそんなゴ布林村長を一瞥してからゴ布林たちが去っていった方向を見た。

「そろそろだな…」

ポツリと奏が独白する。その時、爆音と地響きが三人を襲った。遅れてゴ布林たちの醜い奇声が響いてくる

大きな砂煙が立ち上り集落を囲む高い城壁を越えてその姿を覗かせる。

砂煙の上がる方向は、先程までここにひしめき合っていたこの集落に住む者たちが問答無用に追い出されいく宛もなるか先に進むこととなった方向だった。

「ウガアアアッ!!」

奏が手下たちに何かしたのだと根拠もなく直感的に悟ったゴ布林村長はもはや大人しくすることができないように前のめりになっ

て奏に咆哮する。

しかしゴブリン村長を縛る鎖は切れることも綻ぶこともなく無慈悲にその身体を縛り付ける。

「騒ぐんじゃねえ。俺がお前らを見逃すことなんか出来るわけねえだろ。俺はアサクサのみんなに恩があるだけじゃなくてへ大地人へっていう存在に恩があるんだ。このあとに他の大地人の村を襲うかもしれないお前らを放つとけるわけねえだろうが」

まあ、説明してやつても聞こえちやいねえだろうけどな、とゴブリン村長を一瞥することもなく告げる奏

千菜は奏から受け取った鎖を握って腕を組んでじっと立っている。表情は先程からピクリとも変わらない。

楽しそうでも辛そうでもない。興味なさげにゴブリン村長を見つめるだけだ。

奏も千菜も最初からゴブリンたちを見逃すつもりなどさらさらなくゴブリンたちが集落を捨て別の土地に行こうとするところを罠に嵌めて一網打尽にするつもりでしかなかった。

予定通りに雑兵は罠に嵌まり、恐らく全滅とまでいかなくとも八割以上は死んだだろう。

それだけ強力な罠を奏は仕掛けてきた。そのお陰でかなりの散財をするはめになったが、八割も削れれば戦力としては全滅に等しい。爆音と地響きは止まったが先程まで大音量で鳴り響いていた音が頭の中に反響してしばらくの間はやみそうにない。

気分の悪い音を頭の中に残しながら奏は抜いていた黒刀をゴブリン村長の首に据えた

「俺には受けた大事な恩がある。その恩に俺が報いるために、不本意だろうが…」

鎖に縛られ身動きのできない身体に躊躇いもなく光も飲み込むような黒い刀身が吸い込まれていく

「俺のために死んでくれ」

数百を越えるゴブリンを従える集落の長は辺りに金貨と少しばかりレアなアイテムを落とし、引き換えにその命を身体から手放した。

一人の偽る者は明日を笑うために獣を殺す

獣は殺され海を渡り輪を巡る

偽る者は今日を笑う

死んだ獣は地にとける

子は違う

ただ歪んでいたから殺された

違わなければ何か変わったのだろうか

第五話 二人は

アサクサの町に来て居候としてお世話になっているおやつさんの悩みを聞いた俺たち兄妹はゴブリンがアサクサの周辺まで現れる原因を探るために探索に出た。

そこで見つけたのはゴブリンの大規模な集落

まるでどこかに仕掛けるような慌ただしさに包まれていた集落を見て俺と千菜はアサクサを襲うのではないかと危機感を覚えた。

アサクサは大地人の町で、アキバの街のように衛兵システムもモンスターを阻む結界も備わっていない。

軍勢力など無いに等しい。

あの軍勢に攻め込まれてはいくらなんでも敵わないと思った俺たちはゴブリンの集落に侵入した。

ゴブリンの集落の長を人質にとりあらかじめ仕掛けておいた罠の方に誘導して罠に嵌めて連中を一網打尽に仕留めた。

現在は、その後始末の真っ最中である。

「燃くえろよ燃えろくよ、炎よ燃えろく」

「あつ懐かしい！昔キャンプファイヤーの時に姉弟でさーよく歌ったね」

集落を囲っていた壁を全て倒し一ヶ所に集めて、千菜の薙刀と俺の魔法で燃やしていく。もともとそこまで堅牢な作りをしていたわけではなかったのですんなりと集めることができた。

「冬になったらキャンプファイヤーとはいわないまでも焚き火でもして焼きいも食いたいな」

「湿気た煎餅の味だけどね…」

「お前そこは水をさしちやダメだろ…」

「焼きいも、食べたいね…？」

「そうだな…」

「はあー」

目の前でゴウゴウと音をたてて燃え上がる柱を見ながら二人で溜め息を吐く

「そういえばさ、妹よ」

「なんだい、兄よ」

「なんであんなにゴブリンたちは慌ただしかったんだろな？」

「知らない。ピクニックにでも行こうとしてたんじやない？」

「こんな大所帯でピクニックになんか行かれたらいい迷惑だな」

首を小さく傾げながらてきとうに答えを返す千菜。てきとうな答えにどうでもいいようにツツコミをいれる俺

まるで、どこかの砦に他の集落の連中と集まって王様でも決めて、どこかの街に攻め込んだり、小さな町に略奪部隊を送り込んだりしそうな勢いだったが、何がしたかったんだろーな。

これから数カ月後に定期イベント『ゴブリン王の帰還』が発生し小さな町の防衛戦に参加することになる奏と千菜が、なぜあそこで気がつかなかったかー！、と盛大に地団駄を踏むことになるのだがそれは後のお話。



ゴブリンの集落を壊滅させて三日後

アサクサの周辺にゴブリンが出てくることもなくなりおやつさんたちがゴブリンたちに森での狩りや採集を邪魔されることもなくなった。

そんな中で、一つの朗報がアキバの街から届いた。

シロエたちがススキノからセララの救出に成功したという知らせだった。

サプライズとして、^{ティーパーティー}〈茶会〉時代の前からお世話になっていた猫人族のスピーパー紳士にやん太師匠も一緒にアキバの街に来るらしい。

なんでもススキノでセララを匿ってくれていたのがにやん太師匠だったとか。

本人は自分のことを年寄り呼ばわりしてるけど、やっぱり大人の男

の包容力は違うね。セララがべた惚れだとかなんとか。

「まったく：リア充爆発しろ…」

「ん？兄さんなにか言った？」

「いや、なんでも」

よくもわるくもネットゲーマーなのは奏も変わらない

さて、シロエたちがセララを連れて帰ってくるのをきっかけに一つ選択肢が生まれた。

「そろそろアキバの街に帰るかな」

「うん、活気はともかく治安はある程度落ち着いたらいいしね」

いくら実際の距離の半分しかないからって、東京から北海道まで現実世界のような飛行機もましてや車もないこの世界だ。

シロエたちがススキノからセララを連れて帰ってくるということはそのなりに時間が経ったということでもある。

街に落ち着きが表れるには充分な時間だ。いい意味での落ち着きが生まれたわけではないのが釈然としないが…



「というわけで明後日くらいにアキバの街に帰ろうと思います」

リビングのテーブルを挟んで向かい合うようにイスに座り二人に経緯を話す。

「おいおい、えらく急だな」

「あらあら、せっかく仲良しさんになれたのに。町のみんなもきつと残念がるわ」

おやっさんは無精髭を弄りながら、おばさんは片手を頬にあてながら俺の話に耳を傾ける。二人とも残念がるように眉を寄せうーんと唸る。

「本当は〈フウモクスイカの花〉とか採集しておきたかったんだけど、知り合いが帰ってくるまで時間がないから諦めるしかないのが心残りだけどね」

〈陰陽師〉の作製アイテムのための材料だったんだけど別の機会に取りに来るとしよう。別にあつたら便利ってだけだし。

「坊主にはもう言ったのか？」

「いいえ、言わずにアサクサを出すつもりです」

「まあまあなんで？きつと怒つちやうと思うわよ？二人のこと大好きだから」

「あんまり別れの言葉って好きじゃないんですよ。ガキンチョには俺たちは星になったとでも伝えておいてください。その方がカツチョいいんで」

〈冒険者〉は不死身だろうが」

「ぶちギレちやうわね。きつと」

呆れたように溜め息をつくおやつさんと、ニコニコ笑顔を崩さずバツサリと言い捨てるお婆さん。

お婆さんはちよいちよい思ってたけどおっとりはしてるようで発言がオブラートに包まれていないことが多いような…

「まあいい、なんとかこつちで誤魔化しておいてやるよ。但し、世話になつた町の連中にはあいさつしとけよ？」

「はい。何人かには挨拶してから行こうと思ってます。さすがに不義理が過ぎるのもどうかと思うので」

本来はあまりこういつた挨拶なんかはせずにフラリといなくなるように心がけているんだが、ちよつとここでは一方的に助けられっぱなしだったからそういうわけにもいかない。

なんでそんな風に人を避けるようにするのかつて？人間関係をあまり深くしないためにだよ。

よく視えると親しくなつた人と今生の別れの時に結構辛いからね…

まあ、今回は今生の別れなんて大それたものじゃないんだけどね、このときドア一枚を挟んで向こう側に小さな気配があつたのだが、挨拶にいく人を指を折りながら考えていた奏は愚かにも気づくことはなかった。

平和ボケした日本人のゲーマーに無茶をいうなどフォローは一応

いれておいてやろう。



アサクサの町出発の日

一通りの挨拶を済ませひっそりと昼頃に出発しようと考えていた俺と千葉は最後におやつさんとおばさんと一緒に家で談笑していた。とりとめもなくどうでもいい話をしているだけだがこういうのはアキバの街で荒れていた住人を見てきた俺には充分すぎるほどに心を軽くしてくれた。

ガキンチョは朝ご飯を食べてすぐにどこかに遊びに出掛けてしまったからあまり話せなかったのが少し寂しいがしようがない。

そろそろ行くかと席を立ったときだった。突然として扉がすごい勢いで開かれて顔を青白くさせた近所のガキンチョの友達が入ってきた。何度か遊んだこともあるから間違いない。

「大変だよっ!! 広場でっ! 広場でっ! 怖い顔した〈冒険者〉、〈冒険者〉の人がっ…」

言葉を最後まで聞く気もなく、千葉っ!! と叫び走り出す。千葉も遅れをとることなく並走する。

何やらかしたんだあのバカガキはっ! 走りながら毒づきつつ広場までいつきに駆け抜ける。あの子の顔色を見る限りただ事じゃなさそうだ。

〈冒険者〉の身体能力を惜しげもなく使い一分とかからずに広場まで駆け抜けた。

広場には手になにかを持ったガキンチョとそれを囲むようにして立ついかにも近接型ですよーといった風貌の三人組がいた。

「おいこら、テメーら子供相手になに囲んで凄んでんだよ?」

「ああ? なんだテメーら? 俺たちはこいつがいきなりぶつかってきて俺のレア装備に汚れをつけてきやがったから慰謝料貰おうってだけ

だよ。邪魔すんじゃないねえ」

俺の言葉にムカついたのか重そうな鎧を着込んだ男がこちらを睨み付けながらそんなことを言ってくる

「汚れなんて自己修復機能で破損でもしない限り勝手に治るでしょ、そんなことも知らないトーシロが子供にタカるとか恥ずかしくないのかしら？土下座して詫言なさいよ」

既に姫様モードに入っちゃってるらしい千葉が蔑むような目で三人を見据える。

「ずいぶん舐めた口きくじゃねえかよ。俺たちがどこのギルドに所属してるかわかんないらしいな。お前こそステータスの見方も知らないで偉そうに口挟んでんじゃないやねえよ。俺たちはサーバー一位のトツプギルドへD・D・Dのメンバーなんだぞ？お前らみたいな凡百とは違うんだよ」

今度は軽装の〈暗殺者〉がニヤニヤと汚ならしい笑みを浮かべて口を挟む。

「お前らが〈D・D・D〉のメンバー？」

ステータス画面を確認するが本当に〈D・D・D〉のギルドエンブレムをぶら下げている。嘘ではないようだけど…こんなやつらが〈D・D・D〉？

「なんだよ？まだ食い下がるつてののか？ぶつ潰して神殿送りにしてやるるか？ああん？」

最後はリーダー格のような〈武闘家〉

神殿送りにねえ…随分と大それた事を口にするじゃないか。覚悟もないくせに…。

「いいぜ。相手してやるよお前らが〈D・D・D〉のメンバーつてのはどうも信じられない」

「そつちのネエチャンは〈武士〉みたいだが鎧も来てねえし、接近型の〈神祇官〉なんかとじゃ俺たち三人とまともに戦えるわけがねえ

そつちのネエチャンは口は悪いが見た目は上玉だからな、身ぐるみ剥いでたつぷり可愛がつてやるよ」

バチンツ、と切れてはいけなにかが鳴つてはいけなような音

で切れてしまった音が聞こえた

「かかってこいよ三下ども…お前らのその腐った根性、俺が愉快に快活に高らかに高笑ってやんよ」

—十分後—

「ありえない、ぶつちやけありえない」

「残念だがそれは三人組でやってもまったく意味がない。やるなら二人組でやれ。」

あと関連ネタができないから、冬薔薇の姫様が登場してからにしろ」

簀巻きにされて木の枝からぶら下げられている三人組のうちの〈武闘家〉にダメ出しする。

これだから素人は…ボケの詰めが甘い…

戦闘？

刀なんて抜かずに魔法の靴から杖を抜いて千葉が蹂躪するところを魔法や陰陽札で集中砲火してましたがなにか？

誰も刀しか使わないなんて言ってますけど？むしろもとはバリのバリの後衛ですから。

「兄さん、焼き加減はどのくらいがいい？ミディアム？ウエルダン？」

千葉はへ千紫万紅の大雑刀をクルクルと片手で回し炎を舞わせる。

三人組を焼く気満々だ。

「ヴェリー・ウエルダンで」

「水分も残らないじゃないですか!？」

今のはなかなかいいツツコミだったな。よしこれに免じて焼くのは勘弁してやろう。食えん肉を焼いても意味なんか、な…い？

「人間を調理しようとしたら、やっぱり暗黒物質になるのかな？」

「「ヒイイイ」」

「等身大の暗黒物質とか処分に困るよ跡形も残さず消滅させなきゃいけないじゃん」

「「ギャアアア」」

「うるさい！念話中だボケ!!」

みつともなく叫ぶ三人組を杖で殴り黙らせる。あつ繋がった。

『あつ、もしもし三佐さん。久しぶり。うん、うん。急で悪いんだけどさ、リーゼちゃんに確認とつてもらいたいことがあるんだけど…。うん、実はさアサクサの町でへD・D・Dのメンバーを名乗る三人組がさ大地人の子供相手にカツアゲじみたこととしてき、そこで止めに入ったら襲われちゃって…別に、返り討ちにした。うん、千葉も子供も怪我一つないよ。むしろ襲ってきた方がいまは人間としての危機にあるし。いや、なんでもない。あつそうなの？オツケーオツケー了解。急がしい中ありがとね。バイビー』

へD・D・Dの知り合いに念話をかけ真偽を問うてみたが本当にコイツらはへD・D・Dのメンバーではあるらしい。だが：

「お前ら、脱走兵なんだつてな」

「ギクツ!!」

「へD・D・Dへに入ったものの訓練がキツくてアサクサまで逃げ出してへD・D・Dの名前だけを借りて恐喝か。クズだなくお前ら」
「まさに虎の威を借る狐ね。ダサっ」

「グサツ!!」

「お前らはアキバの街に連れ帰ってへD・D・Dに身柄を引き渡すから、そのつもりで。」

たっぷりとその腐った根性叩き直して二度とそんな愚かな真似が出来ないようにしてやるから覚悟しておきなさい、だつてさ」

顔が青ざめ、イヤーー!!助けてー!!命だけはー!!なんてベタな命乞いをしてくるけど知らん。自業自得だろ。

「さて、コイツらはグリフォンに吊るしてアキバまで運ぶとして、

おい！ガキンチョ、どこも怪我とかしてねーか？」

俺たちのやり取りを珍しくなにも反応することなく隅っこでただじっと見ているだけだったガキンチョに声をかける。

何だかんだいってもまだ子供だから怖くてなにも言えなかったのかも知れない。

「奏兄、千菜姉、二人はアキバの街に帰っちゃうんだろ？」

「おろ？なんでバレてんの？」

「兄さん、またハマやらかしたの？？バレないようにやりたいんだつたらもつと上手くやりなよ…」

うぐつ、なぜかはわかんないけど実はこの作戦あんまり成功率は高くない。いつのまにかバレてるのがちよいちよいある。

なんでバレちゃうんだろ？

口をへの字に歪めて泣きそうな顔を堪えるようにしてガキンチヨは言葉が続けようとする。

「奏兄も千菜姉もアサクサに来てくれてありがとう。二人のお陰で：俺たち凄く楽しかった。今度は兄ちゃんたちがいなくても俺が：ゴブリンも：こんなチンピラも：全部つやつつける、くらいに強くつなるから：だからつ：今度は俺たちがアキバの街に兄ちゃんたちに会いに行ってもいいかなつ？」

しゃくりあげながらも涙を流さず言い切った。

手に持っていた花束を差し出しながら、目に溜まりに溜まった涙がこぼれ落ちないように。

堪えながら真つ直ぐに俺を見つめながら。

差し出された花束は「フウモンスイカの花」の花束だった。

なるほど：ね。あそこで盗み聞きされてたわけだ。そして今日は朝から花を集めにみんなで行ってたと。

「だから別れのあいさつは嫌いなんだよな…、んなもんいいに決まってるんだろがつ!!」

いつでも遊びにこい。今度は俺の仲間を紹介してやるよ。まあ、ちよつといくらか待っていてほしいけどな」

花束を受け取りガキンチヨの頭を撫でてやる。

千菜も姫様モードからいつものモードに変わってガキンチヨを優しく抱き締めて撫でる。

「またな、ウイル」

召喚笛に呼び出された希少な幻獣二匹に縛り上げた冒険者を乗せるのではなく吊るし奏が呼び出した巨大な火の鳥に乗り奏たちは飛

び立った。

見送るアサクサの町民たちは青い空に映える三つの翼とブラブラと振り子のように揺れる三つの塊を見て野太い三つの悲鳴と一つの愉快そうな高笑いを聞くのだった。

見送る町民の中の一人

まだ小さな少年はこの姿に憧れを抱き〈冒険者〉を夢見るようになる。

第六話 アキバへの帰還

アサクサの町をグリフォンで飛び立ち一時間とかからない位地にヤマトサーバーにある5大都市の一つアキバの街はある。

アキバの街にはモンスターが入れないように結界が大地人の供贄一族によって張られている。神代の時代から受け継がれる秘術を駆使し供贄一族はアキバの街を守護する結界と街の中での暴力や殺人をする者を処す絶対的な戦力である衛兵システムでアキバの街を外界のモンスターの侵入と内側の人間の悪意から守っている。

他にも銀行の管理を行っているのも供贄一族であり、古来からの掟を重んじたその掟を守り続けることを至上としているのが彼の一族なのであった。

アキバの街につき俺たちが最初に向かったのへD・D・Dのギルドキヤッスルだった。

なぜかという、お察しの通りアサクサの町で子供相手に恐喝してみせた脱走兵を届けるためだった。

縄で縛っているもんだから変な目で見られるのも困るので三人には首から『私たちは訓練が怖くて逃げた上に大地人の子供にたかっていたプー太郎で、今はお仕置き中です』というプラカードを下げてもらった。

イベントで手にいれたパーティーグッズがあつてよかった。これで俺たちは大丈夫だ。

なんか三人はもうグリフォンを降りた辺りから目が死んでいたけど気のせいだろう

まるで中世ヨーロッパの城のようにどでかい城の前に行き着き干菜と声を合わせて、

「リーゼちゃん、あーそーぼー!」

大声で叫んでやった。

何人かはぎよつとしたようにこちらを見てきたが大災害前からの顔見知りも幾人かいたのでこちらに気づいてよってきてくれた。

相変わらず恐ろしいことを平然とするな、お前ら兄妹は、とゲラゲラと笑いながら言われた。

五分としないうちに血相を変えた金髪ロールのコートのような法衣を着た女性がカツンカツンとヒールを鳴らしながら大股でこちらに歩いてきた

後ろをミニスカートに黒ニーソの軍服じみた服装をした女性も無表情で歩いてきた。こっちの方は慌てた風もなくスタスタとどこ吹く風だ。

「こんにちわ。三佐さん、リーゼちゃん」

「ハロハロ。三佐さん、リーゼちゃん」

俺と千葉が揃って挨拶をすると、

「お久しぶりです。奏君、千葉さん。」

アサクサに行っていたと風の噂で聞いていましたが、お元気そうで何よりです」

「またまた。風の噂でなんて冗談を、そっちのご主人様ロードのことだからきつかり調べられてたんでしょ？」

「クラステイさんしつこいもんね」

あの鬼畜メガネは俺をギルドに入れようと会うたびに勧誘してくる。男に口説かれる趣味はないでありんす。俺を口説きたかったら美女軍団でハニートラップでも仕掛けてみなんし。けっして振りじゃないよ?」

「ばれますか。やっぱり」

丁寧に挨拶を返してくれたのは黒ニーソのミニスカ軍服を着た鉄面皮のお姉さん。高山三佐さんである。

共通の知り合いのことでアハハと笑い会う。

「何を楽しく談笑しちゃってるんですか!高山さん!

というかあなた方はなぜ高山さんはさん付けでなんで私だけちゃん付けなんですの!!」

「なんでって年下にさん付けは俺の好みじゃないよ。リーゼちゃん」

「というか私たちに最初に突っ込むところが違うんじゃない?リーゼちゃん」

「つゝもうつ、だからちゃん付けは止めてくださいってば!」

「アハハッ、素が出てる、素が出てる」

ケラケラと笑うと更に顔を真つ赤にして怒鳴ってくるリーゼちゃん。アハハ、かわいいかわいい

年下に興味はないけどね。

「リーゼさん、目的がずれてきてます。奏君、千葉さんあまり大袈裟にからかうのはやめてあげてください。」

三佐さんから助け船がリーゼちゃんに出される。うん、三佐さんが言うならやめたげるか。あんまり苛めて拗ねられても困るし。

「ハッ、そうです!こんな玄関前で人の名前を小学生よろしく大声で叫ぶのは止めてくださいませ!!」

「そこじゃねえだろJK」

ダメだこの娘、テンパリすぎちゃってら。しつかりしてくれよ現役JK。

「なっ!?なぜそれをつ!」

なぜそれを知っているか!?と顔にありありと張り付け

「バレてないと思つてたのかJK」

「今さらだと思つよJK」

「知つてる人は知つてますよJK」

上から俺、千葉、三佐さんと三人で突つ込みをいれる。三佐さんが加わるのは珍しいな。というか三佐さんあなたさつきまで止めに入ってしまったよね?変わり身早すぎやしませんか?」

「面白そうだったので我慢できませんでした。不覚です」

「あつ、そうですか」

表情一つ変えずにそう言い張る三佐さん。

この人付き合いはそれなりに長くなるけどいまだによくわからん。表情の変化も少なければナニかの変化も少ないんだもの。完璧ポーカーフェイスだよ。

そんなわけでも散々リーゼちゃんをいじり倒したあと忘れられていた三人組を引き渡すこととなった。

「それじゃありーゼちゃん、あとよろしく」

「ああ…ハイ。もうちゃん付けでもJK呼びでもなんでもいいですわ…」

リーゼちゃんは諦めてしまったようでどうでもよさげに生返事する。

大丈夫だって、女子高生でもいいじゃないか、よく頑張ってるって、と脱走兵三人組に慰められていた。三人組ももとは悪いやつらでもないのかもしれない。

リーゼちゃんいじめた俺が言えた義理ではないかもだけど…。ふむ、ちよつとお詫びでもしておくか。

「リーゼちゃん、クラスティに今度面白いもん見せてやるって伝えといて多分機嫌がすこぶる良くなるから」

「！、そつそうですの。わかりました。マジでお伝えしておきますわ」「激ヤバですわね」

一瞬間が綻ぶ。すぐにいつもの顔に戻したけどバレバレだぜ。髪の毛先なんか弄つちやつて、ナニかがピコピコ黄色く跳ね回ってるよ。

「かわいいね」「同感です」

後ろの方で女性二人は薄く微笑んでいる。そんなこんなできつちりと脱走組は《D. D. D.》に引き渡しましたとき。

これから根性叩き直されることになる三人へ面白半分に黙禱を捧げた。



《D. D. D.》で遊んだあと俺と千菜は他にいくあてもあるわけなくギルド会館の《三日月同盟》のギルドハウス目指して歩くのだった。

あのときとは違い吐き気をもよおすほどのナニかの濁りは街に今

はなくなつたが別に見てて気持ちのいいものになつたわけでもないのでそそくさと速足にギルド会館に俺たちは向かうのだった。

「ただいま〜！」

千菜がギルドホームに入ったところで大きく声をあげる。俺と違い千菜は〈三日月同盟〉の一員なので入場制限には引つ掛からない。ドアを開けて一緒に入れば俺も入ることは可能だ。

するとバタバタと廊下を年少組が駆けてやって来て、お帰りなさいいと千菜を取り囲む。

千菜も年少組を邪険に扱うこともなくにこやかに話しかけてくるのを一人一人目を会わせて相手している。大人気だ。

べつ別に千菜は取り囲まれて、俺だけ誰もよってきてくれなくても悔しくなんかないんだからねっ！くやしきなんか…ないん…だからねっ…グスン

「男の嫉妬は醜いっすよ」

「うるせえんだよっ!!このクソ飛燕!そのモフモフ耳とモフモフ尻尾引きちぎってストラップにすんぞ!コラア」

「まあまあ、奏さんの帰りは私たちちちゃんと楽しみにしてましたからね?小竜」

「そうですね!あのアホ狐のことは気にしないでいいんですよ」

「誰がアホ狐だあ?このバカ狼?やんのかこら?」

「おお!いいよやってやるよアホ狐」

飛燕と小竜がにらみ合い恒例行事となりつつある喧嘩を始める。お互いイヌ科なんだから仲良くすればいいのに。

茶色の枯れ葉のような毛色をしたアホ狐こと飛燕に心の傷を負わされたところを俺と同じ〈神祇官^{カンナギ}〉の女の子明架香ちゃんとアホ飛燕と同じ年のクソ真面目高校生の小竜が慰めてくれる。ええ子や。明架香ちゃんは天子。リーゼちゃんがとまた違うタイプの女子高生だ。リーゼちゃんが弄りがいのある可愛さに対して普通の素朴な可愛さだ。

小竜は、うん、いい子だと思うよ。クソ真面目だけどね。

「相変わらず元気ええな。カナ坊は。なんかええことでもあつたんか

「？」

「マリエちゃん、その台詞セリフを言っているのはアロハ服着たお人好しのちよーかっこいいおっさんだけだ。二度と口にするな」

「ひえっ！カナ坊ひさびさやのにウチにきつすぎへん!？」

次に奥から現れたのは〈三日月同盟〉のギルドマスターの巨乳のお姉さん。アキバのヒマワリことマリエルさん。しよんぼりと肩を落とす様子を見るとどうしても心が痛んでしまう。

すまぬマリエちゃんこれだけは譲れない一線なんだ。

「マリエちゃん」

「はひっ」

「長い間()迷惑おかけしました。もう大丈夫です。と言いたるところだけどまた迷惑をかけるかもしれないですけどそれでも構わなかったらこれからも兄妹共々仲良くしてくれたら嬉しいです」

誠心誠意心を込めてマリエルさんに頭を下げる。

こんな非常時でも変わらずに暖かく接してくれる人はそうはいない。きちんと感謝の言葉を伝えなきゃバチが当たってしまう。

「カナ坊はバカやんね。うん、とびっきりのバカ」

「へ?」

「んなもん言われんでも仲良うするに決まっとするやろ大切なギルメンにそのお兄さんやで?そうでなくてもカナ坊みたいな四六時中高笑いななんてしてる子なんて見てるこっちも愉快になるやん」

「いや、別に俺そんな四六時中高笑いしてるわけじゃないんだぜ…」

確かに二つ名は〈高笑い〉とまで呼ばれてるけどさ…

「あんまり当たり前のことばっかり言うてると、愉快に快活に高らかに高笑うで?」

ニコニコといつもの満面の笑みを浮かべてウインクするマリエちゃん、あと少しで惚れちまうところだった。

「素直なところが奏さまの美德ですわよ」

「あら?梅子いつの間!?」

「梅子と呼ぶのはやめなさい。あとあなたと一緒に来たんでしようがっ」

やべ、俺もヘンリエッタさん気づかなかったわ。黙っところ。くわばら…くわばら…。

マリエちゃんかヘンリエッタさんにお小言をもらう姿はさっきまでのかっこよさは微塵も感じさせないものだった。

〈三日月同盟〉は変わることなく今日も賑やかです。

第二笑 騎士たちの高笑い

第七話 初夏の夜に溶ける笑み

高笑いする神祇官こと奏がアキバの街に帰ってきてはや三日。奏は充実した日々を送っていた。

ススキノからセララを連れ帰ってくる昔からの友人であるシロエ、直継、にゃん太といまだ会ったことなくマリエールから伝え聞いただけのアカツキという暗殺者^{アサシン}の少女を迎えるべく準備を着々と三日月同盟の面々とこなしていた。

奏のみならず千葉も帰ってきてからの三日は上機嫌だった。

それもそのはず、帰ってきてからは「味のある料理」を三食口にしてきたからだ。

朝は白い白米と味噌汁、魚の塩焼きに目玉焼きに始まり、昼は肉うどんとお握り、夜はハンバーグとシンプルなメニューではあるがあちらの世界と変わらないごくごく普通の料理を食していた。

これはアキバの街で新しいレシピが発見されたというわけではなく、今ちようどアキバの街に向かっている一行の一人にゃん太の発見だった。

レベル相応の料理人が現実と同じようにメニューを開かず手順を踏んで調理すれば味のある料理ができますにや、となにもひけらかすことなくさらりと伝えたにゃん太の調理法を実際に〈三日月同盟〉の料理人が試したところ本当に味のある料理ができた。

この一件でもともとにゃん太を師匠と慕っていた奏と千葉は、やっぱり師匠は最高だー！もう愛してる！師匠にだつたら抱かれてもいい！とさらににゃん太に対する尊敬を高めていた。

ついこの間、リア充爆発しろ、などとのたまっていたのに現金なものである。

そして今日、そのススキノからの一行が到着する日である。

街外れまでメンバー全員でシロエたち一行を迎えに行きシロエた

ちを大喜びで迎え入れるマリエールたち。

件の悲劇のヒロインとなっていた少女セララは〈三日月同盟〉の面々にもみくちやにされて迎えられたのを奏は少し離れた所から見ている。

千菜とマリエールの長身と巨乳に抱き締められていた時は苦しうなセララを見て羨ま…姉妹みたいだなと奏は独白するのだった。

そんな主役を少し離れたところで奏と同じように見ている集団に気付き奏は近づき、

「久しぶりシロエ、直継。こっちで直接会うのは初めてだな。ススキノからアキバまでわざわざ往復ご苦労さん」

「おう…久しぶりだな奏。相変わらさずの足大好き神祇官か？」

「直継、お前もおパンツ大好き守護戦士か？」

それなりに身長もありその上高下駄を履くことで身長が上乘せされている奏よりもさらに大きな身体を鈍色の重厚な鎧で包み背にはその大柄の体格の半分にも至る盾を背負っているシンプルなデザインであるがその厚みある盾はどんな攻撃であろうが通さない威圧感を感じさせている。

そんな格好とは裏腹に顔には人懐っこそうな笑みをはりつけ人のよさそくうなお気楽そうなそういう暖かな雰囲気が出ている。

奏の友人の一人おパン守護戦士こと直継である。

「勿論そうに決まっている！」

奏と直継はガツチリと握手し声を揃えてお互いの趣味を称えるように叫ぶ。バカな図である。

ここがアキバの街の外であつたことが救いだろう。

「あつはは…相変わらさずだね。全然元気そうでよかったよ奏」

「むむっ、お前は相変わらさずのむつつりか？シロエ」

「なっ!?今はそれ全然関係ないよねっ？」

「主君、声が裏返ってるぞ」

奏と直継の掛け合いを見て苦笑いを浮かべながら会話に入ってきたのは丸メガネを掛けた三白眼の青年。

真っ白で汚れ一つないコートのような法衣を体をすっぽりと包み

込むように着込み、特徴的な形状をした身の丈を越える杖を持って
いる。

直継とは対称的な典型的な魔法使いの風貌だ。

三白眼のせいもあってかとっつきにくそうな印象を受けてしま
うが本当のところは単純に人付き合いが少し苦手なだけでいいやつ
であると少しでも関わり合いのある人間は知っている。

直継と同じく奏の友人で〈茶会〉の参謀〈腹黒メガネ〉ことシロエ
である。

「ん？ああ君がアカツキちゃんか。はじめまして俺の名前は奏とい
ます。奏だけ〈吟遊詩人〉じゃなくて〈神祇官〉をやってます。よろ
しくね」

シロエにたいして若干のジト目を向けていた小柄な少女に奏は気
付きにこにこと笑いながらステータスを見れば一発でわかること
をペラペラと喋り、握手を求めて手を差し出す。

人間関係には気を使っているくせに奏は全くと言っていいほど気
安く初対面の相手に話し掛ける。

これが奏が別れ際にいつもいなくなるのがバレてしまう迂闊さ
にも繋がっているのだろう。

「あつああ、こちらこそよろしく。アカツキという。主君の忍として
仕えている」

奏の勢いに少しばかり気圧されながらも差し出された手を握り返
すアカツキ

「ところで奏殿、あなたはバカ直継と同類の人間なのか…？」

「奏でいいよ。あまり堅苦しいのは好きじゃないから。あと俺はオ
ブンではあってもスケベじゃない。謹み深い紳士を心がけている。
イコール直継とは同類じゃないよ」

「そうか、それはよかった」

「奏！てめえー裏切りやがったな！お前のお御足に対する愛はそんな
ものか!!俺のおパブギゃあつー」

おパンツの4文字が直継の口から発せられる前にアカツキの美し
い飛び膝蹴りが黙らせる。

「主君、この変態を蹴ってもよいだろうか？」

シロエの法衣の裾をつかんで報告を入れるアカツキに、蹴る前に聞け！と文句を言う直継。どうやらこれが通常運転なのだど理解する奏。

（よかつた〜変なこと口走んなくて、あんな予備動作なしの蹴りとか躲せる気がしねえ…）

「直継。俺のお御足に対する愛は俺の魂からあふれでもものだ。言葉にすればするほどそれは安っぽいものになってしまふんだよ」

「何をカッコつけて意味不明な戯言抜かしてんのよ。バカ兄貴が」
「クハッ!!」

胸を張って高らかに言い放つ奏に千菜の腹パンが叩き込まれる。サブ職〈極者〉で強化された筋力値で殴られた（勿論加減はしているが）。奏はその場に踞る。

「千菜っ…お前の力で殴られたら…俺死ぬからっ…やめてえ…」
わりと切実な懇願だった。

千菜は兄さんが悪いとぷいつと首を振って知らん顔、
そこへ…、

「にやあにやあ、いつも通りに仲良しさんでいいですよにや〜奏ち、センにやち。でもセンにやちはあまり力を奮うのはよくないですよにや？」
「師匠！」

二人は声を揃えて尊敬する人物を呼ぶが片方は実の妹に制裁という名の腹パンを受け地面に跪き腹を抱えて土下座のような態勢、もう片方は殴った方の手をぷらぷらとふりながらついさつきまで鬼も裸足で逃げ出すような眼で実の兄を見ていたのだからおかしな光景である。

そんな二人に喜び勇んで迎えられたのは針金のように細い手足に細い身体を緑のコーデュロイジャケットに身を包み腰に年期の入ったベルトで二本の意匠のこなされた美しい刺突剣レイピアを吊るして紳士的な大人の雰囲気醸し出す猫人族、にゃん太であった。

奏、千菜の両方から師匠とまで言われるほどに慕われているのは〈茶会〉の時代から奏と千菜だけでなく〈茶会〉のメンバー全員を暖か

く見守り手助けしていたことから起因する。

その証拠に〈茶会〉のメンバーは奏や千菜と同じように彼のことを、班長、ご隠居、などと信愛を込めて呼ぶ。

「お帰りなさい。にやん太師匠！今からみんなでパーティーだよ」

「お帰り。師匠。長旅お疲れさま。いろいろご馳走準備してあるから一緒に食べようぜ」

「にやあく。それは楽しみですにやー。僭越ながら我輩も腕を降るいませしようかにや〜」

「マジで!?!やったー!」

イエーイ、とさつきまで殴った殴られたの関係はどこへやら両手でハイタッチする奏と千菜。

仲がいいことはいいですにやー、と微笑むにやん太

そういうわけでセララ救出に向かったシロエたちは無事に帰還したのだった。



ギルドハウスに帰った奏たちは、マリエールの「今日はお祝いやから！飲んで食べて騒いでや！」という宣言を皮切りに飲めや歌えやのドンチャン騒ぎを始めるのだった。

直継は小竜たちに囲まれ戦闘談義で盛り上がり、アカツキはヘンリエツタに捕まり〈三日月同盟〉の女性たちも混ざって愛でられそれぞれ思い思いに楽しんで（若干1名除くが…）いた。

にやん太は予想通りにしばらく料理を楽しんだ後に厨房へと席をたった。その後ろを慌ててついていくセララは微笑ましくあった。あとから聞いた話ではあったがにやん太は〈三日月同盟〉の〈料理人〉と協力して激戦区の古参兵のように料理にいそしんでいたらしい。

メニューからの製作ではなく実際に自らの手でなければ味のある料理をつくれな以上料理人本人のもつ腕と知識しか役にはたさない。

そこでにやん太と〈三日月同盟〉の〈料理人〉はお互いに知ってい

る料理の知識を披露し合つて、知っているレシピを分かち合い、より一層の彩りのご馳走を加えるのだった。

そんな料理の大皿を持ってセララはあちこちの部屋を廻つて給仕をし始めた。千菜は、「せっかく帰つてきてそれのお祝いでパーティーやつてるんだからゆつくり楽しめばいいのにー」と言つたがどの部屋でも同じようなことを言われたらしく、はにかみながら「自分を助けてくれた皆さんへの恩返しですから」と返してまめまめしく給仕を続けるのだった。

そんなセララをいじらしくおもい「あくもうつかわいいなく」と千菜はこれでもかというくらいにセララを撫で回していた。

その様子を見て奏は、ヘンリエッタさんのが移つたか…と誰に聞こえるわけでもなくため息混じりに呟くのだった。

そして宴もたけなわとなり、楽しい時間は繰り返し述べられる感謝と祝いの言葉、乾杯とご馳走に対する賛辞の中に過ぎ去つていった。呆れるほどに食べ、呆れるほどに飲み、そして騒いだ。すっかり月も沈んだことだろう。

どこの部屋にも酒瓶が散乱し、彩りの料理を乗せていた大皿がテーブルの上にも何枚も重ねられている。

そして騒ぎ疲れたギルドのメンバーはソファだろうが机の下にだろろがお構いなしに横になっていた。

直継は会議室で大の字になっていびきをかき、〈三日月同盟〉が誇る少女趣味のエース、ヘンリエッタに飾り付けられたアカツキは、疲れはてて大きなクッションに埋もれるようにして眠っている。

奏と千菜の兄妹はお互いに寄りかかるようにして静かに寝息をたてていた。

辺りには酒瓶が何本も散乱していて、恐らくどちらが先に酔い潰れるかでも競っていたのだろう。

「——つと」

シロエはテーブルの縁でゆらりと揺れた酒瓶をキャッチすると、そ

の他数本をまとめて魔法の鞆マジックバックに放り込む。

そして仲良く寄り添うように寝息をたてる二人の兄妹の周囲にこれでもかというくらいに散らばった酒瓶をこれまた魔法の鞆マジックバックに放り込む。

二人だけを見れば、仲の良い兄妹を写した一枚の絵画のような微笑ましい光景といってもいいのに辺りの酒瓶を見てしまっているシロエにはなんともいえない笑みを浮かべる他ない。

みなが寝静まった会議室で目を覚ましているのは、シロエとマリエールのふたりきり。

マリエールは会議室で雑魚寝する仲間たちに暖かなウールの毛布をかけて回り、全員にかけ終わるとシロエに声をかける。

「こんなもんでええがな？」

「あ、はい」

どこからか小さく寝言のような声がする。

「兄さん…部屋…掃除しといてえ…」

「うう…勘弁してくれ…下着はせめて…」

千葉と奏だ。

この兄妹は本当に仲がいいなーとマリエールはみんなを起こさないうように笑いを噛み殺しながら言ったが、シロエは奏が完璧に千葉に下に据えられているなど別の意味で笑いを堪えていた。

「どする？シロ坊も寝る？」

「そんなに眠くはないですけど…」

「ほうかー」

マリエールはシロエに近づくとするりと自然に表情をのぞき込む。「んじや。お茶でも淹れよか。ここじゃなんやし、ギルマス部屋にいこ」

マリエールはシロエを誘い会議室を出る。「ちよつとだけまっつや」とシロエに囁いたマリエール。ひとつひとつの部屋をにこにここと笑いながら確認してゆきどの部屋でも満足そうに横になっているメンバーを見て回る。

シロエを先に執務室という名のマリエールの私室に先に行かせて

厨房から黒葉茶をもってくる。

果実をブレンドしたさっぱりとした味わいのこのお茶は宴でふつふつと消えかかっていた熱を冷まして落ち着かせる。

そこからはいろいろな話をした。

マリエールの今回のお礼から始まり、宴のはなし、明日のはなし、料理のはなし、ススキノのはなし、そしてアキバの街のはなしも。

アキバの街はいつときよりは落ち着きを見せた。それでも雰囲気が悪くには変わらない。

なにかはつきりとしたものがあるわけではないのだけれどモヤモヤとなにかスッキリとしない、どうしようもできない小さな破損がいくつも積み重なってしまっているようなそんな気持ち悪さ。

それは格付けがすんだからなんだろうとマリエールははなした。

今やアキバ一の最大手のギルドの〈D・D・D〉や他の百人規模の大手ギルド。

それと〈三日月同盟〉のような三〜四十人にも満たないような中小ギルドややもつと少ない一桁程度の人数しかない零細ギルド。

人数の多い方がなにかと顔を効かせるのは当然のものだった。何事にも数の多さというのは単純な強さに繋がるものだ。

明確なルールがあるわけではないがなしくずしにそうなってしまう。

PKが減ったのもその副次的なものらしく、パワーバランスが明確になってしまったことで力の強いギルドが効率のいい狩り場を順にとつていき、狩り場での縄張りが分けられてしまったということらしい。

そして、それを加速させるように〈黒剣騎士団〉と〈シルバーソード〉がレベル91を目指そうとしているらしい。

エリート主義の〈黒剣騎士団〉や〈シルバーソード〉は最大手の〈D・D・D〉と比べると人数が圧倒的に少ない。もちろん〈三日月同盟〉のような中小とは比べるべくもないが〈D・D・D〉の1500と言う数にはエリート主義でレベルでの入会制限があったりする彼らでは押されっぱなしにならざるを得ない。

「でも、どうやって——」シロエの疑問も当然だった。

本来、経験値というのは最低でも自分よりレベルが5より下回ると入らなくなってしまうのだ。

そんな中でリスキーな戦闘を繰り返すことがメリットに釣り合っているのか？

動機も気持ちも戦略もわかる。しかし、達成する方法はあるのか？

「EX Pポット」を使って、や」

マリエールは苦々しく眉間にシワを寄せてシロエの疑問に答える。

マリエールのこんな顔は（こっちの世界になつてからはそこまで経っているわけではないが）付き合いのそれなりになるシロエでもなかなか見ないものだった。



初夏の風がチェニツクの裾をはためかせるほどに強く吹いている。

地面の上を風に気ままに流される雲の影が黒く染め上げる。

深夜であるにも関わらず今宵の影は余りにも明るく影ができるほどだった。シロエはその影と月明かりのコントラストを追うように真夜中のアキバの街を歩いていた。

特に目的地を定めるでもなく、胸のなかにある得たいの知れない黒い気持ちをもて余しながら歩いていた。

いつのまにやらシロエは廃墟とかがしている廃ビルにいた。その二階から道路を見渡し何気なしにコンクリートの残骸に腰かける。

「よう、お兄さん一人で黄昏れちゃってかっこいいねー。惚れちゃうよ」

突然後ろから軽薄そうな声がかけられる。

チンピラかと思ったがそんなありきたりな展開はなく、酒瓶を片手に持った奏がいつものような笑みを浮かべながら立っていた。

「奏…、どうしたの？ てつきりあのまま眠ったままだと思ってたんだけど」

「飲み足りなくてね。付き合えよ」

奏はそういうとシロエの隣に座り込み腰の魔法の鞆マジックバックから大きな盃を取り出して酒瓶から酒を注ぐ。

「あれだけ飲んでいてまだ飲み足りないの!？」

先程のドン引きな光景がよみがえり、いまだに酒を飲もうとする目の前の友人に突っ込みを入れるシロエ。

「酒は溺れない程に飲むのがちようどいいんだよ」

そんなことを言いながら大きな盃ではなくコンクリートの地面に酒をぶちまける奏

「もう充分酔っぱらってるじゃないか!

ていうかこの盃へ乙姫の盃だろ? 秘宝級のアイテムなんだからもっと大切に使いなよ……」

「ばかやろ〜これぐらいしか使い道が俺にはねえんだよ」

シロエの忠告を聞き流し酒を艶のいい盃に注ぎたそうとするがまったく見当違いにコンクリートにドハドバとぶちまけ結局酒瓶を空にすることしか奏にはできなかった。

まったくなにしに來たんだよ…、シロエは肩を落として盃を魔法の鞆にしまう奏に悪態をつく。

さつきまでごちゃごちゃと考えていた自分が馬鹿みたいだとさつきまでとは違った種類のため息が自然に漏れてしまう。

「マリエちゃんに今のアキバの街の話は聞いたんだろ? シロエえ」

「うん…聞いたよ」

「へハーメルン〳〵なんてクソギルドの連中が新人プレイヤーを拉致監禁に等しい行為をして、そのうえへEXPポット〳〵なんて代物持ち出して大手に売り付けてやがる」

「大手もそれに気づいていてもなにもしない。見て見ぬふり」

「まったくアキバの街も落ちたもんだね。ダサくてしかたねえ」

「そうかもね…」

奏の言葉にシロエも同意を示さざるおえない。シロエ自身も同じことを考えていたのだから、黙って返事を返さないわけにはいかなかった。

ただそれを口にしてなんになる? なんともできないことが積み重

なって今の現状になってしまっているというのに、そういった言葉がシロエの口から出ようとしたとき、

「まったくもって笑えねえ」

奏の一言が挟み込まれる。

「シロエ、アキバの街をちよつと支配しようと思うんだけど手伝わねえか？」

さつきまでとはうってかわって酔いを感じさせないはつきりとした口調で告げる奏の声。

シロエがそのとき見た奏の顔には昔、現実の世界で見たことのある“彼女”と並び立った時に近い、何を考えているのか解らない悪ガキのような笑みが浮かべられていた。

第八話 できないこととやらないこと

「シロエ、アキバの街をちよつと支配しようと思っただけけど手伝わねえか？」

不敵な笑みを浮かべたままに奏はシロエにそう誘いかける。

「それってどういうこと？」

「そのまんまだよ。アキバの街をちよつと変えようと思ってる。いまのアキバの街じゃあちよつとダメだからな」

シロエの質問に笑みを崩さずに、しかしシロエの目をじっと見つめ視線を切らずにそう告げる。

「それって話してたアサクサで会った男の子のためにやるの？」

「ガキンチョ？いやー違う違う。まあ、理由の1つに入るっちゃ入るけど、アイツと約束したのは仲間を紹介するってだけだからな。別にアキバの街に呼ぶとかしなくてもアサクサに俺らが行けばいいだけだからな」

そんなときはお前にも着いてきてもらおうぞ、とお構いなしに言ってる奏。

それに少し気後れしながらもしようがないかと無理矢理納得して、わかつたよと返事をするシロエ。

それじゃあなんで？シロエが言葉を繋げると、

ここで初めて奏の視線が明後日の方向を向く。頬ポリポリとかきいい淀みながら

「あー、うん。『アイツ』のためだよ。いや、違うな。『アイツ』が帰ってくる場所がこんななのってのは悲しいから、だな。自己満足だよ、自己満足。なんか文句あるか」

奏は視線を反らしたまま、なにかを誤魔化すように最後は食って掛かる。

シロエは知っている。奏が『アイツ』と呼ぶ『彼女』のことを。

「なにか方法はあるの？別に無策でアキバの街を変えようとなんて思ってるわけじゃないんでしょ？」

一步踏み出せないでいるくせに。シロエの心の中で自分で自分を責め立てる声が響く。

「ある」

そんなシロエを知ってか知らずか奏は間髪いれずに強気に即答する。

「まず、へD. D. D.に力を貸して貰う。仲間のお願いだったらあの鬼畜メガネも全面的に協力するだろ」

「そこから先は少しずつアキバの街の有力ギルドを落としていつて自治組織を作る。もちろん中小ギルドの代表たちも含めてな」

「！」

「仲間のお願いだ」その言葉がどういうことを指しているのかはすぐにわかった。

「テイラーパーティーの頃からの長い付き合いになるこの友人は自分と同じように一定の場所に留まることを避けていた。だがアキバの街を変えするために友人はギルドに参加しようとしているのだ。

自分がやつてもいいのかと足踏みしている問題を解決しようと

シロエと奏とは違ふ。それは当たり前だ。

奏はテイラーパーティーが解散してからもゲストとしてレイドに参加していた自分とは違つて長期間とはいえないまでもギルドに籍をおき色々なギルドを転々としてきた。

顔の広さもギルドに対する価値観も大きく違うのだろう。それでもいまままで避けてきた道を歩もうとする奏のことがシロエには衝撃的でしかなかった。

「別に無理強いはないからさ。お前が手伝いたいと思つたら手伝つてくれればいい。明日にでも返事を聞かせてくれよ」

奏はそういうと座っていた瓦礫から立ち上がり手をぶらぶらと振つて風の音だけが聞こえる街に消えていった。

「随分とシロエちにハツパをかけますにやー？奏ち」

「…師匠、趣味悪いよ？人の会話を盗み聞きなんて」

奏がシロエと別れすぐビルの瓦礫の影から奏の尊敬する猫人族の

紳士にやん太が微笑を浮かべながら現れる。

さつきまでのシロエとの会話を聞かれていたのかと思うとにやん太といえどちよつと気恥ずかしさを奏は覚える。

特に理由の部分は本当に聞かれたくなかった奏は不満たらたらににやん太に文句を言う。

「にやー。それはすみませんでしたにや。ついつい若者の青春話は年寄りには聞いていたくなるものなんですにや」

にやん太も文句を言われるのがわかっていたかのように笑みを浮かべたままに謝り、奏も本気で責めるわけもなくなし崩しに話題は移る。

「シロエは考え込みすぎなんだよ。まあ考える力を持った側の人間だからしょうがないっちゃーしょうがないんだけどさ、考えすぎて凝り固まつちやうときがたまにある。」

それをほぐしてやるのが俺や直継みたいなのなんだけどさ……」

「俺は背中を押せるほど言葉がないや」

シロエと親友である直継だったら背中を押すことはできるんだろう。

けど背中を押せるほどの人生経験もそれほどにお互いのことをこっと細かく理解し合える深い友情も奏は残念ながらないと思っている。

「そんなことはないと思いますにやー。」

十分にシロエちと奏ちは分かり合えていますにや。でも、自信がないなら今回は我輩が代わって押してきますかにや」

「もとからそのつもりだったんじゃないの?」

前半の言葉をスルーして代わりに押してやるというにやん太の言葉に茶々をいれる。

「若者の受難には言葉を紡いでやるのが大人というものですにや」

真面目に答えるにやん太は大人の余裕なのだろう。これだから敵わない。

ハツタリにブラフは専売特許だと自負する奏もこの余裕の前ではなんでも見透かされてしまっている。

「じゃあ、お任せしてもいいですか? 師匠」

「お任せされましたにや」

それじゃあ俺は酔いが覚めるまでちよつとそこら辺をフラフラしてから帰りますわ、とにやん太に話し奏はまた歩き出した。

その離れていく背中を見送るなか珍しく眉間にシワを寄せ言葉を漏らす。

「奏ちはできる子ですにや。奏ちが本気で向き合えることが、言葉を尽くせるようになることが、絶対に出来るようになりますにや」

自分の力では彼を導いてやることはできなかった。

それはどうしようもない事実であり、彼の姉からも言われた自他共に認める手に負えないものだ。

彼自信にしかあれは解決できない。

どうか彼があればに気づき強くなれることを願うことしか奏の尊敬する師匠とまで崇める、にやん太にはできないのだ。



師匠と別れた俺はフラフラとアキバの街を歩いて回った。次第に酔いも覚めてきて頭がスッキリとしてくる。わりと酒には強い方だ。

「さてと、シロエにあんだけ啖呵切ったんだからアキバの街をマジで落とさねえとな」

頭の中にあるアイデアをひとつひとつ整理していくやらなきやいけないことを優先順位をわけ手札を一枚一枚確認していく。

ハーメルンは潰す。新人プレイヤー集めて幽閉なんてゲームの風上にも置けん！年下虐めて何が楽しいんだよ。

「とりあえずは情報収集からだろ」

少し路線がずれかけたが路線を戻してはじめにやらなきやいけないことを口にだす。

念話のメニューを呼び出し上から四番目にある名前をタップし念話をかける。

数度のコール音のあとに通話状態に切り替わる。

「もっしもーし、ちよつと頼みたいことがあるんだけど」

『……』

返事が返ってこない。なんだ？繋がってるはずだけどな？

「もしもーし？おーい聞こえてんだろ？久し振りだからってシカトすんなよ」

『…今』

「ん？」

『…今、何時だと思ってる』

「あ…！えっと、夜中の2時頃かと」

『乙女の睡眠時間を邪魔するとか死んだ方がいいんじゃないか？』

「えっと、悪い。ちよつと今さっきまでパーティーだったもんだからハイになってたみたいで『言訳無用！』」

ブツツツ!!

キーンと耳鳴りを残すほどの大音量で怒鳴られて念話が切られる。

はああ…、初っぱなからしくじった、幸先悪いな。

「帰るか」

アキバの街改変計画一日目はこうしてずっこけながらスタートをきった。

—次の日—

祝宴の後片付けをした。アキバの街の改変なんてやってる暇なし。大忙しだったよ。

—その次の日—

アキバの街に帰ってきてからは毎日食べている〈三日月同盟〉での朝ごはんを今日も美味しく平らげ、朝の型稽古をする。

あちらの世界から続けている朝の日課だ。習慣というのはなかなか抜けないもので十年以上も続けていると実感するのだが俗に言う、やらないと逆に調子が出ないというのは本当のようだ。

本当は朝ごはんの前にやるんだが昨日が片付けを終えて疲れて寝過ごしてしまったから朝ごはんのあとに今日はする。

睡眠は大事、きちんと六時間以上は寝ましょう。

一昨日夜中に人を起こした奴の言うことじゃないのは自分でもよくわかってます。ハイ

日課を終えたところで〈三日月同盟〉にある人物が尋ねてきた

「よお、シロエ。おはよう」

「おはよう奏。マリ姉たちに会わせてもらっていいかな？」

シロエは昨日の夜みたいにな何かを迷っている感じは消え、なにがなんでも成し遂げようとする覚悟を感じさせた。へえ、さすが師匠。

「待つてろ。すぐ呼ぶよ」

昨日まではご馳走の食べ残しや酒瓶が転がっていた〈三日月同盟〉の会議室は、今や綺麗に片付けられて爽やかな空気を漂わせていた。

巨大なテーブルを囲むのは5人〈三日月同盟〉のギルマスであるマリエちゃん、会計を取り仕切るヘンリエッタさん、戦闘や狩りを面倒見ている小竜、実質的に〈三日月同盟〉を取り仕切る3人とその後ろで腕組みして壁に体を預けている俺、その向かい側に腰かけているのがシロエ

「今日はシロエさんからお話があるとかで」

「内容はうちらも聞いてへんのやけどね」

小竜が歳上のシロエに会釈をしながら会話を切り出し、それにマリエちゃんが続く。

対するシロエの表情は硬い。

愛嬌のある丸メガネも今は全く役に立たない程に今のシロエの目付きは鋭い。もともと凝視グセのあるシロエではあるがそれでも今はそれを踏まえても迫力を感じさせるのだから3人もなんとなく察してはいるんだろう

シロエが何か大切なことをしに来ているのは。

「お世話をかけます。先日の大宴会はありがとうございました。マリ姉も〈三日月同盟〉の皆さんも」

シロエの言葉にマリエちゃんはブンブンと手を振って気にせんと、言葉を返す。

ヘンリエッタさんもアカツキちゃんのことをすみずみまで堪能させてもらいましたとうっとりとした表情で逆にお礼を言う。

アカツキちゃん涙目だったよな。かわいそうだったな…。

挨拶もそこそこにシロエは本題に入る。

「知り合いの子ふたりがとあるギルドに勾留中というか、所属させられてます。そのふたりを助けたいと思ってます」

初心者の子の双子の姉弟。姉がミノリ、弟がトウヤというらしい。

シロエがへエルダーテイルがまだゲームだった頃に一時の間世話をしていた双子の姉弟が、へEX Pポットを新人プレイヤーから巻き上げて金に変えているへハーメルンにいる、らしい。

「だから、退場してもらおうと考えています。」

「退場って。潰すって意味ですか？PKでもしてプライドをへし折るとかそんなことじゃない…？その…。ギルドそのものを潰す。そんなことできるんですか？」

小竜がおずおずと声をあげる。まあ、普通は無理だわな。

ギルド解散は、ギルマスが解散決定をするかすべてのメンバーがギルドから脱退するかのとつちかだ。

ギルドを解散させるなど喧嘩の売り言葉や買い言葉、罵倒ぐらいにしか普通は聞かないもの。計画としては実行するには非現実的すぎる。

でも、

「いいえ、文字通りの意味です。アキバの街から退場してもらいます」
だよな。小竜の疑問は真つ向から否定された。

そのときシロエのうちにある強い決心が顔を覗かせたのを感じた。

「シロ坊…。シロ坊の気持ちはわかる。せやけど…、うち…。
いや、うちはな…。」

マリエちゃんは口ごもる。口から出ようとするのは謝罪の言葉だろう。

へハーメルンを潰すということが成功するかは置いておいて、その行為はへハーメルンのバックにいる大手ギルドを敵にまわすことになる。

どこにでもあるような規模の中小ギルドであるへ三日月同盟ではひとたまりもない。

ギルドマスターとしてシロエの願いを断ろうとしている。ヘンリエツタさんや小竜のギルドの幹部に言わせるんじゃないやなくてギルドマ

スターとして自らが。

けれどその言葉もシロエはきっぱりと遮る。

「マリ姉。悪いですが残りも言わせてください。これはまだ半分です。へハーメルンなんてもののついでです。そんなのじゃ足りない。まったく届きやしない。そこにいる奏はアキバの街を支配するとま
で言つてのけた」

「「えっ!?!」」

マリエちゃんたちは半信半疑の顔をして後ろを振り向き俺の顔をまじまじと見る。

ニヤリと笑みを返しほんとだよと伝える。

「でも、奏。君じゃ無理だ」

「ハイ?」

アレ?

「だから僕がアキバの街を掃除をする。だから奏は僕に力を貸してほしい」

俺の眼をじつと睨み付けるように見据えてそう強く宣言するシロエ。

そして数秒の空白の後にまたマリエさちゃんたちに語り出す。

「へハーメルンなんてもののついでです。ミノリとトウヤは友人だから助けます。」

けど、それさえもついでです。僕たちには他にやらなきゃいけないことがたくさんあるんです。

こんなことで時間をとられていいわけないですよ」

「異世界に飛ばされちゃってるんですよ僕たちは。力を合わせてサバイバルをしなきゃいけないこの状況を蹴飛ばしてまで、こんなカツコ悪いことをやりつづけるんですか?みんな、舐めてませんか。——異世界を甘く見すぎてます。必死さが足りなすぎる」

言葉も出なかった。

俺も含めてシロエを除く四人は凍りつかされた。若干一名は単純に自分じゃ無理と言われたからだが。

リスクはでかい、しかしリターンも飛躍的にでかくなった。

「この街全体を変える」そのリターンは、中小ギルドの地位向上だ。でも、これは、魂の問題だろ。

「うちは……」

「力を貸してください」

シロエが初めて頭を下げた。

「シロエ様？他のお仲間はどうなさいました？」

言葉を探すマリエちゃんを助けるようにヘンリエツタさんが口を挟む。直継やアカツキちゃんのことだろう。

「調査と準備にかかっています。挨拶が遅れてごめんなさい。僕シロエがギルドマスターとして、ギルドを結成しました。へ記録の地平線へってというのがその名前です。今のところは直継、アカツキ、にやん太、そして僕の4人がそのメンバーで、今回の任務は、その最初の^{ミッション}作戦になります」

「ギルド……作ったんや」

「はい。誘ってくれていたのに、すみません」

「ううん……」

「ううん。そんなん、謝ることない。そか。シロ坊……。おめでどうな？ギルド、作れたんや。シロ坊、作れたんやね。おうち、作れたんやね」

マリエちゃんの目には小さな涙の粒が見えた。

心の底から祝福している。そのことは奏は眼で見ることをしなくても十分に感じ取れた。

「マリエさん。……話だけ、聞いちゃダメかな？俺、興味ある。俺たちは街での活動も多いし、

やっぱりシロエさんの言う通り悪い雰囲気感じてきたよ。この街はずっとこのままいっちゃんのかと不安に思ってた」

小竜が言葉少なに意見を述べた。ヘンリエツタも言葉を添えた。

「ええ、協力できるかは手法によります。まったく目処こが立たない計画には乗るわけには参りませんでしょう？シロエ様」

二人の言葉に後押しされるたマリエちゃんも「シロ坊、話してや」と

促した。

そこから語られたシロエの作戦は慣れている俺でさえも驚かざるおえない驚天動地の奇策だったがそれでこそ腹黒メガネといえるものだった。

これならわかる。俺じゃ無理だわ。成功率が違いすぎる。

そしてマリエちゃんの答えは、

「うちら〈三日月同盟〉はシロ坊の作戦に乗る」

―アキバの街改変計画改め、アキバの街の大掃除計画始動―

第九話 動き出す腹黒と高笑いと 遊び心を忘れずに

「でだよシロエ君。お前さんの作戦には恐れ入ったけど、なして俺じや無理と言いつけるんだよ？そこんとこ解説プリーズ」

シロエの交渉も終わり、今、この会議室にはシロエと俺のふたりしかいない。

マリエちゃんたちは〈三日月同盟〉の他のメンバーにシロエに力を貸すことを説明するために会議室を出ていった。

「うん？そんなの簡単だよ。奏の作戦じゃ〈D・D・D〉に力が片寄りすぎるんだよ。多分奏が思い描くような議会制にはならないんじゃないかな？」

強制力がないんだよ。独裁をするためには」

「いや、別に俺は独裁をしたいわけじゃ…」

「支配するとか言ってたじゃん」

「言葉のあやだよワトソン君」

「ほんとかなー？」

何か知ったような顔をして顔をニヤけさせるシロエ。コイツなにをよからぬ妄想をしてやがる。

別に自治組織のトップに立ってるのカッコいいとか短絡的なこと考えてないぞ俺は。

「奏、〈記録の地平線〉に入らない？」

「〈D・D・D〉に入る必要もなくなったんだしさ。僕は君とも一緒のギルドでいたい。僕と一緒に来てくれないかな？」

「おっおう…。お前よくそんな恥ずかしい台詞を面と向かって言えるな。そういうのは女の子に、アカツキちゃんとかに言ってみてやれよ」

コイツ妙なところで図太いよ。

この前みたい悩み続けて身動きがとれなくなってた顔はどこへやらスツキリと付き物が落ちたように顔で眼をじっと見つめるシロエに俺は若干引いてしまう。

本人は真面目に言ってるんだらうけどなんかすぐむず痒い。プロポーズの台詞みたいじゃん。

「なっ!? 僕だってそんな深い意味で言ってるわけじゃないよっ。ていうかつなんでアカツキのことが出てくるのさっ!」

「そりゃあ、あんな純粹で綺麗な色をもってる娘が主君って慕ってくれているんだよ? どんなことしたかは知らないけど、フラグ、立っているとします」

決め顔でビシリと指を指して声をあげる。

「そんなわけないって。アカツキはほら、ゲームの頃からロールプレイしてるからさ、僕を主なんて呼ぶのもロールプレイの一貫だよ。そんな僕のが好きだなんてないない」

そんなことあり得ないといった顔をしてシロエは真っ向から否定する。

「どうだかなー? 惚れてるうんぬんは置いておいてもアカツキちゃんがシロエのことをよく思ってるのは確かだと思うけどな」。

「それより、ほら、返事を聞かせてよ」

「あんなプロポーズみたいな台詞言われちゃったからなく」

「あくっもう掘り返さないでっ」

「うん。入らないよ♡」

「ごめんなさい。シロエ君とは、そのくお友達のままだったほうが…いいと思うの…なんていうかシロエ君とはそういう関係でいたくないっていうか」

「あっ! 別にシロエ君のことが嫌いってわけじゃないんだよ。でも…その、ね?」

「変な断り方しないでよっ!! なんか僕が結婚を前提でもいけるとか勘違いして告白してフラれたうえにもものすごい気まずい空気になってそれ以降の関係がなくなっちゃう憐れなやつみたいじゃないか!」

「妙に例えが具体的だな」

「えっ? 奏、君前回のループじゃ普通に入ってくれてたじゃないか。僕が誘う前に委細承知なんてカッコいいこといって入ってくれたじゃないか」

「こら。前回のループとか言うな。メタいだらうが。いやさ、実を言うと俺先にマリエちゃんに誘われてるんだよね。〈三日月同盟〉には散々お世話になってるし、千葉もいるし。家族ができるだけ一緒にいようとするのは普通だろ？」

「だから、俺は〈三日月同盟〉に入りまーす」

シロエの奏勧誘はあっさりとしかしきつぱりと交渉の余地なく失敗した。



シロエを俺がフったその後、とりあえず納得したシロエは気持ちを切り替えてこれから行われる一大作戦に向けて準備を始めた。俺もそれを手伝う。

コン コン コン

会議室の木のドアをノックする高い音が反響す

「兄さーん、お客さんだよ」

千葉がドアを少し開けて顔と肩だけを覗かせる。

俺にお客？

俺がアキバの街に帰ってきてるなんて知ってる奴あんまりいないけどな？三佐さんとかリーゼちゃんかな？

「誰？俺に会いに来る奴なんて今は全然いないだろ」

「んっふふふー。懐かしい顔だよ。兄さんも会ってみたらビックリすると思うな」

千葉は嬉しそうに髪をピコピコと揺らしそう言い張る。んー、誰だ？心当たりが見つかからない。

三佐さんたちだったらこの前会ったばかりだもんな。まあ、行ってみればわかるだろう。

「悪いシロエちよつと席はずすぞ」

「オツケー。いってらっしやい」

席を立ち、千葉の背中を追って廊下を歩く。

マリエちゃんとヘンリエツタさんに説明を受けたのであるうへ三日

月同盟のメンバーたちはみんな廊下を忙しく走り回っている。

俺とシロエ同様に準備に取りかかり始めているのだろう。はて？こんな慌ただしい中でも平然と俺を待たせられるほど凶太い奴は俺の知り合いに……多すぎるな。大概が肝が座ってる野郎に女性に一杯だ。特定出来ないわ。

そんなことを考えながら廊下を歩けばすぐに客間の扉の前に行き着き、

「お待ちせしました、ってなんだクインかよ」

来客用のソファに座っていたのは真つ赤なスプリングコートにデニムのパンツ黒のニーソックスそして真つ赤なブーツと街で見れば視線を引っ張り引張られてしまうほど派手な衣装に身を包んでいる少女だった。

しかしそれさえも追記としてしか役割を成さないほど少女は超がつくほどの美少女だった。

艶のある短い黒髪、アイドルやモデルのように大きな銀色の眼、リングのように紅くそして潤った唇、ガラス細工のように細い手足、透き通る白い肌。

身長は女性としては平均的は身長しかなさそうではあるが十分に十人中十人が美少女と答える整った容姿をした少女だった。

〈エルダーテイル〉のアバターの容姿に現実世界の容姿が取り込まれるような形になっている今の世界ではあるが、もとの世界でもこの少女は超のつくほど美少女であることは疑うべくもないだろう。

そんな、クインと呼ばれた少女は奏が入ってきたのを一瞥すると、

「ば奏!!お前っ!私に一昨日なんであのあと念話してこなかった!!お陰で私は寝不足だっ!!」

大声で怒鳴り散らした

「えっ、なんでっっておもいっつきり念話ぶち切られたから怒ってるかなと思って」

「知らんわ!普通すぐに掛け直すだろうがっ!!私あのあと三時間も起きてたんだぞうっ!奏がかけ直してくると思って!」

「次の日も、ああやっぱり昨日はちよつとかけ直しづらかったよな、とか思つてずつと待つてたのに…こないじゃないかっ!!お陰ではぼ二徹夜だよっ!」

クインは捲し立てるように叫ぶ。

よく見ると確かに目の下に黒いクマができていた。

「クイン…お前いい奴だなあ」

「ごめん、俺お前のこと先輩のこと呼び捨てにするちよつと生意気な痛い美少女かと思つてた」

「貶すか褒めるかどつちかにしろ!」

「というか今カミングアウトすることじゃないだろっ!」

文句を言う調子のままにペースを落とさずに更に怒つたようにツツコミを入れるクイン。

「悪かった。悪かつたつて。謝るから許してくれ」

「謝つて許されるんだつたら衛兵はいらんよ!どうせ、私のことなど都合のいい…その…もによもによ…程度にしか…」

「恥ずかしいなら「自分に惚れてる都合のいい女と勘違いしてる」とか言おうとしてんじゃねえよ!わかつてるわ!恋愛耐性マイナス女!」

「ちつ違う!!わっ私は「呼ばれればどこにでも来て言うことをきいちゃうことが嫌だけど嬉しく感じちゃうてる奴隷みたいな女」と言おうとしたんだつ!!」

「なとお悪いわくく!!」

「ああつもう。もういい逆に私が恥ずかしくなつてきた」

「俺は一つも恥ずかしいことないけどな」

「この目の前に腕を組んでない胸を無駄に強調させている「何かいつたか?」…美少女はクイン。」

一応、俺のあつちの世界での高校時代、後輩だった奴だ。

見た目はいいんだがいかんせんこういう性格だ大概の人は見た目に騙されて近づくが性格を知つてドン引きする。自信過剰でナルシスト。でも根はいい奴なんだけどな。

「クイン、依頼がある」

「…ふむ。いいだろう。話を聞かせてくれ、奏殿」

一時の空白の後にクインは銀縁の眼鏡を懐から取り出しかけると抑揚のない冷静な声色で先を促してきた。

さつきまでの赤面は嘘のようだ。…いや、まだちよつとだけ顔が赤い。

「お前にしてはやけに簡単に引き下がるな…なんか恐いんだけど」

「プライベートと仕事をわけることくらい弁えているさ。今は奏殿が依頼人で私は探偵だ

サブマスとしての沽券にも関わるしな」

探偵。

こいつの所属しているギルドへモルグ街の安楽椅子へは情報屋ギルドだ。

レイドの調査からアイテムの情報、クエスト情報、果ては個人のプレイヤーの情報までどんな情報でも依頼を受ければ調べあげるアキバーの情報収集ギルド。

それが目の前にいる不敵な笑みを浮かべる少女の居所だ。

「…ん？サブマス？今、

お前サブマスって言った？」

「そうだが？ギルマスがへ大災害の時にログインしてなくて繰り上げで私がサブギルドマスターになりましたが？どうだ！まいったか」

「まいるかよ。バカ。お前、完つ全にそれ自慢したかったから言っただろ。公私駄々混ぜじゃねえか。」

「質問されたから質問の答えを返したただけだよ。奏」

「嘘だな。呼び方が奏殿じゃねーぞ」

仕事の時は奏殿、プライベートは奏で呼び捨てだからなコイツ。俺、先輩なのに。別に気にしてないけど。

「そっか、シャーロックさんほログアウトしましたってことか」

「幸か不幸かな。いや、幸の方なんだろうな」

クインは何気なしに語る。幸か不幸か…ね。

人それぞれなんだろうな。そういうのは、特にこれから先は。

「お前はこっちにきて不幸だと思うのか？」

「うーん。不幸なんじゃないかな？」

ご飯は美味しくないし、街を出れば得体のしれないモンスターの巢窟、仲間の人間は三万人程度、しかも東西南北分断されてるときた。帰る方法も解らない。街の治安も最悪。この世界に来たのは不幸だと思うよ」

出るわ出るわ。不満の言葉。聞いてて嫌になる。

でも……とクインは否定の言葉を紡ぐ。

「これから先まで不幸とは限らない」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべて自信満々に何の根拠があるのかさも当たり前のように話す。

俺はコイツのこういうところ嫌い、そして好きでもある。

「さっきと依頼を話せ。奏殿。何かしでかすつもりなのだろう？ネタは上がっているぞ」

「ははっ。そうだな。本筋に話を戻そう。お前に依頼したいのは三つだ。

まず一つ目だが…」

クインの正面のソファーに腰を下ろして依頼を語り始める。

下準備はこれからだ。成功するかはわからない。それでも確実に一歩一歩進み大きな変革を起こして見せよう。

第十話 革命の風

シロエとマリエールたちの会合より4日の準備期間を経て作戦は実行に移された。

タイトなんて言葉が生ぬるいほどの過密なスケジュールのもとに作戦に参加した〈三日月同盟〉、〈記録の地平線〉のメンバーは全員が忙殺されてはそれぞれの叱咤激励にゾンビのように復活させられを繰り返し幾度とない死線を経験した。

中心となつてスケジュールを組み立てたマリエール、シロエ、ヘンリエッタはそれぞれその功績を擦り付けあっていたが奏や千葉らのまだ文句を言う気力と体力の残っているメンバーからしたら『お前らそんなことする暇あるなら少しでも量を減らしてくれ』と言いたいところだった。

実際には、この三人も他のメンバーに負けずとも劣らずどころかかなりの量の仕事をこなしているのだがそういうのはわかっているも言ってしまうものなのだった。

とにかく全員が少なからずの死線を経験したものの奇跡的にスケジュールは何の遅れもなくやり遂げられ作戦結構の朝を参加者全員が迎えた。

その朝。午前7時といったところだろうか。

アキバの街の3ヶ所に派手な登りを建てたこじんまりとした飲食店が開店した。

アキバの街の住民は飲食店を出すなんておかしな店もあるもんだと奇異な目でそれを見つめていた。

それもそのはず、今の料理には味がない。

材料さえあればメニュー画面のワンタップでももの十秒でできてしまう。

幸いにも栄養は摂取できるとわかっているから、今は市場に流れているのは値下げ合戦の末の安い味のない料理。

それなのに、店のメニューを見る限り今の市場ではどれも割高と

言っていくらしいの値段設定。

なにより店売りというのは食べる人の顔が見えてしまう。本来だったら美味しいと顔を綻ばせているのを見たいのに料理は味のないふやけた煎餅の味、まるで道端の石ころを見るように、ましてや憎々しげに見られるのだから店売りが減るのも当たり前なのだ。

そんな中での出店。

妙な注目を浴びるのも当たり前前である。

「うーん！いい朝だね♪絶好の開店日和だ」

背筋をぐーつと伸ばして背伸びをし店の前でそう言うのは黒髪の青年。普段は神祇官らしく和装をする彼も今日ばかりは珍しくも暖色の軽食店らしい制服に身を包んでいる。

三店舗あるへ軽食販売店クレセントムーン<の一つの店長に収まっている。

周囲では他の従業員であるメンバーが準備を済ませて続々と集まってくる。

「奏さん、商品の運び込み終わりました」

「おっけ。じゃあやるとしますか」

最後の準備完了の報告を副店長の明日架から受けメンバーを全員を見渡す。

「みんな、急ピッチの準備お疲れ様。でもここからが本番だ。これながら二歩目だ。絶対これは売れる。というか売れないわけがない。気合い入れて全部売っばらうぞー!!」

「！！「おおー！！！！」」

掛け声を上げて気合いを全員が入れ、それぞれの持ち場へとついでいく。

厨房の方からジュウジュウと肉の焼ける音が聞こえ始め香ばしい肉の匂いが周囲に漂い始める。

その匂いに惹き付けられてか広場を遠巻きに見るアキバの住人たちが集まり始める。

「味のない寂しい料理にガツカリしてるそのアナタ！そんなアナタに嬉しい朗報！」

肉汁タツプリのカリカリチキン！

甘辛なソースと肉、パリパリのレタスをあわせたクレセントバーガー！

爽やかな薔薇の香りが薫るブラックローズテイー！

どれも絶品の旨さ！

騙されたと思って買って買って！早く買わないと売り切れちゃうかもよ！」

大きな声を上げて奏が遠巻きに見つめる住民たちに呼び掛ける。

何人かが押し合うようにして面白半分で買えよ買えよと話し合っている。

(あともうひと押しだ)

「クレセントバーガーとブラックローズテイー、一つずつ買えますか？」

一人の女性が奏に話しかけてきた。記念すべき一人目のお客様だ。

「ご注文ありがとうございます。クレセントバーガーとブラックローズテイーのご注文入りましたー！」

「それでは少々お待ちを」

1分と経たないうちに飛燕が似合わないエプロンを着けてクレセントバーガーとブラックローズテイーを運んできた。

なんでコイツに持ってこさせたし…、心の中で悪態をついたのは奏の秘密だ。

裏では緊張した面々の他のメンバーがいて年長組の飛燕が嫌々ながらも一番槍を買ってでたのは飛燕の秘密だ。

なんだかんだと口の悪く覇気のない飛燕であるがそれなりの年上としての自覚はないこともないのである。

奏もそれはある程度察しはついていたが明日架に持ってこさせろよというのが本音である。

目付きの悪い男より可愛い女の子がいると印象づける方が絶対にいるのだから。

明日架としては飛燕がわざわざ自分から一番槍を買ってでたのが嬉しく譲ったのだろうかそれがご愛嬌とする他ない。

一口。女性がクレセントバーガーを口につけた。

周りでは野次馬根性丸出しのギャラリーがどうだどうだと見つめる。

二口。三口。四口。

女性は黙々とハンバーガーにかぶりつく。

つーつと女性の頬を涙が流れた。

「美味しい…おいしいよお〜」

ポロポロと涙を流してハンバーガーにかぶりつく。女性としての恥ずかしさなど感じなかった。

そんなことよりも今はこの幸せを噛み締めたかった。

そこから先はあつという間だった。

それを見ていた住人たちは本当に味のある料理なのだとして続けに俺にも、私にも、とへクレセントムーンを求めた。

その場にいた者たちの受けた衝撃は一時間と経たずにアキバの街を駆け抜けた。

へ軽食販売店クレセントムーンはアキバの街の最新の神話となった。



「迫真の演技だったな。クイン。お前もう探偵じゃなくて女優にでもなった方がいいんじゃないか？」

「ばか言え。あんなの探偵の基本スキルだ。そして私は女優なんてなれない」

今日のへ軽食販売店クレセントムーンの営業を終え、へ三日月同盟のギルドホームに帰ってきた俺たちは各々自由時間としていた。明日の準備もあるのだが、年長組以外は疲れ果ててダウンしてしまっただのだ。

死線と言ってもいいくらいの忙しさだったもんな。アキバの街のほとんどがお客として来たんじゃないかというくらい来たしな。

疲れるのも無理はない。かくいう俺も疲れた。

今は美少女（笑）と雑談して宛にならない体力回復をはかっている

ところだ。

そして、その美少女（笑）がなぜここにいるかというところ、俺の店に来て最初に注文した女性。

アレ、クインなのだ。

ギャラリーに一步踏ん切りをつかせるために一芝居をうたせてもらったのだ。

お陰でたったの四時間でブラックローズティーを除いて全品完売。

おまけにまだまだ潜在顧客数はいると見えるのだから伸びしろがある。人手が足りるかどうかはわからないが。

「わかった。キスシーンがダメとか言うんだろ？」

「あつあたりまえだっ!!。キスシーンなんかできるかっ!。だけど奏、もつと重大なことがある」

「なに? まだあんの? さすがに手が繋げないとかはなしだぞ」

「そこまでいったら逆に尊敬するけどな。どんだけ貞操観念強いんだよ。」

「さすがにそこまではないよ。赤面しっぱなしになるくらいだろう」

「わりとアウトなラインだな」

「不適な笑みしか練習したことないから自然な笑顔ができない…」

「コミュ障かっ!!」

自然な笑顔がつかれないって…。

そういうえばコイツの女の子らしい笑顔とかあんまり見たことないよ。いつも小バカにする笑みか自信タツプリの不適な笑みばかりだ。

「クイン、一回笑ってみろ」

「こっ…こっ…こうか?」

ニタアア…、なんて効果音がつきそうな不自然すぎる笑顔を作らせるクイン。

ヤベエ…これは正直ひくわ。不自然すぎてバカにされてるみたいだ。

「今、ひいたな…?」

「ひいてない。ひいてない。普通だって。大丈夫大丈夫。トテモ魅力

的な笑顔。惚れちまうヨ」

「目を下に逸らしながら言われても説得力なさすぎるんだよ!!バレバレの優しさを見せるな!わかってるんだよ私だって!」

こんな風に雑談をしていると疲れはてたマリエちゃんが書類机からベターと体を預けたままに顔だけこちらに向けてニコニコとし、

「仲いいなー。二人とも」

「普通だ」

「息ぴったりでそんなこと言ってもあまり説得力はありませんわ」

「おろ?・ヘンリエツタさん集計終わったの?」

「どないやった?売り上げはっ!」

こういうところは関西人の血だな。瞳を輝かせて尋ねるマリエちゃん。

「売り上げは金貨4万3776枚。来場者数は1159人、客単価はおおよそ金貨38枚です。用意したクレセントバーガー及びスパークレセントバーガーは完売。その他のアイテムもブラックローズティーを除いて完売しまし」

「すごいねっ!えらいことやんねーっ!金貨4万枚いうたら、えーつと、うちのギルドの月間予算の……」

「40倍」

「そう、40倍やん!!大儲けやんね。この調子でいけば目標金額まであつという間に達成やん!」

「いや、無理だからマリエちゃん。目標金額金貨500万枚だつちゅーに」

「そうですよ…マリ姉。だってそれじゃあ単純に計算して120日、3ヶ月もかかるじゃないですか」

俺とシロエがマリエちゃんの言葉に口を挟む。というかシロエ、お前いたんだな。気づかなかったわ。

「いや、でもお客さんにいっぱいごめんなさいしたで?売ろうと思えば欲しい人はまだまだいるん。だからもつと仕入れてさ」

マリエちゃんの言葉をシロエは片手を上げて遮り反論する。

「潜在顧客数はおそらく数万人を越えますよ。このアキバの街の住人ですら1万5000人以上のプレイヤーがいるし。でも問題はそこじゃないんです。〈三日月同盟〉のメンバーからくる、店舗数と用意できる商材の量なんです」

「そうなん？」

「いまいち理解ができてないんだろ？な、困ったように首を少し傾げている。」

「だいたい〈三日月同盟〉の規模の人手では、本日の来客者数とほぼ等しい1000人ちよつとが捌ける限界でしょうね」

「ヘンリエツタさんが困っているマリエちゃんに助け船を出してやる。」

その指摘に残念そうな表情で、そうなんかと眉をしかめるが、すぐに気を取り直して切り返す。

「ほいじゃ、人増やすのはどう？いまならギルドメンバーも集められる思うんよ。なんてたってアキバの街の急成長株、奇跡の軽食クレセントムーンバーガー総本店やもん。なあ？」

「それはあまり得策ではないと思うぞマリエル殿」

「今度はクインがマリエちゃんの発言に待ったをかける。なんかダメ出しされっぱなしでマリエちゃん可哀想になってきたな。」

「今、メンバー募集なんてかけようものなら入ってくるのはスパイの連中ばかりだと思っぞ。この忙しい時期にそんな愚か者どもの相手なんてやってられんだろう。うちのギルメンを貸しても構わないが、まあ、あまり〈三日月同盟〉のメンバー以外ににホイホイと教えて良いものではないだろう。私の隣に座ってるバカがやってみたいたいな」

「そうかあと溜め息をつくマリエちゃん。が、それよりも…」

「誰がバカだ、誰が。お前俺の紹介がなかったらクレセントムーンの行列に並ぶことになってたんだぞ。感謝しろよ」

「しらんわ。アホ」

「ペーと舌を出して小バカにしてくるクイン。このくそアマア。思い出したように俺をバカにしてきやがって」

「あはは……。それじゃあクインさんはこのまま手伝ってもらえるってことでいいのかな？」

「ああ。ギルマスから許可はもらっている。〈モルグ街の安楽椅子〉はこの作戦に全面的に協力すると思ってもらって構わんよ。シロ工殿」
「ありがたい。それじゃあ次のステップに移りましょう。マリ姉とヘンリエッタさんは交渉の準備に入ってもらっていいですか？」

「やっぱリアレやるん？ウチあんまり数字のことは得意やないんやけど……」

「マリエちゃんが困り顔でシロ工にそう尋ねる。」

「大丈夫ですわ。私もバックアップにまわりますし。なによりこれに乗ってこない頭の中がお花畑な商人なんていませんわ」

「そうそう、勝手に勘違いしてあっちがお金出してくれるように仕向けるだけだから」

「これから相手取るのは三大生産系ギルド、〈海洋機構〉、〈ロデリック商会〉、〈第八商店街〉、どこも〈三日月同盟〉とは比べようもないほどの規模の人手を持った大手ギルドだ。」

「そこから俺たちは、金貨450万枚をもらい受ける。」

第十一話 姫と剣聖

月が美しくツタに覆われた旧神代のコンクリートを照らすアキバの街の外れ、昼間の熱気を未だに残す乾いた風は光虫が飛び交うプラットホームを過ぎていく。

そこはアキバの街の中央広場まで見下ろせる高架の上に長さ200メートルほどのコンクリートの台地。

地面のコンクリートほびび割れ路線や支柱は錆び果て苔むし旧時代の面影も全く感じるできない。

プラットホームを挟むように建っていた大きな柱も僅かな名残を残しつつ途中でボツキリと折れた状態で槍のように倒れるときを待っていた。

そんな中に月の光がつくる3つの長い影法師があった。

1つは大きな白いコートに、キラリと妖しく光るメガネがトレードマークの腹黒メガネことシロエ。

1つは3つの影のなかでもっとも長い影を持つ猫人族のご意見番にして胃袋を掴む料理人、にゃん太。

最後の1つは、腰にも届くほどの長い絹のような黒髪を下の方で結い、動きやすいように改造され扇情的に胸元や足を除かせる翠の改造和服を着た千菜。

それぞれのにゃん太との組み合わせは見ることもシロエと千菜という組み合わせはなかなか見ることのない珍しい組み合わせの三人組であった。

「随分と浮かない顔ねシロエメガネ」

「メガネがまるで本体かのように呼ばないでくれるかな…。というかなぜ姫モード？」

シロエは顔を軽くしかめながら悪態とも言えない文句を千菜へと返す。言っても無駄だということとはわかつている。

「ソウジロウと会うからよ」

「？」

「それよりも姫の質問に答えなさいな。質問を質問で返すのは愚か者

のすることよ。なぜそんな渋柿のような顔をしているの?」

「渋柿のような顔って…」

集中状態、戦闘状態、

普段とはスイツチを入れ換える時に入る千菜の通称姫モードはハッキリ言って奏とにゃん太ともう一人の人物除いて相手するとき以外はかなり毒を吐くし雰囲気もガラリと変わって怖い。

シロエも最初はかなり面食らったものだ。

何か怒らせることをしたのかと胃をキリキリと痛め奏に聞いてみたら、アレはああいうもんだけどら気にすんなど呆気なく解決したのだ。

本人に聞いてみても、ああ〜ゴメンねシロエさん。私アレに入っちゃうとちよつと口が悪くって、といつも通りの明るい弾んだ声で謝られてしまったのだからアレはちよつとどころじゃなかったよなどと言葉を口にすることも出来なかった。

「シロエちはソウジっちに会うのが気が進まないのですかにゃ」

「あー。ん……」

にゃん太からの言葉に少しだけ思考を巡らせるシロエ。

「気が進まない訳じゃないよ。ちよつとぼつが悪いだけ。ほら、ソウジロウがギルド立ち上げる時に僕も誘われたからさ。気まずいっていうヤツかな」

「にゃん太班長と千菜は誘われなかったの?」

「その時期は吾が輩はログインが不安定だったのかと思うのです。誘われた記憶がないですにゃ」

「姫は断ったわ。〈三日月同盟〉に入るつもりだったし。兄さんは一時の間はいたみたいだけど」

「そっか……」

待ち合わせの相手はソウジロウとセタ。

デボーチエリ・テイパーテイ

〈放蕩者の茶会〉にいた千菜と同じ〈武士〉サムライにして千菜の対極にあたる

〈剣聖〉。この世界にいる

デボーチエリ・テイパーテイ

〈放蕩者の茶会〉出身者10人のうちの1

人だった。

〈剣聖〉であるソウジロウは〈武士〉サムライの中でも打刀と呼ばれる速度と

取り回しを重視した技量を振るいやすい刀の達人だった。

そして達人の対となるように千葉は天才だった。

圧倒的な破壊力の中に美しさを見いださせ、呼吸を忘れるほどに壮観な千葉の剛に対してソウジロウは優雅さの中に斬撃を隠すことのできる彼の技は、目を凝らしていても捕捉することは困難な柔だ。

千葉が巨木をも越える巨人を叩き斬り、いかなる攻撃も力づくでねじ伏せるのであればソウジロウは巨木をもへし折る巨人の一撃を受け流し、鉄槌をも防ぐ砂蟲の装甲も無意味化した。

まさに対極と言つていい〈サムライ武士〉であつた。

直継がゲームから去り、時を同じくしてやはり個人的な事情で何人かの仲間がへエルダーテイル〉というゲームから去つた。

そんな中でソウジロウはへエルダーテイル〉を去らなかつたメンバーの筆頭だつた。

「デボーチエリ・ティーパーティ放蕩者の茶会〉を無駄にはしたくない」。そういつてソウジロウは〈デボーチエリ・ティーパーティ西風の旅団〉というギルドを立ち上げた。

残つた〈デボーチエリ・ティーパーティ放蕩者の茶会〉のメンバーを誘つた上でだ。

しかし〈デボーチエリ・ティーパーティ放蕩者の茶会〉はギルドではなくただの集団でしかなかつたし、そこに集まる人間はハッキリ言つて自由人、放蕩者と言つてもよかつた人間が多かつた。

ソウジロウのギルドに参加した者も数人いたが断つたプレイヤーもいたのだ。

「呆れた。そんなことで会うのが気まずいなんて、これだからモヤシは。あの理想系ハーレム男子がそんなことで腹を立てるわけがないじゃない。アナタとは甲斐性が違うのよ」

「うぐっ…」

辛辣だが的を射てしまつてる言葉がシロエの胸に突き刺さる。

「今は昔と違うんでしょ？ 一歩自分から進むことを決めただつたらしゃんとしなさい。男なんだから」

「千にやちの言う通りですよ。あまり悩まぬことですよ。シロエちはもはや我々の縁側の大家なのです。胸を張つて堂々としていてもらわねば」

千菜とにやん太の言葉にそういえばそうだった、とシロエは思い直す。

ソウジロウが自らの居場所として〈西風の旅団〉というギルドを作り守ってきたように、シロエも新しい居場所を作ることになったのだ。いつまでも思い悩んでばかりはいられない。

「こんばんわ。お久しぶりです、シロ先輩。にやん太老師。それに千菜さんも。奏さんは…いないみたいですね…」

近づいてきた人影はまだ距離があるうちから声をかけてきた。ソウジロウの幼い表情にそういえばこの中の誰よりも年下だったとシロエは思い出す。

「ご無沙汰。ソウジロウ」

「ご無沙汰にやー。ソウジっちは元気でやってたかにやー？」

「相変わらずの緩んだ顔ね。その顔で今は何人侍らかしてるのかしら？ソウジロウ」

近況報告も懐かしい会話もそこそこにズバリと際どいところに一太刀浴びせる千菜。

シロエは姫モードの千菜のこういうところがぶっちやけ怖い。兄妹揃って物怖じも遠慮も身内に限らずしなさすぎるのだ。

その原因であろう人物を知ってしまったているシロエはもう受け入れるしかないと納得せざるをえないのだからやるせない。

「え？あ……。ええ〜と」

そつとソウジロウは片手を上げて親指だけを折る。

「なるほど。その10倍以上はいるわね」

「そんなにいませんよっ！そんなことよりですねっ。どうしたんですか？シロ先輩から呼び出しなんて。ボクはシロ先輩は、千菜さんと奏さんにも嫌われてるんだと思ってましたよ」

「え、なぜ？」

予想外の言葉にシロエは真顔で問い返してしまう。

「いや、その……僕、ハーレム体質だから」

赤くなつて口ごもるソウジロウに、シロエは返す言葉もない。にやん太は大きな声でからからと笑っている。直継であればすかさず

ツツコミチヨップを入れていたことだろう。

「アナタたち先輩後輩は1日に何度私を呆れさせるのよ。確かに私はアナタのことが好きではないわ。兄さんは知らないけど。でも好きではないからって兄さんも私もアナタのことが嫌いというわけでもないのよ。アナタに惚れな^いための姫モードだしね。そうでしょ？ シロエ」

「そうだね。そんなことで嫌ったりするわけない。僕たちは^{テイラーバーテイ}茶会^の仲間だったんだぞ。

それに奏も姫モードの千葉も重度のツンデレなんだから態度と気持ちがちが逆なんて日常茶飯事だよ」

「誰がツンデレよっ!!別に私はそんな属性なんて持ってないんだからねっ!」

その台詞がどうしようもなくツンデレのテンプレートであることに千葉は気づいていない。

「ふふっ。そうですね。じゃあ、今回はどんなご用件で?」

「待ちなさいソウジロウ、兄さんはともかく姫はツンデレなんかではないわよ。勘違いしたまま話を進めようとししないで」

「単刀直入に言うと、力を借りたい」

「どんな力でしよう?」

「ソウジっちは今のアキバをどう思いますかにや?」

「この街、ですか。抽象的ですね……。それはやっぱり、いろいろと辛いと思いますよ。この街に限らずですけど、この世界すべてが考えたようによつては牢獄じゃないですか」

ソウジロウは髪のをかきあげる。武士風の長いポニーテールがホーム上の風に揺られてたなびく。

「牢獄ねえ…いい得て妙ね。」

ソウジロウの話の後ろで何度も話を聞くと文句を言っていた千葉もこのまま無視され続けるなど理解して諦めてソウジロウの言葉に同意を示す。

「だから辛いんですよね、良くないと思います。こういう状況だと弱

いものいじめにも走っちゃいますしね。実を言うとうちのギルドでも具体的な話じゃないんですけどもう街を出ようなんて話も上がってしまってるくらいですし」

「アキバ、出ていくの？」

「いえ、そんな話もあるっただけで。ただ、やっぱり街の雰囲気はだんだん荒んでいくのは見てて辛いですよ。なんにもできないですし」

（なんにもできない…ね。責任放棄じゃあないんでしょね。ソウジロウはなにかしようとして可能性を検討した末にできないという結論が出てしまった。つていうところかしらね。

兄さんみたいに見える訳じゃなくてもこれくらいは判るわ。なんだかんだで長い付き合いっていうことかしらね。やんなっちゃう）

千葉がそんなことを考えているとシロエは強い意思を込めて言葉を紡いだ。

「なんとかする手がある」

「本当ですか？シロ先輩っ」

「……と思う」

保証のできないことにしかついでこないヤツはあの〈茶会テイパーテイ〉では臆病者であって仲間ではない。保証のできない言葉を仲間には使え。皮肉好きなの召喚術師サモナーがそんなことを昔言っていた。

最初は何を言っただコイツと千葉は思っていたが、今ならなんとなく納得できる気がする。

シロエは強い意思を目に灯してソウジロウとの目に視線を合わせる。ここで向き合うことをサボってはいけない。

「ソウジロウだけじゃなくて〈西風の旅団〉の力も借りたい」

ソウジロウは〈西風の旅団〉を生み出し守るためにしかるべき愛情と労力を支払ってきている。その力を借りるために目をそらすわけにはいかない。そうシロエは考えている。

「ひとつには今のアキバの雰囲気は良くないってことを周囲に話してほしい。このままじゃ荒んでしまう、って。誰かが言葉を口にするのが大事だと思うんだ。〈西風の旅団〉がそう思っている、もしかしたら動くかもしれないと思わせるだけでも十分に効果がある。もうひ

とつは、あと数日したら招待状が届くと思う。できればその日まではアキバの街にいてほしい。会議の招待状だ。その会議で、なんらかの決着をつけたいと思う」

「わかりました」

ソウジロウはけろりとした顔で考えることもなく即答する。

「いいの？経緯とか作戦とか聞かなくて、腹黒メガネの立案よ？どんなレートの高い賭け吹っ掛けられるかわからないのよ？」

「僕をなんだと思ってるのさ。否定はしないけど」

「だってシロ先輩忙しいでしょ？そんなことで時間とらせちや申し訳ないですよ。それに僕は千葉さんと違って頭がそこまで回らない前衛バカですから茶会^{ティーパーティー}一番の参謀の立案を聞いたからって、半分もわかりません」

「それに奏さんも作戦に参加してるんでしよう？」

バックアップを奏さんが務めてるんだったら失敗するわけないじゃないですか。あの人が笑ってるときは失敗したことなんて一度もない。今もどこかで走り回ってるんでしょう？」

ソウジロウの言葉にシロエは胸が熱くなるのを感じる。

こんなにも信用されているとは思っていなかったのだ。一年も離れていたのに。一度はその手を振り払ったのに。

「ソウジっちはいい子ですよ」

「にゃん太老師に誉めてもらえるくらいですからねっ」

ソウジロウはそう微笑みを返す。その微笑みは乙女を恋に落とす魅惑の微笑みだ。きつとこの笑顔を見た女の子はすぐにクラリときてしまうのだろう。

だが、ここにはクラリときてしまう乙女はいない。

「惜しいわねソウジロウ。兄さんはもう終わらせてるわよ。本当だったら数日後に入るはずだったものを手に入れて、

今ではアキバで間違いなく一番の力を持った人間になっている

あの心理戦能力はシロエでも敵わないんだから」

兄の自慢をするブラコン乙女はいるが、

これにはこの場にいる全員が苦笑する。この兄自慢も随分と聞いたものなのだ。

これは長くなるなとソウジロウも肩を竦める。女の子の話が長いのはよく知っているけれど千菜の奏を話すときの話は長いのだから。けれどそこで自慢は途切れる。

「そうそう兄さんからの伝言よソウジロウ。『また今度一緒に稽古でましょう』ですって。

よかったわね嫌われてなかったわよ」

その時千菜が見せた笑みは姫モードの妖艶な笑みではなく暖かな優しいいつもの笑顔だった。

第十二話 高笑いと名探偵

カラスの鳴く声が遠くに聞こえ空が紅から奏の胴衣のような深淵を覗かせる藍色へと変わりつつある。

フィールドゾーンからアキバの街に帰ろうとする少なからず増えた〈冒険者〉を昼間の熱を地面から受けた風が迎える。

「疲れたあ……」

「ほんとお疲れたやんねえ……」

場所は〈三日月同盟〉のマリエちゃんの私室兼執務室

マリエちゃんは自分の机に、俺は大きな複数人がけの大きなソファに、ぐでえーと体を預けて怠けきったポーズで横になっている。

「一番疲れているのはヘンリエッタ殿だろうがな。主に心労という意味で」

大きな横長なテーブルを挟んで置かれている1人がけのソファにちよこんと座って湯飲みを行儀よく両手を添えて持ち熱いお茶をズズツとのんびりと飲みながら注釈を加えるクイン。

もう2度とあなたの交渉に同席はしたくありませんわ……本当にあなた21ですか？メンタルのパロメーターが振りきれていますわ……大胆不敵過ぎます、とヘンリエッタさんからはお小言を貰った。なんで交渉を前倒しにして金貨もらい受けて目的の物まで購入してきたのに小言をもらわにやならんのだ。

ちなみにヘンリエッタさんは今、胃がキリキリ痛みますので少し休ませて下さいまし、と自分の部屋に戻っている。

「あれ、お前いつからいた？」

「最初からだ。〈三日月同盟〉に来てみたら奏たちは出掛けているというからここで待っていてくれと通された。

帰ってきたと思ったらこちらなど見向きもせずにソファに倒れ込んだのは奏だろう」

俺の質問を意に介することもなく湯飲みをコトンとテーブルの上に置いて答えるクイン。

「因みに、お前が気づくまでに7分と32秒ほどかかった」

前言撤回。意に介しまくりだ。器の小さい名探偵さんだ。

今更こいつの俺に対する当たりのめんどくさは気にするでもないので言い返すこともせず、体を起こしてクインと向き合う。

「慣れない人間には奏のデリカシーのない交渉術は心臓に悪いんだろ。うな。マリエール殿もお疲れのようだ。眠ってしまってるぞ」

「……………怒ってないよ？いつものことだからね。」

ソファから立ち上がり腰の魔法の鞆マジックバックから少し大きめなブランケットを取り出してマリエちゃんにかける。

「ヘンリエツタさんが戻ってくるまでは寝かせておいていいだろう。」

「で？何しに来たの。別に俺に毒を吐くために来た訳じゃないんだろ。さっさと出すもんだしてさっさと帰れ」

「いいだろう。いつもなら20分くらい売り言葉に買い言葉でつまらん喧嘩をするが堪えた忍耐を称えて本題に移ってやるよ奏殿」

「こら、ばらすんじゃねえよ。せつかくいい感じにイメージ操作してたのに。」

ソファに座り直しクインと同じように魔法の鞆マジックバックから取り出した湯飲みにお茶を注いで一口口に含む。

こちらをじっと見たクインは服の内側からバサツと書類の束を取り出して机に並べた。どれにもびっしりと女子っぽい丸さの抜けない文字が黒のインクで書き連ねられ所々に赤いインクで注釈が加えられている。

「たまにある図は理解しやすいように可愛らしい猫のようなイラストも加えられている。」

「お前キャラと違ってこういうところ普通の女の子みたいでかわいいよな」

「にやつ!?かわいくなんかないっ!私は探偵だぞっ!」

「女子のノートってこんな感じだよな。学生時代から思ってたけどどうやったたらこんな風に上手くまとめられるんだろうな。しかもイラスト付きで」

「言うなっ言うなっ言うなく私が可愛らしいそこら辺の女子高生と一緒にとか言うなく!」

「何？昔誰かに言われたのか？お前は普通の女子高生と変わらないよって？見る目もないやつもいたもんだな」

「！ あううう……」

顔を俯かせプルプルと肩を震わせるクイン。気の雰囲気が変わる。どんよりと青い霧のような靄がいつもの強い張りのある赤に交じり混む。

……地雷だったか。そういえば高校の頃なんか一時うちに顔見せなくなつた頃があつたな。これは紛れもないトラウマの色。「クイン、なーに唐突に落ち込んでんだ。お前らしくない。

いつもみたいは何か言い返せよ。昔お前が何言われたかは知らないけど、今のお前はかわいいしかっこいい名探偵だろうが。

たかが一人かそこらお前のことをかわいいだけのやつなんて思つてるくらいで落ち込んでんな。不敵な笑みが名探偵の代名詞だろ」クインの柔らかな黒髪をクシヤリと撫でてやる。優しく撫でてやる。

トラウマを克服させれるほど有難い説法を聞かせてやることなんて俺にはできない。キリスト教徒でも仏教徒でもねえしな

そういうのは剥げたおっさんか綺麗な修道女さんがするもんだ。

俺に出来るのは友人として嫌々言いながらもずっと一緒にいてやるくらいだろう。

「もう大丈夫だ……。さっさと手をのけろ、ばかなで」

撫で続けてやっていた俺の手をペイツと叩いて落とし赤らめた顔をあげる。赤面探偵は復活だな。

「これで私のフラグがたつたと思うなよ。私のフラグ建設難易度は最高難度なんだからな」

「そんなこと考えてて赤面してたのかよっ!!ガツカリだよ!」
恥ずかしさを誤魔化したいんだとしてももう少しうまい言い訳はなかつたのか!

あるわけないか!だって恋愛耐性ゼロだもの!本気で言ってるかもしれないよ!

「だが、少しナイーブになってたのは事実だ…。ありがと…」
「おつおう。じゃあ本筋に戻ろうぜ。時間も有限だ」

上目遣いにモジモジと礼を告げるクイン。滅多に見ることのないクインの弱々しい姿に礼を受けて不覚にもドキリとしてしまったのはクインには秘密にしてもらいたい。

俺の名誉のために語るとすれば、昔からギャップ萌えというのはヤバいものだということをみんなに理解してほしいということだ。

閑話休題

「意外と知らないもんだな、ゾーンの設定って」

「まあ、そうだろう。個人ゾーンの購入などしたことないプレイヤーであればこれの半分も理解していなくても支障は出ないからな」

クインの調べてきた2つの資料に目を通しながら素直な本音が漏れる。

1つはギルド『ハーメルン』の構成員や1日のスケジュールなどが記された資料。こちらの方はアカツキちゃんの方でも別ルートとして調査をしているのでそこまで詳細には書かれていない。バックアップみたいなものだ。

本筋は2つめ。

ゾーンの詳細設定と関連事項のまとめ、これにある。今回の作戦でどうしても必要になる知識としてクインに調べてもらった。

ゾーンの土地範囲から管理者権限まで。すみからすみまで、基礎からどうでもいいことまで。時間の許すギリギリまで調べてくれと頼んだ。

ゾーンの境界線上の攻撃通過実験とか戦闘禁止区域でのダメージの与え方とか建築物の破壊実験とか何の意味があるんだよ。

「思いつく限りのことはやったぞ。全部うちのメンバーの興味本意で試されてるから重要度とかは気にするな」

「マッド過ぎるな」

「今さらだろう」

お陰でうちのギルドホールはボロボロだ、とため息をつきながら愚痴をこぼす。

クインの愚痴に苦笑いをしながら報告書の束を机に置いて湯飲みの中の申し訳程度に残ったお茶を飲み干す。

取り敢えずぎつと目には通した。あとは夕飯でも食ったあとにゆっくり読むとしよう。

「因みに会議まであとどのくらいかかるんだ？今回の交渉でもうほとんど手札は揃い終わったんじゃないか？」

「んー、一週間はかからないと思うぜ。あとは根回しして場を整えるのと細かいところの調整ぐらいじゃないか？」

シロエに聞いてみないとわからないけど」

「そんな適当で大丈夫なのか？」

アキバの街を支配すると啖呵を切っていた人間とは思えんな」

「割りと適当でいいんだよ。だって…「わかってる」」

「『ついノリで言っちゃった』だろ？よくあることさ。私もついつい2日に一回くらいでやってしまう」

「盛大に違う」

「冗談だ。『ムラつときてやった。今は反省している』だろ？名台詞だな。なに奏も男なのだそういうこともある。あれだろ？彼女にフラれてついどうでもよくなっちゃったんだろ」

「欲求不満で俺は街を支配しようとする変態じゃねーよ俺は。自暴自棄で独裁だぜヒヤッハー!!とかどんな世紀末だよ」

「完全復活だな。この名探偵やろうが」

「くくくつ。『確信も保証もできなくてもついていける。それが仲間だ』だったか？私も奏のツツコミセンスには確信も保証もなくついていけそうだ」

「なんとも反応に困る返答をありがとう」

(どないしよく完璧に起きるタイミング失ってしもた…)
(あらあら、これは中に入るような野暮なことは出来ませんわね。退散させていただきますわ)

部屋の中と部屋の外2つの場所で奏とクインの会話を聞いていた二人

一人はそのまま狸寝入りを一時間も続けるはめになり

一人はのんびりと夕食をとって次の日のために早めに体を休めた。

(二人ともホント仲よすぎ)



奏が三大生産系ギルドから金貨をもらい受けてから4日の月日が経過した。

〈軽食販売クレセントムーン〉はこの間も大人気で販売店舗を4店舗から5店舗に増やすも夜間を除きどの店舗でも行列が途切れることはなかったという。

そして今日も〈クレセントムーン〉はいつも通り店をあける。

否、普段と違う点が一つ。何人かの年長のメンバーが店には欠けていた。

いつも笑顔を絶やさない巨乳のお姉さんや長い髪を纏めたニヨニヨとした青年などそれぞれの店に通いつめている常連は、あれ？今日はある人いないんだ。と少し気にかけるが手に入ったクレセントバーガーを前にしてそんな少しの気がかりもあっさりと忘却の彼方へと消えていくのだった。

そして場所は変わってアキバの中心にあるギルド会館。ここに今日、続々と人が集まっていた。

それなりに名が通っている中小ギルドに始まり大手の戦闘系ギルドや三大生産系ギルドのギルドマスターとその従者たちが集まってきている。

その異様な光景に何人もの住人が首を傾げ根拠のない噂を膨らま

せていた。

アキバの街の最上階は大きな会議室になっている。巨大な六つの姫の石像が中心にある一つの円卓を囲む広い部屋だ。エレベーターもないこの世界では使われることのないはずだった円卓。それを13の人が囲んで席についていた。

アキバの街最大の戦闘系ギルド〈D・D〉を率いる〈狂戦士〉クラステイ。

エリート至上主義の廃人ギルド〈黒剣騎士団〉総団長〈黒剣〉のアイザック。

勢い重視の即断即決ギルド〈シルバーソード〉の若きリーダー〈ミスリル・アイズ〉ウイリアムⅡマサチューセッツ。

平等共有化主義〈ホネステイ〉ギルドマスター、アインス。

超ハーレム系戦闘ギルド〈西風の旅団〉のギルドマスター、男の敵にして〈剣聖〉ソウジロウ。

アキバの街ナンバーワンの生産系ギルド〈海洋機構〉の総支配人〈豪腕〉のミチタカ。

幻想級製作可能アイテムレシピ所有率ナンバーワンの学問系ギルド〈ロデリック商会〉ギルドマスター、ロデリック。

新進気鋭の生産系ギルドの新勢力〈第8商店街〉ギルドマスター〈若旦那〉カラシン。

アキバの街の話題の中心〈クレセントムーン〉の総本山〈三日月同盟〉ギルドマスター〈アキバのひまわり〉ことマリエール。

瞬間市場利益率一位〈グランデール〉ギルドマスター〈キャノンボール〉ウツドストック。

アキバの街の長寿ギルド〈RADIOマーケット〉を率いる〈御隠居〉茜屋Ⅱ一文字の介。

ヤマトサーバートップのクレイジー情報屋ギルド〈モルグ街の安楽椅子〉代表取締役代理〈人形遊び〉マイクロフト。

〈放蕩者の茶会〉の参謀が率いる無名のギルド〈記録の地平線〉ギルドマスター、シロエ。

円卓に座った13名の多くは、背後に数名の側近を立たせているので、この巨大な空間に30名弱のプレイヤーが存在することになる。集まった面々の表情は様々だった。

不安げなもの、いぶかしげなもの、無表情なもの、楽しみで仕方ないとうずうずとしているもの。いずれも昨晚届けられた招待状によってこのはるか最上階の会議室に呼び集められたのだ。

招待状のタイトルは「アキバの街について」

差出人は〈記録の地平線〉シロエと〈三日月同盟〉マリエールの連盟だった。

席についたメンバー同士がお互いを観察し会う中、〈三日月同盟〉のセララが現れて、よく冷やされた果実茶を給仕して回る。〈クレセントムーン〉でも販売されていないもののために、一部のメンバーが少しだけ驚く。ほんの少しではあるがピリツとした空気は和らぐが、まだに空気はシンと沈み帰り沈黙は続く。

そして参加者以上に値踏みする視線が円卓より少し離れたところに2つ並んで立つ。

クインと奏。奏の左隣にはにやん太が立っていた。

三人とも会議室の空気に合わせて一言たりとも言葉を発することもないでいる。

そんな中でシロエがその均衡を突き崩す。

「お忙しい中集まっていたいただき——ありがとうございます。僕は〈記録の地平線〉のシロエといいます。……今日は皆さんにご相談とお願いがあってお招きしました」

いざ、開戦。

第十三話 覚悟もない拳

「皆さんにご相談とお願いがあつてお招きしました。多少込み入った話なので、時間がかかると思いますが、お付き合いください」

言葉を切り周囲を見回すシロエ。

招待状を出したギルド全てが参加している。シロエがソウジロウにお願ひした根回しが生きてきている。後から個別に回るという面倒な手間をかけずにこれですんだ。その分、今、この場が決戦の地となるわけだが。

「挨拶は適当に切り上げてかまわない。〈放蕩者〉^{デボーチエリ}のシロエ。別に知らない仲じゃあるめえし」

そう声を上げたのは〈黒剣〉のアイザックだった。日本サーバー有数の高レベルプレイヤーにして歴戦の勇者。数多の大規模戦闘において常に先陣を切ってきた日本サーバーでも数少ない大規模戦闘の指揮経験者である。奏もシロエも何度かゲストとして彼のその戦いに参加したこともある。

「いったいなんたつてんだ、この場は」

苛立たしげに声を上げたのは〈シルバーソード〉の若きリーダー、ウイリアムだった。流れるような銀髪を後方でまとめた、典型的な「エルフの若者」といった容姿の成年だ。ずいぶん短期な性格なのだろう、何度も足を組み替えている。

「お言葉ですので、早速用件に入ります」

「ご相談というか、提案というのは現在のアキバの街の状況についてです」。

「ご存じの通り〈大災害〉以降、僕たちはこの異世界に取り残されてしまいました。元の地球に帰れる目処は全くたつていない。これについての手がかりは僕の知るところではまったくありません」。

非常に辛いですが、事実です。一方、そんな状況下で、アキバの街の空気が悪化している。多くの仲間がやる気をなくしていますし、逆に自棄になつている人もいる。経済の方はぼろぼろで、探索の効率はちつとも上がっていない。

この状況を、僕たちはどうにかしたいと考えています。集まっていたのは、そのためです」

シロエの説明を受けた参加者たちからざわめきが生まれる。

「集まって何をしようというのだ？」「面倒なことを……」「言いたいことはわかるがいったいなにができる」

いくつかのざわめきを抑えるようにへホネスティの青年ギルドマスター、アインスが質問する。

「それはこの場にいるアキバの街を代表するギルドで勢力全てに声をかけてその利益を調整するということですか？」

「それは無理だね。大ギルドのエゴがからんじやったら実現できるわけがない。ナンセンスすぎるよ」

あまりにも場違いな明るい声が挟まれる。声の主は銀色の毛並みをした一人の猫人族。クインの所属するギルドへモルグ街の安楽椅子のギルドマスター、マイクロフト。

飄々としたその態度と雰囲気はクインとは真逆の印象を受ける。

間違っていない認識だ。中小と大手ではあまりにもパワーバランスが傾きすぎている。それ以前にそんなことができるのであればこんな場を設けずとも現状には至らずにすんだであろう。

そんな言葉を受けたシロエもその間違った認識を早いうちに解いておく必要があった。

「今回は少し趣旨違います。現在のアキバの街の状況の改善です」

「そういうことなら俺たちは抜けさせてもらおうわ」

立ち上がったのは先程からイライラとした態度をとっていたヘシルバーソードのウィリアムだった。彼は腰のサーベルの位置を直すとマントを翻す。

「俺たちは戦闘系ギルドだ。街の雰囲気なんて関係ない。ここは帰ってきてアイテムを換金するだけの場所だ。つまり、俺たちにとつちや雰囲気荒れてようが和やかだろうが、どうでもいいんだよ。——街のことは街に興味がある連中でやればいい。別に相談するのが悪いとはいわねえよ。時間の無駄だとは思うけどな。ただ俺たちはそんなことには興味がない。俺たち抜きでやってくれ」

ウイリアムはそれだけ言い捨てると、会議室をあとにする。場の空気はざわめいた。

「どこへ行くのですか？ 奏ち、クインさん」

「ちよつとお花を摘みに」

ウイリアムが会議室を出るのを部屋の隅で見守っていた。奏、クイン、にやん太の三人。

奏は体を預けていた壁から離れると会議室のドアを目指して歩いていこうとする。その隣をクインはすたすたと当たり前のように歩く。

「仲が良いのはいいことですが、あんまり遠くまで花を愛でに行くと危ないですよ。後に支えないよう早めに摘んでくるんですよ」
「別に仲良くなんかないさ。連れションぐらい女子は誰とでもするもんだし」

「大いに固定概念に捕らわれた台詞だが、概ね間違いない。私たちは仲良くなんかない」

「普通だよ」

奏とクインは会議室をあとにする。へシルバーソードが抜けても、奏とクインが部屋から退出しても、会議は構わず進行する。

へシルバーソードが抜けても問題ない。そう告げるようにシロエは構わず会議を再開する。

ここからが本番だというように。



「やあ、お兄さん。ちよつと待ちなよ」

ギルド会館の外入り口付近、そこでウイリアムは声をかけられた。時間を無駄にしたと、こんなことのために呼び出されたのかと苛つきを押さえてギルド会館を出たところで出迎えたのは深海のように深い青を和装に纏いウイリアムのようなエルフとは正反対の東洋人の顔立ちをした青年と小柄な銀の目をした真っ赤なスプリングコート

を着込む少女だった。

〈高笑い〉の奏に〈名探偵〉クイン

どちらもヤマトサーバーで〈エルダーテイル〉をそれなりにプレイしているプレイヤーであれば一度は名を聞くことのある名高いプレイヤーである。

特に〈高笑い〉の奏、彼は底知れない。デポーチエリ・テーパーテイ〈放蕩者の茶会〉時代の彼は都市伝説のような存在だったのだ。

傍若無人、奇想天外、猪突猛進、〈茶会〉リーダー、カナミ。

歩く都市伝説、怒らせるな危険、轟く饗宴、〈高笑い〉の奏。

腹黒メガネ、腹黒参謀、三白眼、〈茶会〉の参謀、シロエ。

道楽主義者、変態、ストーカー野郎、〈奇人の代名詞〉KR。

ハーレム野郎、男の敵、最強のフラグメーカー、〈剣聖〉ソウジロウ。

カナミ信者、エルフメイド、紅魔館のメイド、〈エルダーメイド〉インテイクス。

この六人のうち半分も集まっていれば、ろくなことにならない。見たら逃げ出せとプレイヤーの中ではまことしやかに言われている。〈茶会〉の六情衆の一人。

「ああん？ 確かアンタら会議室にいたよな。なんだよ俺たちを引き戻しに来たのか？ 無駄だぜ。」

さつきも言ったけど俺たちは街に興味がない。会議なりなんなり勝手にやってくれ」

「は？ 自意識過剰かよ。誰もテメーなんかを引き戻しになんか来てねえよ。ばーかばーかばーか」

「バカにしてんのか!!」
「だからバカっていつてんじゃん、頭弱いな」

ハッと半眼で鼻で笑ってとことん人を小バカにしたような態度をとる奏。

この場にいる全員がどうしようもなくムカついた。クインでさえも

「くそが、いいぜ…。ぶっ殺してやるよお。街の外にでろお!!」

こめかみの血管をピクピクと浮き上がらせて奏とクインに詰め寄

るウイリアム。私まで巻き込むなよと嫌そうな顔で奏を小突くクイン。

「やだよ。時間ねえもん。頭の悪いガキのお守りに付き合ってもらえるか」

「しいるかあつ!!そんなもんツ!いいからこつちこいやあ!!」

奏の胸ぐらを掴もうとするウイリアム、がするりと落ち葉のようにウイリアムの手をすり抜けてカランと下駄を鳴らし挑発するように踊る。

「てか、さつきから思ってたんだけど君なんでさも腰のサーベルがメインみたいな立ち振舞いしてんの?お前主武器弓^{メイン}だろ。カツコつきたいお年頃?高二病?」

「なっ!テメエ!!」

「待てウイリアム!落ち着け。本当に手を出したら向こうの思うつぼだぞ。周囲の目を考えろ。大手のギルマスのお前が先に手を出すのは不味い」

ウイリアムの背後に立つて今まで動きを見せることのなかったサーバートップクラスの^{ガーディアン}の^ヘ守護戦士^{ディクロン}がウイリアムの腕をつかみ今にも襲いかかろうとするウイリアムを止める。

「へえ。ギルマスと違ってクレーバーなヤツもいるんだね」

「さつきから何が目的なのかは知らないけれど、ウイリアムをこれ以上バカにするようなら……」

〈シルバーソード〉は全力でアナタを潰すぞ」

射殺さんばかりに睨み付け今までの優しさの感じられる声から一変してドスのきいた声で脅しをかけるディクロン

その眼光は冗談で言っている訳ではないということ物語っていた。

辺りをピリピリとした緊張が走る。まさに一触即発の雰囲気だった。

「おおく恐い恐い。さすがに一人で^ヘシルバーソード^ンなんて大ギルドを相手にするのは無理だね。お暇させてもらおう」

「帰すと思うのか?」

「帰るさ。これから大切な仕事があるから」

奏は踵を返してギルド会館へと歩いていく。

だが、そんなことを許すわけにはいかないとウイリアムに同行していた二人の随行員が奏の前に立ちふさがる。随行員が奏の肩を掴もうとしたとき、

バアチイン!!!

随行員の二人の手は何か大きく弾き飛ばされた。

スタスタと止められそうになったのも自分を止めようと手を伸ばした二人が急に吹き飛んだことにもまったく反応することもなく歩いていく奏。

デイクロンは今度は自分が止めようと前に出ようとするがウイリアムの手機先を制される。

「待てよ〈高笑い〉の奏さん」

ウイリアムの声にここで初めて奏がピクリと反応を見せた。歩みを止めてそこに立ち止まる。

「アンタ、結局何がしたかったんだ？そっちから呼び止めておきながら結局こつちを挑発するだけ挑発してうちの温厚な壁役まで怒らして何がしたかったんだよ。」

意味がわからねえぞ？〈デポーチェリ放蕩者〉の頃のアンタの噂はよく聞いていた。信じられない噂もあつたし、バカみたいな思う噂もあつた。けど何一つとしてアンタの悪い噂は聞いたことはなかった。素直にすげえと思えるそんな噂ばかりだった。

そんなアンタが、そんなすげえ人がなんで俺たちに喧嘩を売るような真似をしたんだ？」

「嫌がらせ」

「は?」

「だから嫌がらせだよ。」

今のアキバの街の空気が気に入らなくて、変えたくてそのために無

茶苦茶な苦勞をしてここまでこぎ着けた。それを時間の無駄とか言われて、笑ってやるほど俺はシロエみたいにお行儀よくは生きてない。あいつほど俺は面倒にかっこよくは生きてないからな。

あー、でも……悪かった。ついカツとなつてやっちまった。大人気ないにも程がある。散々言わせてもらったたら頭が冷えた。ここは見逃してくれ。本当にこのあとがつかえてるんだ」

さつきまでの陰湿な悪感情を隠しもしない雰囲気はどこかへ消えまるで別人か何かと勘違いしてしまいそうになる毒気の抜けきつた表情で奏はウイリアムたちに頭を下げた。

「あと一つ勘違いをしてるから解いてやる。ティーパーティ〈茶会〉の悪い噂が立たなかったのはインテイクスがそうならないようにしていたからだ。あそこは自由人の集まりだから何一つ悪い噂が立たないなんてことは誰かの意志が介入でもしない限りあり得ないんだよ。あそこに勝手な幻想を持ち込むのはやめてくれ」

頭を下げて謝ったかと思えば、ウイリアムたちに背を向けて奏はそう言い放ちギルド会館へと早足に戻っていった。

まるで台風のような男だった。

「あー、そのなんだ。奏も口は悪いが悪いやつではないのだ。ちよつと子供じみているというか、怒らせるると短絡的な行動しかとれないというか、まあ、子供みたいなやつなんだ。許してやってくれ」

クインはそんなことを言い残して小走りに奏を追いかけていく。ウイリアムたちは奏たちを追いかけられることもせず毒気を抜かれてしまったようにそのまま奏を見送るだけだった。



トウヤとミノリ。シロエがゲーム時代だった頃に短い間ではあったが面倒を見ていた仲の良い双子の姉弟。神祇官の姉に武士の弟、まだ14にも満たない中学生。

そんな二人も非日常を日常に受け入れるよう強要された。

幼い頃に事故でトウヤは歩行能力を失った。

両の足を失ったわけではない。足という器官自体には問題ないのだが、後遺症で神経に異常が残ってしまったているのだという。

ミノリはそんなトウヤを哀れんだことはなかった。

事故は非常に不幸な出来事だったし、できれば代わってやりたいとまで思ったけれど、ミノリにはどうすることもできなかったのだ。

自分のことを思う姉の思いはに弟であるトウヤもよく感じ理解していたしそんな姉を信頼もしていた。

そのお互いを思い合う気持ちがある種の敬意に近い感情を生み、二人を仲の良い姉弟にしていたといえる。

検査のあとに消耗しきったトウヤは外に出掛けることも出来なくなる。必然的に家の中で遊ぶことが多くなる。大概の室内遊戯にも飽きてきた二人。

そんな中で始めたMMORPG〈ヘルダーテイル〉であった。

トウヤは誰にも気兼ねせずに、好きに走り回れる世界に、ミノリにとっては経験もしたこのない種類の遊びに興奮した。

ふたりは〈ヘルダーテイル〉の魅力に一気に魅せられたのだ。

だが、そんな二人にも理不尽な不幸は襲いかかったのだ。

〈大災害〉に巻き込まれたあの日から、ミノリは泣いて数日を過ごした。トウヤはそんな姉が壊れてしまわないように底知れぬ不安に震える気持ちを押しえて支えようとした。

誰かに助けて欲しかった。夢なら早く覚めて欲しかった。

そんな心の弱ってしまったところを〈ハーメルン〉というどうしようもない小悪党につけ入れられてしまった。

〈ハーメルン〉に毎日のように与えられる無理難題に日に日にやつれて今はミノリも女の子なんていえるような格好ではないし、トウヤも毎日毎日ボロボロになって帰ってくる。

ミノリは、私は何をしているのだろうか…なんでこんなに醜い姿をしているのだろうか…そう思い込むまでに追い詰められていた。

そんなときだ、シロエからの念話がかかってきたのだ。

“助けるから、だから少し待っていて。また一緒に遊ぼう。一緒に遊びたい。楽しかったから。だから…ちよつと待っていてね”

そして、本当にミノリを、トウヤを、へハーメルンに捕まったみんなを、救うために助けが来た。

「もう泣かなくていい。助けに来たぞ」

彼はミノリにそう言っただけから、何度も見るようになる笑顔を向けた。その清々しいほどに自信に満ち溢れるような笑みで

◆◆◆

「遅いぞ奏」

「ごめんごめん。少し遊びが過ぎた」

プンスカと腰に手を当てて怒るアカツキちゃん。

見た目は美少女だけれど歳は俺と一っしか変わらないそうなの。世の中には不思議なことがいっぱいだ。これも全部妖怪のせいなのね。そうなのね。

実際、妖怪変化の類いというのはいららしい。俺は見えないけど。

「保護の準備は？」

「完璧に済んでいる。あとは主君からの合図を待つだけだ」

アカツキちゃんの指差す方向には、明日架ちゃんを中心とした救護班が親指を立てて準備万端だと示す姿

「おっけ。」

「おい！小竜ー！突入班は全員揃ってるか？」

「はい！全員準備できています。」

でも、へハーメルンの所有するギルドホールに突入なんてできるんですか？いくらギルド会館のゾーンを奏さんが支配下においてるからって、へハーメルンのゾーンまで干渉することなんて…」

「大丈夫だ。そこんところは奥の手がある。まだ完全じゃねえけど、今回使う分にはまったく問題ない」

「奏、主君から念話が来たぞ。作戦開始は5分後だそうだ」

アカツキちゃんの言葉に無言で頷く。

そう、今回の救出作戦は、シロエの合図から新人プレイヤーが脱出し終えた直後、間髪いれることなく突入部隊がへハーメルンのメンバーを全員捕らえる手筈になっている。

そして今回の作戦の要、このギルド会館のゾーンはつい先日、三大

生産系ギルドからもらい受けた金貨500万枚を使って買い取った。

味のある料理のレシピというネタをちらつかせ、まあもの見事に俺たち〈三日月同盟〉が新種のクエストをいくつも攻略中でその過程で新ゾーンに幻想級のレシピ、アイテムを手に入れるヒントを持っていると勘違いしてくれたものだ。

今でも可笑しくてしようがない。ヘンリエッタさんには詐欺師の才能があると言われたよ。

「いいか!!このゾーンは俺が支配下においている。万に一つもしもの事態は起こらない。」

新人プレイヤーは保護しだいすぐに暖かな食事、飲み物、新しい着るもの、風呂、何でも好きなものをくれてやれ!」

「はいっ!!!」

女の子らのソプラノやアルトの声が返ってくる。

「突入班!!相手は新人プレイヤーを食い物にしてきたどうしようもない小悪党どもだ!同情する余地もなく黒だ。でも殺しだけはするなよっ!!憎しみや怒りだけで殺しまでしたらそこで俺たちはアイツら以下の存在になる。肝に命じとけ!」

「はいっ!!!」

こちらは男も女も関係なし〈西風〉に借りたメンバーなど高レベル組で構成されている。気合いの入った声が返ってくる。

準備は完璧だ。予定調和しかこれから先は起こらない。



「それでは脅迫ではないかっ!」

一方、ギルド会館最上階の広大な会議室では、メンバーによる話し合いがまさに沸騰していた。

シロエが「このギルド会館を所有している。ブラックリストに登録されたプレイヤーはギルド会館への入退場を禁止され、ギルド会館の使用はアキバの街では出来なくなる。ギルドホールも銀行施設も貸金庫もすべてのサービスを掌握した」と宣言したことが爆撃のような

効果をもたらしたのだ。

実際には万が一を備えてと救出作戦の指揮を執る都合上奏が所有権を持っているのだが、便宜上シロエが持っていることにしている。「はっはー。何を言ってるんだい。神殿を転居されなかった時点でまだマシだろう。彼が僕たちに敵意じゃなくて純粋な話し合いがしたいという意思の表れだろうよー」

〈冒険者〉の嘘偽りない生命線。

神殿を入退場の制限されてしまえば〈冒険者〉は死んだときにアキバの街で復活出来なくなるかもしれない。それは不死身の〈冒険者〉の死を意味する。

「だが、そうだとしても——」

マイクロフトから出されたシロエよりも最悪の提案を聞いてもなお追及が行われる。

「そうおっしゃるなら脅迫かもしれません。」

しかし、僕がやったことが脅迫だというのならば、都合が悪い提案をされたら戦争を起こすぞ”とっているアイザックさんを初め大手のギルドの方々のやっていることは脅迫ではないんですか？

どこに違いがあるんです？僕は”会議を設立して話し合いたい”とっているだけです。都合が悪い言葉を無視するつもりはありません。どちらが常識的な申し出か考えてみてください」

「誰もが後者だって言うよね〜」

「おい。さつきからうるせえぞ人形使い」

「ははー。恐いなくそんな恐い顔で睨み付けられちゃうと毛が逆立ちちゃうよ〜黒剣」

さつきから場にそぐわないトーンの声の主のにイライラとした顔で睨みをきかすアイザック。

それを歯牙にも掛けない様子でトーンを変えずに軽口を返すマイクロフト。

だが、少しシロエの援護射撃が過ぎたかなとすぐに考え椅子に深く座り直してこれ以上は茶々をもとい露骨なシロエ最良は止めるよとアイコンタクトでシロエに合図する。

そのアイコンタクトをシロエは、あれで援護射撃のつもりだったのか：場を引つ掻き回しただけなんじゃ……。と思いつながら感謝の意を同じよう目線で返す。

伝わったのかは知らないが満足そうにニヤニヤとし始めるマイクロフトだった。

シロエは気を取り直しその場にいる全員に向き直る。

「僕は、こんな強権をたった一人が握っている街は理想的だと思いません。そこで最初の話に戻ります。皆さんはこの街が——この世界が、〈冒険者〉が本当にこんな状況でいいと思っっていますか？

僕の出す方針提案はふたつ。

ひとつは街に住むすべての人々、ひいてはこの世界に活気を取り戻すこと。もうひとつは、少なくともこの街に住む〈冒険者〉を律するための“法”を作って実行すること。ここまでで反対の方はいますか？

答えはない。それは当たり前のことだった。

もともとが日本に住む法治国家の住人だ。法の重要性そして、もつと根本的な活気の大切さなど先刻ご承知なのだ。

ネットクだったのは「誰が貧乏くじを引くのか？」という問題だけだったのだ。

「わかった」

分厚い手のひらを会議室に叩きつけた〈黒剣〉のアイザックが一同の混乱をたったひとりで背負うように切り込む。

そこまでのいうのなら、この会議に提案する——〈記録の地平線〉の具体的な方策とやらを聞かせてもらおう」

強い凝視をシロエに注ぎ続ける黒い鎧の戦士に、周囲の視線も自然に吸い寄せられる。シロエは胸を張り、より一層の熱を込めて語り出すのだった。



次々とギルド会館のエントランスにはみすばらしいでは言葉が足

りないとまで言えてしまう格好をした少年少女が救護班に連れられて集まってくる。

皆姿は現代の日本ではそうそう見ることもできない酷いものではあるが顔は明るい。

安心して涙を流している子も少なくはないくらいだ。

「ちっ…」

その様子を見ているだけで助かってよかったなという暖かな気持ちとへハーメルンくぶつ潰すという怒り心頭な真逆の気持ち心が心の中であつちにいつたりこつちにいつたりで落ち着かない。

胸くそわりいな…

「そろそろいくぞ」

「はい」

突入班は少なからず全員がそういつた気持ちで腹のなかに埋められているのだろう。俺の声に静かな闘志を押しさえつけて返答を返してくる。

階段を上がりギルド会館の三階の踊り場に差し掛かったところだった。

「何をしたっ！お前たち、なんなんだ!!」

「うるさい。——だ、ま——れっ!!」

ガラガラとした耳障りの悪い声と掠れきり今にも潰れてしまいそうなの、それでも強い声が言い争う声が聞こえてきた。その時俺は、考えが纏まる前に駆け出していた。

一歩後ろを千葉がその二歩後ろをクインがそしてその後ろを突入班のメンバーが追走してくる。

廊下の先には倒れ込む一人の少女と黒いフードを被った男と揉み合う簡素な武士鎧を着た少年。

躊躇することなく俺は走る速度を上げて全力で跳んだ。

カンツと小気味いい高い音が鳴り次の瞬間、何の遠慮もない全力での飛び蹴りをフードの男に叩き込んだ。

カランと着地してすぐに二人の方を向いて声をかける。

「もう泣かなくていい。助けに来たぞ。

ん、君たちがトウヤ君にミノリちゃんか。ごめんな、少し遅くなつて。すぐ終わらせるから。

千菜っ。このドア風ぎ払え」

「あいさー」

魔法の鞆から紅の薙刀を抜き放ちへハーメルン<のギルドホールへと続くドアを文字通り少しの欠片一つ残さず風ぎ払った。

ドアのあった場所には黒いのっぺりとした空間だけが存在していた。その黒い何も無い空間に手を当てる。

「さて、と……曖昧なところをこうして……と

よし、全員突入しろ。そののやつは俺がやっつく。

指揮は千菜がとれ。絶対に死なすなよ！殺しもダメだし、自殺もさせんな。出るところで罪を償わせろ！」

「おおおうー」

後ろに控えていた突入班は何の躊躇もなく暗闇に飛び込んだ千菜を皮切りに続々とへハーメルン<のギルドホールへと入っていった。

二十分もしないうちに全員捕縛し終えるだろう。

「クイン、二人のこと見といてやってくれ」

「わかった」

双子ちゃんを庇うようにして前に立つ。

「待たせたな。じゃあこっちもやろうか。お前がまだやる気がどうかやれる気があるんならだけど」

「お前何者だっ!? 奏!? 聞いたこともねえ

！ギルドにも所属してないようなやつがなにしががるっ!!」

うわー。元氣ハツラツじゃねえかよ。くそつたれが。

ガチで蹴り飛ばしたつもりだったんだけどな。やっぱ高下駄じゃ跳び蹴りに向いてないな。

「俺の名前も知らないへハーメルン<なんていうド三流ギルドのメンバーが、随分と調子乗ってんなく逆に笑えてくるわ」

腰にある魔法の鞆からへ偽光とどかぬ佰式の儀式杖<を引き抜いて床に突き立てる。

シャランと杖についた鈴が鳴るのと同時に〈佰式の儀式杖〉の特殊効果が発動する。

俺だけでなくトウヤ君とミノリちゃん、おまけでクインにまで〈襖の障壁〉が展開され僅かであるが傷を癒す。

「このゾーンは戦闘行為は可能にしてあるから、なに使ってもいいからかかってきなよ。ド三流」

「ふざけてんじゃねえぞおお。クソガキがああ」

激昂したように黒のフードの男は杖を振りかぶって魔法を発動させる。

黒い羽虫の大群が大河の本流のように押しせよて、俺を飲み込んだ。おお、きめえきめえ。

陰陽札の発生させる暴風で羽虫を一匹残らず蹴散らす。マイクロフトさんの鴉の方が規模も迫力も百倍恐い。

「自分がやって来たことくらい覚えてないのかよ。

お前たちは今みたいにレベルの差で圧倒してきたんだろ。この鳥頭が。

さて——終わりにしようか——その低能さ、俺が愉快に快活に高らかに高笑ってやんよ」

「よく見ておくのだぞ双子ちゃん。アレは君たちが掴めなかった知恵や腕つぶし、経験、モチベーション、そういった強さのうちの一つだ。

正義というのは誰にでも振りかざすことはできる。なにせそれは大衆の真意であり民意だからな。

でも悪を滅ぼすために全てをかけようという考えのできる人間はそうはいない。

誰も貧乏くじなんて引きたくないし自分が手を下したという重荷は背負いたくないからな。

正義の味方であることは楽で優越感に浸れるが、正義そのものは辛くて苦しい。

そういうことを気にせずどんな手を使うこともいとわない偽善者は強いぞ」

次の一撃を打つ暇もなく流れるように動作で距離を詰め、大きく引き絞られた奏の拳は風よりも早く男の安いプライドよりもはるかに重く顔面を貫いた。

第十四話 明かされる真実

「適当なこと言うな」

「きやいん」

振り切った拳をそのまま手刀に変えて後ろに控えていたクインたちのところまで下がリクインの脳天に一発手刀を入れる。

〈襖の障壁〉はもう解除されてある。自身で張った障壁に手刀が阻まれることはない。

「なっ何をするか!？」

せつかく人がタイミングまで合わせて語りっぽくしてやったのに「!」

「語るな。人が真面目に戦ってるときに。」

そしてどちらかといえば語るのは助手の役目だろうが」

「女子力は低いが助手力は高いぞ!」

誇らしげだー。ない胸を張ってのドヤ顔の意味がわからん。誇れるところなんて一つもないのに。

「あつあのく、縛ったりとかしなくていいんですか? また起きて襲い掛かってきたりしたら…」

「物騒だなあくミノリちゃん。」

大丈夫だよ。鼻の骨折った感触があったから、起き上がったもまともによつてらんないって」

「お前の方が物騒だ…」

「そういうことだよ。」

こんなのただの暴力さ。誰かを守るための手段の一つではあるかもしれないけど、力じゃないさ。—— 理的にいこうぜ? 人間なんだから、言葉を尽くそうぜ? 頭を捻るのが億劫だからって拳をふるったらそんなのもう蹴り返すしかないんだからさ」

「はあ…、そういうもの、なんですか?」

「こんなときに何言ってるんだろなコイツ。そう思うだろ双子ちゃん?」

「ほっとけ!」

「クスッ」「ふふっ」

俺たちのやり取りが可笑しかったのかトウヤ君とミノリちゃんは初めて小さくはあったが笑い声を漏らした。

「おっ！やっとなあ。じゃあ早速エントランスに行こうか。そうだな、とりあえず風呂にでも入ったらどうだ？」

「じゃあ、私は千葉たちの手伝いでもしてきましょう。奏、まだ当分はゾーンは繋がっているんだろう？〈エンチャンター付与術師〉が行けば捕縛も少しは楽になるだろう」

「悪いな、ついでにそこに転がってる息の臭そうなのも連れてけ。入場制限はもう進入不可にしとくからって……あれ？」

何でコイツこっち側にこれてんの？おいクイン取りこぼしじゃないんですかコレ。アキバーの情報屋ギルドのサブマスがそんなんでいいんですか？職務怠慢じゃないですか」

だとしたら大問題だぞ。取りこぼしがなかったらミノリちゃんもトウヤ君も今こんな目に会わなくてもよかったのに。お仕置きもんだぞ、これ。〈名探偵〉の二つ名が泣いてるぞ

「ですかですかうるさいぞ。私はきちんとコイツも報告書には記載しているぞ。名前は『シユレイダ〈サモナー召喚術師〉のレベル46新人プレイヤーを連れて狩りをしていた奴だ。顔がシユレッダーに突っ込まれた後みたいなキモい顔してたからよく覚えている。

大方お前の登録ミスだろ。肝心なところで詰めが甘いのはいつものことだろ。何が予定調和以外は起こらないだ、起こってんじゃない自分のせいで（笑）」

急いで〈マジックバック魔法の鞆〉から報告書を引っ張り出して読み返してみる。メンバー名簿の欄にはきっちりシユレイダの文字があった。

大問題も、お仕置きも、肩書きが泣くのも俺の方だった…。

—見せよう。

——これが大人のDO・GE・ZAだ。

「ミノリちゃん、トウヤ君、マジスイマセンシタツ!!」

おもいつき登録ミスしましたっ」

「わあああ！そんなっ！頭をあげてくださいっ!!私たちそんな気にし

みんなが涙目になって、よかった…本当によかった……。と言っていたのが印象的だった。

不死身である〈冒険者〉の俺たちがなぜこんなにも心配されていたのかはできれば想像したくない。



それから10日の月日がたった。

俺が意識を失っているうちに会議も纏まりを見せたらしく、俺とクインが目を覚ます頃にはアキバの町の自治機構〈円卓会議〉が発足していた。

〈円卓会議〉の発足はすぐさまアキバの街の中央広場で大きく張り出された。

住民たちの反発も少なく、やはりそういった自治組織が求められていたことがわかるように予想よりもあっさりと〈円卓会議〉の存在は受け入れられた。

大手が独裁するような機関であれば反発ももつとあったのかもしれないが、現実世界と同じ議会制という形をとっていたのも一因だろうと俺は思う。改めて俺の作戦の詰めめ甘さを体感させられた。

それと一緒にやん太師匠の見つけた味のある調理法も住民たちに知らされた。

その日からは、アキバの街にはありとあらゆる料理が出回ることになる。広場では〈第八商店街〉と〈海洋機構〉〈ロデリック商会〉の粋な計らいにより無料で倉庫の食材アイテムが料理人たちに提供される大きな鍋で作った豚汁やら焼き鳥やら料理人たちの思い付く限りの料理がむちやくちやに振る舞われた。

他にも至るところで、ただ芋を吹かしたただけのものから屋台でのラーメン屋までピンからキリまで色んな出店が登場した。この勢いは10日たった今でも衰える様子はない。

そしてそれは料理に限らず他の分野でも同じことが言えていた。

三大生産系ギルド連合の蒸気機関の開発の成功により、実際にメ

ニュー画面を持ち要らないアイテムの作製が可能ということがわかった今発明ラッシュの波が大きくなったところがある。

今のアキバの街は味のある料理にお祭り騒ぎになっているわけだが、それもいずれ日常的になり熱も若干冷めてくる。

そこでアキバの街の〈冒険者〉は他の分野にも興味を湧きそこから一気に発明ラッシュが始まるだろうというのがシロエの見方である。

実際に現状でも一部のプレイヤーの間では既に発明品の報告が〈円卓会議〉に上がってきているらしい。

ともかくにもアキバの街には活気が戻り、一気に成長をし始めたということである。

よかったよかった。すべて丸くおさまったといった感じだ。大団円のハッピーエンド。

おっと、忘れるところだった。

あの性根の悪くて足も臭そうでなんか菌茎になんか挟まってそうなり悪党にも及ばない連中が集まってそうな悪徳ギルド〈ハーメルン〉は解散させられた。

全員が捕縛され、〈円卓会議〉の査問にかけられ満場一致で有罪ギルティ。

アキバのギルド会館の使用を禁止されアキバの街から出ていくことを余儀なくされた。

〈ハーメルン〉に囚われていた新人プレイヤーはそれぞれの希望を聞き新人プレイヤーの受け入れを表明しているギルドに加入する運びになった。

唯一誤算があるとすれば救出を行った〈三日月同盟〉と〈西風の旅団〉に参加希望が集中したことくらいだろうか？

まあ、そこそこはいいんだよ。マリエちゃんは大喜びだし、ソウジロウはハーレムが増えるし、損なことなんて一つもないんだから。ソウジロウのハーレムなんてもう今さらとやかくいうのも野暮な話だしね。

ウチもメンバーの急増でギルドホールもワンランク上の部屋に

なって大部屋だったのが個室まで貰えちゃったし。

新参者が新しい個室部屋なんて貰うわけにはいかないとも言ったのだが男組の大部屋ではぎゆうぎゆうづめだしかといって女子組の大部屋に入るとかもつてのほか、千菜と一緒にするのもダメだから、しようがなく個室をあげたんだ、と言われて萎えたというか折れたというか砕かれてしまったのだ。

俺たちの近況はそうだった感じだろうか。

今日はこのあと新築できたのへ記録の地平線のギルドタワーに遊びに行く予定が入っているのでそろそろ締めさせてもらおう。



〈記録の地平線〉ギルドホーム屋上。

アキバの街をほぼ一望出来る巨木に貫かれた屋上。暖かな太陽の光につつまれほんのりと乾いた風が木を揺らす。風に乗って聞こえてくる刃と刃がぶつかる金属音、普通なら流れるはずのない音が聞こえていた。

「お二人とも何してるんですかっ!？」

そこでは薙刀を構えた千菜と短刀を構え戦うアカツキ、それとその戦いを給水塔の上からのんびりとあくびをしながら眺めている奏がいた。

そんな異様な光景に大きな声をあげたのはハーメルンから奏たちに助けられた後へ記録の地平線ログ・ホライズンに加入した数少ない新人プレイヤーの二人である双子の姉弟の姉の方であるミノリ。その隣には弟のトウヤも目をキラキラさせながら千菜とアカツキの戦いを見ていた。

「なについて、模擬戦だよ。ミノリちゃん。私とアカツキさんと兄さん。三人でローテーションして軽い模擬戦。魔法も特技も使用禁止だからなんの危険もナッシング。そしてスリルがなくて私はローテーション」

「二人とも魔法や特技を抜きにしても相当の手練れだからな勉強になっっているぞ」

千菜もアカツキも構えていた武器を下ろし、あつけらかんと答える。

姫モードに入らない程度にテンションを上げている千菜の喋り方はどうも毒気が抜かれてしまうようでミノリも落ち着いたようだ

「それはそうと、ミノリ、トウヤどつたの?」

「ああ、そうだったそうだった。兄ちゃん!兄ちゃん!俺とミノリに戦闘の指導をつけてくれよ!」

「シロエさんとにゃん太さんが奏さんだったら、私たち二人にも一緒に色々教えることが出来るから頼んでみるといいとおっしゃったので」

「あーなるほどね。そういうことならいいよ。先生役引き受けるよ。俺が教えることの出来る技術に知識全て纏めて叩き込んでやるよ」

「本当か兄ちゃん!?!サンキュー」

「ありがとうございます、奏さん」

「いえいえどういたしまして。準備するから一時間くらい待つてな。アカツキちゃんも一緒にどう?」

「面白そうだな。参加させてもらおう」

「OK。千菜、準備するから手伝え」「はいはい」



「はい、それじゃあさっそく始めようか。」

これで楽々奏さんの戦闘口座だ。はい拍手」

パチパチ　パチパチ　パチパチ

「はい!!」

「んー、なんだねトウヤクン?」

「何で戦闘訓練なのにこんなイスに座っていけないんですか?さつきみたいに模擬戦とかやった方がいいんじゃないですか?」

「はいソコ、文句言わない。凡人の俺は基本は紙とペンから入るの。正しく頭で理解してないと戦闘で役に立たないからな。」

まあ、トウヤお前は座学は少なめで実戦多めでいくつもりだから安

心しとけ」

「むー、わかったよ」

「よろしい。それじゃあ千菜資料配って頂戴」

少ない時間ではあるが一緒に狩りに行ったりしたことのある三人。奏が凡人などというのは大きく苦言を申し立てたいと思ったミノリ、トウヤ、アカツキではあったがなぜか黙っておこうと思うのだった。

千菜が配った紙の束、最初の三枚は全員同じ、パーティ戦闘の基本。四枚目と五枚目はそれぞれの職業の特長、長所と短所。六枚目から十枚目までは特技の細かな説明と利点短所、応用の例が記されていた。

どれも細かにアドバイスや豆知識みたいなものがいくつも載せられている。クインの書くような報告書とは違ってずっしりと細部までありとあらゆるところに注釈や情報を散りばめた資料だった。

「アカツキちゃんの資料は、職業上どうしても細かくはわからないから足りない分は補足しといてね」

「心得た。しかしこれだけの資料よく一時間やそこらで仕上げられたな、奏」

「そうですね。こんな綺麗な出来なのに一時間で作っちゃうなんて凄いです」

「まあ、プロに手伝わせたからね」

「二プロ?」

「いるでしょ。頼りがいのあるギルマスが。」

〈筆写師〉の特技フル活用で手伝ってくれたからな」

この計三十枚の資料はシロエも作るのを手伝ってくれたようだった。

大切なギルメンの為だからといって〈円卓会議〉の仕事を後回しにしてまで資料作りに手を貸してくれたと奏は説明した。

その資料はシロエの優しさが十分に伝わってくる出来だった。

「後でお礼言っとけよ」と軽い口調で心なしか何時もより嬉しそうな笑顔で促す奏。

楽しい楽しい授業の始まりだった。



「奏さん教えるのすっごく上手ですね」

「うんうん！うちの担任のする授業の何倍も面白いよ」

今は休憩時間みんなでイスに腰掛けてにやん太が淹れてくれたお茶を飲んでる。

思っていた以上に分かりやすい奏の教え方に感心して褒めちぎるミノリとトウヤ。

大概、中学校の授業は何も理由なんかないのだけれどついつい眠くなってしまふのだけれど、奏の授業はそういった眠気とは縁遠く時おり挟まれる馬鹿みたいな体験談が授業を受ける三人には新鮮だった。「昔、塾のバイトで小学生から中学生まで色んな教科教えてたからな。だけでも教えるに聞けば、俺じゃなくて千菜の方が上手いぜ。なにせ教師目指して大学に通ってたんだからな」

「そうなんですか?! 以外だなく。奏さんはどんな大学に通ってたんですか?」

「ん、俺? 俺は大学には通ってなかったよ」

「「え?!」」

意外な事実思わず声を上げてしまった三人。

てつきりシロエと同じ大学生かと思っていたのだろう性格はともかく、否、性格も含めて奏のようなのは大学には、しかもかなりの有名校に通っているとついつい考えてしまったりするのが人の性というものなのだが現実問題そんなことはわからないものである。

「俺は高校卒業してからは家業の神社を手伝ってたからな」

「へえー。やっぱり長男だったりするとそういう家業つてのは継がないといけないんですか」

「いや、そうでもないよ。うちの親はそういうの気にしないで高校までは一応出ておけば後は好きなようにしろって言ってたし。それにうちには姉ちゃんがいいたからな。俺は結構好き勝手にしてたよ」

トウヤのありきたりな質問にあっけらかんと答える奏

「それにほら、この前会っただろ。クインっていう真つ赤かな服着てる奴。アイツがさー、カツコよくてさ。なんか俺もアイツの影響受けて好きなこと探すためにさすらいのフリーターをしたよ。自転車日本一周とかしたり、バイトして金ためて色んな国にも行ったよ」

「クインさんと奏さんて付き合ってるんですか？」

「そうだな。奏とクイン殿の仲は異様な程によすぎる気がする」

「はっはー、女子は色恋沙汰が好きだよね」。

いの一番にそれを聞くのかい。二人とも男女間の友情を信じないタイプかな？ないよ。

クインとそういう関係は絶対ない。お互いそう思ってる。これだけはアカツキちゃんのその綺麗な髪の毛に賭けてもいい」

「なぜ私の髪の毛に賭ける…？」

「新しいジャンルでも開拓しようかと」

「本気で気持ち悪いから止めてくれ」

「うん。俺もないなと思った」

女子なら少なからずウズツときてしまう色恋沙汰の話にもキツパリとそんな面白い話はないと確信をもって答える奏。

そしてアカツキに本気で気持ち悪がられる奏。それを聞きながらシヨックを受けることもあるわけなくズズーツとお茶をすすす。

見事に会話をずらしてみせたが代わりに何か大切な、そう例えば信頼とかを失った雰囲気がありそうだがそこは触れないに限るだろう。

「兄さんはカナミさんとの失恋の傷がいまだに塞がってないもんねー」

千葉に爆弾を落とされた。

「ブホオオッ !!!」

たまらず奏はお茶を吹き出す。幸いにも奏の正面の席に座っていたトウヤは色恋話には興味がなかったらしく書類整理に忙殺されているシロエにお茶を持っていつているところだった。

「カナミさんって誰ですか？」

「？」

「我が輩たちが昔いたへ放蕩者の茶会」という集まりのリーダーをし
ていた女性ですにや。とても明るくて人を強く惹き付ける魅力を
持っていたいい子でしたにや」

にやん太によるご丁寧な解説までつく始末である。

「師匠！ご丁寧に説明までつけないよつ!?」

『今のやーくんは私と一緒にじゃない方が成長丸儲けだと思っの』なん
て別れ際に言われてなんか分からない！」

「兄さんモノマネそっくりだね。キモイ」

「お前さてはアレだな。まだ怒ってるんだな。あんだけ謝り倒してま
だ怒ってるのか。土下座までしたじゃん」

「そんなホイホイ土下座なんかするから怒つとるんじやー!!」

実の兄のしょうもない理由で土下座姿を見せられる妹の怒りとし
ては至極当然のものだった。

この理由をヘンリエッタに説教されて気づくのに奏は3日ほどか
かることになる。

第三笑 砂浜と宮廷に響く高笑い 第十五話 新たなるメガネ

「うらあああつ!!」

上段から降り下ろされる木刀

それを右下からの斬り上げで軽く弾かれる

次は左からの横一閃。

上段か

ら木刀を降り下ろしねじ伏せる。

すぐに伏せられた木刀を引き胸めがけての突きを打つ。

突きの下を滑らせるようにして振り。

カァンツ!と、小気味のいい乾いた木刀同士のぶつかる音が響く。

一本の木刀が宙を舞い三メートル程先に落ちる。

一本の木刀はピタリと喉元に据えられあと数ミリで喉に触れるであらう位置にある。

「まっまいりました……」

ドサリと体勢を崩して腰から崩れ落ち座り込むトウヤ。

身体中から一気に汗が吹き出した。

「まあまだまだなあ。トウヤクン」

奏がシニカルに笑い木刀を肩に置く。

今日も今日とて出張特訓教室。

〈記録の地平線〉のギルドホーム屋上は今まさに特訓真っ最中である。

「奏さん、お疲れ様です。トウヤもお疲れ。これどうぞ」

ミノリが駆け寄ってきて水筒とタオルを手渡してくれる。本当に

気の利く良い娘だ。

(千葉やらクインやらアイツやらは絶対こんなことしてくれないな。)

「ミノリンは良い娘だな」

「ふあつ。なんで頭を撫でるんですか?それにミノリンって……恥ずかしいですよ」

「ははっ。残念。今のミノリンの顔を見て決定したわ。これからはミ

ノリンな♪」

「ミノリン、最近俺マリちゃん以外にこんなほんわかした会話するの久しぶりな気がするんだ。どうしてだろう?」

「千葉さんを怒らせるようなことしてるからじゃないですか?」

「なるほど。さすがミノリンだな。俺が気づかないことにもあつざりと気づく、嫁に欲しいわ。」

あいつ最近怒ってばっかりなんだよな。ソウジロウがよく俺に会いに来るようになったからかな?」

頭をかきながらあてずっぽうでものを言う奏

「多分そういうのが千葉姉を怒らせてるんだと思うよ...? 兄ちゃん」

「よし、トウヤこれで今日はお終いだ。なんか聞いときたいことあるか?」

「ふつーにスルーした...まあいいんだろうけど。」

んー、聞いときたいことってゆーか願いが有るんだけど。兄ちゃん、やりたいクエストがあるから手伝ってくんないかな? ミノリと俺とじゃ厳しくって」

「へ白蝶の湖」っていうクエストなんですけど」

「あーアレか蝶々追いかけて回すやつ。いいよ。一緒に行こう。午前中の内に行って昼飯は湖で食おうぜ。あそこの湖結構綺麗だったよな?」

「やった! さんきゅー兄ちゃん」

「ありがとうございます奏さん。にゃん太さんにお当のお願いしなくっちゃ」

「夏期合宿もあるしちよつとでもレベルあげときたいしな」

夏期合宿

「へ円卓会議」公認の四十レベル以下の新人プレイヤーを対象とした支援対策の一環

発案は「へ三日月同盟」のマリエールで「へ円卓会議」の各ギルドから引率者がついて行き新人プレイヤーたちの手助けをしようというものだった。

噂ではマリエールがバカンスに行きたいとソファの上でクツシヨ

ンを抱き抱えながら足をジタバタさせたのがこの発端だったとか、
というか目の前でマリちゃんグッションを抱き抱え足をジタバタ
させているのを見ている。

なにしてんだウチのギルマスは…。

それなりにいい年いってる大人のああいうところを見るとなんか
こう感じるところがあるよね。



「へっくしょん（へくちっ）」

アキバの街のゲート前で盛大にくしゃみをかまらず濡れの三人
組。

一人は簡素な和風鎧に身を包み肩にはこれまた飾り気のない太刀
をぶら下げた少年。

一人はいわゆる巫女装備。鈴の付いた長い錫杖に髪には真新しい
白い蝶の形をした髪留めが似合う少女。

一人は他の二人とは違う明らかに高レベルだと判る青色の和服に
高下駄を履いた青年。

〈記録の地平線〉の貴重な新人プレイヤーで双子の姉弟、トウヤとミ
ノリに〈三日月同盟〉の新参者の奏和風師弟トリオだった。本来なら
ここに千葉も加わって四重奏になるのだが千葉はヘンリエッタから
逃げ切れずに〈円卓会議〉の仕事に取り組んでいる頃である。

三人がどうしてこんななびしょ濡れになりアキバの街のゲート前
で大きくくしゃみをしているかというと、

トウヤとミノリのお願いを聞いてクエストに行った三人

広大に広がる湖の周りを白い蝶を追いかけ回し間に立ちふさがる
モンスターを斬り捨てなんとか制限時間内にトウヤが蝶に飛び付い
て捕まえることができた。

ただし捕まえたところは最悪だった。辺りより確実に高くなって
いる高台。

トウヤの体は宙に浮き、まっさかさまに落ちた。

トウヤを助けようと奏が飛び付きなんとかトウヤの足首を掴んだけれども、奏の半身もほとんどはみ出して踏ん張りが効かない。ミノリがなんとか落ちないように奏の足にしがみついて引つ張り上げようとするが所詮は回復職の低レベル。力が足りず奏の足に小さいが柔らかな二つの感触が伝わるだけだった。

だが、その柔らかな二つの感触が奏に不思議な力を与えた。

「うおおおらっっ!!」

雄叫びを挙げ上半身の力だけで反動をつけてマグロの一本釣りの要領でトウヤを上へ放り投げた(奏にマグロの一本釣りなど経験はない)。

トウヤは一メートル程宙を舞い奏の真横へ「グヘエ」とカエルの潰れたような声を挙げて落ちた。

トウヤを助けたことで一安心し息を吐いたのもつかの間、ピシピシと音がしたかと思うと奏たちの居るところが崩れた。

結局、三人とも仲良く湖にまっさかさまに落ちたのだった。

そんなこんなでびしょ濡れになりながらもクエストは一応クリアし、クリア報酬の〈湖蝶の髪留め〉をゲットし、このままじゃ風邪をひいてしまうとすぐさま帰巢呪文でアキバの街に帰ってきたのである。弁当を食べ損ない三人とも若干不機嫌である。

アキバの街に入るゲートを潜ろうとするとゲートの辺りを馬に乗った仰々しい一団が道を塞いでいて先へ進めなくなっていた。

「すみませーん!道を開けて貰っていいですかー!」

「なんだ貴様ら?我々を誰だと心得ている。自由都市同盟イースタル筆頭領主セルジアット・コーウエン公爵の遣いと知っての言葉か?」
「いや、そうは言われなくても。こちらは見ての通り全員びしょ濡れなんですよ。だから速く家に帰りたいのです。こし道を空けてもらえないかと思つて」

「フン!知らんな。我々の要件が済むまでそこで待っていればよいではないか」

正に虎の威を借る狐の体現を目の当たりし、

「ああん?何言つてんだコイツ?一回ど突いたろかな」

と奏がボソリと呟きそれを耳にしたトウヤとミノリがアタフタと二人で腕を抑えて止めようとする。

ここに千葉がいなかったのも幸いだろう。もし千葉がいたら、「なにいつちやつてんのかしら？ 姫の通り道を遮るなんていい度胸じゃない。どつきましようか」

と止めることはおろか変死体がいつちよう上がってしまいうところだったろう。

「お前たち!!何をしている。さつきと道を空けてやらないか！」

一団の奥の方から突き抜けるような声が響いてきた。

目を向けてみると、まだ夏とはいえないまでも春は過ぎたであろうこの季節に黒いロングコートを着た銀髪のふちなしメガネをかけた青年が馬から降りてこちらに歩いてきていた。

うわっメガネだ…。

シロエにクラステイ、ヘンリエッタ、クイン。奏の知るメガネをかけた人間はどこかぶっ飛んでるところがあるので警戒心が増す奏じつくりと青年の色を観察しようとする。

青年から注意された男はこちらを睨み付けながら渋々引き下がっていった。

「すまなかつた。ウチの配下が失礼なマネをして、この通りだ」

青年は拍子抜けするほどあっさり頭を下げた。

いや、まああやまるのは当たり前のことなのだが、さっきの男の発言から察するにこの一団はセルジアットIIコーウエン公爵の遣いなのだろう。確か大地人の貴族でも上の方の人間だったと奏は記憶している。

貴族はメンツのためとかなんとかいって頭を下げないものだと思っていた奏としては以外だった。

駆け引きの為に頭を下げることでできる切れ者なのか、純粹に謝っているのかは謀りかねたがこの男は稀有な存在なのだろうと認識する。

「構わないさ。頭を上げてくれ。あんた貴族なんだろう？ あんまり大勢の前で頭を下げるのは良くない」

「ありがとう。寛大な対応に感謝するよ。エルノ＝コーウエン、エターナルアイスの管理貴族をしている」

「〈三日月同盟〉の奏〈冒険者〉だ。後ろはトウヤとミノリだ」

トウヤとミノリはペコリと頭を下げ、奏は握手を求めて手を出す。

エルノはほんの少しだが右の眉が上がり驚きを見せると、シニカルに笑い奏の手を握り返した。

――二時間後――

ベシッ　ベシッ　ベシッ

〈三日月同盟〉のギルドホール倉庫、そこにはミノリとトウヤと別れた奏が千菜と一緒にいた。

「ええ〜と。教育に悪いからそういうんは自分の部屋でやつもらつてええかな？せつかく入ってきた新人の子に逃げられとうないんよ。カナ坊」

マリエールは千菜に毛糸でできた小さなリングゴ程度の大きさのボールを投げつけられそれを黙って真剣な表情で顔面に受け止める奏に向かつてそう言った。

「マリエちゃん、別に俺もそういった性癖があるわけじゃないよ……。最近ちよつとやんちゃが過ぎるからつてさすがに誤解しすぎだよ」

「そうなん？」

「ソーナンス」

「マリエさん、さすがにこれは本当だから！兄さんの修行だから!!」

心なしかいつもより冷めたように疑うような目をマリエールから向けられこれはさすがにヤバイかと取り繕う千菜

兄の適当な返答にヤバイと思ったのだろう。

「まあ、ええわ。でもさすがに倉庫でこれやるのは堪忍してな？本当に新人君たちいなくなってしまうで」

「二面目至極もございません」

「それで、どうしたのマリちゃん？俺たちになんか用？」

「ああ、そやった！カナ坊、悪いんやけどいつもの会議室にいつてくれ

へん？シロ坊とクラスティはんが頼みたいことがあるって」

パチンとそこ大きな胸の前で手を叩いて本来の用事を思い出したようにリアクションをとるマリエール

「んーわかった。メガネコンビか、やだなーなんか面倒事押し付けられそう。まあ行かなきゃアカツキちゃん辺りに 捕縛命令が出されるだろうから。それもなんか悪いし、いつてきます」

奏は嫌そうな顔をしながら胡座を組んで座っていた体勢から立ち上がりなを押し付けられるか考える。

考えてもわかるはずもないと一度背伸びをして結論づけ倉庫の扉に手をかけ最上階の会議室まで向かうことにした。

「カナ坊、ごめんな。さすがにあの二人はおつかないねん」

奏が出ていった直後にマリエールは申し訳なさそうにそう呟くのだった。



「はあ!?俺が領主会議の派遣団に同行!?なんで!?俺、新人プレイヤーの夏期合宿についていくつもりだったんだけど!!」

「先方からのご厚意だ。へ円卓会議の参加ギルドを聞いたときに君の名前を出したんだ。君にいたく興味を持っていたようだよ?ぜひ彼も一緒に来てほしいと言っていた」

「いや、知らんがな。」

なんで俺が腹の探りあいばかりしている貴族のところに行かないやなんねーんだよつ!吐くぞ!いいのか?俺、絶対に吐く自信があるからな!!吐く時にお前に吹っ掛けてやるからな!!へ狂戦士からへゲロ戦士へ変えるぞ!!」

「奏、ここは我慢してくれないかな? (ギルド会館への借金の肩替わり)」

「うっ…」

そうなのである。先日の突入時、へハーメルンのギルドホールの壁を千葉に吹き飛ばさせた。その時の損害請求がくにえ一族の方から

きたのである。

その額金貨五十万枚程先のゴブリンの集落での陰陽札による大散財により立て続けに散財することになりさすがに今回の一件はどうにか経費つてことで〈円卓会議〉の方で落とせないとウインクしてみたところなんとかお涙ちようだいでき請求を肩代わりしてもらえたわけである。

そんなわけで〈円卓会議〉もといこの件で尽力してくれたシロエにははつきりいつて強く出れない……

「ちくしょー、覚えてろよっ！この鬼畜メガネ共!!」



「というわけで兄さんは今ごろ東の貴族の総本山に向かって馬車の中」

「はーん。なるほど！奏クンも大変だー」

「兄さんなにかと昔から目を付けられやすいですね。」

犬も歩けば棒に当たるとの派生で奏も歩けば絡まれるっていうか」

「ふふっーそれいいねー！今度奏クンが厄介事の相談に来たら言っただけよーっ」と

「あの一、和やかに談笑しているところ失礼します。」

千葉さん、その肩にぶら下がってるソレ、何ですか？」

「ソレとは失礼だなー。ミノリちゃん。うさぎもどきのフェレットもどきにも人権があるんだぜー。いや、人権じゃなくて獣権か。アレ？獣権ってこの世界にあっただけ？というか元の世界にもなかったなー」

千葉の肩にぶら下がってる赤い宝石のような目をしたうさぎもどきのフェレットもどきの白い毛玉が大して怒った風もなくケラケラと笑いながら言葉を発する。

「コレ？コレはね、私たちと同じ引率者。ミノリちゃんたちのお目付け役。」

中身はちゃんとした人間だよ。この人召喚術師〈サモナー〉だから

〈ソウルホゼツシヨツン〉で中身だけ使い魔と入れ替わってるの」

「マイクロフトっていい嘛ーす。引きこもりでーす。よろしくね♪」

キラーンという効果音が聞こえそうなドヤ顔を決めたマイクロフトもとい白い毛玉は千葉の肩にぶら下がってる体勢からよじ登り、ミノリの頭の上へと跳び移る。

「さあー目的地が見えてきたよヨー!!」

頭上から聞こえてきたすつとんきような間の抜けた声についつい笑みがこぼれるミノリだった。

目的地のチョウシの町に着いたマリエールたち。

チョウシの町といってもマリエールたちが合宿の期間中に過ごすのは町から少し離れた神代の学校の校舎だ。

今は校舎の寝泊まりする教室を掃除したり町に買い出しに行ったりと準備中。

「マリエさん、マリエさん、ホラ！こんなにたくさん梨譲って貰っちゃったよ。」

「んうーっ。ええにおいやんね。後でにゃん太班長にデザートにしてもらおうか。きつとこれは美味しいで」

土地は平坦で、穏やかにうねる大地のあちこちがタイルのように四角く区切られあちらは畑、こちらは田んぼ、そちらは果樹園と利用され広い土地を上手くいかした農地は期待を裏切ることなく多くの農作物を育てているようだった。

〈料理人の〉のサブ職業を持った新人プレイヤーたちも思い思いに様々な作物を手にとつて見たりしている。

マリエールは千葉とミノリを引き連れチョウシの町の町長の所へと挨拶と世間話ついでにここの情報があつたら掴んでおきたいと話す内容を頭の中でまとめながら歩いていた。ミノリの良い娘具合にやられて奏と同じように頭を撫でるマリエールと千葉の三人の姿は年の離れた中の良い姉妹のようで周囲からは微笑みが見られた。

後ろの方で「いやー！たすけてー!!」と大地人の子供たちに追いかけて回されている白い毛玉には同じ引率者たちは深いため息が出た。



「ラグランダの杜？」

トウヤは声をあげた。

ダンジョンの名前みたいではないか。そんな疑問をぶつけてみると直嗣からは「ダンジョンみたいなんじゃなくてダンジョンなんだけ。ボケんなよ」という答えが帰ってきた。

日もゆつたりと落ち空はすっかり藍色に染まり、一行が寝泊まりすることに決めた廃校のグラウンドはいくつもの焚き火で赤々と照らし出されている。

今晚はこのベースキャンプ到着を祝うバーベキューパーティーだ。

姉のミノリは座って一緒に食べていけば良いものを忙しく飲み物を配って回ったりしていたが、トウヤの手招きに気がつくど駆け寄ってきて「どうしたの？」と問いかけた。

「あんなミノリ。ダンジョン行くらいいぞ？知ってた？」

「え、ダンジョンなのっ!？」

先程のトウヤと同じように驚きの声をあげるミノリ。

奏の指導を受けて早くも2ヶ月近く月日が流れたが、ミノリは勿論トウヤも一度たりともダンジョンには挑戦したことはなかった。

奏は基礎の反復練習をとことん重きに置いてダンジョンやら難しい応用やらはもう少ししてから実践すると言っていた。ダンジョンの基本的な立ち回り方は知識としては知っていても不安がないとは言い切れなかった。

「私ですか？」その言葉に白い毛玉を頭に乗せた千菜と直継は頷く「大丈夫だよミノリちゃん。奏くんが今のミノリちゃんとトウヤくんならダンジョンもきつとなんとかできるはずだからって言ったしー」

「そうそう、ミノリちゃん、トウヤ君。兄さんからの伝言だよ『上手いことダンジョンの攻略に成功したらご褒美を用意するぜ。信頼してるよ俺の弟子たち（ドヤア）』だつてさ」

「奏のモノマネ上手いな……さすが兄妹」

マイクロフトと千菜の言葉に少しだけ緊張が和らぎ、奏からの伝言が嬉しく感じる。本来であればこの場にいた自分たちの師匠の期待に応えるためにミノリとトウヤはやるきを奮い立たせる。

「よっし、ミノリ！やるぜ！明日からヘラグランダの杜だっ!!」

「まったく。トウヤったら……もう。私だって絶対にトウヤのレベルに追い付くんだからっ」



—翌日—

「今日のミノリたちはどうでしたかにや？マイクロフト。彼らの後ろをこっそりついて行ってたんでしよう？」

「んー？ダメダメだったねー。最初の最初は良かったけど、突発的な事態になった時冷静さを欠いちゃって、そこから先は泥沼さー」

奏クンの弟子っていうからもうちよつといけるかなーと思っただけど、やっぱりパーティーでダンジョン攻略となると個人の力なんて成功の三十パーセントにも満たないからねー、そこに気づけなきや奏クンの弟子失格さー」

「ふふっ、そうでしたかにやー」

「ところでさーにゃん太ー」

「何ですかにや？」

「猫人族って年齢詐称するのに便利だと思わない？」

「ノーコメントですにゃ」

第十六話 エルノと奏

「うー。ミノリたち大丈夫かなー」

「人の心配をする前に自分の体調の心配をしてくださいね？奏さん」

「面目ないです。ハイ」

「美人さんにずつと付きつきりで介抱されてりや、そりゃあオチオチ眠れもしねえよな。はっははは」

「いい年した大人が美人に緊張して眠れないとか、ワロス」

「ミチタカさん、クイン、マジうるさい……ダメだ反論するのもダリイ……」

前方の馬からミチタカとクインのからかいの声が聞こえてくるが、今は言い返すだけの気力がない。

馬車酔いだ。

昔から、こういう乗り物酔いに関しては酷かった。車だろうが船であろが乗り物であれば何でも酔って目的地に到着と同時に吐いていた。

こつちの世界に来て馬やグリフォンに乗っても気持ち悪くなることになかったから、てつきり〈冒険者〉の身体になったことで乗り物酔いにも耐性が強くなったと思っていたのだったが、そうではなかったらしい。

あちらの世界でもそうらしいが、自分で乗り物を運転するときには酔わないのと同じ理屈らしい。

じゃあなんで馬に乗らないんだよ。という話になるのだが、不覚にも馬を呼び出す為の召喚笛を紛失してしまったのだ。出発の時にいざ魔法の鞆マジックバックから笛を取り出そうとすると、どこにも見当たらなかった。

多分ミノリとトウヤと一緒にクエストに行ったとき湖に落ちた時に失ってしまったのだろう。

帰りは帰還呪文で帰ったから気づいていなくてもおかしくない。

そんなわけで馬車に乗ることになってしまった俺は十中八九酔ってしまったわけだ。

一緒に馬車に乗っている三佐さんに介抱してもらってるわけなのだが。

三佐さんと俺は結構仲がいい。昔、ティーパーティー〈茶会〉が解散して色んなギルドを転々としてへD・D・D.〈におじやましたた時はよく一緒にパーティーを組んでいたし、食べ物好みも結構合う。〉

三佐さんは超のつくほどの甘党なのだ。コーヒーには砂糖をめちゃくちゃ入れまくるし。十個ぐらい入れてた気がする。

同じ甘党の俺でも気圧されるクラスの甘党だった。ぶっちゃけた話コーヒーに砂糖をそんなに入れるくらいだったら別の飲み物飲んだ方がいいと思う。

「なにか失礼なことを言われた気がします」

「きつ気のせいですよ！」

「……まあ、いいでしょう」

俺の周りの人間は読心術を使える人間が多すぎる気がする。オチオチ語りもできやしない。

「三佐さん、三佐さん。お願い聞いてもらっていい？」

「何ですか？」

「へ月照らす人魚のララバイ」歌ってもらえないかな？ エターナルアイスまで寝ときたいわ」

「別に構いませんが。奏君の場合は催眠系の陰陽札を持ってらっしゃいますよね。それを使った方がすぐに眠れるのではないですか？」

「いや、腐っても一応〈魔道具〉だから、あんまりホイホイ使って体に悪影響とか出たら嫌だし」

「作成費がもつたいないと」

「オツシャルトオリデスミササン」

三佐さんは少し微笑むと、三佐さんの周りに水色の波紋のようなエフィクトが発生します。透き通った綺麗な歌声を聴いているうちに俺の意識は水のなかに潜っていくように暗闇へと沈んでいった。

最後に見せた三佐さんの笑顔……超可愛かった。



一行が〈エターナルアイスの古宮廷〉へと到着したのはアキバの街から出発してから二時間ほどだった。宮廷への道のりも奏が馬車酔いして寝込む以外は取り立ててトラブルもなく平穏なものだった。

代表団は総勢十三人。

あまり大勢で押し掛けるのも警戒心を与えるだろうということを入念に選抜されたメンバーだった。

後で分かることだが、この人数は出席者の中でも最少だったらしい。どこの領主も普通はこの倍以上の数で押し掛けるようだ。

ともかくにも貴族と対等に話すというのであれば、〈円卓会議〉側の代表者も出席しなければならぬとクラスティ。次にN.O. 2として生産系の代表者も出席した方がいいと十一回戦ものバカではないかというじゃんけん大会の末にミチタカが、N.O. 3としては実務方面や情報関係の分析が出来る人材を選びたかった。

白羽の矢がたったのは、アキバーの情報屋ギルドのサブマスであるクインであったが、「私は探偵であつて、政治的なやり取りには不安が残る。シロエ殿も一緒についてきてくれないか？」と心にもないことを言つてシロエを道連れにしシロエをN.O. 3に自分はN.O. 4という形に誘導していた。後で奏が聞いてみたところ「だるい。シロエ殿なら何とかするだろう。あの奇策は悪役じみてて面白かつたからもつと見て見たいし」と言つていた。あわよくば対決してみたいか思つているのだろう。

四人の代表が決まつたことで自動的に従者となる人手も加わりクラスティには高山三佐ともう一人。

ミチタカにはカーユという長髪の実務に長けた男性と料理人が二人。

クインには情報収集に長けた人材を二人。

シロエには、最初から「主君は私が守る」とのラブコールしていたアカツキ、自動的に（どこが自動的になのかサツパリだが）オブザーバーとしてヘンリエツタが参加してきたのはシロエとしては予想外だったようだ。そしてエルノールコーウエン直々の指名で奏が雑務と

して参加することになったのだった。

「貴族の酒もこれはこれでうまいかな？」

日も沈みきり、星の小さな光と東の空に昇る三日月があちらの世界と変わらず夜空を照らす中、溶けることのない氷に一部覆われたテラスに奏はワインの入ったグラスを片手に佇んでいた。

シロエたちは今頃パーティーであろうが、奏はさすがにパーティーは勘弁してくれと出席は遠慮した。

シロエも無理やり連れてきたことを悪く思っているのか（奏が馬車酔いしながら呻くようにミノリたちを心配する声を聞いていたし）あつさり構わないと許可した。ミチタカが最後ら辺まで連れていこうとしていたがケツを割かし本気で蹴ったら諦めていった。

「お気に召さなかったかい？」

振り向くと、奏をこの〈エターナルアイスの古宮廷〉へと呼び出した張本人、エルノールコーウエンが出会ったときと同じ黒のロングコートを着て奏と同じように片手にワイングラスを持って立っていた。

「知り合いに腕のいい〈醸造師〉がいるもんでね。このぐらいの酒じゃ物足りないね」

「そうかい」

「そうだよ。で、本題に入ろうぜ。細かい探り合いは好きじゃないんだ。お前は貴族の中では話の通りそうな奴っぽいし仲良くしておきたいんだよ」

「エルノだ」

「は？」

「仲良くしてくれるんだろう？握手は〈冒険者〉の間では友好の印としてするもんじゃないのかい？仲良くするんだったら名前で呼んでくれた方がなんかしっくりくるだろ。親しい友人にはそう呼ばれているんだ」

「お前本当に大地人の貴族か？じゃあ俺も奏でかまわないよエルノ」
「わかった。じゃあ、早速奏の聞きたがってる本題に入ろう。」

君の见えているナニかについてだ」

「つつっ！！！」

「やっぱり見えているんだね。カマかけてみて正解だったよ」

「前言撤回だ…。お前いい性格してるよ。何処の回し者だ？」

警戒のレベルが一気に跳ね上げ低い声でエルノを睨み付け尋ねる。
貴族か？西の連中か？それとも最近感じてる視線の奴か？

「おおっと!?そんなに警戒心を全開にしないでくれよ。僕は何処の回し者でもないよ。カマをかけたのは悪かったよ謝るから」

まさかここまでの反応をするとは予想外だったのかエルノは慌ててことを荒立てる気はないとアピールする。

メガネ相手に警戒を緩めすぎたかと思っていた奏もエルノの必死な様子を見て話を続けることにする。

「どうして気づいた？そしてお前は何を知ってるんだ？」

「君と最初に会ったときさ。君の僕を観察する時の目がおかしかった。これでも貴族の端くれだからね。人のに観察するのもされるのも慣れてるんだよ。」

でも君の観察の仕方はまるで僕だけじゃなくて僕の周りの目に見えないナニかでも見ているような目だったからね。興味をひかれたよ。挙句の果てにはいきなり大地人の貴族相手に握手を求めらんだもの、面白いと思っただよ。

僕はこの宮廷を管理するだけでそれ以外は何もないからね。結構暇なんだ。

それで君と話してみたくなった。

何を知ってるか？ていうのは正直答えにくいね。知っているかもしれないってだけで確証がない。

キミの目にはどんな風に見えるのかを聞いてみないとキミの目と関係があるかどうかは断言できない」

「そうか…。わかった。話してやるよ。俺の目に見えているナニかのことを。いい加減俺もこれについてはハッキリとした正体を知りたかった。」

誰かに盗み聞きされるのもしゃくだし場所を変えるぞ」

パチンと指を鳴らすと奏を中心に今ではメニューを操作せずとも

使える程にこの世界で多用し続けてきた〈聖域結界〉が展開される。

本当は指を鳴らさずとも展開できるが、気分の問題だ。

〈聖域結界〉は簡易的なゾーンを展開する。〈聖域結界〉の中の声は外に漏れることは方にひとつとない。ゾーンとゾーンを挟んでしまえばどんなことがあっても中と外は互いに絶対に干渉出来ない。〈ハーメルン〉を潰す前にクインに調べてもらって発見した利点だ。

奏は文字どおり場所そのものを変えた。

「凄いな。〈冒険者〉はみんなこんなことが出来るのかい？」

「出来ねえよ。一部の人間だけだ。そうそう簡単にやられてたまるかこんなの」

実際に奏の知る数少ない〈陰陽師〉のサブ職を持ったプレイヤーでも〈聖域結界〉を使ったのはゲーム時代には一人しかいなかった。今はどうなっているかわからないが。

盗み聞きの心配もなくなったことで、奏はテラスに備え付けられていた長机と雪の結晶とトナカイの装飾が施された椅子に足を組んで座ると反対側にエルノは座り聞く体勢をとった。

奏は幼い頃からの秘密を淡々とそのまま話した。エルノもそれを黙って聞いていた。

「〈魂魄理論〉」

「？」

「一般的に言って人間や亜人間を動かす霊的な力を魂魄とって、魂魄は魂と魄の二種類が密接に関わったエネルギー体であるという考え方だ。」

魂は精神を駆動するエネルギー。人間の精神は魂の上に存在している魂が強いということは、心の力が強いことを表して魔法の威力もこれに依存するね。魄とは別称MPと呼ばれるものだね。

魄は肉体を駆動するエネルギー。人間の身体の肉体的な強靱さは魄に大きな影響を受ける。魄が強い場合は肉体的な強さだけじゃなく肉体の持つ霊的な力も強くなるらしい。戦士なんかの武器攻撃職はこれを戦闘に利用していると考えられるね。HPが魔法使いよりも戦士の方が多いのはこれが理由だね」

「それが俺の見える力の正体だったか？」

「恐らくね。それに加えてその人のメンタルの動きがが魂を通して見えるんじゃないかな？」

場の力つてのは大気中に落魄した根元的なエネルギーや魔法なんかを使用したときに大気に溶ける精神力なんかだろうね」

「ん？落魄つてのは何だ？」

「人が何らかの理由で死亡したときまず身体が動かなくなるね。この時点では精神は健在だ。でも限界を迎えてしまった肉体と精神は切り離され、外界の光を感じる肉体から流れるはずの情報が途絶えた精神の方は暗闇に捕らわれた状態になるわけだ。

そして魂の拡散。魄は肉体の根元的なエネルギーだ。だからこの拡散は高レベルの身体を持つ存在ほど拡散には時間がかかる。その過程を落魄というらしい。

〈冒険者〉の場合はそこから空気中に拡散した魂が〈大神殿〉に集結、魂の記憶を基に身体の再構築、がなされるわけだよ。大地人は死んじやうけどね。」

「さつきから所々曖昧だな。誰かの受け売りか？」

「ああ、この宮廷に居候しているヨレヨレローブの魔法学者から聞いた話なんだ。会いたかったら紹介するけど？彼ならもつと詳しく分かりやすく説明できると思うよ」

なんだその宛にならなそうなダメっぽい学者と内心この話信じていいの不安になる奏

「いや、今日はいいや。また今度紹介してくれ。今はちよつと落ち着きたいし。一緒に酒でも飲もうぜ〈冒険者〉の酒も飲んでみたいだろ？」

「是非とも戴きたいね」

後日、エルノに紹介されて会う宮廷に居候しているヨレヨレローブの魔法学者がミラルレイクの賢者リィガンだと自己紹介され奏は隣に立つエルノのケツを全力で蹴り飛ばすのだった。

ミラルレイクの賢者、この世界の魔法学者の頂点である。

「うまいなー。こんないい酒はなかなかお目にかかれないだろう」
「なあ誘った俺が言うのもなんだけどさ。お前今やってるパーティーに参加しなくていいの?」

「いいのいいの。あんなパーティー行っちゃって可愛い子なんてレイシアぐらいだからそれに俺は本家の人間じゃなくて養子だしね。最初に言ったら? 僕はこの宮廷の管理をしている自由な貴族なんだって」
エルノはコーウエン家の人間では正確にはない。

勿論コーウエンの姓は名乗っているし戸籍上(この世界に戸籍があるかどうかはわからないが)はコーウエン家に名を連ねている。しかし元々のエルノはコーウエン家の分家の元に生まれた子供だった。だが、エルノがまだ三歳だった頃エルノの両親が治めていた領地で疫病がはやった。領地に住む半数近くの人間が突如にして激しい頭痛と吐き気、身体の一部が動かなくなる症状が発生したのだ。
不幸にもエルノの両親も。

しばらくして〈冒険者〉たちによって疫病の原因であったドラゴンゾンビは退治され、〈冒険者〉の持ち込んだ秘薬により領民の多くは助かった。エルノの両親は助かることはなかったが。

最後まで薬は受け取らなかったそうだ。自分達よりも領民を優先して。

領地は人がいてこそその領地なのだ。人がいなければただの土地だ。

幼少のエルノは理解できなかったが納得はした。両親はただ大好きなものを守ろうとして死んだのだと、無理やり納得した。

セルジアット||コーウエンはエルノの両親の『エルノをよろしく頼む』という最後の願いを聞き入れ、自分の養子としてエルノをコーウエン家へと迎え入れた。

勿論反発がなかったわけではないがセルジアット公は絶対にエルノを見捨てることはしなかった。年の離れた義理の姉レイネシアの

母も優しくエルノを本当の弟のように可愛がった。

けれど養子であるエルノにコーウェン家を継がせるわけにもいかず、エルノももつと自由に様々なことを経験したいとヘターナルアイスの古宮廷の管理者として落ち着いた。

ミラルレイクの賢者がオマケで付いてきたことは予想外だったが。

「別に今日のパーティーをサボったからって何か損するわけじゃあないしね。夜のパーティーでのドレスはあまり好きじゃあないんだよね足が見えないし。まあアレにはアレで良いところが有るけど鎖骨とか」

「ああわかるわ。鎖骨見えるのは良いけどどうしても足は見えないんだよな」

「それと比べて昼に着るドレスはなかなかいいよね。夜に着るドレスに比べてスカートの方が短いからくるぶしとほんの少しだけ生足が見えるし」

「あのほんの少しだけ見えるのがいいよなチラツと」
「だよね」

その夜二人は生足がどうだスカートがどうだ、どのアングルがグツとくるかと酒を飲みながら暑く語り合った。

翌朝、テラスにいくつも転がる酒瓶とテーブルに突っ伏すへ冒険者と管理人のアホ二人が使用人に発見された。

二人の仲はこの一夜にして十数年連れ合った親友のレベルまでたっしていたのだった。

第十七話 千菜の合宿日和

—合宿五日目—

白く長く広がる砂浜。照りつける黄色い太陽の光。砂浜に響く新人プレイヤーたちの声。蹴散らされるカニ共。暇潰しに造られた姫路城。パラソルの影でカラリと音をたてる氷が一杯のソーダ水。夏真っ盛りだなー。

「モノローグなんかしないで手伝ってくださいよ、千菜さん」

声をかけてきたのはさつきまで新人プレイヤーの模擬戦の相手をしてきた小竜君。

私がやつてもよかつたんだけど、新人君のトラウマになりそうだったから自重させてもらった。

師範システムを使っても装備の差なんかもあって下手したらポツクリいつちやいかねないなんてやだよね。

「まあまあいいじゃない小竜君。君も一緒に泳いできなよ。飛燕君も楽しそうに泳いでるよ?」

「あつ!!飛燕おまええ!なにを普通に遊んでんだ!仕事しろ!マリエさんでさえ新人君たちの回復やってるんだぞ!」

「ねえ小竜君、今何気にマリエさんもデイスってたよ?」

「千菜さんも!働いてくれないと、奏さんの秘蔵のお酒隠れて飲んでるのばらしますよ!」

「おい、小竜それだけはばらしたら許さない。姫が全力でしばかれるから」

「合宿に行く前にヘンリエッタさんと奏さんに頼まれましたから」

「あの二人の差し金か!!」

「ええ、『どうせはめはずしてマリエちゃんと一緒に遊んでるだろうから、遠慮は要らねえ……アイツが言うこと聞かない度に念話してこい。アイツの恥ずかしい昔話を教えてやる』だそうです」

「久しぶりに容赦がないっ!!」



あー疲れる。

最近ちよつと兄としての尊厳が地に落ちつつあるから取り戻しておこうという兄さんの思惑にまんまと嵌められダンジョン攻略組の相談にでもものつてあげようとヘラグランダの杜へと続く森の小道を歩いていた。

そこでサボろうとなんては考えていないよ？

「えーと、確かここら辺にキャンプ張ってたよなー、あつ！」

視界の先にはお馴染みの白い毛玉が木の上でモゾモゾと毛繕いをしている。使い魔の身体に移ったら精神の方も寄るんだっただけ？

だとしたら私、サムライ武士でよかつた。

さすがに動物のからだになつたとしても、生肉とか虫とか食べたくないしね。

「おーい！マイクロフトさーん！」

「んにゃ〜？およ、千ちゃんじゃんどーしたの？」

「ミノリちゃんたちの様子を見に来たんだけど、どこにいるのかな？」

「あーなるほど。奏クンの言いつけを守りに来たのねー。オーケーオーケー、案内するよ」

ピョンと木の枝から飛び降りてきた白い毛玉をヒョイと避ける。

受け止めて貰うつもりでいたらしい白い毛玉は避けられたことに驚いた顔をしたまま地面へとヒモなしバンジーに成功した。

グキュペエと見た目に会わないカエルの潰れたような声を上げて顔面から地面に叩きつけられ動かなくなった。

ー待つこと五分ー

「イタタ……ひどいなー千ちゃん。フツー避けるかい？」

「いや、避けますよ、フツー」

顔を小さな手？前足？で抑えながら起き上がる白い毛玉

なんで私が悪いみたいにいってんだらう？フツー抱き止めない。

「なんでさ、顔面ダイブ決めちゃったじゃないかー。思いの外痛いよ。タンスの角に小指を十連撃喰らったくらい」

「いや、私女だし」

「このぐらいの小動物だったら武士へサムライどころかへ冒険者」
「たらず誰でも受け止められるよー」

「いや、だから姫女だし。」

いくら見た目小動物の姿しててもなんで中身成人男性を胸で抱き止めなくちゃいけないのよ。亀仙人かおどれは？セクハラで訴えるぞ。絶対に勝てるよ、圧勝だよ」

「あ……」

そうですね。まったくおっしやる通りでした。ごめんなさい。いくら土下座してもし足りないなこりや……」

マイクロフト、へモルグ街の安楽椅子の現ギルドマスターへ人形遊びと呼ばれて大規模戦闘でも優秀な指揮官としてこれでも名をはせていた男である。

激突したばかりの地面に再び頭をつけ土下座する毛玉。

なっていないなー、兄さんならもつと流麗に土下座するのにな。

「ミス千菜何をしてるんだい……」

「姉ちゃん、動物イジメんのは良くないと思うぞ……」

いつのまにやら黒いススで全身を汚したトウヤ君と金髪の王子様風の男の子ルンデルハウス君、略してルンディー君が立っていた。

ルンディー君はこの合宿でミノリちゃんとトウヤ君あとウチのギルドのセラランと鈴ちゃんこと五十鈴ちゃんと同じパーティーの妖術師の男の子だ。

新人プレイヤーなのにソロとして今までずっとやってきたらしくなかなか骨のありそうな子だ。お調子者だけどどこか憎めないところがある。結構姫の好みのタイプだ

「この毛玉野郎が姫の胸に飛び込んでこようとしたから、裁判前に死刑に処そうかと思つて。どう？二人も一緒に処す？処しちゃう？」

「姉ちゃん、絶対字が違うぞ、ソレ」

「何!?ミス千菜あなたが手を汚す必要はない。このルンデルハウスコードがあなたに代わつて相応の裁きを与えようじゃないか！

さあ、そこになおりましたまえ」

「ルデイ兄も乗らない乗らない。千葉姉の冗談だから……冗談だよね？」

「トウヤ君とルンデイー君に感謝しなさいよ？」

「姫様の寛大なお心とトウヤ君とルンデルハウス君に感謝いたします」

「じゃ、トウヤ君たちにも会えたし、もういいよ」

「ははー。失礼いたします」

毛玉はもう一度頭を下げるとタツタツと走り去っていった。

「千葉姉、一応年上なんだろう？奏兄ちゃんにバレたら怒られちゃうよ？」

「ダイジョーブダイジョーブ。あんなの途中からワザとやってるから、お互い。ルンデイー君が本気にしてたところで笑うの堪えてプルプル震えてたし」

「それが恐怖で震えてたんじゃなければいいんだけどな」

あー、あー、あー、聞こえないい。

そんなこと冗談でも言っちゃいけないんだぞ！お仕置きが怖くなっちゃうじゃないか！

「二人ともダンジョン攻略は今日はお終い？」

「……ああ、今日はもう終わったよミス千葉」

ルンデイー君が唇を噛み締めながら答える。

おーおー、こりや相当上手くいってないなー？

ソロならまだしもパーティー戦は最初は誰でもそんなもんだだけだね。

二人とも負けず嫌いっぽいもんね。

「今から汚れでも落としにくいのか？私キャンプのところに行ってるから、あとで話聞かせてね？なんかアドバイスできるかもだし」

二人と別れて少し進んだところでキャンプを発見したりなんともいいニオイがするなく。

匂いのする方へと行ってみると、なんということでしょう。

本来、新人の面倒を見なくちゃいけない引率者たちが揃ってカニを食べているじゃないですか。

「センニヤちも食べますかにや？」
「ワ―イ！師匠大好き!!」



「どう？ダンジョンは、大変？」

「正直…あまり上手く行ってないです……」

夕御飯を食べ終え片付けやらいろいろ一段落がついた頃合いに焚き火をおのおの石やら椅子やらに腰かけ囲み落ち着いたところで私は単刀直入に聞いてみる。

全員が沈痛な面持ちの中代表してミノリちゃんが答えた。

「うん、だと思った」

私もそれに簡潔に返事を返す。

「なんで上手くいかないんだと思う？」

「それは…連携が上手く行ってないから…」

質問に答えたのは、〈ハーメルン〉からうちに移籍してきた〈吟遊詩人^パ〉の女の子五十鈴ちゃん。

答えはわかっていてもその答えにはまるで何か納得のいかないことがあるように私には聞こえた。気がする。

「僕たちは全力でやっているんだ！それでもまったく上手くいかない！」

レベルも下のモンスターたちに何度も何度も撤退させられ

挙げ句の果てには今日は三時間ダンジョンに潜れていなかった！

僕たちは、どうすれば強くなれるのか、わからない」

「ルンディー君、私は別に強くなる必要はないと思うの」

「何を言ってるんだっ!!ミス千菜っ。こんなところまで来て来て強くなる必要がないなんてふざけるのも大概にしてくれ!!」

ルンディー君が聞き捨てならないといった風に座っていた岩から立ち上がりすごい剣幕で大声をあげる。

「まあまあ、最後まで私の話を聞こうよ。ルンディー君。

セララちゃん、ダンジョン攻略してるときにミノリちゃんと一緒に

回復をやっても回復が追い付かなくなることってあったでしょ?」
「はっはい。何度かありました」

「トウヤ君、モンスターのタゲとりしてるときヘイトが集めきれずに
ルンディー君辺りにタゲがとられちゃったりしたことがあったりし
たんじゃない?」

「う、うん。俺がタゲをとりきれずにミノリたち後衛のところまでモン
スターがいつちまうんだ」

「ミノリちゃん、一回の戦闘が終わってもいきなりモンスターの襲撃
を受けちゃって連戦でじり貧撤退したことは?」

「…三回くらいあります。今日もそうやってダンジョンから出てきま
した」

「じゃあそこら辺の理由はみんな考えてみたかな?」

全員の顔を眺めながら質問をすれば全員がコクリと頷き返答を返
した。

「それじゃあ、その考えたことを全員で話したことは?意見を言い
合ったことはあったかな?」

「全員で話し合ったことはないけど、俺はルディ兄と川で話したりし
たことはある。ミノリとも何回か」

「私も五十鈴ちゃんとミノリちゃんと話したことはあります」

「うん、それじゃ当たり前のことかも知れないけど君たちはお互い
を知っているのかな?」

「何を言ってるんだミス千菜。そんなこと聞くまでもなくバツチリと
わかっているとも」

「五十鈴ちゃんの使える常時発動型の歌の数は?」

「うっ、それは…6つだ!!」

「ルディ、ハズレだよ。正解は9つ」

「セララちゃん、トウヤ君の使う〈武士の挑戦〉の効果範囲は何メー
トルでしょう?」

「あわわっ…私ですか!?!えっえーと…よ、四メートルくらい?」

「おいしい、セララ姉ちゃん。五メートルそこそこだよ」

「ミノリちゃん、ルンディー君の使える支援魔法を一つ答えよ」

「ヘエターナルフォースブリザード」

「それっぽいものを言えば当たる訳じゃありません」

「あう」

久しぶりにそんな中二全開の魔法名は聞いたなー。

昔、いたっけ『ダークネスブラックサンダーサンシャイーン!!!』とかダークなのかシャインなのかわからない魔法名チャット越しに叫んでへライトニングネビュラへ撃つてたやつ。

別にへライトニングネビュラのままかっこいいと思うんだけど。

「ほら、君たちはお互い知ってるつもりでもまだまだわかっちゃいなかったんだよ。」

「やったね！それがわかっただけでもめっけもんだ！」

これからもつとお話したらいいんじゃないかなあ。特技とかそんなのに限らず趣味とか好きな食べ物とか。せっかくの合宿なんだからもつと楽しんでいいんじゃないかな。お姉さんはそう思うよ？」「そうですね！私たち全然お互いのことをわかりあえてなかったんですね」

「さすがミス千菜だ!!僕たちが悩んでいたことをいとも容易く看破してしまおうとは！もはやミスと呼ぶのでは不敬に当たってしまうなこれからはマスター千菜と呼ばせてくれ！」

「いや、それは勘弁」

「よっしゃあーじゃあこれから徹夜してみんなで駄弁り祭りだ！」

こうして合宿五日目の夜は更けていった。

「他の人が眠れないのももう少し静かにするのにな」

師匠に怒られた。

—合宿7日目—

ミノリちゃんたちのパーティーがダンジョン攻略に成功したとマイクロフトさんから聞いた。

急いでみんなのところに行って思いっきりみんなを抱き締めてあ

げた。

男の子二人がキョドっていたのは面白かったな。
今日も楽しい夏季合宿です。

第十八話 奏の宮廷日和

太陽の光をキラキラと反射する氷。テラスから一望できるのは城下町とその先に広がる青い海。聞こえるのは訓練をする兵士たちの剣がぶつかる金属音とそれとは大きくかけ離れた小鳥のさえずり。なんかいつのまにか隣に座っている貴族。

今日も今日とて絶賛宮廷監獄日和だなあ

「帰りたいでござる」

「まだ言ってるのかい？いいじゃないか。ここに来て君の体質の秘密も知れたことだし。それに今日はここ宮廷の魔法学者も紹介すると言っているのだからもう少しありがたく思ってもらってもいいと思うのだがね？」

「落ち着かないんだよ。どこもかしこもだだっ広くてキラキラした装飾がされて、〈冒険者〉の大半はこういうの苦手だと思うぜ？〈冒険者〉はある程度の狭さを保って機能美を迫及するんだ」

真つ白な大理石のテラスでは〈エターナルアイスの古宮廷〉の管理を行っているにも関わらず〈自由都市同盟イースタル〉の筆頭領主の養子という異色の経歴を持つ貴族エルノ・コーウエンと〈円卓会議〉十三ギルドの一席〈三日月同盟〉の平メンバーにして〈高笑い〉の二つ名を冠する〈冒険者〉奏がこれまた真つ白な大理石の椅子に腰掛け、遅めの昼食をとっていた。

「本当だったら砂浜でバーベキューしたり遅くまでみんなで焚き火を囲ったりして楽しく夏の思い出を作っているはずだったのに……」

ハア：なんでこんな腹が黒い連中だらけの貴族の巣窟に来て呑気に飯なんか食ってるんだろ俺」

「その貴族の親玉の息子を前にそんなことを言える君の胆力が僕はとっても羨ましいよ」

テーブルの上に乗った皿のサンドイッチをパクつきながらそばに控えているメイドさんやエルノにお構い無しに愚痴をこぼす奏。

エルノは大して気にする風もなく言葉を返す。メイドさんの方は奏とエルノのやり取りが可笑しかったのだろう若干ではあるが口元

が緩んでいた。

「よし、それじゃあそろそろ向かうとしようか」

エルノが奏の取ろうとしていた最後のサンドイッチを横から掠めとり口へ運びながら立ち上がった。

奏はそれを見てエルノを睨みながらもメイドさんに「ごちそうさまでした」と告げ、先を行くエルノの背中を追いかけ宮廷の広い廊下を歩いていった。

エルノと共に研究室に向かうために外の中庭を除ける渡り廊下を歩いている途中奏は一つの場所に目がいった。

「なあ、エルノあれはどこのお姫様？」

「ん？どこかな。ああ、あれはレイシアだ。僕の姪に当たる子だよ」

奏の視線の先には銀色の絹のように美しい長い髪を持ったまるで氷細工でできているような、触れれば壊れてしまいそうな儚さを漂わせた少女が椅子に腰掛け中庭の騎士たちの訓練を眺めていた。

（クインと比べても遜色ないくらいの美少女だな。

いや、少し癪だがクインがあのお姫様と変わらないくらいの美少女なのか）

クインとは違うタイプの美少女だと思う。

あのお姫様がフランス人形ならクインは雛人形といった感じだ。

まあ、同じ美少女でも片方は見た目だけの女子力皆無の探偵だ比べるのがおこがましいなと奏は心の中でほくそえんだ。

「やっぱり、お姫様つてのは騎士つてのに憧れるものなのかね」

「うーむ、まあ騎士上がりの方と結婚する貴族の娘が少ないというわけではないしなくはないんじゃないかね。うちの義姉も文官上がりの人と結婚しているからね。恋すること事態は自由さ。結ばれるかどうかはおいておいて」

「そこは貴族の間柄だからね。政略結婚なんてのもあり得るし、必ずしも好きな人と結ばれるとは限らないものだよ」

エルノは少し考えて最後にはなかなか世知辛いことを言って返答を返す。

「ははっ。お前としては可愛い可愛い姪が政略結婚なんてさせられる

のは許せないんじゃないかねえの？」

「まあ難しいところかね。ろくな奴じゃなければどんな手を使ってでも引き剥がすつもりではあるが、必要なこととして割りきらなければいけないこともあるよ」

エルノの言葉を聞き流しながら奏はふと中庭へと視線を移す。あんなお姫様が惚れ込むような騎士様つてのは見てみたくもあるものだ。

「うわ、なんでお前がいんの…クラスティ…」

「ん、あれは確かへ円卓会議の代表のクラスティ殿か。へえ、やはりかなり強いね。流石というべきか。」

自分の得物でもない騎士団の両手剣でウチの騎士たち相手に悟らせない程度に上手く加減している」

エルノは感心したように言うが奏としてはあまりおもしろくない。あの鬼畜メガネことクラスティの本性を奏はよく知っているのだ。

いつも柔らかい微笑を浮かべている癖に興味を持った対象にはしつこく飽きるまで弄って面白がるのだ。

〈D・D・D〉に一時期席を置いていたことのある奏ではあるがクラスティに対する苦手意識はかなり大きい。

何を考えているのか見当もつかない上にこちらの考えていることはお見通しなのだ。

それはこの世界が現実となって奏の目が対人スキル仕様になってもその苦手意識は変わらない

あのお姫様がクラスティに興味を持たれる前に何とか遠ざけてやらなければ、そう心に決めた奏は悠然とクラスティたちの模擬戦を見つめるレイネシア姫へと近づいた。

「クラスティのことが気になりますか？」

「えっ？ 貴方様は…クラスティ様と同じ〈冒険者〉の方ですか？」

「はい。はじめまして。〈冒険者〉の奏と申します」

背後から声を掛けられても一瞬戸惑った表情を見せつつもさすがはお姫様といった感じの返答を返したレイネシア姫。

「クラスティのことを見ておいでだったので興味があるのかと思った

のですが、どうでしょう?」

「いえ、そんな私は。確かにクラスティ様は大変素敵な方ではありませんが気になるということは…

むしろ何とか私への興味をそらせないものかと……」

「何かおっしゃいました?」

「いいえ何も」

「あの男はなかなかというかかなり、いえ物凄く癖の強い男ですね。あまり近づきすぎると姫様にご迷惑をおかけしかねないので心配でご忠告をさせていただきに上がりましたのですが、杞憂でしたね」

「もう少し早く忠告をいただきたかったですわ…」

「私も情けない話あの男に散々からかわれていた頃がありましたね。あのときから彼のが少し苦手で、優秀な男ではあるんですがね。はははっ」

「奏様もそんな大変な目に」

「ん?……『も』?まさか、姫様…」

「あつ、いいえ私は別にあの妖怪心覗きに付きまどわれてなど…!!」
「しまった…!!くつきりと姫様の顔にはその言葉が表れていた。どうやら腹芸はそこまで得意ではないらしい。

「あちゃー、手遅れだったか…」

「姫様、本当にごめんなさい。ウチの代表がご迷惑お掛けしています」
「そんなっ頭をおあげになってください。迷惑だなんてそんなことは…ありませんわ」

「今、思いつきり言葉が詰まりましたね」

「なになに、奏。レイシアになんかしたの?場合によっては絶交しないといけないけど」

「エルノお兄様!」

「やあ、レイシア。今日も相変わらず可愛いね」

「ついさっきまで、食い入るようにクラスティと騎士の模擬戦を見ていたエルノが決着がついたのだろう、区切りをつけてこちらにこやかに笑いながら歩いてきた。」

「エルノ、ごめん。俺はお前の姪っ子に大変な苦勞をかけさせてしま
うかもしれない」

「ええっ!?なにっ!?なんでそんな悲痛そうな顔して謝ってくるんだい
!?なにをやったんだい君は」

「厄介な妖怪がとりつくのを防げなかった。〈陰陽師〉失格だ……」

「よし、奏そこに座るんだ。僕が直々にその首を跳ねて上げよう。友
人としてのよしみだ。痛いのは一瞬にしてあげよう」

「致し方ないか……初めての死がこんなところでは……受け入れよ
う。一思いにやってくれ」

「お待ちくださいっ!!お待ちくださいっ!!私なら大丈夫ですからそんな
深刻にならないでください!お兄様と奏様はご友人なのでし
ょう?」

慌ててレイネシアが止めに入る。なにせ本当に奏はタイルの上に
正座で座り込み目を閉じているし、エルノは本気で腰の剣を抜いてい
るのだ。

「ああ／ええ、親友です」

肩を組んで二人でサムズアップをする二人。さっきの剣呑なふい
んきはどこへやらだ。

「お兄様は親友を斬ろうとしていたのですか……?」

「レイシア、これは〈冒険者〉の文化でお約束というものなんだそう
だ。

ある一定のパターンにはまったときに臨機応変に対応していく高
度なものらしい。

極めれば『押すなよ!』の一言でその場に何百人いようとこれから
何が起るのか理解することができらしいのだから驚きだ。

いつかお約束の名人と呼ばれる出川殿と上島殿とやらには合っ
てみたいものだよ。さぞかし素晴らしい人格者なのだろう」

「なにやらよくわかりませんがお兄様が言うことが凄いという
ことはなんとなくは理解できました」

「うむ、さすが僕の自慢のレイシアだ」

熱に浮かされたように爛々と話すエルノに押されがちになり話の
半分もわからないけれど返答を返したレイネシア

レイネシアの返答にエルノも満足気に頷く。

「おや、奏君に：貴方は、たしかセルジアツト公のご子息エルノⅡコーウエン殿でしたかね」

「これは！なんと私も私みたいなしたっば貴族のことをへ円卓会議総代表クラスティ殿に知っていただけにいるなんて、光栄です。改めましてエルノⅡコーウエンです。以後お見知りおきを」

「セルジアツト公のご子息がしたっばなどとご謙遜をこちらこそよろしくお願いいたします」

（この人たちは悪い人だ……）

下の中庭から上がってきたクラスティがこちらに気づきエルノへと丁寧な挨拶をする。それに応えてエルノも丁寧な挨拶を返す。お互いにこやかに握手までしているのにぜんぜん腹のそこを見せていないさぐりあいの瞬間であった。

そして奏とレイネシアの心の声が重なる瞬間でもあった。

「いやあ、やっぱりお強いんですね。クラスティ殿、ウチの騎士たちでは太刀打ちできなさそうだ」

「いえいえ、皆さんなかなか手強い強者揃いの中で勝ち上がり一番になるのは至難の技」

「そうですか」

「レイネシア姫」

「えっ!? あっはい」

「姫、この中でもっとも勇敢な戦士に褒美をお与えください」

「褒美？」

「今宵の晩餐会で姫にお供する権利を」

「おいっちょっと待てよクラス：」「おおおおおおお!!」「」「それはいい!」「よおし! がんばるぞおお!!」

奏の制止も騎士たちの声に無慈悲にかきけされる。

レイネシアもここまで騎士たちに盛り上がられては無下に断れない様子だ。

エルノにいたっては奏と出会った時と同様に面白そうな奴を見つけたと笑い出す始末。

クラスティは事が予想通りに向かつてほくそ笑む

「くそっ！こうなったら、おいつクラスティ！」

その決闘俺も出るぞ。お前のその企み俺が愉快に快活に高らかに高笑ってやる!!」

「ほう、奏君、君も出ますか。これはなかなか楽しめそうですね」

勢いよく啖呵を切る奏にさらに面白いことになったと笑みを強めるクラスティ。

こういったとき大口を叩いた方は大概負ける。これも一つのお約束というものだ



「チクショウ！いつもの刀で戦えてたらまだわからなかった!!」

「アハハツ、あれだけ大口を叩いて無様に負けてたね。」

まあいいじゃないかクラスティ殿の人格も僕も結構理解できたし、あれなら僕もレイシアをある程度任せてもいいと思えたよ。嫁にはやらないけど」

そういう問題じゃないんだよ、主にお姫様の精神的にヤバイんだよ。アイツ怖いんだよ！

そんな会話をしながら歩いているといつのまにやら目的の部屋の扉の前にまで来ていた。

ずいぶんと大きな扉だ。縦の幅だけで五メートルは優に越えているだろう。横幅も三メートル以上はある。

「それじゃあ入ろうか」

エルノがその大きな扉を引く。

その中に広がっていたのは壁一面に広がる扉よりも大きな本棚とその中にビッシリと詰め込まれた分厚い書物の数々と床だろうが机の上だろうがお構いなしにところせましに散乱されている紙の束や見たこともない魔法の品だった。

図書館特有の本の香りとインクの香りが混じった匂いが鼻につく。

「すっげえ広いなあ。」

あつちの世界の大英図書館レベルとはいわないけどここまでたくさんの本が壁一面に埋められてるのは実際に見ると圧巻されるな」

「僕も最初に見たときは同じような感想だったよ。大したものだよ、これ全部魔法関連のものらしい」

「凄いな。アキバの街の図書館にも何度か行ったことはあるけど、あそこはあくまで〈冒険者〉の街の図書館だからな。いかんせん所蔵数が少ないんだよなあ、地図とか民間伝承とかメジャーなものはあるけど専門書となると少ない。」

「リィガン！いないのかーい！」

「いないのか？」

「いつもなら居るんだけどね、というか何処かに行くことなんてフィールドワーク以外ほとんどないんだけど」

「生粋の学者肌って感じだな。そんな人がこんな貴族の巣窟にいて息苦しくないものなんだろうか。」

「いや、ここもいつも貴族がいるわけじゃないのか、会議の会場として使われるだけで年がら年中ここで社交界やらなにやらやっているわけじゃないんだよな。」

「たまに貴族たちがくるだけでこんな広い図書館も貰えて綺麗な城に住めるんだったら良物件ではあるんだよな」

「お呼びになりましたか？」

「うわあっ!？」

「俺とエルノの間に小柄なヨレヨレのローブを来た骸骨みたいなおっさんがよきりと現れた。いきなりの登場に思わず飛び退いてしまった。」

「急に現れるなよ、リィガン。驚いたじゃないか」

「これは失礼いたしましたエルノ様。メイドさんから三時のケーキを貰ってきたところだったのですが、ご一緒にいかがでしょうか？」

「そちらの〈冒険者〉様も、ご一緒に、どうですか？」

「私ミラルレイクの賢者リィガンと申します。以後お見知りおきを」

「ああ、いただきごうかな。君も食べるだろう？」

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうかな…じゃなくて、はい？ミラ

ルレイクの賢者？

おいエルノなんでそのこといままで言わなかった！」

「え？なにこんなヨレヨレのローブ着た学者だし賢者なんて呼ばれるのは凄いと思うけど、別に大したことはないんじゃない？……」

「ヤマト一の大賢者だよ!! バカ野郎！」

「いたあぁいつ!! <冒険者>の力で蹴られたりしたら腰が砕けるよお！
奏え!!」

「おや!?まさか <冒険者>様の名前は奏様というのですか!？」

「え、あつはい。そうですけどそれがなにか？」

「いやー!!これは光荣ですね!!こんなところでヤマトの陰陽師三天王である奏様にお会いできるなんてっ!？」

昨日は大魔導師シロエ様にもお会いできましたし、近頃の私は運がいいっ！光荣ですねえ最高ですねえ。

あのお、お話聞かせて貰ってよろしいですか？」

「ちよつと待った！待て待て待て。えくと、リ||ガンさん、シロエに昨日会ったんですか？あと陰陽師三天王てのは…?」

「はい、シロエ様がこちらに<円卓会議>の代表者として来られているのは知っておりましたので、昨夜お付きの方と一緒にこの部屋に招待させていただきました。

そして陰陽師三天王というのは、陰陽師の中でも特に優れた三人の陰陽師、『光陰』様、『百恵』様、そして『奏』様のお三方をさす敬称になりますね。はい。

なにぶん陰陽師の使う魔法術式は我々が使う魔法術式とは大きく異なりますからね。

それだけ研究してみたい題材ではあるのですがなにぶん陰陽師と呼ばれる方々は数が少ない。

だというのに奏様のような陰陽師の中でも大陰陽師とまで呼ばれるような方にお会いできるなんてっ、感激ですね」

「君、そんなに凄いやつだったのか？失礼が過ぎたかな」

「いや、俺も今初めて聞いた」

なんだ陰陽師三天王って…。もうちょいゴロのいい呼び方はな

かったのか。

「奏様と言えば一時期は陰陽道を広めようと〈陰陽屋〉を開かれていたお方ですからね。私もぜひともお伺いしたかったのですが、あの頃はまだまだ半人前と呼ばれていた時期だったもので…。」

いざ、行ってみようと思つた頃には既に奏様はちようど〈天地の嵐宴〉を治めに行かれていたものですから、そのまま奏様も〈陰陽屋〉をお辞めになられたでしょう？

あのときは、なぜもつと早く出向かなかったものかと枕を毎晩濡らしたものでした。

というわけで、お話お聞かせ願えませんかね？」

「近いっ近いっ近いっ！わかりましたっ！わかりましたからちよつと離れてくださいって！」

「おつと、これは失礼いたしました。ついつい興奮してしまいました」グイグイくるなこの人！でも俺アンタみたいな人、キライじゃないよ。全部答えられるとは限らないけど出来る限りの答えてあげよう。

「それでは、さつそくなのですがお願い聞いて貰つてもよろしいですかね？」

かの六傾姫ルークインジエの一人が〈世界級魔法〉《ワールドフラクション》を行使するために百の術式を用いるために使つた杖。

今現在は奏様が所有していらつしやる〈真光樹の儀式杖〉を、見せていただけないでしょうか。私の研究対象としてこれは是非ともお目にかかりたい、出来れば譲つていただきたい、そして実際に使つてみたいのですが」

〈真光樹の儀式杖〉？

ああ、〈偽光届かぬ佰式の儀式杖〉のことか、文献によって呼び名が違うなんてことはあることだし色んな呼び名があるのは当たり前なんだらうけどあの杖そんなに凄いものだったのかあ。

世界級魔法とか聞いただけでもスケールがでかい。後で詳しく聞いてみたいものだ。今は要望通り魔法マジックの鞆バックから〈佰式の儀式杖〉を取り出す。

「ひゃああーそれが本物ですか!!私更に興奮して参りましたよっ!!さ

あ奏様さつそく触らせてください観察させてください」

「リィガンさん、杖を貸す前に一つだけ」

「はい、なんででしょう？」

「絶対あげませんからね」

「それは…残念です……。では少しの期間お借りするということは…
できないでしょうか？」

「どのくらいの間ですか？」

「そうですねえ。ざつと軽く見積もって三十年ほど」

「借りパクっ!? やつぱりダメだなこれは」

「そんな殺生なあっ!？」

むう……………致し方ありませんか。

実物をこうして見ただけでも大いに収穫はありました。大きなものに光に目を奪われて小さなことを見逃しては目も当てられません。それではさつそくう!」

リィガンさんに杖を手渡す。本当に渡して良かったんだろうか? いや、まあ譲渡不可能アイテムではあるから大丈夫ではあるんだけど、なんか学者の執念でヤバそうだからな。

「奏、君は本来の目的を果たさなくていいのかい? 多分放っておいたらこれ少なくともあと四、五時間はやってると思うが」

「えっマジ? ちよつとりィガンさん? 先に俺の質問にさせて貰えませんか?」

「申し訳ありません。奏様、もう少しだけ待っていただけでしようか?」

よつぽどのことでもない限り私の興味は今、この杖から移せそうありません」

こつちを向くことなく杖をガン見し目をギラギラさせたままそう申し訳なさそうに言うリィガンさん。なんだこの人。

「俺には魂魄がおそらく見えています。それに加えて〈陰陽師〉も外からの力、魂魄と密接な関係があると俺は考えています」

「ほう、それは興味深い話ですね。今、私の興味は奏様の話にそそられてしまいました。流石の一言につきますねえ、もうたまりません。」

少し長くなりますが、魂魄理論の詳しい説明と私の専門分野について、お聞きになりますか？」

「是非とも」

杖に向いていた視線が再びこちらに戻ってくる。とても幸せそうな表情だ。

まるで目の前にご馳走をたんまりと用意されて待てを言い渡されている犬のように。

貴族の世界から少し離れたこの場所で俺の見えている世界は更に鮮明に解像度を増していく

これから俺が見ることになるのは明るい未来なのか、和やかないつもの日常なのか、それとも、暗く閉ざした過去なのか、叩き壊されたリアルな現実なのか

第十九話 奏という名の男の心理

「やーくんはさ、人に世話を焼かれるのは嫌いなのか？」

アイツは突然に脈絡もなくそんなことを聞いてくる奴だった。

いつも思いつきで動いてるんじゃないかと思うほどに唐突に見慣れた三つ編みを揺らしながら人差し指を立てて鼻屑目に見なくても綺麗な顔をぐいっと近づけて聞いてくる奴だった。

その動作に俺は最初はドキマギしていたのだが、少しすれば慣れた。

アイツにいちいちそんなことで心を乱されていたらまともに会話も出来ないから。

「別に、そんなことはねえよ。自分のことは自分でするのが一番望んだようになるからってだけだし」

そんな風に答えた気がする。

「うん、そうだろうね。やーくんはやれば出来る子だし。とつてもいい子だし。」

でもさ、じゃあなんでやーくんは身内に、私とか、千葉ちゃんとか、姫ちゃんとか、シロくんとか、〈茶会〉のみんなとかには世話を焼きたがるのかな？と思っちゃったからさ。

普通自分のやられたくないとは言わないまでもあまり気乗りしないことを人にはしないでしょ」

なにも考えなく思いつきでしたような風に思う質問だけれど本当は狙って言ってる気がするほどに絶妙なところをけっこうついでくる。

この時おり見せる鋭さ？にいつも答える側の俺やシロエ、にやん太師匠は困らせられている。師匠の場合は別段そんなこともなく答えてみせているが、そこは年長者の経験のちがいというやつなんだろうと俺は考えていた。

はて、俺はなんて答えたんだっけ？

自分の返した答えがどんなものだったか思い出せない。大した答えではなかったのかもしれないし、そんなもんなんとなくだと適当に

考えず答えたのかも知れない。

「まったく、やーくんは無意識に意識的だから困っちゃうよね」

そんな言葉を受けて俺は夢の中から覚醒した。

「そんなところが大好きだぞっ！頑張ってね♪」そんな声が覚醒しようとする意識の中、聞こえた気がしたが所詮俺の夢のことなので実際にアイツにそんなことを言われたわけではないのだが、それでも俺は幸せな気分になるのだった。

◆◆◆

パチリ

文字どおり目が開き意識が一気にはつきりする。

スイッチのオンオフが切り替わるようにとはいかないまでも目覚めの切り替えははつきりしている方だと俺は思う。

「相変わらず毒舌女子高生のような気味の悪い目覚め方をするんだな」

「あそこまで俺はドSじゃねえよ」

「じゃあどのくらいのSなんですか？」

「人並みだ」

「モンスターを蹴散らしながら高笑いする人を世間では人並みのSとは呼ばないからな」

「お前はMっぽいけどなクイン」

「あ、やっぱりわかるか？確かに私はSつ気よりはMつ気の方があると思う。お前になじられると、興奮する」

「はいっ!!？」

「ジョーダンだ」

「ソウツスカ……」

ところでなしてお前は俺の部屋にいらっしやるんですかあ？鍵はきちんと締めたはずなんだけど。

いや、やっぱり言わなくていい、どうせピッキングして入ったんだろ。探偵のスキルを悪用するんじゃないやねえよ」

「朝食の準備が出来たから呼びに来た。」

あと残念だったな。鍵はぶっ壊して入って来た」

「そうか、ありがとうと言いたいところだがお前はなにをしとるんだ。バカかバカなのか」

「一発撃ち込んだらすぐに壊れたぞ。しよぼ過ぎるな」

「普通の部屋なんてそんなもんだよ!!お前の思考回路は極端過ぎるっ!!」

フウと煙など出てもない銃の形状をした短杖の銃口部分に息を吹き掛けるバカ。エルノにこのバカつき出しに行かないとな。

とりあえずコイツはともかく他の〈円卓会議〉の面々を長い時間待たせるわけにもいかなないのでパツパとしたくする。エルノにコイツをつきだすのは後回しだ。

髪はさらつとクシを通して整え、顔を冷水で洗う。

エターナルアイスは氷に覆われているからか水も冷たくて綺麗だ。こちらに来た、数少ない役得つてやつだろう。〈円卓会議〉の正装衣装に着替え、髪をいつも通りに縛る。

ここには大きな姿見はないのだが、さすがに寝間着の着物姿はちよつとやばかったと思う。けつこうはだけていた。別に構わないといえば構わないのだが、一応女子の前であんなかつこをしているのはよろしくない。

クインが部屋に勝手にいたのが悪いといえば悪いと言えなくもないけれどアイツにあれくらいに格好は何度か見られたくらいのことはあるけれど。倫理的問題だ。

「オーケー。クイン行こう」

「うむ」

「意外だったな」

「何が?」

「いつも朝早く起きて刀を半裸で刀を振り回しているやつがこんな時間まで半裸でぐーすかとヨダレ垂らして眠りこけていたからな」

「誤解を招くような言い回しはやめなさい。」

いやさ、確かにいつもはそうしてるんだけどさすがにここでするわけにもいかないじゃん。だから、夜にこつそり抜け出して近くの森で稽古してたらいつのまにか〈ヴァイオレットボア〉の縄張りに入り込

んじやってめんどくさくて逃げ回ってたら帰ってくるのが遅くなっ
ちやいまして」

「それは災難」

「クインが幼なじみの女の子よろしく起こしに来てくれなかったら多
分もつと起きるのが遅くなったとおもうよー（棒読み）」

「だ、だ、誰がお前のヒロインだ！」

「お前は恋愛漫画の読みすぎだ！聞いてるこつちが恥ずかしいわ！」

「恥ずかしいがな！」

「それは俺の台詞だ」

「そもそもお前が早く起きていれば私が起こしに行くことなんてな
かったのだ！」

「人の寝顔を観察していた奴の言うことじゃねえよコミュ障。どうせ
どうやって起こしたらいいかわからなくておろおろしてたんだろ！」

「ギクツ…だって、気持ち良く寝てるのを起こされるのは誰でも嫌だ
ろう！流石に馬乗りになって起こすなんて恥ずかしい真似できるか
！」

「思考回路が既にラブコメを通り越してもはやギャルゲー！」

クインと他愛もない？会話をしながら廊下を歩いていく。たまに
すれ違うこの宮廷の使用人の人とは挨拶を交わす。ここ数日はエル
ノと過ごすことの多かった俺はここで働く使用人の人たちとは全員
知り合い程度の関係にはある。こちらに来た役得の一つ、本物のメイ
ドさんとの交流だ。

みなさん最初はちよつと警戒していたようだが、今では普通に接し
てくれる。みんないい人だ。エルノが直接選んだだけはある。

「おっ！やつと来たな。待ちくたびれたぞ」

「すいません、遅くなりました」

「クインさん、顔が真っ赤ですけど大丈夫ですか？」

「大丈夫だ、問題ない」

日当たりのいい広いテラスにはこれまた大きなテーブルとその上
に一杯に並べられた朝食があった。今日の朝食はパンだ。というか
こちらに来てからはずっとパンだ。そろそろ白米が恋しくなってきた

た。

朝の食事とともに大地人の情報、動きを共有しあいこれからの対応を考える。対応するのは基本的にシロエ、クラスティ、ミチタカの三人だが、従者の人間にも何かしらのコンタクトがあるかもしれない色々と考えておいて損はないだろう。

こうして朝の食事はいつものアキバのギルドホームでとる朝食と違って少しの緊張感を孕んで過ぎていくのだった。



俺のこのへエターナルアイスの古宮廷へに来てからの基本的な過ごし方は、この古宮廷の管理人エルノⅡコーウエンと過ごすのが基本だ。

朝起きて食事を済ませ、程よい時間になったらエルノの所へ行く。そこからは様々で、ミラルレイクの賢者リⅡガンの研究室に行ったり、使用人の人らの仕事を見て回ったり、エルノの私室で駄弁ったり、駐在兵の訓練に茶々入れしに行ったりのどれかだ。

三佐さんや、アカツキちゃん、ヘンリエッタさんらは従者として代表四人の補佐に裏で動いてるが、所詮俺はエルノのせいで急遽抜擢された従者なため形だけだ。

まあ、ここで使用人さんたちの話を聞くだけでもかなりの情報収集になるからあながち仕事を全くしていかないわけでもない。

「はあ〜」

「なんだよ、まだ引きずってんのか?」

「いやさ、いきなり初対面で『二人目の奏みたいなヤツだな』って言われたんだよ。しかも真顔で

女性にあんな風に扱われたのは初めてだよ」

「まあ気持ちはよくわかるけども」

ことの発端は、俺がクインをエルノを会わせた（俺の部屋の鍵をぶっ壊したことを謝らせるために）ことだった。

ほぼ初対面の二人だったが特にお互い警戒することなく談笑出来

ていた。しかしクインの一言でエルノはやられてしまうのだった。

『エルノは奏みたいでなんか敬語を使う気にならん』

正に眼中にない宣言。なにか他の誉め言葉は無かったのかと思いましたが、本人は気を使うような相手ではないと完璧に決めてかかったらしく、なにも変わらずそのまま談笑を続けて仕事にそろそろ戻ると言って帰っていった。

人の家の鍵をぶっ壊したやつの態度ではない

「まあそのなんだ、中身はともかく美少女だからってカッコつけるとかウケる（笑）」

「チキショーッ!!」

床に膝をつき心のそこから悔しがる貴族の姿がそこにあった。というか俺のそっくりさんだった。

うわあ、いい大人が本気で血の涙を流して悔しがってるよ。引くわあ…。

いつも同じような醜態をさらしているのは自分だということに奏は気づいていない

コンコン

「エルノ様、失礼いたします。火急の要件で今すぐお伝えしなければならぬことが……、

……失礼しました」

「まっ待って、ちょっと待ってお願い行かないでっ！」

顔を青くして入ってきたメイドさんが更に顔を青くし真顔になって部屋から出ていこうとする。

そりゃそうだ。自分の主が部屋で血の涙を流しながら床をガンガン叩いてんだもん。出ていきたくもなるわ。

「なんかお邪魔っぽいね。俺は失礼するよ」

「お気遣い感謝します。奏様」

何やら大事そうなので部外者は退散させてもらう。メイドさんのお礼を背にドアを閉めると、中からはまずエルノの弁明の言葉が聞こえてくるのだった。

「なんか悪いことしたな」

リリリリリン　リリリリリン

いつもの念話の着信音、字に直すとかったるい鈴のような音が頭の中に流れる。

「はいはい、どうしたシロエ。は？プリン一万？んなもんぼったくりだろ。えっ違う？」

新人合宿でサーフィン？何しとるんだアイツら。えっそれも違う？

とにかくそつちに行けばいいんだな、わかった」

なんかわけわからん。プリンにサーフィンってなんのことや。とりあえず言われたとおりシロエの所に行くか。



「おいシロエどういうことだ。完全になんかおかしいだろ」

「一応の目星はつけてる。とりあえずは状況の確認から入ろう」

会議室に向かう途中でマイクロフトさんから念話での情報は得ている。山中からのヘコブリン最低総数一万の略奪部隊に海上からヘサファギン、総数は不明。

明らかにおかしい。一万なんて兵力はそうそう集まる物じゃない。ゲーム時代と比べるのもなんだが、大規模戦闘でも一万なんて数は出てこない

「少なくとも見積もっても、実際にはこれ以上の数だと僕の方では考えています」

「どういうことかな？」

シロエの言葉にクラスティが反応する。

「今回の侵攻の原因についてです」

『なにか心当たりがあるんですか？』

念話をやりとりを、随行員が行う。今はここだけでなく、遠く離れたアキバの街のギルド会館最上階でも念話を用い中継することで同

時に会議に参加している。

〈西風の旅団〉のソウジロウの発言だろう。

「ゴブリン王の帰還」だろ？シロエ殿」

今まで黙って座っていたクインが会話に入り込んでくる。

「ええ、恐らくは」

〈ゴブリン王の帰還〉

〈エルダーテイル〉がまだゲームだった頃二ヶ月に一回の頻度で開催されていた人気イベント。

レイドイベントとしてはそこまで大規模なものではなく、それに加えて事前のゴブリン討伐クエストの達成率によって難易度も変化するため中堅プレイヤーでも場合によっては参加できるので人気のイベントだった。

各言う俺も〈陰陽札〉作成の材料集めに何度も恩恵を預かっている。「だとしてもこの数は異常だろ…」

「——そうです。普通だったらあり得ない。けれど『ゴブリン王の帰還』には、現実にはほとんど起きなかったために忘れ去られた要素があります」

「二週間の征伐期間の間、ゴブリン王が生き延びた場合、周辺地域のゴブリン部隊をまとめ上げ、数十倍に膨れ上がった軍勢となる。

それに加えての〈大災害〉の影響によって大地人と同じくゴブリンの数が爆発的に増えていてもおかしくはない

それに、我々は前座のゴブリンたちの討伐をまったくおこなっていない。数はゲーム時代の比ではないだろうな」

クインの指摘にシロエは頷く。

「さつきから口数が少ないな奏、なにか心当たりでもあったのか？」

「俺がアサクサに行つたとき、ゴブリンの集落を一つ潰した。今、思えば〈ゴブリン王の帰還〉の前兆だったのかもしれない…」

「それはまあ仕方がないでしょう。あの状況でそこまで考え至れというのは難しいことです」

クラスティからのフォローを受ける。

「だけど、〈大災害〉後のこの世界で生きるための環境作りに躍起に

なっていた俺たちは忘れていたわけだ、ゲーム時代でさんざん利用していたイベントを。

あそこで気づいていればまだなにか手を打っていたかもしれないのに

「もうひとつ、ご報告することがあります」

「ん？なんだい、シロエ殿」

「シロエ？」

全員の視線が集まったのを見て、シロエは話し出す。その表情は若干重い。

「この異世界における『死』についてです。僕たちは大神殿で生き返る。そのようにしか考えていませんでした。経験値ペナルティを支払えば、肉体が蘇生すると。〈エルダーテイル〉がそうだったように、あまりにも無邪気に思い込んでました」

そこからシロエが語ったのはこの世界での『死』のリスクだった。

この世界で死ねば経験値だけでなく僅かだが記憶を失うこと。

魂魄理論

エルノから聞いた学説、あのドツペルゲンガー貴族の紹介で会ったミラルレイクの賢者リガンとその師匠の考え付いた学説。

それを裏付けするクラスティの実体験にクインから語られるマイクロフトさんの考慮していた現象の一つとしての推論。死ぬ度に現実の世界の記憶を無くすかもしれない。その事実は少なからずのシヨックを与えた。

「当たり前のことじゃないか。死ななければいいんだよ。そうすれば記憶の剥落は起きない。それに……」

——人が死ぬのは現実でも生きることよりも楽なことなんだから、現実を途中で投げ出す対価は必要だろうか？

いつもは仲良くおしゃべりする仲である俺とクインではあるがこの言葉の真意だけは理解ができなかった。

でも、やることは決まった

「じゃあ、俺はチョウシの町に行ってくるよ」

ちよっとコンビニ行ってくるよみたいなノリでベタベタに言っ

みる。

「なっ!?いきなり過ぎるだろお前!!」

ついさつきまでシロエの告白に頭を抱えていたミチタカが声を上げる。

「いやさ、そんな話聞いたら動かない訳にはいかないでしょ。俺の教え子がチヨウシにいるわけだし。師匠としては、さ。」

「いいよね?シロエ」

「止めても勝手に奏は行くでしょ?いいよ。いつてらっしやい。その代わりこれの分の埋め合わせとウチのギルメンたちをお願いするよ」

「オーケー。書類整理でも何でもやりますよ」

「うん、そっちは任せた」

シロエと約束を交わし部屋からバルコニーに出てグリフオンの召喚笛を吹きならす。

幸い自室には荷物は何も置いてきていない。

鍵の壊れた部屋に私物をおいておくわけにもいかなかったからね。遠慮なく行ける。

この点だけを考慮すればクインに感謝してもいい。いや、感謝できねえや、やっぱり

「お前が本当に行く必要があるのか?」

後ろからかかった言葉に振り替えるとクインが腕組みして立っていた。

「あっちにはマイクロフトさんがいる。さらには千葉がいる。万がどころか億が一も君のお前の教え子でシロエ殿の大切なギルメンには起こり得ないだろう?」

「どうしてそこまで行きたがるんだ?」

「俺の眼のこと知つといてよく言うよ」

「行動に表すことが大事なのだ。で、どうして?」

ああ、思い出した。俺は確かこう答えたんだっただけ
「俺の大好きな奴がそういうやつだから」

「そうか」呆れたように一つだけため息をついてこちらに背を向けて部屋へと帰っていくクイン。

笛に呼び出されたグリフォンが雄叫びを上げこちらに降りてくる。バルコニーから飛び降りグリフォンに乗りチョウシの街に飛ばす。我が儘で、バカで、アホで、自由で、優しく、人タラシで、いつも笑ってて、可愛くて、足が綺麗で、そして何よりも自分の言ったことは絶対に曲げない頑固な奴だった。

俺の大好きなアイツはそんなやつだ。



景気よく啖呵をきって飛び出した奏。

それからほんの一時間程のこと奏の乗ったグリフォンはチョウシの町を目前にした山中で、何者かによって撃墜されることになる。

第二十話 必殺の白と赤

「クソツ!?なんだってんだっ!!アレは!わけわかんねえぞ!!」

チョウシの町の十キロと少しほど離れた位置にある鬱蒼とした背の高い木々が太陽の光を遮り暗く影をもたらす山

その中で奏は一人悪態をついていた。

〈エターナルアイスの古宮廷〉を飛び立ちチョウシの町まであと少しというところで奏の乗ったグリフォンは突如衝撃を受けて撃墜され真つ逆さまに落とされた。

幸いにも下に広がる山の木々と更にその下にある草がクッションになることで落下死は免れることはできたが現状としては最悪しか言いようがなかった。

グリフォンの召喚笛にわずかにではあるがヒビが入っている。

それはグリフォンに明らかにそれなりのダメージが入っているということを示していた。呼び出そうと思えば呼び出すこともできるではあろうがはつきり言つて愚策以外のなにものでもないだろう。

衝撃が襲う直前、奏は大きな気配を、魂魄を視認していた。

それはとてつもないほどに大きなもの。

ゲームで言うところの〈大規模戦闘級〉レイドランククラスの存在。

この世界に来て初めて出会った自分よりも遙か彼方の上位の存在だろう。あれは一人で相手にしちやいけない。

というよりもあんなの相手にしてる暇なんてない。

一刻も早く奏はチョウシの町に向かわなければならぬのだ。

ビリビリと伝わってくる存在感プレッシャーに奏は苛つきを大にする。

「ヤバいやバいやバいや。あんなの相手にしたら命が何個あっても足りねえぞっ!」

「〈冒険者〉は不死身。命なんていくらでもあるだろうに」

くぐもった男か女かも判別がつかない単調な声が奏の独白に言葉を返した。

「っ!!?」

奏が背を預けていた大木が吹き飛ぶ、木っ端微塵にだ。

大きすぎる存在感に接近を気づくことが出来なかった。

奏は間一髪でその攻撃を前方に跳ぶことでかわす。否、木っ端微塵にされた大木の太い破片がかわしきれずに奏の太ももに突き刺さった。

焼けるように熱くなる太ももを気にする余裕もなく奏は腰の黒刀を抜き身構えた。

黒い漆黒の外套に長い長い太刀だった。その背丈はそう高くはなかった。男なら普通、女なら長身の部類には入るだろうが、あれの性別があるのかなんてそんなことを気にする余裕はまったくくない。

だが、その存在感だけは異常なほどに重かった。

〈灯籠の外套〉：ステータスがまったく読み取れやしねえ。最大まで強化済みか、ネタアイテムにここまでするかよ普通……

「あなたには先に行ってもらうわけにはいかない」

淡白に感情の起伏も感じさせない言葉

「そうかい、俺はここから先に待ってる奴らがいるっ！」

奏の懐から四枚の札が飛ぶ。一枚は朱色の文字が、一枚は藍色の文字が、一枚は翠色の文字が、一枚は白色の文字が、それぞれが黒い外套の存在を包囲するように飛んだ。

そして四体の四聖獣が降臨する。

南の皇、不死の烏朱雀。

東の皇、水蓮の龍青龍。

北の皇、大地の亀玄武。

西の皇、風雲の虎白虎。

レベル90の陰陽師がそれぞれのクエストを受けることによって初めて使役、召喚するための札を作成出来るようになる最高クラスの使い魔である四体。

そのランクは〈召喚術師〉の召喚する使い魔のランクの一段階上〈ノーマルランク〉。

一体でレベル90の〈冒険者〉と同等の戦力を持つ使い魔である。召喚中は容赦なく使役者のMPを削るがその能力は折り紙つき。

「霊奏四重封印」

その四体の最高位クラスの魔法が召喚と同時に黒の外套を羽織る化物へと殺到する。

玄武の出した岩石の山が降り注ぎ、その上で岩石ごと青龍が凍りつかせる。朱雀の火炎が辺りの木々を燃やし山の中にできた小さな氷山を囲むように高い火の壁を作り、白虎の作ったかまいたちの風の壁がそれを更に囲み同時に火炎の壁へと空気を供給し更に炎の壁が高くなる。

奏はすぐにそのまま四聖獣で最速の速さで翔べる白虎に跨がり空へと駆け出した。MPがフルの状態で四聖獣を四体出しっぱなしにして更に最高位魔法を維持できるのはへ龍玉の腕輪による自動回復、MPストックを用いても約五分、この五分でどこまで距離を離せるかで決まる。

だがその五分ですら黒の化物は与えるつもりはなかった。

岩石と氷の山は二太刀で砕き、炎の壁は一風ぎの剣圧で木々ごと蹴散らしかまいたちの壁は両手で上段に構えた一太刀で相殺した。

黒の化物を足止めできた時間はたったの四十秒程度だっただろう。化物はすぐさま空を逃げすでに視界ではぼやけつつある奏を見つめる。

その場でさつきよりも深く腰を落とし、両手でしっかりと柄を握りしめ、上段に構えたその長い長い太刀を、降り下ろしきった。

「神罰の太刀」

冷淡にそう呟いた。

次の瞬間には奏とグリフォンを山へと突き落とした白の剣がまた奏たちに迫っていた、そして徐々に距離を詰めることなく一気に奏たちを通過して力を失い消えた。

「あぶねえ…肩ちよつと斬られたぞ」

もう少し低いところ翔んでたら右肩からバツサリやられてた…」
奏たちの虚像を斬って消えた。

蜃気楼

下方と上方の空気の激しい温度差によって光の屈折が起こり地上にあるものが浮いて見えたり上下逆さまに見えたりする現象。

残りの少ないMPを使い青龍で冷やし朱雀で熱した奏の周囲は僅かではあるが蜃気楼が生まれていた。

化物に早々に結界を突破されたのが逆に功をそうした結果になる。

白虎に上下逆さまの体勢でふん地場ってしがみつく奏の姿は滑稽ではあったがこの醜態を晒すことでなんとか五体満足で奏は化物から逃げ切ることに成功した。

「まんまと逃げられてしまった。まあ、修正はきく範囲。プラン変更
といこうか」

黒の化物は手応えのなさを感じ逃げられたことに気づきながらも大して気にする風もなくそう独白するのだった。



時は少しばかり遡り：

新人合宿においても、新人たちのレベル差には大きく差が存在する。

一番下は一桁の者もいれば、後少しで中堅と呼ばれるレベル帯に到達しそうな者もいる。

下の方に描けカテゴリされている新人はマリエさんの監督する浜辺で巨大なだけのカニを相手に自分の職業の特性や特技についての理解を深める。

真ん中にカテゴリされている新人は一步進んでダンジョンを通したパーティー戦闘の連携を通して副次的に他の職業に対しても理解を深める。

そして中堅一步手前の者達はそれぞれ引率の上級者達からのアドバイスをうけてプレイヤースキルを上げる特訓。

目の前の刀を持った〈剣の神呪〉を放とうと詠唱している男も中堅一步手前の38レベルの神祇官〈カンナギ〉だ。

〈神祇官〉は回復職だ。その為、ソロで活動するのは難しい。これは

〈神祇官〉に限らず回復系三職全てにいえることだ。どうしても攻撃手段に乏しい。けれど、〈神祇官〉は他の回復職に比べてソロとしては活動しやすい。

勿論、武器攻撃職や戦士職には及ばないが。

〈神祇官〉の装備可能武器には刀がある。

〈神祇官〉と〈武士〉は日本サーバー限定の職業として和風の装備が多く用意されている。着物や和鎧、刀に薙刀、和弓。人気も高く和風装備目当てに〈神祇官〉や〈武士〉を選ぶ者も少なくない。

話はそれだが、日本刀は武器の中でも上位に位置する優秀な武器、らしい。

少し前に聞いた奏さんの話によると、

「刀の特徴として『折れず、曲がらず、よく切れる』っていうフレーズが有名だけども、これ本当は物凄いことなんだよね。

相反する三つの特性を両立させている日本刀の凄いところだよ。『折れずによく切れる』なんて普通は真逆の発想なんだけども。

そして極めつけはその軽さだ。日本刀ってのはさ、両手持ちの武器の中で最も軽い部類の武器なんだよ。

今までみたいなゲームの世界だったら武器のステータスだけに左右されてたけど、これからは武器そのものの性質も重要になってくる。

〈神祇官〉が刀の使い方を覚えて接近戦闘が出来るようになるのはゲーム時代以上のメリットになると俺は思うよ」

奏さんの言うように〈神祇官〉が接近戦闘と遠距離からの魔法をこなすというのは大きなアドバンテージなのだろう。目の前の若手の男もそれを理解しているのだろう。

少年の詠唱が完成する前に、〈盗剣士〉の基本的な剣技ヘレイザー・エッジで距離を詰め追撃を行い詠唱を妨害する。

咳き込んで倒れる若手に手を貸しながら、

「距離を空けたらいいのは解るけどまだまだかな。もっと技と技の接続速度を上げた方が良さよ」

「やっぱり遅いすつかね？」

「いや、速さ自体は徐々に慣れれば上がっていくさ。それよりも、動きが素直過ぎるがな？　もっと搦め手とはいわないまでも動きのパターンを増やした方が良いと思う。モンスター相手だったら良いかもしれないけど対人だったり格上の相手だったら単調過ぎると通用しないな」

「なるほど」

男は立ち上がり一連の型を一つ一つ確認していく。
筋は悪くない。

オールレンジでなんでもかんでもこなしてしまう奏さんと比べてしまえば大したことはないと言うしかないが、それは根本的なところから間違っている。

剣技無しで武器攻撃職の自分に模擬戦闘とはいえ勝ってしまうような達人と比べるのがおかしいのだ。

嫌な予感というのは大概当たってしまう。突然鳴った念話を伝える鈴の音のような着信音。

『小竜か!? 浜辺に早よ来てっ!!』

「どうしたんですかっ!? マリエさんっ!?」

『急に海からサファギンが現れて——くっ!! とにかく早よ来てっ! 新人達がっ!!』

マリエさんからの念話がブツリと切れたことで海岸で何かしらのトラブルがあったことを察する。

「くそっ!？」

おい! 今すぐ他のメンバーを集めて旧校舎に引き返すようにするんだっ! メンバーの点呼を忘れないようにっ!!」

指示を飛ばす時間すらも惜しく駆け出し、召喚笛を吹きならす。そのまま走ってきた軍馬に並走し飛び乗る。海岸までトップスピードで飛ばした先、小竜の見た光景は異常そのものだった。

辺り一面を多い尽くさんばかりの、サファギン、サファギン、サファギン。

身長160センチ程の大きな魚の頭をくつつけた細い手足の醜い軍勢に本来は白く太陽に照らされキラキラと光る砂浜は多い尽くさ

れていたのだった。

躊躇したのはほんの数秒。

サファギンから逃げまとう新人たちを逃がすため腰の二本の剣を引き抜き飛び出す。

同じように新人たちを逃がすためにサファギンたちを相手にしている高レベルメンバーと一緒に戦闘を開始する。

戦い始めてから何分経っただろうか。その数は一切減ったように感じられない。むしろ増えたようにすら感じる。

撤退したくとも新人を逃がすために中心部まで斬り込んでしまっているためなかなか下がれない。

「全員、全力で横に跳びなさい!!」

ゾクツッ：

声のした方を見るまでもなくそこにいる全員 が本能的に跳んだ。直後自分達のいたところを身を焼くような極太の熱線が通過した。

熱線はそこにいたサファギンに奥にいた数十体を巻き込み文字通り跡形もなく消し飛ばし地面を焼き海の水を蒸発させ割った。

「早く逃げ切れていない新人たちを連れて引っ込みなさい！ここは姫が引き受ける」

そこにいるのはいつもの赤い大きな鳥が特徴的な碧色の着物を着た千葉さんが身の丈より大きい美しい薙刀を構えサファギンを消し飛ばしながら駆けてくる。

「そんなのいくらなんでも無理だ！俺たちも残ります！」

「いいから下がちなさい。あなたたちじゃ私についてこれない。邪魔なだけよ。」

あなたたちが必要ないわけじゃない、ただ適材適所なだけ。

私の動きを理解しきっている人間がいらないこの状況じゃ私と組める人はこの中にはいない。一朝一夕でついてこれるほど私の動きは、安くない」

「小竜クン、皆さーんここは千葉さんに従おうか。いずれにしてもこ

ここに留まり続けるのはジリ貧になるだけだよー」

千菜さんと一緒に来たのかマイクロフトさんが俺たちに告げる。

確かにこのままじゃジリ貧になる、この場で一番大切なことは新人たちを逃がすこと。

「千菜さん、お願いします」

「任せなさい。……小竜、あなたは十分に立派にやっているわ。もっと強くなれる」

千菜さんの声を背中に受けながら俺たちは新人たちの殿を努めて海岸から脱出した。



「やつと行ってくれたわね」

「もうちょい渋るかどボクは思っただけどねー」

「小竜もバカじゃない。〈三日月同盟〉の戦闘班の班長ですもの」

「違くない」

「それじゃ、ボクも離脱しようかな。邪魔になるし」

「貴方だったらだつたら姫には合わせられると思うのだけれど？」

「勘弁しておくれよ、ボクと姫ちゃんじゃあ相性最悪さあーボクの可愛い使い魔たちを焼き鳥に変えられちゃあたまらないよ」

「誰に言っているの？私の二つ名は〈覇姫〉よ？こんな槍を振り回すしか脳のない雑魚どもと味方の区別がつかないわけないじゃない」

「そこまで上手くないよ……」

でも足手まといにはなるだろー？ボクは掌で踊る人形を観るのが好きなんだ。自分も一緒になって踊るのは苦手なのさー」

マイクロフトも離脱した。

全くあの子よくも悪くも頭が切れるし傍観主義者すぎる。

私のスタイルを理解して攻撃範囲外のサファギンだけにバッドステータスを付加しながら離脱していったのがあの人なりの気遣いなのだろうけど。

「やてと、ふっー」

両手に持つ愛刀へ千紫万紅の大薙刀を背後に向けて一振り、花卉が舞うように炎が吹き荒れ斬撃と共にサファギンを消し飛ばす。サファギン程度の強度では肉片一つ残らないらしい。

そのまま駆け薙刀を振るう、止まっている時間がもったいない。さっさと全部切り捨てよう。

右に左に前に後ろと思うように全力で振るう。地面は抉れ炎が舞いサファギンたちは怯んだのか私から距離をあける。

私を取り囲みサファギンが一齐に飛び掛かってきた。

「姫の御前よ、頭が高いわ。」

「跪きなさい。そしてひれ伏しなさい」

〈後の先〉からの〈電光石火〉。

体全体を使い隙など考えずに威力だけに重きを置いて風ぎ払う。

そのセリフは姫じゃなくて女王様ですよく、なんて聞こえた気がしたが気にしない。

その後、サファギンを全滅させるのに大した時間はかからなかった。



ザントリーフ半島の廃校舎、〈円卓会議〉の主催した夏期合宿に参加している総勢六十有余名がせかさかと片付けをして回っている。

突如海岸に現れた異常な数のサファギンたちと山中に現れたゴブリンの略奪軍。

この緊急事態を前にして、この場にいる唯一の〈円卓会議〉メンバー、〈三日月同盟〉のマリエールが下した判断は、消極的なものだった。

チヨウシの町方向への全員による移動であった。

〈冒険者〉である自分達一行に大地人の町を守る義務はない。ましてや一行の大半は低レベルの新人たちだ。危険な目にはあわせられない。

だからといって大地人の町を見捨てるのも目覚めが悪い。

チョウシの町に少なくとも警告はするべきだ。——その判断に基づいた暫定的な移動だった。

というのが建前で実際に判断を下したマリエールとしては少しの間とはいえお世話になりふれあったチョウシの町の住人たちを簡単に見捨てるという判断ができず、出来ればチョウシの町を守りたいというのが本音だった。

けれど合宿の責任者としては新人たちを危険な目にあわせられないのもまた事実。

それゆえのチョウシの町への移動といった問題の先伸ばしにしかならない消極的な判断をとることになった。

彼女の判断は確かに責任者としては最適解ではないかもしれないなかった。

しかし、彼女の優しい思いは合宿に参加している全員が抱いているものである。

少なくとも、単独行動をとり周辺の家や馬小屋に大地人の住人がいないか、もしいたとしたら町の中心部へと避難するように注意しようと回っているミノリたち五人のパーティーはマリエールと同じ思いだ。

そしてミノリ、トウヤ、ルンデルハウス、五十鈴、セララはチョウシの町の防衛を考えた。

その末、ミノリの考え出した答えは——守らない——だった。
「ミノリっちも随分と勘がよくなったにやあ」

「勝手に悪巧みを始める若い衆はいないかどうか、おにーさんたちが見回りにきたぜべいべっ！」

「我が輩は年寄りなのにな」
「私はおねーさんな」

そこにいたのはにゃん太と直継、千葉。その後ろには距離を置いて小竜とレザリックの姿も見える。

「直継師匠っ」

トウヤも反射的に背筋が伸びる。直継が礼儀作法について厳しい師匠だというわけではないのだが、トウヤの側の意識の問題なのだろう。

う。この歴戦の〈守護戦士〉の前に出ると、自然と背筋が伸びてしまうのだ。

「にゃん太さん……許可してください。お願いします」

「おう。ここは黙って行かせてくれるのが男だぜ」

強い意思を持った目でにゃん太を見上げ頭を下げるミノリにトウヤも並ぶ。

「だから、私は女だつてば！全くどいつもこいつも何で私を女と認識してないかなく？」

「許可もなにも。〈冒険者〉は自由なのにな。もし、本当に決めたのなら、たとえ相手のレベルが上だろうとギルドで世話になつていようと、貫く自由が〈冒険者〉にはあるのにな。——だけどミノリっちそれはそれで大変なことなのにな」

「わかっています。でも、それでもやりたいんです。皆さんにたくさん迷惑をかけるかもしれません。

けど、奏さんが前に言ってくれたように身内だからとことん甘えまです。私たちの力だけじゃどうしようもないんです。だから力を貸してください」

「だそうですにゃー！奏ち」

「うん、いいとも、とことん貸してやるよ。ミノリンのお願いとあれば、おにーさん頑張っちゃうぜ」

「奏さんっ!?!どうしてここに!?!」

いえっそんなことよりその怪我どうしたんですかっ!?!」

振り返ったその先にはにこにここと笑いながら民家の屋根に座り込んでいる奏がいた。

髪もボサボサ、右肩と左の太ももからはじんわりと血がにじんでいる身体中が擦り傷だらけそんなすでにボロボロそうな風体にも関わらず言った

「そりゃあ、ミノリンたちに力を貸すために決まってる。

あとこれはそこでカツコよく登場しようとアクロバットの練習してたらグリフォンから落ちただけだ。

俺はもう二度とアクロバットなんてしない」
奇策師かなでに任せなさい、いつものおちやらけた風にそう言うの
だった。

第二十一話　まるで永遠の二番手

突然現れた奏さんは地図を開き引率の一人一人からここらへんの地形や味方の戦力を聞き出しマリエルさんに傷の回復をしてもらいながら、直継さんたちと一緒に配置を決めていきました。

大まかな戦況なんかはマイクロフトさんに聞いてここにくる途中で偵察もある程度は済ませておいたそうです。作戦も大した時間もかけずに完成させてしまいました。

「奏さん凄かったね。あつという間に私の考えた作戦の足りない部分も補足されちゃったし。」

「私なんかまだまだ全然駄目だね」

「そんなに悲観することはないぞミスミノリ、僕たちはまだまだ発展途上だ。これから追い付けば良いのだ。」

それにしても奇策師と名乗った彼は一体何者なんだい？とつてもクールな称号だ」

「俺たちの先生をやってる人だよルデイ兄。何でも出来てメチャクチャ強いんだ!!」

「ほう、ミスミノリとミスタートウヤのteacherか！ではとつともなく優秀なんだな」

「おいおい、お前らあんまり勘違いしてやんなよ？奏のヤツは万能に近くても全能ってわけでもねえし全知ってわけでも全くないんだぜ祭り」

「直継さん」

私たちが奏さんの働きっぷりを見て話していると直継さんが呆れたような顔をして話に入ってきました。

「どういうこと？直継師匠。奏兄ちゃんに出来ないことなんかあるのか？正直兄ちゃんなら出来ないことなんかないって感じがすんだけど」

「正直私もそう思います」

正直奏さんに出来ないことなんかないんじゃないかと本気で思っています。私たちでは考え付かないような作戦を考えて私たちより

ずっと強い。レベルとかそういうステータス的なことを取り除いたとしても。

「はあー、お前ら勘違いしまくり祭りだな。奏のことを勘違いしまくりだぜ。奏に目の前で助けたヒーローってことであいつのことを美化し過ぎちまつてんじゃねーか？」

あいつはお前らが思っているほど頭も良くねえし、強くもねえ。バカみたいなことも考えてるし、アホみたいなこともあるんだよ」

「そんな、勘違いだなんて!!」

「そうだぜ師匠！俺たち勘違いなんかしてねーよ」

直継さんの言葉に少しだけカチンとします。声をほんの少し大きく私とトウヤは反論します。

「奏は奇策師なんてさつきふざけて名乗ったけど、全く真逆だぜ。あいつの提案した作戦は全部昔の軍師が考えた陣だったり対応なんだよ。いわば定石中の定石。勿論アレンジは加えてるけどな。」

あいつが昔の戦い、えーと、なんだったかな？兵法書？なんかをとことん調べて覚えてたんだぜ。

それに考えてもみろよ。奏が本当に奇策師なんてもんだったら、お前らを助けるための作戦を考えたシロが〈茶会〉の参謀なんてやってねーって。

奏よりシロの方が参謀として上だからシロが参謀だったんだよ。

オマケを言えば〈茶会〉ではあいつは、パーティーの第一〈回復役〉でもなければ、第一〈壁役〉でも、第一アタッカーでもなかったよ。単体で言えば妹の千菜の方がずっと強いし。あいつはとびきりの天才だからな」

「そっそうなのか？とにかくミスター奏よりも凄腕の人が沢山いたということなのか？」

「そうなるな。一芸においてはだけど。」

だからわかってやってほしいんだよ。あいつの強さはそういう自分より秀でてるヤツに追い付こうとして身に付いた知識や実力なんだって。

才能だけでスパッとやってることなんかじゃないんだよ。結構無

茶やらかして自分だけ負担を沢山背負い込むなんてざらなんだって」直継さんはいつものおちやらかした口調なんかじゃなくて真剣な口調で真つ直ぐに私たちに向けて告げました。

お前らと根本はなんら変わりなんかないんだって、そう言い聞かせるように。

確かに、奏さんに過剰な理想を押し付けていたかもしれない。

いつも余裕そうに笑ってる奏さんは確かに強いし頭も良いんだけどでも私たちと同じなんだ。

強がりも言うし誰かに頼りたい時もあるのかもしれない。

私たちの期待に応えようと無茶もしてたりするのもかも。私たちに甘い奏さんなら全然あり得る。

「じゃあ私たちは奏さんが少しでも無茶しないですむように頑張らないとですね」

「奏兄ちゃんが暇過ぎて居眠りできるくらいにな」

私とトウヤの言葉を聞いた直継さんは「そりゃいい。たまには奏もカッコつけるのをやめさせてやれ」とカラカラと笑って満足気に頷きました。



『奏さん！第二奇襲パーティー、ゴブリン小隊と接触しました。恐らく他の小隊がしばらくしたらそちらに行くと思います！』

「了解。相手側が退いたら深追いし過ぎずに次の小隊を探せ。手負いにするだけでも効果としては充分だ」

『わかりました』

プツリと念話は切れミノリたち第二パーティーがゴブリン小隊と接触したのをそれぞれの隊の隊長に念話し警戒を上げるよう指示を飛ばす。

「とりあえずはこんなもんか。さてとこれからが大変だな。

千菜くそろそろゴブリンどもが来るぞく準備しとけく」

『あいよ〜』

「なあ、カナ坊今さらなんやけど聞いてええか？なんでこんな陣形なん？いくら何でも無茶ちゃうかな？」

「なんでって、マリエちゃん説明聞いてなかったの？」

「いや、聞いてわおったよ。でも、ウチにはちよーっと難しくて途中からわからんようになったって…」

「なー……。どこら辺からわかんないの？」

「えーと……。チョウシの町を三つのポイントで守ってるってところから？」

「最初からじゃねえーか!？」

「ひい。ゴメンな。謝るからそんな怖い顔せんといて〜」

アワアワと小さくなって上目遣いに謝るマリエちゃんを前にしてしまえばこちらとしてもなかなか攻めづらい。

いつも笑ってる笑顔もいいけどこういうのもアリだと思います!!
まったくカワイイは正義っすね

「はあ…マリエちゃん、ミノリンの考えた作戦の足りない部分ってなんだと思う？」

「なんでミノリン呼び？」

「そこはスルーで。話が進まないから」

「えーと、相手さんとこっち側の数？」

「そう、わかってるじゃん」

「さっきカナ坊が説明してくれとったからな……」

「ゴブリンがチョウシの町に仕掛けようとしてるのは波状攻撃だ。こちらの倍以上の数での力押し。数の有利を生かしたごり押しだね。」

「こういうシンプルに強い作戦てのはなかなか対抗しにくいものなんだけど。」

「そこでミノリンが考えた作戦はこうだ。」

「相手が好きなタイミングで攻撃出来ないように後手にまわらず先手を打ってしまおう。」

「波状攻撃てのは絶え間なく攻撃が続くからこそ絶大な効果を発揮するけどその攻撃の間隔が開けば開くほど効果は薄れていくからね」
「なるほどミノリは頭ええなあ。ウチじゃ絶対思い付かへんわ〜カワ

「いいし頭もええし自慢の教え子やね」

「それについては激しく同意なんだけど、話しが脱線するからこれ以上は乗らないよ?」

「あ、ゴメンな続けて続けて」

「主導権をあちらに握らせないとってのが目的なんだけど、今回の場合それでも数が違いすぎる。こちらの数が少なすぎるんだ。

本当だったら奇襲部隊は二パーティーじゃなくて三パーティーは欲しいんだよ」

「なんで三パーティーも必要なん?二パーティーぐらいであとは全部防衛に回した方が不測の事態とかに対応しやすいんちゃうかな?」

「不測の事態があるからこそだよマリエちゃん」

「ほえ?」

「考えてもみなよ。もし奇襲部隊の戦闘が思いの外長引いたり、戦闘が出来ないような状態になってみなよ。根本から作戦が総崩れしちまうぜ」

「なるほどなく。で、カナ坊はどんな風にしてそれを解決したん?」

「一つとしては遊撃隊をダンジョン攻略組の上位パーティーにやらせた。俺の指示の下必要なところに迎えるようにスリーマンセルで常に戦場を動き変え続けるように言っておいた。

二つ目はこの陣形そのものだね」

「そう、そこなんよ。いくら何でもここだけ数少なすぎるで〜」

〈魔法の靴〉^{マジックバック}から地図を取りだしマリちゃんに見えるよう広げ基石を三つのポイントに置く。

「いいかいマリエちゃん、チョウシの町を守る上で守るべき箇所はこの四ヶ所だ。

一つは千菜がサファギンを撃退した浜辺。とりあえずここは今のところは考えなくていい。

二つ目は山から直接通じる一本道。ここは道が狭いから多分そこまで沢山のゴブリンはやってこない。近接戦闘組が中心の布陣だな。

比較的低レベルの連中でも戦いやすいフィールドだな。

三つ目はチョウシの町に続く田舎道。ここはただだっ広く沢山のゴ

プリンが一気にやってくるだろうから高レベル組をさっきのところと比べて増やしてる。それとさっきのところとは対照的に遠距離からの攻撃が出来るやつらが中心だな。

そして四つ目、俺らがいるチョウシの町の真横を流れる大河をわたるためのこの大きな橋。こちら側にわたるためには絶対に通らなければならぬこの大きな橋だ。

奇門遁甲の陣形。細かい説明は省くけど今回使ってる陣形だよ」

「奇門遁甲って……ナニ？」

「ざっくりと言っちゃったらまーるい円の中に閉じ込められちゃって一カ所だけそこから簡単に出られるようなところがあつたら……マリエちゃんどうする？」

「そりゃあそこから出ようとするんちやうかな？簡単に出来るんにかしたことはないやろし」

「そうだけ。効率的に物事を解決しようとするのは普通だから。そこを利用する。ここを突破するのは簡単そうだなって思わせたら勝ちだ。主導権はこつちが握ったことになる」

「いやでも突破されちゃうやん！」

「だから思わせるだけだつて。充分に敵戦力を叩けるだけの戦力は用意してある。少数精鋭だよ。殲滅力が高く機転も利くやつらがここにはいるんだつて。橋の先頭では千葉が、真ん中ではマイクロフトさんと遠距離攻撃が得意な連中で固めてるし、その後ろでは俺が確実に仕留めれるように罠もはっておいた。

最悪抜かれそうになったら橋ごと落とすし……」

「なっ!？」

橋ごと落とすつて、カナ坊！それ橋の上の皆はどないすんねん!？」

「一緒に落ちてもらうよ。全員が二つ返事でかまわないつていったし」

「いや、だからつて、」

「大丈夫。〈冒険者〉の身体はマリエちゃんが思ってる以上に丈夫だから。俺とミノリンとトウヤだつてこれくらいの高さから水の中に落ち

たことがあったけどピンピンしてたし」

「そういう問題やないと思うんやけど」

「それは最後の手段だよ。俺だって仲間を水の中に突き落とすなんてしたくないし」

「突き落とすつちゆうか叩き落とすって感じやけどな……」

「気にしちや負けだせマリエちゃん。とにかくここでゴブリンを一網打尽にすることそれがこの陣の目的其ノ一。」

「其の二ってまだあるん!？」

「あるよ。というかこつちが本命だ。」

目的其ノ二、人員削減。

ここで少数精鋭にすることで他の戦場の味方の絶対値を底上げするってことかな。

まあ、根本的な今回の問題点は圧倒的な数の差だから、そこさえ解決しちやえばゴブリンなんて敵じゃねえよ」

「はあくよく考えとるんやね〜お姉さん感心するわ〜よし頑張ってるカナ坊にご褒美や。むぎゅ〜してやるで。むぎゅ〜」

「ちよつ!?!マリエちゃんやめてつ!?!恥ずかしいつ!?!恥ずかしいからつ!!」

なにするんじやウチのギルマスはつ!?!抱きつくくな!!抱きつくくな!!貴女はパンツ騎士にでも抱きついたりときやいいんだから!!勘弁してくれ!

「カナ坊は変なところで根性ないなくいつもは余裕そうに笑つとるのに」と言つてなんとか解放してくれた。

助かった、こんなんやつてる場合じゃねえっーの

ドオオオオオン!!

橋の先頭から大きな爆音が聞こえてきた、空気が揺れる。

『兄さん、ゴブリン小隊と接触しました。数は三小隊どちらもゴブリンのみの編成です』

「オーケー。潰せるだけ無理せず潰してくれ。飛ばしすぎて戦えなくなったら困る」

『わかったわ』

「なあ、カナ坊」

「うん？」

「カナ坊がなんで怪我の本当の理由を隠してるんかはわからんけど……無理したらあかんよ？」

なんか困ったときは頼ってな。ウチはカナ坊のギルマスなんやから」

こんな時でも、いやこんなときだからこそ不安になるんだろう、マリエちゃん言葉に俺は微笑を止める。

「マリエちゃん、やっぱり俺は〈三日月同盟〉に入って良かったよ。そういうところ大好きだぜ？ギルマス」

満面の笑みで素直な感謝の気持ちを伝える。少しでもマリエちゃんの不安が和らぐように

「うん、ウチもカナ坊が好きやで。ガンバるな？」

アレの存在を今はマリエちゃんたちには教えられない。

チヨウシの町を守ると強い意思を見せているミノリたちの意思を挫かせるわけにはいかないし、その気持ちに応え責任を負ったマリエちゃんにさらなる不安を負わせるわけにはもつとていかない。

幸い、気配は追ってくる感じはしなかった。

それにあんなの今度こそ近付けば即座に反応できる。少しでも力を感じるようだったらチヨウシの町を棄てさせてでも俺はミノリたちを逃がす。

生きていればやり直すことはなんとかできるのだから

一抹の不安を奏は胸の中に残しながらもチヨウシの町防衛戦が本番へと入っていく。

第二十二話 全開姫モード

いつかした話をもう一度しよう。

〈極者〉

七番目の追加拡張パックで追加されたサブ職業。能力は至ってシンプル、ステータスの割り振り変更。

〈エルダーテイル〉で設定されているステータスはHPとMPを除いて基本は五つ、筋力値、敏捷値、回避値、防御値、魔法値、〈極者〉はこれの一つ一つを減らし他のステータスに減らした分だけ振りなおすことが出来る。

当時、このサブ職業が実装されると判明したとき一部のプレイヤー間には大きな震撼を与えたものだ。

〈エルダーテイル〉非公式掲示板〈ニワトコ板〉の『男のロマンを語るSレpart82』では、『夢の極振りキター(。▽。)|ー|』というコメントで溢れ帰ったとかなんとか

とにかく盛り上がりが凄かった。

しかし……、二ヶ月後には〈極者〉の活動報告は掲示板で見ることがなくなかった。

戦えないのだ。まったくといっていいほど。

ステータスを振り直せるといっても制限はある〈極者〉のレベルによって一つのステータスにつき何割までと決まっている。

レベル90の状態で振り直せるステータスの割合は六割、〈エルダーテイル〉の戦闘は通常攻撃においては自動攻撃の仕様をとっていた。その為必要最低ラインの耐久力は持っていないと、ただの通常攻撃で簡単に死んでしまうのだ。

防御値と魔法値の数値を敏捷値に全て回してなんてことを考えたものもいたが百パーセント躲せるわけもなく、一撃食らったら終わりなんて状況では焼け石に水だった。

その逆で防御値と魔法値に火力を落として高めたやつもいたらしいが、火力が落ちた状態では特技だけではタゲをとりつつけることが出来ず前者より悲惨な結果になった。

とにもかくにもサブ職業〈極者〉はプレイヤーに一時の夢を与え、その夢を見たやつを谷底に突き落とすとしたサブ職業として〈ニワトコ板〉では語り継がれることになったのだった。

〈極者〉を経験した者はそれを知らない新参者へと語る

『お前らは知っているか？通常攻撃で死んだときのあつけなさを。笑えるぜ？』

『お前らは知っているか？パーティーが自分以外が全滅させられて敵に囲まれて必死に抵抗するんだよ。敵のHPバーは全然減らない。俺のHPバーも全然減らない。やがて特技が使えなくなって、通常攻撃をしているうちにいつの間にか殺されるんだよ。なんでいつの間にかなのかって？下手したらカップ麺作って食ってもお釣がくるんだぜ？やってられつかよ』と

そんな中に一人だけいまだに〈極者〉であり続ける奴がいた。

俺の妹千菜だ。

千菜は〈極者〉としては典型的な前述した攻撃型だ。

ただし、覚悟が違うが。経験値ペナルティを恐れて最低限の耐久力を残した腰抜け共と違い防御値も魔法値も回避値も全て捨てた超攻撃型ビルド。

攻撃と素早さだけにステータスを割り振り盗スワッシュバックラーバックラー 剣アサシン 土や暗殺者の速度にも対応出来るだけの速度と圧倒的な物理火力を手に入れた。加えて薙刀を使うことで火力に更に拍車をかけ広い攻撃範囲を手に入れたことで真正銘の極振りになりなんかもうヤバかった。

最初のうちはよく死んでいたが徐々にその数も減っていき二週間もしないうちに〈極者〉を極め一ヶ月もしないうちに完璧に使いこなしていた。

そのときにはやっぱりウチの妹は天才かあと乾いた笑いを浮かべながら嘆くことしか出来なかった……。



「はあああっ!!」

愛刀を振るってゴブリンを消し飛ばす。

ゴブリンたちが攻めてきてどのくらい時間がたったかはわからない。だが全然余裕が残っている。奇襲部隊が上手くやっているのだろう。

兄さんからは少しでも余裕がなくなったらすぐに後ろに下がってマイクロフトさんたちと合流しろと言われていているけれどその必要もないと思う。

格下の相手に全部を仕留める必要がないなら余力を残して十分に戦える。

「ウオオオオン!!」

現れたのはダイアウルフ三体にボブゴブリンが二体、ゴブリンが四体、ゴブリンシャーマンが三体の計十二体。

ボブゴブリンでも私の攻撃を防ぎきるとは思えないけどこれは、

「数が多いわね」

別にダイアウルフとゴブリンシャーマン辺りを潰してしまえば抜かれても全然大丈夫だと思うけどだからといって抜かれるのもなんだか癪ね。全滅させましょうか？

「模倣〈クイックアサルト〉」

ゴブリンシャーマンのもとに素早く駆け込み、石突きで一体を下から殴り飛ばし残り二体の首を切り飛ばす。これで魔法を使ってくるやつはいない。

《鏡花水月》

私がアサクサの頃から何か兄さんの役にたたないかと考えて見いだし、今の今まで訓練を繰り返してきた今までに存在しなかった新しい私だけしか使えない特技。

〈極者〉のステータス変更を戦闘中に行い他の職業の特技を模倣する。

例えば、さつき使用した〈クイックアサルト〉これは盗剣士の特技

だ。素早いフエイントで相手に突進し隙をつくり、次の攻撃へと繋げる。沢山の盗^{スワッシュユバックラー}剣士が使う基本的でありながら優秀な特技だ。

これは素早さのステータスに攻撃に振っていた防御値、魔法値のステータスを割り振り高速で突進しすぎさま次の攻撃に繋げる出来る。因みににゃん太師匠の「ヘクイツクアサルト」をこの合宿中に見せてもらって覚えた。

模倣するだけだから追加効果が出ることはないけれど、もともと特技というのはゲーム時代にプログラミングされたものだから隙が少ない模範的な動きに近い。

対人戦なら相手の動揺を誘い隙をつくることも出来る。

何より動きを真似するだけだから再使用制限^{リキャストタイム}時間も使用後の硬直時間も無い。

弱点としてはこの目で実際に見た特技じゃなければ模倣出来ないことぐらいか。ゲーム時代に見たキャラの動きだけじゃ模倣は出来ない

一瞬のうちに自分達の後ろにいるゴブリンシャーマンの下に近づき殺したのだ。ゴブリンは驚き襲いかかってくる。

《鏡花水月》を使い駆けてくるゴブリンとダイアウルフに向けて「フエイタルアンブッシュ」を抜き放つ。

タメの時間が少し短いから、ダイアウルフが思ったより速く詰めてきたわね。

ダイアウルフ二体とゴブリンが三体炎の刃に消され、それを見たゴブリンとダイアウルフ、ゴブリンの動きが止まる。

いいのかしら？止まつちやっつて？

「模倣（アクセルファンク）」

私の攻撃力だったら止まったりしちやっつたら当たらなくても余波でも死んじやうわよ？

ズバアアアーン!!

轟音の後には千菜の後ろに立つものはおらず花卉のような余炎が空気の中に溶け混むだけだった。

「へ玄武」出てきてくれ」

深い緑色でなにやらごちやごちやと書かれた一枚の札を魔法の靴取り出しヒヨイと空中に放る。

すると札の中から、緑色の葉が一枚出てきたかと思うとどんどん葉は増えていき札を中心に渦巻き大きくなり札を隠してしまう。マリモのように緑色の巨大な球体が出来上がったかと思うと、中からあちらの世界では見ることの出来ないような美しいときえ思えるほどの苔に覆われた巨大な甲羅を背負った貫禄ある亀が出てきた。

「玄武、働きづめで悪いんだけど防壁を作ってほしいんだ。この橋から先に抜けないように、三枚ぐらいで上から下に向けて攻撃が加えやすいようにしてくるれとなおい」

のっそりとした動きで眠そうなたれ目をこちらに向け俺を一瞥するとコクリと頷き前足をグワツと上げ立ったような体勢になったかと思うと前足を凄いい勢いで地面に叩きつけた。

地面がゴゴゴゴと揺れたかと思うと盛り上っていき橋を覆うようにして半円状の壁が一枚、また一枚と建っていくなかなか分厚く上に登り下に向けて攻撃を加えるのもしやすそうだ。

「ありがとう玄武、もう帰ってくれていいよ。お疲れ様」

玄武はゆっくりと頷きのっそのっそとこちらに近づいてきたかと思うと頭を俺の足にコツつとぶつけると出てきた時と同じように葉っぱに包まれて帰っていった。

「三割ってところか……。まあこれクラスのを造ればこんなもんか」

陰陽札の中でも召喚札は特殊な札だ。出した召喚生物をだし続けている限り常時MPを持っていかれる。だから長時間は出しておくことが出来ない。

その分召喚師サモナーと違いモンスターのランクはへミニマムではなくへノーマル」と高性能ではある。さっきみたいに出して用事を済ませ

たら直ぐに帰ってもらうのがセオリーだ。

神祇官カンナギの特技へ式神遣いへならそういつたコストパフォーマンスを考えずに出しておけるんだけどな。実際、今も呼び出した小鳥ちゃんを飛ばしている。

「嵌めたかな？これ」

今のところは全てが優勢に予定通りに進んでいる。

あの化物の気配もここに到着してかなりの時間がたっているが一切感じない俺を殺したかったのならここについてからも何度か襲う隙はあつただろうから諦めたと見て構わないだろう。

防壁の上に胡座をかき望遠鏡を覗き込むがゴブリン一匹たりともここまで抜けてくる様子はない。

この作戦ゴブリン相手には見事に嵌まってしまったのだ。人間相手ならこんな定石だけを打つたら負けてしまうのだが、ゴブリン相手にはこれが最善策だったわけだ。

ビギナーズラックという言葉があるがあれは初心者と戦う相手は上級者であればあるほど勝率が上がる傾向にある。

ポ○モンなどが良い例だ。

読み合いを必須とする場合定石というのが出てくる。ある場面での最善策がを予め考えておくのだ。こういうのは固定化され上級者の人間たちには共通認識となる。それを踏まえた上で定石を手玉にとる奇策というものが勝負を動かす。

しかし定石を知らない初心者は打つ手全てが上級者には奇策になるのだ。定石が全く通じない。

本来なら引つ込めてくる場面で出っ張り続ける。普通だったら持たせない技を使わせる。

読み合いが全く通じない。これほどまでに厄介なことはない。勿論負けることはないだろうがいいところまでは追い詰められたりしてしまうこともある。

上級者としては中途半端に知識をつけた中級者が一番やりやすい。

上級者の天敵は初心者というのはゲームに限らず結構な頻度であり得るのだ。

ゴブリンは初心者冒険者は上級者（人によるが）といった具合なわけで、一流の人間はそんなの意に介することなくはね除けるけどな。そこで奏さんは考えた訳ですよ。

だったらシンプルに自分達の戦いやすい布陣で相手に嫌がらせしながら戦おうと、奇策つてのは相手の考えを読んで打つもの。読めないなら奇策は打てない。至ってシンプル。シンプルイズザベスト。

「はあく、暇だわ」

自分も戦場に出て戦いたい。でも一応指揮官の身である自分が非常時でもないのに戦うことは出来ない。

ジレンマに悩む奏であった。

第二十三話 先駆者

一晚、とりあえずは一晚凌ぎきった。

戦闘持続能力の高い連中を集めていたけど正直ギリギリだったからな。何度か橋を渡ってきたやつらもいた。

千菜を休ませるためにこっちに呼び戻したときだけだったけど、防壁も一部が壊れたけど全然問題ないレベルだし。

夜の戦いはひとまずこちらの勝利でいいだろう。

夜が明ければゴブリンどもの攻撃は波を引くように減少した。今は最低限の見張りを残し全員をチヨウシの町まで引き上げさせている。

「よっこいせつと」

「大丈夫かい？なんなら僕の使い魔貸すけどー？」

「いや、いいすつよ。無駄なMP使わせるわけにはいかないし。それに昔はよくこんな風にして家まで帰ってましたし」

へソウル・ポゼツションにより白の毛玉から本来の姿、銀の毛並みに金の眼を持った猫人族へと戻って戦線に参加していたマイクロフトさんから気遣いの声がかけられる。

背中には、夜通しの戦闘に疲れて眠っている千菜。小学生の頃なんかはよく遊び疲れて歩きたくないと駄々をこねる千菜をしようがなく背負って今と同じように家に帰っていた。

まさか二十歳を越えてからこれをするとは思っていなかったけど、これはこれでなんとなく安心する。やっぱりたった一人の妹なわけだし。

存在をきちんと肌で感じられるのは安心する。背中に感じる千菜の重さと暖かさを懐かしみながら、他の防衛組よりは軽い足取りでチヨウシの町を中心まで歩みを進める。

「私は〜重く〜ないっ！」

ガスツ

千菜の重さ改め軽さを感じながら俺たち大橋防衛組はマリちゃん

たちの待つチヨウシの町まで歩くのだった。

割りと千葉の頭突きは痛かった……

「奏さくん!!どうしたんですか!?千葉さん、どこか怪我でも……」

「にやはははは。大丈夫大丈夫、ちつと疲れてるだけだから」

「おーい!!ミスミノリ宿屋の方が汚れを落とさせてくれるそうさく。

「おや?ミス千葉大丈夫かっ!?どうしたというんだっ!?はっ!!まさか僕たちがゴブリンの部隊をあまり押さえることが出来なくて、押し寄せるゴブリンどもを止めるために傷を……いや、ちが……」すまないっ!!すまないっ!!ミス千葉

僕がもつとたくさんのゴブリンを倒していればバフンツ!!」

なんかいらん方向に勘違いして懺悔し始めたわんころにヘッドバットを食らわし黙らせる。千葉を抱えてるせいで両手が使えんからしょうがない。

「勝手に人の妹を死んだ風に言うんじゃねーよ。

フンデルハウスⅡコード

生きとるわ。きちんと俺の背中直に心臓の音を聞いとるわ」

「踏んでますっ。ホントに踏んじやってますよ奏さんっ」

— 閑話休題 —

「ミスター奏すまないっ!!全くもって失礼したっ!!」

「いや、もうわかりやいいんだよ。というか俺もちよつとやり過ぎたすまんかったわ」

あのあと俺と目の前にいるルンデルハウスは騒ぎに駆けつけてきた五十鈴ちゃんと俺を止めにかかっていたミノリンに正座させられ仲良く説教をくらった。

ルンデルハウスははやとちりしすぎだし人の話を聞けと俺はやり方が雑すぎるともつと大人な対応をしろと

去り際のミノリンの「そういうえばこんな人だったなあ……」というため息混じりのお小言は印象的というか絶望的だった。やべえ、失望されたかも。

「ああ、そうそうルンデルハウス」

「ん、なんだミスター奏？」

「お前、大地人だろ」

ルンデルハウスに向けて放たれた奏からの言葉はルンデルハウスの隠していた秘密をなんの迷いもなく看破したという一言。

この合宿中仲良くなった五十鈴にしかばれていない秘密、五十鈴にばれたのも偶々の偶然でしかない。

それなのに会ってまだ一日も経っていない人間に看破された。ルンデルハウスの動揺は大きかった。

「ビビんなくて。別にとって食おうってわけじゃねえんだから」

「ど、どうしてそれを？」

「ヒミツ」

「……みんなには、黙っててもらえないだろうか」

「いいよ別に。でもお前死んだら死ぬんだぜ？そこんどこわかってんの？」

「ああ、わかってる。でも僕はなりたいんだ〈冒険者〉に」

「ふーん。まあ、深いところまでは突っ込むつもりはないけど約束しろ、死ぬな。ヤバイと思ったら全力で逃げろ。」

お前が死んだらミノリたちは泣くぜ？それだけは覚えとけ。

ミノリたちを泣かしたら地獄の底でも追いかけて泣かす。いいな？」

「わかった。約束しようルンデルハウスⅡコードの名に懸けて」

「さてさて本当に信じていいんだか……」



「このまま無事に終わってくれればいいんだけどな……」

「随分と弱気じゃないですかにや？奏ち。」

「なんか胸騒ぎがするんだよね。フラグ回収みたいなの？今までが好調だった分そのツケが回ってきそうな気がする」

「病は気からといいますが、いや病というわけではなくともそういった悪い予感を考えすぎると実現してしまいますにや?」

「師匠と話していると安心するね。最近はこちらと緊張感のあることが多かったから敏感になってるのかな?」

「それはよかったですにや」

緊張を解くため大きく深呼吸。

高レベル組を集めて戦況の報告をしあう。うちの戦場以外は全て危なげはなかったらしい、ただ疲労の蓄積は大きいと。新人たちに一晩かけての防衛は戦力的余裕があっても精神的にはキツいか。早く増援が欲しいところだ。

シロエからの念話じゃクラステイたち先行打撃部隊はナガシノにいたらしいし、その戦況でこっちの対応も変わってくるな。最悪の場合は撤退も……アリだろう。

まあ、あの狂戦士に限ってポカやらかすわけがないだろうから大丈夫だろうが。

「奏兄!! 大変だ!!」

「!?、どうした!!」

「いいから、取り合えずこっちまで来てくれ」



「1000や2000じゃきかなさそうだな……」

「最低でも1000はいますにや」

トウヤに案内されてやってきたのは俺たちが防衛に陣取っていたチヨウシの町に繋がる大橋だった。

戦闘の痕跡なのかとどこどころ大きく削れたりひび割れたりしているがそんな中でもここにいる全員の注意は水平線の向こうに向いていた。

水平線の向こうに見えるのは大漁の魚頭、こちらに向かってくるサファギンの第軍勢だった。

さて、どうするかな、っていうかも真っ正面から叩き潰すしかな

いんだけどな…。全員無傷はキツいだろうな。

ぎりぎりとは弦を引き絞る音がした。

新人の暗殺者^{アサシン}や、多くの戦士たちが弓をつがえている。弓が不得意な小竜は、それでも太い金串のような投げナイフを構えているのだ。

「ぶつ……くつくつくつ、あはっはっはっはっはっはー」

「かつ、奏さん？」「だっ大丈夫か？カナ坊？」

気がおかしくなったんじゃないかこの人？そんな視線が新人たちからはぶつけられ、ミノリンとマリエちゃんからは心配するように声をかけられる。直継は俺の顔をまじまじと見るとニヤリと笑い師匠はいつも通りのニコニコ笑い。

「いや、ごめんなさい。

俺お前らのこと過小評価してたわ。舐めてたわ。これだけの大軍見たらビビってちったー怯むかと思ってた。

そんでビビってるやつはすぐにアキバに帰して数が多いようだったら本気で撤退しようと考えてた」

「ばかだなー奏。

この合宿に参加したやつらがそんな腰抜けになってるわけないだろ祭。

マリエさん、いつちよ景気づけに号令頼むわ」

直継は大きく笑っていった。

こういう時直継がいてくれるだけでだいぶちがうな俺だけじゃ変な人の失礼な発言で終わりだからな。新人たちも俺にム力つくだけだし。

「わかったで。えっと。……あ、あんな、みんなな！」

「今まで力貸してくれておおきに！みんなの力でチヨウシの町はひとりの犠牲者も出さず、多くの田畑を荒らされずにゴブリンからの攻撃はしのいだ。

でも、もうちよい。こっちの敵も倒さんと終わらん…。この町を守りきることにならん。もう一戦、力を貸し手や……。うち、みんなな

らでできるって信じとる。——ん、いこうっ!!出陣やつ!!」
「「おおうつ!!」」

「くくっ、俺には絶対マネできんわ。このカリスマ性」



「千菜、開戦一撃目頼む」

「ス——、ハ——、ス——、筋力値UP→敏捷値DOWN←〈鏡花水月〉へ一刀両断〉!!」

最上段に構えられた薙刀が一機に降り下ろされる。

放たれた斬撃はへ千紫万紅の大薙刀から生まれる炎を纏い周囲の
空気すらをも焼こうとせんばかりの熱量をもちサファギンたちのど
真ん中に向かって回避不可能であろう速度でぶつかる。

砂浜に上陸していたサファギンたちを真つ二つに両断しその先の
海すらも焼き切り裂く。

「あのサファギンどもを止めろ。」

チヨウシの町の地を一步たりとも、

——踏ませるな」

「おおうつ!!」

「いくぞ千菜!!」

「ええ、本気でやるのはアサクサ以来でひさしぶりですけどついてこ
れますか? 兄さん」

「なめんな誰に言っただやがる」

「ふふっ。いらぬ心配?」

隣を並走しながら今まで見たことのない妖艶な笑みを向け問いか
けてくる千菜。姫モードは色気が強くてお兄さん結構好きですよ

「心配してくれて嬉しい限りだよ、でも俺を心配する暇があるなら一
匹でも多く敵をほふれ」

「任せなさいっ!!」

へ夜刀 風月玄沢を抜き放ちサファギンの軍勢のど真ん中に飛び
込む。目の前のサファギンに飛び蹴りを決め後ろの連中ごと千菜の

方に吹き飛ばす、決して千菜の攻撃範囲にははまらない。

足を斬り、目を潰し、武器を壊す。ダメージが余波だけでHPが削りきれないヤツにはすぐさま止めを、千菜の〈禊ぎの障壁〉があると五秒で壊れる。詠唱開始まであと三秒。

「凄い（すげえ）奏さん／千菜姉」

「えっ？」

「ははっ。さすが双子息ぴったり祭だな。お互い憧れる対象は違ったけど」

「えっ、だって直継師匠なんだよ、あれ。二人とも半端ないんだけど」
「直継さん、よかつたら奏さんたちのしていることの解説をしてもらえませんか？」

「んー、千菜のやつってる瞬間的な火力の底上げはいまいちわかんねーから説明が中途半端になっちまうけどそれでもいいならいいぜ」

「お願いします」

「千菜のやつてるのは単純な実力差だよ。圧倒的な火力にどうやってんのかは知らねーけど特技の模倣による無駄の最少化加えて敵が自分に与えるダメージを減らすための位置取りと攻撃。

至ってシンプルなことだけど全部を同時にこなすのは至難の技だ。

奏のやつてるのは^{オーバーバックアップゾーン}へ過保護な加護領域へて本人は言ってたな」

「!?」

頭に疑問符をいくつも浮かべるミノリとトウヤを見て微笑みながらも直継は説明を続ける。

直継も最初これを聞かされたときはどんなものなのか見当もつかなかったものだ。逆に名前だけで見当がつくやつなんているわけないが

「ダメージ遮断魔法が壊れる瞬間に最適投射、ダメージを与えても削りきれない敵へのほぼ同時攻撃、敵の最善配置数の最適化、敵戦力の弱体化、仲間が心理的余裕を保ち続けて余計な動きを減らし余裕をもって戦える敵の数を差し向けて最高の環境を保ち続けようとする。

シロの〈フルコントロールエンカウンター〉とはまた別ベクトルの戦略だな。

ワンパーティーで80%四人で90%二人までなら100%カバー出来るとか言ってたな。

まあ、今はゲームの頃とはだいぶ違ってきちまってるからワンパーティーで80%とか四人で90%は無理かもしれねえけどな」

カナミにメチャクチャ連れ回されていつの間にか出来るようになっていた、なんて本人はケラケラ笑いながら話していたが、本当はカナミに付いていくために奏はこの技術を身につけたんだと直継は思っている。

あのいつもキレイな笑みを浮かべている年下の友人はカナミに対して恋とか愛とかとは別の、それと変わらないほどに強い感情を抱いているのは常々感じていた。

〈茶会〉の面々は全員があの人たらしのことが大好きなのだ。その好きの形は敬愛や友愛とそれぞれ違っていたがそれだけは確信して言えることだった。そして奏は中でもずば抜けてカナミへの気持ちが強かった。

それがどんな感情かはいまいち分からなかったが、それゆえに〈茶会〉のときはインテイクスとはしょっちゅう喧嘩していたものだ。

カナミのために力を振るいたい、その気持ちの結晶こそがああ技術なのだ。

「よく見とけよ。二人とも。あの二人お前らにとって最高峰の教材だぜ？」

第二十四話 出せる力を振り絞って

槍先が左の袖を掠めて少しばかりの傷を服につける、そんなことをお構いなしに傷つけられた主は振りきられた槍を踏みつけて槍を振るった魚の頭を持つサファギンの喉元へと躊躇なく自慢の愛刀を突き刺し引き抜く。

視線はたつた今奪った命には向いてすらおらず、その視線の先には今しがた殺した魚頭と同じ種族が数体口は早口に動いていてもの数秒で何かをいい終える。いい終えた瞬間に無数の剣が出現しけたましい声を挙げて迫ってくる化物の足元へ殺到し何匹かの身体を貫きながら牽制する。

刀を持つ逆の手には、既に後ろ腰に備えた鞆へと伸び何枚かの札が握られ間髪入れずに仲間たちが取りこぼした残兵へと雷の槍や炎の竜巻、風の刃を送り込んでいる。

「ハアツ、ハアツ、」

息が荒い、身体中が足りない酸素を求めている。否、頭の方へと酸素が回りすぎている。もっとと身体中に均一に回さなければこのルーチンワークを維持できない。

「兄さん、一旦下がって！」

流星に長く出すぎよMPの枯渇で頭も大して回らなくなってきたでしょ！」

千菜からのストップがかかる。

「ならお前も下がれっ、さつきから攻撃が掠り始めてきてるぞ。集中力切らし始めてんじゃねえか…」

出せる声を振り絞って言い返す。

「奏！スイッチだぜ！俺たちと交代祭りだ！」

「そろそろ休憩を混ぜるのですにや。オーバーワークは逆効果ですよ」

俺たちが下がることに気づいた直継たち引率者パーティーが素早くスイッチへと入る。

「悪い、任せた」

サファギンの槍をカウンターで斬り上げながら、バックステップで後方へと下がる。一番後ろまで下がり終え、荒れる呼吸を整える。

いったいどのくらい戦っていたかなんて検討もつかない。

「どうぞ、ポーションです」

「ありがと、小竜」

小竜から差し出されたポーションを受け取り一気に飲み干す。

レモンのような果汁と柑橘類の皮のような苦味を合わせたような味が口の中に広がる。この不味さだけはいつになつたら馴れるのか。

「少しずつだけど勢いは削げつつはあるわね」

「ああ、あともう少ししたら増援も来るはずだ。それまでもてばいいんだが」

ある程度呼吸も落ち着き、自らの回復呪文で半分を下回っていた千菜と俺のHPを回復させ、あとはポーションでのMPの回復と精神の回復を待っているところだった。

高い悲鳴が砂浜の喧騒が止まない戦場に響いた。

「おいっ！あの子ヤバイんじゃないか!?」

「誰かカバーに入れないのか!？」

「ムリ！密集しすぎて近づけないよっ!」

戦場にも幾人かの張り裂けんばかりの、やけくそじみた声が飛ぶ。

悲鳴の間こえた方向には、一人の少女がパーティーから孤立させられて何体ものサファギンに囲まれている光景があった。サファギンたちは今にも少女に襲いかかろうとしているうえに回りの味方も戦場が密集しすぎていて助けに入れずにいた。

「千菜、俺をあそこの中心までぶっ飛ばせ。俺がついたら斜線に入つてようが構わず風ぎ払え」

「そんなことしたら兄さんたち多分死ぬわよ?」

「大丈夫だ、問題ない」

「じゃあ兄さんこっち来て、私に背中向けて両手を上に上げて」

言われた通りに千菜の目の前に立って背中を向け両手をバンザイするようにあげる。グイツ、いきなり首根っこを掴まれて身体が宙に浮いた。

舌噛まないようにね、そんな声をかけられた次の瞬間、

「必殺、天井サーブ！」

「ヴェツ！」

いつのまにか薙刀の腹の部分が高下駄の底に添えられておりそのまま全力で天高く放り出された。

遮蔽物なんて全くない空中を見事な孔を画いて飛び自由落下の法則に従って俺の身体は砂浜へのダイブへと移行した。

中途半端な弾道では勢いがつきすぎてしまっただけで通りすぎてしまう上に俺は海の中、サファギンの独壇場へとシユートしてしまう、かといってまっすぐにぶん投げて敵や味方関係なしにボーリングのピンのように一緒になって跳ねてしまっただけだ。

ならば、狙い定めてあの子のもとへとゴルフボールよろしくホールインワンを狙った方がいいだろう。理にかなっている。だが、「さて、どうやって着地したらいいと思う？」

この高さから落ちたらこれはこれで危ないわっ!!死ぬ!実の妹に殺される!

ワケわからんやつに殺されかけ、実の妹にも殺されかける、おつかしいなく、さつきまで結構シリアスしてただけだな。なんでこんなギャグじみた突入してんだ?

思考が纏まる暇もなく狙いバツチリ虎穴もとい魚穴へとホールインワンを果たして俺は顔面からの着地に成功した

「ねえ、お嬢ちゃん首が変な方向に曲がっちゃったからちよつと戻してくんない?ゴキツてやるだけでいいからさ後で飴ちゃんあげるから」

「ちよう、そんなことやってる場合じゃないですっ!もうキテますっ! 囲まれちゃってるんですっ!」

「いいからさ、早く早く、じやないとサファギンじゃなくて熱線に焼かれちゃうから、等身大の暗黒物質ダークマターにはなりたくないでしょ。

あっちのお姉ちゃんに思いつきり焼き払うように言っただけからさ」

視界のすみには既に薙刀を大きく振りかぶって構えた千葉の姿が

ある。

サファギンも襲いかかってきているが、首を捻った体勢のまま刀を抜いて牽制する

「もうっイヤアアア!!」

ゴキツとお嬢ちゃんにぶん殴られたことで首がいい感じに戻った。お嬢ちゃんを脇にすぐに抱えて、特技を発動する。いや、今はもう魔法と言った方がいいかもしれない

その瞬間、世界が区切られる。あちらとこちらに区切られる

こちら側には俺とお嬢ちゃんが、あちら側にはサファギンや千葉たちが、存在が不確かそうな黄金色の幕が球心状に俺を中心にして広がりサファギンを拒絶するようにしてサファギンの手前で固定される。

サファギンたちの槍は弾かれ、触れたものから吹き飛ばされる。

この世界にお前たちは受け入れない。そう物語るように強く拒絶した。

弾かれたサファギンたちが宙を舞った瞬間激しい赤の斬撃がサファギンたちを襲った。問答無用でサファギンたちは焼ききざまれ落魄の光が宙へと溶ける。

その地面を焼きサファギンたちを灰塵に帰す千葉の深紅の一閃すらも黄金の幕は断固として通さない。

いかなる存在も攻撃もこの結界は拒絶する、完全無欠の絶対防御名を〈黄金領域〉

後に、世界をつくる魔法と称されるようになる新たな魔法

「はーはっはっ!!演出ご苦労オオ!華々しく散らせてやるから感謝しろよお!!この雑魚どもがあ!」

炎をバツクに高笑う奏。台無しだ。

「あのお、下ろしてもらっていいですか?」

「あつ、ゴメンね」

脇に抱えた茶髪のお嬢ちゃんから苦情が入る、少女の目はしらーと冷めたものである。

助けた相手にこんな目を向けるようなこともそうそうないだろう。

「奏!大丈夫か!」

直継がやつとの思い出こちら側に到着する。

無理矢理押しとおつてきたのか無理いつて一人で来たのかパーティーの他のメンバーはまだこっちには来ていない。

「んー大丈夫大丈夫。二人とも怪我一つないよ」

「ほんとかあ？お嬢ちゃん怪我不いか？こいつに変なことされてないか？」

「なんで怪我以外の心配が入るんだよっ!？」

「いや、だってお前年下には結構ウザイ祭りだろ？」

「友人からのいきなりの罵倒!」

「初めて（父親以外の男性に抱き抱えられる経験）を奪われました」

「そして誤解を招く返答!!」

「もういいや：後でこの誤解は解くとして今はこの状況を切り抜けよう。」

おい、おパンツ騎士さつさと他のパーティーと合流するぞ。話はこの戦いを終わらせてからだ」

「なんだ？衛兵に自首するんだつたら付き添ってやるぜ祭り」

「軽口叩く暇があるなら少しでもヘイトを稼げ、俺まだ完全に回復しきってなかったんだからな」

さつさと休ませろ、そういつて奏は刀を構え直す。直継もそれを見て盾を構え直して前へと飛び出した。

砂浜の戦場の喧騒はまだまだ止む気配はなさそうだ。

第二十五話 大団え…

奏はこの世界が異世界になってしまったことで戦闘面で大きな一つの問題を抱えた。

〈オーバーバックアップゾーン過保護な加護領域〉の壊滅的な弱体化。

奏の最も知名度の高い〈高笑い〉の二つ名とは別にある〈百鬼祓い〉という二つ名を冠することになった由縁となる戦略技術。

それまでにあつた二つ名は〈高笑い〉を除きこれの影響で一新されたといいほど周囲の奏への印象を変えたもの、この奏の代名詞といつても過言ではない技術の弱体化、彼にとってそれは自身のスタイルを検討し直す必要性も生まれる問題だった。

本来、〈オーバーバックアップゾーン過保護な加護領域〉は〈天虎の高下駄〉の能力による移動時でも魔法の行使可能化、サブ職業〈陰陽師〉の作成する陰陽札と〈竜玉の腕輪〉のMPコストパフォーマンスの高さから〈エルダーテイル〉のハイエンドコンテンツであるレイドに対しても優秀な技術として成り立っていた。

しかし、ここに二つの問題が生まれてしまった。

いつぞやにも話したことだが、〈エルダーテイル〉がゲームから現実が変わってしまったことで〈視野の狭小化〉〈観察対象の複雑化〉の二つだ。

特に一つ目は致命的だった。

人の視野は正中線を基準にして左右に80度から85度程度が限界。ゲームの頃のようなアバターを斜め上から見るような視点から一気に狭まった。

〈オーバーバックアップゾーン過保護な加護領域〉はシロエの〈フルコントロールエンカウンター全力管制戦闘〉と違い接近戦闘をしながら味方の攻撃力や防御力、足りない部分を補ったり長所を生かしやすいように敵を制限したりするものだ。視野の広さは必要不可欠。

大災害直後、アサクサで活動しているときは良かった。

基本は千菜と組むだけだったし、慣れるためにソロで戦闘をこなすことの方が多かったから。

しかしアキバの街も〈円卓会議〉が立ち上がり生活に余裕が出てきた頃には〈三日月同盟〉、ミノリやトウヤらの低レベルの子達のレベルリングなどを手伝ったり、シロエたちと自分達のレベル帯にあった敵と戦ううちに違和感を覚えてしまったのだ。

ゲームだった頃よりも確実に精度が落ちている。

仲間へのダメージ遮断呪文の最適投射の成功率が八割五分にまで落ちた、敵に与えることのできるダメージ率が自分が想定していたよりも低い。

それはゲームから実際に自らの身体を使ってモンスターと戦うことによる僅かな誤差

奏は接近戦闘をしながらの補助だ。時には壁役時には攻撃役と回復職と兼ねてやっている。シロエのように後ろで戦況を観察、分析しながら魔法と仲間への指示での補助ではない。勿論後ろに下がった方が回復職や〈付与術師〉や〈吟遊詩人〉のパフォーマンスは上がるが、奏はそれだけはしなくなかった。

こんな風というと語弊があるが、別に奏は後方支援がしたくないというわけではない。

元々が生粋の後方支援だったのだ。後方支援を馬鹿にするつもりは毛頭ない。

ただ、カナミのために編み出したこの戦い方を捨てるのが嫌だっただけだ。子供っぽいしようもない理由だった。けど奏にとっては大事なことだった。

視野の狭さはしようがない。頭の後ろに目玉をつけない限り広げようがないのだから。

観察対象の複雑化はもう慣れた。とことん経験を積みばなんとかなる、はず。

そこで奏は更に手数を増やすことにした。

特技や魔法の階級を上げるのはこの異世界となった今では難しい。レイドコンテンツに挑戦するのは今となってはリスクオーバー過ぎるからだ。それに多用するものは既に秘伝もしくは奥伝に至っている。どうしたものか、奏勧誘は考えた。

とりあえずは知識をつけることにした。

幸いにもにやん太の発見したサブ職業のメニュー画面を使わない料理作成と同じように他のサブ職業でもメニュー画面を使わない作製法は通用することは立証されていた。

そこになにか突破口があるんじゃないかと奏はアキバの図書館に籠り様々なことを調べた。

クインに「ハーマルン」の身辺調査と一緒にゾーンの情報を依頼したのもその一環だった。

「陰陽師」特有の特技「聖域結界」の可能性も感じていたのも一端だ。「聖域結界」を張るとき周囲のナニかを利用していることは気づいていた。

ただそのナニかがどういうものなのか理解出来ていなかったため扱いに難儀していたが、奇しくもその秘密は数ヶ月後、自分そっくりな貴族とその友人の魔法学者に教えられることになるのだが、今は割愛。

当時は、「聖域結界」を張ってそれを「ハーマルン」のゾーンとくつつけることで突入することに成功した。勿論チューニングがめっちゃめっちゃ大変だったが、元々が「ハーマルン」のゾーンはギルド会館の一部だったこともありなんとか成功した。

そこから奏はこの「聖域結界」が戦闘に応用できるんじゃないかと考え出した。

ゾーンというのはいわば一つの要塞なのだ。ゾーンの設定は絶対。部外者の立ち入りを禁じていれば部外者はどんなことをしてもゾーンの権限を持つものの許可がない限り侵入不可能だ。

クインの報告書にも同じことが書かれていたから間違いはない。「聖域結界」にはそういった設定操作のメニューはないが、設定はあるはず、そこを自由に感覚で弄れるように成れば、最高の防御になるはずだと。

結果としてはあまりうまくはいかなかった。

「聖域結界」を張るのに必要なナニかをきちんと理解出来ていなかったのが原因だと思う。

結界の範囲制御がとてつもなく難しいうえに、当たり前といえどもたり前だが結界の中から瞬時にオンオフを切り替えて攻撃魔法を撃つたり、特技を使ったり出来なかったからだ。他にも他にも e t c
…
起源となる力が解っているのと解っていないのでは性能にムラが出るのは至極当然といえた。
けれど先日のエルノⅡコーウエンとの出逢いによりそれも解決した。

今まで実戦では使えないレベルだった、もう少しすればアキバの街でも僅かではあるが囁かれるようになる口伝の一つ

口伝〈聖域結界〉が幾つかの弱点を残しつつも実戦でも切り札として切れる口伝〈黄金領域〉へと昇華したのだった。

そしてこの副産物としてなのかどうかはわからないが以前よりも奏の眼は魂魄をはつきりと認識出来るようになっていた。

僅かであれば魂泊の流れを肌で感じることも出来るようになった。今は気配をより鮮明に感じる程度で眼の代わりにはさすがにならないが、もつと熟練すれば「はっ、この気はカカロットかっ!？」みたいなことも出来るようになるかもしれない。

恐らくサブ職業〈陰陽師〉のお陰でもあるんだろう。

これで〈オーバーバックアップゾーン過保護な加護領域〉は守れた。

奏の譲れないガキのようなプライドは守られたのだった。



鳴り響く爆発音がところどころで響き、サファギンの数はここにきてやっと減り始めていた。はつきりいってもうMPの余裕も陰陽札のストックもない。

このタイミングでアキバの街からの応援が大型輸送船〈オキユペテ〉に乗って到着したことは有りがたかった。

今はサファギンに邪魔されて少しづつしか上陸できていないがじきにサファギンの殲滅は完了するだろう。

千菜と直継たち引率組との合同パーティーでサファギンたちを殲滅していたときだった。チョウシの町の方向から大きな爆発音が聞こえてきた。嫌な予感がした。それはもう直感でしかなかったが確信に近かった。

さつきまでいたミノリたちパーティーがいなくなっている。脳裏に過るのはルンデルハウスⅡコードのこと。

「兄さん、行って!!」

「わかったっ!!」

俺は急いで駆け出す。神経を集中させ魂泊の気配を探る。恐らく、誰かがやられた。ミノリかトウヤかセララか五十鈴かそれともルンデルハウスか、誰かはわからないが直感した。

チョウシの町の中央付近の大字路、そこには予想通りの光景があった。横たわりピクリとも動かないルンデルハウスに、彼のもとに集まり顔をぐしゃぐしゃに歪め涙を流す五十鈴ちゃんにトウヤ、セララ。

ミノリはひとり目に涙を浮かべながらもこめかみにてを添えて誰かと念話をしているだろうことが伺えた。相手は、シロエだろう。

「ここにいるのはわたし、トウヤ。五十鈴さん。セララさん。そして蘇生しないルンデルハウスさん。「俺もいるぞっ」っ!! それと奏さん。場所はチョウシの町の中央付近、大字路」

こういうときに、ミノリが最初に助けを乞うのがシロエだというのはなんとなくわかっていた。

ミノリがシロエに憧れ以上の感情を持っているのは簡単に察することができたから。

「だけど、やっぱり俺にも頼って欲しかったねえ、どうも。」

「ミノリに額をくつつけんはがりに近づけ念話に無理矢理割り込む。」

「シロエっどうしたらいい?」

『奏っ!?!、MPのストックはどのくらいある?』

「六割強、へ竜玉の腕輪」のMPストックは使い切った。へ真光」も全部使った。MPポーションはあと一本だけ残ってる」

『へ朱雀」を使って何分回復をし続けられる?』

「五分」

『わかった。ミノリ、セララに指示。蘇生呪文を詠唱。150秒待機。トウヤは周辺警戒。五十鈴さんはMP回復歌を。150秒後に今度はミノリが蘇生呪文。奏はMPポーションを飲んでミノリが蘇生呪文投射後、〈朱雀〉を使って僕が行くまで保たせて』

シロエとの念話が切れる。急いで準備を済ませる。

〈魔法の靴〉からMPポーションと真つ赤な文字を刻まれた札を一枚取り出す。

ポーションを一気に飲み干し、ミノリが蘇生呪文を投射したのち、札を上空に投げる。

札は一気に燃え上がり、炎が大きくなり球体になったところで弾ける、中から身の丈を大きく越える紅い美しい巨鳥が現れた。

「奏さんっお願いしますっ!!ルデイをつ!!ルデイをつ!!ルデイをつ!!ルデイをつ!!ルデイをつ!!」

「わかってる…助力はしてやる…だから今は話しかけるな。これからやるのは俺も今までやったことない魔法だから…」

眉間にシワを寄せいつもとは比べ物にならないほどに怖い顔をした奏の重々しい言葉に五十鈴は黙らされる。

「力の根源たる我が命ずる南を司りし炎帝よ」

還りし素は血へ血は骨肉へ留めよ我素なりえるもの喰らい従え

多きは望まぬ只留め癒し保つことを命ずる」

「重ねて力の根源たる我が命ずる南を司りし炎帝よ」

場にありし魂を我を除き癒し整えよ代償はこの場におりしものは求めず我の持ちし宝玉より注がれし力を喰らえ

「この命は我の素たるものが尽きし時解くものとする」

朱雀が俺の命を聞き届け甲高く鳴き炎を撒く。その炎は身を焼くような熱さも持たずただただ暖かくこの場にいる全員の身体に溶け込む。

朱雀が司る最高位の回復魔法をこの場にいる全員が受ける。

一つはルンデルハウスのこれ以上の落魄を抑え身体の傷を再生さ

せる。

一つはこの場にいる全員を回復し整える。一気にMPを朱雀にもつていかれ頭が朦朧とする。

だが下準備はできあがった。ここからが本番だ。

「ミノリ：ルンデルハウスが倒れてから：何分たった：」

「多分十分も経ってないはずですよ」

幸いにも戦闘のお陰で場に魂魄は充満している。〈黄金領域〉を張る分には問題ないだろう、が今からやることにはマイナスだ。

「〈魂呼びの祈り〉」

空気に溶け込もうとしているルンデルハウスの魂魄を〈黄金領域〉で閉じ込め集める。そこから〈魂呼びの祈り〉を媒介して大気に散っているルンデルハウスの魄を俺の眼で捕らえ戻していく。

特技や魔法の階級というのは本当は魔法の効果が上がっているのではなくて本来の性能に近づいているのだと俺は考えている。

そのため蘇生呪文と俺の相性は誰よりも高い。なんたって器に戻すべき対象が見えているのだから。

だから本来の性能の更の上に今から望もうとしているのだ。

ぶつつけ本番、エターナルアイスでは《黄金領域》しか練習できなかった。魂魄のコントロールは無意識にしか今までしていなかったことを意識的にしなければならぬのに。

宙に浮くルンデルハウスの魄だけを俺の〈魂呼びの祈り〉を基礎として作った魄の手で掴みルンデルハウスの肉体に戻していく。

朱雀の召喚により常時減っていくMPのせいで魄の手は淡く細い。集中しているのに意識は朦朧としている。

無数に絡まった何本もの糸を解き何個もの針の穴に通すような作業を無限に続けるようなことをして体感では永遠に感じられた。

「みんなっ！」

「やっど…来たか…おせえんだよ。バカシロエ」

「ごめん、奏。〈朱雀〉はもう戻していいよ。ここからは僕の番だ」

朱雀を戻した瞬間身体力が抜ける、倒れかけたところをトウヤが慌てて支えてくれた。

「ミノリ、トウヤを外して僕と奏をパーティーに誘って」
「はい」

「トウヤ、そんな顔してんじゃねえよ。もう俺の結界も解けてる。その時にゴブどもが来たら止められるのはお前だけだぜ？」

「…おっす」

「五十鈴さんだっけ？そのままへ瞑想のノクターンを詠唱続行。今から新しい魔法を使う。このことは他言無用だ」

シロエはそこからきつい口調で新人プレイヤーに話しかける。

「納得できないなら諦めるか、ここから去って」

全員が戸惑うことなくすぐに頷く。

「じゃあ、始めようへマナ・チャネリング」

もう雀の涙しかないいなけなしのMPをシロエに渡し、シロエが全員のMPを統合し根元的な精神力へと還元する。

大きな水球のようになった全員のMPが混ざりあい美しく色とりどりに煌めく。不謹慎だが美しいと思う、再分配されるMPは全員の残り香を感じられた。もちろんルンデルハウスのものも。

「奏ミノリは蘇生呪文を、セララは連続ヒールっ。奏は二人の補助を」
「ここから先は時間との勝負」

シロエは続けざまに言葉を紡ぎつつ懐からへ黄泉返りの冥香を取
り出す。

それは死んだ仲間や生物をゾンビとして蘇らせ、戦闘に用いる特殊なモンスターとしてかりそめの命を与える薬品である。その効果時間は僅か3分。後には逆らえない確実な死が訪れる。

だが、ルンデルハウスにたいしては大きな意味を持つ。魂と精神の接続が途切れてしまってる現状を無理矢理打壊する。

だがその先の確実な死がが問題なのだが……

「あ……」

うつすらと夢から覚めたようにおぼろげに瞳を開くルンデルハウス。
ス。

五十鈴はその手を握り、涙をぼろぼろとこぼす。ルンデルハウスが

意識がはつきりとはないだろう。ただの肉体的な条件反射で眼を開いただけだろう。

「ルデイ……う？」

「ミス・五十鈴……。ああ、みんな。そうか……。僕は、どうやら……死んじやったらしいね」

ルンデルハウスは小さく笑うと、まだ、力の戻っていない声で、周囲に言葉をかける。

「みんな、いやだなあ。……そんな顔をするなよ。戦いの結果、命を落とすなんて当然だろう？」

「それでも僕は〈冒険者〉になりたかったんだ。ミス・五十鈴を責めるのはやめておくれよ？頼み込んだのは僕なんだからさ」

「いえ、わたしだって気が付いてましたっ。気が付いていて、放置してたんですっ。」

ミノリが叫ぶように声を漏らす。その言葉は後悔と苦しさがなによりも込められた懺悔のような言葉だった。今まで冷静に行動してきたミノリも、内面ではずいぶんと動揺していたのだ。

「はははっ。うん、ミス・ミノリ。ありがとう。気にすることは「ふっざけんなっつああ!!!」

今まで目をつぶりルンデルハウスの言葉を聞いていた奏が今までに見たことのない、いや、ミノリとトウヤは見たことがある〈ハーメルン〉のアジトで見た奏の怒りの表情で怒鳴り付けた。

その場にいる全員が面食らい視線が奏に集まる。

「なにがありがとうだっ！なにが責めないでくれだっ！ふぎけるのも大概にしろ。」

戦いの結果命を落とすのが当然？はっ、んなもん誰に言われるまでもなく当たり前なんだよ、かっこつけてんじゃねえ。

お前はこいつらに洗いざらい全部話すべきだったんだよ。

それでも〈冒険者〉になりたかったあ？お前みたいな甘ちゃんになれる分けねえだろうがっ！

お前とこの一週間以上一緒に過ごした仲間はそんなに信頼できなかったか？お前が〈大地人〉だと知って馬鹿にするやつらだったか？〈冒険者〉の意味を履き違えるな!!仲良しごっこの友達同士の集まりが〈冒険者〉じゃねえんだよっ!!」

「奏にいっ—」

トウヤが悲痛な面持ちで言葉をかけてくる、けど、俺は止まらない。止めるつもりもない。

「ミノリにしろ五十鈴にしてもそうだ。お前ら何でこのバカを説得しなかった!?!こいつが死んだら終わりだと気付いてなぜ説得しなかった。

優しくするだけが正しいわけじゃねえんだよ。黙っていることが優しさだと履き違えるな。

人生つてのは理不尽で残酷で冷酷でバカらしいほどに悲劇的に劇的なんだよ。おとぎ話じゃない。ゲームじゃない。

ハッピーエンドで終わるとは限らないんだよ、そんな中で手を抜いて生きていけるわけねえだろうがっ!!」

「じゃあ僕はどうしろっっていうんだっ!!もうどうしようもないじゃないかっ!!」

「仲間に、未練を、後悔を、恨み言を吐けばいい。死んでもないのに生きることを諦めんな。そして最期に安心させるように微笑みかけて死ね。残されたやつに悲しみだけを残すな」

「そうか…そうすればいいのか…ああ悔しいなあ…」

僕はもつと生きたかった」

「でも、今じゃない。お前に死なれたら困る。

言っただろ俺との約束を忘れるな、お前を泣かすんだよ俺は。まだ俺は地獄まで行きたくないからな。死なれちゃ困る。

もつと強くなれ。でなきゃお前はただの道化だ。〈冒険者〉になるんだろ？

ここはシロエがなんとかしてくれる。だから二度と同じ間違いをするんじゃないぞ。

シロエ、後は任せた」

「無茶苦茶にやってくれたね。でも僕が言いたかった以上のことを言ってくれた。」

「いいか、聞けっ」

シロエは一枚の字の乱れきった書類をとりだして、ルンデルハウスに突きつける。

「契約書、か」

「契約——〈記録の地平線〉ログ・ホライズン代表シロエは、ルンデルハウスⅡコードと以下の契約を締結する。ひとつ。シロエはルンデルハウスⅡコードを、この書面にサインが行われた日付時刻をもって、ギルド〈記録の地平線〉ログ・ホライズンへと向かい入れる。」

ひとつ。ルンデルハウスⅡコードはギルド〈記録の地平線〉のメンバーとして、その地位と任務に相応しい態度をもってその任務に従事する。ひとつ。〈記録の地平線〉はルンデルハウスの任務遂行に必要なバックアップを、両者協議のもとできうる限り供与する。——これには〈冒険者〉の身分も含まれる。

ひとつ。この契約は両者の合意と互いの尊敬によって結ばれるものであり、契約中、互いが得たものは、契約がたとえ失効したとしても保持される。

以上、本契約成立の証として、本書を2通作成し、両者は記名のうち、それぞれ1通を保管する」

「〈冒険者〉——？」

「なるほど、な。恐れ入ったわ……裏技にも程がある……」

《黄金領域》と同じゲームの頃にはなかった新しい魔法。

ルンデルハウスは〈大地人〉だ。

3分後には確実な死が待ち構えている。〈大地人〉は復活できない。ゆえにルンデルハウスは消滅する。

——ならば、答えはいたって単純明快。

「3分間の間に、ルンデルハウスを〈冒険者〉にすればいい」

「僕のサインは入れてある。あとはキミだけだ」

「これはリスクのある契約だ。キミはこの契約によってなんらかの变质を受ける。今とはまったく違う存在になってしまうだろう。そし

て恐らく君が思っているほどの栄誉は〈冒険者〉にはない

「僕がなりたいのは……、『冒険者』だ。」

困っている人を助けられれば、細かいことは気にしない。……僕は栄誉がほしいわけじゃない。

……それに彼との約束も守らないといけない。僕はこの名に誓ったのだから、僕はひとりの『冒険者』だ。」

契約書に刻まれるルンデルハウスⅡコードの名を全員が見守る震える指先は仲間の励ましで暖められ、魔法のインクはルンデルハウスの名前をかたどった。燃え上がった署名の輝きは黄金色の光となり、シロエの技はこの世界に承認されて新しいルールとなる。

その光は天高く上り一時の間光の柱がチョウシの町にそびえ立った。



夜風が穏やかに吹く浜辺、ついさつきまで魔法や剣が振るわれていた場所とは思えないほどに静かで穏やかに時が進んでいる。

視界の先にはウチの優しいギルドマスターといつも愉快的な友人が隣り合って座り何かを話している。

「ふふっ、どこに行ったかと思ったらこんなところでイチャイチャと、邪魔しちや悪いし別のところいくかあ」

オキュペターの増援到着により砂浜のサファギンたちは殲滅されチョウシの町は護りきられた。

たったこれだけの数で、しかもほとんどがレベル30もないような新人プレイヤーばかりの集団で増援が来るまで防衛をやり遂げたのだから大したものだ。

今頃、風呂に入つて泥のように眠っているのが大半だろう。

ルンデルハウスが無事に復活できたことも確認でき今はもうミノりたちも安心して体を休めているだろう

そんな中で俺は疲れの抜けきれない体を引きずりながらチョウシの町を歩いていた。

火照った体を冷ますように、研ぎ澄ました神経を休めるように歩いていた。

「こんな広い町だったんだな」

ルンデルハウスを救った十字路を通りすぎ町の小道にふらりと入ったりして適当に気分のままに足を進める。さつきまでの熱が冷めることでもいままで見えていた町の風景もガラリと変わって見えた。

ふらりふらりと歩みを進めっていると町に続く大河を渡るためのあの大橋へとたどり着いた、広いこの橋の端を海を眺めながら歩く

「また今度ゆつくりと来てみたいな。今度はクインとかエルノも連れてっ——」

プツリと

言葉が途切れる。

無理もない。

俺の胸からは本来あるはずのないものが生えていたのだから見たことのない刀が生えていた

——否、一度だけ見たことがある。

つい最近、というのもおこがましいほどの数時間前。

あの黒の化物が握っていた刀だ

ズブリ—刀が引き抜かれる。それと同時に身体が膝から崩れ落ちる。

「ゲホツ……」

胸が焼けるような熱さと激痛にに襲われるが身をよじることすらもできない。

そして次の瞬間、倒れた俺の身体に激しい衝撃が走り宙へと放り出される浮遊感に襲われた。

いつときの浮遊感におそわれた後身体全体が水面に叩きつけられる痛みが襲う。

そのまま身体は沈んでいく。暗い暗い夜の海へと。

落ちるときに一瞬だけ見えた黒の化物の外套の中の顔は
その暗い夜の海よりも深く濃く、
——黒だつた

第二十六話 流麗絢爛な海

『□□、お前じゃ私には届かないよ』
『どうしても』

『ゴメンな、俺はアイツのああいうところが好きになったんだ』
『だからお前はそうなんだ』

『君はきつと嘘つきだ』

『貴方は誰よりも気味が悪い化物だ』

『お前はいつもそうだな。□□』

『ちよつと遠くに行かないといけなくなっいやった』

『許してくれ……お前の努力の末を見届けられなくて』

気がつくると白い砂浜に黒のダツフルコートに白のワイシャツ、赤のマフラーにベージュの七分のパンツ、白のスリッパを履いた姿で立っていた。

チョウシの町の砂浜じゃない。もつと白い砂浜。

星屑のようにキラキラと光る光が砂浜の先、透明度の高いどこからか来る光を反射する海から立ち上っている。

そしてその海に向こう側、地平線の境界線の先には丸い青のキャンバスに白が渦巻くように塗られた大きな星が見える。

「ああ、これが死ぬってことなのか」

俺は思っていた以上の落ち着きを見せていた。異常という気はない。むしろこの淡い光が舞い散る世界ではこの在り方が普通なように感じる。

死にたくなるような気持ちや反芻させられ、心の波を沈められ、この場に連れてこられた。不思議と悲しみや苦しきはない。

どうしようもないほどに落ち着いている。まどろみに浸かるように落ち着いている。

油断していた、気が抜けてたとしか言えない。

もう全部終わったと思ってあの化物を思考の外へと追いやっていた。チョウシの町の防衛とあの化物との接触はイコールではないのに、どうしようもなく俺は詰めが甘い…

自分に失望してしまいたくなる。

ゾーン名は、〈Mare Tranquillitatis〉。確かラテン語で、直訳すると〈静かなる海〉。

14番目のサーバー、正確にはテストサーバーである月。それが今いるこの地の所在はずだ。

新しく実装されるアイテム、特技、魔法、サブ職業、モンスター、本サーバーで実装される予定のものをユーザーに提供し意見を聞き〈エルダーテイル〉を作り取り仕切る〈アタルヴァ社〉が調整に生かすための場所がゲーム時代のこの地の有り様だったはずだ。

ユーザーは今後実装される予定の新情報をいち速く手に入れ環境に適応するため、運営側はユーザーからの意見を聞き作品のクオリティを高めるため、両者の利益が認められる。お互いにWin-Winの関係を保つたために実現していたサーバーだ。

実際に俺もサブキャラをこのサーバーには駐在させている。性別も体格も全てにおいてメインキャラとは異なるネカマアバターなどで大災害に巻き込まれたのがあちらの方だったらと思うとゾツとする話である。

白い砂浜を白波に沿うように歩く。サクリ、サクリ、と新雪を踏むのよりも軽い音が足下から返ってくる。

名前の通りに静かなその浜辺は、俺一人しかない。立ち上る光を見て思う。

これはみんなの記憶の欠片、魂、だと、アキバの街、ススキノ、ミナミ、とかそういう〈冒険者〉に限った話じゃなくて、大地人もモンスターもモンスターとも呼ばない動物たち、そういつたくくりでのみん。

この世界に生きる全ての生物の魂魄の欠片。

それがこの淡く発光する砂浜と海だけしかないようなこの月の地を彩っている。

赤に青に黄色に緑、紫、オレンジ、桃色、色相も明度も彩度も異なる七色なんて言葉じゃ足りない色とりどりの色、持ち主の残り香のよくな色が俺には見える。

どのくらい歩いただろうか時間がこの世界に流れているのかはわからない。

なにも代わり映えしない世界に時間の概念があるのだろうか、それでもやらなければいけないことはわかっている。

別に何か推理した訳でもないし知っていた訳でもない。

死んでしまった対価を支払わないといけない、そう直感しているだけなんだから。

コートのポケットに入っているナイフを取り出して後ろ髪の一房をパサリと切り落とす。結っていた髪がほどけて下ろされる。

切り落とした髪を光が舞い昇る海へと風に渡して飛ばす。髪は光の粒へと変わり光の塔へと混ざっていく。

なぜ自分がこの場に来ることが出来たのかはわからない。

それでもこの光景を目にすることが出来た俺は不謹慎で極めて不本意ではあるが貴重な体験をしたのだと思う。

目を覚ました奏がいたのはアキバの街の〈大神殿〉だった。

気だるさを全身に抱えながら上半身をゆっくりと起こす。ステンドグラスから差し込む七色の光が眩しい。

いつのまにか出ていた涙が両目からスーツと頬をつたった一時の間は身体の軽い痺れが抜けなさそうだった。

そこに聞き慣れた念話の着信音が頭の中に響いた。まだハツキリとしない頭を無理矢理覚醒させようと頭を何度か振り、深呼吸を何度かして念話に出た。

『あー、やっと出た。おい奏、お前いつたいどこにいるんだ？今、現在進行形でみんな搜索必死祭り』

「ああ、悪い。もう先にアキバの街に帰ってるんだ」

「テメー、何勝手に抜け駆けして先に帰ってるんだ祭り!!あれかつ?!もう一人でうまい飯にありつき祭りかつ!」

……どうするべきだ？直継に俺が殺されたことを話すべきか？直継に話せば他の合宿に参加している連中にも確実に話は伝わってしまうだろう。

俺が殺されてからももう既に朝が明けている。時間はたっぷりあったのにこれだけ直継がのんきに念話をかけてきたということは俺以外に被害者は出ていないということ。今度こそあの化物はいなくなっただろう。アイツの狙いは俺だけだったということだ。

もちろんこんな大事をいつまでも隠していいわけがない。人の形をした〈大規模戦闘級〉の存在。

放っておいて被害者が増えたりしようものなら目も当てられない。〈円卓会議〉の参加者には話すべきだろう。少なくともシロエ、クラステイ、アイザック、ソウジロウ辺りには絶対に話しておくべきだ。マリエちゃんにはあまり話したくない。あんなお人好しのギルマスを心配させるのは嫌だからな。巨乳の可愛いお姉ちゃんを不安にさせてなにか楽しいってんだ。

『……奏、どうかしたか？』

「いや、何でもない。刀の耐久値が結構ヤバかったからメンテナンスに早く帰ってきたただけだっつーの。まあ、飯も食うけどな」

『お前つやつぱり食うんじゃねえか!!俺たちは新人の子守り祭りだつてーのに、ず』ブツツ!

直継が言葉を言い切る前に念話を切る。

あまり長く話していると直継相手でも今の状態じゃボロが出てしまいそうだ。とりあえずは〈大神殿〉を出よう。

直継に言った通りに刀の耐久値も結構ヤバイのは本当の話なのだ。〈アメノマ〉に行つてあの無愛想な刀匠に耐久値を回復してもらはなければ。

そのあとは、できればうまい飯でも食べてベッドに横になりたい。疲れきった上に殺される経験までを受けたのだから少しくらいの我が儘は許してくれてもいいだろう。

少しふらつきながらもそんなことを考えながら俺はまだまだエンジンがかかりきつていないアキバの街へと繰り出した。



オーケストラの壮大な演奏がグラスの中のワインを僅かに揺らす。
〈エルダーテイル〉のオーブニング曲だった曲だ。

このパーティー会場はアキバの街の〈冒険者〉と大地人の貴族が入り乱れている。もちろん〈円卓会議〉の十三ギルドの中のメンバーなので無作法が過ぎるような者はいないが慣れないパーティーに浮き足立っているのが伝わってくる。若干ではあるが一部が興奮ぎみだ。まあ、本物のお姫様やら貴族の好青年を見ればテンションが上がるのもわからないでもないので羽目を外しすぎなければいいだろう。

そんな中にこの俺も慣れないタキシードに白い手袋を着けて参加している。片手にはワイングラスだ。

「あのお姫様がねえ、正直あんまり信じられないな。あのお姫様はそんなことできるような娘だとは思わなかったんだけどな」

「僕も正直それはいまだに驚いているよ。あの娘はそういうめんどくさいことを嫌う娘なんだけれど、あの会議室に乗り込んだ上にあんな貴族の狸爺どもを前にして堂々と意見を言えるような娘じゃなかったはずなんだけれど」

隣に立つのはエルノールコーウエン。

今回の〈ゴブリン王の帰還〉一番の問題であった大地人への〈冒険者〉からの戦力提供。

まだ〈自由都市同盟イースタル〉への参加が正式に決まっておらず大地人と〈冒険者〉の友好関係を確立していなかった現状で大地人側は一万の軍勢を無傷では討伐することはできなかった。

このヤマトの地を守護する古来種〈イズモ騎士団〉の行方がわからなくなっていたためにこれから生まれる傷を小さく治めるのは不可能に近い状態にあったのだ。

そこでこの宮廷に集まっていた貴族たちは〈円卓会議〉に、ひいてはアキバの〈冒険者〉たちにゴブリンたちを討伐させようと考えたのだ。

どうかして〈円卓会議〉にゴブリンの討伐をさせようとする貴族たちと、これから大地人も関係を上手く築いていかなければいけな

「アキバの街の〈冒険者〉の代表〈円卓会議〉。

友好関係を築くためにも簡単には下手に出ることは出来ない双方はおとしどころを見つけられず今後の行く末を話し合う会議は膠着状態に陥ったのだった。

そこに現れたのが、〈自由都市同盟イースタル〉の筆頭領主セルジアットルコーウエンの孫娘レイネシア姫。

突然表れたレイネシア姫は大地人の貴族が隠していたヘイズモ騎士団の行方不明を暴露（イズモ騎士団の所在不明はシロエたちはもちろん把握していたが）そしてクラスティへとアキバの街に供してアキバの街へいきアキバの街の住人たちへと助力を願い出ると大胆にも言つてのけた。

そこからは脱兎の如く、クラスティ、シロエはアキバの街へとグリフォンを飛ばし夜のアキバの街でレイネシア姫の演説を急遽執り行つて見せた。

レイネシア姫の礼節を、いや俺たち風に言うなら心のこもった力を貸して欲しいという真摯な願いに心を射たれたアキバの街の住人たちはレイネシア姫のためにゴ布林討伐へと乗り出しゴ布林軍を〈セブンスウォール七ツ滝の牙城〉へと押し戻し〈円卓会議〉と〈自由都市同名イースタル〉の親交条約を結ぶパーティーを執り行っている今に至るのだ。

「まあ、あの慇懃無礼な女の子に爺連中がボロクソにやられていたところを救ってくれたのだから風当たりはそこまで強くなることはないだろうけど。

君たち〈冒険者〉と関わって僕と同じようにあの娘に何か変化を与えてくれたのか、不思議なものだよ」

「どうやらあの紅の名探偵は派手にやらかしてきたらしい。

なにをやったら慇懃無礼な女の子なんて呼ばれ方をするのやら、今度詳しく聞いてみたいものである。

「いい影響か悪影響かはまだわからないけどな」

「君はいちいち皮肉染みてるな。人の神経を逆撫でするような発言は控えた方がいいと思うぞ？友人を失うから」

呆れた風な半眼を横目に向けてこちらを見るエルノ

「皮肉ごとくも言い合えない友情ならそんなもん、引き裂いてペースト状にして焼いてくっつまえ」

「確かにそれもそうか」

「で、お前にはどんな影響が出たんだ？俺たちと関わって」

「気兼ねすることのない唯一無二の親友を得れた」

「おつおう…、お前恥ずかしいことを堂々と言うな…」

急に臆面もなく恥ずかしいことを真面目な顔をして言うエルノに思わずドキリとしてしまう。コイツこんな真面目に話すようなやつだっけ？

もつと俺と同じように飄々と話すやつじゃなかったかな。

「僕は今回の一件でアキバの街の〈冒険者〉を心の底から信頼に値すると思った。」

君たち〈冒険者〉は僕たち大地人の友人だ。まだ大地人全てが君たちを心の底から信頼できているとは間違っても言えないけれど、それでも僕は君たちを信じたいと思っている。それだけは信じて欲しい」

「………にししし。なにを言い出すかと思えば、そんなもん笑って信じるに決まってるだろ。」

俺たちは親友だ。この歳でこんなことを言うのはこっぴどずかしいけどな」

「ありがとう、奏」

大人になればなかなか育むことの難しい友情。

それは立場であつたり、年齢だつたり、自由な時間を作りにくい窮屈な日常だつたり、たくさんの理由があつたりするけれど一番の理由はお互いを無条件に信頼することが難しくなってしまうからだろう。

子供のときのように出会ったその場で取っ組み合いこじやれあいのできるような大人はいない。

それは自分を知性ある品性ある存在だと主張したい理性が邪魔をするから、カッコつけることも着飾ることもなく頭を空っぽにして手を取り合うことのできる子供のようには出来ない。だから大人の友

達づくりは面倒だ。

それでも、いくつになっても友達と一緒に喋りながら何かを食べたり飲んだりするのは楽しい

瑠璃色の宝石のように煌めくワインを注いだグラスをカアンと合わせ鳴らし今宵生まれた本物の友情に乾杯した。

第二十七話 出張隣のギルドホーム

ここはアキバーの戦闘系ギルド〈D・D〉のギルドキャツスル。きらびやかな装飾が施されてはいるがいやらしさは感じられない。アキバーのギルドとしての風格と品位を兼ね備えた実理性に富んだ造りになっている。

そんな中で書類の束を抱えて広い廊下を歩く長い金髪の女性が一

人
コン コン コン

「どうぞ」

「ご主人、〈円卓会議〉の書類を持って……」

「この大福とどら焼きに合いそうなお茶を入れてもらってもいいかな？」

「わかりました。少し待っていてください四十秒で準備します。それならすぐにいただきますしよう」

「高山女史、私の分もお願いしていいですか？」

「わかりましたご主人」

大きな執務机にしていたクラスティが立ち上がり黒革の部屋の高級感になんらの引けもとらない大きなソファアールへと向かいながら三佐さんへ自分にも同じものを用意してくれるように頼む。

「なんで奏さんがここにいらっしゃるんですのっ!？」

「リーゼさんもお茶いりますか？」

「あつ、はい。いただきますわ」

「はっ、ではなくて!ここは〈D・D〉のメンバーしか入れないようゾーン設定がされてますのよ!？」

「あははっ、気にしない気にしない」

「笑い事じゃありませんよ!？」

「まあ、いいじゃないですか。彼はなかなかウチに来てくれませんか。珍しいお客さんは私も嬉しいです」

「ご主人がそうおっしゃるなら構いませんが……」

「細かいことは気にするなよ女子こつヴうえいつ!!」

白く長いリーゼの指が余計なことを言おうとする奏の口を押さえ込む。

「黙れ」

「はい……」

「仲が良くて羨ましい限りです」

— 閑話休題 —

「それで奏さんはなんでウチのギルドキャツスルに? いつもは全く来ませんよね」

奏の持ってきたどら焼きにパクつきながらリーゼが尋ねる。

「ん? もう用事は済んだよ。クラスティに話しておきたいことがあったから来ただけ」

「ええ、なかなか興味深い話を聞かせてもらいました」

クラスティは高山女史が注いできた湯飲みを片手にそう返す。

「お前、言つとくけどアレには関わろうとかするなよ。絶対に」

奏がクラスティに向けて強く強く言い聞かせる。いつもとは違って真面目な顔つきで眉間に皺を寄せながらだ。

「わかっています」

それにクラスティがきつちりと奏の目を見て言葉を返す。煙に巻きながら話すことも多々あるクラスティとしてはなかなか珍しい行動であった。

「?」

それに首をかしげるリーゼ。

なにかしら真面目な話であるということは察しがつくのではあったがさすがに話の内容までは察することはできない。

「それじゃ、俺も次の予定があるんでおいとまさせてもらうわ、見送りはいいよ忙しいだろうし」

奏が湯飲みに入ったお茶を飲み干し湯飲みをテーブルにおいて立ち上がる。

「お茶菓子ありがとうございました。」

奏さんもまたいらしてくださいね。キッチンと連絡をくださっていただければそれなりのおもてなしをしますので」

「気を付けるます、JKさん」

「貴方という人はっ！最後の最後までKYですよのね！」

「激おこぷんぷん丸？」

「そうですっ激おこぷんぷん丸です！」

（この娘は弄りがいがあるな。見事に自滅してくる）

「また、面白い話を聞かせに来てくれることを楽しみにしています」

「こんなことがそう何度もあつてたまるか」

「まあ、確かにそうでしょうね」

ガチャリとドアを開けてスタスタと帰っていく奏。思い立ったら即実行といった感じで行動している奏のフットワークの軽さは大したものであるというリーゼも感心していた。

「高山さん、美味しいのはわかるんですけど…お見送りくらいはしてあげた方がよかつたんじゃないでしょうかね？」

「……………気づきませんでした」

両手に大福とどら焼きを持って口の端にあんこをつけた高山三佐はいつもの鉄面皮でそう答えるのだった。

テーブルの上に置かれていた奏の持ってきたどら焼きと大福の入っていたおおきな袋がすっからかんになっていたことをクラスティはこっそりと確認した。



鹿威しの軽やかな音と水の流れる僅かな音が届く。

〈D・D・D〉のような洋風建築とは異なる日本古来からの広い和室。

ウチの実家の母屋もこんな感じだ。やっぱり和風建築の方が俺は落ち着く。その中の一室で俺はソウジロウと向かい合って座ってい

た。

「どうしたんですか？ 奏さん急にこんな改まって人払いまでして」
ソウジロウがニコリと笑って問いかけてくる。イケメンフェロモンがびんびんだ。

千葉が姫モードじゃなきや会いたくないってのもよくわかるよ。
男の俺でも惚れそうだもんこいつ。

それを聞きながら俺は立ち上がる。ソウジロウにジェスチャーで会話を続けるようにして襖へと近づいていく。

「実は話しておきたいことがあつてだなっ！」

襖を勢いよくガラリツ！と開けるとそこから三人ほどの少女がなだれ込んでくるようにして倒れてきた。

「やあ、こんにちわ」

座り込んで少女たちと目線を合わせニコリとやさしく微笑みかける。

「こ、こんにちわ」

「盗み聞きはよくないよ？」

「はっはい、すみませんでしたー！」

どびゅーんという効果音が聞こえそうなほどのスピードで少女たちは廊下を走っていった。

日本家屋の廊下は走るのは厳禁だぞー。

「すみません。ちゃんと聞いたはずだったんですけど」

「気にすんな。お前のことが心配なんだろうよ」

そのままスタスタと壁に掛かった掛け軸の前に歩いていきペラリと掛け軸を捲ると…、

「ど、どうも」

「どうも」

バツチリと目があった。ガン見である。視線はまったく外さない。

「盗み聞き、よくない。do you understand?」

「イ、イエース」

「よろしい。行っていいよ」

「しっ失礼しましたー」

「すみません奏さん…何度も」

「だいじょーぶ、だいじょーぶ。気にしてない気にしてない、からっ!!」

ドンツ!と天井を思いつきり奏は鞘から抜いていない刀で殴る。すると背の高い女性が天井から落ちてきた。

「仏の顔も三度まで、て言葉知ってるか?」

「すみませんでしたっ!!」

奏の土下座にも引きをとらない速度で土下座を決める緑髪の背の高い女性。

「行け」

「ありがとうございますっ」

ずぴゅーんという効果音が聞こえそうなスピードで緑髪の女性はその場から逃げていった。

「この調子じゃあどのくらいいるかもわかんねーな」

うーむ、どうしたものか、〈聖域結界〉を張ってもいいんだけどな、さすがに人の家で無作法過ぎるよな。

「本当にすみません。もっと僕が強ク言っておけば。なんとお詫びしたらいいか」

「だからそんな怒ってねーって。」

ただ、示しはつけた方がいいかもな」

「ソウジロウ、これで腹切れ」

ガラツ!ガタツ!バタンツ!バシャアンツ!グルンツ!

押し入れから、畳から、タンスの引き出しから、庭の池から、壁の回転ドアから、ありとあらゆるところから美少女、美女が大盤振る舞いに飛び出してくる。ここはからくり屋敷かなにかかな?

「はい、全員はっけーん」

それにしても……ソウジロウ、さすがにこれはちゃんとした部屋作った方がいいと思うぞ?」

「あはは……皆さん、僕を心配してくれるのはとっても嬉しいですし

感謝しています。

でも、ちよつとこれから本当に大事な話があるので大広間で待っていてもらっていいですか？

先輩とのお話が終わったら少し早いですけどみんなで夕食にしましょう」

正座をしている女の子たちにもものすごく近づいて目線を合わせてニツコリと笑いかけ優しく語りかけるソウジロウ。

「二二「はいっソウ様」」

おおー、これがハーレム構築の真髓か、いいもん見れたな。

女の子らはみんな顔を赤らめてスキップしながら部屋を出ていった。あとは…

「ナズナさん、貴女は普通に聞いててもいいよ」

「ちえ、バレてたか」

床の間に置いてあった壺の中からナズナがひよこりと狐耳と頭を出す。なんかあざといな。

「とうかなんでみんなあんなに俺のこと警戒してたの？俺〈西風〉の娘たちにちよつかいかけけるようなことはした覚えはないんだけど、いくら初期にしかいなかったから知らない娘が多いとはいえあそこまで警戒されることはないでしょ」

緑の髪のある人は知ってたけどな。

「ああ、そりやあアンタ、ソウジがアンタのところによく行くからだよ。」

あの娘らからしたらソウジを一時の間だとしても独り占めしてるやつみたいなもんだからね。

そんなやつがウチに来て、しかもソウジと二人で話したいなんて言い出したらそりやあこうなるさね」

「なるほど」

女心はよくわからんな。今度ソウジロウにレクチャーしてもらいたいもんだ。

「ところでさあ、ソウジ、奏」

「どうかしましたか？ナズナ」「何ですか？」

「胸がつつかえて出れなくなっちゃったから出るの手伝ってくんない？」

このお姉さんは相変わらずエロいな。

— 閑話休題 —

「——というわけだ。相手取れとは言わないし寧ろ相手取るなど言いたくてもしょうがないが、頭の片隅に程度でいいから留めておいてくれ」

「なるほど、了解しました。」

確かにこれは倒すとかそういう類いの敵じゃないですね。奏さんの仇を打てないのは辛いですが、こればかりはしょうがない。心に留めておきましょう」

「よろしく頼む」

「私らの他にはこの話を知ってる奴らっていうのはいるのかい？」

「クラスティにはここに来る前に話してきました。あとはシロエとアイザックにも話してあります。それとマイクロフトさんとクインにも話をするつもりです」

「そうじゃなくてさあ、千菜には話したのかい？」

「いえ、話してません。話すつもりもありません」

千菜に話をするつもりはない。

アイツに余計な心配をかけさせるわけにはいかないし、それにいまだって具体的な脅威があるわけじゃないんだ。ただ一応の保険をかけるために動いている。

「あんまり人の兄妹関係にまで突っ込むつもりはないけどさあ」

ナズナさんが呆れたように長い黒髪をかきあげながら正座から胡座へと体勢を変えながら俺の言葉に反応する。ところをソウジロウが遮り言葉を差し込む。

「奏さん、千菜さんを泣かしちゃうようなことになったらダメですよ。あの人は誰よりも涙が似合わない人なんですから」

ナニヲイツテルダ？コイツ。

「何？ソウジロウ、お前千葉に惚れてんの？」

ゆるさねえよ？お兄さんゆるさないからね？お前のはーれむに
ぜつつつたいに千葉は加えさせねえかなっ！

もし加えたかったら俺を殺してからにしろ！そしたら千葉がお前
を嫌いになって俺の勝ちだから！」

「アンタはなにをとちくるったことをいってんだい…シスコンも大概
にしなよ」

ナズナさんのさっきの呆れ顔とは違うバカを見るような呆れ顔で
ため息を吐きながらそういうのだった。

第四笑 祭りに響く高笑い 第二十八話 秋風に誘われて

「んなもんつやってられるかあー！」

そんな声が頭上から聞こえてきた。

「シロエ、ついに我慢の限界がきたか…」

「ずいぶんと仕事がシロエ様には回ってきてるでしょうからね、そのうえこんな天気では気も滅入ってしまうでしょう」

「ですね」

隣を並んで歩いていたヘンリエッタさんとそんなことを話ながら
〈記録の地平線〉のギルドホームへと入る。

今日の天気は一日雨。

書類を持ってくるためには実に都合の悪い天気模様だ。

傘を閉じながら玄関で声を上げたところでルンデルハウスと五十鈴ちゃんが階段から降りてくる。

「あ！奏さん、ヘンリエッタさんこんにちわ」

「おおー！ミスター奏！ミスヘンリエッタ！ようこそ！この僕ルンデルハウスⅡコードに会いに来てくれたのか？こんな天気なのに光栄だなー！」

「ルデイ、それ絶対違うと思うよ」

「なんと〜！」

チョウシの町の防衛戦、〈ゴブリン王の帰還〉を根本にあるあの事件で大地人であるルンデルハウスは死んだ。

その時は、シロエの機転により助かった。それはもうまさに奇跡のような試みだったが。

その事件をなんとか切り抜けルンデルハウスは契約の通りに〈記録の地平線〉に加入した。

それを追いかけるようにして五十鈴も〈三日月同盟〉から〈記録の地平線〉に移籍した。

元から、ミノリやトウヤと同じあの胸糞悪い〈ハーメルン〉からの

救出された口なので、入りたいギルドができたのだっただらそこに移籍したほうがいいのだ。

まあ、〈三日月同盟^{ウチ}〉と〈記録の地平線〉の関係が良かったゆえにほぼなんの障害もなくギルマス間で二つ返事みたいなもので移籍が決まったようなものなのだが。

「上手くやっていけるようですね」

「ええ、まあ心配するほどのことじゃあなかったですけどね」

ヘンリエッタさんの柔らかい笑みを浮かべながら安心したように言葉を紡ぐ。不安はなかったけれど心配はしていたのだろう。

娘を見守る母親みたいな心境だろうか、おつとこんなことを言ったらまた怒られる。妹を心配する姉の心境と言い換えておかなければ。

「奏？あとでお話があります」

「バレてる!?!」

「やっぱ、後ろ暗いことを考えていたのですね。あまり年上を侮らない方がいいですよ」

「しまった！嵌められた！」

「今日はどうしたんですか？」

「シロエに〈円卓会議〉の書類を押し付け…じゃなかった、届けに来たんだ」

「誤解を招くような答え方をするんじゃないやありません。すべてシロエ様に目を通していただかなければならない書類しか持ってきていませんわよ」

「あら、また怒られちゃった。」

そんなやりとりにクスクスと笑いながらも五十鈴ちゃんとルンデルハウスはシロエの執務室まで案内してくれた。

途中で聞いたところによると今は師匠とミノリとトウヤの三人は買い出しに出掛けているとか、アカツキちゃんは屋上で洗濯物を干していて、直継は〈三日月同盟^{ウチ}〉の連中とパーティーを組んで一緒に狩りに出掛けているらしい。二人は留守番だったとか。ご苦労様だ。

「やい、シロエきちんと睡眠とってるか？飯食ってるか？歯磨いたか？」

「とつてるよ。そしてとつてるよ。そして虫歯ひとつありませんよ」

「〈冒険者〉は虫歯にはならないぞ、なに言ってるんだよ、常識だろ？」
「言わせたのは奏だろ…」

若干ウザい返しをするももう慣れたように言葉を返すシロエ。

こんな風なお互いの顔を実際にあわせてするやりとりももう日常茶飯事になりつつある

季節は秋。

木々は紅く染まり、気候も何をするにも程よい程度のそんな時季だ。

〈大災害〉からもう五ヶ月の月日が経とうとしていた。

「天秤祭ですか」

「シロエ様が引きこもっているうちに準備は着々と進んでおりますわ」

「……僕も好き好んで引きこもってるわけじゃないんですけどね」

事務処理能力に長けているシロエは〈円卓会議〉では「知恵の回る参謀タイプ」という位置付けにいる。

それはもう〈茶会ティールパーティー〉の頃から変わらないシロエの役職のようなものの。

そのせいでシロエには色々な仕事が回ってくる。

〈円卓会議〉主催のクエストの作成やら、日々上がってくる発明品の報告書の整理やら、揚げ句の果てにはこの前なんてシロエをめぐってギルド対抗カレー対決が行われたりしたものだ。

因みに、見事勝利を納めたのは〈西風の旅団〉。シロエは1日、ソウジロウのハーレムを管制させられたとか。

シロエには同情の言葉を俺はかける他なかったし、そんなことにシロエの能力を使わせるな、アホかとソウジロウには千葉からお小言が送られた。

話はそれてしまったが、シロエのこなす仕事は尋常ではないのだ。それに加えて自分の知的好奇心の向くものまでにそこ能力を向けているのだから手に終えなくなってしまうている。

「まったく…、忙しいのはわかるけどある程度の際限は設けろよ？」

そんなんだから、『シロエさんより、奏さんの方がよく知ってるかも…』なんて五十鈴ちゃんたちに言われるんだよ」

「僕そこまで言われてるのっ!？」

「嘘だ。」

でもな、あながち現実味がない話じゃないぞ。俺よくここに来て年少組とは過ごしてるからな」

「……反省します」

「そんなシロエ様にはこれを」

ヘンリエッタさんから差し出されたのは、会場パンフレットだった。

そこにはびっしりとアキバの街のあちこちにある特設会場でのさまざまな展示やイベントが書き込まれている。

服飾系や飲食系が多いが、装飾品や、鉄製品、木工製品などの家具も少なくない。

「反省をしているのでしたら形で示すべきではありませんか？」

「はっ?。」

「へ記録の地平線^ドのお仲間とお祭りで親交を深めるとか」

その言葉に一瞬だけきよとんとするシロエだったがもつともな意見だと気づいたらしく「そうしてみます」と返事を返した。

「それに——」

ヘンリエッタさんはうつつすらと微笑を加えてほっそりとした指を立てて言う。

「へ記録の地平線^ドもへ円卓会議^{ズン}代表ギルドのひとつ。身体を張って盛り上げてもらいますわよね」

「あー……………。善処します」

「約束ですよ?。」

「アカツキちゃんもミノリちゃんも可愛いですからね。今から楽しんでたまりませんわあ。いえ、ほんともう…………。この妄想だけでご飯が3杯はいけますっ。」

パンがなければケーキを食べればいいのとかの名言があります

が、パンがなければ可愛い女の子を愛でるだけでお腹は膨れますのよお〜」

お巡りさんこつちです！ここに度しがたい変態がいます！

アカツキちゃんにもミノリンにも是非ともなんとかして生き残ってもらいたい。頬を押さえて身をくねらせるヘンリエツタさんにはそう思わせる程にドン引きさせられる思いだった。

「……あのお、ちなみにどんな手伝いを？」

「冬物衣料の即売会だろうなあ、十中八九で」

「ああ…、なるほど」

「俺は当日そこにはいれないから、ちゃんと守ってやれよ？」

「善処するよ……あれ、奏はいないの？」

「おう、その日は他所からのお客さんをアキバの街の案内をしようと思ってるね」

今から楽しみな話だ。久し振りに会うことになるが元気にしているだろうか



〈ログ・ホライズンの記録の地平線〉のギルドホームをあとにした俺とヘンリエツタさんは別れてヘンリエツタさんは〈ログ・ホライズンのギルドホーム〉へ、俺は〈ログ・ホライズンのモルグ街〉のギルドタワーへと向かった。

〈ログ・ホライズンのモルグ街〉のギルドタワーは大きくない。〈ログ・ホライズンの記録の地平線〉のビルと大差ないだろう。もしかしたらこちらの方が小さいかもしれないくらいだ。

その代わりに〈ログ・ホライズンのモルグ街〉の拠点は複数存在するのだ。

ここは6つあるうちのひとつ。

ヨーロッパの街並みを連想させるような白いレンガで作られた壁と階段に入口に飾られたなにの花かはわからないものが植えられている鉢植え。

階段を登っていきモダン風な扉をノックするとガチャリとあちら側から「はい、今出ますよー」と声が帰ってきて扉が開かれる。

「あー、こんにちわ奏さん。またサブマスで遊びに来たんですか？」

「いや、今日は別件だ。マイクロフトさんいる？」

「ギルマスなら私室にいつも通りいますよ。」

あと、用件が済んでからでいいのでサブマスのところにもよってあげて下さい、喜ぶと思いますから」

「ないない。アイツがそんな忠犬みたいなやつかよ」

「会いにいつてあげて下さいね？」

「いや、だから…」

「≪三日月同盟≫の奏は毎朝妹の…」わかった。誠心誠意真心込めて会いに行こう」

どこからあんな情報を仕入れてくるんだ、プライバシーもへったくれもないじゃないか。

受付の子に恐喝紛いのことをされつつもフローリングの廊下を歩いて奥の部屋まで歩いていく。

ノックを三回すると中から「どうぞー」と気の抜けた返事が帰ってきた。

扉を開けると部屋中に散乱する大きなクッションの山に埋もれるようにしてうつ伏せに寝転がっているマイクロフトさんがいた。

うーん、この人はこんな環境でどうやって仕事をしているんだろうか

「やあ、いらっしやーい奏クン。待ちかねたよ。今日も元気そうだね、なにか良いことでも、あったのかー」

断定した！この数秒で俺の今日あったことが全部見透かされたとでもいうのか!?

まあ、確かに今日は夢にカナミが出てきたけどさー！

「人の心を読むなんて最低ですよー！」

「常時、人の心の中を見ているようなキミが言うなよー。」

僕たち悪い大人からしたら悪巧みがバレないようにするの大変なんだからなー」

「なにをぬけぬけと！」

なんで俺が怒られにやならんのか!?それに俺の眼はそんな便利機能じゃない。せいぜいサーモグラフィー常備してるくらいだ

「それより、お願いしてたもの出来上がってますか？」

「そうカツカするなよー、禿げるよ？」

「黙れ！猫畜生が！」

「また、怒ったー。にやひひ、左から二番目の机の上に置いてあるよー言われるがままに散乱するクッションの山を踏み越えて壁際にいくつも並べてある机のうちのひとつの前に立つ。」

書類の山の中にポツリと四部の冊子が場違いな風に置かれていた。そのうちの一部を取ってパラパラと捲っていく。

いい完成度だ。これはクインが作るような女子女子したのじやなくて要点だけを正確に伝えるような万人受けする書き方で書かれている。

「家族向けにって言ってたからそういう風に作ったけど満足してもらえたかな？」

「いいですね。凄くいい。各々が好きそうなところが満遍なくまとめられてて」

「そりゃあ良かったー。大変だったんだよー、クインを使い走りさせたり召喚獣を使い走りさせたり」

一歩たりとも自分で動いちゃいねえ。

「へ円卓会議」の権力使ってプレゼンまでさせたんだよおー」

「アンタなにしてくれちゃってんの!？」

権力乱用にも程がある。そんなことしたのがバレた日には折檻という折檻は免れないだろう。頼んだ俺が。

「大丈夫だって、へアキバdays」を書いてるのはウチだよ？僕たちはそれぞれのお得情報が知れて嬉しい。お店側は目玉商品売り込めて嬉しい。win-winの関係さー。百万部突破の雑誌を舐めちゃあいけないよ」

へアキバdays」が刊行されたのは先週。こっちに取り込まれた人口は三万人。

残りの九十七万人は大地人で補うことは出来るのだろうか？ ヤマト全土にくばってまわればなんとか、——なるわけがない

もういいや…。バレたらマイクロフトが勝手にやったことです。って言つとけばいいだろ。

「それじゃあ、俺はこのあとクインで遊ぶ予定が入ってるんですけど、きますから。へ円卓へにバレたときはそつちでなんとかしてください」

「ああ、そうそう…奏クン、百恵ちゃんの行方がわかったよ」

何気ない一言のような言葉に俺は衝撃を受けた。

百恵ちゃんの行方がわかったよ、その一言をどれだけ待ちわびていたことか。

どれだけのを人に頼りあらゆる手段を使つてあの人を探し続けていたことか。

「わかったのか!? 姉ちゃんの居場所!!」

「正確には目撃証言があつたんだ、僕がミナミに潜ませてる部下からね」

「ミナミか…」

「キミとしてはあまり足を運びたいところではないだろうね」

今のミナミはこのアキバの街とは違う発展の仕方をした。

ことの起こりは俺たちがへ円卓会議へを発足させた頃にさかのぼる。アキバの街と同じように混乱と消沈と治安悪化が続き停滞を続けていた街を変えようとする動きがあつたのだ。

それはかつて俺が考えていた独裁という考え方

否、これには語弊があるな、彼女はこう言つて皆をまとめたそうだから『単一ギルドによる、ギルド間差別のない街』と

今のミナミの街はへPlant hwyaden へというギルドによって統治されている。

執行部により運営される単体ギルドへPlant hwyaden

へはその中枢の実態ははつきりと掴めない。アキバの街の情報通であるシロエに聞いても、目の前にいるヤマトサーバーの情報屋ギ

ルドのギルドマスターに聞いても謎だらけの印象しか受けないのだ。そんなの明らかに情報遮断をしているき決まっているとしか思えない排他的で情報を漏らさない組織それが、

〈Plant hwyaden〉

そしてミナミには、〈Plant hwyaden〉には
ティーパーティ
〈茶会〉の頃の仲間だったインティクスがいる。

彼女は〈Plant hwyaden〉の十席会議の第二席い
うところのNo. 2にあたる。

アイツは、嫌いだ。なんでかとか理由とかはわからない。ただ、見ていると神経を逆撫でされるような、どうしようもないほどに相容れない気持ちが湧いてくる。

俺はアイツに会いたくない。あの時からずっとこの気持ちは変わらない

けれど、姉ちゃんがミナミにいるのなら探しにいかねければなら
いかもしれない。千葉ともう一人の実の家族がいるのなら

今からもう六ヶ月も前の〈大災害〉から音信不通で消息不明、念話
すらも通じなかった姉がやつと見つかった。

藁にもすぎる思いで見つけた掴んだか細い光ではあるが可能性が
低いからといって無視することなんて出来ないものだ。

「僕としては天秤祭が終わって、きちんと準備を済ませてから千ちゃ
んと一緒にミナミへ行くことをオススメするよ。こっちの方でもも
う少し調べておくからさ。」

中途半端な情報を提供したなんて僕たちの名が廃るからねえ」

「……そうします」

〈Plant hwyaden〉

相手取ることになるとしたらインティクスとは絶対に会わなく
ちやいけねえか…

ボタン！

とそこに突然扉が勢いよく開かれた。

「奏、来ているのか!？」

そこには、何故かイヌミミとブンブンと揺れるしつぽをつけたクイ

ンが立っていた。
シリアスブレイクカーも大概にしろ赤面探偵。

第二十九話 姫様の悩み事

最近、兄さんの様子がおかしい。

朝、起こしに来るのが遅かったり、いつもより狩りから帰ってくるのが遅かったり、むさ苦しい男臭い臭いで帰ってきたりへD・D・Dに遊びに行ったり、女の子の甘い匂いがついて帰ってきたり、なにかがおかしい。

今日も朝ご飯の時にじーつと見つめていたら目を刺らされたし、食べ終わったと思ったらヘンリエツタさんと一緒にさっさと出掛けていってしまった。なにか隠してる、兄さんは隠し事がへたくそだからすぐわかる。

クインに相談してみようかな。



「クイン、兄さんがなにか私に隠し事してると思うの」

「うむ、話は聞いてやるからまずはその手に持つてるイヌミミをしまえ」

「それでさ、私としたらどうしたらいいのかなーと思ってさ」

「おい、やめろ。変なところを触るんじゃない…、んっ、ちよっ…」

「兄さんが隠してるとしたら完璧に私のためっていうのはわかるんだけどさー、ちよっど今回はいつもと毛色が違う気がするんだよね」

「やめて、くすぐりたい…」

「なんていうか、危険な雰囲気をするの」

「今は私があぶな、んっ…」

「えっ、なにそのシツポ、どうするのそれっ?」

「ねえ?ちゃんと聞いている?」

「ハア:ハア:、しらんわ、ばか」

「だらしのないなあ」

ぐったりと汗だくになりながら私の方に倒れこむクインを支えてやる。まったく、なさけないな。

探偵ならこのくらいで音をあげちゃダメじゃん。

「それでき、次はこの服着て欲しいな

「それはもう服なんて呼べるものじゃないぞっ!? 下着だ! それの下着というんだ!」

「水着と同じようなもんじゃん」

「水着でもそんな面積の少ないのは着たことはないわ!

もうっ付き合つてられん! 三十六計逃げるにしかずだ!」

「ふふっふ、姫から逃げられると思ってるのかしら」

部屋から飛び出して逃げ出すクインを追いかける。

片手にはへアダルテイなエプロンをもう片方の手にはへアダルテイ見せられないよな〇〇〇〇を持ってだ。

絶対に逃がさないわよ。

きせかえ人形にしたあととはしこたまへ記録結晶で写真撮って、そのあと美味しくいただくんだから

「うふふふつ、クインちゃん、まちなさあ〜い」

「嫌だあ〜!」

魔法攻撃職のへ付与術師であるアナタが戦士職のへ武士の姫から逃げ切れるわけがないでしょうに。

いい加減あきらめて姫に? 自主規制 ぴー? 閲覧禁止 されて? 年齢制限 バキューン? 年齢制限 して? あっはーん? 年齢制限 されればいいのに。

少しずつ少しずつクインとの距離が縮まっていく、本気で走ってしまふと床を踏み抜いてしまいそうだから本気で走れなくて歯がゆいけれどももうクインを捕まえるのも時間の問題だろう。

そんなところでクインは突き当たりの部屋へと飛び込んだ。もう袋のネズミね。

ミニーちゃん……ふふふつ、楽しみが増えたわ。

ドアを勢いよく開けると子猫ちゃん、いや、子犬ちゃんはいた。

そしてマイクロフトさんも、なんと渦中の人である兄さんもいた。いつの間に来たのかしら

「かなでっ助けてっ！千葉がいじめるう」

涙目になって若干言葉づかいが後退してしまっているクインが兄さんの背中へと隠れる。なにあの小動物めっちゃカワイイ。

「クイン……あのさあ」

兄さんが背中に隠れるクインをじーつと見て優しく言葉をかける。なんだかんだで仲がいいんだからあの二人。

「お前、いくら胸がコンプレックスだからってわざわざへ外觀再決定ポーシヨン〳〵まで使うなよ、しかもほんの少しだけ盛る程度で」

何を言ってるのよ、ウチのバカ兄は

「私だって寄せて上げればBくらいにはなるもんっ」

そして何を口走ってるのよ、あの赤面探偵は。

今のクインは普段より少しだけ胸が大きく見える。それは私のマッサージで胸を強調するようにしてあげたから。けっしてへ外觀再決定ポーシヨン〳〵なんて代物は使ってないわよ

「おい、千葉クインで遊ぶのはいいけどな。やり過ぎるなよ、さすがに可哀想だろ」

背中にしがみつくクインの頭を撫でてやりながら兄さんが言う。

ソコ、遊ぶのが許されているのがなんともおかしいとか言わないの。踏みつけるわよ

「はあ、もういいわ。今回は見逃してあげるわよクイン」

「ん、なんだ？姫モードになってるのか。クイン、お前頑張ったな」

「うん、私がんばった」

ちよつと幼児後退進みすぎじゃないかしら？

兄さん、シロエと同じタグをつけないといけなくなるわよ。

足フェチ、シスコン、髪フェチ、黒髪好き、年上好き、世話焼き、にロリコンまで加わったらおしまいよ。

年上好きとロリコンとか相反するものを備えちゃったらダメでしょ。特に世話焼きとロリコンの組み合わせはあらぬ誤解を生むわね。

「それよりも兄さん、この際だからはっきりさせましょう。クインに

も会わずにマイクロフトさんと会ったりして、何を隠してるの？何かあるんでしよう？」

「……………実の妹が、両手にアダルティでエロいアイテムを持って友達的美少女を追いかけ回してるんだけどさあ

この悩みどうしたらいいと思う？」

悩みの種は私自身だった。



危なかった。あと少しで千葉にバレるところだった。

「かなでよかったねー。せんちゃんにひみつがばれなくて」

「ああ、何でバレそうになったんだか？さっぱりだ」

なんとか千葉を誤魔化して撒いた俺とくいんはてくてくとアキバの街を歩いていった。

「かなでくんがせんちゃんにはなせばよかったんだよ」

「そうは言ってもな、やっぱりアレは知らなくていいんだったら知らない方がいいんだよ」

「むうー、そんなのわたしにおしえたの？」

ぎゅううと握っている手を握り締めてくるクイン。頬をぷくーと膨らませて不満を露にする

「お前なら大丈夫だろ。いぎとなったら俺がお前を守ってやるつーの」

「えへへー、うれしいな。かなでくんはわたしのおうじさまだね」

にかーと笑って嬉しそうにするくいん。

「そうだなー、俺はお前の王子様だよー」

じゃあそろそろへロデリック商会へにお前を治してもらいに行こうかー」

いい加減にしろよこのエセ幼女、恐怖でネジが飛びすぎだ！お前は美少女だろ！どんなことされたらそんな風になるんだ。逆に俺も体験してみたいわ！

「いやだ！あそここわいもん！ぶくぶくしてるちゅうしやされるもん

「けがいっぱいはえるおくすりのまされるもん！」

うん、〈ロデリック商会〉に行くのは止めよう、あそこは駄目だ。く
いんが実験台にされる。

「よし、くいんちゃん〈風水の館〉に行こう。ケーキを食べよう」
「ほんとう？かなでくだいすきっ！」

満面の笑顔で抱きついてくるくいんちゃんを受け止める

が、クインは一応十九歳だ。歳よりは若く見られるクインではある
けれどこれはヤバイ。精神年齢と肉体年齢が噛み合っていないんだ。

なんかこの表現もすごく危険な香りがする、どうしよう。昼間から
なにイチヤイチャしてんだよぶっ殺すぞという視線が街中から突き
刺さる。

まずい、こんなところでこんなことしてたら絶対ろくな噂が立たな
いよ。

くいんちゃんをお姫様抱っこして一気に飛び上がる。こんなとこ
ろいてたまるか！早く逃げなきゃ

「わあー、かなでくんかつこいいー！」

「やめなさい！女の子がそんな簡単に男の子に頬擦りするもんじゃあ
りません！」

天秤祭を前にして道を行き交いする人が増えたアキバの街の大通
りを人避けながら走っていく。路地裏入るべきか？

そうしよう！手遅れになる前に。とりあえず目についた小道に駆
け込む。

「おい、見たか？今の。あれマリエールさんところの奏さんだよな。
あんな可愛い娘路地裏に連れ込んだぞ」

「ああ、見た見た。しかもあの娘奏に頬擦りしてたぞ」

「しかもイヌミミとシッポがついてたぞ！なんて趣味してんだ天才か
よ」

ちくしょうっ！恨むぞ、あのマッドサイエンティスト！しかも俺の
趣味に余計なものが追加されちゃった。

街にとつともない噂を流してしまったがなんとか風水の館へと到
着して中に入れてもらうことに成功した。

どうやら大地人である風水の館の人たちにはくいんちゃんの格好はいつもの〈冒険者〉の不思議な格好として受け入れてもらえたようだ。

「エリツサさあん、どうしよおう…」

街に俺が昼間から女の子にイヌミミとイヌシツポをつけてやりまくりの変態なんて噂がたつちやっだよ」

「火のないところに煙はたたないと申しますし…」

クイン様と街中で恋人のようなことをなさってなければ大丈夫なのではないでしょうかね…?」

クインと恋人みたいなこと…

・直前まで仲良く手を繋いで歩いてた

・この前は一緒にケーキを食べに行つた

・お互いのギルドによく遊びに行つている

・アカツキちゃん、ミノリンに恋人かと疑われた

「もうダメだ〜おしまいだ〜」

「お心当たりがあるんですか?!」

「心当たりしかありません!」

視界の端には、出されたケーキをパアアアという擬音が聞こえてきそうな笑顔で食べるくいんちゃんとそれをニコニコと眺めるレイネシア姫がいる。

妹でも見てるかのような表情をした姫様の方は楽しそうだったよかったです

でもだ、

「姫様、これからの俺の身の振り方についてじっくりと話しましょう」「あれ?今回のお話は私の悩みを聞いてくださるお話じゃなかったのですか?」

「ええ、本来はそのつもりだったのですが残念ながら姫様の愚痴に文字数を費やす暇がなくなっていました。このままでは俺が戦場で興奮するクラスティを越える変態の誇りをうけてしまうから!」

「それはいけません!エリツサ、一緒に奏様があの妖怪のようになつてしまわれないような打開策を考えましょう!」

先のアキバの街への勝手な交渉によりアキバへの大使役という体のいい謹慎を祖父にもらったレイネシア姫。

そんな彼女のの仕事はアキバの街の〈冒険者〉と大地人の橋渡し。〈冒険者〉のことをよく知るために学び、日々忙殺されるレイネシア姫は〈冒険者〉のお悩み相談まで受けている。

果たしてこれはレイネシア姫の本当の仕事なのか。

クラスティはその光景をこっそりと見ながら疑問を口に出したりはせずに隣に座るシツポをブンブンと振る名探偵と一緒に紅茶をすすっていた。

「ねえ、くらすてい、このケーキもらっていい？」

「どうぞ」

「ありがとう」

第三十話 おいでよアキバの街

木々が生い茂る緑の街道を朝もやの中に進む一台の馬車があった。日もまだ上がったばかりで辺りはシン…と静まっていて小鳥の小さな鳴き声だけが耳についている。肌には程よい冷たさと湿り気を持った空気が触れて心地よい朝だった。

そして馬車の向かうその先に一つの町がうつすらと見え始めていた。

「見えてきたぞ、あそこがアサクサの町だ」

「へえー。のどかそうでいい町ですね」

「だろ？町の人もいい人ばかりだ」

馬車の荷台からひよつこりと顔を出して町を眺めたあとに率直な感想を漏らすソウジロウに馬の手綱を握る奏が返事を返す。

「それにしても良かったんですか？」

奏さんずつと手綱握ってましたけど、起こしてくれれば僕もやりましたのに、街を出てくるのも早かったから眠いんじゃないですか？」「正直眠いな。でも馬車酔いしてろくに眠れない挙げ句吐くよりはいいよ」

「ああ、そういえば奏さん乗り物全部ダメでしたもんね」

「コーヒーカップでも吐く自信がある」

「自信があるっていうか吐いてたじゃないですか、昔」

「そうだっけ？嫌な記憶はすぐに忘れるからな」

「カナミさんに膝枕されてたじゃないですか」

まだ^{デボーチエリテイパーテイ}放蕩者の茶会があつた頃にカナミがみんなで遊園地に行く！^{デボーチエリテイパーテイ}と言いついて行った某夢の国。

カナミと一緒にコーヒーカップに乗ったはいいものの開始早々にギブアップのボタンをあるわけもないのに探しだし、ひっちゃかめっちゃかに探すものだからカナミの胸に思いつきり手を突っ込むという暴挙。

それだけでは飽きたらず口からキラキラ七色の虹をかの有名なネズミ様に浴びせかける始末。

あのときばかりは夢の国の暗部にこの先輩は暗殺されるのではないかと思つたソウジロウではあつたが夢の国の方々は寛大なお心で許してください、インテイクス女史に奏がドリルアホールパイルドライバーをかまされることで事なきを得たのだつた。

「覚えてるよ。鮮明に、甘い匂いも、柔らかい感触も、首の激痛も」

「よく生き残れましたね、あの時は……」

「うん……」

正直自分でもなんで生きてたのか不思議でしようがない……」

夢の国を敵に回すようなことよりもカナミの胸を揉むことの方がよりひどい代償を払うことになるとは、あの時の惨劇のような光景を思い出してブルリと震えるソウジロウと奏。

あの光景には百戦錬磨のネズミ様の笑い声も恐怖の色が色濃く出ていたと思ひ出す。

そんな昔話に花を咲かせているうちにも馬車は進んでいて、もうすぐそこにアサクサの町の入り口が迫っていた。

そしてそこに一本の矢が飛んでくる。

真つ直ぐに飛ぶ矢が奏を射ぬこうとした瞬間に刀が鞘を走る音と空気を斬る鋭い剣音が同時に矢を切り落とした。

切り落とされた矢が地面に突き刺さる瞬間には奏の隣に座っていたソウジロウの姿はなく馬車を飛び降りて刀を抜き走り出している姿があつた。

風よりも数段速く走り抜けたソウジロウは木に手も使わずに駆け登ると一本の枝を飛んできた矢とまるで変わりにないように矢の何倍もある太さを容易く斬つた。

枝は万有引力の法則に従つてまっ逆さまに落ちる。一つの影も一緒にだ。

「アナタ、どういふつもりですか？」

ピタリとソウジロウは奏の業物の刀と遜色ない幻想級の刀を落ちてきた影に突きつけた。

さつきまでの和やかな柔らかい柔和の一言につきる雰囲気は消え失せ笑顔を浮かべたままに人を殺すことができそうな冷たく殺気に

満ちた眼差しでだ。

「ソウジロウ、刀を納めてやってくれ。ソイツ俺の友達だから。」

おい、ウイルそうやって調子に乗るからこんな目にあうんだぞ」

「かつ、奏にいちちゃん、たすかった」

馬車を止めた奏が高下駄をカランと鳴らして馬車から降りソウジロウに首に食い込まんばかりにギリギリで止められた刀を引くように頼む。

奏にそう言われたソウジロウはするりと刀を引いて流れるように鞘へと納刀してコロリと表情をいつもの虫も殺せなさそうな顔へと戻す。

「奏さんの友達ですか！それは失礼なことをしました！すみません！なんとお詫びしたらいいことか」

「謝んなくていいぞー。このバカが先に矢を射ってきたのが悪いんだから。」

どうせ、おやつさんに鍛えてもらってちよつとばかり戦えるようになったからちよつと脅かしてやろうとか考えて待ち伏せしてたんだろ」

「うっ…」

凶星をつかれたような顔を見せるウイル。

この少年はへ大災害へ直後にアキバの街にいらなかった奏とその付き添いをした千葉がアサクサの町に身を寄せた時に居候をした家の長男坊主。

父親が狩人をやっているために奏がアキバの街に帰った後に弓術や短剣の使い方なり教わったのだろう。

強くなった自分を見せてやりたいと思った少年心ではあったが運が悪かった。

自分の大切なものを傷つける者には容赦も歯止めもなく刀を振るセタソウジロウという奏の後輩が長屋風景を見てみたいと天秤祭へアサクサのお世話になった家族を招待しようと迎えに行くのに同伴していなければこうも手荒く懲らしめられることはなかっただろう。

「まあ、だからって説教を緩めてやる気もさらさらないけどな。俺の説教が終わってもおやつさんにも説教してもらおう」

「そんなあく。久しぶりに会えたんだからさ、父ちゃんにぼらすのだけは許してっ！お願い！」

「……あのな、お前これが俺たちじゃなかったらどうするんだ？」
「え？」

「これがもし他の〈冒険者〉だったら？またあのときみたいになってたかもしれないぞ。」

他の〈大知人〉だったら？下手したら死んでたぞ。

〈大知人〉だったとして貴族の人間だったら？お前だけじゃなくてアサクサの町の人にも罰が与えられるだろうな。

お前の持つてるその弓矢はついさっきお前の命を奪うことができた刀と同じ人を——」

奏は言葉を一瞬だけ止める。口にするのも気分が悪そうに眉間にシワを寄せながら

「——人を殺せる道具だよ」

殺すつてのは終わらせるってことなんだ。これからやらなきゃいけないことがあっても、守りたいものがあったても、大好きな人がいても手放させるんだ、それは〈冒険者〉だろうが〈大知人〉だろうが変わらない」

「てことでソウジロウ、お前も無闇やたらに刀を抜くな！」

お前子供じゃなかったら斬ってただろ」

「え、僕もですか？」

「当たり前だ。お前のその価値観は理解できるけど、お前は容赦がなさすぎだ。ちったあー考えて動け。」

それに俺があんなバレバレの隠蔽に気づかないわけないだろ。

自分に〈ダメージ遮断呪文〉の最適投射なんて半分寝ててもできるわ」

「あはは…肝に命じときます。」

でも奏さん、」

「ん、なに？」

「僕は女性でも斬りませんよ！」

「…お前はそういう奴だな」

キツパリと断言するソウジロウに呆れてしまつて奏は疲れがどつときてしまう。

このハーレム男はこういうキザつたいことを恥ずかしげもなく堂々と宣言するのだ。

「ウイル！」

「ひゃっ、はいっ」

「ソウジロウに刀を向けられてもよく気絶しなかつたな。

強くなつてんじやん」

ほれ、さっさと行くぞ、奏はそんなことを言つてスタスタと馬車のところに戻つていく。残されたソウジロウはウイルに顔を向けると「奏さんはやっぱり優しいですよね。」

多分君のお父さんにもあんまり怒らないように言つてくれると思いますよ?」

「ほんと?」

「ええ、奏さんは砂糖の蜂蜜漬けみたいに甘い人ですから」

不安そうな顔でソウジロウを見上げるウイルを安心させるようにニコリと笑うソウジロウはそう答えた。

いきましようか、そう声をかけてソウジロウとウイルは奏の背中を追つてアサクサの町に向かった。

このあと帰つてめちやくちや怒られた



「お久しぶりです！おばさん、おやっさん」

「おう！久しぶりだなあ奏」

「少し見ない間に奏君ちよつと背が伸びたかしら」

「伸びてません」

久しぶりの再開を果たし満面の笑みで挨拶をする奏。それに腹の底に響く大きな声で返事を返すおやっさんと五月の頃と変わららな

い天然さをみせるおばさん。

そして何を思ったのかおばさんは両手を大きく広げて見せて、

「おいで?」

「この歳でそれは流石にしませんよ!」

「あらまあ、そうなの?」

「がははっ!なら俺がママを抱き締めよう!」

「まあ、パパったら」

「アンタらほんとに変わんねえなあ!」

以前と変わらない甘々しい空気を展開する夫婦にツツコミを入れるが奏のその表情は明るく楽しげだった。

「それよりアキバに行く準備はできてます?」

他のところ地域からも人は入ってくるだろうし街道がごった返しになる前に入っちゃいたいんですけど」

「ああ、そうだな。じゃあ昼には出発しよう。」

ちよつと坊主の簀巻きを解いて下ろしてくるから」

「どうやら〈冒険者〉の拷問文化はアサクサの町まで伝わってしまったているらしい。誰が伝えたか言及はしないが

「ウイルの奴、ずいぶん頑張ってるみたいですね」

「ええ、頑張ってるわよ。」

毎日早起きして、兄ちゃんたちみたいな強い〈冒険者〉になる!って言って狩りに行ったり、弓の稽古をしたり。

最近パパたちの狩りにもお許しがでて付いていくようになったのよ?」

「俺たちみたいな〈冒険者〉になるですか、目標は高いにこしたことはないですけどなかなか無茶なことを言いますねえ。」

俺たちと対等か、ふふっ」

普通なら大地人が冒険者のような武勇を得るなんて不可能とはつきりと断言することが出来る夢であっても奏はそれを不可能なことではないと知っているゆえに笑みがこぼれる。

あの年下で金髪のなんとも憎めないわんこ王子が〈冒険者〉になれたようにもしかしたら何か方法があるかもしれないじゃないか。

ただの大地人から〈古来種〉になり〈イズモ騎士団〉に入ったという英雄もゲーム時代には存在したのだから、

笑えたものじゃない

「嬉しそうね、奏君」

「そりゃあ嬉しいですよ。」

自分に憧れてくれるなんて嬉しい限りじゃないですか」

「うふふ、千菜ちゃんとももう少ししたら会えるのよね。楽しみだわあ」

「千菜もついてきたがってましたよ。」

祭りの準備があつたんで出てこれませんでしたけど」

10回戦のじゃん拳大会の末に迎え役を勝ち取った奏は悔しそうに愚痴をこぼしながらクレセントバーガーの試食をする千菜の姿を思い出しつつおばさんと世間話をする。

するとそこに、奏さんと千菜の代わりに迎え役を担って、長屋を見に来たソウジロウの声が聞こえた。

ふっと奏が振り向いてみると視界を覆い隠すほどにこんもりと芋やブドウに赤い大根と様々な農作物を抱えたソウジロウが歩いてきていた。

後ろには同じようにして両手いっぱい農作物を抱えるおやつさんとウイルの姿もある。

大方持ち前のオート発動のハーレムスキルを駆使して町のみんなから貰ったんだろうとこの光景に何度かの既視感のある奏には容易に想像ついた。

「凄いやだな……。魔法の靴に入りきらなかったのか？」

「出発するときに貰ったお弁当の重箱が圧迫しちゃって」

「ちつ…これだからリア充は」

「ほら、俺の魔法の靴マジックブーツに入れろ。入りきらない分は馬車の荷台に積んどけ」

「はいっ」

ソウジロウはニコニコと嬉しそうに馬車の荷台にポンポンと街にいる可愛い女の子たちへのお土産を積んでいく。ウイルの持っていた作物の山を一つ一つ魔法の鞆マジックバックに放り込んでいく。

「あの兄ちゃんは凄いな…。英雄色を好むとは言うがあ、ありや英雄冒険者じゃなくても寄つてきそうだ」

「おやっさん、あれは俺たちとは別の存在と考えてくれ…」

あんなと一緒にされたら敵わねえよ」

「でも羨ましいんだろ？」

「……………まあね」

「パッパ、奏君？」

あんまり下らないこと話してるようだったら簀巻きにして谷底の橋に吊し上げちゃうわよ？」

「スミマセンデシタ」

コソコソと話す男二人にのほほんとした口調で冷たい冷気を隠した声がすぐ真後ろからかけられる。

ビクツとはね上がって敬礼する熊のようにでかい男と髪の毛長い青年を見てまだ小さい少年は指を指して大笑いし、モテモテハーレムの青年は首を傾げていた。

「行きましようか。私は早く千葉ちゃんに会いたいわ」

バカな男なんてほつといて」

「ああ、ママあ許しておくれえ、そんな気はなかったんだ」

ペコペコと必死に頭を下げる大男の姿はアサクサの町の住人たちでもなかなか見ることのない光景だった。

「それじゃあいきましたようか。」

いざアキバへ、俺たちの街へ」

アキバの街へと続く真っ赤な紅葉と黄色い銀杏のキャンバスとなった街道を進む一台の馬車。そこからは楽しそうに笑いあう賑やかな声が聞こえてくるのだった。

第三十一話 千菜の顔

「小竜く、ここの箱の中身売り場の裏に運んどいてく」
「わかりましたー」

天秤祭を明日に控えた〈三日月同盟〉のギルドホールではメンバーたちが各々の仕事の準備をするため忙しそうに動き回っていた。

その中で千菜も倉庫の中で商業会館で出店する冬物衣料の展示即売会の商品の表を片手に声を上げて指示をしていた。

大災害より後に人数が増えた〈三日月同盟〉ではあったがいかなせん天秤祭で出店する予定の店舗数の多さからメンバー全員が前日になっても、前日だからこそ忙しく駆け回っている。

小物アイテムや武器の露店、軽食販売店クレセントムーンの復活、醸造酒の試飲即売店、冬物衣料の展示即売会、

天秤祭に向けて開かれた〈三日月同盟〉全員参加会議で挙げられた案をギルドマスターのマリエールは

「どれか一つに絞るなんてもつたいないやん、全部やったらええやん」と無茶ぶりをしたがゆえにみんな〈円卓会議〉結成前の頃と同じような忙しさをもう一度味わうことになっていた。

まあ、そんなことを言ってもあのときと違い失敗が許されないような状況でもないし自分たちから望んで突っ込んだ忙しさだったので全員が学園祭のようなテンションで楽しみながら作業に取り組んでいるのだった。

「千菜お姉さん、奏お兄さんがお客さんと一緒に帰ってきたです！」

可愛らしいたくさんのフリルとリボンがあしらわれた服を着たこれまた可愛らしく小さな少女がびよこびよこことはねるように倉庫の階段をかけ降りてくる。

「ありがとうアシユリン。わざわざ伝えに来てくれて」

「えへへ」

駆け寄ってきたアシユリンと呼ばれた少女を千菜は撫でると気持ち良さそうに目を細める。

ヘンリエッタの可愛いモノ好きが移ったもとい感染した千菜では

あつたが時と場合は弁えているようだ。むろんヘンリエッタが時と場合を弁えていないというわけでは断じてないが。

「衣類の運び込みももうすぐ終わるしこれが終わったら行くね。」

アシユリンのところの準備はもう終わったの?」

「ヴィオさんのところはお酒の匂いがすごくて、私いるだけで酔っぱらっちゃいそうになっちゃったんです。だからヴィオさんが他のところのお手伝いに行ってもいいよって言ってくれて」

「あーなるほどね、じゃあアシユリンはリリアナのところでお手伝いしてきなよ。」

今、商業会館で〈第八商店会〉から借りたマネキンのコーディネートトしてるところだから、そっちの方が楽しいでしょ?」

「はいです!千菜お姉さんありがとうございます」

てたてたと走っていくアシユリンを見送りながら千菜は手元の表へと視線をおとす。

表に記されている商品はおおかた商業会館への持ち込みが完了の印がつけられており持ち込みが終わっていないのはどうやらあと一箱だけのようなだった。

しょうがない最後の一箱は自分で運ぶかと表をぺいと投げると、

「痛い!角がデコに直撃祭り!」

「あ!直継さんいいところ!」

これ最後の一箱ですよ」

「千菜!まずは最初に謝れ祭り」

「アカツキさんが直継さんにだったら別に謝らなくていいって」

「ちみっこー!!」

「まあまあ、後でマリエルさんと二人きりきなれるように仕込んでおいてあげるからさ」

「おつ:おう。なんか悪いな、気を使わせちゃって」

(照れてる直継さんかわいい)

最近、なんだかんだと目覚ましい勢いで仲良くなっていく気前のいい友人とギルドマスターの恋路を千菜は陰ながら応援していた。

小竜のことを考えると少しばかりかわいそうに感じなくもないが

恋愛とはやっぱり食うか食われるかの厳しい勝負なのだ。機会があれば小竜にもなんとか場を作つてやったりしているのだがどうしたつてこればかりは当人たちの問題になつてしまう千葉は見守るしかない。

そんなわけでタイミングよく現れた直継に荷物を持たせた千葉は帰つてきた兄と兄が迎えに行つた懐かしい人たちのもとへと忙しうにするメンバーを尻目に小走りで向かうのだった。



アサクサの町を出発して一時間と少しの短い旅路を終えアキバの街へと奏は帰つてきた。

〈ハーフガイアプロジェクト〉により本来の距離の半分程しかないこのセルデシアの大地。だがだからといって現実世界より早く目的地に着くということはなかなか難しい。

こちらの世界の道は神代の名残を残してでもない限りあちらの世界のようにコンクリートで舗装されてるわけでもないし目的地に直接向かえるような都合のいい道が何本も用意されてたりはしないからだ。

そしてきわめつけにはモンスターが街道であつても出現することなどざらにあるので、グリフォンやワイヴァーンのような飛行型の召喚獣を使役していない限りこの世界での街道の移動は現実世界よりも多少なりとも難易度を増すのである。

そんなわけでもよりもゆっくりと時間をかけて馬車を走らせ〈三日月同盟〉のギルドホールへと帰りついた奏は客間のソファにくつてりしていた。

明日架が気を利かして持つてきてくれた湯呑からはゆったりと蒸気がたちのぼっている。

ソウジロウとウイルの二人は馬車のなかで随分と仲良くなつたらしく窓の外に見えるアキバの風景に目を輝かせるウイルの質問にソウジロウがひとつひとつ答えていた。おばさんはその光景を見ながらいつもどおりに微笑んでいる。

おやつさんはお茶と一緒に出された茶菓子を気に入ったようでパクパクと頬張っていた。

そこにドアノブがひねられるわずかばかりの金属音とドアの開かれる木の軋む音が聞こえた。

そこには董色のブラウスを着こなした上品な印象を受ける秘書風の女性と女性の象徴ともいえる部位がとても自己主張をしている全体的にやわらかな印象を受ける女性が立っていた。

「あ、マリエちゃん、ヘンリエッタさん、ただいま帰りました」

「おかえりカナ坊」

「ずいぶんとはやく帰って来れましたわね。もうアキバの街に入ろうとしている馬車も多かったでしょうに」

「南入口の方は多かったですけど北入口の方はまだそうでもなかったですよ」

「なあなあ！それよりもはやく紹介してーな」

うきうきニコニコとしているマリエールに急かされて奏はここになにもせずに暇を持て余していたを思い出す。そういえばマリエールとヘンリエッタを紹介するためにここでぼーっと過ごしていたのだった。

「えーつと、おやつさん、おばさん、こちらは俺がお世話になってるギルドのギルドマスターと会計さん。

こっちがマリエールさん。姉です。でこっちがヘンリエッタさん。オカンです」

「なんでマリエが姉で私がオカンなんですか！同じ年ですよ！」

「イメージ？」

「奏は天秤祭のノルマは倍ですね」

「お許し下さいお姉さま」

「よろしい」

「ぶふう、梅子… オカンって…」

「マリエエ？なんであなたも笑ってるんですのお？」

「かんにんしてえかんにんしてえ… ふふっ」

「マリエのノルマは奏の倍ですわね」

ヘンリエッタの一言にマリエールの顔は血の気がひくようにして青ざめる。

「そんなん無理や！昔カナ坊が繁盛してた店の復活版をやるんやろ」と非難の声こえをあげるマリエール。梅子のアホ！という言葉ももちろん最後には付け加えられる

「がっはは、実に愉快なお方たちですな。奏が身を寄せているのも頷ける」

「そうねえ。奏君はアホの子だからこういうところでちゃんと自分を受け入れてくれる人たちがいてくれると安心するのねー」

マリエールとヘンリエッタ、奏の三人の掛け合いを見たおやつさんとおばさんの二人は素直な感想を話し奏が成長し自分の居場所を作っていたことに安心する。

別れの言葉を伝えようとせずにアサクサの町を去ろうとしたあの頃とは違い今は信頼できる人たちと共に居場所を作っていることに。

奏の『アキバのオカンと姉』と『アサクサの母親と父親』の挨拶もそこそこに終わり思いで話に花を咲かせようとし始めたところでもドアが勢いよく開かれる音が部屋に響いた。

あまりにも勢いよく開かれたドアはそのまま壁へとぶつかり壁にドアノブがめり込むような嫌な音が聞こえた気がした。

ヘンリエッタと奏は何が起きたかすぐに察して顔をしかめマリエールはびつくり仰天と目と口を大きくドアの方を見る。

「こりや、ノルマはマリエちゃんの数だな…」

「いえ、ウチの売り上げの五十パーセントですわ」

「俺の売り上げも合わせちゃダメですか？」

「許しましょう」

「どうも」

ギルドの雰囲気合わせたカントリー調の片開き扉から緑の大きな塊が飛び込んでくる。緑のその塊は目にも止まらないスピードで飛び出してきて、

「おじさん！おばさん！久しぶりく!!」

部屋に入った一歩目で踏み切り真っ直ぐにソファへ座る二人へと飛び付いた。

飛び付かれた方のおばさんはひょいっとおやつさんを盾にし盾にされたおやつさんの方はまあまあ見事にソファの後ろへと転げ落ちた。

「がっははは、相変わらず元気良さそうでなによりだ嬢ちゃん」

「久しぶり千菜ちゃん」

おやつさんに飛び付いた千菜は立ち上がって倒れこんだおやつさんに手を貸して立ち上がらせる。そして窓際にいる一人も発見する。

「お、ウィルじゃない」

そして千菜は何を思ったのか両手を大きく手を広げて見せて、

「おいで」

「そんなことしないよ!?!」

どこかでデジャブった光景をして見せた。

「あれ? っていうかソウジロウ、アンタなんでこんなところいんのよ。何で姫の目の前にいるのよ。」

さっさと帰ってシロエに押し付けたデート割り振りの手伝いしてきなさいよ」

「相変わらず手厳しいですね千菜さん」

「姫がアンタに優しくしたことが今までであったかしら? ハーレム魔さん?」

かなり斬新なあだ名だ。

「ふふ、わりと記憶にあります」

何かを思い出すように宙を眺めたりするソウジロウ。嫌よ嫌よも好きのうちと言ったりするが心当たりがないこともないらしい。

千菜も自分で言っておきながらも否定できずにぐぬぬと唸るだけだ。

千菜が一方的に嫌ってつるような言動をするが存外ソウジロウと千菜の関係は悪いものではなかったりするらしい。

「とは言っても千菜さんの言う通りシロ先輩にばかり任せちゃってたら悪いですからね。」

僕もそろそろおいとまさせてもらおうかと思えます。ウイル君も是非ウチのギルドにも遊びに来てくださいね？歓迎しますから」

そんなことを言ってソウジロウはマリエールとヘンリエッタに一言「お邪魔しました」と頭を軽く下げると魔法の靴マジックブーツからアサクサでもらった果物やらをおすそ分けですと渡して帰っていった。

奏の魔法の靴にも随分な量の農作物やらが入っているというのに律儀な男である。だからこそハーレムなんて常人には作ることなんて到底不可能な代物を形成できているのだろうか。

「姉ちゃんを簡単にあしらえる人が兄ちゃん意外にもやつぱりいるんだな」

少年の小さくつぶやかれた言葉を一人捉えた奏は苦笑するのだった。



ところは変わってアキバの街の一角。

ゾーン購入もされていない人なんてまったく来ることのないようなただの廃墟に彼らはいた！

『皆の者、よくぞ集まってくれた！』

この日のために我等のギルド〈異端者審問委員会〉を中心に諸君らは苦しい訓練と必要なアイテムを集める面倒極まりないクエストの数々をよくクリアしてきた。

準備は万端だ。あとはこの〈大規模戦闘レギオンレイド〉に挑むだけだ。是非とも皆の溜まりに溜まったその殺意をぶつけて欲しいと思う！

それではシセラ將軍に一言いただこうかと思う』

魔術師の言葉を受けて奥にいる1人の男がその姿を現し壇上へと上がる。

その姿を見つめる男たちからは大きな歓声が上がりますがそれを片手で収め男は目の前にいる同士たちへと低く張りのある声で語りかけ始めた。

『大地人も冒険者も関係などない、男は義理と人情だけに生き女に生きるべからず、ここににいる者たちはそれを理解した戦友であると私は理解している。』

私から多くは語らない。だが、一つだけ、

そんなこともわからない異端者には月に代わって…」

シセラという一人の男の声に反応し九十五人の同士たちは応えた。

「サーチ&デストロイ!!!」

「明日は魂を解放しつくすのだー!」

「オオー!!」

アキバの街の外れのはずれ。

天秤祭前日、男たちの聖戦^{レギオンレイド}が静かに幕を開けようとしていた。

第三十二話　ワレワレハ　リアジユウヲ　ユルサナ
イ　〈前編〉

ミノリはやるせない気持ちでいた。

悩みの種はミノリにとっての二人の先生のこと。

一人はミノリの所属するギルド〈ログ・ホライズン記録の地平線〉のギルドマスター兼アキバの街の自治組織〈円卓会議〉の一席を担い基礎戦術や知識を指南してくれているシロエ。

もう一人はシロエの友人でミノリと同じ十二職業〈カンナギ神祺官〉の中でもサーバー上位ランカーとして有名だったらしい〈ログ・ホライズン記録の地平線〉とは友好関係にあるギルド〈三日月同盟〉に席を置き〈カンナギ神祺官〉としての技術や知識を指南してくれている奏。

この二人のことで最近、様々な体験をしたことで周囲の同世代よりも若干大人びた雰囲気を感じさせるようになったミノリは悩んでいる。

二人の先生の指導に何か不満があるわけではない。

むしろミノリがまだ〈エルダーテイル〉を始める前から活動しその上へ放蕩者の茶会〉という伝説的プレイヤー集団に所属していたトツププレイヤー二人から初心者のうちから指導してもらえるなんて英才教育普通の初心者は受けることはできない至れり尽くせりの環境だとミノリ重々と承知していた。

そして、シロエは〈円卓会議〉の委員の一席という大役をこなしながらできる限りミノリの助けになろうとしてくれていたし、奏も自分の所属するギルドでもないミノリに惜しげもなく彼の今までの経験談や培ってきた〈カンナギ神祺官〉としての技術を教えてくれていたのだ。感謝こそすれど不満を漏らすことなんて一つもない。

では、ミノリにとって何が悩みの種なのか、

それは、奏のミノリン呼びに始まる度重なるセクハラ言動……。

ではなく、二人の街の住人たちからのあらぬ誤解である噂であつ

た。

先の〈ゴブリン王の帰還〉を根底に据えるザントリーフへの数万のゴブリン軍の襲来があった。

その事件は、当時、時を同じくしてチョウシの町の防衛にあたっていたミノリは人伝ての話ではあるがレイネシア姫という大知人のお姫様が自らアキバの街まで出向きアキバの街の〈冒険者〉へと助力を頼み彼女の真摯さに心を動かされた志願の〈冒険者〉たちにより未だゴブリンの殲滅活動は続いているものの事態は一旦の収束をえた。

問題は、その後の〈円卓会議〉と〈自由都市同盟イースタル〉の友好条約締結を祝う晩餐会でのことだった。

チョウシの街の防衛戦にも参加し〈円卓会議〉の参加ギルド〈記録の地平線〉の一員でもあるミノリはその晩餐会に参加することができた。

ヘンリエッタが用意してくれたオレンジのドレスに向日葵の髪留めで精一杯のおめかしをして参加した晩餐会は普通階級の家で育ったミノリにはあちらの世界では一生経験できなさそうな舞台で緊張も少ししたがとても楽しかったことを覚えている。

けれど、そこでミノリは耳にしてしまったのだ。

「なんだかあのシロエってやつ怪しいよな」

「ああいう奴っているよな。裏でコソコソとやってそんな奴」

「なんだか目つき悪いしなに考えてるかわからないし」

そんな風に話している参加者の話をたまたま聞いてしまった。

本当は優しくとてもいい人なのに、あまり表へ出たがらない性分のシロエは鋭い目つきも手伝ってしまつてあらぬ誤解をうけてしまっている。

奏の方も同じような感じだった。ある日街を歩いているとこんな噂を耳にした。

「〈三日月同盟〉の奏は真昼間からイヌミミとシッポをつけた女の子を路地裏に連れ込んでいる」

「〈シルバーソード〉に気に入らないからといちやもんつけて喧嘩を

売った」

「D・D・Dのギルドキャツスルの前でD・D・Dのメンバー三人を人質にとったうえに幹部をバカにしまくって無傷で帰還した」とか、きつと何か間違つて話に尾ひれ背ひれがついてしまったんだろう。

奏から「茶会」の頃の武勇伝を聞いているミノリとしてはそうと思わざる負えなかった。元々いろんな本当か嘘かもわからない噂が絶えなかった奏なのでそれも手伝っているのだろうとミノリは考えていた。

その証拠に奏本人に話を聞いたところ苦虫を噛み潰したような顔で

「ミノリン、人の噂も七十五日つて言つてな。ほつときや勝手に聞かなくなるよ」

と言つていた。

こういう根も葉もない噂には慣れてるんだろうなとミノリ密かに感心し改めて奏がすごい人物なのだと思つたものである。

ともかくにも、二人共いい人なのにこんな不当な扱いを受けるなんておかしい、そう思つたミノリはこの天秤祭をうまく活用して二人のイメージアップをしてみせようと考えたのだった。

幸いにもあてはすぐに見つかった。

奏は昔やつていた店を天秤祭限定で復活させるらしく、そこが繁盛してたくさんのお客さんが来てくれれば直接奏と話すことで奏に対する妙な噂が過度なものであるとわかつてもらえるはずだ。

そして、シロエの方はケーキバイキングと一緒にいつてもらえることになった。もちろん目当てはケーキだけではない。ケーキも目的の一つではあるのだけど。このケーキバイキングは予選で優勝するとレイネシア姫主催の大夕餐会のチケットがもらえるのだ。

夕餐会には「アキバ新聞」や「アキバdays」の取材も来ると聞くので、もしかすると…

そんなわけで、ミノリの天秤祭一日目。

まずは奏の店「陰陽屋」のお手伝いから始まった。

「いやー助かるわミノリン。具体的にはその男どもの十倍たすかるわー」

「いえ、そんなことないですよ。お二人とも接客から品出しまでしてもらってますし」

「失礼なヤツだな。君ってヤツは。まず観光に来た貴族に店の手伝いさせるバカがどこにいるんだい」

「実用性のない友情ならそんなもん、引き裂いてペースト状にして焼いて食っちゃまえ」

「それには同意しかねるのだがね!？」

「私としましては奏様の〈陰陽師〉の魔法が見れるだけで何を言われようと構いません」

「ほら、リィガンさん見習ってせかせか働けよ。あとミノリンに手え出したらお前でも吊し上げにするからな」

奏の〈陰陽屋〉の準備のために朝早くに出てきてミノリがまずはじめに見たのは簡易店舗の中で汗水たらして準備を進めている奏と見知らぬ男性二人だった。

小柄な体躯にシワがよってヨレヨレなローブを着た中年くらいの男性はリィガンと名乗った。なんでも魔法学者であるらしく奏の魔法を観察するためにわざわざ〈エターナルアイスの古宮廷〉から出張ってきたらしい。

もうひとりの奏と年もたいして変わらなそうな男はエルノィコーウエンと名乗った。なんと彼は〈自由都市同盟イースタル〉の筆頭領主セルジアットィコーウエンの養子であるそうだ。いつかに会った時とは違いエルノの身分を知ってしまったミノリは失礼の無いようにとガチガチになりながらも挨拶をしたところ、

「今回は奏の友人としてこの店の手伝いをさせられてるからそんなに気を使わなくていいよ」

と言われた。ニコリと笑う笑顔はどことなく奏のそれと似ていると思った。

妹がミノリと同年代らしくお兄ちゃんと呼んでくれても構わない

と言って頭を撫でられそうになったミノリだったが奏の助走付きのドロップキックにより目の前でエルノがふきとび阻止される光景には驚かされた。

けれど、二人共とてもいい人だった。

なんでも奏が「エターナルアイスの古宮廷」にいる間お世話になったのがこの二人だったらしい。

そして助っ人の加入もあったことでミノリが来た時にはもうほとんど準備も終わっていて、あとは店を開店するだけとなっていた。

ミノリも奏の役に立つように頑張らねばと気合を入れ直し、奏から手渡された鮮やかな瑠璃色とそれに映える真っ白な割烹着に身を包んで奏の手伝いを始めたのだった。

「ミノリンが「アップレンティス見習い徒弟」になってくれたおかげで実際すごく助かってるしな。中級クラスの特技でも「陰陽師」のスキルが使えるだけで俺は高位の依頼に集中できる」

「それにしてもいろんなお客さんがいらっしやいますね」

「〈海洋機構〉の特性武器の店の隣にこじんまりとだが陣取っているとはいってもいろんな人種の人が「陰陽屋」をまだ店を開店して間もないというのに訪れていた。」

レベル90などの高レベルプレイヤーが割合としては多いがそれ以外の人種もたくさんいるのだ。大手のギルドタグをつけたプレイヤーがいたりする中を私服のデート中と見えるカップルが店内にあるあらかじめ加護を付与したお守りや小物を見ているし、ミノリと同程度か少し上くらいの中堅プレイヤーも棚に飾ってある武器を見ていたりする。店内はなかなかカオスな光景なのである。

「ミチタカさんに貸し店舗を借りて正解だったな。もう少し広い所を要求しても良かったかもしれん」

「ここでももの凄く広いと思いますよ」

「まあこれもミノリンのイラスト付きのチラシの効果も結構あると思うよ」

「えへへそんなことないですよ」

「いやいや、マジマジ。あんな斬新なチラシは俺生まれて初めて見た

よ……まじで」

「草くえー」と言い放つ麒麟のような生物が描かれ丁寧に伝えた内容がまとめられたチラシを渡された時の奏の心境といたらもう何も言えないものだった。

「草くえー」と言い放つ麒麟のような生物ととても丁寧でかつ素晴らしいとまりをみせる魅力的な言葉たちの組み合わせの破壊力はいつもペラペラと言葉を吐き出す奏さえも黙らせるものがあつた。

ミノリを猫可愛がりする奏はミノリの意外な残念さに心を痛めながらも、「いや、これはこれでアリだ…タブン」と自分を納得させつつかくミノリが作ってきたくれたんだと隣の〈海洋機構〉の店やへクレセントムーン〉の壁にチラシを貼ってきたのだった。

今そのチラシが貼られる場所は、街を遊んで回っている千葉とおやっさん、おばさん、ウィルの一行により広がっている。

「でも、流石にこれ以上広いのは持て余しちゃうんじゃ…」

「いや、来るんだよ幅を取る連中が。」

ほら、噂してたらやって来た」

作業を止めずに手を動かしながらドアの方に目をやる奏。

つられてミノリも視線をドアの方にやるとドアが開かれ入店を知らせる風鈴のすんだ音が店内に響く。

「よお、〈高笑い〉来てやったぞ」

その男の名前は〈黒剣〉のアイザック。

〈記録の地平線〉、〈三日月同盟〉と並ぶ〈円卓会議〉参加ギルド〈黒剣騎士団〉のギルドマスター。

アキバでも有数の戦闘系ギルドのギルマスらしくその立ち姿はそこにいるだけで空気が引き締まるようだった。真っ赤なツンツンとした髪に特徴的な鋭い突起が目立つ漆黒の鎧も相まりこわもての容姿に拍車をかけている。

アイザックは堂々とした様子で店内に入ろうとしたところで、
ガンっ！

鎧の鋭い突起がドアの縁へとぶつかり入店を拒否された。

ダメだ。今笑ったら確実に殺される。
みんなの心の声が重なった。

アイザックは表情を変えることなく寧ろさつきより怖さが心なしかましたような顔で体を横にして無事入店した。

そこに奏はいつの間にも手元の仕事を済ませたのか立ち上がりアイザックに近づいていくと、

「お客様、ドアへの直接攻撃はおやめください」

「ぶつころすぞ teme e！」

「ブフウっ！」

奏とアイザックのやり取りに我慢の限界に達した客のカップルの男の方が吹き出してしまった。

アイザックは男の方をギリギリと一瞥するだけして奏へと向きなおる。小物の態度にいちいち腹をたてて絡んでいては大手のギルドマスターとしてやっていけないのだ。

「おい、へ高笑い俺の装備に加護付与をさせてやる。素材アイテムは持ち込みだ。感謝しろよ」

「してください。お願いします、だろ。開放ドア激突よろ痛い痛い痛い！めり込むっ！指が眉間にめり込むっ！レザリックさん助けてっ！」

うざい話ではあるがそれなりの奴相手には舐められないようきちんと対応する必要があるが

「ふう、死ぬかと思った」

宙吊りにされるような形で片手でアイアンクローを決められていた奏は後ろに控えていたレザリックの援護もありなんとか開放されて加護付与の準備へと店の奥へと引っ込んでいった。

アイザックとレザリックはエルノに待合室へと案内されアイザックはソファアーへどかりと座り込みレザリックは反対側へと座った。ミノリは来客用のお茶を魔法瓶から湯呑みへと注いで待合室へと運んだ。エルノとアイザックからも面識があったらしくなにかを喋っていたがミノリが来ると接客をしなければと戻っていった。

ミノリがアイザック、レザリックへとお茶とお菓子を差し出して、
とアイザックがジロリとミノリのことを見て一声かけてきた。

「お前腹黒んところのメンバーだよな。〈三日月〉と腹黒のギルドは仲
が良いみてーだけど、大変だな。あんな奴の手伝いなんてさせられ
て」

「こら、アイザック君失礼じゃないですか。すみませんね。アイザッ
ク君は言葉をオブラートに包むことが極端に出来なくて」

「いえ、そんなことないです。奏さんは私の師匠ですから」

アイザックの悪く言えば威圧感のあるよく言えば男らしいぎつく
ばらんな口調にニツコリと向日葵のような笑顔で対応するミノリ。

レザリックは堂々とした立ち振舞いに感心し、アイザックは「あの
ヤローのムカつかねー方の笑顔に似てるな」と心の中で呟いた。やは
り師弟関係なにかと似ていくこともあるのだろう。シロエのギルド
のメンバーということもあってとんでもない曲者になったりしない
かと未恐ろしく感じるアイザックだった。

店の奥の方からリッガンの「ふおおー！」という興奮したような声
が聞こえてきたのもうすぐ奏の仕事も終わるだろうとミノリは辺
りを付ける。

「もうすぐ終わると思いますからもう少しだけ待っていてください。
合図が聞こえてきましたから」

「……今のおっさんの声がか？」

「はいー」

またまた向日葵のような笑顔で対応するミノリ

(もう結構アイツに毒されちまってるな……)

「ああ、そのなんだ、色々大変かも知れないけどなんとか頑張れよ。
なんか面倒なことになったらウチに來い。そこのやつがなんか力に
なってくれるだろうからよ」

「私に丸投げですか」

「？ありがとうございます」

アイザックの心配が伝わっているのかいないのか首をコテンと軽

く傾けつつもお礼を言うミノリ。

そんなやり取りをしていると大きな漆黒の剣を片手で肩に担いだ奏が待合室へと入ってきた。加護付与が終わったばかりなのもあつてか気だるげに目を半眼にして首をコキコキと鳴らしている。

「ほれアイザック。完璧に要望どうりに仕上げてやったぞ。気に入らなかつたりしたら一ヶ月後に持つて来い。一回だけならやり直してやる」

「いや、十分だ。…ん。おいなんか柄のところの変わってんじゃねか？」

「サービスだ。へ朱雀血濡れの包帯へ自動回復効果が付くようになってる。いらぬなら返せ。もつたないから」

アイザックの二つ名の由来となった由縁へソード・オブ・ペインブラック苦鳴を紡ぐものへ。

加護付与により心なしかその刀身の艶が増したように感じるそれには柄の部分に深紅の帯が巻かれていた。

〈陰陽師〉の中でも高レベルの召喚獣へ南皇 朱雀へより採集できる血涙を霊験あらかたな包帯に染み込ませて作った制作級のオリジナル品ゲーム時代になかったアイテム

「なんだ気味わりいな。お前がただでこんなもん寄越すなんて」

「ミノリの味方になってくれた礼だ。ついでに弟の方の味方にもなつてやつてくれると助かる」

近々、アキバの街を離れてミナミへと姉を探しに出ようと考えている奏は自分がいない間のフォローをできる存在が嬉しかった。色んなところへ根回しは既に始めてはいたがへ黒剣騎士団へレベルとなるとかなり嬉しい。

自分とはともかくあちらインテイクスの方は力を持っている。ヘタをしたらアキバのみんなにも危害が加わるかもしれない。憎たらしい限りではあるがインテイクスは奏より賢く聡明だ。万が一にもそんなことはないとと思うが、奏とインテイクスの関係はそれを疑わざる負えないほどに最悪に危険に苦々しく汚物のように終わっている。

「…貰つといてやる。レザリック帰るぞ」

奏の一瞬だけ見せた覚悟の顔を見逃さなかつたアイザックはその

鋭い眼光で奏を一瞥するとすつと立ち上がりレザリックへ帰る意思表示を示した。

そのときだった。

甲高い女性の悲鳴が店の入口の方から聞こえてきた。こういったとつきの事態にこの世界にきて奇襲やなにやらで慣れてしまっていた、奏、アイザック、レザリックら高レベル組はすぐさまドアを押し開きカウンターを踏み越えて店の外へと飛び出した。後を追うようにミノリも三人の後ろを駆けてくる。

店を出たすぐそこには一人の男が何か白い固形物を身体中にまわりつけながら倒れふしておりその傍らには女性が座り込んで必死に男性を揺さぶっている。

彼らはアイザックが入店した時に店内にいたカップルのようだった

「カズくん！カズくん！しっかりして！」

「おいどうした！」

「店を出たらいきなりカズくんはこの白いケーキがをにぶつけられて」

「は？ケーキ？」

「おい、奏どうしたのかね？いきなり店から飛び出したりして」

遅ばせながら奏たちがいきなり飛び出して行ったのを見て店からエルノが出てきた。

奏はそれを見やるとカズくんに着用していたケーキ？をひとかけらとると

「エルノ、形は崩れてしまってるけどケーキだ。貴族のお前の意見を聞きたい」

「おいおい、いきなりなんなんだ。いくら私でもそこまで妖しいものは口にする気には…」

「ミノリ、あーんをして差し上げてやってくれ」

「えっあ、はい」

「是非いただこう」

この男奏のそっくりさんと言われるだけあって大概な変態である。

「ふむ、じつとりとざらざらとした舌触りにネバネバとした食感、歯に挟まる意味不明な物体とケーキとは思えないほどの辛さと苦味のコントラストがゴバっ!!」

「バターと倒れるエルノ。その目は奏の方へと向けこう語りかけてきた。ハメヤがったな、と」

「うん、食レポ乙。ミノリこのバカに〈大祓えの祝詞〉かけてやって」
「どうやらこのケーキ?が原因でよさそうだな」

「そのようですねバステの嵐ですよ。そのうえダメージが入らないものが何個も重複してるあたりかなり悪質なものです」

アイザックとレザリックは淡々と状況分析を行っていた。

これはこの世界にきて特殊な状況に慣れてしまっているからであって決して奏のこういった行動を見慣れているからではない。

「おら、カズくんもどってこい。かわいい彼女が心配してるぞ」

奏はカズくんの方にも自ら〈大祓えの祝詞〉をかけてやりいくつにも重複するバッドステータスを取り除いてやっていた。

せつかくの祭りで彼女とのデートだったというのに大手の強面の大男には睨まれるは突然劇薬入のケーキを顔面に叩きつけられてぶっ倒れるは不運な男であるカズくん。

「全く、どこのどいつだ。こんなくだらねえことしやがったのは」

そこに突如として野太い男の声が響いてきた。

「どこのどいつと聞かれたら」

「答えてやるのが世のなさ…」

「犯人はお前らだったか三バカ」

「人様の口上を途中で邪魔するなんてお前なんてやつだ!」

「お前それでも日本人か!」

「とういか誰が三バカだ!… てあれ?お前は、いや、あなた様は…」

「よう、久しぶりだな。三バカ」

三バカと呼ばれた三人組は戦々恐々とした顔で後ずさりした。

この〈暗殺者〉、〈武闘家〉、〈守護戦士〉の三人はかつて〈大災害〉直後に奏と千葉が出会った〈D・D・D〉の脱走兵である。

〈D・D・D〉の厳しい訓練に音を上げアサクサの街へと逃げ出し

てきたこの三人はばへ冒険者への立場を利用して大知人の子供相手に恐喝まがいのことをし、その場に駆けつけた奏と千菜にも脱走兵の分際でへD・D・Dへの名の威を借りて脅して見せた。

それだけでは飽き足らず千菜に手を出そうなどという発言をしてしまったために奏をブチギレさせ危うくへ冒険者への初ノ等身大へ暗黒物質へとなりかけた三人組である。

「わざわざ名乗り出てくるなんて感心じゃねーか、言っとくけど逃げ切れると思うなよ。」

ここにはへ黒剣騎士団への筋肉ダルマのボスがいる。もし逃げれば街中の筋肉ダルマに追い掛け回され拳銃の果てには三佐さん及びリーゼちゃんの交代制十二時間耐久お説教コースプラススクラステイ同行訓練コースが待ち構えている。

地獄しか待ち構えてねえぞ」

「投降すれば助かるでしょうか?」

賢明な判断だった。

恐る恐る奏に震えた声で三人を代表してへ武闘家への質問する。後門の地獄さて前門の地獄はいかほどか。

「命だけは助けてやるよ。もちろん徹底的にOSIOKIはするけどな」

身の毛もよだち血の気も引くような爽やかな笑顔でただそう答えるだけの奏。

人の心情を魂魄から察することができる彼にとって人の嫌がることをさせれば天下一品なのだ。それに加えて元から結構な性格が悪い。優しいのは身内だけだ。

「R-18だからミノリさんは私とあちらに行っておきましょう」

そんなレザリックの無情な一言が三バカの耳にはかろうじて届いたときのその顔はハイライトが目から消えまるでレイドランクのボスへ単身で挑まざる負えなくなったような顔だった。

「いいいいややあああああ」

その日アキバの街では聞くことの珍しい悲鳴が三つもこだましたとか、そしてサディステイックな高笑いも負けず響いた。

い。結局、ミノリの思惑は儂く失敗に終わってしまったのかもしれない。

第三十三話　ワレワレハ　リアジユウヲ　ユルサナ
イへ中編

「つまり、今アキバ中にカップルに対して嫉妬狂ったお前らみたいなのが〈大規模戦闘〉単位の組織で動いている、と」
「はい。そうです。私はちり紙になりたいです」

三バカへの一通りの調教を終えた奏は店のカウンターに胡座をかいて座り正座をして奏を見上げる三馬鹿に対して事情聴取を行っている最中だった。

ちなみに三バカにやられたカズくんは無事に蘇生され彼女と一緒に人の波が絶えず蠢く街の中へと繰り出していった。カズくんにはこれ以上の災難が降りかからないように奏から心ばかりの〈快癒の祈祷〉と幸運上昇の効果がついた鈴がお詫びに贈られた。

話は戻り三バカから得られた情報はなかなかエキサイティングな内容だった。内容はいたってシンプル。祭りで大量発生するカップル軍団に男のあるべき姿を思い出させるため、もとい私刑を執行するために大知人も〈冒険者〉も手を取り合い全力でリア充を特製〈ポイズンクッキング〉あの川の先には死んだじいちゃんが！で祭りの間だけでも血祭りにあげて行動不能にし彼女と微妙な雰囲気にして別れさせよう大作戦。らしい。

「なんというか、まあ……」

回りくどくて遠回りしすぎてる辺りがお前らのモテない感じを表してるな」

良心を全然捨てきれてねえじゃん、呆れたようにため息をつく奏

「理由のくだらなさは置いておいて、実際問題ことの解決は少しめんどくさそうですね」

レザリックが眉間のシワを親指と人差し指で揉みながら感想を漏らす。

「あん？」

んなもんこいつらから親玉の居場所聞き出して締め上げれば一発だろ」

「そうもいかねえんだよアイザックくん」

「そうなんですよアイザックくん」

「くんづけやめろ！今度はヘソード・オブ・ペインブラックへ食らわすぞコラー！」

奏とレザリックは二人してアイザックの顔を見ることなくナチュラルにアイザックくん呼びをする。アイザックもそれに反応して怒鳴り返すが二人共ニヨニヨとしてどこ吹く風といった感じだ。

「さて、ミノリ問題です。なんでアイザックの言ったやり方じゃダメなんでしようか？」

カラン、と高下駄を鳴らしてカウンターから飛び降りて立ち上がった奏はくるりと回ってソファアに座ってこと行く末を見守っていたミノリにたいして話題を振る。ミノリはいきなり話題を振られたことに少し驚きつつも少し考える素振りを見せた後に、

「・・・今回の祭りのために集まった寄せ集めのチームじゃ、いきなりトップを抑えると指揮系統が混乱して制御が効かなくなるから、でしようか」

「いや、ちげえな。それだけだったら俺たちのことを隠させたらうえて指示を飛ばさせればいい」

ミノリの答えにアイザックが否定の言葉を入れる。

脳筋ギルドなどと言われてはいてもサーバートップクラスのレイドギルドのギルマスであるアイザック。ただの戦闘バカなわけがない。とびつきり腕が立つ連中が集まった程度で攻略できるほどハイエンドの〈大規模戦闘〉は甘くはない。

奏もアイザックの言葉に頷き答えを話し出す。

「アイザックの言う通りだな。間違えちゃいけないけど正解じゃない。問題はこのレイドチームが大知人混合型の特殊構成になってることにある」

「そうか、念話ですね」

「正解。付け加えるとすれば大知人には俺たちからの直接制裁が加えるにくいこともあるけどな」

大地人には〈冒険者〉が当たり前に持ち合わせている特殊は魔法や技能がない。念話しかり復活機能しかり、言語翻訳機能しかり、〈冒険者〉にとつては当たり前のゲームとしてのサービスも大地人からしてみればそれは神から授かった偉大なる加護や恩恵であるのだ。

つい先日大地人から〈冒険者〉へと成ったルンデルハウスもその技能や恩恵にたいして驚愕の声を上げていた。〈冒険者〉にはここまで神からの恩恵が与えられていたのか。なんとも僕にはまだ分不相応な気がしてならない、と。

そして大地人に対しては〈冒険者〉の自治組織〈円卓会議〉の影響力は〈冒険者〉に比べて小さい。〈冒険者〉であればギルド会館の使用を禁止することができる。しかし大地人にたいしては直接的な制裁の手段がない。注意勧告や嚴重注意はできても罰を与えることができないのだ。大地人には大地人の社会が、〈冒険者〉には〈冒険者〉の社会が形成されている。

お互いに隣人として協力はし合っているが罰を与えることができないほどに深い干渉をすることはできないのだ。お互いに影響を与えることはできても干渉をすることはできない、そういうった関係だ。

「まだ、エルノは目を覚まさないか？」

「はい、まだ真っ青な顔をして隣の部屋で寝込んでいます」

だからこそ、大地人側の権力者、貴族であるエルノの力が有効に作用するのだが・・・、思わぬ伏兵によりエルノは行動不能状態に陥っていた。

〈冒険者〉であるカズくん比べて大地人のエルノはレベルや耐性が圧倒的に低い。その分回復に時間がかかるのだった。

「誰かさんが、余計なことしなけりやすぐにでも行動にうつせたんだがな〜」

「そういえばミノリは確か午後から予定があつたんだよな」

「・・・はい。ちよつとケーキバイキングに」

「ミノリ、やめてくれ！そんな優しそうに笑いながら俺を見るのは！恥ずかしくなってきた。」

最近目まぐるしい速度での成長を奏に感じさせるミノリはついに大人ぶっている奏に精神的恥ずかしめを与えられるほどに気を回せるようになってきていた。

その慈愛に満ちた眼差しはいつぞやに直継と話していた奏の大人ぶっている化けの皮を見事に引っぺがすことに成功していた。

「とりあえずアイザックとレザリックさんはクラスティの野郎に話を通して街の警備にあたってもらっていいですかね。」

俺は三佐さんに三バカを引き渡してきます。

リィガンさんはここに残ってお留守番でウチの妹を手伝いにこさ

せるんでアイテムの売買だけお願いします。加護付与希望のお客様には整理券を配って明日また出直していただくようにしてください。整理券がなにかについてはうちの妹に話せば作ってくれるはずなんです。そんなキラキラした目で俺を見ないでください。あとエルノが起きたら連絡ください」

「あの、私は何をしたらいいですか？」

ミノリがしずしずと手を上げて奏に自分の役割を尋ねる。すると奏はニンマリと笑って、

「ミノリンのお仕事はなし！めんどくさいことはお兄さんたちに任せて祭りを楽しんできな。せつかくの（シロエとの）ケーキバイキング（デート） だろ」

ミノリが自分やシロエの悪評を改善しようと色々と気を回していたことに奏は気づいていた。ミノリの気遣いは心から嬉しい。でも、奏の噂はまさに身から出た錆でしかなく、シロエの噂もシロエ本人がわざと狙って流したままにしていると奏は知っている。

そんな大人の都合にまだ中学生のミノリにまで気を揉ませてしまっていたことが奏は恥ずかしかった。

だから、せめても年相応に楽しいことを満喫させてあげたいと思うのだ。面倒事や挫折することはくるべき時がきたら必ず来る。成長だって気づいたら勝手にしていることなんてざらだ。

でも楽しいことは自分から望まないと出会うことはできない。だから、不甲斐ない先生たちの勝手な都合のせいでミノリがその機会を失うなんて申し訳がたなすぎる。

「え、でも・・・こんな事態ですし」

「いいのいいの。じゃ、俺はさくつとコイツラを引き渡してくるよ」

しづるミノリの背中をグイグイと押しながら店の扉を押し開けて

店をミノリと一緒に出た奏はしゅばつと手を挙げ、いつぞやのプラカードを首から下げた三バカを引きずって高山女史の待つ〈D. D. D〉の駐屯所へと出向くのだった。

「どうも、この度はご迷惑をおかけしました」

「いえいえ、たいした手間じゃないですし。」

でも、少しお願いを聞いてもらってもいいですか？」

「お願いですか？今すぐとなると私に聞けるものであれば、あまり大きなことであれば〈ご主人〉に確認を取らねばなりません」

「ああ、そんな大事じゃないです。出来ればいいんですけどどこいつらの罰、なくすのは無理にしても軽くしてやってくれませんかね」

「なぜですか？この三人は奏さんの店のお客様に襲いかかったという話ですが、それに彼らは二回目です。子供ではないのですから、重い罰が与えられてしかるべきかと。甘やかせばつけあがりますよ」

「こいつらと逃げずに出頭すれば俺のお仕置きで済ますと約束しました。約束はやっぱり守らないと。罰の代わりといったらなんですか、今日と明日俺の店の手伝いをタダですることでしょうか」

「奏さんがそれで構わないのであればこちらとしては構いませんが・・・」

「奏さん!!いえアニキと呼ばせてください!」

「うるせえ、バカども。サボったりしたら問答無用で千葉に〈暗黒物質〉にかえさせるからな」

「一生ついていきます!」

縛られていた縄を解かれた^モ武闘家^クが両手を大きく挙げて全身で喜びをアピールしながら奏に感謝の意を伝え、^{ガー}守護戦士^{ディ}と^ア暗殺者^{シン}と一緒に手をつなぎくるくると小躍りしている。その様子を見ながら奏は、まったく調子のいいやつらだと独白する。

「意外ですね」

「ん？」

「奏さんが彼らの擁護をしたことです。あなたは身内以外には冷血漢でしょう」

「ハハッ・・・ひどい言われようだな。否定はしませんけど」

「情でも湧きましたか」

「ええ、あいつらの雰囲気は俺の好きな小悪党三人組に似てまして」

「なるほど、ほんの少しだけわかる気がしますね」

現役の保育士というまさに戦場よりも戦場している場所で無尽蔵のスタミナを持つ戦士たちと日々を過ごし続ける高山女史はそこらの知識にも詳しくかった。戦場ではどんな知識でも役にたち、また戦士たちからも毎日刺激的な色々なものを与えられる。彼女が^へD・D・D^とというアキバきつての大規模ギルドで鬼畜メガネの右腕としてやっていけるだけの能力もここに起因している。傍若無人で自由奔放な彼らを相手にするのに比べれば話を聞いてあげてご褒美をあげさえすればなんでも言う通りに動くメンバーたちのフォローなんて簡単なものなのだ。

「よし、お前ら。さっさと店に行って手伝いしてこい。このボンクラ。真面目に働きゃ飯くらいはおごってやる」

「いえっさー！ボス」

「便利な手下が手に入りましたね」

「計画通り」

小躍りしていた三バカを急かして店に向かわせる奏。それに敬礼

してから真っ直ぐに駆けていく三バカたち。ものの数分で便利な手下の出来上がりである。

高山女史もメンバーが半奴隷化されているのにも苦言を呈することもなく、それどころか心なしに面白そうにうつつすらと笑みを浮かべて見守っていた。

「さて、俺も少し動き出しますかね」

奏はこめかみに手を当ててどこか遠くへと視線を飛ばす。それは念話特有の動作で念話の相手はメニュー画面を開かずとも念話を繋げることができるほどに熟練し念話しなれた相手ということ。

「なにか手を考えていらっしやるのですか」

「いえ、手ってほどじゃないですけど、もうすこし情報が集めるのと、弟子の楽しみを潰させないための手打ちをしとこうかと思って」

念話のコール音を聞きながら高山女史の質問に答える。

「カップルのイチヤつきに群がってくるのなら、偽装カップルでだましようちしてしまおうかと、知り合いに甘いもの好きで演技の上手いやつがいるんでそいつ頼もうかと」

「甘いもの・・・デート場所にどこかそういったところにもいくつもりで?」

「俺の弟子の子が行くのがへダンステリアっていうギルドのケーキ屋さんらしくてなんでもケーキバイキングで男女ペアならケーキ8つ食べれば代金無料らしいんで、昼飯もまだだったし昼飯ついでにそこから一帯のやつら邪魔できないように一網打尽にして一石三鳥かなと思うんですよ」

「ケーキ・・・8つ・・・タダ・・・」

奏での話を聞き高山女史がブツブツとなにかを言い始めたところで奏の念話が念話相手と繋がった。奏はそこで高山女史との会話を打ち切り念話相手との会話に意識を移す。

「ん、もしもし。ああお前に仕事の依頼があるんだ。いやいや、ケーキを食べるだけの簡単なお仕事ですよ」

奏は念話相手の会話が終了し交渉がすんだところで念話を切り高山女史へと向き直る。それじゃあ自分は行きますね、と声をかけようとしたところで、

「奏さん、私とデートをしましょう」

いつもの仏頂面の鉄面皮で声のトーンも変えることなく目をキラキラと子供のように輝かせてそう言う高山女史のお願いを奏は断ることはできなかつた。少しばかり他人には見えないものが見える彼の目にはうきうきと元気に跳ね回る魂魄が見えていたりしたのかもしれないと思うと彼が断ることは絶対にできなかつたと誰にでも納得できることだろう。

「で、こーういうことになったというわけか、ば奏」

目の前に広がるのは綺麗な円形のホールケーキ

まん丸とした満月のようなこれを切り分けて八等分にでもすれば見覚えのある三角形になってくれるのだろうか、そのホールケーキが奏たちの目の前には合計12個

もちろんそんな大きなホールケーキがカフェの小綺麗なテーブルに全て乗り切るわけもなく場所をとってしまうのだろうかにご丁寧に二段型のワゴンがテーブルサイドに鎮座している。

「いや、なぜこうなった・・・」

奏の記憶では一応全てうまくいっていたはずだった。依頼をしたクインと合流し高山女史が同伴している事情を話して一応デートの体をとっているにも関わらず他の女性と一緒にきて済まなかったと依頼する側の態度ではなかったと非礼を詫びた。仕事というスタンスに一家言持ち合わせているクインからしてみれば不誠実極まりないことだと叱責を受ける覚悟をしていた奏だったが、

「でっデートなんてしたことなかったから逆に助かった!」

と情けない言葉を聞いてその気も萎えてしまった。

そんな気持ちを残しながらもへだんステリアへと向かいギルマスの加奈子女史に事情を話して協力を頼み、ルールはそのままで三人分の12個を食べきれなければ代金は払うという条件で了承してもらった。

そこまではうまくいっていたはずだったのだ。奏としては、結果がこれである。

目の前に広がるホールケーキの圧倒的物量である。これでは嫉妬に狂った狂戦士たちをおびき出すどころの話ではなくなってしまふ。昼ご飯どころか三日はなにも食べなくても過ごせそうなボリュームが目の前には広がっているのだから。

「お二人とも食べないのですか?とても美味しいですよ」

奏の左横に席を陣取っている高山女史が右手に持ったフォークでケーキをつつきながら青い顔をして片手に手付かずのフォークを持って余す奏とクインに小首を傾げて尋ねる。

高山女史、そういう問題ではないのだ。それ以前の問題なのだ。クインの顔にはそうありありと書かれていたがそれを口にする気力も今の彼女にはない。

「カップルの演技をするのならもうすこし楽しそうにしていた方がいい

いと思いますが・・・なんなら話題を提供しましょうか、ミロードが一ヶ月毎日欠かさずに水を上げていた花が造花だったと気づいたときの話とか」

「その話はすつげえ聞きたいけど三佐さん！そういう問題じゃないんだなあ！目の前のこの惨状をどうにかしないといけなんだなあ！俺たち！」

「大丈夫ですよ、お二人とも。ケーキならこれくらい余裕で完食可能です」

「クインこの方は女神だ。俺たちの目の前には女神がいらしゃる」

「助かった・・・奏これからは三佐教に入門して毎日ケーキをお供えしよう」

だきつと抱きしめ合って救われたことに感謝する奏とクイン

そしてそれを見据える無数の黒い影

『隊長、アイツ、殺りましょう』

握り壊さんばかりにギリギリと握り締めた双眼鏡を片手に血走った目をレンズに押し付け続ける男へ念話で憎しみしか込められていない仲間の声が伝えられる。今回の作戦のために繋げたレイド専用のパーティチャットで〈冒険者〉の仲間たちからの声を男は全て聞くことができる。男は彼らのい気持ちは痛いほどにわかる。だからこそ、

「ダメだ。まだ待て」

『しかし！』

彼女いない歴〃年齢であり仕事に没頭するが故に既に三十の年をゆうに超え四十の大台を全力で天元突破した彼は魔法使いを超えて

賢者への道を極めていた。賢者は魔法を全て極め全知へとなる。だからこそ彼は知っている。感情に身を任せてはいけなさと、変態は紳士でなければならぬと。

「かたぎの方に迷惑をかけてはいけない。我々が殺るのは神の教えを忘れた愚かな男だけだ。気持ちは理解できる。だがここは抑えるんだ」

全知なる賢者は知っている。

がつつく男は嫌われる、と

童貞はがつつきすぎるから嫌われる。紳士であれ、誰よりも

変態紳士こそが取り残された自分たちが救われる残された道だということを

『隊長おお!!アイツ!!二人からにじり寄られてあーんをされています!!!しかも黒髪パツツンの美少女は赤面涙目、クールビューティーの無表情のお姉さんも心なしか顔が赤い気がしなくもないですっつ!!!』

「この場にいる部隊計24名全員に告げる!へ異端者尋問委員会へギルドマスターD.T.Sの名のもとに命ずる!

彼奴を殺せえ!特製へポイズンクッキング あの川の先には死んだじいちゃんが!をを使う程度ではたりいん!彼奴には地獄の業火すらも生ぬるいと思えるほどの痛みと苦しみを与えて回復させてもう一度同じ苦しみを与えてから殺してやれええええ!!!」

『隊長!全員がそのつもりです!衛兵のことなど忘れて皆が武器を抜いています!一部は自我を失い狂戦士化しています...』

ヒヤッハー!コロシチャウヨヨコロシチャウヨヨウ
ヒョオオオオ!!』

念話をしていた男からも正気が失われた。

賢者D.T.Sもじつとはしていられない。

獅子はウサギを狩るのにも全力を尽くす。例え相手が一人であったとしても全力で殺したい。

その気持ちで賢者DTSの心中はいつぱいだった。それが、賢者の名を持つ彼の冷静さを欠いた。

「やあ、いらっしやい。待っていたよ」

ニヤリと嫌らしく憎々しいほどに凄惨な笑みを襲いかかった彼らは向けられた。

狂戦士の何人かがエンチャンターの魔法アストラルバインドやブレインバイスにより膝をつかされ拘束されている。件の青年の両隣には先ほども顔を真っ赤にしていた美少女とクールビューティな女性がそれぞれ武器を構えている。そしてその周りには重厚な鎧を着た騎士や筋骨隆々な美しい肉体を晒す拳士が構えていた。

その瞬間、賢者は気づいた。我々は嵌められた、としかし彼も伊達や酔狂で賢者になったわけではない。すぐさま思考を切り替え今直面している疑問を自分たちを嵌めたと主犯格と思われる目の前の青年へと問いかける。

「どうして武器を抜き戦闘をしているのに衛兵が来ないのでですか？」

「へえ、話のわかりそうな頭の回るやつもいるんだな。簡単だぜ？ここは屋外だけどダンステリアが所有しているゾーンだからってだけだ」

「戦闘行為可能区域ですか」

「事情を話してそうしてもらったよ。」

「どうかな、アンタリーダー格だろ？全員投降させる気はない？」

「笑止。この人数差を覆せるとお思いか？確かに嵌められたことには驚いた。だが見込みが甘かったなこちらの数は24名、そちら君たち三人を合わせてもせいぜい12名そこそこだろう。倍の人数差だ」

「・・・俺もさあへ大災害」からいろいろあってもつと力がなくちゃいけないと思うようになったんだよ」

青年は突然脈絡もなく身の上話を語りだす。賢者はそれになにかの時間稼ぎかと考えて長杖を抜き臨戦態勢に入りへ妖術師ソールサラーの高火力魔法《オーブ・オブ・ラーヴァ》を先手必勝とばかりに解き放つ。深紅と黄金の混ざり合った光を放つ溶岩の砲弾は青年に見間違うことなく着弾する。

しかし、着弾の光から開放された賢者が見たのは無傷で立つ青年の姿。青年は賢者の攻撃をまるでなかったかのように言葉を続ける。

「だから、俺のへ過保護オーバーバックアップな加護領域の有効人数を12《：》人《：》まで増やしてみた。

レベルも中途半端な倍の人数程度じゃ潰せやしねーよ」

「お前もしかしてへ高笑い」か?」

「嬉しいね、久しぶりに俺のことを詳しく知ってるやつに会えたよ」

「やはりそうか、だが引くわけにはいかん。私にも率いる部下たちがいる。

だが、それ以上に不思議でしようがない。お前のへ茶会の終期の話を聞く限りはこち憎むら側側よりの人間のはずだ」

「ああ、やっぱちげーわ。お前俺のことをちゃんと知らないやつだ」

突然として青年の目は心底底冷えするそれへと変わった。その目に込められているとてつもない怒気。この世界に来て一度だけ見たことあるへD・D・Dのギルマスカラスティが戦闘中にみせる人を視線で殺せる人間の目だ。

「かかってこい痴軍のリーダー、お前のその愉快にねじ曲がった認識、

俺が愉快に快活に高らかに高笑ってやんよ」

賢者はその言葉に反応して射殺さんばかりの怒気を放つ青年へととっておきの魔法を放つ〈妖術師^{ソーサラー}〉のもつ電撃属性の広範囲攻撃魔法〈ライトニングネビュラ〉それを極限まで範囲を絞込み威力の追求だけを念頭にした賢者だけが放てる独自魔法〈インドラの矢〉その速度と火力は〈ライトニングネビュラ〉の約三倍。

「なぜだ。なぜお前が私たちの邪魔をするのだ。我らはただリア充を撲滅したいだけなのに」

紫の閃光が奏を貫こうと光の速度に迫らん勢いでけたたましい音をあげて肉薄する。

だが、それすらも〈高笑い〉の奏の前では先ほどの〈オーブ・オブ・ラーヴァ〉と同じように防がれた。否、賢者は気づいた。〈インドラの矢〉が奏に触れる直前になにかに阻まれたことを

そしてそれに気づいたときにはもう遅かった。賢者の目の前に奏が一瞬にして現れたからだ。

仄かに梅の香りが賢者の鼻をついた。

（っ 〈飛び梅の術〉か・・・）

「気づけよ。お前らのその思考そのものが迷惑でモテない原因なんだから」

「・・・もつともで」

そして奏にはそう告げられ切り捨てられた。そこから賢者の記憶はなくなっている。

そこからものの十数分後・・・

「む、奏ではないか。どうしてこのようなところにいるのだ？」

「やあアカツキちゃん、その格好すごく似合ってるね」

「むう、そんな真っ直ぐに褒めるな小恥かしい・・・」

「シロエに言われた方が嬉しいもんねー」

「な!?! そっそんなことなっないぞ」

口をパクパクさせて赤面探偵クインに負けないほどに耳まで真っ赤にして首をブンブン振るアカツキ。大方奏の言われるがままに想像してしまったのだろう。過剰に褒め倒すシロエとそれを聞く自分の姿を

「奏さん!?! なんでこんなところにいらっしやるんですか? まさかこちら辺にあの人たちの仲間が!?!」

「違う違う。捜査の前に飯を食いに来てただけだよ。後ろのこいつの依頼の報酬前払いも踏まえてね」

「久しぶりだな、双子ちゃんの姉の方、ミノリちゃんだったか。奏のセクハラに耐えられなくなったらいつでもウチに来るのだぞ? 被害者の会は全力で君の味方をするから」

「被害者の会なんてねーよ。この赤面探偵が」

クインの言葉に苦笑いして言葉を濁すミノリ。この被害者の会は本当は存在していることを知っているミノリは苦笑いかしようがないのだ。

「それならいいんですけど」

「よう、シロエ。お前デートなんだからもうすこしカツコつけろよ」

「年中カツコつけようとして大事なところで失敗する奏だけには言わ

れたくないかな」

「む……」

思い当たる節が忘れられいほどにある奏は黙らされてしまう。

「アカツキちゃんの和装はへ和服屋小町へ行っていうところのオーダーメイド品だ。綺麗な藤染めだからちゃんと褒めてあげろよ」

「それとミノリンがつけてる髪留めアレはミノリンが初めてクエストで手に入れた髪留めだ。これもちゃんと褒めてあげろ」

「……ありがとう奏」

「このケーキすごく美味しかったから期待してもいいと思うぜ」

「ああ、とても美味だった」

「本当ですか！楽しみですね！わくわくですね！」

「期待させられるな主君！」

「うん、そうだね」

「じゃ、お三方頑張れよ」

「？」

そういつて奏とクインは去っていった。奏がなぜ最後に頑張れなんてこんなお洒落なカフェを前にして言うのか疑問だった三人だったが、その意味をケーキが運ばれてきたと同時に知ることになる。

ちなみにシロエたちのくる少し前に山のように鎮座したケーキを一人で食し代金をタダにして満足気に帰っていった女性が店員の話によると一人いたそうだ。

第三十四話　ワレワレハ　リアジユウヲ　ユルサナ
イ〈後編〉

「やっぱり無茶があつたかな」

〈ダンステリア〉でシロエたちと別れた俺とクインの二人は人がどこも溢れる大通りを避けて裏道をスイスイと歩いて進んでいった。こういう抜け道には職業柄詳しいクインのおかげで楽なものだ。

あんまり人の多いところは人酔いしちゃうからね

「何がだ？」

「バックアップゾーン〈加護領域〉の有効人数がだよ。流石にありやダメだ。一人頭に対しての出力が低すぎる。あれなら、俺が刀を持つ意味がねえ。後方支援に徹した方が効率割増だ」

「だろうな。〈ダメージ遮断呪文〉の最適投射ミスって何人かもろに攻撃喰らってた人いたぞ。12人とか接近戦等しながら支援できる人数じゃないことくらい初心者でもわかるぞ。本職の方々を舐めすぎだ。ば奏」

「まったくもってその通りで」

「最近、少し紺を詰めすぎではないか？周りに気を使いすぎだし無鉄砲なことをしすぎだ。

もう少し前みたいに気を抜いても構わんと思うぞ？もしもの時は皆に相談して策を練ればいい。策を練るのは私やシロエ殿の専売特許なのだからな、お前ごときが奪っていいポジションではないわ。ば奏」

むう、こいつに心配されるとなんか悔しい

言われてみれば最近なんだかゴチャゴチャと考え過ぎてた気がする。シロエじゃないんだから考えすぎるのも考えものだな。頭悪いやつが考えすぎるとろくなこと思い付かないな

「ば奏は奏言うな。最近言わなくなったと思ったら思い出したかのよう

に言い出しやがって」
「最近のお前の行動は目に余るのだぞ。もう少し私たちをきちんと頼れ。モーシヨンをとるんじゃないやなくてどっしりと寄りかかれ。悲しくなるぞ」

「・・・お前はやっぱりいいやつだな」

クインの髪を腹いせもとい照れ隠しにわしやわしやとする

なんだこいつ嬉しいこと言いやがって照れるぞ

「やめろ！せつかく揃えた髪が崩れる！」

そういえばこいつ今日はいつもと髪型違う

いつもはまとめることはせずに下ろして後ろ髪も短いポニーテイルにして普段は隠れているうなじがバツチリと覗ける。匂いもほんのりとすみれの花の香りが鼻についた。普段はこんな香水なんてつけないで自然な甘い香りがするだけだから。新鮮な気分だ。

やっぱり仕事に対してのこいつの誠実さは尊敬できる。わざわざしなれない化粧やら香水までしてくるんだから、名探偵の鏡だな。名探偵なんて職業はないけど。

「そこのお兄さん、お姉さん。ちょっと道を尋ねたいんだけど教えてくれないかな？」

そんな声に釣られて後ろを振り向いた。

振り向いた瞬間にはもう既に目の前に真っ白なものが迫ってきていた。

それをなんなく躲して声の主でありこのまっしろな劇薬をぶつけ

てきた張本人の伸びきった腕を掴む。勢いをそのまま殺さないようにして力の向きに合わせて腕を引つ張り相手の足が俺の足に引っかかるような場所に添えておくとすんなりと足に引っかかって声の主は転んだ。もちろん掴んだ腕は離さずに背中の方に回して拘束する。このちよろい感じは大地人だな。

「ようお兄ちゃんいきなり襲いかかってくるなんて危ないじゃないの」

「くそ！なんでわかつたんだ！路地裏でイチヤつくカップルなんて格好の獲物だと思つたのに！」

「いやいや、貴様こんな路地裏で道を尋ねるバカがどこにいるというのだ。怪しさ抜群だろろうに」

クイン、カツコつけるのは構わない。

だけどせめて尻餅ついた体勢から立ち上がってからにしろカツコついてないから

「しまった！盲点だった！お前ら天才か！」

「いや、少し考えれば子供でも気づくことだ。お前ら馬鹿か」

揃いも揃ってなんでこうバカばかり揃ってんだよこの集団もうやんなって来た。クラステイ辺りに丸投げしようかな

「なんだとく！俺を甘く見ていたな〈冒険者〉の兄ちゃん、俺一人だけが兄ちゃんを狙ってたわけじゃねーんだ！

お前ら!!出てくるんだ！」

男の声が狭い路地裏に響く。反響する声が耳障りだ。

男の声に反応して出てくる影は一つもない。

「あれ？」

間の抜けた男の間抜けな声だけが路地裏を占拠する。それでも、出てこようとする影は一つたりともない。

「お前はやっぱりバカだよ。こんなところに来る男女なんてヤルことやろうなんて考えてる盛りのついてる連中か俺らみたいな例外だけだつて」

ズルズルと入り組んだ路地の道から大地人と思われる男たちが一人の〈冒険者〉に引きずられてくる。

「そんな！そこまで読んでいたのか！お前ら天才か！」

「お前のボブギヤラリーはもうすこし広くはならなかったのか・・・」

お前ら天才か！しか言えんのかお前は

あほか、ウイルでももう少し理知的に喋るぞ。お前らバカか

・・・やべえ、なんかうつつてきちやつたよ。早めにこいつから離れよ、バカがうつる。

「奏の兄貴、しかしこやつらの気持ちもわからんわけではないでゴザルよ」

「なんだゴザル、お前そっち側か、裏切りか」

「いやいや、拙者はクシヤの姉御と奏の兄貴には死んでも逆らわんと決めてるでゴザルよ。」

しかしこんな白昼堂々とあそこまでイチャイチャイチャイチャとされれば拙者ですらもムカつくでゴザルよ。しかもそれを素でやってるのでゴザろう？モテない男としてはあく割りきれない気持ちも理解できるでゴザろうよ」

「何言ってるんだ。俺とクインはそんなんじゃないやねえよ俺たちは——」

「普通だよ——つておい、クインちゃんと合わせろよ。もう俺とお前

の鉄板ネタみたいなものだろうか」

「やること・・・盛りをついた・・・イチャイチャ・・・あうあうあううう・・・きゅー」

あ、ダメだ。

無駄にたくましい想像力のせいで頭の中キャパオーバーして気絶しやがった。

顔がりんごみたいに真っ赤っかに染まって頭から湯気までのぼつてる。目がメダパニ状態だ。

「おい、ゴザリスト。どうすんだ大事な撒き餌が使い物にならなくなったじゃねえか」

「また意味不明な呼び方を・・・それに、半分は兄貴の責任でゴザルろうよ・・・」

ゴザルの半眼でシラケたような目で見つめられたことであることを思い出す。

クインが目を覚ますまでの時間つぶしにはちょうどいいだろう。クインの軽い体をおぶりながらゴザルに今日新しくできた下僕の話をする。

「てことで、お前の子分が三人増えたぞ。しかも三人とも一応へD・Dのメンバーだからお前の後輩にあたるやつらだ」

「ほう、それはなかなか嬉しい話を聞いたでゴザル。して、そ奴らは今どこに?」

「今は俺の店で千菜の監視の下で店の手伝いさせてるよ」

「それはそれは、そやつらしい思いをしてるでゴザルなく。正直言つてせつしやの方が貧乏くじでゴザルよ」

「あん?なんで店の雑用がいい思いなんだよ。まだこいつらみたいなバカを相手にしている方が愉快で楽だろ」

「兄ちゃんそう褒めるなよ照れるじゃねえか／／」

褒めてねえよ

けどもう俺はこいつとは話さないんだと決めてるんだ。

でもやっぱリムカつくから無言で蹴っところ。相手したら喜びそうだけど

「千葉の姉御はアレでゴザろう。姫モードと普段の優しいときとのギャップが激しいでゴザろう。それがものすごくクセになるでゴザルよ」

「おい待てゴザル。お前そんな理由で俺に付き合ってるんだったら今すぐ腹切れ」

「いやいや、そんなことで従ってるのではないでゴザルよ。行ったでゴザろう。拙者はクシヤの姉御と奏の兄貴には逆らわんと決めてるでゴザル、けれど千葉の姉御には従いたいと思わされるのでゴザルよ」

コイツ、ダメだ、早くなんとかしないと

千葉に骨抜きにされてやがる

なんでデカイ顔を赤らめた俺より確実に年上のやつから実の妹に対する惚れ話を聞かされなくちやいけないんだ。

路地裏をムサイ男と連れ歩きやっとな狭い道を抜けたところでウブな眠り姫様が目を覚ました。

「うにゃ・・・ひゃー！」

「ん、起きたか。」

よしクイン落ち着け。恥ずかしいのはわかる。だからその手に持った銃をしまえ。大きく深呼吸するんだ。さすがにそれを俺にぶちかましたら衛兵が来る」

「すーはー、すーはー、うむ、落ち着いた。だから早く私をおろせ」

このタイミングで、

「顔がまだ真っ赤に染まってるぞ赤面探偵」

なんてちやちやをいれるほど俺もバカじゃない。

だってまだ銃をしまつてないんだもの。いくら^{エンチャウンター}へ付与術師の火力が蛍火レベルでも痛いものは痛いんだ。

背中に背負った暖かくて柔らかな軽いものを膝を折って下ろしてやる。

「では、そろそろ元凶を叩きに行こうか」

「はっ。」

「エルノを拾ってさっさと今回の事件を終わらせるぞ。もうそろそろこうやって戯れているのも飽きてきた」

「ちよちよつと待つでゴザルよ!? クイン殿元凶の居場所がわかつてるでゴザルか?」

「ん? そうだが?」

いやいや、いくらなんでもそれはねえだろ。

捕まえた奴らは一人たりとも口を割らなかつたんだぞ?

妙なところで団結力のある奴らだったし主要そうな奴は断固として口を割らなかつた。

末端の奴らは主要メンバーからそれぞれ指示を受けていただけだし、最後に集まったのもまるで全員が入ることを最優先に考えた街の外にある廃墟だったらしいじゃねえか。

「なんだお前たち気づいてなかつたのか?」

「残念ながらお前みたいにお利口さんな頭は持つてないんでな」

「そうかそうか、私はお利口さんだからな。今回の事件も私のお陰で無事解決だ」

俺たちがわかっていないことがわかった途端に上機嫌になるクイン。皮膚が通じねえぞこいつ

ハズレろ! 推理ハズレて恥ずかしくなれ!

「では、行こうか。解決編だ」

そういつてクインは自信満々に、かつこよさげにかわいらしく真っ赤なスプリングコートを翻してそう言った。

そのニヒルな笑顔はいつ見ても俺が知っている誰よりも自信に満ち溢れている



「本当に合ってやがった・・・」

「だろ？私の言った通りだったろ？褒めていいんだぞ？」

「マジクインサンカッター、ホレチャイソウダー」

「さすがの私でもそれに照れることは出来そうになさそうだ」

こんなのにまで照れられてたら俺がお前をへロデ研に連れてくわ治験だろうがなんだろうがどんなてを使つてもまともなやつに生まれ変わるようにしてやるよ

「しかし何だったんだだろうなアイツは・・・欲望の典災 シセラ」
「だったか？なんかアイツの魂魄は歪んでて気持ち悪かった・・・」

「へノウアスフィアの開墾」での新モンスターと見るのが無難だが、どうにも話が通じない印象が強すぎてなあ。機械的なゲームの頃のモンスターを相手にしてるようだった」

それでは全てが片付いたところで解決編に入らせてもらおう

クインの推理はここでは細かいところは端折らせてもらおうが一応彼女の名誉のために大本だけは語らせてもらおう。・・・本当のところは俺もゴザルもクインがそこに至るまでの思考とかヒントとかをクインと同じレベルで理解できていないために全てを完璧に説明できないせいなのだけれどそれでよければ聞いてもらいたい。今回の

功労者は紛れもなくクインなのだから。

まず、今回の本丸、今現在進行形で俺たちが立っているのはアキバの街を出て北に進んで徒歩で十分とわからない神代の頃のなんのへんてつもない廃墟である。

クインの推理ではまずアキバの街に本拠地がないことは俺とゴザルといっしょに強襲者狩りをしている時に気づいていたらしい。それは目撃証言が無さ過ぎるせいだとクインは語った。

「いくらなんでも目撃者がいなさすぎる、アキバの街は眠らない街だ。日々現実世界の技術や物をこの世界でも体現しようと住人全員が眠るなんてことはありえない。それなのに、腐ってもアキバの街の自治組織〈へ円卓会議〉が聞き込みをしてもそういった集会をしている連中の目撃証言がないなんておかしい。」

ならば彼らはどこにいた？簡単だアキバの外だ。夜中の狩りほど危険なものはない。けれどレベル差が大きく開いたプレイヤーにはモンスターは近づいてこない。低レベルのゾーンだったら夜中に狩りをしに来るコアなプレイヤーもいないだろうから。

そして低レベルなゾーンで拠点としても使えるアキバ近辺のゾーンは一つしかない。それはアキバの街に隣接する〈書庫塔の林〉というゾーンただ一つ、らしい。

アキバの街からゲートで移動できる隣接ゾーン。〈神代〉の廃墟を包むように木々が立ち並んでおり、比較的小型のモンスターが徘徊し、古い書店や図書館、研究所の跡地などが散在していて、幾つかのダンジョンゾーンにも繋がっている。

隠れ家にはもってこいの場所だ。

そして〈書庫塔の林〉に点在するいくつもの建物の中からクインが目星をつけた建物を回っていき二つ目で今回の主犯を発見した。

そして、発見と同時に真っ白なケーキなんて生易しいものではなく

殺気の籠った攻撃を向けられた。

間一髪にもヘダメージ遮断呪文が間に合い開始そうその不利を逃れることができた。

近衛兵が数人いたりするであろうこともわかっていた。だからワンプार्टィー信頼できる人たちに無理を言っ出てきてもらった。俺、クイン、ごぎる、櫛八玉、ゆずこ、リチョウの六人パーティーだ。しかし、どうにも相手側の様子がおかしかった。

目に生気がなく全員が亡霊のように何かうわ言を嘆くだけなのだ。ただ一人はつきりと喋る男は一方的に

「我々は『愛』に生きるべからず、『哀』に生きるべきである。拒め、拒絶せよ、我らと奴らは異なるものだ」

そう言い張り、淡々と言葉を続けて一切こちらの話が通じず一方的に攻撃をくわえてきた。メンバー全員が戸惑いつつも応戦するが近衛兵の力が想像以上に強かった。まるで何重にもパフをかけまわしたような状態が常時続いていたのだ。少しずつ少しずつ押されていき撤退を考え始めたところで、

クインが指示を飛ばした。

やつの言葉を聞かせるなど

言われるがままにへ黄金領域で近衛兵を全員囲い隔絶しへ扇動の典災 エロリダーからの言葉を遮ってやると、糸が切れた人形のように倒れふした。

そこからは一方的なワンサイドゲームだった。拒め、拒絶せよ、と最後まで言葉を紡ぐことを止めはしなかったが、クインの

「黙れ」

一言と、共に放たれたヘインファイニティフォース、ヘメイジハウリングで限界まで強化されたヘマインドショックを受けて落魄の光を残して宙へと溶けた。

これが今回の事件の一切のあらましになる。

ちなみに、〈大規模戦闘^{レキオンレイド}〉に参加した一時の感情に飲まれてしまった〈冒険者〉、大地人共にエルノの提案に乗る形で同じ罰が与えられる予定だそうだ。

『ハーレムギルド 〈西風の旅団〉のソウジロウと女の子たちが楽しくデートする様子を目を逸らさず耳を塞がず一日見学し続けること』

明日は男たちの虚しい悲鳴がどこからか聞こえてきそうな一日になりそうである。

第三十五話 さすが貴族！やることが汚い！

『天秤祭』二日目

昨日の店主の突然の失踪もまるで歯がにもかけない勢いで〈三日月同盟〉出店の店〈陰陽屋〉は繁盛をして見せていた。全盛期の頃のブランドと経歴、前日の急な店主の失踪が相まり〈陰陽屋〉はいっ店主がいなくなるかわからないぞ、と大手ギルドのメンバーたちの間で噂を呼んだ。

大手ギルドというのはその名の通りに在籍人数が多い。女三人寄れば女々しいというのとはまったく意味は違うが、とにかく人が集まれば噂が立つのだ。その噂は戦闘系のギルドの間でまず広まり、生産系の職人たちに広がる。そして職人たちから伝わるのは職人たちが作った物を売る商人たちだ。商魂たくましい彼らはそういった金になる物珍しいものにはまるで木の樹液に集まる昆虫たちのようによってくるのだ。

サブ職〈陰陽師〉の制作アイテムなんて〈陰陽師〉の絶対数の少なさまもあってそうそうマーケットに出回るものではない戦闘系の面々には特殊効果がついた武器防具、職人には研究材料、

いいのか悪いのかそんな噂で戦闘系ギルドや大手ギルド以外に対してもその知名度が増した〈陰陽屋〉は朝から一日目の出鼻をくじかれた分を取り戻すように大忙しだった。

〈陰陽屋〉の店主である奏の失踪の理由が店の前で突如として謎の集団に襲われたの客のカップルがいたことを受けてその集団をわずか一日で壊滅させたという理由だったことをある大手に所属しているカップルたちが話したことも一因しているようだ。

そして、意外にも人気を博していたのはエルノの存在だった。レイネシアと同じコーウエン公爵家の一員である生粋の貴族であるエルノが一店員として働いている。

そんな馬鹿げた話があるものかと最初は信じていなかった者たち

もエルノから発せられる本物の貴族オーラに女性はハートを打ち抜かれ、男たちは彼が話すレイネシア姫の幼少期の話や日常話を聞かされすぐにアンタは本物だ認定をされた。

貴族のエルノがなぜこんなところで働いているのかという疑問の声も多かつたがエルノは、

「マイハマを離れて久しいレイシアが立派にアキバの〈冒険者〉の方々と助け合ってられるかを確認しに来たというお題目で、久しぶりにレイシアに会いたくなったのと、アキバの街で〈冒険者〉の皆さんと仲良くなり常々興味があつた商いを通じてできないかと、友人のこの店主に相談したところ素人のわたしを快く雇ってくれた」

と白々しくもにこやかに語ってみせた。

この時の顔を見て奏は言った。クラスティと同じ悪い人の顔だと、さすが貴族汚い、と

ものは言いようというものでレイネシアに会うついでに観光がしたいと奏に相談したエルノを店の手伝いをしてくれと無理やり丸め込んだ奏が評判まで上げてもらっておいて言っている言葉ではない。

エルノとしては一日目に来ていた奏の弟子の女の子へのわずかばかりの贈り物のつもりなので奏になにを言われようが知ったことではないのだが、

その証拠に今も客の女の子と楽しげに談笑している。

「すいませーん！会計お願いしてもいいですかー！」

「はいー！ただいまー！」

店内をバタバタと走り回るのは昨日の騒動のままにもつれ込むような感じで店の手伝いをしている。むさくるしいその顔もニコニコと笑っているものだから愛嬌を感じさせている。

「金貨15枚になるでゴザルよ。……はい、確かにちようど頂き申した。ありがとうございますーでゴザルよ」

ロールプレイの口調も相まってなかなかシユールな光景ではあるが満点の接客対応なのであるから奏もロールプレイにも目は瞑っている。

前日からやっている三バカよりも店の品の覚えもよく接客も上手いのだ。千葉からは、さすが、ゴザルねとお褒めの言葉も承っていてござるも上機嫌だった。

そんなござるに店の奥で〈加護付与〉を行っているのはずの奏が駆け寄って

「ござる！悪い、店少し空ける！」

「またでゴザルか!?昨日も午後からは店を空けているでゴザろうよ！」

「緊急事態だ。エルノ付き合え、姫さまのピンチだ」

「っ！わかった」

着けていたエプロンを脱ぎ捨て真っ黒な華やかさの欠片も感じさせないいつものコートを走りながら羽織る。店の客へと奏は大声で呼びかけ一言断りを入れると店の客たちは言った。

「何してんだ、早く姫様の所に行ってこい」

奏とエルノは店の入口の前で一礼するとレイネシア姫が主催で執り行っている夕餐会の会場である風水の館へと走った。

「まったく、噂通りに店主がよくなる店でゴザルよ」

入口で二人を見送ったござるは言う。背後からまた会計を求める声が聞こえてきた。



「ふんっ。どうしたのですかね？ よもや準備が出来てないなどは云いますまい？ あれだけ事前に申し込みを行なったわけですし」

「その……」

レイネシアは窮地に立たされていた

ことは、マルヴェス卿がミナミの新技术を採用した精霊船でアキバに向かうに当たり、事前に〈斎宮家〉にも納める荷物を保管できる倉庫を借りられるよう、レイネシアの方に打診してレイネシアの祖父にあたるセルジアット公にまで了解の印を得られて、出向いてきたのだ、がそれを祭りの準備の中で失念してしまったのだ

伝達の事故で連絡そのものが届くことなく失せてしまったのか、それとも事務メイドが失念したのか、それともレイネシアがあまりの忙しさに書類をどこかに紛れ込ませてしまったのか……。原因はどこにあるのかわからない

しかし、今更それを問い直している暇はない。

マルヴェス卿は、レイネシア側からの返事も所持しているのだ。今回の不手際はレイネシアの落ち度以外の可能性はないのだが……

「いい加減、返答を返して貰いたいものですな！こちらは貴女みたいに暇なのではないのですよ？さあ！」

「その……」

謝ることは、容易い。

しかしこういった交渉に不慣れなレイネシアは、頭を下げた良い場面なのかどうなのか判断がつかないのだ。自分の未熟さが嫌になる。

「それがコーウエンの作法ですか？ それとも〈冒険者〉——アキバの街との協力関係を作ったというのが眉唾であったのかな？」

せせら笑うような声に俯いたレイネシア。

云い返したい言葉はあふれているのだが、そのどれが正しく、あるいは危険なのが判らないのだ。

とにかく謝罪し、船荷の保証を含め、事を穏便に処理しなければ。

細かい手順については追々考えるとして、今はこの問題を、せめて宴の後に繰り延べられないか？ レイネシアは痺れきった頭でそう考える。

「こんばんわ！」

そこへ一人の来訪者の姿が現れる。俯いてしまっていたレイネシアは気づくことに遅れてしまったがそれが誰なのかすぐにわかった。それはザントリーフへと向かった運命の演説のあの日レイネシアを引き返せない崖へとにこやかに手を引き突き落とした張本人シロエだった。

「どうも、お初にお目に掛かります。僕は〈円卓会議〉12ギルドの一つ〈ログ・ホライズン記録の地平線〉のギルドマスター、シロエと申します。マルヴェス卿、ようこそアキバへ」

「シロエ……、家名はないのですか？」

「ええ。〈冒険者〉ですから」

シロエは西の大貴族マルヴェス卿と向かい合ってもその飄々とした態度いつさい崩すことはなかった。むしろ、いつもよりも纏う空気にピリっとした鋭さがある。まるで先程までイライラとしていた残り香が抜けきっていないように。

大地人の礼節や風習に疎い彼ではどのようなトラブルを呼び込んでしまうかわからない。レイネシアはそれを防ぐためにアキバの盾となることを決意する。

しかしその肩をそつと、だが有無を言わせない確かな力で抑える制止の手がかかった。レイネシアが肩口に振り向くとそこにはクラスティがいた。

メガネに阻まれ目を見ることはできないのだけれど不敵な笑みを浮かべていることだけはレイネシアにもわかった。

「それで？なにがあつたんですか？エリツサさんは？どこ？」

「こちらです。シロエさん。……これが経緯になります」

「ああ…なるほど…そういうこともあるのか。……うん。だいたいわかった。おーい、ミチタカさーんっ」

念話を使う手間すらも惜しんだシロエは会場に大きく響くほどの声を上げて会場にいる大男に声をかけた。それに悠々と近づいてきたのはシロエ、クラスティと同じく〈円卓会議〉の一席を担う12ギルドのひとつ〈海洋機構〉のギルドマスターであるミチタカだ。

「ミチタカさん、姫がポカやらかして、トラブルが発生したようです」

「ほう、そりゃ、またまた難儀なことだな」

「それで、円卓の倉庫がいつぱいらしいので、〈海洋機構〉の倉庫を貸してもらえませんか？これくらいなんですけど」

シロエは手に持つエリツサから受け取った資料をミチタカへと手渡す。それをさらりと三秒程度か目を通したミチタカは答えた

「なんなら台車も出そうか？」

「なっなんだと？倉庫なのだぞつ。そんな簡単に用意できるはずが。分かっていないな。私は馬車で来たのではないのだぞ!!」

「知ってますよお。ついさつき見学させてもらいましたからあ」

会場に新たな声が響いた。会場の入口付近にいるにも関わらずその声ははつきりと一語も聞きのがすことなく神経を逆撫でするような声が聞こえてきた。

新たなこの修羅場への来訪者は二人。エルノと奏だ。

「初めまして、マルヴェス卿。」

港に停泊する美しい船を見つけましてね。乗員に話を聞くとこちらにおられるときいたので。

しかし、なにやらマルヴェス卿はお困りのご様子。申し訳ありませんね、わたしは姪に何分甘く、蝶よ花よと面倒を見てきたので些か世間知らずの箱入り娘、マルヴェス卿のそのサファのようにプギャーなお顔に見惚れて困惑してしまったようだ」

マルヴェスにはところどころのエルノの言葉の真意が測りかねない。当たり前だ。〈冒険者〉特有の言葉なんて余計なことを教える奏のような存在と関わりの強いエルノぐらいしか大地人の中でわかる者なんているわけがないのだから。

プライドの高いマルヴェス卿は言葉の意味を尋ねることなんてできないのでなおさらだ。

「お褒めに預かり光栄ですよ。まさかこんなところで貴男のような方にお会いできるとは、エルノ卿」

エルノの言葉の意味をわかっている〈冒険者〉にはこのやり取りがおかしくて仕方がない。馬鹿にされて堂々とそれに礼を述べているのだ。こっけいさもここに極まっている。

マルヴェスにバレないように奏は周囲の〈冒険者〉たちに笑いをこらえるように静かにジエスチャーを送った。ここで悟られてはまだ面白くないのだ。

「あまりにも船が美しかったもので眺めていたらこちらに気づいた船員さんが中を見られて行ってはどうかと進めてくれましたね。中を見学させていただいたのだが、実に素晴らしい船でしたよ。特にあの広大な氷室を詰んだ倉庫。積載量500トンのあそこに荷物が積まれば圧巻でしょうね」

「あんなに広い倉庫は三大生産系の倉庫以外では初めてみましたよ。あんなに広いのに何にも積んでいないから⑨かとも思いましたけど」
「おや？これはどういうことですかねえ？マルヴェス卿。積荷がなかった？積荷を入れるための倉庫が必要だったんですよねえ」
「どういうことですか？シロエさん、まさか今もめている件に関して何か関わりでも？」

マルヴェス卿の顔がどんどん青ざめていくのが真つ白く塗り固められた厚化粧の上からでもわかる。ギョロリとしたサファギンのような目は泳いであちらへいたりこちらへいたり、瞬きの回数も増えている。

マルヴェス卿は西の大貴族だ。しかし今日の前にいるのはへ自由都市同盟イースタルの筆頭領主のセルジアットコーウエンの養子といえど息子であるエルノコーウエンである。

派閥は違えど女であるレイネシアと違って男であるエルノとは貴族としての文字通り、格が違う。

もしも仮にそんなエルノの目の前でセルジアット公爵の孫娘であるレイネシアを毘に嵌めようとしたことが露見すれば、へ神聖皇国ウエストランデの顔に泥どころではない、汚物を塗りたくることになるのと同義であることをしたことになるのである。

下手をすればへ自由都市同盟イースタルにマルヴェス一人の責任でへ神聖皇国ウエストランデ全体が弱味を握られることになってしまいかもしれないのだ。そうなればマルヴェスの居場所などへウエストランデに残りはしないだろう。

下手をすればその命で償わなければならぬかもしれないのが貴族という世界だ。

シロエから今来たばかりのはずのエルノと奏に事の説明が入る。そしてそれを受けて奏が口を開いた。

「まさか、何者かに積荷が盗まれたのでは？」

積荷を積むことなく観光のためにアキバへ来るなんて、我々と違って、お忙しい、マルヴェス卿が、なさるわけがありませんもんねえ」

まるでさつきまでの会話を聞いていたかのようにわざとらしく言葉区切り仰々しく声をあげ、両手いっぱい広げてオーバーなりアクションを奏がとる。既に会場の目はこの場に釘付けだ。

「その貴様！いくらエルノ卿の護衛とはいえ、少々声が大きいのではないかね！エルノ卿！護衛にどうという教育をしておいでか」

仰々しい勘に障るような奏の言動に不快感を覚えたマルヴェス卿が大口を開けて奏に向かい怒鳴り散らす。

だがそんなことで奏が少々な態度をとるような男なわけがない。むしろさつきよりも性根が腐ったような悪い笑顔でいきいきと言葉を返すのだ。

「護衛？違いますよ？申し遅れました。わたしは〈円卓会議〉12ギルド〈三日月同盟〉の一翼を担わせていただいております。奏と申します。この場にはエルノ卿の友人として立ち合わせてもらっています。なにか気に触ったのなら謝罪しますが？それとも〈神聖国ウエストランド〉の貴族の方は〈冒険者〉とのこういった関係は珍しいものでしたかあ？意外でしたあ」

「それよりも、早急な対応が必要そうだ。500トンもの積荷を全て誰の目にも晒すことなく持ち出すことなど不可能なこと、乗船員に犯行を手引きした者が必ずいるはずでしょう。すぐに乗船員全員に尋問を行いましうか。安心していいですよ、マルヴェス卿。わたしの友人の奏はどんな嘘も見抜く能力の持ち主ですし、〈円卓会議〉の12ギルドのひとつには自白剤や様々な薬品や発明品を専門に研究しているところもあります。それでも口を割らないようでしたら、

クラスティ殿、拷問の準備をするよう取り計らってはもらえないか

ね？」

「本来ならお断りするのですが……他ならぬエルノ殿の頼み、至急準備をさせましょう」

アキバとへ自由都市同盟イースタルとの結東は固い。そう証明づける事実がこの会話の間にいったいいくつ出てきただろうか。それはまるでマルヴェス卿が傷つけようとしたことは全て無駄で、お前なぞに傷つけられるほどに軟弱な繋がりではない。そう叩きつけているようなものだった。

「そ、そんな大事なことをしなくても」

「いえいえ、わたしはあなたを買っているのですよ。レイシア^{色々}をいじめてくしてくれましたからね。〈齋宮家〉への納入品どころかそれ以外の品まで失ってしまったとあれば、商人としての貴男の名に傷がつくでしょう。それだけは避けねばなららないことではないのですか？」

「そっそんなお気になさらず結構ですよ。この件はエルノ卿のお力を、お、お借りする程のことではありませんから、わたし自ら現場に出向きことを収束させていただきますよ。ほ……っほっほ……」

マルヴェス卿はそう言うのと逃げるようにして取りつくろう程度の辞去を小さく残し急ぎ足で会場を去ろうとする。

エルノとのすれ違いざま

「……次はこんなんじや済まさねえからな、三下」

貴族が使うような言葉遣いではない荒くドスの効いた低い声をマルヴェス卿にしか聞こえない程度の大ききさで囁いた。

ビクリと背を揺らしたマルヴェス卿は早足だった足をさらに早めてそそくさと会場を去っていった。

「お兄様！ありがとうございます！お陰で助かりました」

「お礼なら、この場にいる全員に言いなさい。この場にいるのは全員がレイシアのために力を貸してくれた人だ。

まあ、この恩はすぐに返せるようで僕としては安心していいのだがね」

「そうですね。皆さまありがとうございます。

……でもいますぐに返せるものなんて」

「ありますよ」

シロエのその一言が合図だったかのようレイネシアの肩を何処から現れたのかヘンリエッタが腕をアカツキがガツシリと掴む。

「へ？」

「着付けの方よろしくお願いします。

レイネシア姫直々に祭りの盛り上げをお願いしますね。きつとみんな姫様の冒険者風の格好を見たら大変喜ぶ」

呆氣にとられたその精神的な隙を突くように、レイネシアはずるずると引きずられてゆく。

鬼畜なメガネの騎士と叔父が仲良く手を振っていることに気づいたのはレイネシアが既に下着に剥かれた後のことだった。



祭りも終わりの時刻が近づきこの店も後片付けの準備をし始める頃、奏の〈陰陽屋〉もその例に漏れずせつせと後片付けをしている真っ最中だった。奏は皆が裏で売り上げの集計を待つ中でも一人力

ウンターに座って天井を見上げていた。

決してなにかあるわけではない。ただ、祭りの余韻を味わっているとかそんな気分には浸かりたいだけの格好つけだ。夜にもイベントがないわけではないがこういった風に一人黄昏るような時間は多分今日はもうないだろう。

あとは、騒いで、酒をのんで、酔ってベッドに倒れ込むことしかできないうらう。

そんな風に奏が一人で見るところに店の来客を知らせる鈴の音が鳴った。

「もう、終わってしまいましたか？」

「あー……構いませんよ。今、とつてもいい気分なんで特別にお客さん許しちやいます。」

髪の毛の長い綺麗な女性だった。

「このしおり素敵ですね。これ、戴けますか？」

「タダでいいですよ、ソレなら。」

売れ残っちゃったやつですけど俺の一番のお気に入りなんです、ソレ。俺と同じようにソレを気に入ってくれたんなら、タダであげます」

ここで初めて女性と目が合った。

近づいてきて目を合わせたことで初めて気がついた。

この女おんなはなにかおかしい

「そんなに見つめられては、頬が染まってしてしまいます。わたしの顔になにかついていますか？」

「……貴女、誰ですか？」

「わたしの名前はダリエラ。」

ただの旅のものがきですよ。しおり、ありがとうございます。

それでは、また、会う機会がありましたら」

そういつて女はくるりと身を翻して僅かばかりの花の薫りを撒いて回ったときに揺れた長いウェーブのかかった髪に目を引かせ、来たときと同じように店の鈴の音を鳴らして人混みの中へと消えていった。

第三十六話 西の狐は笑う

「兄さーん？どこさーん？」

千菜は辺りをキョロキョロと見回しながら兄の奏を探す。

ウイルたちがアサクサへともう帰るというのに兄の姿がどこにも見当たらないのだ。

まあた、悪い癖が発動したか、千菜はそんな風に言いながら奏の部屋へと入る。別れの言葉嫌いな兄ではあるが最低限の配慮のようなものはする。書き置きかなにかを残していそうなものなのだが……ない

「うーん、どこにバックレたのかなー」

「別に構わんよ、嬢ちゃん」

そんな千菜に声をかけたのは熊のような大男。あと少ししたらアキバを発つおやつさんだった。おやつさんは肩にお土産をまとめた布袋をかけながら、がっははと笑いながら言う。

「今回来てよくわかったわい。奏にも嬢ちゃんにもここでしつかりと居場所を作ってるつてなあ。だから心配するようないこともねえ。

それに奏の言うよう今生の別れになるわけでもねえんだ。気にするほどのことでもねえよ。アイツのことだからどこかでこっそり覗いてるかもしれんしな」

がっはは、と笑うおやつさんの声は明るい。

奏は自前の店があったし、千菜も途中からは奏の店の手伝いにまわっていた。

呼んでおきながら大したもてなしも案内も出来なくて一緒にいたのも休憩時間や仕事を終えて夕御飯を食べてからぐらいたらう。

それでもおやつさんは満足してくれたらしい。

「おっと、勘違いするなよ。俺だけじゃなくて、ママも、坊主も、大満

足だ。来てよかったよ。

さて、それじゃあ日が落ちる前に出発はしておきたいしそろそろ行こうかね、嬢ちゃん」

おやつさんは、がははつともう一度笑うとズンズンとおばさんとウイルが既に乗り込んでいる馬車へ向けて歩いていった。

千葉もそれを追いかけてようと前に出たとき、

ブツツ

乾いた布のようなものが切れるような音が自らの足元から聞こえた。

ふと目を落としてみると千葉の履くブーツのヒモがぷつぷつと千切れていた。それを千葉さ応急処置程度に直して今度こそおやつさんを追いかけるために駆け出した。

走る体にあたる風はまだ冬には猶予があるというのに信じられないほどに冷たく、強く、痛かった。



アキバの街の南の外れ、

『天秤祭』も二日間という短いような長いような期間を終えて、今は大片付けの真っ最中である。

そんな中で奏は祭りの余韻を楽しむ中を抜け出して廃墟の中へと足を踏み入れていた。

緑の苔が一部の壁を覆い壁も天井も所々が抜け落ちている部屋へと入るとそこには一つの人影があった。

波打つようにうねる長い黒髪。白い卵形の輪郭の中に、赤い唇と、磨いた黒曜石のような瞳が輝いている。藍色と赤で編まれた幾何学模様のローブには、どこをさわっても柔らかかそうなポリウムにあふれた肉体が押し込まれて、ソファの上に座っているだけなのにゆるゆると蠢いているようだ。

「あら、貴方は先ほどの店主さん。こんなところでどうかなさったのですか？」

惹き付けられるような潤い張りのある唇から発せられた優しく溶け込むような声

それにたいして奏は顔色一つ変えずに返事を返す。

「その言葉をそっくりそのまま返さないといけないほど野暮なことはないんじゃないかな？」

「……わたしはただ人混みに疲れてしまったので少し一休みをしよう」と

奏の素っ気ない言葉にも見つめ続けたくなるような引き込まれる微笑を崩さずに返事が返される。

「なら、なおさらだ。こんなところに美しい女性一人はいくら街の中でも危ないですよ。〈西の納言〉濡羽さん」

「本当にわかってしまうのですね」

奏が携えて持ってきたバッグスライト燈明招来の光と落ちかけた夕日の光に照らされながらクスクスと口にてを添えて笑う女性を漆黒の闇小鳥が覆い隠し、少しずつ飛び立っていく飛び立っていく端から空へと消えていくそれは未知の魔法のエフィクトなのだろう。

闇小鳥が全て飛び立ちそこにいたのはなめらかにウエーブがかつた艶のある黒髪にカラスの羽で作ったゴシック調のドレスでその柔らかなで豊満な体を包み込んだ狐尾族の美女だった。先端を真っ白な雪で染めたような尻尾と耳がゆらりゆらりと揺れてこちらの目を引いて誘っているようにさえ見える。

「それで、俺に何かご用ですか？わざわざ偽装した姿でウチの店に来てしかもわざと俺に後をつけさせたでしょう。こんな人気のないと

ころまで誘い込んでまさか楽しくお話ししましょうなんて間の抜けたことは言いませんよね」

「奏さんが望むのであればそれもいいですわね。それ以上のことでもわたしは構いませんが」

やりにくい、奏は心底そう思わされる。

奏の対人スキルにおいてだけを限定すれば周囲から参謀タイプとみなされているシロエやクインよりも優れている。それは魂魄の動きから相手の“動揺”、“焦り”、“安堵”、“怒り”様々な感情を察することができるからだ。その精度はポーカーフエイスを得意とする人間の感情を隠そうとする行為を全て無為にして貫通する。

だが、奏はそれを十全に使いこなすには総合力が、頭の良さがどうしても足りなかった。防御を貫通する武器を持っていてもその使い道がわからないのだ。もっとわかりやすく言い表すのであればメラゾーマを五発同時にぶっぱなせるだけのMPはあるのにメラミまでしか使えないといった感じだ。

どう動くのが最適なのかを導き出す能力がシロエやクインら参謀に比べて奏は圧倒的に劣っている。単純な挑発や誘導に利用する分には問題ない。文を文章に仕立て上げる力がないだけなのだ。

それゆえに誰か奏の目を理解して、目的地を指し示す存在がパートナーとしているときに奏の眼は無類の強さを発揮する。〈円卓会議〉設立時、三大生産系ギルドから金貨四百五十万枚を即日で奪い取ってみせたのはヘンリエッタというその道のプロフェッショナルの存在がいてくれたからなのである。

だからこそ、目の前のこの気を抜けば見蕩れてしまいそうになる妖艶な女性は奏にとってやりづらかった。

嘘をつく相手の嘘を見抜くのは奏にとっては容易い。けれど嘘つきである彼女の言葉は本意がわからない。

嘘しか言わないやつは本当をいつ話すかわからないからだ。

「俺は女の人の肌が見えてる方が好きです。それにウェーブのかかった髪はあまり好きじゃありません」

「そうですか。でもそれ以外は気に入っていただけているのですね、濡羽は嬉しいです。」

それでは、もつと気に入ってもらえるように、そうしてみましようか」

ハチミツのように甘くとろけるような声でなんの警戒心も感じさせないような足取りです。りと奏との距離を縮めていく。しかしそれよりも目を惹かれるのは先ほどと同じ黒の闇小鳥が飛び立つエフィクトだった。濡羽の緩やかな波のかかった髪に、長く高貴さを感じさせる漆黒のドレスに、闇小鳥が集まり宙へと消えていく。

そして、いつのまにか少しでも動けば肌と肌が触れてしまいそうな距離まで奏と濡羽の距離は詰められていた。先ほどまでの露出など微塵もなかったゴシック調のドレスはワンピースドレスへと変わり赤子のように白く柔らかな手足を惜しげもなく晒し髪はウェーブのかかっていた髪からアカツキのように長く真っ直ぐとした絹のようなロングストレートへとかわっていた。

「どうでしょう。〈オーバーリライト情報偽装〉はこんなこともできるのですけれど、これなら濡羽に満足していただけますか？」

耳元で消え入るような体に溶け込みそうな声で濡羽が小さく囁く。

「俺は貴女に初めて会った時のことを覚えてる。貴女本当に俺のことが欲しいんですか？」

この女性と初めて出会ったのはまだ奏の体がゲームのキャラとして存在していたときのころ。ミナミで〈陰陽屋〉を始めたばかりで、ツテも何もなくて自ら素材の採集に明け暮れていたころ。

たまたま暇を持て余していたシロエをミナミへと呼び出して素材

集めに出ようとしたために臨時で募ったパーティの一人の中に彼女はいた。腕のいい〈エンチャンター付与術師〉だと思った。シロエのような仲間の継続戦闘能力を高めるマナコントロールラーとは違った敵の動きを徹底的に妨害するクラウドコントロールラーと言うらしく事実「いい腕をしている。ソロでやっているのに好感がもてる」と他人には遠慮する性分のシロエが珍しく本人に直接伝えていたことも奏には印象に残っていた。そしてその言葉を受けて心の底から喜んでいる彼女の姿も。それからしばらくして〈陰陽屋〉は主にレイドコンテンツを攻略する戦闘系ギルドを中心にして爆発的な人気を得ることになるのだが、一人では捌ききれないまでの多大な仕事量に嫌気がさして奏は店を辞めることになるのは余談である。

「満足していただいたことは否定なさらないのですね。嬉しいです」
「質問に答えてください」

やりづらい、奏はまた二度目の同じ言葉を心の中で呟く。会話の主導権を握れずにいる。あちらの方が少し上手だと

「そうですねえ、確かに一番は奏さんではありません。私が一番欲しいのはシロ様です。」

けれど奏さん、アナタのことも欲しいのです。わがままな女は嫌いですか？」

「…いいえ。……正直言って好きです。」

それに俺は貴女のことを嫌いになることはできなさそうだ。むしろ好感を持つてくるくらいです。

何があつたかは俺にはわかりませんが、それだけ傷ついてこれだけ気丈に振る舞える貴女を俺は素直に尊敬する。

貴女みたいな人を嫌でも嫌いになることなんて俺にはできやしない」

濡羽の笑顔にほんの一瞬だけ、綻びが生まれる。けれどそれはすぐ

に消え微笑へと戻る。無意識な一言が濡羽に一矢を報いていることに奏は気づかない。

奏の目に映るのは濡羽から漏れ出す気品と美しさを漂わせる魂の光。けれどそこはどこか脆そうで、危うさが必死に隠されているように奏には見えた。

少し作り話を聞いてもらってもよろしいですか？濡羽は言った。

距離は相変わらずありえないほどに近い。

奏が濡羽をこれを機にして近すぎる距離を離そうとソファの方へと促す。奏が対面して置いてあるソファの右手側に座る。ボロボロのコンクリートの壁には風化してからか大きな穴が空いていた。西側から差し込む夕日の光が濡羽に当たらないよう気を利かしたつもりの奏であったがそんな配慮も何もかもを無視して濡羽は奏の前を通って隣へと腰を下ろす。

もう一度立ち上がって向かい側に座ることも考えたが濡羽の前では全て見透かされてしまっているような気持ちにさえなった奏はここでわずかばかりの反撃を返すことも断念した。

「わたしはね、奏さん。……不器量な女子です」「は？..」

「驚いてもらって光栄ですけれど、そうなんですよ。とにかく眼がぎよろりと大きくて、痩せつぽちで、貧相な——物欲しげに周囲を見上げることしか知らない、醜い子供でした」

隣に座る女性はじつくりと観察することがなくとも誰もが美女と断言できるほどの美女だ。それが謙遜を含めたとしてもそれはあまりにも卑下しすぎている評価だった。皮肉のようにはか聞こえない。ありえる可能性は……あちらの世界のこと

「小学生の頃は、本当に痩せぎすで。あばらが浮かぶというレベルで

はありませんでした。腕も足も骨が浮いて。髪は伸び放題、服は垢じみていましたし。醜いと云うよりは、汚い娘でした。

中学に入り、背は伸びましたが、体重はさほど増えず。相変わらずがりがりで、前髪の隙間から大きいばかりの眼で周囲を見上げる、そんな気持ちの悪い女だったかと思えます。

それが変わったのは——中学二年生でしたか。ひよんな事で、多少の元手を手に入れたわたしは、まともな食事にありつけるようになりました。初めはそれでもなかなか受け付けなかった身体ですけれど、じわじわと体重が付いて……でも、やせっぽちなのは相変わらずでした。骨が見える気持ちの悪い身体から、細いだけの身体になっただけです」

そう語る濡羽の話は黙って聞いていた。

思うところも感じるところも色々あったがただ黙って、聞いていた。

「身なりに構うようになったわたしは、それでも、どこにでも居る、貧相な女でしたよ。薄い胸、ただ細いだけの手足。十人並みの、ただ瞳だけが大きい顔。

当時云われていた最も多い評価は“不吉な娘”でした。

ふふふっ。たぶんね、容姿だけではなかったんでしょね。わたしの中の何が、そう呼ばれても仕方のない部分だったのでしょうか。

……それでもね。

中学生だという理由だけで、わたしを求める人は居るのです。生きるためだとか、仕方なくなんて云う云い訳はしません。ちやほやされるのが嬉しくて、わたしは、——奏さん、ごめんなさい。少し、痛いんです。」

気が付けば濡羽の手を強く握り絞めていたまるで母親の服を掴む赤子のように情けなく。濡羽に言われてやっとなづいた奏は強く握り絞めていた手を勢いよく離す。少しだけ手には赤く跡が残る。

濡羽は見上げるように奏の瞳をのぞき込んで、昏く微笑う。

「私のためにそんなに悲しんでくれるのですか？気づいていますか？

——奏さん物凄く怖い顔をしてらっしゃいますよ。

やはり奏さんは優しいのですね。やはりわたしの元へ来て欲しい、わたしはシロ様が一番ですがその次ではダメですか？ それではおいやですか？」

「インテイクスがいるところへ来い、と言うんですか？

あの女からは聞いているでしょう。俺がどんなにクスヤロウなのかと

どれだけあいつと俺の仲が終わっているかなんてわかっているでしょう」

「わたしを理由にしていただければいいのですよ。わたしのいるへP l a n t h w y a d e n まで来てはいただけませんか？ わたしを慰めてはもらえませんか？」

奏の瞳を濡れて潤んだ瞳で覗き込むようにして濡羽の顔が奏の顔に近づかれる。先程までは奏が握っていた手はいつの間にか濡羽の手により強く握り返されていて、既に奏と濡羽の体はそれぞれの体温と速い鼓動がわかるほどに触れ合っていた。

あと少しでも濡羽が体重を預ければ奏を押し倒すこともできるほどに二人の距離は近い。ワンピースドレスから覗かせる白い放漫な胸や無理矢理な体勢により細く抱き締めたくなるような足や腕が奏を魅了する。

日が沈み先程まで差し込んでいた夕日の光はもうない。暗く冷たい夜のとばりがやってくる。

「……わかりました」

「Plant hwyadenへ、来て下さるのですね」

待ち望んでいた自分を受け入れる言葉に、あるいはろう楽されたという言葉に濡羽の顔はほころび頬が上気する。

「俺じゃ濡羽さんを慰めることはできません。」

「だって俺には好きな人が、好きな人たちがいますから」

あなたを慰めてあげることが俺にはできないことがわかりました、申し訳なきように奏はそう言った。

「……わたしではその方の代わりにはなりませんか？」

“好きな人”

濡羽にはわかった。その存在が奏を踏みとどまらせるきつかけになつた人だと

「無理です。”アイツ”の代わりは誰にも務まらない。」

あなたがどんなに姿を変えても、尽くしてくれても俺もあなたと同じであなただけを一番に据えてあげることができない。俺は貴女が思うほど優しい人間じゃないんですよ。

「つい昨日も冷血漢なんて言われちゃいましたからね」

最後の一言は笑いながらおどけてみせる。

もう二人の距離は先程までの近い距離にない。

覆い被さりらばかりに近づいていた柔らかな体も甘く安心するよ

うな匂いも見つめられれば動悸が速くなってしまいう潤んだ瞳も離れている。

「それに、俺はあなたの作り話に最後まで付き合うことはできませんでした」

その時点で濡羽にかける言葉なんてたかが知れている。大変だったね、かわいそうに、そんなありきたりな言葉をかけるだけで濡羽が救われるとは奏には思えなかった。

出会った順番が違えば違っていたかもしれない。確かに奏は濡羽に騙され魅了され虜にされてしまっていたから、濡羽のことを欲しくなってしまうていたから。

それでも”彼女”のことをふと思い出した奏は連られるようにして仲間たちのことも思い出した。千葉や三日月同盟のみんなを、ミノリやシロエたちへ記録の地平線へのみんなも、エルノのことも、クインのことも、他にもたくさんの人たちを。

この世界に来て奏には簡単に捨てるには深く根を下ろしすぎた居場所がある。

”彼女”と濡羽の出会い順序が逆だったら、奏はみなのが濡羽に埋め尽くされていた心の中に湧き出てくることはなかったかもしれない。

嘘つきにだからこそ話すことができた。普段なら煙のようにぼかしてしまふ奏の本心。

「あなたが欲しているのは自分を見てくれる人だ。シロエがどういう返事をあなたに返すかはわからないけれど、俺はあなたのことを嫌いになったりしないことだけは約束します」

最後まで濡羽に向き合うことが出来なかった奏にはそれくらいの

無責任な言葉を紡ぎ出すのが精一杯だった。その精一杯の言葉は濡羽に届いたのかは奏にはわかりはしない。

「奏さん、あなたはもう、百恵様とはもうお会いになりましたか？」

奏の言葉に対して何を思ったのか目を一瞬だけ閉じた濡羽は脈絡なくそう言葉を言った。

奏の目は大きく見開かれる。ミナミでの目撃証言はマイクロフトから聞いていた。けれどまさか西の総督と関係を持つているとは思っていなかった。いや、彼女ならありえない話ではないと納得することは容易いと考えを改める方が自然だった。彼女は比喻表現なしで神に愛されてあらゆる才能に溢れていたのだから。

〈大災害〉に巻き込まれたその日、奏が最初に念話で連絡を取ろうとした千葉と奏の実の姉。〈大災害〉の次の日にはフレンドリストの名前が暗転してしまっていたこの半年以上をあらゆる手を使って探していた行方不明の肉親

濡羽の言葉に奏の体は先ほど真逆に、濡羽へ覆いかぶさんばかりの勢いで近づかれる

「っ……来ていますか、この街に」

「来ているよ、ボクは確かにここにいる」

振り返った。聞き慣れたその声に反応して、久しく聞くことのない声の主をその目で見定めようと

振り返ったその視線の先には、千葉とそっくりな大きな猫目と奏とそっくりな笑顔を浮かべた女性が堂々とそこにいるのが当たり前のように腕を組んで立っていた。

「八枝、久しぶりだね。」

感動の再会の前にまずは濡羽ちゃんから離れなさい」

第三十七話 月に馳せる思いは未だ消えず

「八枝、久しぶりだね」

「姉…ちゃん…」

突然のことに「驚愕」、
「動揺」、
「歓喜」、
「疑問」、
様々な気持ち
持ちが奏の中を混濁していく。

だが、その中でも一際強い気持ちは「歓喜」だった。やっと会えた、やっと見つけた、無事でよかった。そんな気持ちがあぐるぐると渦巻く思考を少しずつだが染め上げていく。

そんな奏の内面に知ってか知らずか奏のただ一人の姉、百恵はニコリと微笑むと手を差し伸べた。その手に奏は手を伸ばす。伸ばされた手は暖かなその手に包まれ、

奏の体は気づいたら宙を舞っていた。

「痛ったあー!」

「ボクは今すぐ濡羽ちゃんから離れなさいと言ったはずだよ。積もる話の前に説教をしなくちゃいけないのかな?」

なにを女の人をこんな廃墟で押し迫ってるのか、他の人が見たら強姦と間違われても言い訳できない絵面だよ」

見事な投げを食らった奏の体は綺麗な放物線を描いて瓦礫が転がる床へと落下する。奏は思い出す。そういえばこんな人だった、と

「姉ちゃんっ!久しぶりの再会に投げで応える姉がこの世の中のどこにいるんだ!」

「知らないの?世の中には久しぶりの再会の時に殴りかかるロクでもないやつがいる漫画を読んで育つてマネする奴がわんさかいるんだぞ?」

「アンタもたいして変わらねえよっ!」

投げ技は受け身を取れなければ下手をすれば肋骨が折れて内蔵へ

と突き刺さることになる。拳で殴りつけるのに比べれば程度にもよるが遥かに危険だ。

「先に下に降りてなさい。ボクも濡羽ちゃんと少し話をしたらすぐに降りるから。」

「いや、でも…」

「大丈夫、逃げたりしやしないよ。ボクはお前に会うためにここに来たんだからさ」

やっと再会できた姉から目を離すことに躊躇を覚える奏。また消えてしまいうんじやないかという不安の感情があからさまに奏の顔に表れるが、その不安をかき消すように百恵が片目をウインクしてみせてアピールする。

そんな陽気な態度をとる姉に弟は納得して部屋を出て行く。千葉よりも少しばかり高いくらい背の姉がそんな風にウインクをしてみせる時は一度たりとも約束を違えたことはないからだ。

月の光を受けて輝くセミロングの金髪を視界の端に捉えたのを最後にして奏は百恵に背を向けた。

「わたしなどに構わず姉弟水入らずでの夜の散歩へと向かってよろしかったのですよ?」

「言われなくてもすぐに行くからそう邪険に扱わないでよ。気まずいのはわかるけどさ」

「いえ、そんなことはありません。」

殿方と一緒にいるところを見られた程度で羞恥に頬を染めるような初心さなんてとうの昔になくしてしまいましたから」

「ここら、そんなことを言ったら年齢を嵩増しして見られるよ。まだ若いんだから」

百恵のペースは崩れない。奏のように濡羽に飲まれることがない。金色に輝く髪をくるくると指で弄びつつコバルトブルーの目で壁の

瓦礫の隙間から空に登り始めた月を眺める。

「今からシロエくと会うんだろ？口説けるといいね、あつ、でもあの子は多少強引な娘に弱い嫌いがあるからさつきみたいにしたら案外コロリと落ちるかもね。」

まあ、頑張つてよ。お姉さんは応援してるからさ」

「奏さんには『好きな人』がいらっしやるみたいですね。私の誘惑にもなびかない程に強く思った人が」

「…そうだね、」

だから濡羽ちゃん、さつきみたいなこと、されたら困るんだよねえ。

さつきはカナミちゃんの影響力がかるうじて残っていたから良かったけど、もしあそこで濡羽ちゃん、君にウチの愚弟が口説き落とされていたら取り返しがつかなかったよ。

もし、奏の中心が君に移っていたらボクの今までの苦労はすべて水泡に帰すところだった。そしたら君のことを、

殺さなくちやならなくなつてたよ」

だから今後こういうことはしないでね、にこやかに笑う百恵の目は笑っていないかった。

そのコバルトの目には脅しの意味も含まれた怒気と殺気が湧き狂うように満ちていた。

濡羽の身体中からいやな汗がいつきに噴き出す。刹那といつても差し支えないほどの時間しか向けられていない殺気も濡羽に心の底に昔押し込めていた原始的な恐怖を思い出させて濡羽の身体を強ばらさせるには十分だった。

濡羽は思う、この人は絶対に逆らつてはいけない人だと、この人の言葉に背けば本気で殺される。

『〈冒険者〉は大神殿で復活できる』そんな事実を当たり前のように

有していてもその考えは変わらなかった。

「それじゃあ、逢い引き頑張ってね。」

ここでよろしくやるのはなんとというかマニアックだからきちんと宿屋に行くことをオススメするよ」

そんな百恵のふざけた言葉は耳に入らないほど、濡羽の身体は恐怖に震えていた。その廃墟にシロエが来るまで濡羽の身体の震えは止まることはなかった。



かなくらかももえ
奏儂百恵という人間は神に愛されている。

それは言い過ぎた比喻でもなんでもなく、紛うことなき事実である。

彼女には奏と同じ生まれ持った目がある。正確には、奏が霊的なエネルギーが見えるのに対して彼女には霊的な存在を見ることができ

る。幽霊しかり、神しかり、はたまた妖怪変化の類すらもその目は見据えることができた。

生まれは由緒正しいとは言わないまでもそれなりに歴史と因縁を持った神社。

信仰の対象として祀られているのは神を見ることが出来る人間は当時はまだ存命だった祖父を含めても百恵以外にはいなかった。

暇を持て余していた神はたいそう喜んだ。久しく自分の存在をはつきりと見ることが出来る人間が現れたと。

神は百恵にあらゆることを語った、そして教えた。それに応えるように百恵も熱心に学んだ。

それをいたく気に入った神はさらに百恵を可愛がった。百恵に近づこうとする悪しきものは払ったし、百恵が成長に必要なものはなんであろうと用意した。

そして、百恵が八歳になる頃、弟が生まれた。

名前は八枝というよく笑う男の子であった。神は弟のことを楽しみに語る百恵の姿を見てまた喜んだ。自分と過ごす時間が減ることよりも百恵の笑顔が増えたことが喜ばしかったのだ。

そして、弟の八枝も姉の目にした目をもって生まれていた。彼には霊的な力を捉える目が備わっていた。

自分の姿をはっきりと見て言葉を聞くことはできないがそこにいることはわかるそんな程度の認識ではあるがまた自分を見ることができると子が増えた。神はまた喜んだ。

けれど、そういうわけにもいかなかった。

八枝は神を恐れて泣くのだ。

おおきな力を持った何かがいるのはわかる。けれどそれがなんなのかかわからない。えたいのしれない存在に八枝は恐怖した。赤子ゆえにしようがないことだと神も思った。

これは悪いことをしたと八枝の前には極力姿を見せないようにした。

そして、また百恵が十歳になった頃、妹が生まれた。妹にはなにも神を捉えるものは持っていなかった。

神は残念に思ったが自分には百恵という可愛くてしようがない娘のような存在がいるから構わない、神はそう思った。

そして、百恵が十二歳になる頃、百恵は神童と呼ばれるようになった。

た。

『頭がいい。とても小学生とは思えない』

当たり前だ。誰が百恵に教えを説いていると思っっている。人の寿命など優に超える神が教えたのだぞ、そこらの大人よりも理智に富んでいるに決まっっている。

『彼女の運動能力はすば抜けている。十年に一人なんて表現じゃまだ足りない』

当たり前だ。十年以上も神の強大な神力を間近で受け続けてきたのだから、すべての身体の細胞が常人のそれよりも遥かに発達している。

『おまけに性格もいい。才能に溺れることなく誰に対しても等しく優しい』

当たり前だ。神の何百年という経験が出来うる限り伝えてきた。この世にどんな絶望が希望が溢れているかを一端とはいえ彼女は理解している。

元より才能に溢れていた彼女は神に教えをえらという並の人間にはありえない教育を受けあらゆる才能を開花させた。そして常に向上心の元に行動し自信を高めることになんの慢心することがなかった。

人生に必ず訪れる挫折も、絶望も、不運も、百恵が乗り越えることができないものは神が全て祓った。

そのままに、環境が変わることなく王道、霸道、ならぬ神道を歩み彼女はそのままに育ち、甘く苦い青春を経験し、大人になり、理不尽を覆し、そして今にまで至っている。

神に愛された女、天才の中の天才、それが奏儂百恵という名の奏と千菜の唯一無二の姉である。



「お待たせ、八枝」

「ん、少し時間かかったな。というか思ったんだけど本名で呼ぶのはナシだぞ、ここでは『奏』が俺の名前だ」

「……まあ、そういうなよ。せつかく久しぶりなんだから、今だけは、ね?」

「はあ、まあいいや。」

「で、なに話してたんだよ。ていうか濡羽さんと知り合いだったの? ていうか今までどこにいてなにしてたんだ。なんで念話にもでなかつたんだよ」

「まあ、そう一辺に聞かなくても全部答えてあげるわ。あんまりグイとこられると怖くて泣くぞ」

「アンタはどこぞの名探偵か」

自分のことを美少女と自覚するかの名探偵は脅しに『泣く』という選択肢すらも追加する。自分という存在の使えるものなんでも利用する彼女の強かさを奏は尊敬している。

「んー、ボクが一姫ちゃんと一緒というのはないわね。あの子はボクとは出自が違う。ボクと一緒の出自の奴なんてこの世にそうそういるようなもんでもないけどね」

「話をそらすなよ。なんで濡羽さんといい、姉ちゃんといい頭のいい人間は話をポンポンそらすんだ」

「はは、八枝、そう怒るなって。濡羽ちゃんにはちよつと忠告してきただけ」

「忠告?」

「ウチの弟に色目なんか使っちゃダメだぞっ！メツてね」

「それ絶対オブラートに包んだ程度じゃ済まないレベルで脅してきてるよね。」

「ていうか歳考えろよ、今年で29だぞ。三十路一步手前だぞ」

「……殺すぞ…変態愚弟が…」

「スミマセンデシタ。ウラワカキオネエサマ」

「それにしても、かつこよかったわよ。」

「あれだけいい女に迫られてきつぱりと断るなんて。そうそうできることじゃない。」

『俺には好きな人がいますから』

「言われる女は幸せね。ボクも一度は言われてみたいわ」

「……聞いてたのか」

「聞いてないとあんないタイミングで出てくるなんて無理ね」

「止めてくれりゃよかったのに」

「もしもの時には止めてたわよ」

「でもさ…」

「百恵の歩みが止まった。それに気づき奏も歩みを止めて後ろを振り返る。」

「カナミちゃんのことを、好きって言っちゃうのは、
ダメなことだよね」

「……別に、俺が誰を好きになろうと、俺の勝手だろ。姉ちゃんには関

係ねえ」

「そうだね。恋愛は自由だ。ボクに八枝の誰が好きか嫌いかなんてとやかく言う筋合いはないだろう」

「だったらこれから二度と…」でもねえ…、

「テイパーテイ茶会が解散して何年になると思っているんだい!？」

あの子がテイパーテイ茶会を辞めた理由を知らぬ存ぜぬで押し通せるなんてふざけたことは抜かすことはしないだろ!!？」

三年前、ひとつの集団に終わりが訪れた。それはギルドでもなんでもなかったの集団。名前はデポーチエリ、ニーパーテイ放蕩者の茶会。

伝説のプレイ集団として、ヤマトサーバーでは当時、知らないプレイヤーはほとんどいない程のレイド攻略集団だった。

けれど、どんなものにも終わりは訪れる。

一人や二人ではきかない人数のメンバーが仕事の都合や一身上の都合でテイパーテイヘルダーテイルを辞めることになりテイパーテイ茶会も解散せざる負えない状況へとなった。

そして、そのうちの一人に、奏の想い人も、含まれていた。

名前はデポーチエリ、ニーパーテイ放蕩者の茶会のリーダー的存在にして一番のトラブルメーカー

彼女の引退の理由はなんの変哲もない。ただの引越した、住まいを海外に移す、婚約者に付いて行き、住まいを海外に移す。ただそれだけ。

「ああ、知ってるよ。でも、いいじゃないか。片思いを続けることだった」

「違う。ボクが言っているのはそういうことじゃない。」

あの子にお前の中心で居続けることの重荷を背負わせていることが問題だつて言ってるんだ。

誰か一人の為ならなんだつてできる。どんなことだつてやり遂げられる。それは素晴らしいことだろうね。

でもさあ、誰か一人のためにしか頑張れない奴なんて、その当人からしても、周りの人間からしても、迷惑でしかないよ」

「……なにを言ってるんだ

俺は確かにアイツのためになら大概のことはできるけど全部が全部アイツが理由でやってきてなんて」

『俺の大好きな奴がそういう奴だったから』

いつか一姫ちゃんに言ったらいいね。十分に理由にしているじゃないか。無駄な議論をさせるなよ」

「いい加減にしろよ…、そろそろ俺も怒るぞ」

「怒れよ。ボクはもうけっこう怒ってるんだ」

いつのまにか、場所はアキバの街の南門、街の外へと繋がるゲートの前へと来ていた。運が悪かったのか、作為的にこのタイミングでこの場に来るよう計算されていたのか。

百恵のヒールを履いた足での蹴りが奏の腹を射抜く。とつさに地面を奏は蹴つて勢いを殺そうとするがそんなもの関係ないように百恵の足は深く奏の腹へと突き刺さった。

四、五メートルの距離を吹き飛ばされた奏の身体はアキバのヘゾーンから突き抜け、フィールドゾーンへと動いていた。

「げほっ…げほっ！どういうつもりだ。姉ちゃん」

「どういうつもりもなにもあるか。久しぶりの根性叩き直してやるんだよ。その腰に刺さった刀でも抜いてかかってきなさい」

「んなもんやるわきやねえだろ」

「やらなきやお前が一方的にボコられるだけだ」

躊躇をまったく感じさせない蹴りが奏の鼻先を掠める。

それをすんでのところでは、一歩の隙間も空くことのない右と左の拳が腹を、右肩を顔面を容赦なく連続で殴りつける。

「くそっ、いい加減にしろっ！」

奏もこれ以上のへ武闘家顔負けの連打を受けるわけにもいかず腰の黒刀を抜き放ち百恵を牽制して距離を無理やりこじ開ける。

空いた空白をさらに空けるために刀は抜いたままで後ろへと飛び去り連続で殴られた腹を押さえながらへヒールを自らにかけける。

「なんだ、峰打ちか。余裕だねえ」

「そろそろ止めとけよ。武装もしてないんだから、いくら姉ちゃんでもこの世界では負ける気はしねえぞ。峰打ちつつても重さのある鉄の棒でぶん殴られれば痛いなんてぬるい感想は言えねえよな」

「この世界では負ける気はしない、ねえ。うん、まあ、そうなんだろうな。お前はそう考えるんだろう。」

でもまずはそのふざけた戦い方をやめてからそんな戯言は吐きな。防御を放棄するなんて素人でも、ましてや達人なら絶対にしないことだろうが

戦い方だけじゃない、それ以外もだ。

最近はまだボロが出始めてるじゃないか？この世界に来て誤魔化しが効かなくなってきたんじゃないか？」

「なんの話をしてんだよ」

奏の疑問の言葉に百恵は耳を貸すことはなかった。そのまま、溜ま

りに溜まったものを吐き出すようにいつきに言葉を紡いでいった。

「今までは笑って余裕があるように見せて、自分より弱いものたちに優しく振る舞って、道化を演じることで周囲に複数の自分を認識させて、

自分に力があると、周りに誤認させてきたんじゃないか？

本気を出さずに手を抜いていることを気づかれないように無意識に動いていたんじゃないか？

はつきりと本当の自分を見つめられないように焦点をずらしてきたんじゃないか？」

「だから何の話をしてんだよっ!?俺が手を抜いているってなんのことっ…」

『やーくんは無意識に意識的だから困っちゃうよね』

いつかの夢での彼女の言葉が脳裏にフラッシュバックする。

『無意識』

夢というものは自分の無意識からの語りかけである。

自分が恐怖と感じているもの、大好きなもの、意識は騙すこととはできても無意識は騙せない。だってそこには意志がないのだから。そこはただ感じたものが溢れだし意識へとすくいだされる前のものだから

「ほら、心当たりがあったんだろ？」

詰まった言葉尻から力が抜けていく。

それをまるで責めるように百恵の言葉は続けられる。

「もう一度言っよ。」

最近はまだボロが出始めてるじゃないか？この世界に来て誤魔化

しが効かなくなってきたんじゃないか？

大手のギルマスに軽口を叩いて、恩を売って対等だと示そうとしなかったかい？

簡単には許してはいけないことを許容して自分を慕う人間を増やそうとしなかったかい？

突拍子もないことをして、自分をそれを平然とやってのけれる高い能力を持った人間へと偽ろうとしなかったかい？」

「黙れ」

「ザントリーフで〈大地人〉の男の子に言っていたね。

『人生つてのは理不尽で残酷で冷酷でバカらしいほどに悲劇的に劇的なんだよ。おとぎ話じゃない。ゲームじゃない。』

ハッピーエンドで終わるとは限らないんだよ。

そんな中で手を抜いて生きていけるわけない』って。

でもさ、お前の方がずっと手を抜いて生きてきているじゃないか」

「黙れつつてんだろぅがあ!!」

「あの子の優しさに甘えているくせに、カナミちゃんのためにですら本気を出すことができない。

ボクが気に入らないと言っているのはそういうところだ」

奏の咆哮に気圧されることなく最後まで言葉を言い切った百恵は、激昂して斬りかかってくる弟をいなす。冷静さを欠いてしまった彼の剣には繊細さの欠片もなければ型もぶれてしまっている。そんな太刀筋が通用するようぬるい腕前では百恵はない

「〈神降ろしの儀〉」

それは〈神祇官〉なら当たり前のように切り札のひとつとして使う魔法。必殺魔法の中でも〈詠唱時間〉及び〈再使用時間〉が最も短い魔法。直後に使用した特技の熟練度を一段階効果時間中上昇させるこごぞというときに使用する魔法

もちろんそんなことは同じ〈神祇官〉の奏は先刻ご承知であり、P V P 畑出身の奏は冷静さを欠いてはいても本能的に観察へと集中するために動きを止める。

が、次の瞬間には奏は両腕を押さえ込まれ、身体を畳み込むようにして、地面へと這い蹲らされていた。

「これなら、少し頭は冷やせるな」

「…かはっ！」

なにしやがった…〈飛び梅の術〉で飛んだとしても、こんな速いわけがねえ…」

「最近では、アキバの街では〈口伝〉っていうのが確認されてきたんでしょ？」

お前の〈黄金領域〉みたいなのとか、シロエくんとか、クラスティくんとかソウジロウくんとか」

（なんでそこまで知ってんだ…）

〈黄金領域〉のことはペラペラと人には話たことはねえし、俺だけじゃなくて他の連中の〈口伝〉まで）

奏の最初の疑問に答えるように上を見上げることもできないような体勢の奏の上から声だす。舌をペロリと這わせ笑っている。

「それといっしょだよ、口伝〈神憑き〉」

神をこの身に憑かせ人を越える業だ。お前の〈口伝〉と違って大き

な欠点は抱えていないがね。

そしてお前はこれに見覚えがあるんじゃないかな？」

百恵の白く長い手の指が奏の頭を掴み前を見られるように無理やり上げさせる。

そこに一本の太刀が地面へと突き刺された。

長い長い太刀だった。

白く美しい太刀だった。

奏はその太刀に見覚えがある。否、忘れることなんてできないだろう

「ザントリーフでのあの夜、お前を殺したのは、

——このボクだ」



「やあ、百恵ちゃん。奏クンと無事に会えたみたいだねー」

「マイクロフトか」

祭りの熱がまだ冷めるような時間でもない街の中、なぜか人一人として姿のない道をゆつくりと歩く美しい金髪青眼の女性の前に立ったのは真つ白な毛並みをした深紅の眼を持つ狐もどきのような生き物だった。

道を塞ぐことなんてできないような道ではあったが女はそこで立ち止まり狐もどきと視線を交差させ、何を思ったのか毛玉の鮮やかな白の毛に触れる。

「いいのかい？」

「こう見えても中身はただの冴えないおっさんだよ？」

「傷ついている女性には優しくするのが紳士な探偵なんじゃないの？」

「君が傷つくなんて悄悄な言葉を使う玉じゃないことくらいは知っているさー。ただ君はめんどくさくなっているだけだよ。張り詰めた精神を休めようと脳が無理やりストップをかけてるだけさー」

触られるのを拒むように白の毛玉はするりと百恵の手から抜け出し尻尾で手を叩き払う。

それに女は嫌悪感をみせるようなことはせず、立ち上がったもういくつもの星が儂げに空で輝くだけの空間を見つめ口を開いた。

「ボクはさ、天才だよ。」

君や一姫ちゃんとは格が違う。シロエくんなんかでは比較対象にあげるのもおこがましいくらいに、まあ、あの子は自分を天才なんて微塵も考えちゃいないくらいに身の程をわきまえているけどさ。

せいぜいボクと同じステージに立てるのはクラスティ君くらいだろう。あの不感症の男でもまだボクの足元にも及ばないだろうけどさ」

「ナルシステイクだね」

「理解してるのよ。自分の能力を。ボクは才能を使いこなす天才だよ。どんな才能もボクは最大まで伸ばすことができる。」

だから、あの子がああなつた責任は半分はボクにある。もう半分はイトシキ様のせいなのかな。

いや、…やっぱり全部ボクのせいなんだろう。

ボクの才能は奏を狂わせた。他の人間は大丈夫だったからあの子

も大丈夫だと思っただけだね。見込みが甘かった、他のどうでもいい連中の人生を狂わせないように回していた気遣いをあいつらよりもずっと近くで長く一緒にいる八枝の方にもっと回してやればよかった」

「それで変わったと思うのかい？彼のあの無意識の自傷を」

無意識の自傷

その言葉に百恵はひどい笑いをみせることしかできない

「変わったんじゃないかな。千葉は強い子になったし、その上あの子の学習能力の高さには僕にも目を見張るものがあるくらいだ」

「彼が防御をしないっていうのは、つばぜり合いを避けてるってことなんだろうー？人と競うことを避けている、切磋琢磨することを避けている。キミと比べられることを拒んでいる

これから、彼は変われると思うかあい？いや、立ち上がれると思っ
ているのかい？」

「立ち上がらせるわよ。例え八枝に嫌われても憎まれたとしても。そのためにボクはこの世界に呼ばれたんだ」

「家族を救うために家族を殺すかい。」

はつきり言わせてもらおうよー百恵ちゃん。君は頭がおかしい。狂ってる。キミみたいな奴は早く死んだほうがいい。じやなきや
いつかたくさんの人を不幸にする」

「そんなもん先刻ご承知よ。傍から見ればボクなんて幽霊が見えるなんておかしいこと抜かしているオカルト電波ちゃんだろ」

「くくっ、実に素晴らしい喜劇だねー。」

キミたち姉弟の人生は狂いに狂っていてどうしようもない。

こんな世界に呼ばれる前からそれだけ狂っていたらどうしようもないだろう。

人間風情で神に愛された女とほとんど同じ境遇にあったというのに真逆の立ち位置に行つてしまったその弟。

三部作にして大長編で売り出せるよー。楽しませてもらうよ。キミたちの一幕を」

享樂主義の狂つた探偵マイクロフト

彼は人の人生の一幕を垣間見るために探偵になつた。今度の一幕はこれまでの人生で最高の一幕になるだろうと期待を高ぶらせてゆく。

その本来の身体ではない禍々しい真つ赤な眼を持つ獣の姿であっても彼が心の底から楽しげにしていることが百恵にはわかつた。

そんな白の毛玉の姿を視界から切つた金髪の美しい女の顔は自責の念に押しつぶされかけて醜く歪んでいた。

彼女の髪を揺らしそのコバルトの眼にあたる夜の風は冷たく乾ききり、

あるはずもない彼女の傷を、慰めているのか、抉っているのか、ゆっくりと通り過ぎていくのだった。

第三十八話 おーるらうんだーな神祇官

時は少しだけ遡り――

『お前を殺したのはわたしだよ』

はつきりとした口調で聞き間違いなんで起きようもない程にくつきりと告げられた言葉に奏は百恵に組み敷かれた体勢のまま聞いていた。そこに怒りと疑問の気持ちなどは起こることはなくただ呆然とその言葉を咀嚼し理解しようとするこゝとだけが奏にできることだった。

やがて許容のできない事実を受け入れた奏が起こした行動は拒絶だった。

「俺から離れやがれこの人殺し」

奏の体の上で悠々と余裕を浮かべていた百恵が咄嗟に奏の体の上から飛び退く。飛び退きざまに一太刀の軌跡が奏に向けられるがそれが届く前に奏を中心として球心状に〈黄金領域〉の絶対の境界が広がっていき円状に奏を抱きすくめるように展開し拒絶するように百恵の刃を弾いた。されどその剣圧だけで背後の地面は抉れなんの抵抗もなくあっさりと木はなぎ倒される。その一撃はザントリーフへと向かうときに奏を斬り伏せようとした化物のそれと同じだった。

「〈黄金領域〉、流石の強度と言える。

けどそれ、長時間の展開も連続展開もできない欠陥魔法だろ。真光の光の前にメツキの光じゃあ、淡すぎる」

絶え間なく続く白の斬撃の暴風は吹き荒れ黄金を喰らい続ける。放たれる死の一閃の数々が止まる気配は一向になく、〈黄金領域〉を解き通ずるかすら定かではない反撃の一手を打ち返す隙すら奏にはあたえられない。地力が違いすぎる。

『〈黄金領域〉』

世界の中に自分だけの世界を創り上げ世界と世界を区切る境界でいかなる干渉をも受けつることのない理による壁。理への干渉なくしては超えることはできない黄金の居城。

されど所詮は人の造り上げた絶対。絶対は絶対ではなく穴だらけの遠き理想でしかない。

世界を創り上げる力など、一人の人間が持てる力で創り上げることなどできやしない。世界の上に小さな世界を創るそれは砂浜の上に砂の城を建てるのと変わりなく創るための材料は借り物でしかない。

その場にある“場の力”を消費して創り上げるのが〈黄金領域〉という奏の口伝なのだ。借り物の力は“場の力”が尽きれば使えなくなり、自分のものではない力を使うには自らの力を振るうよりも無駄が増え手間が掛かり時間がかかる。

「〈口伝〉は使い手の本質を偽りなく表す。だからお前の〈口伝〉^{本質}は穴だらけだ。

己を取り繕うことにしか懸命になれず、自分の愛しい存在のためにすら全力の力を振るうことが選択しにすら入らない。自分に優しい世界^側だけに固執し、都合の悪い外側には目を瞑り拒絶する。

これを悪性としかわずになんと言おうか。お前はお人好しなんかじゃないし、いい人なんかでもない。ただ自分が可愛いだけのナルシストだ」

結界が収束を始めていく。

一撃たりとも白を通すことをしなかった黄金は少しずつ少しずつ、小さく、弱くなっていく。所詮、砂の城は砂の城でしかなく白波には流されるし風には浮かされ崩される。

そして世界が終わりを告げる。

収束しきつた〈黄金領域〉は消え白銀の刃は奏の身体をいとも容易く吹き飛ばす。既に抉りきりもとの風景など影も形もない背後を跳ねるように舞い地面に何度もその体をぶつけたところで、刃の届いていなかった木へと体を打ち付けることでやっと思止まるにいった。

頭からは血が流れ右目はもう見えていないのだろうその目に光は宿っていない。身体中の骨も折れているはずで立ち上がることもできなはずな風体だ。満身創痍という表現では足りないほどに痛々しくポロポロに痛めつけられたその身体で乏しくなったわずかな光を左目だけにやどして一点を見ていた。

月の光をバックに金髪を揺らしながら大きく開いた奏との距離を一度の跳躍で詰めてきた百恵。百恵は視線だけを向けてくる奏に對して見下ろしながら言葉を続けた。

「八枝、それでもまだそうあり続けようとするのなら、そのままメツキの光であの世なりなんなり行くといい。そのあり方がまだ黄金に輝いているうちに、生き恥を晒す前にさっさと死になさい。じやなきやいつかお前は誰かを不幸にする」

「勝手なこと言うんじゃないやねえよ…あんたのせいで俺はこうなったんだろうが…この化物」

血を吐きながら奏は百恵に言う。奏の顔は吐き気がするように気分悪げに崩れ、真っ赤な血涙が流れているかのよう錯覚してしまう。それは本物の涙があるのかどうかは分かりえない。

弱々しく挙げられた左手に指さされながらその言葉を受けた百恵の表情がわずかばかりに崩れた。

「劍の神呪」

指差していた左手から大型の劍が無数に飛び出して百恵へと襲いかかる。この近距離で発言された不意打ちの無数の劍は異空間の扉から顕現しきる前に既に直撃している。おそらく全ての劍が百恵に直撃しただろう。その手応えが奏にはあった。

「これで無駄だとわかったかい？お前は万能でもなんでもない。すべてにおいて一歩足りない。しよせんその程度だ、だから私に勝てないのさ。だから私には届かない」

「…いつになつたらお前はまた走り出すんだ？」

それでも百恵には届かない。

奏が放った「神祇官」の最高火力を誇る魔法を受けても血の赤色どころか傷一つ見受けられない。

ただただ高潔に気高く頂点足り得る。それが奏儂百恵の本質。

口伝「神憑き」

怪異と遊んだものは怪異に染まる。

ならば神と遊んだものも神になり得るだろう。それが根底にある

奏儂百恵だけの口伝。へ神降ろしの儀へにより降誕した神と対話し、交渉し屈服させ、本来得ることのできる力とは比べるべくもない人智を超えた力を憑かせる降霊術の極致。神をも魅了する奏儂百恵の高潔さ

「バカは死んでも治らない。でもこの世界では違う。この世界で死ぬば己の汚いところや弱いところを無理矢理にでも見せ付けられる。お前は何度死ぬば利口になれるかな？」

奏の胸から白銀の長刀が一本生えた。美しかった黎明のような青色を弾けるような血の紅がただただ広がり染め上げていく。それは日が立ち上り空が明るく照らされるのとは違う終わりの始まりのような色へと青を変えていった。

そして奏はまた絶望の夢を見た。

「二回目」

出来うる限り冷淡に感情を殺したような声が夜の入口へ立つことになる奏に届くことはなかっただろう。

きつと彼女が死んだなら彼女が見るのは弟を殺す夢だ。弟を何度この先殺すことになるかは彼女にもわからない。けれどその悪夢はいずれ彼女を壊すだろう。それでも壊し続けられ壊れてしまう。

彼女は高潔で気高く頂点足り得る程に高みに立っているのだろう。高みに立つ彼女だから、殺し続け悪夢を見せ続けることができるのだろう。自分の弱さを受け入れきってしまった弟がまたもう這い上がるまで、彼女は何度壊れるだろうか。

ただひとつ言えるのは、彼女はもうすでに十分に壊れている。彼女が立っていた高き足場もそう多くはもう残っていない。彼女は遠くないうちに堕ちるだろう。

さてあと何度殺せるか…

さてあと何度壊せるか…

さてあと何度…



地獄を見た。

死にたくなるような悪夢を何度も見せ付けられた。悪夢は死にたくなるように辛かったけれど、悪夢に誘われる前のほうがずっと地獄だった。死んだほうがマシだと思った。それでもこの世界では死ぬことは出来なかったけれど。それは終わりの始まりだったのだろう。

「ああ、面倒だ……この^{冒険者}身体じゃなけりや壊れてもおおかしくねえ」

いつそ狂えてしまえば楽だったかもしれない。

天秤祭のあの日から、悪夢を見るようになった。自分では立ち直ったつもりではいるけれど身体は正直らしく眠れば悪夢を見る。

悪夢を見ないようになるには、きつと立ち直るのではなくて乗り越えなければいけないのだろう。受け入れるのではなくて克服するのが俺に一番に必要なことなのだろう。何をすれば克服できるかなんてまるでわかりやしないが、それがきつとやるべきことで間違っていないはずだ。

聡明なあの姉がどこをどう間違ってあんな方法を取ろうとしたのかはわからない。あの姉なら俺を殺すことなく自分で言っていて虚しい限りではあるが更正させる手段なんていくらでも思いつきそうなものだ。まるで誰かにそそのかさされたみたいに姉らしくない。

だとしたら姉を止めることがきつと俺がやるべきことだ。

「強く、ならなきやなあ……」

それもこれも姉との対等なステージに立てなければどうしようもないが、現状じゃすぐに殺されるのがオチだ。せめて対話をするだけの實力をつけないと話にならない。

今、俺はアキバの街にはいない。俺がいるのは霊峰フジの南側にあ
る華の都セレステナ。

神祇官^{カンナギ}が信仰する神の人柱である龍神アサハナを祀る神社と多くの美しい華が咲き誇るヤマトが誇る数少ない英雄、〈古来種〉が滞在する、いや今は滞在していた街である。

美しい街ではあるが、べつに俺はのんきに観光をしに来たわけでも

神社に神頼みをしにきたわけでもない。できることなら神頼みで万事解決するのならそうしたいところなのだが、最近では龍神は神社に姿を現していないらしいし、そんなものに頼ることが根本的な解決になるとは到底思えないのが正直なところではしかない。結局は自分の問題なのだから。

迷信ごとは都合のいい時だけに信じていけばいい、信じる者が救われるならよくないものを信じるものは同時に不幸になるのと同義だ、ようは信じようが信じまいが同じこととクイン辺りが言っていた。今だけはアイツの身も蓋もない意見に乗らせてもらおう。いないものを信じて頼つてもしようがない。

俺の目当てはセレステリアからほど近い霊峰フジのふもとに広がるダンジョンへ「フジ樹海」。

高レベルのモンスターが闊歩するゲーム時代の頃からヤマト屈指の難関かつ広大なダンジョンのひとつである。そこで俺はセレステナを拠点にしながらレベリングに勤しんでいた。天秤祭から二週間レベリングの甲斐あってレベルは天秤祭の頃の91から93まで上げることに成功した。レベルをあげてなんとかなると思っではないけれどなにかしてなければ始まらない。なにかしてなければ気が持ちそうにないからだ。

「さてと、行くか」

今日もまた日の光さえも届くことのないフジの密林へと足を踏み入れる。獣の声と見飽きた魂の残り香が飽きもせず殺気だつて出て迎えてくる。

「ハッ、毎日毎日血気盛んだな。やろうか、畜生ども。届くかどうかもわからない天上落としての糧になつてくれ」

その笑みはどうしようもなく高笑いからはほど遠い。誤魔化しも利かなくなつてしまった彼の笑顔は見ていて気分が悪かつた。

第二部 予告 第二部予告

秋の祭典から早くも二ヶ月の月日が過ぎ、アキバの街に真っ白な雪の積もる冬が訪れていた。

「あの男は化物ですよ。人として大切なものがどうしても欠如してま
すから、貴女と一緒にです。薄汚くておぞましい、見るに耐えません」
「彼はねえ、惜しいんだよ。ヒーローに匹敵するくらいに魅力的な
キャラクターをしているのにヒーローになりきれないんだ。まった
く、俺からしたら羨ましくて仕方ないっていうのにさあ」

相も変わらず彼はどこかで語られる。それが悪評か酷評か褒評か
は定かではないが

今のアキバの街にそんな「彼」はいない

それでもアキバの街はいつもと変わらずに活気に溢れ賑やかにそ
の日々が過ぎていく。

そんな中、少女と彼の妹はある噂を耳にする。

「殺人鬼？」

「僭越ながらそれでは語らせてもらおうか。

〈紅き名探偵〉の二つ名がただのお飾りではないことくらいそろそ
ろ証明しようではないか。

私を赤面探偵なんて呼んでいいのは不愉快な話だがアイツだけだ」
「無粋だわ、この街で人殺しをしようだなんて。姫の目の前で人を殺
そうだなんて

——身の程を知りなさい。理を捨てた畜生風情が」

少女たちは鬼を止めるために集い助け合いその中で新しい友情を
育んでいく。

冬空の下、アキバの街では様々な思惑が交錯していく。

「もう少し頑張ってくれないかなあ！アキバの精鋭諸君！こんなの

「じゃあメインドイツシユの前に飽きちやうよ！」

「クインさんっ！危ないっ」

「いいねえ。面白くなってきたよお！やはり人形の出来がいいと見応えがあるねエ」

「終わりです…。」

「アキバの街はもう…」

そして、彼も、血の繋がった実の姉との約束と因縁に決着をつけるために少しずつ足掻きつつ道を探していた。

「俺の剣には今、重さがなくなっちゃった。」

「元からあってないような重さだったのかもしれないけどな」

「ただ、視点が変わっただけよ、よく見えるであろう？」

「おのが弱さも、懦弱さも、強さも、己にできることがなんなのかも」

「妾に膝をつかせてみせよ。」

それが最後の試練じゃ、お主の人の生の最後の試練にならぬよう、あがいてみせよ」

「立ち上がれ、もう一度

立ち上がれ、何度でも

——また、みんなで笑うために」

そして……

「終わらせようか——

——ことなくだらねえ姉弟喧嘩

姉ちゃんそのありがた迷惑なお節介、俺が愉快に快活に高らかに高笑ってやるよ」

次章、第五笑『その手に失せた夢の欠片』

苦しくて、苦々しくて、涙を流すことしかできない時があっても、

——それでも人生は楽しくてしょうがない

第五笑 その手に失せた夢の欠片 第三十九話 雪に散る深紅の花

◇1◇

ギルド会館三階貸出ゾーンのうちのひと部屋を拠点として構えているへ三日月同盟のギルドホールではいつもどおりにすこしの騒がしさが心地よく響いていた。

千菜はその騒がしさをBGMにしながらマリエールの抱えるはずであるへ円卓会議の書類に目を通していている。本来ならマリエールが目を通さなければならぬ資料もいくつかあったりするのだが当のマリエールは何分こらえ性がない性分なのでついついこんな事務的な仕事よりも楽しいものの方に逃れていってしまう。

お祭りの運営やらイベント事の仕事などの仕事は悠々としてしてこなすのだがこの前も秋の大運動会と称したカボチャの在庫処分大会が行なわれた。ちなみにへ三日月同盟は九位だったので規模に見合わない多くのカボチャの負債を抱えてしまった。困ったものである。

そのことも踏まえて同じへ円卓会議の議員の一人であり懇意にしてくれているシロエがあらかじめそういつた面倒な仕事は出来る限り回さないようにしてくれていたし逃れようのない必要不可欠な仕事も奏と千菜、ヘンリエッタの三人でマリエールにもわかるように噛み砕いて説明してやったり分担してやっていたのだが、

今はそのうちの男二人がいなかった。シロエも奏も何処へやらと消えてしまった。

「まったく、男つてのは勝手になんでも決めて行動するんだから。待つ方の側のもなりなさいよね」

手に持つ筆記具を遊ばせてシロエが用意しなくなつて幾分か質の落ちてしまった書類から視線を外しながらアキバの街を離れて自分勝手に行動している二人に愚痴をこぼす。少なくともシロエの方はそんな私情で動いていないことはもちろん知っているが、これくらいは

言わせてもらっても彼なら文句は言わないだろう。

天秤祭のあの日二人がなにかしていたのは千菜も知っていた。そして奏にあの夜なにかあったのも勘付いているつもりだ。

「千菜ー、おつかいを頼まれてはくれませんかー？」

「どこにー？」

「レイネシア姫のところですよ。マリエと一緒に行ってあげてくださいな」

どうやらお供という名の息抜きに行つてこいということらしい。最近はお水楓の館にも顔を出していないのでちようどよかつたのかもしれない。

あそこのメイドであるエリツサが入れてくれたハーブティーとケーキの組み合わせをつまみながらのんびりと過ごす時間は千菜は結構好きだった。雰囲気は違えどあちらの世界で祖母と縁側でお茶を啜りながら羊羹でもつまんでいたときと雰囲気似ていたからだ。

「いいんですか？まだ書類捌ききつてないよ？」

「あとはおわたしがやっておきますわ。最近ずつと任せっぱなしだったでしょう。たまには息抜きくらいはしてきなさいな。それに帰ってきたらマリエにもきちんとやらせますわ」

「ヘンリエッタさんだつて忙しかつたんだし…」

「いいんです。わたしだつてちよこちよこ息抜きはとつてますわ。最近はおクインさんも服を文句を言いながらも着てくれるようになりましたし、総合的にはプラスですよ」

それ単に反抗しても無駄だつてクインが気づいただけなんじゃ、などと野暮なことは口にする気は千菜にはない。

ヘンリエッタが言うとおりに最近千菜が奏の抜けた分のギルドの仕事もほとんどやっていて息抜きらしい息抜きもしていなかったのも事実なのだ。自由がもらえるなら存分に活用してこようじゃないかと、千菜は目の前に広がっていた書類の山をぎつと整理した後立ち上がった。

「それじゃ、行ってきます」

「はい。いつてらっしゃい」

部屋の扉をややテキトーに閉めて出て行った千菜にヘンリエツタは思わず苦笑を浮かべてしまう。

奏が自分になにも言わずにいなくなってしまうって一番思うところがあるはずの妹が、普通なら身が入らなかつたり上の空になりそうなものをこうも徹底して兄の後始末に奔走しているのだ。どちらが上かわかつたものじゃない。普段の二人のやり取りからは想像できないが案外二人きりのときはまわりが見ているときとは違った関係がああ二人にはあるのかもしれない。

「まったく兄妹揃って難儀な性分をしていますね…、周りが見えていてハラハラさせられます」

ヘンリエツタはアキバにはいない笑みをいつも絶やさなかつた青年を思い出してもう一度苦笑してしまう。

「あら…この計算最初から間違えてますね」

◇2◇

セルデシアの大地はあちらの世界と比べると若干の気候が異なる。コンクリートの大地だった頃とは違い夏に太陽の熱がこもるようなこともなく乾いた風が強く吹いていき、冬は雪がありがたみを感じることもないほどに際限なく降り積もるのがこのセルデシアでのヤマトの大地の気候なのだ。

だからアキバの街の街道の脇にも雪かきされた雪の塊がのけられているし民家や商店の屋根には落とし損ねたつららが一本だけ寂しく残っていたりする道を歩くのが日常になる。

「うー、さむいっ」

「そんなかつこだったらそりゃ寒いやんね。いつもと変わらんかつこやん」

「いつのまにかこんな寒くなつてたんだねー」

「最近千菜はシロ坊みみたいに引き籠つとたから部屋でぬくぬくぽっかぽっかやつたもんね」

普段と変わらない翠の着物姿で出てきた千菜だったがいつのまに

やらこの格好では寒さを凌ぎきれないほどに寒さは厳しくなっていたらしくぶるりと震えてしまう。そんな千菜を見てケタケタと笑いながらエアメガネをくいつと上げてみせるマリエール。

「マリエールさんがもうちよつとたくさん仕事してくれてたらわたしも引き籠る必要なかったんだけどねー」

「ごめんなさい」

（ほんまはウチが手付けるまえに千菜が大方片付け終わつとるからなんやけどね…）

マリエールがギルドマスターとしての仕事を優先させて終わらせて、いざ〈円卓会議〉の仕事に手を回そうとしてみればあらかたの仕事は千菜が片付けてくれていたのである。相対的にマリエールのする仕事量は少なくなってしまう。

もちろんマリエールもそれは悪いと思ってなんとかしようとも思ったのだが親友のヘンリエッタから、千菜も仕事に集中することで奏がないこと意識しないように紛らわしたいのかもしれない、なんて言われてしまえばちよつと手が出しにくくなってしまおうそれに甘えて他のことに時間を割いているのも事実なので甘んじて千菜のお小言は頂戴するようにする。

ギルメンを黙って見守って受け止めてあげるのもギルドマスターの甲斐性の見せ所なのだ。

マリエールは自分が着けていたマフラーを千菜に巻いてやりながら、折衷案を提案した。

「かんにんかんにん。帰りにケーキ買ったげるからそれで許したつて」

「へダンステリア〉のアップルパイでも？」

「うぐつ…：かつ、かまへんよ？」

天秤祭で奏がデート（笑）でお世話になった〈ダンステリア〉のアップルパイ。あれは割とお高い。

他のギルメンみんなにもケーキを買っていくとなると今の持ち合わせで〈ダンステリア〉の少々お高いケーキを買うだけの金貨があるかマリエールの頭の中でさつそく桁の少ないそろばんが動き出し

答えを導きだす。

結果はあんまり残らない。これはヘンリエッタにお小遣いの打診を頼まなければならぬと遠くを眺めてしまうマリエールとは対照的に千菜の顔はホクホク顔だった。女子としてやっぱり甘いスイーツにはそれなりのご褒美らしい。

「あれ、アカツキちゃんかな？」

思わず遠くを見つめてしまっていたマリエールはひとつの影を見つめる。

それは全身黒の隠密性と機能性を追求した黒装束に身を包む少女。マリエールたち〈三日月同盟〉とも懇意の関係にある〈記録の地平線ログ・ホライズン〉のお庭番担当のアカツキである。その小さな体軀に見合った敏捷さとへ腹黒メガネ〈ことシロエが重宝するほどの索敵能力と隠密行動スキルを備えた可憐な燕のような少女である。

「おーい！アカツキちゃん！」

「わあっ！マリエールさん、いきなり近くで大声上げないでよ」

天下の大家でもありながらも人目をはばからず声あげてアカツキに声をかけるマリエール。それにすこしビクツと背中を揺らして後ろを振り向いてみた小柄な少女は二人の手を振る知り合いに気がつく。

「マリエールさんと千菜か。さすがにこんな大来でこの呼び止め方はやめてもらいたい。敵襲かと思った」

「ここは街中だよアカツキ」

「忍たるものどこに敵が潜んでいるかはわからない。例えばすれ違ったやつが敵の可能性だってあるのだぞ」

「君はどここの巨大組織と戦っているんだ…」

彼女のロールプレイは今日も健在らしく見えない敵と数知れない戦いを繰り広げているらしい。本人も実際にそんな存在を気にして生活してるかどうかは定かではないが。

だが男子たるもの外に出れば七人の敵がいるとも言っているので、女子ならその七倍は敵がいてもおかしくはないのかもしれない。

加えて隠密活動なんてしていれば案外現実味を帯びてくる。

「今からシアちゃんところに遊びに行くんやけどアカツキちゃんも一緒にごう。」

「ああ…すまない。わたしはこれから武器屋に向かうところで…」

「ほうかあ、なら仕方ないなあ。じゃあまた今度いつしよに遊びいこな」

「ああ、誘ってくれたこと感謝する」

フツと〈^{アサシン}暗殺者〉か〈追跡者〉かのスキルで姿を消すアカツキ。どこまでも一貫しているのか単純につい癖でやってしまうのかはしらないがお偉いさんの前なんかでは失礼になるのでやらないように注意しておくようににやん太に告げ口しておかねばと決める千葉だった。

「ほな、シアちゃんとかいこか」

もう既に人ごみに紛れてしまつて薄れてしまつた気配に背を向けてマリエールとともに千葉はレイネシアにいる〈水楓の館〉へと歩き出した。

◇3◇

「このチーズケーキおいしい」

「ミカカゲさんに教えていただいたレシピをエリツサなりにアレンジさせていただきました」

白亜の皿の上に鎮座するチーズケーキをまたフオークでひとかけらと切り崩し口へと運ぶとしっとりとした食感とうっすらとレモンの風味が口に広がる。控えめな甘さと皿に添えられた付け合せの果実を使ったソースを付けるとまた味が一段と風変わりしてみせるのだ。これなら店売りしても十分に売れるだろう。流石マイハマの侍女なんでもそつなくこなすのだと千葉は関心する。

「さすがエリツサさん、一家に一人欲しいね」

「お褒めにいただき光栄です」

「あつ！千葉さんずるーい。わたしにも一口くださいよ」

「ミカカゲちゃん、世の中はそんなに甘くはないんだよ。スイーツだけに」

パツクリと残った一口をミカカゲの目の前で頬張る千葉。大人げ

ないにも程がある。そしてたいして上手くもない、これが大人のやることか。

悲痛な表情を浮かべるミカカゲと呼ばれた緑髪のツインテールを揺らすパティシエ然とした格好の少女にエリツサはきちんと全員分準備してあるとフォローの言葉を入れる。

「とうわけだそうですねのでそろそろファッションショーは終わりにしてみなさんケーキを食べませんか？」

凜とした声が千菜の隣からテーブルの横でレイネシアを着せ替え人形にして楽しんでいる淑女たちにかけられる。声の主は〈D. D. D〉の教導隊長を務めるキャラメル色のロングヘアーが特徴的な少女リーゼ

マリエールを筆頭に楽しげに様々な衣装を冬薔薇の姫に遠慮なく着せ替えていた彼女らも甘い香りに誘われてわきわきと動く手をとめてこちらへと流れてきた。

「助かりました。リーゼさん」

「いえ、お礼には及びません。当然のことでしたまでです」

「姫様も嫌だったら嫌って伝えなきやダメだよ。あの人たちすぐ調子に乗るから」

「前回、マリエールさんと一緒に率先してやっていた人がなにをいいますか」

「あれはわたしがやったんじゃないからいいんです」

「たしかに主犯はヘンリエッタ様とマリエール様でしたが…あれは…」

やっとの思いで解放されたレイネシアは助け舟を出してくれたリーゼへと猫耳と猫のしっぽをつけたかっこうでお礼をいう。ちなみにこの耳やしっぽはいつぞやのロデ研特性欠陥品シリーズではなくてただのなんの変哲もないヘンリエッタのコスプレシリーズの一品なので問題はない。

そんなレイネシアに千菜は二個目のケーキにぱくつきながら声を掛ける。そんな自分のことを棚に上げた言葉にリーゼが呆れ顔で言葉を返すが当の千菜はどこ吹く風だ。レイネシアもその時のことを

思い出して若干千菜へと批難めいた視線をおくる。それを歯がにもかけずにケーキをつついて悶絶している千菜の胆力は大したものだ。「もうっあんまり言われると怒って二人の質感をもうそれはそれは艶かしく書き連ねた文章を音読しちゃうぞ」

「やめてくださいー！というかそんな文章がまるで本当に存在するかのようには言わないでくださいー！」

「え…？」

「なんですか!?!その困惑した表情は!?!あるんですか!?!マジアリなのですか!?!」

「ああ、あれかあ…、あれは、なんといつかなあ」

今まで終始無言を貫き黙々とケーキと紅茶を食っていたクインが手元のカップと皿の上が尽きたのを区切りにリーゼと千菜の会話を聞いて生返事をする。ほっぺにクリームをつけているものだから締まりはないがなんとも微妙そうな顔だ。

「クイン様は知ってらっしゃるのですか?」

レイネシアが恐る恐るパンドラの匣を開けるかのようにおずおずと思案顔のクインへと尋ねた。

「…官能小説かと思った」

「もうお嫁に行けません」

「最悪兄さんにもらってもらいなよ。やったね兄さんのお嫁さんゲツトだぜー」

「クルクルパーレベルに無責任です…」

リーゼは真っ赤に赤面して突っ伏す。レイネシアは官能小説の意味が分からずにハテナマークを頭上にいくつも浮かべて動くしつぽをふるふると揺らす。クインはまたか…、と呆れ顔にすこしの苦笑いを浮かべて千菜のイジリが自分に矛先が向かないようについさつききたマリエールを盾にするように背後へと隠れてエリツサへと世間話を振る。

楽しそうにニヤニヤと笑う千菜を見てマリエールは連れてきてよ

かったとにこやかに笑った。次は自分が直継とどこまで進んでいるのか根掘り葉掘りと聞かれるとも知らずに。

◇4◇

とつくりと日は暮れていた。

真つ白な雪を連ねて小道を吹き通る風は切り抜けるように冷たく口や鼻から入ったその喉の奥には咳き込みたくなるような気持ちの悪さがまとわりついてくる。そこに二人の男女が向き合って相対していた。

二人の間に流れている空気はアキバの中心街を見せつけるように腕を組んで歩くカッパルのように和やかな雰囲気もなくむしろ殺伐とした、張り詰めた殺し合いの場のような空気が生まれていた。誤解を生まないようにというのならばその空気は一方的に青白い光をどこからか生むひと振りの刀を持った男の方から放たれる純粋な凍てつくような殺気から生まれる空気だったことだ。

殺気にあてられた女とはまだ言い難い少女の方は文字通りの蛇に睨まれた蛙のようにピクリとも動かない。街中ではPKなどという蛮行は衛士によって食い止められる、そんな考えがあったのかもしれない。

刀を抜いて立つ男の前では些かのんきがすぎる考えであつて動かない理由としては不適格すぎるが。

けれど時は動いている。朝露が動いていないように見えていても確かな変化は生まれていて、いずれ地に落なければいけないように。

時は、波紋を打ったかのように動き出した。

男の熊のように大きな身体が少女が気づいた時にはまるでキスをするかのような距離まで近くにあった。

手には真つ直ぐな太刀が少女を貫こうと肉薄していた。

男の身体は熊のようであったがこれは冬を後にした熊だ。冬眠から目覚めて一番気が立っている。人を殺してまで食い散らかす人喰い熊。

そんな風に考えた。

誰が？

少女ではない。

男の方でもない。

通りすがりの姫君がだ。

「この街で殺しをしようなんていい度胸じゃない」

ゴツ!!

鋼を素手で殴りつけたような音がその場に響いた。ビュンビュンと空を斬る音が生まれ次にはその場を支配していた足を地面に縛り付けていたかのような寒さは消えていった。代わりに燃えるような熱が空気を震わせる。

「殺すわよ、畜生風情が」

吹雪をものともしない強き一輪の華が真っ赤に咲いた。

第四十話 否定者と人斬り

◇5◇

三日月の光が二つの刃に反射してそれぞれ異なった光を生み直す。一方は青白く死人のような冷たさを孕んだ無機質の光、もう一方は陽炎のようにゆらゆらと蠢き虹のような七色へと絶えず変質する鋭い光。二つの光はまるで対照的で真逆の印象を受ける光だった。そんな光が相對してこんなにも間近にあるのはある種異様な光景と言えた。

「あなた、〈西風〉の娘よね、動ける?」

「え、あ…っそうじゃないっ!今すぐ人を呼んできてください!私なら大丈夫ですから!」

「強がりなら止めときなさいな。あなたが〈西風〉でどれだけ慣らして、どれだけ腕が立つと信賴されてるかは知らないけどあなたじゃ目の前のアレになんて勝てっこないわよ。」

そもそもあなた、震えてるじゃない。」

少女はここで初めて自分の身体の異様さに気づいた。さっきまでの凍ってしまいそうな寒さはもう感じないというのに身体が震えて止まらないことに。勢いあまって尻餅をついてしまったと思っただけれど立ち上がる事ができないことに

「大丈夫。」

あなたのとこのギルマスほど守るのは上手くはないけれど、必ず守ってあげるから。あなたは念話で助けを呼んで。

あとは、そうね…、姫に見惚れて助けが来るまで待つてなさい」

片手でくるくるともてあそぶようにしていた大きな薙刀を両手できり構える千葉。それと同時に薙刀からリズムをとるようにしてもれていた炎が気迫を具現化したように大きく膨れ上がった。

その大炎に感化されたかのようににはかるように距離を取っていた男が吠えた。男は咆哮と同時に凄まじい速さで距離を詰めその蒼白

の太刀を力の限りと言わんばかりに荒々しく振るい、それに合わせて千菜も太刀に向けて薙刀をぶつける。

本来ならこれで相手は吹き飛ぶ。

一撃で戦闘不能かそれに近い状態に持ち込むことができる。それだけの攻撃力を千菜は持ち合わせている。防御力をすべて犠牲にした上での対人ではなく対陣用の攻撃力が千菜の唯一無二の持ち味なのだ。

だが、男はそれに耐えてみせた。

全力ではないにせよそれでも十分に異常と断じて偽りなかった一撃ではあった。

それでも男の太刀を止め身体を宙に浮かせる程度にとどまったのだ。千菜の目が大きく見開かれるが初めての経験に隙を生むほどの動揺を表に出すことはなく薙刀から溢れる紅の炎の鞭で追撃してみせた。

男は顔面の上半分を覆う白い仮面のせいで余裕があるのかどうかも窺い知れず、どうやってか氷の壁を発生させて炎の鞭を防いでみせた。そのまま氷壁を蹴り倒し千菜の方へと無理矢理押し込み距離を詰めた。

「ちっ…めんどいのよ下郎が」

思わず千菜から似つかわしくない舌打ちが漏れる。

薙刀という武器の特性上どうしても近距離はやりづらくなる。近距離での戦い方も石付きの方で薙ぎ払うなどもちろん存在するが氷壁のせいでいかんせん対処としては十全足り得なかった。

そこで千菜は薙刀での攻撃を放棄し全力での蹴りを放った。刃先を男に向けたまま両手から宙へと解き放たれた薙刀は炎を放出しながら自由落下を始め、無手の体勢となり間合いが不得手から得手へと変化したところからはなれた筋力値極ぶりの蹴りは氷の壁を貫きながら男の身体を確に捉えた。

(浅い…咄嗟に自分から当たりに入ったわね)

衝撃が十割伝わるポイントから六割で済むポイントまでわずかではあるがずらされた。戦闘的センスや反応速度が本当に獣のそれだ、

がその分攻撃の粗さが目についてしまう。

まるでそれは力に酔っているように力を誇示しているかのよう
に千菜は感じた。

「まったく…衛士はなにしてる。働け税金泥棒」

「衛士はこないよ」

「なに喋れるの？下郎」

「…」

「姫が気を回して口を聞いてやったんだから答えなさいよ、言葉を発
することが出来る畜生なんて珍しいのだからもつと吠えてみせなさ
い」

「…」

「…いいわ、そのまま最後の言葉を言う間もなく死になさい」

千菜の右手が宙を不規則に踊る。〈冒険者〉特有のメニュー操作の
動きだ。人差し指が最後の舞いを終えた時、無から一本の薙刀が現れ
た。その薙刀は千菜が左手に持つ薙刀と比べれば半分もない程に短
いその長さは刀と比べても変わりない長さかもしれないなかった。

「短いからって舐めない方がいいわよ。左と比べて三倍長い方以上は速い
から」

熱線

片手で振られたにも関わらずその一閃は男の刀を持たない左手の
方を容易く焼いてみせた。元々オーバーキルといって不足すぎる火
力が二つに分散されたことでやつとオーバーキルが相応しいレベル
まで落ち着いた。理不尽が×2されてやつと言葉として表せるよう
になった。

焼かれた傷を氷がみるみる覆っていき塞いでいく。しかし男は明
らかに警戒のレベルが上がっていた。右手から放たれた熱線への警
戒でさらに分厚い氷の壁がいくつも正面から相對しないようにと生
まれていった。そのうえ千菜の周囲だけに吹雪まで吹き荒れ始め視
界が悪くなっていく。

「どれだけ警戒してくれても構わないのだけれど、街つてのは人がいるから街と呼ぶのよ?」

千菜がそんな風にして妖艶に笑ってみせたときにはもう遅かった。

「僕の大切な人たちに、なにをしている」

この死合の場に新たな影が突風のように乱入してきた。黒髪の武者ポニーテイルがたなびき大男がその影に気づいた時には既にその影は抜刀していた。

「斬っ!!」

不意打ちからの一撃は大男を容易く吹き飛ばし建物の壁をぶち抜いてその巨体を見えなくさせた。

「ソウジロウっ!!引くわよっ手頃なゾーンへ今すぐ飛び込む!」

「駄目です。あれはここで殺します」

「守るべきものを忘れるなっ! 仇討ならこの子が迷惑を受けないところで勝手にやれ!!」

千菜の怒声に刀を抜いていたソウジロウは千菜がかばうように一歩も引くことなく守っていた少女へと視線が動く。彼女は今になっても惨めに尻餅をついた体勢から立ち上がることはできていなかった。その表情はあてられた恐怖か助けがきた安心感からか涙でその顔を歪めていた。

「…スミマセン、熱くなってきました」

よどみなく力を込めていた刀を納刀し瓦礫に埋もれているであろう大男の方へとは視線を向けずにソウジロウは駆け出した。千菜もそれに合わせて少女を脇に抱えこんで駆け出す。

「謝る相手が違うわ、この子に謝りなさいバカヤロウのウジヤロウ」

「すみません。キョウコさん、あなたの為に動くはずを私情を優先しました。なんとお詫びすればいいか」

「今そんなことを話してる場合か、口より足を動かさなさいアホヤロウ」

いてぞらの空の下、二人の剣士の奮闘により少女は救われた。けれど純粋な殺気にあてられた彼女の身体の震えは自分を救ってくれた二人の剣士が傍にいる道中でも仲間たちの待つギルドホールにたどり着いても止まることはなかった。

そして未遂に終わりはしたもののこの一件からアキバの街を脅かす殺人鬼の噂が駆け巡ることになる。

◇6◇

〈西風の旅団〉ギルドホーム応接間

「ちよつとソウジロウ、この服なんかならないわけ？」

「我慢してください。千菜さんが着ていたのは雪のせいでびしょびしょじゃないですか」

「わたしが言っているのは服の種類についてなんだけど」

千菜が身にまとっているのはクインが普段履いているような丈の短いホットパンツに黒のタンクトップの上から翠のカーディガンを羽織り、羽織ったカーディガンでお情け程度に肌の露出を避けたかっこうをしていた。

「すみません、ウチには千菜さん並に背の高い人はナズナくらいしかいなくって、ナズナに聞いたらこれしかないって」

「あの人もこんな薄着しか着てないのね…」

千菜としては普段着でこんなかっこうをしなくもないので構いはしないのだが、構いはしないのだが…

「アンタの前でこのかっこうは危機感を覚えるわ」

「僕、べつに変なことはしませんよ？」

「知らない女の子の匂いがするにゃー!!」

千菜がソウジロウに向かって怪訝な目を向けソウジロウがそんなことできるわけがない、と否定の動きをみせたとき、ソウジロウと千菜の二人しかいない応接間のふすまが勢いよく開け放たれ一人の女が弾丸のように飛び出してきた。

弾丸は一直線に千菜へと突進し、ルパンダイブのように飛びついた

ところで千菜にヒョイとよけられて畳の上を顔面から着地し転がった。

「千菜ー！こっちに変態くりのんが来なかったか!?無事か!」

続けざまに今度は浴衣をはだけさせながらナズナが飛び込んできた。男のソウジロウは目のやり場に困りすぐに後ろを向いた。

「なに?これのこと?」

「それだ!千菜いいか、それに不用意に近づくんじゃないぞ?それは見た目は女でも中身は中年のおっさんだ」

「ぐへへへ、花のいい香りだなく。しかも肌もスベスベだ」

いつの間に復活をはたしていたのか変態くりのんが千菜に背後から抱きついて体をまさぐり始める。その手つきのやらしさと千菜の匂いを嗅いで碎ける表情はまさにおっさんのソレだった。

それにさして動くこともなく千菜はくりのんに体を弄ばれたまま体の向きを翻す。

「手癖の悪い娘にはこの手に限る」

両の手をくりのんの頬に添えてりんごのように赤い唇に自らの唇を押し付けそのまま舌まで押し込んだ。

「んきゅっ!」

「なんですか?ナズナ、もう振り向いても大丈夫なんですか?」

「いやっダメだよ!ソウジは未来永劫振り向いちゃいけない!」

「未来永劫ですか!」

「んゅーんーんっ」

ソウジロウが後ろで起こる行動に違和感を感じてナズナへと質問を投げかけるがナズナはソウジロウが後ろを振り向かないように押さえ込んだ。いささかこれは男に見せる光景としては刺激が強すぎる。

そして最初は驚きつつも嬉しそうな顔をしていたくりのんの表情にも変化が現れ始める。舌使いがだんだんとは激しくなっていき呼吸ができずに息が続かなくなってきた。

そして四十秒としないうちに、くりのんはおちた。

「ぶはっ…ああー美味しかった。ソウジロウ、もう振り向いてもいい

わよ」

「なんですか？なにがあつたんですか？

…つてくりのんさん気絶してるじゃないですか!？」

「幸せそうな顔でしょ？死んでんのよ？」

「死んでない死んでない。昇天はしてるけど」

心底幸せそうな逝き顔を晒したくりのんがそこにはいた。

「…千菜、アンタあんなのどこで覚えたんだい？」

「兄さんにやってるうちに覚えたわ」

「うわっ…うわあ…、今のは本気で引いたわ…。アイツついに自分の妹に手を出したのかい」

「べろちゅーくらい兄妹なら普通よ。まず兄妹でのキスなんてキスのうちに数える方がバカみたいじゃない」

ケロリとなんともなしにボケてみせる千菜から満足気に彷彿とした表情で気絶するくりのんを受け取りつつ問を投げかけるナズナ。無駄といっても差し支えない特技の出処を千菜は自身の兄とデーブなキスをしていると聞いてはいけないようなデーブな回答を返した。

「あんまり誰でもそんなことするんじゃないよ？大切なものはきちんとしてとつときな」

「ふふ、大丈夫。姫のファーストキスは兄さんにあげたもの」

「そういうところを言ってるんだよっ!？」

顔を赤らめてさらに爆弾をデッドボールさせる千菜にナズナは兄姉との関係に戦慄を覚える。この兄妹、姉妹の関係はパンドラの箱よりも危険かもしれない。

ナズナはくりのんを抱えて応接間を後にする。ソウジロウからもともとそう言いつかっていたからだ。くりのんなんていうイレギュラー^{変態}を除けば〈西風の旅団〉メンバー全員にギルマスとしての立場からくだされた命令だったからだ。守らないわけにはいかない。

「千菜さん、あのまま続けていれば勝てましたか？」

「は？なに、さっきのこと？」

「はい。もし後ろにいたキョウコさんを僕が連れて逃げていけば、あの男に勝てましたか？」

唐突なソウジロウの質問に千菜は呆れた表情をして羽織っているカーデイガンの右袖を捲る。するとめくられたことで見えるようになった千菜の右手には嚴重にぐるぐると包帯が巻かれていた。

「見なさい。最初にアレを殴りつけたときに拳にヒビが入ったのよ。いくら無理矢理割って入ったからってヒビが入るわけがないから、多分カウンターを食らってたわね。アレの反応速度は異常よ。」

ふた振り目を出したのも早く決着をつけたから抜いたんだけど…、右手にヒビなんか入ってたものだから狙いもブレブレ。刀を持ってた右手を狙ったのに反対の左手に当たったわ。初撃で仕留めきれなかったからあのあとは多分通らなかつたでしょうね。片腕じゃ当たり前だけど威力は半減以下であの氷の壁を何枚も貫通できたとはとても思えないわ」

「そうですか。珍しいですね千菜さんがあつさり負けを認めるなんて」

「あんなもの勝負に成り立ってすらいないわよ。」

見なかつたわけ？アイツのHPバー、わたしの拳と蹴りと熱線を受けても一割いくかいかないかくらいしか減つてなかつたわよ」

全部中途半端な状態での攻撃ではあつたがそれでも千菜の火力だ。あれ以上続けていてもダメージの入り具合に対して消費の割合が釣り合っていないかつたのだからいづれついていけなくなっていただろうと千菜は考えていた。

「言っておくけどアレに挑もうなんてやめときなさい。そして姫の助力なら諦めなさい。そこまでしてやる義理はないわ」

「奏さんも同じことを言うでしょうね。ただ今回は場合が違います。今のうちに手を打っていけばもしもの時にまだ間に合うかもしれないし、それ以前に身内に手を出した奴です。」

斬り捨てなければいけないでしょう」

「なぜ兄さんの名前が拳がるのかは知らないけど、これは〈円卓会議〉

が動くべき案件だわ。わきまえなさいこの異常者」

「千菜さんは強いですね。強すぎて甘さなんてちつともない。『わたし』の時は優しいと聞きますけど、僕も優しい方と一度お話してみたいです」

「……甘さなんてものはわたしの理解の外。優しさと甘さは違うわ。あんたにはなんだかんだで優しくしている気がしていたのを後悔してたりしたんだけど、そうでもないみたいでよかったわ。甘えたいなら兄さんにも擦り寄ってなさいよ」

「そういうところは奏さんとは大違いですねえ。」

あの人なら千菜さんと付き合いたいなんて言えばそれこそ「ぶっ殺す」なんて息巻くでしょうに」

「言わないわ。」

言わないわよ。兄さんは脅し文句でもジョークでも「殺す」なんてことを人には言えないあまちゃんよ。

兄さんのことは姫も『わたし』も結婚しても構わないくらいに大好き、いえ愛しているけれど、絶対にできないの。だってあの人の甘さを『わたし』も姫も理解なんてすこしもできやしないんだから」

価値観が違いすぎてそこだけは話が合わないわ、千菜は寂しそうにそう口にする。お互いに大事に想い合っているからこそさらに目立つ相容れることの出来ない部分だった。

「あの人は内側に無遠慮に甘すぎて内側をきちんと見えていないの、弱さを受け入れすぎていて外側への警戒にしか意識がない。」

だから大事なことに気づきやしない」

「兄妹であることが一番の障害だということ声を大にして言うべきなんでしょうけど、それをう踏まえてもなんだか理由が一番にならなさそうです。」

僕は好きですけどねえ。奏さんの無警戒の甘さは。助けがいないがあのじゃないですか」

「あなたのそういうところが嫌いよ。まるでわたしを見ているみたい

で気持ちが悪い」

「そうですか」

「そうよ」

ソウジロウは気持ちが悪いと罵られても満足げに笑みを浮かべていた。

彼女が自分のことを嫌う態度を見せるのは同族嫌悪というのが一番にあるのだろう。似たもの同士だという共感性はソウジロウも感じていた。けれど同族嫌悪を抱くというのは自分に対して不満があるがゆえにの結果なのだ。自分に不満がない人間が自分と似た人間を否定するわけがないのだから。

それはひとつの人間の弱さ。彼女は弱さもきつと理解できている。まだ自分では気づいてはいないのかもしれないけれどいずれ気づくだろう。そうなれば自分にも『わたし』で向き合ってくれるかもしれない。

それがとても楽しみでソウジロウはひとりニコニコと笑うのだった。

「仇討ちはします。これはへ西風の旅団へギルドマスターとしての決断です」

「…姫は知らないわよ」

ぷいっとそっぽを向く千葉を見てソウジロウはまた笑みを浮かべるのだった。この女性はどうしようもないほどに素直じゃないと

第四十一話 いい人ですよ？胸焼けするくらいに

◇7◇

秋も終わりを告げて陽の光も頼りなくなってきた頃——木枯らしがくるくと舞い乾いた空気が肌に触れる今日この頃、

ミノリは最近アルバイトとして行くようになった〈第八商店街〉のギルドハウスへの道のりをシロエのお下がりの羽ペンとインク瓶をカバンに詰めて歩いていった。今日は週に三回あるアルバイトの日なのだ。

乾いた冷たい風はミノリの髪を揺らそうとするがそれをミノリはきめ細やかな綺麗な手で押さええて髪が乱れるのを拒む。現実世界の頃なら冬になればハンドクリームやリップクリームのような肌の乾燥対策アイテムも持ち合わせていたものだがこの世界では必要性の薄い品物でしかない。〈冒険者〉の体はそんなもの必要としないくらいに丈夫なのだ。

ミノリとしては、というよりも女性〈冒険者〉全員がそれを嬉しく思う反面、現実世界に帰ったときに危機感が薄れてしまっただけのことを危惧しないこともないのだろうけれど、ミノリはそこはできるだけ気にしないことにしていた。

そんなくだらないことより今夜の晩飯なにがいいかミノリも考えるよ、なんて言ってしまうトウヤの言葉には一応の女の子としては苦言を呈したいけれどもたしかに不確かな先のことよりも今日の前にあることを優先した方がいいこともある。少なくとも今回の件はそういうものだよ、とミノリもたいしてトウヤに文句をいうことはしなかった。

そんなことを考えながら歩いているとミノリは見知った顔に出くわした。否、見知っているであろう姿をした格好の人が前方から歩いてくるのに気が付いた。

痛々しいほどに真っ赤な色をしたミノリよりも少し背が高い程度の人影が、たくさんの商人たちが闊歩するこの通りの人込みの中でも確かな存在感を放っているのだ。その人影にミノリは小さく手を振

りながら声をかけた。

「クインさん、おはようございます」

「んにゃ、お、誰かと思ったらミノリちゃんか。おはよう。」

その様子から察するに、第八商店街でのバイトに行く道中かな？」

「はい、そうなんです。今日も大当たりです」

ミノリに限らずトウヤや五十鈴、ルンデルハウスら年少組の面々がクインと出先で出会ったときに行う行き先当てクイズはクインの面白半分から始まり何度も繰り返すうちに恒例のものとなっていた。

まるで、シャーロック・ホームズさながらに鋭い観察眼をもつてして行き先を言い当ててしまうクインの推理を年少組を毎回楽しみにし、そんな少女少女の羨望の眼差しを受けることにクインはたいそう気を良くして今でも会うたびにこうして出合つてそうそうに言い当てるのだ。

「ミノリちゃんの服装から察するに、君たち年少組が一番に外に出る理由になるレベリングなどの狩りに出るためじゃないとわかる。」

そしてこの冬の寒さの中でいくらそのあつたかそうなカーディガンを着ていたとしても長時間外を出歩くとは考えにくい。これに、やん太殿やシロエ殿らに頼まれたおつかいの類ではないことがわかる。

すると、どうだろうプライベートなお買い物だろうか？こんな朝早くから？一人で？まあ、ありえなくはないだろう。女の子だし、秘密のひとつやふたつあつたつて不思議じゃあない」

わたしも片手じゃ足りないくらいには秘密持ちだしな、主に人の弱み的な秘密だけれど、と澄ました顔でえらく恐ろしいことを言っているクイン。

「でもさっき長時間のおでかけはないと結論づけたばかり。こんな朝早くから一人で面白い物つてのはいささか不自然になつてしまう。」

それでは、ほかにどんな選択肢があるだろうか？この先にある生産系ギルドの多くが拠点を構える商業通りに」

そこからは聞いてみれば大したこともない答えをクインはさして偉ぶることもなくミノリに開示する。

大きな銀色の眼をパチリでウインクして見せながら人差し指をピンと立てるその大人びた動作はどうにもミノリからしてみてもあまり様にはなっていない。むしろなんだか可愛いらしい。アカツキよりは幾分もマシではあるが彼女も年齢よりは幼くみられるタイプのようだ。

「するとあらあら簡単〈第八商店街〉でのアルバイトだと気づくわけだ。そのほんの少ししかなかに入れていないそのバックからもそれは察することができる。それ、仕事道具のペンやインクが入っているんだらう?」

「お見事でした。」

ところでクインさんこそこんな朝早くにどうしたんですか? 商業エリアですからこの時間から空いている店はたくさんありますけど、お買い物ってわけじゃないですよ、^{マジックバック}魔法の鞆もお持ちじゃないですし大した手荷物もあるわけじゃないですし、朝ごはんでも?」

クインに言い当てられたお返しにとでもミノリも負けじと考えを巡らせながらクインを観察して考察する

「うーん、残念。このスプリングコート、^{マジックバック}魔法の鞆と同じ効果を持つたポケットが付いてるんだよなあ」

クインはにこにこ右手をコートの内ポケットに差し込むと中からひとつのりんごを取り出してみせた。

「わあ、すごいです。りんごが入ってたような膨らみなんてなかったのに! ドラえものの四次元ポケットみたいですね」

「うん…そうだな…、わたしの胸には、膨らみがないな…」

思いもがけないところで被害妄想たくましく勝手に心理的ダメージを負ったクインは差し置きミノリは珍しいものを見たことに素直に感嘆とキラキラとした純粋な視線をおくる。

「まあ、半分は正解だよ、商人つてのはわたしみたいな情報屋も舌を巻きたくなるような色んな情報に通じているからね、朝ごはんがてらの情報収集の一環。人探しをしていたりするんだけど、どうも見つからなくって」

「こんな朝早くからですか」

「職業病みたいなものだよ、なんでもかんでもつまらない憶測を巡らせるのが仕事みたいなものさ」

性格的にそういう質なのだろう、普段からいららない妄想で頬を真っ赤に染めている女が言うと言得力が違う。

「それはそうと、ミノリちゃんはそろそろ仕事場に向かった方がいいんじゃないかな。引き止めてる私が言うのもなんだけど」

「あつ、そうですね。また今度ゆっくりと」

「ああ、お姉さんとしては狩りにでも誘ってくれると嬉しい」

心なしかお姉さんという言葉に強いアクセントを加えながらもクインはミノリを引き止めなさないように自分からぶらぶらと手を振って離れていく。ミノリはそんな堂々とした後ろ姿に一礼返すと自らの職場へと少しだけ早足で歩みを向けた。

◇ 8 ◇

「ん。やあ、ミノリちゃん。おはよう、今日もよろしくね」

「おはようございますカラシンさん。よろしくお願いします」

廊下で一番に出会ったのは〈第八商店街〉のギルドマスターでミノリの直接の雇い主カラシンだった。大きな帽子をトレードマークにする彼もちょうど書類を持って仕事場に向かう途中だったらしくミノリも彼に並んで廊下を歩いた。

廊下を歩けばもちろんいろいろな人とすれ違う。けれどみんながみんなミノリを見るたびに元氣よく挨拶をしていていた。〈第八商店街〉ではミノリは軽いアイドル扱いなのだ。ミノリはそれが恥ずかしくてしようがないがいけれど、メガネをかけていない方の先生のおかげでミノリが〈第八商店街〉にアルバイトをしにくる前からミノリのことを知っている人がわんさかといたのだから彼からの気遣いだと無理やり思つて納得することになっている。

弟子として認められて自慢までされているのは弟子冥利に尽きる話なのだ。

「あー、ミノリちゃんおはよー」

「おはようございます、タロさん」

生産系ギルドらしい台車も悠々と通れる広い廊下のT字路で出会ったのはカラシンの側近として大量の仕事を捌く毎日をおくるミノリと同じアップレンティス〈見習い徒弟〉の少年タロだった。いつもどおりに間延びした口調でミノリに挨拶をおくる

「おいおいタロく。普通はギルマスに先に挨拶するもんじゃないのか」

「ギルマスだって、ミノリちゃんとシロエさんがいたらどつちに挨拶するか考えたあとに立場的にシロエさんから先に挨拶するでしょう？それといっしょですよー」

「なるほど…っておい！」

優先度が足りません、暗にそう伝えているようなものだった。

そんな軽口を言えるのもタロとカラシンの信頼関係があつてこそのこと。大手のギルドの苦労とか雰囲気とかは少数ギルドのログ・ホライズン〈記録の地平線〉にいるミノリには少しわからないけれど〈第八商店街〉もとてもいいギルドだということくらいはミノリにもわかる。

二人の掛け合いにくすくすと笑いながら廊下を歩いていく。すこし歩いたところでいつもの書類が溢れかえる執務室げと続く片開き扉の前に行き着く。

「さあーお二人共、さっそくお仕事に取り掛かっちゃいましょう！今日もお仕事山積みですよ」

今日も変わらずミノリの二人の先生に追いつくための精進の一日が始まるのだった。

「いやあ、ミノリちゃんが来てくれるようになってから仕事のはかど
り具合が段違いだなあ」

いつそほんとにウチに来ない？カラシンが冗談めかしてそんなこ
とを言う。いや、アルバイトの日の度に口にするからけっこう本気も
混ざってるのかもしれない。

「ダメですよ」ログ・ホライズン「記録の地平線」は人数が少ないからわたしみたいなの
でもいなくなったら大変なんですから」

「そっかあゝ残念だなあゝ」

毎度ミノリにやんわりと断られているクセにめげない男である

「ダメですよギルマス。無理な勧誘をするなって釘を刺されている
じゃないですか。ミノリちゃんの意味を最優先にするのがアルバイ
トにだす条件だって言われてるんですから」

見るに見かねたタロが自らのギルマスに意味があるのかどうかわ
からない釘をさす。まさに糠に釘という印象が抜けきれないが。そ
してなにをおもったのかなにかを思い出した様子で、

「そういえば、最近奏さんを見ませんね」

「バカっ…タロっ、それはっ」

「はい。奏さんは今アキバの街にいませんよ。自分探しの旅をしてく
るなんて言っ出てっちやいまいた」

「え…、奏さんアキバにいらっしやらないんですか!？」

あー、それは…ミノリちゃんごめんね。知らなかったとはいえ」

「?別に気にしてませんよ」

シロエの方はともかく奏がアキバの街を離れていることは口止め
されていなかったしカラシンも知っていた風なので別に隠しだてす
るほどのことでもない。

タロの無自覚な発言を受けてもミノリはあっけらかんとした表情
で隠しだてすることなく答える。

「さっぱりしてるなあ。ミノリちゃん寂しかったり困ったことがあつ

「たら遠慮せず僕たちにも相談してくれて構わないからね」

「ありがとうございます、カラシンさん。でも全然寂しくないですよ、小学生じゃありませんから。このくらいのことです泣いちゃったりしませんよ」

「いやいや、それでも君はまだ中学生だろ。なんでそんなに達観してるんだ。」

「こんな異世界にいきなり連れてこられてへハーメルンなんていう悪徳ギルドに監禁されて、そこから救い出してくれてこの世界での居場所をつくってくれたうちのひとりがいなくなったら普通はすこしは思うところもあるだろう。」

「カラシンのそんな考えをミノリは表情から汲み取ったのか、それとも偶然たまたまなのか持つていた羽ペンを置いてにつこりと笑って語りだす。」

「わたしなんかよりも、心配なのは奏さんの方ですよ。」

「奏さんはすつごく寂しがり屋な人ですもん」

「奏さんが寂しがり屋？あの人がかい？」

「ミノリの言葉にタロは脳裏に奏を思い浮かべる。」

「いい笑顔で笑っている、下駄をカラリカラリと鳴らしているのまにやら部屋に潜り込んでいてカラシンの椅子に座ってカラシンの帽子をなにやら弄んでいる」

「いや、ないでしょう…」

「タロ、なんで僕の顔を見ながら言うんだい？」

「心辺りがいいなら知らない方がいいです」

「奏さん、わたしに手紙を残していったんですよ。わたしだけじゃなくてクインさんとかマリエールさんとか、シロエさんとかにも、とにかく色んな人に手紙を残していったみたいなんです。」

他の方たちの手紙の中身までは内容はわかりませんが、わたしの手紙にはまず、いきなり姿をくりましたことへの謝罪がたくさん書いてありました。

次に、これからのこと、自分がいつアキバに帰ってくるかだったり、理由が話せないことへのやっぱり謝罪だったり、わたしへの師事のことだったりそんなことを書いてました。

最後には、激励の言葉。恥ずかしいですから内容はちよつと伏せませうけどこれもたくさん書いてありました。

こんなのが、十枚近くの便箋に書き連ねられてて、おまけに神祇官カンナギの特技のコツとかまだ教えてもらってないことをまとめた参考書までついていました」

(重っ!!)

「正直重いですよ。ここまできると笑っちゃいます。

でもですね、わたし考えたんです。なんで奏さんはここまでよくしてくれるのかなって。

いろいろあれこれ考えたんですけど、結局は全部まわりの人に嫌われたくないからなんじゃないかって思ったんです。自分のすきな人たちに嫌われたくないから、直接理由を話さずにいなくなったりして臆病にこんな手紙を一方的に残したり。

わたしたちには優しくて尊敬しがいのあるお兄ちゃん、シロエさんたちには憎めない悪友のような存在を、にゃん太さんたちみたいな年上の人たちには少し手にかかるくらいの後輩を、そんな風に大好きな人たちにできるかぎり好かれるような存在であり続けようとしてるんだと思います」

実践できてるかはさて置いておいてですけどね、あのお兄ちゃんはけっこうドジですし、くすくすとすみれのように小さな笑みを咲かせながらそう語る。

人間大なり小なり誰かに好かれたいという願望は誰しも持ち合わせている。それは人間社会にいきる上でのがれられない感情だ。奏

はそんな感情が人一倍強いだけ。けれど不器用だから思いつく限りの誠意の見せ方をするからすこしだけ度が過ぎてしまう。

人はひとりじゃ生きられない。

ミノリは奏がそんな風に寂しがり屋で人に好かれたいためだけにただただ正直なかわいい人なんだと思った。

「そっか、あの奏君が寂しがり屋かあ。考えたこともなかったなあ」

「あ、もちろんわたしの勝手な思いこみかもしれませんが。ただそんな気がするっただけで」

「いやいやきつとそうだよ、間違いない。教え子のミノリちゃんのことなんだから」

「えへへ、そうですね」

カラシンはニヨニヨと笑う。

ミノリが奏を心底信頼しているからいなくなっても大丈夫だとはつきりとわかったから。

どうにもあのいつも笑っているカラシンの知り合いは仲間に心配をかけるのが嫌いらしい、不器用なりにあの手この手と気を回してもそれが空回りしてしまっている。

今度美味い屋台にでも連れて行って帽子へのイタズラについての言及ついでに話を聞いてやろう、世話好きすぎて彼女ができないカラシンはそういう風に思うのだった。

「さー！お仕事の続きしちやいましょう。カラシンさんはすこししたら〈円卓会議〉の定例会ですよね？」

「おっと、そうだった！」

「さあてもうひと踏ん張りしますか」

第四十二話 鬼が出るか蛇が出るか

◇ 8 ◇

「またシロエのことを考えていたのですか？」

「……………」

「そうなんですね？」

「あの人のことを話さないで」

アキバの街で一般的な〈螢光灯〉と違いミナミの街で主流な〈狐火〉の薄ぼけ揺らめくこよしかできない炎の光は広く豪華な造りをしたその部屋の全体を照らしきることはできず、そんな暗がりの中で身を丸めた黒髪の女に強い光を与えていたのは無駄に大きな両開き扉から差し込む廊下からの部屋の光とは対照的な明るいきらびやかな光だった。

そしてその光を背に受け長い黒い影を濡羽に踏ませている女は冷たく微笑んだ。

濡羽が毎夜見る姿のない黒い影たちとのいつまで続くかもわからないにらみ合いの最中にインテイクスが姿をみせることはそうはなかった。むしろ〈西の納言〉という大仰な衣を濡羽が着込む時にしかこの女は濡羽の傍へと姿を見せるようなことはしない。従者としての装いをしていてもこの目の前の女が濡羽の言うことを聞いてくれたことはただの一度しかない。

「無駄ですよアイツはただの能力が高いだけのノイズですから。潔癖のアイツにはわかるんですよ、貴女からするドブの臭いが、醜くて吐き気を催すだけの本当の姿を見抜くんですよ。」

あなたが手に入れることはできない男です。あれはどことも繋がれない人間です。いつもそうだった」

濡羽の視界に悔しさが滲んでいく。それでも目を見開き悔しさを悟られないようにインテイクスを睨みつける。

「…なんですか、その目は。」

アキバになんか行つてあの化物になにか言われましたか。あなたの味方になりますとでも甘い耳触りのいい言葉でもかけられましたか」

「ダメですよ。あれは人じゃないんだから。あれは真正正銘の化物ですよ。あなた嘘まみれじゃないですか。あなたにはこれっぽっちも本当のことなんか無い」

「でもねえ、あれもあなたと同じで嘘じゃないんですよ。人の深いところに無断でズカズカと土足で踏み荒らすくせして自分の内側を見せることなんてこれっぽちもしやしない。そのうえ騙して悪気もなく無自覚にヘラヘラと笑うんですから。」

人として大切なものがどうしても欠如してますから、貴女と一緒に。薄汚れておぞましい、見るに耐えません」

告げられるのは否定の言葉。

奏のことをインテイクスは名前と呼ぶことをしない。ただ化物と、心底毛嫌いするように、口にすることすらも気分が悪そうに、ただそう告げる。

濡羽は幾度とことなく聞いてきたその言葉を信じはしない。彼の姉は言った。彼の中心は彼の“好きな人”を中心に全てが回っていると、だから、彼の何の根拠もない言葉を濡羽は信じられる。それに

「それなのに、なんですか!?!わたしへのあてつけのつもりですか?」

あの化物をここに呼ぼうだなんて、わたしへの嫌がらせのつもりですか?」

それでもにらみつける濡羽の耳をインクティスは指先でひねるようにつまみ上げた。

「だからアキバへ行くなんて困るんですよ、濡羽。自覚してください。あなたのサロンだった時とはもう違うんですよ。このP l a n t

hwyadenは。あなたはデク人形を沢山集めてあなたのお城を作る。わたしは今度こそヤマトサーバのすべてを手中にする。ねえ、濡羽。そういう約束ですよ？」

濡羽の望み。濡羽の願い。

それは自分の居場所をつくるというだけの些細な願い

どんなことがあっても二度とあの場所だけには戻らないための居場所

そのために濡羽はインテイクスと契約を結び今がある。

〈Plant hwyaden〉は濡羽の城。それは濡羽を慕うもので囲まれた賛辞と消えることのない無数の明かりで包まれた不夜城だ。

「だから、言ったでしょう。判ってください。薄汚れた貴女と契約を結ぶのは私くらいだって。

あなたは、あなたの居場所をつくるのでしょ？」

濡羽は心の痛みを押さえつけ取り繕い必死に頷く。

「……だったら、その目を止めなさいっ」

振り上げられるインテイクスの右手

すぐにくるであろう衝撃に備えるために濡羽は目を閉じるが、その衝撃がくることはなかった。

そっと目を開けたところで濡羽が見たのは振り上げられたインテイクスの右手をヘラヘラとした軽薄そうな笑みを浮かべたKRがガツシリと掴み止めているところだった。

「おいおい、インテイクス。今日はずいぶんと元気いいじゃないか。ただふざけて暴力ばかりふるつてると友達に嫌われるぞ？」

「なんのつもりですか？」

「いや、ここ無駄に広いじゃん。散歩するつもりが迷っちゃってさー、そしたらまたまここに出くわしちゃったわけよ。さすがに見て見ぬふりなんてできないっしょ？」

「ヒーロー気取りですか」

掴まれた腕を強く振りほどき磨きぬかれた銀のナイフのように鋭く切れる剣呑な目つきで睨みつけていた対象を濡羽からKRへと変えるインテイクス

「違うね。」

うら若い娘さんが難儀しているとあっちゃあ、穏やかじゃないだろ。それに『誰かの代わり』にされた挙句、八つ当たりされて身に覚えのない意趣返しをされるのはあんまりだろう。

——それだけさ。

んじゃ、せっかくだしお姫様に夜の散歩に付き合ってもらおうかな」

「……」

道化じみた軽い足取りでインテイクスをするりと避けたKRは濡羽の腕を掴んで体を引き上げた。そのまま濡羽を引きずるようにぐいぐいと部屋に光を差し込んでいる白亜の扉へと突き進んでいく。

その姿をインテイクスは黙って見つめているだけだった。

「ありがとうございます。KRさん」

「ああ、いいって、いいって。気にするなよ。俺も少なからずお姫様に聞きたいことがあったんだ」

「わたしに、ですか？」

KRはピエロじみたわざとらしい大きな動きで両腕を広げて見せながらバルコニーの冷たい手すりへと近寄り腰を掛けた。

「そう。奏に会ってみて、どう思った？」

インテイクスに対して言った皮肉交じりの軽い調子でいった言葉とは少し雰囲気がちがう彼の言葉を受けて濡羽は先日あった青年のことを思い出す。

「優しい方、でしうか…」

「本当に思ったことを言ってくれて構わないよ。別に本人の前でもあ
るまいし、アイツに言ったりはしないから」

「……子供みたいな方だと思いました。まるでなにも知らない無知な
子供。知らないからこそ優しくして妄信的、自身の存在を頑なに主張し
続ける、そういった印象を受けました」

「なるほどねえ、子供か。イイ線いってるよ」

このKRという青年と濡羽との接点ははつきりいって皆無である。

インテイクスやカズ彦と同じ古巣にいたことは知っているが普段
彼がなにをしているのか濡羽は知らない。〈十席会議〉の第十席に席
を置いていることは知っているから姿と名前も覚えたいし〈Plant
hlwayden〉へ入ってきてすぐに少しばかりの挨拶も交わし
た。

けれど、それ以降の接点は二人には一切なかった。濡羽はギルド運
営に興味はないために〈十席会議〉に顔を出すことはほとんどなかつ
たし。せいぜいインテイクスに出席しろと言われた時だけだ。けれ
どKRが会議の最中に起きている姿は一度も見ることがない。自前
のリゾートチェアに寝転がりアイマスクをつけて昼であろうと夜で
あろうと寝ているのが濡羽が知っているKRの姿だ。知っているの
は十席の中ではカズ彦としか友好的に関わりを持っている人間がい
ないことくらいだろう。

「わたしにそれを聞いてなにが知りたかったのですか？」

「やだなあ。そんなに勘ぐらないでくれよ。ただ知りたかっただけ
さ。」

百恵さんがアキバに行つたてことはアイツは絶賛大修羅場中つて
ことだろ。容赦も同情の欠片もなく叱りつけられてるアイツを応援
するために冷やかに行きたい気持ちでいっぱいだけどそういうわ
けにもいかないからこうして今の奏を間近で見てきたお姫様に聞き
に来ただけさ」

いい性格をしている。濡羽は思った。面白そうなことであれば人の不幸でも飛びついていきそうな印象を受ける。実際には濡羽のことを助けたり、空気を読んでアキバへと出向かない辺り根っからの善人ではないにしろ悪人ではないのだらうけれど、性格が悪い。

「KRさんは奏さんのことをどう思っているのですか？」

「それは、元仲間として？それとも一人の人間としてかな？」

「両方で」

「ふうむ。」

彼はねえ、惜しいんだよ。ヒーローに匹敵するくらいに魅力的なキャラクターをしているのにヒーローになりきれないんだ。まったく、俺からしたら羨ましくて仕方ないっていうのにさあ。

子供じみているというのは俺も全面的に同意だよ。あれはまだ子供みたいに可能性を十分に秘めたヒーローの有精卵さ。孵るかどうかは知らないし何が出てくるかもわからないけど」

「カナミさんという方は、どんな方だったのか知っていらしゃいますか？」

濡羽は聞いた。彼の姉が漏らしたおそらく彼の“好きな人”。目の前の青年がそこまで買う人間、自分も少なからず買っている人間が中心に据えるまでに惚れて心酔して熱狂する女のこと。別に嫉妬などをしたわけではない。これは単なる気まぐれ。

それを聞いたKRはここで初めて心底驚いた顔を見せた。

「それは…インテイクスや俺、奏との関係を知りたいってことなのかな？」

こんどは濡羽が驚かされる番だった。カナミという女性は奏だけではなくてインテイクスやKR共通の友人だったのかと、

「その感じだと、別に深いところまで知っているってわけじゃなさそ

うだね」

「百恵さんに名前だけを聞きました」

「凄いやつだよ。とんでもない人たらしさ。〈放蕩者の茶会〉が
デボイチェリ・ティーパーティー 放蕩者の茶会」

「人を従えるカリスマ性に長けていた、ということでしょうか」

「いやいや、あれは人を従えるなんて大仰なものじゃない。むしろみんなアイツの世話焼きで集まっていたくらいにいつでもいいくらいさ。」

あそこは放蕩者の集まりだったからね。インテイクスが上手く取り繕ってような悪評が広まらないで済んでいた。その程度にはいろいろやらかしていたんだ。

仲がよかったときかかれたら正直よくわからないね。いやつとか悪いやつはともかく合わない者同士は居るものだ。

でもね、みんな彼女のことを好きだった。お互い合わないもの同士でも不思議と揃って彼女のことを好きだったんだよ」

懐かしむように笑顔を浮かべて、空に浮かぶ黄金の月を捉えたKRは月に手をかざす。慈しむように愛でるように手の届きような月を撫でるような素振りをみせる。

「そして、奏はその中でも彼女を特に好いていた。愛していたなんていっても恥ずかしくないかもね。妄信して狂信していたよ。そこはインテイクスと一緒に。彼女との差がどこでついたのかはあえて言わないけれどね。」

楽しそうに笑うんだよ。アイツは彼女といるときにね。そして彼女のためにならヒーローの顔を見せるときが何度かあった。

だから俺は個人的には応援していたよ、ヒーロー同士の子供つてのが見たいって下心丸出しの気持ちもあつたりして応援してただけどね」

非道徳的なことこの上ないけれど、すごいやつ同士の子供はもつとすぐくなるかもしれないと思うと見てみたいと思わないかい？冗談めかしたようにそんなことを言うKRだが、そんな思想は彼が無邪気

なだけなのか、十全なまでに知識を持った大人ゆえなのか濡羽には判別はつかなかった。

「そんな単純な話ではないと思いますけど」

そんな単純な話じゃない。子供というのは持って生まれた才能だけで全てが決まるような簡単な生き物じゃない。環境や、身近にいる人間の影響、偶然の事故、教育、様々なことが真っ白な子供に色をつけていった一人の人間が出来上がっていく。

「わかってるさ。だからそんな怖そうな悲しそうな顔をしないでくれよ」

「俺は楽しみでしようがないよ。奏が本物になる瞬間を見ることはできないけれど、きっと彼は来るべき最後のクライマックスの舞台に必ず現れる男だからね。そこで繰り広げられる今までの全ての因縁に對して彼がどんな答えを出すのかは俺は必ず見届けると決めている。

だからそのために俺は出来る限りの力をつけて舞台を整えるためにここにいるんだ。

俺と同じように考えるやつがアキバにもいるみたいだし万事上手くいくと信じているよ」

愉悦に浸るように笑うKR

遠くない未来の一抹の光景が彼には見えているのだろう、いや、見えていないのかもしれない。見えていなければこそ、その光景が楽しみでしようがない。そういった表情だ。

今はまだ違うかもしれない。それとはかけ離れた存在かもしれない。その期待はただの古馴染に對するえこ贔屓なのかもしれない。

それでもKRは彼がヒーローになる存在だと信じて疑わないのだった。

第四十三話 異端児は礼を忘れない

「姫様、マリエール様たちがお見えになりましたよ。ご支度を早くなさりませんか、お待ちせしてはいけません」

「わかってるわ、エリツサ。葉はどこ？おじさまからもらった葉」

「二冊目の本に挟まっているじゃありませんか」

「ああ、ほんと。でも、この本まだ読み終わっていないの…、エリツサ、なにか葉の代わりになるものはないかしら」

「たしか、奏様から頂いた護符がこちらに」

「護符ってそんな使い方をしてもいいの？」

「ご本人がただの魔除けの意味合いしかないから葉替わりにでもして身近に置いておく方がいい、とおしゃっていましたので問題ないでしょう」

艶塗りを施された光沢を返すアキバ産の多機能機の引き出しのひとつから若草色の札に紅色の薄布を巻いた護符を取り出すエリツサ。その護符をレイネシアに向けて差し出す。

レイネシアは一度じっくりと札を眺めたあとに膝の上で開いている実用書に並ぶ小さな文字の行列を遮るようにして挟み込む。

「そういえば、最近奏様はお越しにならないのね、前までは一週間に一回くらいには来てたのに。寒いのはお嫌いなのかしら」

この間にも傍使えであるエリツサの動きは淀みなく動いている。レイネシアのアキバに来てから急増したクローゼットの中の衣装から今日の天気や、つい先ほど出迎えた客人たちの服装と被らないような衣装を選びとっていく。

「あら、姫様聞いておられないのですか？あのお方はかれこれ二ヶ月以上アキバの街を離れていらつしやいますよ」

「あら、そうなの」

そのいつもの光景を眺めながらレイネシアはなんの気もなしに感情もたいして込めずにそう流した。べつにたいした関心をもつわけでもなく。

「随分とあつきりしておいでですね」

「だって、べつになにか特別な感情があるわけでもないもの、そもそもおじさまがなぜあの方を私に紹介されたのかちつともわからないの。いい人だというのはわかるんですけど、これといってなにか特別な地位とかを持つてるわけでも、人間的に徳が高い方というわけではないでしょう?」

言い方は悪いが平凡、平凡とは言わないまでも秀才。貴族の中であれば、あれより才覚に恵まれた人間なら大勢いるだろう。彼はせいぜい中の上程度の才覚くらいしかないだろう。特別な点をあげるとすればレイネシアでもはつきりとわかるくらいに他の〈冒険者〉と違ってそんな風にわかりやすいということくらいだろう。

そんな彼に叔父はなにを見出したのか、そこはレイネシアも興味はあった。だから、奏が〈水楓の館〉を訪ねてきた時は出来うるかぎり話の奥になにか意味があるのではないかと注意深く聞いてみたりしたがわかったことはなかった。今はもうそこになにか意味をみつけようとしたことは諦めている。

そんなことに思考をさく暇があるならば少しでも仕事を終わらせてベットへ飛び込みレモンの風味がほんのりと香るクツキーを口に運ぶことに専念した方がレイネシアにとっては幾分も建設的だった。

「はい、できましたよ。皆さんがお待ちかねです。向かいましたよ」
エリツサのそんな声を聞いてレイネシアみんなが待つ部屋へと歩を進めていった。彼女の頭の中にはもう奏のことなどこれっぽちもなく、これから向かうレストランの料理のことで満たされていた。貴族の娘としては非常に不適切な思考回路ではあっても、彼女にとっては今それが一番だった。



「はははっは、それは違うよレイシア。」

彼はそんな簡単な人間じゃないさ、そう思うのならレイシアは見事に彼に騙されちゃってるってことだよ」

いつぞやにそんなことを考えたことをエルノへと話した。

パチパチと暖炉の火が燃える音が部屋を包む中、それよりも大きな

声でレイネシアの座るソファからは離れた椅子にに貴族らしからぬいささか行儀の悪い体勢で椅子に座る黒髪の青年が笑った。

窓の外で吹く雪の白を眺めながらエルノは片方の手に持ったキシュを口に運びながら立ち上がりレイネシアの向かい側へと歩き出した。その行動のひとつひとつが普通の貴族の行動からはかけ離れていて、貴族らしからぬ。

「僕は実に貴族らしくないだろうか？」

「はい、すごく」

「はっは、バツサリだなあ。お祖父様にも同じことを言われたよ、お前は貴族としては異端すぎる、ってね」

飄々とした態度はどうしても大地人の貴族というよりは〈冒険者〉の態度の方が近いものがある。

むしろアキバに駐在する自分よりも〈冒険者〉への理解や順応はひと月に二三回程度しか訪れることのないエルノの方がなぜか高いとレイネシアは感じていた。

マイハマでも彼は他の貴族とはどうしようもなく壁がある。まるで生来の根っこの部分が貴族とは別のところにあるようだ。

「僕の生まれた領地はひと月とかからず滅んだ。当時は原因不明の流行病だった。どんな医者も診ても原因はわからなかったし対応策も思いつくわけもなかった」

脈絡もなく語りだしたエルノにレイネシアは怪訝な目で返す。エルノのこういった脈絡なく始まる話はよく脱線する上に伸びきったゴムのヒモのように長いのだ。オチにどこか教訓じみたことをいつも持つてくるものだから散々と聞かされてきたレイネシアはうんざりとしてきていた。

「原因がわからないのに対応なんてできるわけがないだろうと当時は感じたものだが、いやはや医療つてのは凄いなだね、回復魔法や解毒魔法なんてものよりも確かな効果を見せてくれるアナログな方法もあるらしいことを後から知って驚いたものだよ。そのときほど医師に非礼を詫びたいと思っただけじゃない。

そんな病だったよ、ただ無慈悲に進行して広まっていき人が死んで

いく。

あまりにも感染速度と範囲が広いものだから近隣の領地からも総スカンくらちゃってさ、表向きは心配してくれるような素振りはみせてはいても明らかに干渉するな、俺たちに近づくなって意思表示をされちゃ、助けなんて求められないよね。

父上も母上もあの時ほど貴族という存在が打算で動いていることを実感したことはなかったろうに」

レイネシアのそんな表情にも気づいているくせにエルノはペラペラとお構いなしに話を進めていく。だんだんと話の筋が見えてきたところでどうやらあまり嫌々聞いていても楽しくないらしい内容になってきたことを察してせめてもとレイネシアは頼りない記憶の中から言葉を選びつつ返答を返した。

「…その事件はたしか、山に住んでいたドラゴンが死体になって動き出したことから山の水を汚染したことでの流行病だったとか」

領地の首都から近辺の村まで広く水源とされて使われていた河や井戸の水」が汚染されていた。そのことがわかったのはすでに被害は最悪といつていいほどにひろまり、あまつさえエルノの両親である領主夫婦さえも床に伏してしまうほどまで病状が悪化した時だった。

「まさに地獄絵図というやつだったよ。当時の領地の空は文字通り暗雲も立ち込めていた気もする。不幸が凝縮されたような光景だった」
エルノの両親はただひとりの息子であるエルノを領地からは遠くとも親交の深かったセルジアット公へと懇願し預かってもらった。領主夫婦から送られてきた手紙に物資を支援して欲しいとも、医師を派遣して欲しいとも書かずにただひとつとして息子を助けて欲しいと書き連ねられた願いをセルジアット公は痛く心をうたれエルノをすぐさま預かるように早馬を走らせた。

そのすぐ後には領地にそれだけを使い切ることのできる民はいないほどの物資が準備された。そして医師の代わりに投入されたのが、

〈冒険者〉だった。

「父様お母様も馬鹿だよ。領民よりも息子ひとりを優先させるなんて、人の親としても合格でも、領主としては失格さ、まさに愚の骨頂

と言えるだろう。

そこその歴史を持ったご先祖様の中でも一番ひどい領主だったろうに、ご先祖様には今頃草場の影で後ろ指を指されながら笑われているよ」

「そんなことは、冗談でも言うべきではないとおもいます」

レイネシアの強い意思が込められた目でエルノをじっと目を見据えた。レイネシアもわかっている彼が本心からそんなことを言っているわけではないことくらい。それでも、聞き手までもがそれに同調してしまつたらあまりにも領主夫婦が報われないだろう。

今、こうやってエルノというレイネシアにとつての兄のような存在と話ができているのは彼ら領主夫妻のおかげといつて何の問題もないのだから

「そうだね。これは私が悪かった真実でも口に出すべきではなかった。

話を戻そうか、〈冒険者〉たちはすぐさま持ち前の行動力をいかして原因を突き止めたそうだ。原因は全て山のぬしであるドラゴンがドラゴンゾンビになつたせいだ、ってね。私たちが一か月もかけて何一つわからず追い詰められていった相手に三日とかからず原因を突き止めてみせたらしい。

〈冒険者〉を派遣してくれたお祖父様さままだよね」

それでも言葉を訂正するわけではないエルノ本人にも思うところがあるらしく、絡めていた自らの両手を解いて立ち上がりレイネシアに表情が見えることのない強くなつてきた雪を覗ける窓の前へと立った。

「原因を突き止めた〈冒険者〉たちはすぐさま山のドラゴンゾンビを討伐しておまけにドラゴンの爪から薬まで作って提供してくれた。それのおかげで少なかったとはいえ命がいくつも救われて助かった領民も新しい領地へと保護されてめでたしめでたしというわけだったのだけ、

けれどこの話には続きがあるんだ。両親も失い、故郷も失い、家族同然の民も失いひとりぼっちになつてしまった少年の後日談がね」

「それは、エルノおじさまのこと、ですよね？」

「そう、まだ私がイセルスよりも幼かったころだ。ただの泣き虫だった頃の話」

エルノは窓の外を眺めたまま心なしか声色をやわらかくしながら語りだした。もう十年以上も前の記憶が磨耗してかすんでしまい始めている、昔話を

「当時の私はおじい様に保護され、そのままコーウエン家の養子として引き取られた。今では大して何かを言われるわけではないけれど、当時は非難も多くてね。」

私の前ではみんな優しくしてくれても裏ではいろいろと言われていたものさ、外様の領地の息子がいきなりコーウエン家に養子でとはいえ加わったというのはどうにも世間体が悪いらしい。

ウエストランドの方にも随分と噛み付かれたらしい」

まったく、外野の連中がやかましい限りだよ、そんな風にエルノはため息をついた。

〈マイハマの黒鷲〉と今では呼ばれる彼は幼少期の頃からそういう大人たちの裏側にも気がつき今と同じように冷めた目で見ていたのだろうことがレイネシアは容易に察することができた。

「そんなある日だ。私が過ごしていたお屋敷の庭に贈り物が届くようになったんだ。」

最初は花だった、次はなにかわからないが赤い宝石のようなものが裝飾されたお守りみたいなものだった。毎日、毎日ふと庭を覗いてみると小さな箱が置いてあるんだ。短剣や人形、読めもしない魔道書の類や季節はずれのマフラー、丸メガネなんてものも置いてあったことがあった」

実に珍妙、摩訶不思議な話。

「僕はそれが誰が持ち込んでいるのか不思議でしようがなかったよ、屋敷の警備はなかなか厳重で普通はそんなに簡単に侵入できるはずがないんだ。屋敷の人間も気味悪がっていたし、一時期は警備が強化されたりもした。それでも贈り物は途絶えることはなかったけどね、まるで幽霊みたいいつのまにか贈り物を置いていくんだ」

「なんだかそこまできると恐いですね。その贈り物の主は捕まっただんですか？まさか本当に幽霊だなんてことはないでしょう。イタズラにしてもリスクが高すぎます。お屋敷に侵入なんてバレたらそれだけで牢獄いきです」

「幽霊つてのは流石にないかな、一度きりではあるけれど私も目撃したことはあった。あれは紛うことなき人間だ。それでも結局犯人は捕まえることはできなかったけれど。」

「一か月くらいしてからかな？一通の手紙がポケットに入った外套が最後のプレゼントだった。そこからはスツパリとまるで何もなかったかのように贈り物も届かなくなった。」

手紙にはこう書かれていたよ『何もかもを失ったことは不幸でも、君が生きていることは幸福だ。その外套が似合うくらいに大人になった頃にはきつと君は救われている』とね。」

この言葉だけはかすれて薄れてしまった記憶の中でも確かに残っている言葉なんだ」

それきりにパタリとその存在は認識することができなくなった。まるでそんなものは元からいなかったかのように使用人たちの間でも噂話が蒸し返されるようなことはなくなった。残ったのはエルノの手元に残ったガラクタのような贈り物と朧気な記憶だけ。

「なんとというか、掴みどころのない話ですね。まったくこちら側に主導権がないというか一方的な接触をはかってなにか見返りを求めるわけでもなく消えていく。」

エルノおじさまを元気づけるためにというなら回りくどすぎます。めんどくさいです」

「そうだよね。でも私はとても救われたのは事実だ。少なくとも生きている世界が本当にくだらないものだと勝手に見切りをつけることはしなかった」

「……おじさまは今救われているとお思いですか？」

レイネシアは尋ねた。

今こうして自分と話してくれているエルノは、毎日をあの水の古城とその周囲だけの狭い世界を見守るだけのことをしているエルノが、

貴族の世界に嫌悪感を抱いているエルノが、今、救われていると言つてくれるのか

気になった。エルノの答えになにか答えを返せるわけでもないのに。

「満足している。レイシアとこんな風に話すことができ、〈冒険者〉の友達も増えて満足していないわけがないだろう。」

なにより、十年前の恩人に認められて親友とまで呼んでもらえるのならこれ以上の幸福はない」

「え？恩人？」

にこにここと笑うエルノの顔を見つめながらレイネシアは何拍かの沈黙の後にひとつの結論にたどり着いた。

「まさか、十年前にお屋敷に侵入し続けた賊の正体って…」

「さあてねえ？」

証拠もなにもないんだがね。でも、どうにも彼が言いそうな台詞だよねえ」

エルノらしくもない荒唐無稽な話だ。それでもそうに違いないと語るエルノの姿は真に迫るものがあつた。

「ま、あまり多くを語るようなことはしたくないし、レイシア自信に彼の、いや、〈冒険者〉のことを理解してほしいから価値観を押し付けるようなことはしないけど、彼がどれだけ隠し事が多くても救いようがない善人なんだということは理解してあげて欲しいな」

エルノがそんな風に一旦区切りよく話を切ったときドアを叩く小気味のいい音が鳴った。ノックの主はエリツサで一度流れるように頭を下げるとレイネシアに向かって来客の訪問を告げた。

「お話中に失礼します。あの姫様、供贄一族の董嬢様が重要な案件ができたと訪ねてきてらっしゃるのですが、どういたしましょうか？」

レイネシアはエルノへと視線を向けた。まだまだ話したりなさそうにため息をつきながらもエルノはにこりと笑いかけた。

「いっておいで。あそこには借りをしてくれるなら作っておいて損はない。わたしとの雑談なんていつでもできるんだからね」

エルノからの一応の席を立つ許しを得たレイネシアはエリツサと

共に部屋を後にする。ひとり部屋に残されたエルノはカップに残された透き通った紅茶の底を見つめながら呟いた。

「供贄一族の若頭か、どうにもきな臭いねえ。まあ、なるようになるだろう。僕にはあまり関係ないことだ。」

無責任にも聞こえるような言葉を吐き出しながらエルノも部屋を後にする。その顔にはニヤニヤと少しの皮肉を交えたような笑みを浮かべていた。

第四十四話 紅の名探偵の宣戦布告

「殺人鬼？」

「そ、殺人鬼ー。最近有名になってきたからもちろん知ってるだろー？」

間延びして気の抜け切ったその声が机の上のいくつも広げられた本を睨みつけながら手元の紙に関連性のない暗号のような単語の羅列を書き連ねていくクインに向かって投げかけられる。

その声の方向に視線ひとつ向ける様子もなく銀縁のメガネの奥で目を細める少女は気だるげに声の主に戻事を返す。

「それは勿論知ってはいるが、なぜわたしがそれについて調べなくてはいけないんだ。

こういうのは貴男の領分だろう。普段は他人には回しもしないくせにどういう風の吹き回しなのだ、マイクロフト殿」

「そう疑り深い目を向けるなよーやらしいなー。ちよつとボクは別件で手を回せそうにないからさー、やつといてくんない？」

「勝手だな、わたしもべつに暇というわけではないのだぞ」

ここでやつとクインは止めることのなかった手の動きを止めてペンをインク瓶へと放り込んだ。さつきまでなにかを書き連ねていた羊皮紙は開いていた本の内側に葉代わりにもするよう挟み込んで閉じる。

やつと動きを止めたかと思えば今度は引き出しから手製らしきノートを引つ張り出し先ほどまで使っていたペンとは違うペン先が細いペンを同じように引き出しから取り出して今度は丁寧に統一されたフォントのような字でつらつらと文を書き連ねていく。

「はっはー、ギルマス命令だからね、これ。〈円卓〉からも依頼が来るから断るに断れない案件なのさー。頼むから駄々をこねずやつてよ、ボクがすごい困っちゃうんだよー」

「なんで私が悪いみたいな形に持ってかかっているんだ…」

全部貴男の勝手な事情じゃないか…、辛抱が切れたのかついにクインのペンを握る手が止まりヘラヘラとするマイクロフトにメガネの

奥からジト目を向ける。そんな視線を受けても悪びれもしないでマイクログフトはクインの机の上に広げられていた分厚い辞典のような本を手にとつてパラパラとめくりながら受け流した。

「まあ、いい。それで？まさか一から調べるとか言うつもりではないだろ？まあ、一から調べなおしはするが」

「それは、アインスクン辺りから聞いてー。彼が概要の説明させるんだつたら最適だ」

「あ、ちなみに二時から〈円卓会議〉だからそのとき聞くといい」
「おい、今何時だと思つている」

現在時刻一時五十分。紅き名探偵の遅刻が決定していた。

◆◆◆

「で、お前さんがここに出張つてきたつてことか」

「そうなる。若輩ながら宜しく頼みたい」

「だったら会議に遅れてくるようなことはするんじゃないな」

ゴシック調の巨大な丸机を囲む一席のひとつから太い声がかげられる。声をかけたのはミチタカ、クインとも仕事柄にある程度の面識を持つ三大生産系ギルドの一角を担う〈海洋機構〉のギルドマスターである。ただその声色に厳しいものはなく茶化すような親しみを込めたものであった。他の円卓を囲むアキバの代表者たちも別段文句を言う雰囲気もなく、むしろその原因にある一匹の毛玉に対して舌打ちを打つていた。

情報屋ギルドというギルドの性質上この場にいる円卓を囲う大物たちとの繋がりにはクインは持ち合わせていた。〈大災害〉以後サブギルドマスターという職務に就くことになって責務をないがしろにしたことはないと自負は嘘偽りなく、確かな結果を積み上げている。それゆえの信用であり繋がりなのであった。

そんな雰囲気頬を緩ませることもなくクインはさつそく本題へ入るようにとアインスへ持ちかけた。殺人鬼の情報は噂話として小耳に挟む程度でしつかりとした情報を持っていないのが現状なのだ。

「ふむ、アインス殿、すまないが被害者の名前を教えていただけるか？
ギルドに所属しているようだったら所属ギルドとレベルも添えてくれ」

「ええ、構いませんよ。」

一件目の被害者は『アマルネ』さん、ギルドには所属していないソ
ロのプレイヤーですね。レベルは七十二。

二件目の被害者は『エクレール』さん、所属ギルドは〈ブルーバー
ド〉、ここは〈D・D・D〉の傘下にあたるギルドです。レベルは四十
六。

そしてちょうど現場に駆けつけ一緒に被害に遭ったのが同じギル
ドに所属していない『竜殺し』さん、レベルは四十二。

この一件目と二件目は同じ夜に起こったものです。

そして次の日には三件目の被害者は『キョウコ』さん、所属ギルド
は〈西風の旅団〉。レベルは九十。

しかしここはキョウコさんの所属ギルドのギルドマスターである
ソウジロウさん、〈三日月同盟〉の千葉さんが助けに入ったことで殺人
鬼から逃げることに成功しています。

そのまた次の日に四件目狩りの帰り道に襲われたギルド〈桃色桜〉
の5人組パーティーが、被害者は〈茜〉さん、〈星蘭〉さん、〈美妃〉さ
ん、〈ユーカーリ〉さん、〈ミカン〉さん。レベルは順に、五十九、五十
四、六十二、五十五、四十八。

そして五件目はアキバの街を巡回中だったウチのギルドの精鋭
ツーパーティーが：ワンパーティーのメンバーは『烏丸』『ギンコ』『く
るみ』『ケロロケ』『ゴンザレス』『架橋』全員レベルは九十

ツーパーティー目のメンバーは『アカギ』『イルカ』『超魂』『江頭？：
49』『オムレッツ』『蛙兄』これもまた全員レベルは九十

それとこれはさつき申し上げたパーティーが現場に居合わせたた
め未遂に終わりましたが、『クリス』さん所属ギルドは〈カノツサ〉レ
ベルは七十七。

以上が今のところの被害者になります」

「まったく共通点がわからんな」

とミチタカ

「レベルも所属ギルドもバラバラですしね」

眉間に濃いシワを寄せて眼鏡を上げるロデリック。学者然としたその風体にメガネの奥からは困惑と疲労の色が見え隠れしていた。おおかたまた時間を忘れて研究に没頭して〈円卓会議〉の直前まで休憩もとっていないのだろう、しきりにこめかみを抑えるような動きをしていた。それでも話に発言を差し込むのはなにか言葉を口にすることで現状を確認する学者らしい習慣なのかもしれない。

「ああ、そうだ。〈円卓会議〉が立ち上がる前、〈カノツサ〉といえばPK をしていたギルドだろう。その復讐とかじゃないか？」

「それじゃあ、他の被害者の方と条件が合いませんよ。それに今頃PK の復讐とかナンセンスですよ」

ソウジロウがウツドストックの発言に反論を言う。自分のギルドのメンバーがPK なんてもものしていたわけがないと知っているからこそ間違いを正さないわけにはいかないのだ。

うーん、といくつかの席が欠けた円卓を囲んだアキバの街の代表者たちは首を捻り頭をさらに捻らせる。

殺人鬼の目的がわからない、せめて狙っている対象でも判れば何らかの対応も打てるようになってくるのだが、今は巡回をしながら情報収集に徹する他ないようだ。

「共通点なら有るではないか。わりと明確に」

「なっ!?」

発言の主は大胆不敵な名探偵、紅の名探偵と名高いクイン

全員の視線がいつきにクインへと集まる。

「なにかあるのかっ！ 共通点が!!」

…あ、すまん。つい声を荒らげた」

真横から大きな野太い声を勢いよく浴びせられたクインは思わずびくりと体を浮かしてしまい、声を荒らげて驚かせてしまった張本人のミチタカは、女の子をビビらせるなよという周囲からの若干鋭い視線を受けながらつい声を大きく上げてしまったことをクインに謝罪

する。

コホン、と一拍置いて逸れてしまった視線をもう一度集め直したクインは客観的な事実を告げていく。

「性別だ。被害者は全員女ではないか」

「いえ、ウチのギルドのパーティーには男のメンバーもいましたし、『竜殺し』さんは男性のプレイヤーで、確かに被害者に女性が割合的には多いですが、被害者が全員女性ということはないですよ？」

すかさず今回の事件に矢面に立って対応しているアインスから訂正の言葉が入るがクインはそれに首を振替し指をピンとたてて反論する。

「バカを言うな。なぜここまで言っていて気づかないのだ。その『竜殺し』もへホネスティのツーパーティーも後から駆け付けた方ではないか」

「なっなるほど！確かにその通りだ。よし今すぐ通達を出して女性の夜間外出を……まあ、待ちたまえよ。アインス殿」

「もう少し、私の推察を聞いてから通達を出してくれ。焦っても手間が増える」

「まだなにか気づいたことがありますか？」

「気づいたことと言えるほどではないが、犯人の絞り込みを少しでもしておいた方がいいだろう。」

今、我々が握っている連続殺人犯の情報は、

エンバートⅡネルレス。

ギルド未所属。

レベル九十四。

藍色じみた暗い色の長髪、目隠しのような仮面に手足を包み込むような金属甲冑。

狙っているのは恐らく女性。

この五点だ。それは全員ご理解していただけているだろうか？」

「ああ、それくらいは俺たちにも理解できているわ。探偵の嬢ちゃん」
「そう、恐い顔をしないでほしいなウツドストック殿。こういうしや

べり方なのは探偵としては仕方のないことなのだ。ご容赦願いたい。話を戻すぞ。ではこの殺人犯の正体は何者なのか？」

「そりゃあ、エンバートネルレスっていうおっさんちゃうん？」

マリエールからもっともな指摘が入るがそこはクインが語りたいたい焦点からずれている。クインが論じたいのはもっと根っこの部分なのだ。

「私が言っているのはそういうことではないよマリエール殿。

エンバートネルレスが〈冒険者〉なのか、〈大地人〉なのか、〈モンスター〉なのか、それとも我々が預かり知らぬ〈ナニカ〉なのか、ということだ」

「〈ナニカ〉？なにか心当たりがあるのですか？〈冒険者〉でも〈大地人〉でもない第三者の存在がいるとでも？」

『未知の存在』惹かれるのはやはり研究者ロデリックが一番に問いを投げかけた。しかしその問いにはクインは確かな答えは持ち合わせていない。あるのは当たり前前の可能性だけ。

「あくまでもしかしたらだ。我々をこの世界に連れてきた奴がいる、そう考えるのも自然ではあろう？」

まあ、これは考えなくてもいい可能性だろう。むしろ考えることを放棄すべき可能性だ。

それでは次に〈冒険者〉ならば可能であろうか？」

椅子から立ち上がり視線を誘導するように、エンターテイナーのよな目を引く動きで体を使って話を聞く人間を話の根幹へと取り込んでいく。

「いや、〈冒険者〉には無理だろう。〈冒険者〉だったら衛兵システムに必ず引っ掛かる」

「そうとも限らんどミチタカ殿。

最近では〈口伝〉を身に付ける者も増えてきてるではないか。

例えば、今はアキバの街を離れているようだが〈三日月同盟〉の奏あのバカの〈口伝〉であれば衛兵システムに引っ掛かることなくPKをすることは可能だ。〈ゾーン〉の設定を自由に設定しどこでも展開できる。戦闘行為可能区域にしてしまえば十二分だろう」

「そんなっ!?カナ坊はそないなことをする子ちやうでっ!!」

「わかっているさ。マリエール殿、アレがPK などすることはなくことくらい。アイツはどうしようもなく人殺しを嫌悪しているからな。あくまで可能性の話だ。」

〈冒険者〉が正体というのは限りなく低い可能性だと私は考える。

では次に〈大地人〉はどうだろうか?」

「いや、さすがに〈大地人〉はないんじゃないですかね。レベル九十四ですよ? 〈大地人〉じゃ……いやそんでもないですね」

「おそらく想像通りだぞ、ソウジロウ殿。〈大地人〉でもレベル九十四に至れる存在はいる」

「〈古来種〉のことですか?しかし〈イズモ騎士団〉は今、何処かに消えていると……」

指を一本立てて見せつける。その動作ひとつひとつがどこか暗示じみている話を誘導するように運んでいる。聞き手を飽きさせないようなオーバーな動きは自然と投げかけられた問いに集中して思考を向けられるようになっていく。

「まだいるではないか?衛兵、とか」

「衛兵っ!?!しかしそれはっ……まさか衛兵が襲っているから衛兵システムは反応しないと言うのですかっ!!」

「さあ?わからん」

今までの自信だけしか感じられないような動きはどこへ消えたのか、どつかりとコートにシワが依るのもお構いなしに椅子に座り込み首を傾げて両の手を挙げる。お手上げ、といった風体だ。

「そんな無責任なっ!」

「無責任もくそもあるか。」

あくまでこれは可能性の話だと言っているんだろうに、衛兵システムを扱っているのは供贄一族だ。あそこは特殊なところだからな。〈大地人〉の総意とも限らんし、代々掟の元に動いてきたと言っている供贄一族が我々〈冒険者〉に牙を剥く理由などあるかどうかすらわかるわけもない。

あくまで私は衛兵が、ムーブルアーモ〈動力甲冑〉が最も怪しいと推論をあげるのが
やっつだよ。

きちんとした調べもしてない状態で推理できることなどこのくら
いなのだ。

もちろん新手のモンスター、クエストの可能性もある。結局はどの
存在でも殺人鬼になり得ることは可能だということがわかっただけ
だよ。

安楽椅子の上で語る推理などこの程度だ。お恥ずかしい限りでし
かない、核心からも程遠いだろう。

だから、私が責任をもってこの事件解き明かそう。
僭越ながら語らせてもらおうか。

〈紅き名探偵〉の二つ名がただのお飾りではないことくらいそろそ
ろ証明しようではないか。

このまま引き下がって面木を潰すような、私を赤面探偵なんて呼ん
でいいのは不愉快な話だがアイツだけだから」

ガタリと大きな会議室に反響する音を発てて席を立つクイン。
真っ赤なスプリングコートを翻して入り口までツカツカと歩いてい
く。

「あの、どちらへ？」

「決まっている。探偵というのは自らの足で聞き込みをしてこそその存
在だ。歩かない探偵などいないのだよ」

そういつて紅の名探偵クインは真っ赤なコートを靡かせながら自
らの戦場へと駆り出していく。

泥臭く、へとへとになりながら歩いていく。

それが最もカッコいい探偵の姿だと彼女は確信しているのだから

第四十五話 フジの神域

リザードマンと刃を交えて斬り合った。

十メートルは優に超えているであろう大蛇の頭をへ剣の神呪で切り刻んだ。

オオカミの群れを魔法で押しつぶした。

死霊の類を一人で死にかけながらも退けた。

これで死にかけるのは何度目だろうか。ずいぶんと自暴自棄じみたレベリングをしているからレベルは尋常ではないスピードで上がっていつている。けれどこんなことではとてもではないがこれからなにをすればいいのかの目的すらも見出せそうにない。

「とりあえずでレベリングをしてはいるけど、正直こんなでなんとかなる相手なわけがないんだよな……。むしろ大火に炭酸カルシウムぶち込む感じだ」

炎上して大爆発だ。上半身が焼かれて禿げ上がる程度じやすみそうにない。全身脱毛クラスだろう、しかも毛穴からじつくり焼いていく感じで。

ゲームの時とは比べようもないほどに広くなったフジ樹海という天然の迷宮を進んでいるとまた場が引き締まるような感覚を感じる。随分と奥まで進んだ感覚はあったが今まで一番の^{修羅場}アタリを引いたらしい、ここら一体は今までとはモンスターのレベルが一段から二段上のクラスにあるだろう。足を踏み入れた瞬間から木陰や草の陰から獲物を狙う敵意や殺気を感じた。

「でも、今回はすこし違うっばいな。

なんだあ？これ、敵意はあっても悪意がない。まるでここに足を踏み入れること事態が問題みたいじゃないの」

今まで身を置くことがなかった真正正銘の生存競争に身をやつすようになつたこの眼は以前よりも格段に悪意や敵意に過敏に、そして力の流れを見通せるようになっていた。力の濃度は断トツで濃いこの場でここまでの拒絶を示されるようなら、と進むことを思いとどまろうと考えたときにはもう遅かった。

「ウオオオオオオンン!!!」

「モンスターハウスとは……こりや撤退優先だな」

背後からの不意打ちに振り向くこともせず、認識した亡霊に鞘に納めず抜き身のまま持ち続けている愛刀でしやがみながら攻撃をかわしつつ牽制をいれて前へと一直線に走り出す。

背後から襲いかかった一体を皮切りに前や上やらどこかれ構わず赤い亡霊が飛び出してくる。モンスターの名前はへ龍の眷属の成れの果てレベルはざっと平均八十五。相手にできる規模じゃあない。逃げの一手だ。

次々と襲いかかる亡者たちの冷気を帯びたような四方からの攻撃をいなしながら体勢を低くしたまま走り抜ける。

まるで巣の中から這い出す蟻のように湧いてくる亡霊達の黒い靄のような範囲攻撃が奏の退路を塞ぎ逃げ道を阻んでいく。そのことに悪態をつかざるを得ない奏は段々と自分が来た道から離され奥の方へと押し込まれていく感覚を感じていた。

「いつそ、奥まで突っ込むか？毒を食らわばなんとやら、瞬間火力だけで押し通る分には引き返すよりはここを走り抜ける方が楽そうだ」

言うが早いか懐に忍ばせていた陰陽札を前方へと幾枚か飛ばして雷と氷の礫をもってして無理矢理道をこじ開けていく。多勢に無勢で有利に事を運ぶには目的をもって動き続けることが何よりも正しい。

深紅の亡霊たちと斬り結びを続けながら抜け道を模索する。その眼に映るのは亡霊だけに限らずありとあらゆる霊的な力の流れに痕跡。進むべき道を様々な可能性を考慮して検討するがどうにも詰みなように感じる。向けられていく敵意の大きさがどの方向からにいても淀みがなく四面楚歌と言って過言なかったのだ。

だんだんと追い詰められていき、ついには刀を振り切り無防備になった奏の身体を亡霊の魔法が容赦の欠片もなく吹き飛ばした。

吹き飛ばされて宙を舞う奏の身体。奏の意志とは反し身動きのひとつもとれはしない宙に勢いよく飛ばされる中、されどもその眼はひとつの退路を捉えていた。

その視線の先に捉えていたのはあちらの世界の方でも見飽きるほどに見慣れた赤い鳥居。さしたる確証があつたわけでもない、ただ見慣れた懐かしい風景と類似するそこに奏は身体を地面に受身で着地したのと同時に駆け鳥居の下をくぐり抜けた。

「とつさに飛び込んだのはいいが、こんなところに分社なんて建てるか？というより…

なんでこんなちゃんとしてるんだ」

鳥居をくぐり抜けた先にあつたのは円形のただっ広いだけの広場だった。円の中心にはひとつの祠がぼつんと当たり前のようにあるだけの場所。鳥居をくぐり抜けた先に広がる光景としては違和感はない光景ではある。

けれど、この場所はおかしい…

普通なら自然の蔓延るこの天然のダンジョンでモンスターに限らず生物がいない場所なんてひとつたりともあるわけがない。

どんな場所でも生き物が通つたのだつたら少なからず魂の残り香みたいなものが俺ですらも認識できるかできないくらいわずかに残り積もつて本来の場を乱すのが当たり前だ。さつきまでの射殺するような敵意を放つていた存在たちもどこになりを潜めたのか気配のひとつも感じることはできやしなかった。

なのに、ここはこんなにも手付かずに本来の自然な形で有り続けている。

自然であるからこそ不自然、この場所はちゃんとしすぎている

「まあ、セーフティゾーンだと思えば便利な話だけれど。

すこしばかり調べてみるかね」

安全地帯として使うにしても、個人的な興味本意としても調べてみないことには始まらない。

その領域に足を踏み入れる

一歩一歩、しっかりと踏み込んでいく。辺りへの警戒は解くどころ

か一層レベルを引き上げて

中央にある小奇麗にきちんと整えられた祠までたどり着き、触れて

みる。苔に覆われているわけでもないがしつとりとした冷たさを保った木材の質感が返ってくるだけだった。

けれど、その時どこかでなにかにヒビが入るような音がした気がした。

「よく来たの。歓迎するぞ〈冒険者〉」

まばたきひとつした瞬間、見えていたものがまったくいいほどに異なるものへと変わっていた。そこかしこに生い茂っていた背の高い草たちも、それをはるかに凌駕する大きさの大木も、それを中心にしてまるで枝や草たちに守られるようにしてポツリとコケの一つも張っていない小さな祠も今はない。

小さな祠の代わりにあるのは、手入れの行き届いた権現造りの大きな社。背後にはさつきまで存在することすらなかった大鳥居。社の背後には無数の大木たちの姿はなく、あるのは一本の大きな大樹。その大きさは今まで見てきたフジ樹海の大木たちが苗木に思えてしまうほどに大きく尊大な存在感を感じさせた。

が、それよりも強く清く美しい気配を発する存在があった。百恵のそれと同等、否、それ以上の魂の強い光

「……とでも言うと思ったか、たわけめが。」

雑な結界の侵し方をしおってからに」

見蕩れてしまえば、そのまま一日経とうと時間が過ぎたことに気づくことすらも忘れてしまいそうな絶世の美女が社の数段の階段からこちらを見据えてそこにいた。

緋色の長く美しい髪がまず目につくが、それをさしひても十分以上に容姿のすべてが整っている。

だが彼女から発せられる魔力の奔流は、何メートルと離れているこの場所でもまるで隣にいるかのように、空気を重くさせるように濃密だった。彼女が一度手でもこちらを上げばその魔力の波に飲まれて膝をつかされることになるかもしれない。

「なにをブーツとアホヅラを晒して突っ立っておるへ冒険者」。名を名乗らんか。それともなにか？わざわぞ儂の神域に足を踏み入れておきながらまさか臆して口も開けんとは言うまい」

見た目と実力にふさわしい言葉遣いで名を尋ねてくる女性。その言葉の一言一言が聞き逃すことが惜しくてしようがなく感じる。濡羽さんの魅惑の言葉とはすこし違う。思わず頭を垂れなくなってしまうような羨望と崇拜を抱きたくなる言葉

「あつ…、俺の名前は奏といいます」

「違う。顕界している肉体の仮初めの名ではなく真名を名乗れ」

真名？現実世界の方の名前のことか？名乗っていいものなのか、いや別に名乗って困るようなことなんてないとは思うけれど

「失礼しました。俺の名前は奏儂八枝といいます。漢字は奏者の奏に、儂い恋の儂、漢数字の八に、枝分かれの枝、です」

「そうか、少し難を抱えそうな名ではあるが、それゆえに良い名でもある。つけてくれた者に感謝するのじゃな」

「あ、ありがとうございます」

「礼を言われる道理はない。名をつけたのは儂ではないし儂が褒めたのは名づけをした者けして貴様ではないよ」

本当にどうでもいいのだろうただ値ふみするような視線とは少し違うが試すように見つめ続ける

「それで？なぜ主はここに来た。儂を討つためか？儂の持つ財たからを欲しか？まさかこんな品も知性も感じられん乱雑な輩が清く正しく参拝に来たなどとは抜かさんよな？」

カランカランと俺が普段するように、それでも俺よりもはるかに優雅に高下駄を鳴らして近づきつつ問うてきた。俺を見つめるその目は値ふみするように細められて少しもそらされる気配はない。

「いや、別に俺はそんな荒事をしたくてきたわけじゃなくて…」

「であろうな。主からは純粋な気しか出ておらん。荒事を起こしにきたとはちと思えんの。なればこそここへ何をしに来た。ここは偶然で来れるような場所ではないぞ」

カマをかけているのか、あくまで値踏みの一貫なのか

「いや、あの…」

「なんじゃ、はつきりせんのか。男ならしゃんとせんか」

たまたま偶然妙に魔力の充実したところがあつたから近づいたら迷い込んだんじゃない。なんて言えない、めっちゃ真面目な顔で俺を見つめているんだもの。

「拉致があかんの。」

すこし、覗かせてもらおうぞ」

いつのまにか触れられてしまうほどの距離に近づかれていたことにも気づかず、伸ばされた真つ白な手が頭に、ポン、と乗せられた瞬間に視界が暗転した。

グラリと身体が浮くような感覚に襲われたところで感覚が途切れた。



「なるほどの…本当に偶然で迷い込んできたというのか。」

末恐ろしい限りじゃな、結界を結びつけて干渉するなど…

下手をしたらこの結界まで、解かれておつたではないか。だが、おもしろい。

ほれ、八枝起きぬかいつまでそうやって寝ておる」

そんな声が聞こえた後、ぺちぺちと叩かれる感触を頬で感じ意識がはつきりとしてくる。なにをされたのか、なんでこんな場所で眠りかけていたのかまったくわからなかった。

「我が名は龍神アサハナ。国津神にして大地神であるヤマトの大地に顕現する人柱が一本じゃ。ついでにいえば酒の神でもある。主は神祇官カンナギであるようじゃし信仰はしておらずとも名くらいはしつておろう」

「龍神アサハナ…龍神アサハナ!?!」

「おお、そんな風に驚かれるのは久しい。」

ここ百年は結界から外へと出ることはしなかったからそういった反応はなかなかいいの」

〈龍神アサハナ〉

ヤマトの大地を代表する火山の炎の属性とそれを鎮める水の属性、山から大地の属性、桜から木々の属性と生命の属性を備えたまさに大地の神格というべき存在。信仰の対象でもあり霊峰フジの南部、花の社セレスステレナが大社にあたる。フジの山頂にも分社と祠がある。日本サーバーの〈神祇官〉にとってはわりとメジャーな神様。そのうえお酒の神様でもあって、彼女の造る桜を浸したお神酒は絶品というものだから存在としては知っていたし、ゲームの頃に何度かセレスステナへと参拝に行ったこともあった。

だが、確か龍神アサハナ様は、くすくすと笑うお淑やかで物腰の柔らかな女性。読めない上品なお嬢様といった性格で男性プレイヤーにも人気が高い、放任主義で意外と根に持つ。分け身として作った一人娘がいる…

いわゆる若奥様系アイドルだったはずだが!?

「ああ、それは娘じゃ」

「娘!?!」

「そうじゃ、考えてもみい。儂クラスの神格が常に姿を現してそこらへんをウロウロとしておつたらありがたみも失せるじゃろう」

「いや、まあそうですね」

「どうか主、何度かセレスステナへ参拝しとつたくせにそんなことも知らなんだか」

呆れたように半眼でこちらを蔑むように見るアサハナ様（仮）。なんちゃって信仰をされるといっものはやっぱり神様といえど気分のいいものではないらしい。

「いやだって本人がわたしがアサハナですって名乗ってましたし。周りもみんなアサハナ様アサハナ様って呼んでたし」

「なんじゃと?八枝よちよつともう一度探らせよ」

またアサハナ様（仮）が俺の頭に触れようと手をのばしてくる、この短時間にそう何度も気絶まがいのことをされてはそろそろ危ない

気がする。なんとか触れられないように後ずさるが、

「心配するな、今度は気絶させるようなのぞき方はせん。ほんのすこし垣間見る程度じゃから。先っちょだけじゃ」

そんなことをいうやつに約束を守るようなやつはいない

「ほんとじゃ。やべえ儂の信仰が奪われとる。成り代わられとる。最近たしかに貢物が無いとは思ってたが」

結局覗かれた

「口調が崩れてるよ、神様」

「三十年前辺りからおかしいとは思ってたんじゃが」

「どんだけ気づくのおそかったんだよ!？」

「かれこれ八十年ほど貢物がきておらん」

「どうやら神様の感覚はかなり俺たちの感覚からはかけ離れているらしい」

「というか信仰が奪われてしまつて大丈夫なのだろうか。こう存在が揺らいでしまつたりとか、こういう神様に限らず妖怪変化の類まで人間に認識されなければ存在できないとかいったりするものだが。」

観測者が存在しなければ観測される側も存在しないとかなんとか

「それについては問題ないの。娘といえど元は儂の分け身。儂の一部じゃ。信仰が薄れたというわけではないからの。ただチヤホヤされる理由が髪の毛から胸へと変わったようなもんじゃ」

「それ結構な変化だと思っけどな…」

アイデンティティーの変化つて大きいと思うんだ。

「ええい、儂のことはアサハナ様とちやんと呼ぶのだぞ。」

まったく、あの娘、嫁に行つたと思つたらとんでもないもん残していつとたわ。昔からどこか黒いところがあつたきらいはあつたが、孫の顔見るついでに説教しに行かねばならんの」

「あはは…。」

アサハナ様そろそろ俺を元の結界の外にだしてくれませんかね。やらなきやいけないことがあるんです」

そんな風に進言してみると、少し考えたような素振りを見せたアサ

ハナ様がこんなことを言い出した。

「まあまあ、そう急ぐな八枝よ。」

そんなお主に提案なんじゃが、お主しばらくここに残れ」

「はい？」

「さつき主の記憶を覗いたとき、お前さんの姉のこととかも見えてしまつての。興味が沸いた。」

儂で貸せる力があつたのなら力を貸そう。つい勝手に深いところまで覗いてしまつたしの」

「あの、何を考えてらつしやるかは知りませんがこれは俺の問題でしかありませんよ。」

貴女が助けてくれるっていうのは筋違いだ。神様の気まぐれで解決できるようなことじゃないし、そもそもいま会つたばかりのたかが人間のために」

「かー、卑屈じゃのー。」

神とは暇と戦うことを義務付けられた種族よ。いい暇つぶしが見つかつたのならそれに乗つからん手はあるまいて」

「…ソつすか」

人の悩みを娯楽扱いかい

まあ、傍から見ればいい道化だよな

せいぜい道化らしく高笑つてバカを演じてみようかねえ、まつたく「…：それに、お前さんのような本来ならば非干渉を貫きたまの奇跡と罰を与えるべきの神が一方的に傷つけてしまつた被害者になにも償いをせんのは目覚めが悪いからの。」

いまお前さんが抱えている苦難はちと重すぎる。帳尻合わせくらいはしてやらんでもないよ。

主がのぞむのであればじゃがな」

「…」

「勘違いするでないぞ。べつに同情しとるわけではない。」

儂は力を貸すだけじゃ、闘うべきはそなた自身。助けてもらえるなんてそなたの言う通りに甘えでしかないわ。あくまで儂がするのは帳尻合わせ、されどこれに乗らぬ手はそなたになかろう。」

今のままでは答えも得る前に壊れるぞ」

どうかの？そんな風に尋ねてくるアサハナ様にさつきまでの溢れ出る魔力の奔流による近寄りかたさは感じなかった。むしろこちらに歩み寄ってこようとす優しさまで感じる。

こないない人（人じゃないけど）の手を煩わせてしまっているものなんだろうか。なんだか過去の話で同情を誘ったみたいでヤダな。いや、この考え方事態がダメなのだろう。アサハナ様の言うとおり卑屈になり過ぎている。

そして姉と同じかそれ以上の格上の存在。勝つための手段を教えしてくれると言うなら乗らぬ手が本当にならない。俺にとって都合が良さぎるくらいだけど、藁にもすがりたいのに変わりはない。そこに可能性があるのならその手を掴むしかないじゃないか

「アサハナ様、未熟者ではありますが、どうぞよろしくお願いします」
「うむ、それでよい。人間遠慮しないことは美德のひとつじゃ」

ニコリと満足そうに笑ったアサハナ様は来たときと同じように克蘭カランと下駄を鳴らして本殿へと歩き始めた。

その後を習うように下駄を鳴らして追走した。広い境内には桜の花が風に散らされるばかりで一人と一柱以外の人影はひとつとしてなかった。

第四十六話 嘘にまみれた

〈円卓会議〉で堂々と今回の事件の犯人であるエンバート・ネルレスを捕まえると宣言し、最上階の広さだけは充実した会議室から飛び出してきた紅き名探偵はひとまずはアキバの街を歩きながら一人の女のもとへと歩みを進めていた。

『構いはしないけど、わたしじゃあの殺人鬼は止められないからね。あくまでクイン、あなたが〈円卓〉の後ろ盾を持っていることが前提条件。最悪の状況に陥った時に組織の戦力を向けることができることが必要条件だからね。むやみやたらに突っ走らないで』

念話の相手は淀みのない口調で自身が協力する条件を提示する。あくまで自分は手段の一つとして、自信を切り札として扱うような無謀はしてはいけないとあらかじめ釘を刺す。

「いや、それでいい。今回は顔合わせみたいなものだけだから、千葉じゃなくても捕まえるのは私なんかじゃ無理だよ。殺人鬼なんて言葉が通じるような相手じゃない。」

ただ推理に確証を得たいんだ。正直今回の一件は自分でもあまり信じきれないから」

クインは千葉の要求に是非もないといった様子で答える。あくまで今回は様子見。問題を一から十まですべて理解するための一手でしかない。一を聞いて五を理解するのは探偵としての得意分野であつたとしても十を理解するには証明しなければならぬ。

そして解決するのは理解することとはまた別の問題だ。

『どんなに不条理な可能性でも可能性を排除し続けた末にそれしか可能性が残らないのならそれがどんなに突飛なものであろうとそれが真実である、だっけ？ シャーロック・ホームズの』

「そのとおりだ。正確にはまた違って三パターン程あるのだが、聞きたくはないだろう？」

『あなたのその手の話は長いからもちろんパスよ』

「だが、女というのはあまりこういうのは読みたがらないからなあ、素直にびっくりだ」

『シャーロック・ホームズくらいなら学生時代に手始めに読んでみたりするもんでしょ。当時のシャーロック・ホームズだって今で言うところのライトノベルと同じ枠組みだったわけだし。他の推理小説に比べれば読みやすい小説でしょう?』

「ところで千葉、コナンⅡドナイルはもともと壮大な歴史小説を愛して書いていたのを知っているか? 言い方はアレな気もするがシャーロック・ホームズはあくまでも彼の本命のジャンルではなかったという話なのだが』

『えーそうなの?』

『もともとは本命の歴史小説を書くための資金調達のもりで書いたお軽い大衆娯楽小説が『シャーロックホームズ』という作品なんだ。

小遣い稼ぎのつもりで書いたシャーロック・ホームズが思いの外売れすぎてしまつて本筋の歴史小説よりもお遊びの大衆娯楽小説の方で有名になってしまった。今では“シャーロック・ホームズの生みの親”コナンⅡドナイルだ。ご本人も大層不服であつたらうよ』

そこにいらぬダメ押しな一言を付け加えることをクインは忘れない。

「おまけに本筋な歴史小説はおもしろいのにホームズの巨大な影に隠されて知名度はかなり低い」

『うわあ…』

報われない恋。というのは表現がまた異なるものなのかもしれないが作者の伝えたい思いや考えが正しく読み手に伝わることなんてことはめつたにない。あくまで文字という媒体鏡を通した光は屈折した形で心瞳に映る。

「大きな光は目はほかの光もくらませるといふやつかな。

書き手の思惑なんて半分も読者には伝わらないものなのだよ。読者のイメージは身勝手にも作者の存在まで固定化するつてな。

文字という媒体を使う以上はどうしようもないことではあるし、物語を創る代償のひとつとしては安いものだど知り合いの作家は言っていたがな」

「今回の事件はそれと同じ感じがするんだよ。殺人鬼の一件も私たちが思っている以上に入り組んでいるだろうし殺人鬼という大きな目に付きやすい事件の影でなにか別の見過ごしてはいけないものが動いている気が私はする。」

だから〈円卓〉にも深入りさせすぎないよう曖昧にぼかすようにして問題の選択肢を広げるだけ広げてきた。末端が下手を打って取り返しがつかなくなっってはたまらない。

クラスティ殿がいなくて正直助かったよ、あの人を騙すのは骨が折れるからな」

あくまでも〈円卓会議〉は切り札でなければならぬ。いつでも切り札はきれるようにしておかなければならないが、いつも見せびらかしておくのは滑稽だ。大は小を兼ねるかもしれないが小で済むものをわざわざ大で済ませる必要はないし、代えが利かない究極の一手である大よりも代えが利いて小回りの利く小の方が序盤の手探りとしては正解だ。

「そんなわけで、これから下水道に潜るからとりあえずアキバの南口の近くにある用水路の橋の上で待ち合わせな」

『は？なんで下水道の探索なんてしなくちゃいけないの？』

「犯人は〈動力甲冑〉を持っている。これは覆しようもない事実だ。お前が見た熊みたいな大男のイラストとさつき見てきた〈動力甲冑〉〈ムーブルアーマー〉、あんなに似ていればどうしようもなく決まりだろう。普通の人間が〈円卓会議〉の包囲網から逃げ切れるものか

あと探していない場所といばせいぜいこの街の地下だろう。なら下水道だろう。汚らしい下水がお似合いだ」

『わたしたちも下水がお似合いなの!』

「毒を食らうは皿までというじゃないか」

『下水をテールに出されたら一目で食べ物じゃないってわかるじゃない!』

「はははは」

『笑うな!』

「まあ、冗談はさておき、千葉のことを〈冒険者〉と呼んだなら、

大地人しかありえないだろう。そして大地人の被害者が出ていないのなら衛士以外にないだろう」

衛士は街の治安を守る。大地人を守るための存在。

言い換えるならば治安を乱す部外者冒険者を殺すための存在なのだ。大地人身内は殺さない。それは衛士の不変のルールであるから。

「変なところでゲームだからな、この世界」

常識にとらわれすぎないことも大切ではあっても、この世界はどうにも都合よくルールが出来すぎている。根底のところゲームのところと変わりなくてその上に現実の常識を上澄みしたかのようである。この世界はひどく歪な形をしているようにクインには見えた。

◇◇

男は眠りについていていた。

そこは人が本来住まうような栄誉ある人類が文明としての誇りを持って作り上げた住居とはとてもいえないような場所。汚臭ともいえないような臭いが漂い、外からの光など届くわけもなくか細いランプの光だけがそこを照らしている。

身に着けるのは無骨な青銅の鎧と白の仮面。そして眠りにつく男が抱きすくめるように支える一振りの刀。

座り込んだ体勢で眠る大男は夜に向けて眠っている。昼のうちは傷がうずく。身の丈も超える大きな薙刀を振り回し見たこともない動きをする女に傷つけられた右腕は完治するまでに幾分もの時間がかかっていた。元来の強大な防御力を前提としたムリブルアーマーには回復にまでもその膨大な能力を割くことはしていなかった。もといそこまでの能力を割く必要がなかった。

夜になれば傷の痛みも感じることはなくなる。なにかに飲まれるような沈み込む感覚に酔えばそんなものなんの障害でもなくなるのだ。間の抜けた、愚かしいゴキ冒険者冒を斬り捨てることになんの支障もきたすこともない。だから今はただ眠りにつく。うっとうしい痛みを追いやるように。

ぽつ、ぽつ、ぽつ、規則正しい水の落ちる音だけが男の鼓膜を揺らしていく。

ぽつ、ぽつ、……、水の音がほんの一瞬だけ途絶えた。その僅かな変化に男はその仮面に隠された瞼をゆつくりとあげる。

どうやらついにここにたどり着く害虫が現れたらしい、それならそれで殺してしまえばいい。ただ殺す対象が変わっただけで、殺す時間帯が変わっただけ。男にとってなんの不利益も利益もない。ただ崇高な使命を果たすだけであると、その腰をあげ鞆に収まった刀を引き抜く。

刀はランプの僅かな光さえも喰らいこみ鈍色の冷たい光だけを反射する。男が刀を抜いただけで辺りに冷気が吹き込み先ほどまでどこからか聞こえてきていた水音も刀から吹き出す冷気の風の音にその僅かな音さえもかき消される。

「寒いな…、どうもボクはあまり歓迎はされていないらしい。まあ当たり前前といえば当たり前の反応か、所詮はこんなところに身をひそめる殺人鬼だもの」

そんな緊張感もかけらもないような舐めきつたような声に男はいらだちを覚えた。姿はよく見ることはできない、〈冒険者〉が好んで使う灯の魔法の姿はなく、この場を照らしているのは男が使っていたランプの光だけだからだ。

「舐めているんじゃないよ、これは余裕というんだ」

その声は女のもの。どこかで聞いた声に似ている。その声を聞くと右腕の傷が疼きズキズキと燃えるような熱が男の腕をむしばんでいく。その痛みから逆算するようにその声の主を思い出す。顔を見るまでもなくそれは憎しみの対象であり、この煩わしい痛みの元凶を植え付けた張本人。

ならば男のとる行動は一つしかなく、なんのためらいも容赦のかけらもなく女を殺すことだけだった。そのふざけた存在を静かにさせるために男は女に飛び掛かった。

……つもりだった。

男のその巨体は殺すという意味とは真逆に背後へと跳び下がっていた。

「へえ、野生の勘ってやつなのか、英雄の経験則ってやつなのか、自分

が勝てない相手くらいはわかるのか。

なんにしても、情けないなエッツの英雄。こんな未練がましく凡百に無理矢理引っ付いて現界して情けないったらありやしない。衛士の方も着せられてるようなものじゃないか、そんなんじやすぐに意識を飲まれるぞ」

さして心配した風でもなく女の声は男を見て語る。何が見えていいのか、何もかも見透かしたようなことを言っただけのける。

それに返事を返すことをしない男は低い獣のような唸り声を上げるだけで身じろぎの一つもしなかった。目の前にいる女が自身を傷つけた女ではないことはすでにわかったが、それよりもずっと恐ろしい存在であることだけがわかったただけだった。今、男の頭の中にあるのはどうやれば生き延びられるかのただ一点のみ。近づいた瞬間にわかった目の前のこれは自身が勝てるような存在ではなく圧倒的な力を得た自身よりもずっと埒外の存在であることを。

「ほれ、なにをぼさつとしてんだ。さつさと逃げなよ。見逃してやるからさ、ボクの前からさつさと失せろ」

女の視線は男の持つ冷気を発する狂気の刃よりもずっと冷たい冷気を帯びていた。なぜこの化け物が自分を見逃すのかましてや自分の身のうちにいる怨霊の存在を知っているのかは定かではないし、理解はできないがもとよりこの存在は理解の外にある。理解できないから埒外なのだ。男は素直に女の言葉通りに^{ムルブルアーミー}〈動力甲冑〉の特権である転移を用いて化け物の前から姿を消した。

「む…、この感じは一姫ちゃん…？今度はボクが出迎えることになる番なのか。

一姫ちゃんめ、もうボクのところまで嗅ぎつけてきやがったな。おまけに千葉まで連れてきて、まったくあの子はこういうことやらせたらつくづくめんどうだなあ」

百恵は彼女にしては珍しい悪態をつく。

クインに会うこと事態は別に面倒なことではあっても構いはしないことではある。彼女自体は自分を止めるような頭の方はともかく物理的に百恵を止める力がないからだ。そして何より彼女には止め

るだけの言葉が足りていない。ただし、千菜の方は会いたくない。自分がやっていることを知られたくないし、邪魔をされたくないから。もしかしたら、万が一とはいわなくとも億が一にでも決心が揺らいでしまつてはいけないから。

「腹を決めて探偵さんのお説教を受けるとしようかな、そしてピンタくらいなら素直に受けよう」

〈帰巢呪文〉で逃げることもできないこともない。

だが、それは百恵にとつては必要性のないことだ。千菜と会うことは面倒でしかたないけれども会わない理由が百恵にない。これからの予定に千菜と会うことで生まれる支障など皆無で会つても何の問題もない。避ける必要のないものをわざわざ避ける道理は百恵にはなく必要性を感じないことを実行する選択肢はないからだ。

そうして百恵は紅き名探偵と覇姫を待ち受ける準備をする。準備といつても先ほどまで出もしなかった〈燈明招来〉^{バグズライト}を唱えて明りを用意するだけ。ランプの光よりは幾分か大きくなった光が彼女の金髪をに当り薄暗い通路の中で目立たせる。これで少しはクインも見つけやすくはなつただろう。

それでもそれ以外は何かここに近づいてくる彼女らのための気遣いをするでもなく、むしろ長い長い白銀の太刀をへ魔法の鞆^{マジックバツク}から引き抜きコンクリートの地面へと易々と突き立てた。

わざわざ腰を落ち着かせて二人を出迎えるつもりなんてものは彼女に毛頭なかった。

第四十七話 リベンジ

〈マジックトーチ〉の黄金色こがねいろに輝く光だけを頼りに、片方がグチグチと文句を垂れ流し、もう片方はそれを甘んじて受けながら地下の薄暗い道を歩く二人組がいた。

紅いスプリングコートに紅いブーツ、全身を真っ赤な衣装に身を包んだ二人組の片割れは相方の長ったらしい愚痴にとうとう愛想が尽きたのか、腕を組んだままずっと遠くを見ていた視線をすつと閉じ、もう一人の自分よりもはるかに長身の相方の方へと体を向け、歩みも止めた。それにつられて片割れの方も歩を止める。

「千菜、先に謝っておこうと思うよ。ここから先で、もしかしたらすごく嫌な思いをさせるかもしれない」

「何？もう割といやな思いしてるんだけど…。下水なんか歩かされてるんだけど、まだなんかあるの？臭いやばい、わたしお風呂入りたい」
「真面目な話んだけど」対して真面目に取り合わない友人にそれでも諭すように少女は語り掛ける。少女の真面目な顔に少しは空気を讀んだ千菜は「何？」と先を促した。

「たぶん、この先にはもう殺人鬼はいない。」

さつきから縄張りを示すような痕跡がいくつもあつたのに殺人鬼はこちらを襲いかかる様子がないんだ。千菜から聞いた限りだったなら、待ち伏せして待ち受けるなんて蕭々な奴じゃないだろソイツ」
「……そう。ま、それならしようがないんじゃない。」

クイン、さつきと帰ろ？殺人鬼がいらないなら別にもうここに用なんてないでしょ？」

嫌な臭いが充満する下水から抜け出せることに、やった！と小さくガッツポーズを決める千菜の期待を裏切るようにクインは首を横に振った。

「それが…、そうもいかなかった。私たちとは別で、誰かここに来ている。」

「たぶんこの奥にいる」

「誰かはわからないんだよね。」

それでここに戦闘の気配が伝わってこないのなら、それは殺人鬼の仲間か、それともつてなるんだらうけど、仲間つてのはないってわけか。あれに仲間がいるなんて正直思えないし」

「そう、そこでなのだけど…」

クインはその先を話すことを一瞬躊躇する。

そこから先は話すべきではないものだと考えているのか、しかし話さなければならぬ事柄だと理性が告げている、そういった面もちだ。

そのクインの顔を見てみるにみかねたのかクインの頬を両手で引っ張ってグイツと顔を間近まで近づけた。

「ひゃひほふふ。ほふは、ひひゃい。ふほふひひゃい」

「話してよ、いい加減に隠し事はなしにして欲しい。どうせろくでもないこだつてことくらいはわかってるからさ。兄さんもクインもわたしに隠し事なんてできないことくらいわかりきってるじゃない」

ばちんとクインの頬をぎりぎりとはひっぱりあげていた両手放す。千葉の馬鹿力にひっぱられたクインの頬は真っ赤になつて見るからにいたそうだ。

それでもクインは千葉の言葉を受けて何も話さないようなことはできなかつた。今回の非はこちらにあるとわかつたからだ。あまりにも秘密主義が過ぎた。奏の意見を尊重させすぎた。

探偵としては正しくとも、千葉の友達としては間違つてるだらう。不誠実だつた。

「この先にはたぶん百恵さんがいる」

「ちよつと待つて。なんでここで姉さんの名前が出てくるの？あの人見つかつたの？」

「もう二か月くらい前には見つけには見つけていたよ。」

ただ、奏がこの街を出ざるおえなくなつたのもお前の姉が原因だ。天秤祭の夜に奏の前に現れて散々と勝手なことを言つて奏を否定していった。だから奏に黙つているように口止めされていた。……すまない。

今度は何を企んでるのかしらないけれど絶対にいいことじゃない

のはわかるよ」

クインは語りだす。チョウシの町の防衛戦で彼が一度殺されたことも、奏が鬱陶しくもつらつらと書き連ねた手紙に書かれていたことも、そこで奏が二度目の死を迎えたことも、そして自身の在り方を見つめなおすためにアキバの街を離れたことも、奏がいなくなつてからクインが調べたことを、今まで隠してきたこともすべてを千菜に打ち明けた。

それを千菜は黙って聞いていた。すべての話を聞き終えた千菜が出した第一声は、
「そう。」

それならわたしは、黙つてるしかないかな。兄さんがこの街から出たんだつたらそれなりの覚悟はしたんでしようし」

「……いいの？ 本当に実の姉と兄が下手をしたら殺し合いになるかもしれないんだぞ」

「そのときは止めるよ。」

でも、知つてた？ 兄さんはともかく姉さんの方はわたしは仲がいいわけじゃないの。

歳が離れすぎてるのもあつてさ、物心がついて少しは考えが回るようになった頃にはもう姉さんは家にいなかったしね」

千菜は少し寂しそうに、そしてつまらなさそうにそう話した。

「だからさ、わたしにとつては兄さんの方がずっと大事。だから一発は姉さんをひっぱたく。兄さんの方はぶん殴つた後に抱きしめる」

「仲間はすれなんて寂しいじゃん」千菜は董のように小さく笑みをクインに見せると先へと歩き出した。その足取りはさつきよりも確かではつきりとしている。

その背中を見たクインは一つため息をついてあとを追った。千菜はクインや奏が思っていたよりもずっとタフだった。こんなにも動じずに前向きに返されては氣遣いを回してきたのがばかばかしいと心底思えた。

「まったく、啖呵を切る時だけは、兄妹そろつてかっこいいんだから」
野に咲く花は、人が考えているよりもずっと強い。

日に焼かれようが、雨にうたれようが、風にさらされようが、雪に埋もれようが悠々と咲き誇る。散り様さえも美しく弱さなんて見えない。

いつまでも清く正しく美しく、絶えず儂く強かに、それが奏儂千菜の本質。

「こんにちわ」

二人の背後からだった。

今まで気づきもしなかつた気配に二人は振り返り、千菜はとっさにクインを庇うように肩を引いて自分の背中の後ろへと追いやった。千菜のとっさの力にエンチャンターへ付与術師の貧弱な筋力で抗えるわけもなくあっさりと引きずられ、勢い余って「きやいん！」と年に合わない見た目に合つた可愛らしい悲鳴を上げて尻餅をつく。

「あらら、一姫ちゃんは相変わらず運動の方はからつきしかい？」

ふふふ、あんまり二人が来るのが遅いからこちらから出向いてきちゃったよ」

「あんまり、趣味のいい登場の仕方じゃないよ。殺人鬼が根城にした場所だつてんだから尚更ね」

千菜は目を細めて実の姉を睨みつける。趣味が悪いと罵りながら自分が転ばせた背後の友人へと手を差し伸べた。視線は百恵に向けたまま、手だけをクインに差しのべる。

今は百恵から敵意のような百恵が冷たいものは感じられないが、それでも奏を斬り捨てたのは覆しようもない事実なのだ。警戒を解けるような甘つちよろい思考回路は千菜は持ち合わせていなかった。

「そんな怖い顔で睨みつけてないでよ…。ボクは君たちに危害を加えるつもりなんてない。むしろお話くらいしようかと思つて逃げずにここに来たんだからさ。ガールズトークしようぜ」

「そんな嘘っぽいしゃべり方をする人相手に警戒なんて解けるわけな

いじゃん。

むしろ兄さん殺しといてよくわたしの前に顔をだせたね、どれだけ面の皮が厚いわけ？」

怒気と敵意さえも感じる千菜の声。

それでもまだ彼女は怒っていない。ただ百恵の口調も相成って想定よりもずっとイライラはしているようだがそれでも随分と熱は低い、クインはそう感じた。

一発ひっぱたくと口にした千菜だったが、最悪出会い頭に殴り掛かることはやるかもしれないとクインは考えていたからだ。それくらい腹に据えかねていてもいいだろうとは考えていた。

そもそもいくら死んでも生き返るからといって家族を殺されているとわかって平静でいるほうがおかしい。頭がおかしい。それも家族に家族が殺されていればなおさらだ。

だから一発はひっぱたくと宣言したときクインは危ないなど感じた。

それは熱が低すぎるだろうと、危機感を感じた。クインに強がって見せて、いざ百恵に会ってみたら殴りかかって、間違いでも殴ってしまい衛士のご用になってしまうなんてことになれば目も当てられないだろう。

衛士を捕まえに行つて衛士に捕まるなんてどんなウロボロスの輪だ。

「手厳しいなあ、これは」

百恵の目は笑っていた、奏の姉らしくすがすがしいほどに凄惨に、話を自分のペースで進めは始めようとしているのがわかる。

このまま千菜に話させるのは不味いのは火を見るよりも明らかだった。

あくまで千菜はボディガード、クインは専門外のことまでやらせるわけにはいかない。

これは友達であっても譲れない。クインにとつても奏儂百恵とは話さなければならぬことがある。考えるのが自身の役目だからと

いって自分が損な役回りをする事まで請け負ったつもりはないし、自身を殺してまでやるほど献身的な性格はクインはしていなかった。「千葉、チェンジだ。口喧嘩はわたしの専売特許だから、というか、わたしにやらせろ。この人には言いたいことが山ほどある」

「あら、久方ぶりの姉妹の再会を邪魔するなんて一姫ちゃんひどいなあ。一姫ちゃんはボクのこと嫌いだと思ってただけだなもしかして以外とボクのこと好き？」

「嫌いだよ。大嫌いだ。」

貴女がわたしに好かれることなんてしたことはないし、好かれる道理なんてただのひとつもないだろう。

まず、その舐め腐ったしゃべり方が気に入らない。人の劣等感に直接塩でもすりこむようなその神経が気に食わないよ。

あんた、わかっててやってんだろ。」

珍しくクインが隠しもしない感情を露わにする。憎々しげに、心底不愉快そうに顔を歪めてそう告げた。

「……へえ、昔よりずっと口が回るようになったじゃない。なんていうのかな、成長したっていうんだらうね、昔みたいにとるに足らない存在なんて扱いはできなさそうだ」

「あなた、なんで奏を殺したんだ？」

一度ならず二度までもあなたなら別に方法なんていくらでも考え付いただろうに」

クインは半ば無意味とわかっているけど、どんな答えが返ってくるかおおよその見当はついていても、それでも問いを投げかけた。

「人は痛みから学ぶことが一番覚えがいいから」

そうだ。

百恵の答えはわかっていた。

人は幸福からは学ばない。人は痛みから学ぶのが一番効率よく学習する。

だから、最上級の痛みをもってして学ぶのが一番いい。

「ばかは死んでも治らないっていうけどさあ、それは死んで生き返れないっていう結果があるから死んでもなおばかの烙印を押されてい

るんだよね。

死んだやつ周りの人間はその死から学ぶことはできても、死んだ本人は何一つとして学べない。

そりゃあばかと言われても返す言葉もないよ」

「だから人はその愚行を行わないよう必死に学ぶんだろ」

「でもこの世界は“死”という人の痛みの中で最も重い痛みから学ぶことができる。なにせ生き返れるんだから、イエスよろしくね。

ならその手段をとらない理由がないだろう？」

「あなたは心が強すぎる」

気持ちが悪い。ストイックとかそういう次元の話じゃない。正しくとも間違っている。正しすぎて間違っている。クインは混じり気もなく純粹にそう思う。

昔、現実の世界で奏から聞いたイエスの逸話、すべては他者のためにあらねばならない、この世のすべてのものに価値はない、人としての根本を否定するその考え方と形は違えど同質の異質さを感じる思想。

「……なんですよ？」

なんで、あなたはそうなんだ。

確かに奏は間違っただけかもしれないけれど、あなたはそんなこととはしちやいけなかっただろう。真っ向から奏の全てを否定するよいうなことを。

家族なのに、あなたが奏との絆を断ち切るような真似をしちやだめだったでしょう!?!」

「勝手なことを言わないで、一姫ちゃん。それはあなたの価値観、わたしの価値観とは違うわ。

わたしにはわたしの価値観があつて考えがある。

あなたの価値観は尊重するけど、わたしとあなたを一緒にするのはお門違いよ」

一姫の言葉は届かない。言葉を交わすには二人の価値観が違いました。

お互いを理解できないから初めから会話が成立していない。

いつのまにやらクインの口調は千葉を諫めようなどと考えていたとは思えないほどに崩れてしまっていた。

それでも言葉を放たずにはいられなかった。

「奏は間違っただけかかもしれないけれど、あなたよりはずっと正しかった」

「なんともいいなさい。わたしは止まる気なんて微塵もない」

それが決裂の言葉だった。

会話は至極短く大した喧嘩ともいえなく終了した。否、元から話は破綻していたのだ。

その言葉をきっかけにして千葉が会話を終わらせる。二人の会話を十分とみたのか、薙刀を抜き放った。百恵は後ろへと飛び去るがその刃は百恵に向かって抜き放たれたものではなく無機質なコンクリートの地面を深く切り裂いた。その切り裂いた溝は深く暗闇の中では底まで見通すことはできそうにないほど深かった。

「もう十分でしょ、ふたりとも。クイン、わたしも頭が冷えたわ、これ以上は時間の無駄にしかならないって

姉さんも引いてくれるよね？もうわたしも別に話したいことはないし。姉さんがなにを考えているかは知らないけれど、結局は兄さんがアキバに戻ってこないと話にならないんでしょう？」

「それとも姉さんは兄さんが今どこにいるのか知ってるの？」

「いや、知らないよ。」

今回は珍しく何のボロも残さずに消えたものだから、今あいつがどこにいるのかはわたしにはわからない。けどいつまでも待つてやるつもりはないかな。

もしあいつと連絡でも取り合ってるなら伝えておいてよ、遠くないうちに答えを聞かせてもらおうからアキバに帰ってくるようにね。

今回の殺人鬼の騒動はうってつけた。君たちもあんまりアレの正体に気づくのが遅いとアキバは人が住めない街になるかもよ」

「ちよつと待て！…どういうことだ、あなたは何を知っている!？」

「探偵の君がそれを聞いちやだめだろう。ただヒントをあげるなら、

その答えじゃまだ半分だ」

「クインっ！だめっ!!」

クインの百恵を問い詰めようと伸ばされた手を引き戻させるように千葉がクインの体を引き込んだ。

次の瞬間には百恵の細腕がコンクリートの地面に叩きつけられ、そのたったの一撃で大穴が空き千葉が切り裂いた溝よりも深い穴が空く。

それは飛び越えることはできないような幅と深さの大穴であり、まるでクインと百恵との間にある確執を顕すかのように深く広く黒く広がった。

「それじゃあ、さようなら」

百恵は今度こそ消える。超えようのない溝を挟んだふたりに背を向けて

「くそっ！くそっ！くそっ!!」

なにがへ紅の名探偵だっ！お笑い種にも程がある！あの時からなにも変わつちやいないじゃないかっ。

またっ…またっ…、わたしはっ…」

大きく開いた暗闇を前で膝をつき大声をあげて、拳を何度も何度も瓦礫が散らばる地面へとお構いなしに殴りつけるクイン。

その小さな背中では震えている、その拳は赤く染まり始めている。

その声は……

「赤道一姫!!聞きなさい!」

広がった大きな空洞の中を吹き抜ける空洞音をかき消さんばかりの声が空気を揺らした。その声に少女の背は振り向くことはしなかったけれど、散らばったコンクリートの破片にその小さな拳を殴打し続ける自傷のような行為が止まった。

ただそこには背を丸めたまま下を俯く少女とさつきまでとは違う強さを感じさせる目をしたひとりの女が立っている。

「あなたは確かにあのばか姉を説得出来なかった、あなたの言葉じゃあの人には届きもしなかったでしょう。あなたの力言葉なんかじゃ今回の一件を終わらせることはできない。

あなたは今回の一件に関して感情をむき出しにして、引き際も間違えて、まるで探偵としては失格よ。本当にお笑い種ね、なんなら高らかに笑ってあげる」

散々だった。まるでかませ犬のように実に無様で、なんにも現状に好転もあたえない。なにをしにきていたのかすらもわかりやしない、と。その様は弱さの象徴、敗者のそれだと罵った。

「それでも、忘れないで。」

あなたの想い言葉が届く人がいる。あなたの願言葉い言葉がその人を変えることができる。

少なくとも、ここでわたしは、姫は、あなたの言葉に心を震わされたわ。

あなたにここで脱落する権利はないわよ、まだできることもある。惨めでも最後まで事の顛末まで立会いなさい。

それが責任というものでしょう?」

少女は立ち上がる。もうその背は震えていない。彼女は振り向き千菜の眼を真っ直ぐに見据えてこう言った。

「帰ろう。そして奏を呼び戻す」

振り向きざまに瞳を拭った右手が僅かに光った。

第四十八話 龍神の手ほどき

「主は一応にも儂の結界を無理矢理こじ開けてここに入ってきたわけじゃが、そもそもお主は結界がどういふものなのか理解しておるのか？」

まあ、しておらんじやろうが…、本殿へと上がり込み一人では持て余すだろうほどに広い母屋の中を奏にあらかた案内し終えた龍神アサハナはそんな風に後ろを歩く奏へと語りかけた。

「いきなり手厳しい…、外からの干渉を拒絶する、内側と外側を隔離させるってというのが結界の役割なんじゃないですか？」

「違う。それは結果に過ぎん。本来の用途はまた別じゃ。やはり境界を防御壁なんぞに使うような奴が本質なぞ理解しておるわけがないか…」

呆れたようにやれやれと首を振るアサハナの態度にすこしむっとしてしまう奏だが、自分がそういった魔術学問に対して深い知識を持つているというわけでは決してないので口ごたえができる立場にないことはわかっている。

〈冒険者〉は根本的にはきちんと自分がなぜ魔法を使えるのかにたいして明確な答えを持つているわけではない。ただ、この世界にきてゲームみたいだから同じように魔法を使ってみようとしたらできてしまっただけ。そこになにかしらの修練があつたわけではないし、せいぜいレベリングをするくらいが関の山だろう。そういった意味では〈口伝〉もただの応用でしかなく土台がもとからあつて、一から造り上げた魔法ではないということになる。

「まあいい。儂はお前さんが破つた結界の修復をする、ちよつとそこで見とれ。主にもわかりやすいようゆるりと貼り直すでの」

「貼り直すつてどこで？俺が境内に出たときに結界を破つた裂け目なんてなつかたような」

「それは幻術で見てくださいだけを整えてるに過ぎん。きちんとして知識と技術を持った術者からみればとたんに看破できる。主でもここにくるときには祠を見つけた、あそこには人払いの術をかけておつた

んじやがなあ。それと一緒によ、見るものからみれば違和感くらいは持たれる」

広い庭を一望できる長い廊下を進んだ先には大きな独立し建物が母屋とは別に、母屋に囲われるような形で建っていた。アサハナの後ろをそのままついていこうと建物の敷居を奏がまたごうとしたとき、

「ああ、敷居はまたぐなよ、死ぬぞ」

「うおおお!？」

「なんじや、あひるの子のように律儀についてきよったのか、愛いやつめ。」

しかし、ここから先は主の身体の方はともかく今の自我が耐え切れぬ空間ではない。おそらく入ったら自殺願望に囚われ自ら命を絶つて血色のデミグラスソースをかけたハンバーグの出来上がり。人を食うなら生のままがぶりといきたいから決して入るなよ」

「猟奇的なこと言わないでもらえます!?!?ていうかなんでデミグラスソースとかハンバーグとか〈冒険者〉の風俗を知ってる!」

「言つたじやろ、お主の頭の中を覗かせてもらった、と。」

理解しとるよ主らが異世界からげーむとかいう世界にうりふたつこの世界に迷い込んでしまった者たちということは」

「それじゃあアンタ…」

「なんじや? 儂がこんなにも平然としていることが不思議か?」

自分が作られた存在でありこの力も記憶も全て作り物の偽りだと絶望に打ちひしがればよかったか? そんなことはまやかしたと失笑にふせばよかったか?」

アサハナは前へと進んでいく。

アサハナの進む先には境内からも見上げることができた巨木の幹が見えていた。建物の中は真っ暗で一点を除いては闇に包まれ中を伺うことはできなかつたがどうやらその巨木が生えているところだけが天井はなく吹き抜けになっているらしく太陽の光が後光が差すように落ちていた。その光景はここにきて奏が見てきたどの美しさよりも美しく聖域と違って間違いのないものだった。言い表すならそこが本当の理想郷というのだろうか

「——バカを言うなよ、小僧。」

そんなことで絶望に飲めれるほどにこのヤマトの地に顕現し何百年という時間を見守ってきた龍神アサハナの魂は陳腐なものではない。何百年と積み上げてきたこの魂と力、己自身が疑って誰が信じるというのだ。他人が自身を否定するのは構わん、それは互いに相手を肯定させるために糧とすればいい。だがな小僧、自分が自分を否定して何になる、ただの徒勞にしかならんわ」

巨木の根元、アサハナの白い手が巨木へと触れる。すると風もないというのにざわざわと巨木が呼応するように揺れ始めた。

「今は儂の言葉も主には本当の意味では伝わりえていないじゃろう。お主をほんとうに理解する者の言葉げなければ響かんし答えはえれんじゃろう。」

だから今は学べ、そして磨け、答えを得た時に力を存分に震えるように」

「大地は天命が尽きるまで我と共に。」

大地は礎となり、

木々は恵みを、風は無限の道へと変わる。

我が道の先に遮るものはなし。

後には羨望と繁栄だけを残し、

行き着く先は孤独。

不変の理想を叶うがために、

愛は理想へと変わりえた。

だがその道に一切の後悔はなく、

充足の満ちと花の冠だけを掴み得た」

奏とアサハナの距離は遠く葉の擦れ合いどこから生まれた風の吹き通る音が遮ってこようと、けれどその詠唱はなぜか一語たりとも聞き逃すことはなかった。心のどこかに引つかかった。

アサハナの魔力が膨れ上がる先程まで視認できていた魔力が螢火だったかのように巨大に強く瞬いていく。立ち登り広がっていく魔力は巨木を通してこの世界に広がっていくのだらう。世界の胎動を感じるような錯覚に落ちるようなその感覚はザントリーフでシロエ

が行使した〈契約術式〉と同種のものでありこのどこまで大きいのかも測れない結界の中が充足していく感覚に襲われていた。

「ほれ、修復は終わった。呆けておらんでゆくぞ。時間は有限、お主にあまり多くの時間は残されておるわけではなからうて」

さつきまでとは空気が違う。アサハナの施した結界への処置が終わった途端に空気が一変した。修復前に重みがなかったわけではない、むしろ完全な神域というものの重みが想像していたそれとは違いすぎていた。圧力や完全さなどは感じずむしろそれとはまったく逆の感覚だった。言うなれば水の中。冷水のように透き通り、軽く、どんなものも受け入れるように馴染んでいくそんな感覚だ。

もう一度、背後に閉じる扉の向こうにそびえる新緑の巨木を振り返ったあと、アサハナの向かう先へと駆け出した。



「それじゃあ、答えを教えてくださいよ」

「すこしは自分で考える努力をせぬか…」

「むしろ、俺はさっきのを見ちまったせいで昂ぶってる。はやくやりたくてしょうがない」

わくわくと落ち着きなさそうに庭の石畳を左足で蹴ってみたり両腕を伸ばしてストレッチをしてみせる奏

「…子供みたいなやつじゃの。」

よいか、結界というのは本来は内側の存在を外界に通さないようにするためにつくられた術。いっけん聞くとお主が言っていたようなことと同じことに聞こえるかもしれないがこれは大きく異なる。外側から内側への干渉を防ぐのではなく内側から外側への干渉を防ぐことが本来の用途になる」

「…馬鹿でもわかりそうな例えをあげてください」

「そうさなあ…、あれじゃ、ぬか漬けが入ったぬか床があったとする。そのままじゃ臭くてかなわん、だから蓋をする。みたいな感覚かの。冒険者風に言うならば。ようはあれじゃ、ぬか漬けに虫が入るよりも臭いの嫌じゃから壺に蓋をするみたいな感覚」

「なるほどーすごくわかりやすい」

はてなマークを頭の上にくつもあげていた奏にアサハナがわかりやすい例えを挙げてやる。流石、奏の頭の中を覗き込んだだけあつて例えが実に庶民的で子供にも分かりやすそうな例えだ。

「話を戻す、ここで重要視するのは結界は内側のものに対しての効果の行使が本来のあり方であつて、お主がやっておるような結界破りや境界を用いての防御は本来の用途とは大きく異なるということじゃ。

まあ、のお主の妹御がやっているような雑刀で掃除をするみたいな突飛な行動か」

「今度の例えは実に受け入れがたいぞアサハナ様」

奏がやっていたへハーメルン〉のギルドホームや千葉の部屋への侵入は本来の用途ではなく、へ黄金領域〉による絶対防御ですら本来の用途とは大きく異なっていた。へ黄金領域〉の雛形であるへ聖域結界〉も本来は周囲から身を守つてセーフティーゾーンを作るためではなく、ただ結界の内側にいる自分たちの気配を断つことでモンスターから察知されないようにするのが本来の用途だろうという説明を受けた。

存外、最初期の方が結界をエルノとの密談に使つたりときちんと使いこなしていたというのは皮肉な話である。

「つまりは、結界は内側に自分が望んだ世界を創り上げるのが本来の在り方というわけじゃ。

結界の外には意味は求めておらん。封印術の派生系とも言えるの結界の中であれば自分よりもどれだけ格上の存在でも弱体化できる。いわば地の利を得るわけじゃからな。そうやって古来から力の弱かった人間たちが魑魅魍魎の類から身を守つてきた」

「じゃあ、それが出来れば勝てるのか…?」

「あるいは…の。だがそれにはお主にその場しのぎではない戦^答う理由^えが必要じゃろ?」

百恵に求められたのは自身の在り方の根源だ。在り方を正せ、カナミだけを抛り所にする生き方を、本当の意味で全精をもって自身を凌駕するだけの理由を見つけれ。それを見つけれなければ百恵は止まることなく奏を執拗に立ちほだかり続けるだろう。

「戦^答う理由^え、か。

俺の剣には今、重さがなくなっちゃった。

元からあつてないような重さだったのかもしれないけどな」

今の奏の振るう剣には重さがない。かつてはあつた偽りの理由で振られていた剣でも奏が信じて疑わなかったゆえに重かった。淡くても信じる光を失った今よりはずっと重かった。

「そのための儂じゃ、任せておけ。」

手はある、だからそんな顔をするな、せつかくすこしはマシになった顔をしたかと思えばすぐそれじゃ。なんじゃ、元気づけて欲しいのか？ いい子いい子してやろうか？」

「やめろ、撫でるなそしてニヤけるな。アンタほんとうに神様か!」

ニヤニヤとまるで偉大なヤマトの人柱とは思えないような笑いを浮かべながら奏を撫で回すアサハナ。信者が見たら卒倒しそうな光景だ。卒倒したあとはさらに妄信しそうでもあるような楽しそうな笑みだが

「じゃあ今から酒を飲もうか、お主なかないける口じやろう？ 付き合え酒を誰かと一緒に飲むのはひさしぶりよ」

「昼間から酒なんて飲めるか！ 時間は有限とか言ってたのはアサハナ様だろ!」

「無駄じゃ無駄。御神酒引きというであろう、まずは親交を深めることからじゃ。お主の記憶を覗いただけではいまだわからんことが多い。酒を飲みながら語り明かそうぞ」

龍神アサハナ。ヤマトの大地の神であると同時に酒の神でもあり、アサハナを祀る華の都セレスステナでは彼女の造る桜酒は特産品として多くの酒好きに好まれている。

アサハナは供物品が届かなくなってもセレスステナへ使いを出して酒を届けさせることは怠らなかつた。好きなものは手間暇かけて造ることから始める凝り性なヤマトの人柱である。

「まずは、らびゆたとかいうのについて聞かせよ。らびゆたはほんとうにあったのか？」

「なぜ数ある選択しからラピユタ!」

奏はアサハナに肩をがつつりと組まれて引きずられていく。単純

な腕力の差で引きずられてしまうものだから抵抗のしようがない。せめてものと口だけは絶えず動かしていた奏だったがアサハナに右手には大きな酒瓶が握られ奏を無理矢理胸元まで寄せて酒瓶をつっこませて黙らされ形無しであった。

それから奏とアサハナは酒を昼間から酒を飲みながら語り合った。ラピユタは存在しないこと、ドラえもんはタヌキじゃなくて猫であること、プーさんは本物の熊じゃなくてぬいぐるみであること。

はつきりいつてしようもない無駄なことばかり話した。

そうしてくだらないことをしていればだんだんと日は暮れていき餅つく兔を乗せた月がこくこく登っていく。

「いいのおく、その大盃。どうじゃ？ 儂に譲らんか？」

「やらん。気に入ってるんだよ、この盃は」

奏はへ乙姫の大盃に波波にまで酒を注ぎ月を肴にして飲み干していく。それを物干しげに奏の肩へしなだれかかるようにして覗き込むのはアサハナ。二人共顔には赤みがさし完全に出来上がっていた。アサハナも酒の神であり同時に龍なだけあって酒にはめっぼう強いのだがそれについていけるだけ奏も酒には強かった。伊達に焦点が合わないまで飲んで夜のアキバを少し歩いただけで酔いをさませるだけの強さは持つていなかった。

「あとなんか聞きたいことあります？ そろそろ俺も寝たいです」

「ん、むう〜そうか。それじゃあ寝るとするかのお。続きはまた今度」

「なんかあつさりと言いますね」

「あんまり飲んだくれても明日に響くじやろ？ 儂でも二日酔いくらいはするし、厠にこもって吐くことくらいするわい」

「……できればそれは聞きたくなかった」

目の前にいる理想形のような美人が青い顔をして堂々と二日酔いで吐く宣言されるのは男として色々思うところはある。なぜ世の男子の女性幻想というのはこうも容易く打ち碎かれるものなのか、奏はそれについて少し話したくなかったが少しずつ歩み寄って呼びかけてくる睡魔の象徴である布団に返事を返して抱きしめ合う方が大事だ

と諦めた。

「俺は布団を一刻もはやく抱きたい」

「残念じゃが、布団を抱きしめるのはもうすこし後じゃの。先に儂がお主を抱かせてもらおう」

「はっ」

カラリと開けられたふすまの向こうには一人どころか五人でも持て余しそうな程に広い畳の匂いが香る和室。そこにあるのはひと組の布団だけ。酒に酔って帯びていた熱よりもさらに熱い熱にあてられたきがした。

「二夜の甘味な儂い夢を見させてやろう」

第四十九話 奏僂八枝という名の男の心理

「あはははっははっははあっはっはっはははははははは!!」

「そこまで笑わなくてもいいでしょ!!?」

「ふふっ…、すまんすまん。ぷふっ、まさかそんな風に勘違いするとは思わなんだ。」

ぷくっ、ひいい腹がいたい、ここまで笑ったのは何十年ぶりか」

「もとはと言えばアサハナ様の言い回しが悪いんでしよう!」

「いや、それでも流石にソツチの方に一番に思考が回るようなことはそうそうなかろうて、せいぜいほかにも選択肢がいくつか上がるくらいじゃろう。」

それが、一番にそういうことが思いつくとは、ふふっ、このエロガキめ。思春期すぎるじゃろ」

「やめて!もう俺のライフはゼロだ!」

「なんならお主の初めてもらってやろうか?」

「やめてください。お願いします。誰も聞いていないとはいえ女性に童貞暴露されるのは自殺ものすぎます」

本気で頭を下げる奏、その顔は赤面探偵と日頃から顔を赤らめさせているクインの赤面顔にも負けず劣らずの真っ赤っかだ。

そんな奏を見て流石に話がそれすぎたかこみ上げてくる笑いをなんとか押さえつけてアサハナは本題を話した。

「これからお主には過去の記憶を洗いざらい見てもらおう、楽しかった記憶も辛かった記憶も何もかもじゃ。さつきも言うた通り理由や覚悟は過去からの積み重ね、己にとってなにが大切かどつくりと見直してこい」

アサハナはそう本題を切り出した。出会った当初からアサハナがやっている他人の記憶を覗き見る力^{能力}。それを応用して奏頭では自身が忘れてしまった気味でいる記憶を魂魄の魂、つまりは精神の方に蓄積されている記憶を顧みることをしようというわけだ。

「そもそもそういう理由やら決意やら覚悟というものを定めるといっなのはなかなか難儀なものじゃ。」

それは長年培ってきた経験やら出会いそういうものが混じり合い自然と出来る上がるもの、そう確固たる意思をもってこれと指差し選び出せるようなものではない。」

「恋愛といっしょじゃな。好きかなあ〜と思って、好きだなあ〜と思つて、好きだと断言できるようになる、みたいな感じじゃ」

「アサハナ様が挙げる具体例がわかりやすすぎて尊敬する」

「お前さんもいくら儂が魅力的であろうといきなり恋仲になりたいとまでは思わんじやろ？エロいことはしたくても」

「舌の根も乾かぬうちに削りにくるのやめてもらえますっ!？」

やっと収まつてきた顔の熱がボンとまた吹き上がってくる。普段から自分がクインにしていることだけあつて実に耳に痛い話だった。

これからはクインに執拗に茶々をいれ続けるのは止めようと心に誓う奏だった。

「まあ、儂の例えが主にとってわかりやすいのは当たり前前の道理での、これは主の記憶から主にわかりやすい例えを儂が選んでいるからじゃ。」

まあ、それでも？数多ある選択肢からお主にわかりやすい例えを選んだるわけじゃし？もつと褒めてもええんじやぞ？」

「アサハナ様けっこう酔いが回つてきてるだろ」

半日前に出会つたときのような凜とした神様らしさはどこへやら大きな胸を高らかに張つて楽しそうに言うアサハナを見てどこぞの名探偵みたいだと、一人愚痴る奏。

「なあに構わん。むしろこれくらいじゃなければ困るくらいじゃ。魂が持つ記憶の奥底まで潜るわけじゃからな、互いに気心がある程度しれておらんと儂でもちよつと難しい」

存外、酒を交わしたのにもきちん理由があつたらしく、これについては奏は関心せざるおえなかつた。伊達に龍神を名乗っているわけではなく能力も頭の回転のよさも大したものだった。

純粋に奏と酒が飲み交わしたかつたという気持ちも少しはあつたのかもしれないが。

「それでは、甘く、苦い、儂い海へ、浸つてこい。」

帰ってきたときには少しは変わっておるかもしれないぞ?」

いつのまにか息と息が伝わってしまふような距離まで赤面する間もなくアサハナに近づかれていた奏の意識は、柔らかな感触に包まれた瞬間、大きな水の中へと飛び込み身体が水の中を沈んでいく感覚にとらわれた。

「おう、早すぎるじゃろっ…受け止め損ねた」

意識が沈み続ける中そんな声が小さくなっていきながらも聞こえた気がした。

◆◆◆

奏夢八枝という一人の人間を一言で語るとすれば、軟弱者という言葉葉がもつともしっくりとくるのだろう。

恵まれた家庭に生まれ、七つ年の離れた姉がいつも世話を焼き、三つ下のかわいい妹を守ろうとする強い思いも持つことができ、人格者であり実力者でもある祖父に幼少から剣術や武術を教えられ、学生時代もそれなりの進学校で上位に入れるだけの成績を持っていた。友人も心から信頼できる者が数人いたし、特に高校時代には赤道一姫あかみち いちひめという尋常ではない後輩を持つこともできた。

大学に進学することはしなかったが、高校を卒業してからも友人は増えた。むしろ自由な時間が増えたことによりもつと学生時代よりも友人の増えかたは大きかった。

父に進められて日本の様々な場所を巡るような聖地巡礼のようなこともしたし、バイトと称して赤道一姫の探偵活動に手を貸したりもしていた。時には祖父の知り合いのまさに住む世界が違うといったも過言ではないような人たちの手伝いまがいのこともした。

そして何より、〈エルダーテイル〉に打ち込む時間も増した。

不幸なことなど人並み程度にししか経験したことはない。

すべてにおいて無限の可能性があつたのだと思う。

そのための手段も実力も身に付けれる環境もあつた。

努力もした。悩みもした。様々な道も模索した。

われながら実に有意義なものである。

それでも——それだけしても——劣等感コンプレックスは消えることはなかったが。

奏儂千菜には勝てなかった。

『わたしが兄さんの代わりにしてあげる。わたしが代わりに強くなるから』

赤道一姫には看破された。

『わたしがあなたのことを好いていても、あなたはわたしのことが嫌いでしょう?』

奏儂百恵には——とどかなかつた。

『才能のある人間はね、努力という言葉を使わないんだ。』

当たり前にするべきことをいかにも大仰に素晴らしいことだと言葉で着飾るなんて恥ずかしいことだからさ』

自分よりも才能がある人間の行動をまざまざと見せ付けられた。なにひとつとして自分が出来なかつたことを平然とやってのける、自分のやる行動の全ての結果を易々と超えていく彼女たちを見て、

どうしようもない劣等感病は少しずつ、枝から葉を奪っていき花を咲かせる前の蕾すらも蝕んで地へと落とさせた。

残ったのは無数半端に枝鍛分えかれした不細工術な枝だけ。

そんなありきたりでなんの捻りもない劣等感コンプレックスを悟った俺は、自分の思考を捨てることも向き合うこともできず見苦しくも、ただ無意識に意識して思考を停滞させた。

今から思えば『奏』というへエルダーテイルでのひとつの分身の名前すらも、姉や千菜と違って本名ではない理由にはそういつたところもあったのかもしれない。彼女らに引け目を感じていたのかもしれない。……いや、さすがにこれは被害妄想が激しすぎる。

ただ単に臭いものに蓋をただけなのだ。

そんなときだった、へエルダーテイルでカナミと出会ったのは。

「ねえねえ、そのキミー！ いっしょにレイド挑んでみない？」

最初はこんな人間もいるのかと面食らった。

挑むレイドはさして難易度が高いものではなかったけれどそれでもへエルダーテイルのハイエンドコンテンツだ、まさか五人で挑むというバカがいるとは思わなかったからだ。しかも寄せ集めの俺を加えてのやつとこさでワンパーティー、攻略なんて夢のまた夢だ。

しかしそれでも彼女は構わなかったのだ。彼女はレイドのクリアなんてものが目的じゃなかったから。彼女はただその戦場を駆け抜ける途中にある光景を見てみたかっただけ。

こんな人間もいるのかと面食らった。

そして彼女に対しても興味が沸いた。自分が見ている姉と比べずに見てくれる優しい世界と彼女の見えている世界はどこまで違うのか知りたくなった。

それからだカナミとよくつるむようになったのは。

彼女にひっぱり回されて、笑い声を聞いていると自然と俺自信も声を大きくして笑っていた。才能の差に対する劣等感もその時だけは忘れることができた。

そのうち、カナミの周りにはだんだんと人が集まり始めた。

おパンツおパンツとうるさい奴や享楽主義のアメコミ好きな奴、腹黒なクセに普段は遠慮ばかりしてる奴、ハーレムを作ってる奴なんてのもいた。みんなみんな個性の強い連中でそんな奴らもカナミには引つ掻き回されていた。

楽しかった。人が集まればカナミの目が自分に向かなくなるなんて考えもあつたりしたけれどそれでもそれ以上にそこは居心地がよかった。

カナミといっしょにいるためにあの頃はずいぶんと努力していたと思う。立ち止まっていた足もあの時はまた動きだして駆けていた。仲間たちも同じように隣を駆けていたことをあの頃は実感できた。

そんな風にしていたらいつのまにかへ高笑いやらへ百鬼祓いや

らけつたいな二つ名で呼ばれるようになり、伝説のプレイヤー集団なんて呼ばれるようにもなった。

そんなことは知ったことじゃなかったし対面をたいして気にするような柄ではなかったのでなにかが変わったということはさしてなかったけれど俺たちは変わらずたくさんのレイドゾーンを駆け回っていた。

そんな時だった。祖父が死んだのは。

ある日散歩をしていたらたまたま女性がひったくりの被害にあっているところに出くわして、犯人を追い詰めようとしたら不幸にも年端もいかないうような男の子がその場に居合わせてしまった。隙をつけて犯人から男の子を奪還することに成功したけれど逆上した犯人が襲いかかってきた。男の子をかばった祖父は腹にずっぷりとナイフを刺され内蔵が傷つけられ信じられないほどに血を流し、病院に運ばれて家族と最後の会話をすこしして死んだ。

あつさりと、死んだ。

『八枝、お前の努力の果てを見届けることが出来ずにすまない。お前の報われた姿を叶うなら見たかった』

それから俺は引き籠った。

まことに情けない限りではあるのだが俺の一番の理解者は小難しいことばかりを口にする祖父だったから。

祖父に言われた言葉は深く心に突き刺さった。俺が今得ていた充足感はずだったのか、と。所詮はゲームで得た幻想の偽りの中での幸福感だったのかと。

俺は報われてないなかったのか、と。

ただもんもんと怠惰に一日を何をするでもない朝起きて飯を食べ

て機械的に身のこもっていない型を反復するだけの稽古をして朝飯を食べたのか昼飯を食べたのかもわからないような生活を過ごして一日を無駄に過ごす日が何日も続いた。

そしてある早朝部屋の窓が叩き割られいきなり何者かに拉致された、正確には拉致されかけた。

無茶苦茶な突入法に驚かされて飛び起きたところを謎の二人組に麻袋をかぶせられそうになったので咄嗟に迎撃した。

拳を打ち込んだ男の方はよくよく見てみるとオフ会で顔を合わせたこともある〈茶会〉でも仲のいい友人のひとりKRだった。

そしてもうひとりはカナミだった

お前ら何してんだ！叫んだ。

KRはよほどモロに入ったのか立ち上がることもできずにうずくまっていたままだったが、カナミは「やーくんが最近元気ないみたいだから突撃！隣の朝ごはんでもしていつしよにごはんでも食べようかとおもって誘いに来たの」なんてにこやかに笑うのだ、呆れて怒る気も失せてしまった。

そんな風にしていたらいきなり手を掴まれ引つ張られ当初の目的とは形は違うのだろうが誘拐ともいえない形で高笑いとともに割れた窓から部屋を出て連れ出された。

KRは床にうずくまっていたままだった。

カズ彦の運転するワンボックスカーに押し倒されるような形で乗車して（本気で拉致するつもりだったらしい。カズ彦は二人のお目付役だったのだろう。きちんと侵入方法まで責任もって監督してもらいたかった。）二時間近く車に揺られて運ばれた。乗せられた最初のうちにはカナミに羽交い締めにされる形で動きを封じられていたが、十五分もしないうちに拘束からは解放された。別に俺が抵抗することを諦めたわけじゃない。いくらカナミとはいえ力業を使つていいのであれば女のカナミに長く押さえ込まれるようなもやしではなかったが車酔いの驚異には勝つことは出来なかった。

抵抗する力も気力も尽き果てグロッキー状態だった。この拉致方法を考えたのは十中八九KRだろうが、アイツ絶対あとでシメると決

めたものだ。

連れてこられたのはまだ日も昇りもしない薄暗いだけの海岸の砂浜だった。靴も履いていない裸足のままに砂浜へ連れ出され、カズ彦が運転する車はどこへかと消えていきカナミと二人きりにされた。

カナミは大きなリュックから大きなおにぎりを取り出して差し出してきた。はつきりいって気持ち悪くてそれどころじゃなかったけれどカナミの屈託のない笑顔に負けて受け取るだけ受け取った。

「海だよ！海！夜明け前の海なんてオツなものですな！。絶景丸儲け！」そんな風にはしゃぐカナミの姿は純粹にいまを楽しんでいるように、

「やーくんはさ、今楽しい？」

そんなわけあるはずない。

口には出さなかったと思う。顔にまで出なかった自信はなかったけれど。

「わたしはね、今ちよつと楽しくない」

「いまさー新しいレイドに挑戦し始めてるところなんだけどさー、やーくんがいないから楽しくない。だから早く出てきてよつ。ばーんといつきに駆け抜けちやいたいんだけど、いまちよーど回復役が足りなくてさー、やーくんの力が必要なの！ねっ」

俺はその言葉に返事は返さなかった。

「おじいさんのことは残念だったけど、やーくんがくよくよする時間はもうおしまいだよ」

なんだよ、それ：

バカじゃねえのか、お前っ

ふつふつと言ひ知れないドロドロとした感情が胃の辺りからせり上がってくるのを感じた。抑えることもできずそのマグマのように熱く、美しいとはお世辞にも言えそうもない感情が決壊する。

いきなりやってきて、窓ガラスぶち破って、外に連れ出したと思っ
たら、ペラペラとくだら^{ゲー}ないことを話し出して、拳^ム句の果てには自分
のわがままを聞けだあ？悲しむことはもうやめろだあ？バカじやな
いのかっ!?

お前がなにを知ってるんだよっ

お前になにがわかるんだよっ

「わかんないよ」

カナミは俺の剣幕にも気圧されることなく顔色ひとつ変えずに笑
顔のままにそう答えた。

「だからやーくんがなにしたいのかを教えてください？」

さっきわたしが話したみたいに。そしたらわたしもやーくんのし
たいこと手伝うから

なんでもおはなし聞かせてよ。わたしやーくんのためならが
んばつちやうからさ。どどーんと頼つてよ。

泣きたかつたらいくらでもいっしょにいて胸貸してあげるし、気分
を紛らわしたかつたら、カズくんの運転する車で一日中ドライブしよ
うよ！遊びたくなったらへエルダーテイルで冒険しよう！

だから、最後はわたしのお願いも聞いてね？」

大丈夫、わたしがいるから。

そう言つてカナミは首をコテンと折り俺の顔を覗き込むようにし
てにこやかに優しくはにかんだ。

狙いすましたかのように海岸線の向こう側から駆け上がり始めた
太陽の光はまぶしくて、心の中にあつたぽっかりと空いていた空白の
なかのくらやみを照らしてくれるようで、

このとき俺は心の底から報われて、引き返せないと思う程にカナミ
に惚れたんだと思う。



目が覚めた

視界はまだはつきりとしれないし頭の中はぐちゃぐちゃと掘り起こされた記憶の濁流で濁っている。手足を動かすことは容易くとも頭がそれに指示をとばすのが億劫でしようがない感じだ。ザントリーフで死んで復活したときの感覚に近い。

庭先にふわりと浮かび揺れる狐火からの青白い光淡いですらまぶしくてしようがない。目を開けているのも気だるく感じてしまう。

「む、目が覚めたようじゃな。」

どうじゃ？気分の方は。自分の根源、るーつとやらを覗き直してみてなにか思うところはあつたかの？」

俺の頭に膝を貸すアサハナ様が覗き込むようにして俺の顔を見る。顔の横からあたる淡い光のせいもあってかその整った顔に浮かぶ表情は妖艶で見つめ続けたくなるような色気を感じてしまう

「最高に最悪だよ、それでも思うところはあつた」

綺麗な輝く思い出じや、俺は立ち直っちゃいけないんだ。カナミとの思い出で立ち直るようなことをしちやダメなんだ。アイツに頼るのはもうやめだ。

「わかったよ。俺は答えを知ってるやつを知ってる…、たぶんだけど」
「そうか、それは重畳。それと気づいておるか？そなた泣いておるぞ？」

「ああ、ホントだ。泣いたのは随分久しぶりだ」

いつ以来だろうか、じいさんが死んでから泣いたことはなかったんじゃないだろうか？だとしたら本当に随分と涙を溜めこんでいたものだ。なんでこんなに涙が止まらないのかわかんないけど、胸が苦しくてしようがないのかはわからないけど、それも今はそんなに悪くない。

「今はもうすこしはゆっくり寝とれ、儂の膝に寝取られ蕩れ。夜はも

うすぐ明ける。そして日が昇る」

アサハナ様の両手が目を覆ったせいで視界から光を遮られて真っ暗になった。着物からはふんわりと桜酒の透き通るような香りは、甘くて酔わせられるようで、冷たくて心地よかった。

『ボクの納得のできる答えを見つけてきなさい。お前が立ち上がるまで、何度だって僕はお前を殺そう。』

……それが、ボクにできる唯一の贖罪だ』

あの夜の約束

『贖罪』という言葉がなにを意味しているのかわからない。

俺をこんなふうにした勝手な罪悪感か、はたまた自身の人生においての唯一にして最大であろう失敗に対しての自らへの誅伐のつもりか。その両方か。

確かな答えははまだはつきりとは得られていない。

第五十話 みんなあなたのことが好きだから

すでに日は登り冬とは思えない雲ひとつとしてない青空が空いっぱい広がっていた。

龍神アサハナが語る聖域ということを考えればこの結界の内側では四季というものは存在しないので、それは当たり前のことなのだろうが、それはそれで気味が悪いものだと奏は感じなくもなかった。

ずっと変わらない光景、理想の投影と言えば聞こえはいいが理想でありつづける理想郷ほど人としての停滞を強めるものはないのだろう。この代わり映えない世界で長い時間を過ごすことができるのはアサハナが高い神格であるがゆえだった。

そんな龍神アサハナは、

「のう、本当にもう大丈夫か？もうすこし寝ててもいいんじゃないやぞ？なんなら儂が添い寝してやるぞ？おかゆ食べるか？りんごもあるぞ？」
どうしようもないほど煩わしかった。

「アサハナ様、もう大丈夫だって！夜はあんなに察したように接してきたくせになに今更何を心配してんだよ」

「だって、心配じゃもん」

「もん？」

何十年と人と接する機会がなくて人恋しくなっていたのだろう、神格を投げ捨てんばかりの勢いでベタバタと奏にひつついてきていた。はつきり言えば素面が露見し始めてきている。俗物的にいうならちよろい。神というのはどこの世界でも簡単に人に落とされるらしい。神を見れるような人間がただの普通の人間なわけがないと考えれば申し分ないのかもしれないが。

「アサハナ様、ちよつと席を外してもらってもいいかな」

「ええええ!?儂のこと嫌いになった!?鬱陶しかった!?!」

「……うん！今はちよつと鬱陶しいかな？」

ガガーン！なんて効果音が聞こえてきそうなりアクションをとって詰め寄ってくる龍神アサハナ。それをどうどうと落ち着かせて、と
いうか押さえつけて引つ込ませる奏

「念話するんだよ。答えをえられるかな正直わからないけど、でもなにか得れるものはあるはずなんだ。まだ昨日の熱が残ってるうちにこの不確かなものはやく形にしておきたいんだ」

奏の意思を言葉に変えはつきりと告げるとアサハナは思いの外あつさりと奏からその身をどかし、部屋の入口となるふすまへと手をかけた。

「わかった。念話が終われば呼びにまいれ。答えを得ようと得れまいと、できる限りの手ほどきはしてやろう」

背を向けたまま一言だけそう言い残すとアサハナはふすまを開けて部屋から出ていった。

アサハナのそのわきまえたような身の引きように奏に心からの一礼を返すと、左手をすつ、と宙でひと振り、ふた振りと動かしていく。メニュー操作の動きは淀みなく進んでいき念話の項目へと辿り着く。百を優に超える名前を見ていく必要はなくその名前はすぐに奏は見つけ出す。

『クイン』

その名前をただ一度指一つで叩く。そうするだけなのだが、

(気まずい…)

奏はアキバの街を出るときにクインにはなにも言わずに街を出た。むしろ誰にもなにも言わずそれは長い手紙だけを残して出ていったものだから、それが逆に奏がクインに対して念話をかけることに躊躇をさせた。

無機質な画面との不毛なならみ合いが始まろうとした時、まるで見計らったように、狙いすましたかのように鈴の音が奏の頭の中に鳴り響く。

それは紛れもない念話の着信音。そしてメニュー画面の小さな窓に表示された名前は、にらみ合いを始めようとしていた名前と同一のものだった。

「このタイミングで念話とか都合が良すぎんだろ…」

偶然にしても出来すぎている。作為まで感じるようなタイミングでかかってきた望みの相手からの念話に手のひらで踊らされるよう

な、誰かまだ舞台に現れていない存在の意思に動きを誘導されているような、そんな疑惑の芽が着々と育ってきていたが、それでも冷や汗をかかされるよりも助かったという思いが強かった。

「よう、久しぶりだなクイン」

『思っていたよりは元気そうな声だな奏。あんな馬鹿みたいな手紙を残していったものだからもう少し、悪夢でも見続けて自棄になるくらいには弱っているものかと思っただが、杞憂だったか?』

「いや、大正解だよ名探偵。正直、今は空元気みたいなもんだ」

あつさりと見抜かれてしまったことに奏は苦笑いを浮かべながらも、これくらいなら探偵じゃなくてもそれなりに親しい人間ならあつさり見抜くかと自分のガバガバの気遣いのため息をつく。

『失望したぞ奏。お前にはガツカリだ。随分とつまらない人間に成り下がったものだな。もういい念話切るぞ』

「わあああ、待て待て!クインさん!?なに!?いきなり辛辣すぎやしませんか!」

『いつもなら「お前は今日は女の子の日か?いつもよりうざいぞ」なんて言うだろう』

「ねえよ!?そんなセクハラ今まで一度たりともしたことねえよ!?そしてお前の中の俺のイメージ最低すぎるだろ!」

「うん、久しぶりに聞くと落ち着くな。お前の怒鳴り声は』

「お前は俺のなにに癒されてるんだ!」

『え、声とか?なんかこう奏と話してると落ち着くよわたしは』

「はあ!?!」

『お前もミノリちゃんを眺めるのと、いいツツコミができれば楽しいだろう?それと一緒だ』

「ツツコミに快樂を得れる芸人魂は俺は持ち合わせてないよ」

『前者を否定しない辺りがお前の変態性と芸人魂をよく表してるよ』

『とまあ、こんなふうにお前が私にいいように弄ばれるほどに宛にならない空元気をしていることが証明されたわけだが、なにか私に力になれることはあるか?』

「お前、相変わらずやり口と言い回しがうざいな」

『私にムカつける程度には元気が出ただろうか?』

「ああ、おかげさまで」

もうクインを弄り倒すことはしない。

昨晚そう固く決意していたはずの奏だったが、今のやりとりで確信した。コイツにそんな罪悪感が必要なかつた。前言撤回。全てにかたがついたら絶対に弄り倒して卑猥な言葉で頭の中ドブプラー効果させてやる、そう改めて決意を固め直した。

『わたしになにか力になれることはあるか?』

もう一度、クインは言った。

それに奏は一つの問いを投げかける。彼女に聞くことでしか意味をなさない問いを。

「お前つてさ、俺のために死ねるか?」

『:死んだらそこでおしまい。自分のこれから先の人生を全て投げ打つてまで、自分じゃない人間のために命を捨てるか、か。』

〈冒険者〉は生き返れるって前提を含めれば死ねると断言してやることもやぶさかではないが、お前が聞きたいのは復活を前提にした話じゃないだろうか?』

「ああ、一度死んだらおしまいの世界でお前は俺のために死ねるか?」
『すごい口説き文句だな。』

傲慢でナルシスト。告白だとしたら下の下だ。かの暴君ネロでも愛を告げる言葉にそんな言葉は使わなかっただろうか?』

「茶化すなよ、割と真面目に聞いてんだ」

『ふふ、すまない。』

それでも真面目に答えるとすれば、わからない。

本来ならそれくらいのことやすやすと言ってのければかつちよいいんだろうが、断言なんてできない。

そのときになってみなければわからない、というのが本音だ。不満か?』

「いや、満足だ。女に守られて生き残ったなんて、男として恥でしかねえよ。死ぬなら俺がお前を守って死んでやる」

『…その答えは気に入らんよ、ばかなで』

「え？」

さっきのような冗談まかしたやりとりとは違って真剣な声色で諭すかのような口調でクインは奏の言葉を否定した。

「死ぬなんてお前が言うな。」

お前はその言葉を軽々しく使うのを誰よりも嫌う人間だろ、自分も生きて周りも助けることくらいの本拠もない大口を叩くやつだ。

お前はいつもここぞというときにそう言っつて馬鹿みたいに笑っつてきただろ」

「その笑いだつて嘘でしかなかったんだよ。」

俺が笑つてきたのは誤魔化してきただけなんだ。俺は別に本気で誰かを助けたいなんて思つたことはないし、なにか強い信念があつたわけでもなかった。

俺の行為は所詮はただの偽善だつた」

『違う。』

確かに誤魔化しだつたかもしれない。

それでも誤魔化していたのは押しつぶされそうな重圧をだ、誤魔化してでも逃げたくなかつたから。嫌われたくなかつた、ただそれだけの思いだけで。

これを信念と呼ぶすになんというか！

浅くて構わない、誤魔化しでだつてかまいやしない！お前がそれで行動を起こせたんだろ、それなら悩む必要なんてどこにもない！』

「ただそれだけのことで誇つていいわけがない。お前やシロエやカナミ、千葉はそれ以上のことをしてきてるだろ」

『それだけのことでお前に助けられた人間が何人いる？』

わたしたちはお前と同じことだけをしてお前以上の成果を出したのか？違う、お前がやってきたことはお前だけのものだ、他の誰のものでもない。

浅い気持ちだつたかもしれない、偽善だつたかもしれない。

それでも、偽善でもわたしたちはそんなお前に救われたんだ。

たかだか姉一人に否定されたからっていじけるな、お前を認めている人間はもつとたくさんいるんだから』

『千葉も、マリエールさんも、ヘンリエッタさんも、にゃん太老師も、シロエ殿も、直継も、アカツキも、ミノリちゃんも、トウヤくんも、ルンデルハウスも、五十鈴ちゃんも、セララちゃんも、小竜も、飛燕も、明日果も、ソウジロウ殿も、三佐さんも、リーゼも、クラスティ殿も、カラシン殿も、ミチタカ殿も、アイザック殿も、レイネシア姫も、エリツサさんも、エルノも、…そしてわたしも。』

みんなお前のことを好きで、認めていて、信頼していて、お前が帰ってくるのを待っている。これだけの人数がいれば誰かが誰かの為に死ぬなんてそんなことあるわけない。みんながいるからどんなことでもなんとかなる』

強い強い思いが偽ることも、取り繕うこともなくただ真つ直ぐに伝えられる。

紅き名探偵と呼ばれる彼女は嘘をつかない。

自分の正義を貫く探偵は自分の思いには嘘をつけない人種だから。これが奏の望んでいたもの。あるべき姿は夢の中で見いだせていた。ただそれに自信が欲しかった。他人じゃなくて自分が知っている中で最も自分の信念に正直な彼女に認めて欲しかった。

「やっぱり、ヒメに聞いて正解だった。ヒメ、お前はいつも見透かしてくれるな」

久しく呼んでいなかった現実世界での呼び方が口にする。奏にとってには彼女しかこんなふう呼び捨てにするような対等な関係にある年下はいなかった。そこは良くも悪くも年上だというのに敬称なんて微塵もつける気になれないカナミと通ずるところがある。

『お前にだから言えるんだ。私はお前が思ってるほどすごい人間じゃないよ、わたしなんかよりもすごいやつなんてもつといるさ』

なんとも言えない沈黙がふたりの間に流れる、お互いに顔を見れない念話だからこそ気づいて感じる僅かな息遣いすらその沈黙の中では浜辺の押しでは引いていく白波のようで、お互いの存在を僅かに感じてただそこにいることを気にもとめないでいられるような感覚が

奏にとって心地よいものだった。

『奏、最後だ。私の言える最後の言葉だ。よく聞いておけよ』

その沈黙を破るようにしてクインから声がかけられる。その声はどこかこわばっていてなにか大事なことを伝えようとしているのだと、本題はここからだということ物語っていた。

なにも理由のないクインから奏に念話をよこしてきたのだから本来の要件はこちらだったのだろうとあたりをつけて静かにクインの次の言葉を待った。

『八枝、わたしはね、あなたのことが大好きです。

だから、がんばれ。

ずっと待つてるから』

ぷつり、静かに念話の切れる音が奏の頭の中に聞こえてきた。

「奏ー！終わったか!? 待ちくたびれて儂からきたぞ！」

奏、顔がゆでダコみたい我真っ赤じゃぞ。なにかあったのか？」

勢いよくふすまが開け放たれ返事も待たずに大きな声をあげて早足に部屋へと侵入してくるアサハナ。奏はそんな彼女に文句を言うでもなくただぼーっとどこか空を眺めることを続けていた。その表情はどうしようもなく惚けていてアサハナもそんな彼の表情を見てもなにかあったのかと問いを投げかける。

それにも、奏は頭の中の整理が追いつかないのか軽いパニックになつたような言葉しか返せなかった。

「ほおう? ほう、ほう、ほう。そうか、とりあえずはおめでどうじやなあ。

老婆心ながら言わせてもらおうとあまり女子を待たせるのは感心せんよ。」

なにかに勘付いたのかアサハナはニヤニヤと愉快そうな笑みを浮かべるとさつきまでの雰囲気消して奏の頬を両方ともつねって部屋から庭へと引つ張り出した。

「さあ、刀を抜け。時間はないがお主の実力を本来のものまで引上げり上げるぞ。」

もともとお主は十分に強い。ただ、今までは己の内側だけを見ることに固執してきた。

だが、視点が変わった。今ならよく見えるであろう？

おのが弱さも、情弱さも、強さも、己にできることがなんなのかも。

今ならきつと進めるぞ、お主の祖父が示した真髄へ」

その言葉には最初に向けられた濃厚な神気がどっぴりと滴るように込められていた。

第五十一話 燕が地を飛び雨が降る

「今なら先へ進めるかもしれんぞ、お主の祖父が示した真髓へ」

堂々とそう宣言したアサハナの言葉を聞いて奏は揺れる内心をなんとか沈めつつアサハナの言葉に待ったをかけた。

「ちよつと待ってくれ、アサハナ様

水を差すようで悪いんだが、俺が習った剣術にある奥義ってのは技とかそんな大それたものじゃなくて型の到達点というかむしろ心構えみたいなもので、とても姉ちゃんに勝つための決定打になるようなものじゃ」

『心技体は剣に通ず。剣を体を一部として自らの体を使うように力を振え』

それが祖父から幼少から叩き込まれ、刷り込まれ十数年と嗜んできた剣術とは言い難いほどまでに幅広い戦術。広くて突き詰めていてまるで才能を持った存在のためにあるような技術だ。ありきたりでどこかで聞いたことのあるような当たり前に目指すべき実現し難い訓。

しかしその真意はまったく正反対にあるものだった。

才能がある人間は無意識にこの境地に至る。ただなんとなく当たり前のものとして身につけている技術として、意識せずに刀を振るうことで自然体に淀みなく受け入れることができる。

人間という生き物はなにかをする時には必ずわずかであっても思考が混じる。いくつもの思考が折り重なり答えを導いた先の行動を行う。その思考は少なければ少ないほどに動きの純度は増していく。突き詰めてしまえば鍛錬というのは思考の排除をし続けることではないわけだ。

つまりは天才が無意識で至っている集中状態引き出せる実力を意図的に模倣しようという考え方が、奏が教え込まれた戦術の集大成であるということだ。

その刷り込まれてきた日常の一挙一動が研ぎ澄ますための手段で

しかない。ある程度の土台を作ってしまったえば、そこからはただ思考を排除するための鍛錬を積むことで天才と呼ばれる人種にも机上の理論では並ぶことができるはずなのだ。

鋼は幾千も叩いて鍛え続け、刃は欠かさず研いで最高の切れ味へと高め続ける。

ただそれだけ。ただし度が過ぎるだけ。

それを奏は十七年当たり前に続けてきた。自分の意思で自覚して。「知つとるよ、じゃがそれに意味がある。」

流石何十年もの経験を積んだ達人でありぬしらのことをよく知っておじいちゃんというべきか……、少しくどいが、主が姉に勝つため、：というよりは主という剣士が完成するため目指す場所を既に十数年も前から教えていた。おかげで儂も主が姉に勝つ局面を見い出せた。

正直儂もどうあがいてもこの短期間では勝率が三割を超えんあたりが悩みどころじゃったが、おじいちゃんさまさまじゃよ」

「そんな力の差があるのか、というか三割も超えないのにあんな自信満々だったのか」

「当たり前じゃろ、〈冒険者〉とはいえそなたは所詮は人の身よ。レイドラ^神ンクにたった一人で勝てるわけがなからうて」

「天才の在り方をそこそこの才能の主が再現する。実に突飛な発想ではあるが、解釈次第では面白い。」

呼吸をするように無意識で行っている行動を、意識してやろうってんだから無意識よりずっと効率的ではあろうな。

儂の解釈が通りなら、まるで天才^{格上}を打倒するためだけに特化した技術。おあつらえ向きすぎる、まるでこうなることを見越していたかのように」

——ま、偶然は必然とも言うし、ただの偶然ではあろうがな。

アサハナの手から光が溢れる。溢れた光はゆらめきながら払うように振られた手から形を成していき一本の黒刀へと形を変えていく。その刀の刀身は光を飲み込むような漆黒でその形上はまるで奏の持つ〈夜刀 風月玄沢〉とまったく同じように見えた。

「投影の出来としては上出来か…。刀を使うのは久しいが、模倣程度ならなんとかなろう」

「神様つてのは……。はあ、もうなんでもありか」

「物質創成能力なんぞでいちいち驚くな。こんなもん初歩の初歩じゃ、それなりの格を持つダンジョンなりなんなりに住むものなら神でなくとも魔物でもなら備えていて当たり前の能力じゃ」

レイドなどで登場するダンジョンでのボスは討伐されると、そのボスの特徴を色濃く受け継いだような形状や能力をした〈幻想級〉、〈秘宝級〉のレアドロップ品がドロップすることがある。それらのアイテムは供贄一族の古式ゆかしい古代魔法により配分される金貨やアイテムとは起源を別とする。

それは、魑魅魍魎渦巻く巢窟で一柱の主として蛮勇を振るった猛者が自らの存在を現世に残そうと試み生まれたまさに力と魂の結晶なのである。それゆえに自らの存在と死力、魂までもを賭けて創り上げる武具やアイテムは〈幻想級〉、〈秘宝級〉などの強力無比になる。生まれる武具は力と魂の強い者から生まれるのは必然で、力と魂が強ければ強いレイドランクのボスたちから強力な武具が生まれるのだった。

そして奏の目の前にいるのは紛れもないその〈大規模戦闘〉〈レギオンレイド〉〈クラス〉の力を持つ流麗なる龍神アサハナ。奏の持つ刀の複製などは特殊効果の付与を考えなければ魂をかける必要もない程に片手間で済む程度に容易くこなす。

「強度としては源泉には若干劣るが成長に合わせると思えばちようどいいじゃろ。」

八枝よ、まずはこの刀を折ってみよ。戦い方はお主の戦い方をそっくりそのまま模倣した上で儂はさらにその先をいき、誘導していく。いうても並ぶことができるのはあくまで引き出せる力の割合、同じ十割引き出しても土台で負けていてはお笑い種よ。

死に物狂いでついてこい、でなければ本当に間に合わんぞ」

「おっすー」

歯車は着々と噛み合い始める。行き着く先はKRが望むような

英雄か、錆びて朽ちるを待つ剣となるか。はたまた元の道化に落ち着くか。



控え室に通されたアカツキは、神妙な顔で手の中のカップを温めていた。翠風の館はどの部屋にもきちんと暖炉が備え付けられていて部屋が寒いわけではないが、他にやることもなかったからだ。

どこまでもが事故なのか、それともメイドのエリツサの陰謀なのかわからないが。〈追跡者〉の鋭い知覚能力には隣室での会話がほとんど聞かなく聞こえてしまっている。

しかし、その内容は、どう考えてもアカツキの手には余る話だ。

今、アキバの街を騒がせている件の殺人鬼は供贄一族のもので〈動力甲冑〉を盗み出し今もなお消息不明。〈動力甲冑〉はアキバの街の地下の巨大魔法陣から魔力供給を受ける神代の遺産。もちろん魔力供給を停止すれば〈動力甲冑〉は停止するが、その場合は都市の防衛魔法陣も同時に能力を失ってしまう。再稼働するには十年単位の時間がかかってしまう。

そんな話はたった一人の〈冒険者〉に何とかできる話ではなく〈西風の旅団〉や〈D・D〉のような大手ギルドが対処すべきか、あるいは〈円卓会議〉が動かなければいけないような——アキバの危機ではないか。

いつそ聞かなかったふりをして帰るべきではないかともアカツキは考えた。

月の光にも似た美しさを体現する姫も〈冒険者〉に話すべきか悩んでいた。その決心が定まる前に自分が殺人鬼事件の真相の一端を知ってしまうことがどれだけ危ういことか、事態へ与える影響の大きさがわからないアカツキではなかった。

そこまで考えたところで控え室の扉がノックのひとつもなく開かれた。

「ごきげんよう、アカツキさん。相も変わらずチャームングだね」

扉から現れたのは黒髪の青年。青年は夜のとばりにも似た黒の豪

奢なコートを羽織りわざとらしいほどに優雅さを振りまくような言葉を放つ。アカツキは唐突に部屋へと入ってきた彼に虚をつかれ思わず立ち上がってしまう。

「ああ、気にしないで。わざわざ立ち上がったもらわなくても結構。ノックもなしに入ってきたのは私の方だ」

「貴方は確かレイネシア姫の叔父の…」

「こうやって直接はなしをするのははじめてだね、アカツキさん」

「どうしてあなたがわたしのところなんか？」

「なんかなんて自分を卑下するのよくない。君は十全なまでに優秀な娘だ」と

一目視線を交わしただけでエルノの観察眼はアカツキの内側を見通してみせる。大地人と冒険者では根底の身体能力が違うという条件の上での話ではなく純粋なアカツキの能力を評価する。

「隣の部屋の会話も君なら聞こえていただろう？」

困った話だね、なにか供贄一族に貸しをつけられるかもとお気楽に考えていたんだが…、アテが外れてしまつて」

「貴方がわたしをここに通すように仕組んだのか？」

「どうでしょう？」

わかりやすくはぐらかすエルノだが、アカツキにとってはたまつたものではなかった。

これは一個人がなんとかできる事の大きさを優に超えているのだ。たった一人知つたところでは事態は何も変わりはない。

さつき干渉することの重大さから一步引いて状況を見極めようとしたというのに、選択肢を選択する前に谷底へと突き落とされてしまった。これではアカツキはなんらかのアクションを取らなくてはいけなくなつてしまつたではないか。いや、正しくは行動は起こさなくても構いはしない。ただ、アカツキが^{冒険者}レイネシアの^{大地人}困り事を無慈悲にも見過ごしたという事実をエルノに知られてしまうことになるだけだ。第三者の目が加わつてしまつただけともいえる。だがそれだけでアカツキにはどれだけのプレッシャーが与えられたことか。

「やり方が汚いことは重々と承知している。あまりにも非礼がすぎる

こともわかつている。

それでもお願いしたい。どうか、レイネシアの助けになってくれな
いだろうか」

アカツキを引き返せないところまで引きずり込んだ張本人は深々と頭を下げた。貴族であるエルノが〈冒険者〉のしかも女であるアカツキに。

「わたしではこの案件にあの娘に貸してやれる力なんてものはない。無謀だということも身勝手だということも理解してお願いする。一と二とでは変わらないかもしれないが、一と零では雲泥の差だ。」

「ひとつだけ言わせて」

しばらくの沈黙の後、エルノに向けてアカツキは眼をしっかりと見据えて言葉を紡いだ。

「なんだろう」

「レイネシアが、頑張ってるのは知ってるから。」

ずっと見てたから」

領主会議において彼女がなした偉業をアカツキは見てきた。シロエが評する言葉も聞いた。そしてここしばらく、彼女の近くに潜んで見守ってきた。だから、「頑張ってる」その一言だけは核心をもって言える。

アカツキはエルノへ背を向けて窓を開けベランダへと出た。エルノからはその姿は地味な普段着とも相余って光の中から闇の中へと溶け込む影のように見えただろう。三メートル離れたベランダへととびうつることくらいは高レベル〈冒険者〉の身体能力にとって道端の花をまたいで通ることよりも容易かった。

「友愛に最大の感謝を」

その後ろ姿を見送るエルノは深々と、先ほどよりもずっと深く頭を下げた。アカツキの姿が見えなくなった後も変わらず祈るように、すがるように頭は下げ続けられた。

アカツキが白亜のベランダに足をつけた時、レイネシアの力の抜けきってしまったような、普段の優美さを含んだものとは異なってしまった声がガラス越しに聞こえてきた。

「もうダメです」

その声はどうにしても投げやりで、困惑がこびりついていた。

「本当にダメです」

レイネシアが言葉を発するたびにガラス越しからみるクツションに顔をうずめるその姿はしぼんでいつてるように見えた。事実そうなのだろう。

「——ままなりません。」

……どうしていまなのでしょう。なんでわたしなのでしょう？

その言葉はアカツキの心に風を吹かせる。その風の冷たさは最近アカツキを苦しめるものと同じだ。どうしようもなくて、誰でも経験がある。代え難い痛み。

「……もうすこしだけ手加減してもらえませんか？サービスしてもらえませんか？誰か代わってはくれませんかね？」

銀月の姫の弱々しい言葉にアカツキは言葉を返した。自分にも言い聞かせるように。

「それは……できない。たぶん誰にも」

「わかっています。それでも、望むくらいはいいじゃないですか……」

だれも代わってはくれない。風を止める方法は向き合って、立ち向かった自分にしか見つけられない。それでも立ち向かって止まるかどうかはわからない。

「会議に相談する？」

「でもそれをしてしまったら冒険者の方々と争うことになりませんかでしょうか」

「でも、いつまでも黙っているわけにはいかない」

「それは……、そうなんでしょうが……。そうじゃなくて」

「そうじゃなくて!?!」

レイネシアの背筋がすらりと伸び、クツションに埋めていた顔が顕れる。目の辺りはすこし赤く腫れているように見えた。

「な、なっ。その……、聞いてました？」

「ごめん。盗み聞きするつもりはなかった」

レイネシアの目が居心地が悪そうに伏せられアカツキから逸らさ

れる。アカツキは彼女にそんな態度をとらせてしまったことがすこしだけ辛かった。エルノの意思は聞いていてもレイネシアの意思は聞いていなかったから、アカツキの中に躊躇の芽が生まれる。

始まりはシロエに彼女を守ってあげて欲しいと言われたからだ。時間を作つて出来る限り水楓の館に足を運んだし、陰ながら見守りもした。だから彼女が積み重ねてきたものを知っている。それが簡単にほんの些細なことで壊れてしまいかねないものだということも、知っている。

アカツキの目の前にいる少女は“銀月の巫女姫”。大地人の貴族の中でも有数の名家コーウェン家の一人にしてザントリーフ攻防の立役者。アカツキとは比べるべくもないほどに立場も生まれも違う人間だ。それでも、目の前の少女はそんな大仰な肩書きなんてかすりもしないような普通に見えた。アカツキと変わらないあんばんを小さく頬張る、どこにでもいる、普通の少女だ。

「困った？」

「困りました」

レイネシアの中にアカツキは自分が見えた気がした。

「見つけてくる」

アカツキは立ち上がる。

エルノと約束したからじゃない。アカツキの意思は彼女のために、彼女に対して抱く敬意のために動こうとしている。

「え——？」

「役目を、果たすから。頑張ってるの見てたから」

アカツキの身体が軽く跳ねる。咄嗟にアカツキの背へと伸ばされたレイネシアの手は彼女を触れることなく掠めて終わる。

手がかりは得た。黒い燕は雪がの白が点々と散りばめられた宙へと解き放たれ出撃した。

この先に待ち受けるは無慈悲な暴風と知っていても。

第五十二話 戦場に一輪の花を

腐臭漂い下水が流れる殺人鬼の穴蔵から抜け出したわたしとクインを出迎えたのは厚い雲から顔を出しギルド会館の藍色の暗い屋根を照らす月の光だった。ついさきほどまで閉鎖空間に長くいたせいか開かれたその光景を見たことで殺人鬼の住処という一種の虎穴からくる緊張感が空気に溶けるようにして胡散した。

「わたしはとりあえず〈西風〉のギルドタワーに戻るけど…。クイン、あんた休むわよね？」

ソウジロウがバカをやらかさないうようにしていた見張りをほっぽり出してきたのですぐに〈西風〉のギルドタワーに戻らないといけないが、それよりもクインの方が少し心配だった。

殺人鬼が出没する今のアキバの街。

今回の探索で接触は出来なかったので今からまたアキバの街を散策するなんて馬鹿げたことはさすがの彼女も今は言わないだろう。

今はある程度元気を取り戻したとはいえ、ついさつきボツコボコにされてへし折られかけたばかりだ。ハツパをかけて種火まで消させはしなかったものの今晚ばかりは休んで欲しかった。

「そうするよ。少し気持ちの整理もつきたいし、それに奏とも連絡を取ろうと思う」

「そう。ギルドタワーまで送るわ」

何を考えているのか、クインはわたしの背後に回って両肩をぐいつと下に沈めるように抑えてきた。察しが悪いと言わんばかりにぐいぐいと力をかけてくる彼女の意図にやっと気がついて膝を曲げて中腰になる。すると僅かな重さのしかかってくる。

「子供みたいね。あんたららしくない」

「いいじゃないか、疲れたんだ」

背中からゆったりとそんな声が返ってくる。いつも兄におぶられてきて誰かをおぶるなんて体験は末っ子のわたしにとってはなんとも新鮮な体験で、夜の張り詰めるような寒さと反する背中から伝わってくる暖かさがとても心地のよいものに思えた。

「奏の方が乗り心地はよかったなあ」

「妹の背中でのろけないでくれない？・おろすよ？」

人の背中でなにをいってんのよ。

そもそも兄さんとあんたの関係は高校の先輩後輩からでしょ、なんで背中でのろけ心地なんて知ってるのよ。

中学校を卒業して異性との距離感がくつきりしてから男女がおぶうおぶられるを体験するなんてよっほどの緊急時にでも出くわさない限りそうそうない。

「しってるか？あいつ、首の後ろに黒子が二つもあるんだ」

「知らないわよ」

そんなことは本当に知らない。そんなくだらないことは知らなかった。兄妹だけど。

「胸を押し付けると耳の裏が真っ赤になるんだ。本人は強がるけどな」

「知らないわよ！」

「かわいいよな」

クインはそんな風にゆるく笑うがそんなことは本当に知りたくなかった。そんな実兄の恥ずかしいところ知りたくなかった！兄妹だからこそ。

なんで実兄の甘酸っぱい赤裸々な思い出を冬空の下で耳元にささやかれないといけないのか。

いつそのこと背中のクインを放り投げてしまおうかと考えたが投げ出した後、運動神経の悪いクインがまともに着地どころか受身も取れないことに気がついてすんでのところで思いとどまる。

そんな中でクインがまた口を開いた。

「それでさ、そんなアイツのこと大好きなんだ、わたしつてやつは」

「それは、知ってるよ」

彼女の心臓の早い鼓動が伝わってくる。まったく彼女らしい。本人に伝えてなくせに顔が薔薇のように真っ赤に染める様子が後ろを振り向かなくても簡単に想像がついてしまう。なんと初々しいことか、まるで中学生じゃないか。

「どこが好きなの？」

「うーん、顔」

「あさっ！」

雑な回答に思わず声を荒らげてしまった。

だけどそれにしたってないと思う。確かに現実世界の方でも顔はいい部類に入るだろうなにせわたしの兄だ。学生時代も引く手数多かった。まあ恋に恋するお年頃な女子たちの浅い想いなんてものに兄さんはうんざりとして誰ひとりとして付き合うようなことはしなかったが。

あれはちよつと理想が高すぎるくらいがあるんだ。恋心なんて最初は所詮しようもなくとるにたらないものだというのに、うちの兄の眼はそんな幼気な少女が向ける好意も無遠慮に見抜いてその淡い恋心が自然消滅するまで器用に距離を取るのだ。

「最後まで聞いてくれよ。」

わたしは奏が人のために笑った時の顔が好きなんだ。普段浮かべる笑みもさ、好きなんだけどさ、自分の大切な人のことを話したりする時の奏の笑顔はすごく愛おしいんだ。わたしもそのうちのひとりになりたいってそう思ったんだ」

「そう。——いいんじゃないかな。すごく素敵だと思う」

「うん。ありがと。」

それでさ、昔、奏に告白しようとしたことがあったんだ。まだ高校生の頃の話。好きですって伝えようとして、伝える前に言われたの、『実は好きな人がいるんだけどさ』って。

頭きちやつてさ。わたしが望んで望んで死にたくなるほど恥ずかしい思いをして告白しようとしたのに、もう奏にはカナミさん^{好きな人}がいて。カナミさん^{好きな人}のことで奏は笑ってた。

それに狂おしいほどに嫉妬した。奏が言っただけで欲しくないだろうひどいことを言っっちゃったし、おもいつきり引っぱたいて理由も話さずに勝手に走って逃げ出した。」

「それって兄さんが悪いじゃん。あんたは何も悪くない」

それはあんまりだろう。

それは全面的に審議の余地も弁明の余地もなく、上場酌量の余地なんてものはこれっぽちも必要なく絶対に兄さんが悪い。ひとりの女の子の誰にであろうと蔑ろにされていいはずがない想いをよりにもよってその想いを受け止めべき相手が踏みにじった。これが許されていいはずがない。

「フオローを入れさせてもらうと、奏はそのときわたしの好意には気づいてなかったよ。今だってきつと気づいてない。わたしは感情を隠すのが得意なんだ、探偵だからな。」

あいつだって全部が全部見抜けるわけじゃない。千葉だつてわかつてるだろ？だからそんなに怒らないであげてくれ。

とりわけわたしは奏にも真意を見抜かれづらかったから奏も遠慮も気兼ねもなしで接してくれた、優しくしてくれた」

「それでも、そんなのあんまりじゃない」
「それでも、しょうがないんだよ。」

……わたしはそんな奏が好きになつちやっただから」
「ごめんね、いきなりこんな下らない話をして」そんな風にクインは謝った。「ほんとよ、妹じゃなくて本人にしてやりなさいよ」わたしは軽口を返した。背中の彼女はそれに小さく笑っていた。

大切な人のことで笑う奏が好き。例えばそれが自分じゃない他の好きな人のことで浮かべる笑顔だとしても。その笑顔にどうしようもなく惹かれてしまったんだから。好きな人を嫌いになることはあるかもしれない。でも大好きな人の一番好きのところはどうしたって嫌いにはなれはしなかった。

「酷なことを言うかもしれないけど、兄さんはまだカナミさんのことが好きよ」

恋焦がれて、こじらせて、妄信するように好いている。理由をくれた人だから、世界を変えてくれた人だから。

「そんなの五年も前から知っている」

クインはまた笑った。自棄になったような笑いじゃない。略奪愛だつて上等だと言わんばかりに素敵に可愛らしく笑ってくれた。

「なら応援する。兄さんのことは譲つてあげる。あんな軟弱者あんた

みたいな優しい娘がお似合いよ。

人妻子持ちと一途な美少女系後輩だったら勝機は十分よ。これではびかないんだったら身内から犯罪者を出す前にこの手で兄さんを殺すわ」

「譲つてあげるって…、兄妹だろうに」

「知らないの？ 兄妹は結婚はできないけど、子供はできるのよ」

「怖い。この妹すごく怖い。いままでの気遣いもいい台詞を全部台無しにしてしまうくらい怖い」

「冗談よ」

戦々恐々として背中でガクガクと震えるクインに笑いかけアキバの大通りを進んでいく。こんなふうには話しているといつのまにやら〈モルグ街の安楽椅子〉が所有するいくつもの雑居ビルのひとつにたどり着いていた。

クインを背中から下ろしてその顔を見る。すっきりと憑き物が落ちたかのようなその顔にこれなら大丈夫かと思えた。殺人鬼にも出会えなかったし新しい不安材料も生まれてしまったけれどまだどうとでもなるだろう。まだ始まったばかりだ。

「それじゃあ、おやすみ」

「おやすみ」

クインとは別れて〈西風の旅団〉のギルドタワーを目指して歩き出す。

随分と時間をかけてしまったものだ。一応は客人として扱われているが勝手に上がり込んでいる身で堂々とこんな遅くに帰ってくるのはバツが悪い。

「ソウジロウはともかくナズナさんにはなんか言われそうだなあ」

へらへらと笑うソウジロウはいいがナズナの方は普段はたいしてなんとも言わないが大事なところはきちんとしておいてくれるところがなくもない。なにを言われるかと想像していると一本の念話が入ってきた。メニユー画面に表示される名前は件の相手『ソウジロウⅡセタ』。なんとも間のいい男か、クインと別れた後に念話をよこすとは空気が読めている。

『もしもし、千菜さんですか？』

「なに？帰りが遅いからって心配でもしたの？相変わらず乙女殺しなマネするのね」

『あははは…、ぼくとしては自然なことなんですけどね』

天然ジゴロが…。

姫はかどわかされたりしないんだから、ハーレムなんてもつてのほか。一夫多妻制なんて認めないわよ。

『千奈さん今どこにいます？』

「？タウンゲート近くの通りだけど」

まさか迎えに来るとでも言うんじゃないだろうか。最近はなんか嫌がられるのがわかっててやってる気さえもするんだけど、マゾなの？

『ならちようどよかった。大神殿に向かってもらえますか、今ナズナたちもいますから』

「っ！誰か死んだの？」

セルデシアの神々に対しての立派な信仰心など持っていないへ冒険者〉が大聖堂に向かう理由なんでもものは一つしかない。誰かが死んで復活するのを待つときだけだ。こんな夜中に死人が出た。殺人鬼か『ぼくとアカツキさんが』

「…：勝手に行ったのね。姫が出かけたのをいいことに。

それはいいわ、いえよくないけど。なんで姫に言わなかったのよ、あなたの聖戦自己満足にアカツキが巻き込まれたんだとしたら…：『そんなことをぼくがへらへらと報告することはありません。絶対に』

「失言だったわ。ごめんなさい」

たまに、ほんのたまにだけこの少年にはゾツとさせられることがある。不本意ながら怯まされて、一步後ろに後ずさってしまいそうに屈してしまいそうになる。自身に危害を加えるような男じゃない。それはわかってる。それでもこの少年には負けてしまうかもしれない。いいと思ってしまう、だからこいつだけは男として好きになっちゃいけない。

勝てなくなってしまうから、弱くなってしまうから。

『いいえ、ぼくと殺人鬼との戦闘中に割り込むようにして彼女も乱入してきました。』

余命が幾ばくか伸びた程度でしたが、彼女は彼女なりの思惑と信念をもって、ぼくが殺そうとしていた殺人鬼を終わらせようとしていたので、今回の件はアカツキさんに譲ることにしました』

「あんたが獲物を譲るなんて珍しいわね。一度決め込んだ敵はわたしにだって譲らないくせに」

『ええ、だから倒していいですよ、千菜殺さんの敵鬼。』

ぼくのこととはもう心配しなくても無茶なことはやらかしませんから。あとはそっちでできとーにぱぱとやっちゃといてください。

この前は勝てないとか弱気なこと言っていましたけど、今度は勝てるでしょう？ぼくの憧れた千菜さんは強いですから』

念話は切った。切ってやった。

「ソウジロウのくせに、生意気だわ。ほんとつ、死ねばいいのに」

アキバの街唯一の信仰心なんてかけらも集まらない大神殿へと歩みを向ける。

戦場一人に一輪女の華を添えよう。

慰みの花ではなし、勝利に酔う花でもなし。

そこにあるのは優美さ。

そこにあつたのは苛烈さ。

その華は戦場にはないもののための一輪である。

第五十三話 黒幕を演じてみれば

三ヶ月前から隠れ住んでいる入り組んだ路地の先にある寢床で百恵を待ち構えていたのは人ならざる畜生だった。簡素なベットの横に備え付けられているこれまた簡素をとおりこしてオンボロな明かり建ての上に凶々しくも居座っている。そのルビーのような深紅の眼だけが背に受ける月光と同じように光を放っていた。

「あんまり勝手気ままに出歩かれるともみ消す側としては大変なんだからどなー百恵ちゃん」

「お前はいつもどこから湧いてくるの、そしてその毛玉で出てくるのは金輪際やめて欲しいわね。その目はすぐく気味が悪い」

「僕と契約してー、」

「だから気味が悪いって言ってるのよ!」

「いやいや、二十八で魔法少女って……、歳考えなよ、恥ずかしい」
「ぶっ殺すわよ」

くだらない。気が抜けてしまう。これでこのアキバの街での唯一の協力者でなければ今すぐにでも部屋の外へとゾーン設定で転移させていただろう。しかしどうなのだろう、本人ならばともかく中身が入れ替わっているとはいえ召喚獣の身体をしている目の前の白い毛玉を転移させることができるのだろうか。

「奏クンだったら知ってるかもねー。仮にも彼の口伝はゾーン設定の応用だから。その道には詳しいだろう。専門^{プロフェッショナル}家、つてのは言いすぎかもだけど、セミプロくらいは名乗ってもいいだろー」

世間話でもしにきたわけでもあるまいて、益体もなくそんなことを言う毛^{マイクロソフト}玉を尻目に最近殺風景なこの部屋に加わった簡易型魔術氷室の扉を開けて中から冷えた酒を取り出す。

「おいおい、客人が来てるつてのに酒かい?」

「客人は帰ってきたら人の部屋に勝手に上がり込んでいたりしないわ」

「……確かにそりゃそうだ」

ボクにももらえるかい? そんなことを言い出した毛^{マイクロソフト}玉の身体は突

如として光りだす。その光は徐々に大きくなっていき一際大きくなつて光の束が糸へと消えていった後にあつたのはまた毛玉だった。しかし今度の毛玉は毛玉というにはいささかすぎる程に大きかった。さつきまで見上げているはずだった百恵の身体よりもその身体は大きかろう、光を飲み込むような金色の眼と月光を鮮やかに散らしてまぶした銀色の毛並みが印象的だった。召喚術師サモナーのヘソウルポゼッションで本体と召喚獣である毛玉と入れ替わつたのだから。

「今日はなんのようなの？あなた、僕のやらかした後始末隠蔽工作で忙しいだろう」

「やらかしてる本人がそれをいうかなー、ムカつくなー。ボクより強くなかつたらここで襲つちまうんだけどなー」

「情けなさすぎて涙が出そうになる台詞ね…」

猫人族の中でも随一といっても過言ではない見惚れてしまいそうなほど美しい容姿をしているくせに、千年の恋も覚めてしまいかねないほど情けない台詞だった。

「そんなこと言うけど、君ー、自分が〈大規模戦闘級〉の戦闘力を有してるとわかつてるー？紙装甲のボクなんてデコピンで塵にされる」

「そこまで馬鹿力じゃないわよ」

精々、剣は両手で握らなければレベル90の〈冒険者〉を塵にするなんてことはできないだろう。

「まあ今日はオフレコさ、計画のことはなしでプライベートでいこうぜー。」

だからボクのマネして猫かぶるの止めなよ。腹割って話そうぜ」

「あら、どういうつもりかしら、あなたがそんなこと言うなんてなにか裏がありそうね」

「いいから猫かぶんのやめろつってんだよー、頭わりいなー。これだから二十八になつてもボクなんて一人称使っちゃうボクっ娘は。社会人だったら、わたし、わたくし、僕、の三択だろうがー」

「なんの問題もないわね」

「年齢以外はね、二十八で『僕』って（笑）」

「あんただけには言われたくないわ」

男女差別甚だしい。女だって「僕」って名乗っていいじゃない。

「僕」が一人称の奴と『ボク』が一人称の奴が会話してたら混乱するだろー！いい加減察しろよ！！必要的配慮だよ！！ただでさえボクたちめんどくさい性格してる二人だったんだからー！」

「なにをいってんのかさっぱりで、大変癪にさわるのだけどなぜだか言い返せないのが悔しいわ」

言うことを聞かなきやいけない気がする。その必要性に迫られている気がする。

「あー、もう。わかったわよ、私の根負けでいいわ」

一升瓶に入った酒を一本マイクロフトに手渡して、もう一本の一升瓶を開けつつ部屋に一つしかないベットに胡座をかいて座り込む。一口酒を口に含むとマイクロフトへと向き直った。こんな殺人鬼の闊歩する夜にわざわざ出向いてきたのだ、レディをエスコートするための話題提供くらいはするだろう。

そんな雰囲気を感じたのはさすが忘れがちではあっても探偵か。手渡された一升瓶を床に置きつつ話題を振ってきた。彼らしい話題を。

「君そもそもなんでこんなことしてんの？」

「はっ？」

虚を突かれた、というほどのことはない。むしろここまでやっつてなにを今更そんなことを聞いてくるのかと怒りすら湧いてきそうだった。そもそも協力者を名乗り出てきたのはマイクロフトの方だった、全てを理解した上で協力していると思うのが普通の思考回路した人間だろう。今更そんなことを聞かれても挨拶にこまる。

「奏クンってそもそもできる子じゃん。あの子たいがいのはやつてのけるよ？探偵業の経験も持つてるし、並以上に腕っ節もある、頭の回転だつて悪くはないし、ついでに言えば料理もできる、性格も根っこの部分から善人だろう。」

確かに君が言う通りに何かに突出して取り組むような気概は持ち合わせていないのだろうけど、そんな人間世の中たくさんいるだろう」

「なに？だから殺してまで矯正させる意味がわからないって？」

「そーそ、君自分の天才性を隠れ蓑にしてそんな逸脱しすぎた行為をカモフラージュしてるだろ。家族だから見過ごせないとてよりもっと直接的な動機があるって考えるのが普通だって。」

プロフィール
探偵としてではなく奏クンの理解者として君と対峙したクイン
チャンは見抜けなかったただだよ。第三者からみればバレバレだった

「天才も社会に出てしまえば皆平等なんだよ」

多少の鼻屑はされるだろう。多少の羨望は集めるだろう。多くの嫉妬を集めるだろう。だが、それまでだ。社会はその人物に合ったステージが無数に用意され連なり並列することで成り立っている。そこに上も下も形式上はあったとしても事実には存在しない。そのステージに立ってしまえば周りは自身と対等だ。他所に目を向ける余裕なんてありはしない。

「君も例外じゃなかったかい？」

「もちろんさ。まったく化物ぞろいの人外魔境だった。あの連中はもう人じゃなくて妖怪の類だ。」

しってるかい？二億の金がただか一匹の狐のために指先ひとつで動くし、人の命がたったひとりのせいで百単位で増えたり減ったりするんだよ、それはもうゲームのひと零が反転するようにね」

「君のそこだけたぶん異世界じゃない？」

マイククロフトの嘆きは聞こえていない。たぶん彼女が過あの子ごしていた世界の日々はレイドゾーンがお花畑に見える人外魔境だったのだろう。

「だからこそ怖いんだよ。奏あの子には熱がない。何をすればいいのか目的が見つからない人間とは違う。確固たる目的をもって、それでもそれを成し遂げようとする気概がない。それは、あまりにも致命的だ。」

成し遂げるつもりのない目的を持ち続けて停滞し続ける人間と小さくとも目的を模索する人間とじゃそんなの差は明らかだ。前者は折れて曲がって朽ちるだけ、後者は積み重なった小さな成功幸せを勝ち得るんだ。

そんなもの、どれだけの周りの人間を不幸にする。なまじ人に好かれる人間だから駄目なんだ。人の輪の中に入り込むやつだから駄目なんだ。お人好しで優しい人間だから駄目なんだ。それは二十一年間、奏が生まれて姉で有り続けたわたしが知っている。

このまま進めば奏は親しい友や愛する人をも不幸のどん底に道連れにするただの外道に成り下がる」

クインは奏の理解者として百恵の前に立ちはだかった。確かに彼女の思いは本物だろう。奏と出会って五年の歳月、大事に守り通してきたのだろう。そうだとしても、奏儂百恵が奏の姉であることを忘れてはいけない。彼女は〈大災害〉に巻き込まれるまで弟想いの姉だった。そして今も弟のためにのみ彼女自身は動いている。奏のことを想い続けてきた年季が違う。そこに質の違いはなくとも量の差は比べるべくもない。クインは敗れるべくして敗れた。それは必然だった。

「なあるほどお。要は君自身も怖いんだあ、彼の道連れにされるのが。でもそれなら彼から距離を置けばいいじゃない」

腹立たしい程に真理を突く言葉をマイクロフトは口にする。責めるようになじるようにいたぶるように。彼は猫だ。

「そんなものはそれこそ理由にすらならないわ。

なりふり構わず最低の行いをして嫌わることになるのはしようがないとしても、あの子に助けを求められたら、手を伸ばされたら握り返さない理由にはならないでしょう。地獄の底に引き摺り下ろされるとわかっていても」

それに同意するわけにはいかない。それは全てを否定することと変わらないから。

「ま、わたしだつて黙って道連れになんかさされるつもりなんてないわ。あつちが引き摺り下ろそうつていうのなら、わたしはその前に引き上げるつもりよ。もう伸ばされた手に気づかないなんて愚かな真似なんてしたくないもの」

だから殺す。

この世界は奏の閉ざしてしまつた世界をこじ開けるにはあまりに

もうつてつけだ。荒療治なのは重々承知している。

だが、もう奏には高校卒業から与えられていたモラトリアムはあまり残されていないのだから。遅かれ早かれ実家の神社に籠る生活は脱しなければいけない時が来る。自分のために用意された世界に行かなければいけない時が来るのだ。おそらくこの〈大災害〉が最後で最悪のチャンスだ。

子供はいつか大人にならなきゃならない。いつまでも子供のままではいけない。

「百恵ちゃん、やつぱろ君はおかしいや、なんでそこまでわかってそうなるのやら。ボクにはどうにも理解できそうにない」

マイクロフトは話の間、一口も口をつけなかった一升瓶に手を伸ばし一気に飲んだ。話には満足したらしくそれ以上マイクロフトがなにかを言うことはなかった。



代わり映えのしない結界の中で一ヶ月たらずの月日が流れた。

「八枝、準備は万全か？」

「怪我也治ったし大丈夫だよ。完治できたのはこれのおかげだな」

場所は後光が差し込み大木が堂々と生えた丘。そこはアサハナが結界を修復するために奏にその力を見せた聖域であり一ヶ月前の奏では入ることは叶わなかった場所。

差し込む後光を浴びるように奏は座り込んだままその傍らに寄り添うように突き立った一本の白杖を見上げる。その確かな存在感を放つ白杖は後光の光からさえも吸い尽くさんばかりにその場から魔力を吸い上げていた。

「8割がたは戻ったな。おかげで社の修復は後回しじゃ」

「壊したのはほとんどアサハナ様だ、ブレス吐いたり尻尾でなぎ払ったり、広範囲攻撃は大概アサハナ様のせいだ」

「ぬしの最後の全陰陽札の連鎖爆発もなかなかじゃったと思うがの。あれで吹っ飛ばされたせいで母屋は半壊じゃ」

一か月前とは違い長く美しかった緋色の髪が首筋まで切り揃えられ童女のようなおかつぱ頭に変わったアサハナが奏の傍らに立つ白杖に目を向けながら呟く。

〈偽光とどかぬ百式の儀式杖〉はかつてはアサハナの所有物だった。正確には〈百式の儀式杖〉になる前の杖がアサハナが奏とアサハナを包みこむようにそびえ立つ大樹の枝とアサハナの爪から創り上げた〈幻想級〉の杖だった。

遙か昔にこの聖域に訪れたとある姫に託したそうだが回り回って奏の元へといきつき奏がまたもとの持ち主であるアサハナの元へと持って現れたことなのである。だが戻ってきた杖は本来の力の大半を失っていた。なにかしらの大規模魔術、それこそ〈世界級〉クラスの魔法に使われたかのような痕跡を残しており、その失ってしまった力を取り戻さんとせんばかりに生まれた聖域に帰ってきたわけである。

だがその失われた力も神木と聖域から力を吸い上げることで大半を取り戻し奏の傷を癒すのに一役買っていた。

「八枝、儂からの餞別じゃ。折れた刀の代わりに使え。銘は、そうじやのうー、〈無銘 虎耳草〉とするか。今のおぬしは無銘の刀、無銘ゆえの名刀。ぬしらしくてそれがいい」

折れた刀じゃなくて折った刀な。刀をもらっておきながらそんな野暮ったいことを言うのもなんなので突っ込みどころにツツコミを入れることを我慢し奏はアサハナからひと振りの刀を受け取る。

刀を深紅の鞘から抜いき放ちその刀身を頭にさせる。刀身は夜刀とは打って変わって白銀の刀身をもち差し込む後光を受けて薄く赤色の光を反射してみせた。

アサハナから受けた最後の修行。

それは至極単純で何よりも難題であった『どんな手を使ってでも構わない。儂に膝をつかせて見せろ』一ヶ月の修行を経てアサハナが投影した刀をへし折り、結界術の知識をも完全に身に付け新たな〈口伝〉を手に入れた奏にとってもそれは難しいものだった。

というよりも〈大規模戦闘〉クラスの相手とマトモに戦って倒すこと、本来の目的に比べればそれは至極当たり前の順当な道筋ではあつ

たのかもしれないが、それを奏が成し遂げるのには二度の敗北と一昼夜の戦闘の末の意識不明での重症で得た勝利だった。

その勝利も損害は大きく〈陰陽札〉の四聖獣の札を全て失い、空中でブレスを受け〈魔法の靴〉を破壊され、龍化したアサハナの額の角とぶつかり合い夜刀を折られ、地面に這いつくばり三度目の敗北を前に周囲にばらまかれた〈魔法の靴〉の中に入っていたアイテムたちに気づいていなければそこで終わっていただろう。

ばらまかれたのは〈魔法の靴〉に入っていた奏がこれまで蓄積させ続けてきた〈陰陽師〉の固有作成アイテムである〈陰陽札〉。ひとつひとつの火力ではアサハナに膝をつかせるところか傷のひとつもつけることのできない火力でしかない。それでも蓄積させ続けた百を優に超える魔法の束を一度に同じタイミングで爆発させることで天地を揺らした。

絡み合い束ねられた魔法爆発はアサハナの宙に浮く巨体すらも吹き飛ばし母屋の方を半壊させるに至った。これにて修行は全ての過程を終え、奏は完成に至った。

「いい刀だ。でも……、ほんとによかったんですか？髪」

「かまわんよ。体の一部は使わんとこの階級の刀は作れんし、儂がそうしたかったんじや。髪は女の命、これを見れば儂のことを思い出すじやろ？これ以上の聖遺物はない」

「しゃらん、と短くなった髪を揺らしながら奏を見つめるアサハナ。その目は愛しい存在をみるような慈愛に満ちた視線で満たされていた。この一か月にも満たない月日で随分と思いきわされたアサハナの独占欲を思い出して奏は目の前の刀から感じる凶器としての威圧感とは別の恐怖を感じた。

「え、なんか重い……。やっぱいらわないわ、なんか呪いとかついてそう」「バレンタインデーのチョコじゃあるまいて。むしろ加護がついとるわ！」

「冗談です。ありがとうございますアサハナ様。刀だけじゃなく法衣からなにからなにまで蔵の宝を片っ端から譲ってもらって」

これまでの感謝を告げながら奏は深々と頭を下げながらアサハナ

へと感謝の言葉を伝えた。

打算も同情もなく純粹に力を貸してくれた。求められたものはただのひとつとしてなくただ困っていた人間だとわかれば迷いもなく手を差し伸べてくれた。道を示して導いた。その行為に奏は感謝の想いしかなかった。

「譲つてはおらんよ。対価を得ているからのあくまで正当な取引じゃ。」

儂はそなたの魂を覗いたそれはもう奥の奥までのそなたのことで儂がしらんことではないと言つても過言ではない。魂の全てを知るということはその魂を持つものを縛り従えるのと同義に違いない。言うなればそなたは儂の眷属家族みたいなものじゃな」

「あなたにだったら俺は縛られても構わないよ。それだけの大恩がある」

「ごまかすように神様は本当か嘘かもわからないような話をして煙に巻く。」

「抜かすな小僧が、少しは学ばんか、たわけめ。儂だけに縛られればまた二の舞にしかならんわ。大口叩くのはもつといい男になつてからにせんか。儂を抱くにはあと十年は早い」

「十年たつたら抱かせてくれんのか、そりや楽しみだ」

「かかつ、その前に初恋のけじめくらいつけてこい、忘れられていても知らんぞ?」

「本当に十年くらいかかりそうだなあ。姉やらストーリーカーメイドやら一筋縄でいかない人たちがばかりだ。壁が高い高い」

やれやれと今まで自分がふっかけてきた因縁の数々を思い起こして首を振る奏。随分と喧嘩もふっかけてきたし、おせっかいなありがた迷惑もしてきた。奏自身が気づいていないところでもたくさん因縁が待ち構えているだろう。

勝手にいなくなったことをたくさんの人からお説教を受けるであろうことを今からでも十分に予想できた。まずはみっちりとヘンリエッタ、次に軽くマリエールから、千葉からはがつつりと怒られるだろう。にやん太からお小言のひとつくらいは言われるかもしれない。

「色恋くらいでめげるなよ、龍神アサハナが認めた男じやろ。行つてこい八枝、しばしの別れ。」

——縁があつたらまた会おう」

それでも帰る場所があるなら帰るべきだ。

「さようなら。あなたに会えて本当によかつた」

背中を大きく叩かれ青年は前へと進む。

その左手には身の丈にも及ぶ白杖を握り腰にはふた振りの刀を差していた。大樹へと触れた手からは魔力の光が漏れ出し結界の外へと続く扉を創りあげていった。

その扉から吹き漏れた外からの冷たい風は群青の着物の上から羽織った緋色の羽織が強い風によつてはためかされ青年の長い髪を揺らす。

そんな青年の表情は清々しいほどに気持ちのいい笑みで染め上げられていた。

第五十四話 叶うならばその先へ

アカツキは死んだ。その知らせを聞き千菜が大神殿に到着したときには既にひと悶着起きた雰囲気だった。アカツキを取り囲むようにしてリーゼ、ヘンリエツタ、ナズナ、そしてレイネシアと知らせを聞いて駆けつけた面々だろう。それぞれが思い思いの表情を浮かべて立っている。

「とりあえずは館の方へ向かいましょう。話はそれからです。」

最終的には殺人鬼を終わらせる、にしろそれ以前にはつきりとさせなければならぬことがあります。今のままでは纏まるものも纏まりません。

わたしにも、やらなければならぬことがあります」

「そのやらなくちゃいけないこと、私にも手伝わせて欲しいな、リーゼちゃん」

「お？千菜く、おかえりく」

ナズナがなんとも場の空気にそぐわない間の抜けた声で千菜を迎え、ヘンリエツタは長らくギルドホームを離れていたギルメンの姿を見てホッと安心した表情を浮かべた。リーゼは彼女の兄と同じような唐突な唐突の登場にも表情を崩すことはしなかった。

千菜がその場にいる全員をじっくりと観察することでアカツキとレイネシアが申し訳なさそうに視線を伏せる。なにか後ろめたいことでもあるのかと思う程度には千菜も察しはつけた。

「わたしもさ、兄さんが帰ってくる前にきちんとさせておきたいんだ。だからさ、アカツキもレイネシアも一緒にどう？目を逸らさなくてもいいように一緒に頑張ろうよ」

千菜はアカツキとレイネシアのふたりにそう語りかけた。彼女たちがどういう経緯でこんな顔をしているかなんてこと千菜は知りはない。千菜は千菜でやってきたことがあった、事が現在どのようになっているのかわからない。

それを全て把握するのはお世辞にも自分にはできないだろう。そういう手合いはシロエや奏、目の前にいるリーゼやヘンリエツタ、つ

いさつき別れたばかりのクインの専門だ。

千菜は彼らがここぞの切り札として盤上で必殺として切れるように備えることしかできないのだ。自分にできないことはわかっている。だからこそ自分にできることを最大に。

アカツキもレイネシアも誰であってもそれは変わらない。今は下を向いてしまっているかもしれないけれど、彼女たちの力が必要になるときが必ずくる。ほっておくわけにはいかないから、だから千菜は手を差し出す。



殺人鬼エンバートⅡネルレスはエンバートⅡネルレスあつてそうではない。その存在はネルレス以外の存在に蝕まれている、正確にはルグリウスという〈古来種〉の成れの果て、かつて討つべき存在だった悪鬼へ落ちた英雄に憑かれている。

きっかけはネルレスが手に入れた一本の刀だった。刀の名は〈霧刀 白魔丸〉アキバでも名の通った鍛冶屋アメノマで購入した〈冒険者〉が使うような大地人であるネルレスが持つには破格の性能を誇る一本だった。ただひとつ、エツゾの英雄の呪いを帯びていなければ。

ルグリウスの愛刀という側面を宿していたその刀を抜くとネルレスの精神はルグリウスのそれに侵食されていく、悪霊と化した化物の侵食。だがそれはネルレスに途方もない高揚感と全能感を与えるのだった。故に手放せない。力を失うのが惜しい。惜しくて怖い。

ここでひとつ注釈を入れるとするならば、ルグリウスの愛刀というのはあくまでゲーム時代のフレイバーテキスト上だけの話である、本来フレイバーテキストになにかしらの力やましてや呪いなんでもはなく文字通りただの香り付けの意味合いしかなかったのだろう。

だが、今は違う。〈大災害〉が起きて世界が変質した。フレイバーテキストさえも力を持ち始めている。変質はこの先も続くだろう。

—— 〈大災害〉はまだ、続いている。

〈動力甲冑〉という絶対の力を持ちながら衛士としてのプライドと

供贄一族の掟をもって律し続けてきた彼の箍が外れるのはそう時間のかかることではなかった。普段から心の片隅に燻っていた不満の火種、アキバの平和を何百年と守り続けた衛士という栄誉ある仕事。

しかしアキバの〈冒険者〉はそれに感謝をすることもなくのうのとまるで自分たちだけがアキバを平和に保っていると感じ違えているかのようには暮らしている。それは本来なら目に見えて燃え上がるような火種ではなかったが、ルグリウスの与える古来種としての侵食がネルレスが種火を燃え上がらせた。

結果出来上がったのがアキバの街を震撼させる殺人鬼。英雄に飲まれた正義の味方だった。

そこにもはや正しさはない。彼が抱えていた叶うならば叶えられ間違いを正して欲しいという願いもいまや邪悪なそれへと成り果てた。

愚かしいと断ずることは簡単だ。

自身が何かを行動を起こすこともなく燻り続けた結果の末の末路、だがこうなることを予期できたかと問われれば誰であろうとそんなことはないだろう。星のめぐり合わせが悪かった。魔が差してしまったと言ってもいいかもしれない。取り返しはもうつきやしないし後戻りなどもつてのほかだが。

こうしてかつての誇り高い名も知れぬ勇士は最低の悪鬼へ墮ちていく。小さな変質波が大きな変質波へと変わり異物冒険者へ牙を向く。



「リーゼちゃんから伝えられた〈D・D〉で把握している〈口伝〉は八つ、そしてわたしが使える〈口伝〉とわたしの個人的に知っている〈口伝〉を合わせれば十三。

アカツキ、あなたには十三の業の詳細を伝えれる。でも勘違いしないで、これは中身を知ったところで再現できるものなんかじゃないの、一朝一夕で身につくはずのないものをあなたは今から身につけなきゃいけない」

「では、どうすればいい?」

アカツキは近づくと自分よりもずっと背が高く見上げなければ視線を合わせることもできない友人に問いを投げる。

あのあと、アカツキとレイネシアはしこたま怒られた。それはもう散々に。普段は滅多に厳しい言葉をアカツキに使わないヘンリエツタさえもが『周囲を馬鹿にしてはいませんか?シロエ様だけに頼っていればいいなんてことはもうできないんじゃないですか?』と辛辣な言葉を投げかけ、館に行く前にふたりに優しく微笑みかけた千菜さえも甘い言葉は口にしなかった。

アカツキとレイネシアの見通しの甘さをその場にいたほとんどの人間が叱りつけた。口を挟まなかったのはアカツキをそそのかした張本人であるエルノとただ黙って見守る姿勢を貫いたクインだけだったろう。言い逃れのしようはなくアカツキとレイネシアはお然りを受け入れ、周囲の人間は甘やかすことなくふたりを叱りつけふたりの願いを聞き入れて殺人鬼を止めるために動きだしている。

作戦の決行まであまり猶予はない。事件の早期決着は事件の犯人が大地人という特性上、隠蔽はできなくとも多くのアキバの住人たちと大地人との関係の決裂を避けることのため必要なことなのだ。

そのためにレイネシア姫の下に茶会の名目で集まっていた乙女たちが一丸となりレイドチームとしてリーゼ、ヘンリエツタを筆頭に四方八方関係各所を駆けずり回っている。

しかしアカツキはその点事務面での仕事はめっぽうダメなわけであり、殺人鬼との戦闘に有効打を持ったためにもこうして千菜と向かい合い〈口伝〉の習得に挑もうとしているのだった。

「〈口伝〉はただの技術の応用、発想の転換なのよ。わたしたちが生きる上で当たり前にしてきたことをするだけなの、だから特別なものを求めちゃ駄目。〈口伝〉はただできることを突き詰めていく過程で形になる副産物、道なりの途中で手に入れたものが〈口伝〉になるわけね。あー、なんて言ったらいいのかな?〈口伝〉そのものを目指しちゃ駄目っていうのかな? 感覚的には」

「??」

「難しいよね、口で説明するにはどうにも容量を得にくいんだよへ口伝」って。実際に身に付いてみればするつと落ち着くんだけど。

まあ、とりあえずはアカツキにできることを一から確認してみようか。頼んでたもの持ってきた？」

「ああ、確かに言われたものは持ってきたが…、今更こんなものが役に立つのか？」

アカツキが胸元まで両手で掲げるのは十数枚の紙の束。ところどころインクが滲んでおりあまり目新しいものには見えない。それはまだミノリやトウヤのレベルが20にも満たない初心者だった頃、初めて彼ら双子が奏に師事を受けた時に共にいたアカツキも受け取った教本だった。中には作成を手伝った几帳面そうなシロエの字とアカツキ自身で補足を入れた字が連なっている。

「大事大事、むしろそれが今一番修行に必要なものだよ。自分になにが出来てなにが出来ないのか、なにが得意でなにが苦手なのか。自分を知らないきやそれ以上なんて見えやしない。」

それじゃ、さつそく修行第一段階。それに〈追跡者〉の特技も含めて自分が使える特技を書き足してね、できるだけ詳しく自分んにできるかぎりでもいいから」

千菜が〈魔法の鞆〉から取り出したペンをアカツキに手渡す。受け取ったペンを片手に千菜の顔を見返すときにこりと千菜は微笑みを返した。〈口伝〉体得のためにはどうやら必要なことらしい。アカツキは木陰に腰を下ろし、紙の束を読み返しつつ以前は知らなかったことや〈大災害〉以降の差異まで自分が知っていることをひとつひとつ書き足していく。

「アカツキさん、どうだい？調子は」

声をかけられた。その声には直接話したことはないが幾度かの聞き覚えがある。アカツキが顔をあげるとそこには紅い外套コートを羽織った少女がアカツキの持った紙の束を覗き込むようにして立っていた。

普段は鬪志というか強気な自信というかそういったものを彼女は目に灯っていて並々ならぬ氣迫を感じたのだが今の彼女はそういっ

たものを感じなかった。だが、だからといって今の彼女が駄目かというとかツキにはそうは思えなかった。以前の強さのようなものは感じない、けれどそれと同等かそれ以上の雰囲気は彼女は放つていた。

「今ちようど書き終えたところで。えっと、確か探偵のクイン、さん」
「クインでいいよ。今回は仕事ロールプレイ抜きに参加だし」

少しだけ気圧されてしまう。彼女とはさして話したことがあるわけでもないのでもうしても慣れない相手との会話は無愛想な風になつてしまう。そんなアカツキの態度に嫌な顔のひとつもせずクインは自分から歩み寄ってくれた。

「わかった。じゃあ、クインで。クインはわたしになにか用か？」

「うん、アカツキさんが千葉から聞いたへ口伝は戦闘系のものばかりだろうから、それ以外のへ口伝のことも教えてあげようかなと思つてね。手を出して」

アカツキは言われた通りに手を差し出す。差し出された手をクインは両手でぎゅつと握り締める。握手のつもりだろうか。

「いち、にい、さん、…」

クインはアカツキの手を握り締めたまま目をつむり数を数え始め、そのまま三十まで数えていった。その間アカツキは彼女に話かけることもできず流されるまま握られた手を見つめ続けて彼女の不思議な行動が終わるのを待つほかなかった。

「へマナ・チャネリング」

クインの口からシロエもよく使う呪文の名前が嘆かれる。アカツキのMPが無断に徴収されクインのMPと混ざり再分配される、今のクインが発する清められた冷水のような雰囲気は匂わせるMPをアカツキは感じる。

その気配に触れているだけでアカツキの心の中にあつた隠しきれない不安感や焦りも沈静化されていくようで、MPを大量に持つていられるような貧血にも似た感覚を差し引いたとしてそれはとても心地の良い感覚だった。

「わたしのへ口伝は誰かと共に歩くためのへ口伝。探偵だからね、ワ

トソン役がいなくてどうにも締まらない。だけど残念ながらわたしは寂しがり屋だ。こうして確かな繋がりを確認する手段がないと不安でしょうがない」

「君と共に歩くは永久の道」、クインはそう語った。自身と対象の感覚を共有する「口伝」。その共有は最大で五感全てを共有することもできるため、自身がその場に居ない場所での会話も聞くことや匂い、視界に映るものも見ることができ、諜報能力に圧倒的なアドバンテージを得ることができ、探偵らしい優秀な「口伝」だ。

「ただし、共有するためにはいくつもの準備がいる。ひとつ、感覚を共有する相手に直接接触すること。触れた時間に比例して感覚を共有できる時間は長くなる。ふたつ、「マナ・チャネリング」により精神面においても接触すること。つまり味方にしか使用はできない。みつつ、発動は念話による擬似接続をきっかけとする。

まあ、このうえなくめんどくさい上にここまでやるほど近い相手がいることが前提条件になる」

ふつとアカツキに満たされていた充足感が消える。クインが「口伝」を解いたのだろう。

「口伝」ってのはこんな風になにかの応用でしかないの、なにか特別な力を使ってるわけでもなんでもない。ただ、その人が成し遂げたい、求めている願いを目指す途中で手に入ったものなだけ。

覚えておいて「口伝」が特別なんじゃないやなくてその延長線上にあるものが特別な」

シロエはミノリたちの願いに応えたくて「契約術式」を。

濡羽は自分の居場所を作るための手段として「偽装情報」を。

そして、奏は……。

他の「口伝」の使い手たちも皆「口伝」ではなくその先に本人が自覚しているようにしていまいと望みを持っている。それがちつぽけだろうが大望であろうが問わずにだ。だから「口伝」の使い手たちは口を揃えてこう語る。

『「口伝」なんてものはくだらない。そんなものは望むものじゃない』

アカツキが見てきたのはへ口伝そのもの、だから手に入らなかった。

羽ばたくべきは雑居の乱立する地の上ではなくはるか空の彼方。
そこに自分^願以外は、いらぬ。

第五十五話 アキバレイド

それは雲の一つも空にない新月の夜だった。月の明かりのないその夜はか細い星の光だけ。それはまるで今これからアキバの街で起こおうとしている事態を察し恐れているかのような静けさだった。普段はまだ喧騒の絶えるような時間ではない、けれど今のアキバにはそんな無粋な音は弾んでいかなかった。

「目標補足つ。中央通りを小川方面に向け徒歩で移動つ。第一接触はアカツキさんの部隊。回復は一枚、二人組D班は移動それ以外は待機」

リーゼの力のこもった声が夜のアキバの空気を刺すように震わせ、彼女の指示を境に街にいるレイドメンバーたちの緊張と決意を高める。アキバの街という前人未到の盤上でゲームが胎動を始める。

今現在においてアキバの街には住人たちの姿はない。殺人鬼を打ち取る今宵のために万全を期す目的で夜間外出禁止令が〈円卓会議〉より正式にアキバの全住民に通達があったからだ。関係のない一般人を巻き込まないためという目的が勿論第一ではあるが理由はもうひとつある。

それはこのレイドのターゲットが死戦士ルグリウスの成れの果てであるということから起因する。

〈死戦士ルグリウス〉。もとは最果ての帝国エツゾの英雄である。強大な巨人族の侵略からたったひとりでエツゾの人々を守り続けた孤高の大英雄。

しかし彼の最後はその華々しい経歴からは考えられない結末を迎えることになる。巨人族との長い戦いの合間の僅かな罅、身体を休め戦場で荒んだ心を洗い流す至福の時、ルグリウスは自身の身近にいたひとりの女によって毒殺されることとなる。

自身の身の丈の数倍にも及ぶ巨人を屠る大英雄であっても毒の入った杯のひとつには敵わず、いままで続けてきた長い戦いとは裏腹にあつさり死んだ。

されど腐っても英雄。人であって人ならざる者である。ここから

が英雄ルグリウスの真骨頂。不屈の心を持つ英雄は死してなお滅びることなく怨霊となってまでも蘇ったのだ。かつて人々を救い讃えられた英雄は人へ仇なす異形の怪物と成り果て〈冒険者〉に討たれることになる。なんと皮肉なことか。

ススキノの大地に怨霊としてルグリウスが戻ったのは、ゲームでいうところの十個目の拡張パックが追加された時だった。難易度としては中の上、その先にある大規模レイドに挑戦するために存在するそこそこ歯ごたえを感じさせる繋ぎのレイドのひとつだ。復活したルグリウスは自身を裏切った大地人へ対して復讐に燃え自身の周囲に存在する人間の数に比例してステータスが上昇していく凶悪な、しかし種を明かしてしまえば対処はしやすい能力を持っていた。

しかし、その能力はこのアキバの街というフィールドで闘うという点において理不尽極まりない組み合わせを持つことになったのだ。なにせ街だ、街は人がいるからこそ街と呼ぶ。かつてススキノの大地でルグリウスを討ち取ったフィールドとはまるで人口密度が違う。そのうえに〈動力甲冑〉というテレポト能力まで持った補強具兼隠れ蓑のおまけ付きである。相性^{最高}最悪の組み合わせ。互いに護るものに不満を持った者たち、偶然にしろ衛士と古来種の英雄、彼らを結びつける縁は確かに存在していた。

「始まりましたね、リーゼさん」

「ええ、始まりました。あとはひとつずつ着実に詰めていきます」

レイドゾーン
アキバの街の戦況をおおまかに確認できる位置に存在するビルの階段を早足に登りながらリーゼは隣を並走するキョウコの声に応える。その声は気の緩みのひとつも感じさせない張り詰めた弦のように。

「やっぱり〈D・D〉の教導隊長は違うなく。こんな作戦を考えちゃうなんてこれならきつといけますよ」

リーゼの張り詰めた空気を空気を少し緩めさせようとキョウコがそんな風にリーゼを褒める。

夜間外出禁止令を取り付け戦場の最適化をしルグリウスの戦力を^{フィールド}

削ぎ、さらにレイドメンバーさえも最小人数で編成配置し各所に配置
チエックポイントを作成し道を形成。ルグリウスを発見及び引き回
しする部隊のサポートをしながら誘導地点まで連れ込み王手をかけ
る。粗さを削りきったアキバ有数のレイド攻略ギルドへD・D・Dの
の教導部隊隊長が作り上げた完成された作戦。しかもこれを短時間
で実行可能までこぎつかせるその手腕は同じくアキバ有数のレイド
攻略ギルドへ西風の旅団に所属するキョウコでさえも感嘆に値した。
しかし、キョウコの言葉に彼女はその張り詰めた表情を緩めること
はせず言葉を返すのだった。

「少しだけ愚痴を聞いてもらってもよろしいですか？」
「?どうしたんですか」

「正直、この作戦でいけるかどうかわからないんです。勿論自身は
ありますし有効に作用するでしょう、それは間違いありません。ただ
これでこのレイドを百パーセントクリアできるかと聞かれたら、わた
しはわからないとしか答えられません」

「でも、それは普通のことなんじゃないですか?レイドなんて何回も
失敗して失敗してやっと成功をつかむのが普通ですよ」

「はい、それが当たり前です。でも、へ大災害からわたしたちの知っ
ている世界は変質を続けています。ただのNPCだと思っていた
人たちもわたしたちと同じように悩んで喜んで生きている」

人間らしく生きている。苦悩して幸せになるために死に物狂いで
生きている。むしろ現代日本で平和と安定の中に生きてきたへ冒険
者よりも過酷で危険な世界に住む彼らの方がよっぽど同じ生き物と
しては強いのもかもしれない。

「それってつまりゲームだった頃と違って相手も考えてるってことな
んですよね?一度失敗してしまえばもう二度と同じ手は通用しない
かもしれない。

もうレイドはクリアできるよう設定はされていないのかもしれない
せん。そう考えるとわたしは恐くてしかたありません。

ひとつの判断が取り返しのないにつかないことに繋がってしまうんじや
ないかと気が気じゃない」

ゲームだった頃はどんなに難しくてもクリアすることは絶対に可能だった。それはゲームの設計上必然だ。なにも負ける結果しか与えられない挑戦に価値や喜びを見出す人間はいないからだ。攻略不可能はゲームとしては本末転倒にほかならない。

だが、これはもうゲームではなく紛れもない現実なのだ。攻略不可能なんて人生では当たり前、クソゲー上等はどんな世界でも変わりない。

「それでもわかってはいるつもりでした。

あの姫はこんな恐怖といつも戦っていたのですね、本当に尊敬しますわ。中学生のやり直しをしていたのはどっちだったのでしょうか」

「うーん、それって多分円卓に参加している人はみんなんじゃないですかね。リーゼさんだけじゃなくて円卓にいる人たちって多かれ少なかれそういうことに怖がりながらやってるんじゃないですか？

だからリーゼさんも大丈夫ですよ、なんたってわたしたちがいるじゃないですか！みんなやれば怖くないですよ！ここに集まった人達はたとえ失敗したとしてもリーゼさんを責めるような人はいません！」

「…そうですね、そうですね。元気が出ました、ずばばっと終わらせちゃいましょう！クリスマスに食べ損ねたチキンをみんなで食べましょう！」

「その意気ですよー！」

キョウコに晴れやかな笑顔に後押しされてリーゼの歩幅が大きくなり前へ進む速度もまた速くなる。一寸先は闇かもしれない、けれど進まなければその場は暗闇。目指すは黄金に輝く七面鳥が待つ暖かなパーティー会場だ。



「へパラライズブロウっ!!!」

アカツキの横薙ぎの一撃が殺人鬼の分厚い装甲に喰いかかる。その素早い一撃をもともしない様子で殺人鬼は千菜をもひるませた

獣のごとき敏捷性で反撃に打って出るがそれをアカツキは小柄な身体を殺人鬼のその大きな身体の股下に滑り込ませ無防備な背中に離れ際に一撃加えて飛び退いた。

「アカツキちゃんまだいけるか？」

「大丈夫」

背後に控えるヒーラー、マリエールの呼びかけにアカツキはしつかりと殺人鬼から視線を逸らすことなく答えた。以前殺人鬼と見えた際は雲泥の差の善戦をアカツキはしていた。以前のアカツキではたとえヒーラーがついていようとも一対一で殺人鬼と切り結ぶことはかなわなかった。前回の戦闘はコソコソとソウジロウの背後に隠れてそれこそちくちくと鬱陶しく飛び回ることと戦いも見れるものになつていたので。

だからといってアカツキの戦闘能力が著しい強化を得たわけではない。精々ボロボロになってしまった防具を新調した程度だろう。レベルも大して変わりはないし武器だって以前と同じチェンジインキルン〈窠変天目刀〉のままだ。

ただ、自身のコンプレックスと向き合った。

『悪くはないよ、ただ十全ではないね。確かに〈暗殺者〉の攻撃力に相手の上を常に取り続ける先方は理に適っているわ。大概の敵はそれで退けられるでしょう。でもそれって自分よりも力の強い存在には通りづらいよね、それだけじゃ決め手に欠ける』

アカツキに千葉はそう告げて、断言した。

事実、アカツキは本気の彼女に手も足も出なかった。何度かしたことのある模擬戦とは次元の違う彼女の圧に、火力に、アカツキの誇る最高の一撃さえも相殺され為すべもなく蹂躪された。

決め手に欠ける。中途半端で〈暗殺者〉の良さは活かせていてもアカツキの良さは活かせていないと言われた。むしろ怒られた、勿体無いと悔やまれた。

超一流のプレイヤーは職業の型だけに嵌らず自身の個性がプレイスタイルに顕れる。例えばシロエであればMP管理能力を効率化する〈完全管制戦闘〉、奏であれば個性を殺し他者の実力を十全に引き出

すことで個性と為す^{オーバーバックアップゾーン}へ過保護な加護領域へ、千菜であれば自身の超火力を十全に発揮できる間合いを作り出す薙刀による炎の追加攻撃。超一流と謳われるプレイヤーたちは自身の実力を百パーセント発揮するための武器がある

どんなに攻撃力が高かろうと当たらなければ意味はない。どんなに防御力が高かろうと防御ができなければ意味はない。HPを全開する魔法を使っても使うことができなければ意味はない。

だからアカツキは自分の身長^{コンプレックス}の低さを武器にした。

彼女の体の小ささとその身活かした素早さは自身よりも数段大きな身体を持つ敵からすれば消えたようにさえも見えるだろう。小さく攻撃を刻み痺れを切らして隙が生まれた敵を逃さずそれまでの攻撃の比では威力の必殺の一撃で確実に仕留める。いままでの自分の身体の小ささからくる攻撃の軽さを上からの自身の重さを上乗せすることで補うスタイルから自身の小ささを活かして敵をかく乱し万全の一撃を乱された敵に打ち込むスタイルに変えた。これにより前回ではまともな打ち合うことも出来なかったルグリウスとも戦うことができていた。

「マリエールさん、もう一度聞くがレイドの経験は？」

「あらへんよ、これがうちの初陣や」

「ふっ、そうだな。年越しは大神殿の冷たい床では迎えたくないものだ」

そんな風にマリエールと言葉を交わしてルグリウスにまた一撃を加える。その一撃は軽い、^{へ動力甲冑}とルグリウスのふたつの力かけ合わせて持つ殺人鬼にはひるませることはできても毛ほども痛くはないだろう。それでも自棄を起こさず着実に一撃を蓄積させ、そして殺人鬼に背を向けてアカバの街を駆ける。

アカツキが仕留める必要はない。これはレイドだ。他にも共に闘う仲間がいる。

マリエールから回復魔法を受けながら駆けるアカツキの前に引き離れたはずの殺人鬼が現れる。^{へ動力甲冑}の持つ転移能力だ。

アカツキに襲いかかろうと飛び出した殺人鬼を見てアカツキは身

構えるが殺人鬼が彼女に一太刀加えることをさせないように獣のよ
うに真つ直ぐに突き進む殺人鬼の真横から巨大な剣が何本も襲い掛
かり殺人鬼を吹き飛ばした。これはへ召喚術師^{サモナー}が召喚したへソードプ
リンセス^スが放った魔法によるものだ止まることのない剣の連続掃射
だがこれはいつまでも続くものではない。MP効率を度外視した超
火力。

「アカツキさん！マリエールさん！行ってください！ここはわたした
ちが引き受けます！」

「…大丈夫。…もう千葉さんとクインさん、…スタンバイ完了」

連続掃射により殺人鬼を押さえ込んだゆづこがそう叫ぶ。アカツ
キとマリエールはその言葉に領き振り返ることもなくその場を走り
抜ける。去り際にかけられたへ付与術師^{エンチャンター}の移動速度上昇のパフによ
りさらに速度をあげて走る。

そして、そんな彼女らの姿を上空から見下ろす姿があった。その口
元は愉快そうに曲がりまるで劇でも見ているかのようにビルの上か
ら身を乗り出していた。

「やっぱり人形の出来がいいと見ごたえがあるねえ。順当に進めば少
女たちの素晴らしき成長物語になるのだろうが、神様はどうするつも
りだろうか。彼が舞台^{疫病神}に上がれば台無しになるかもしれないが。ま
あ、無粋な考察なんて意味はないか」

そんな風に独り言を話す猫人の肩に一羽の真つ黒な鴉が停まった。
「はっはー、噂をすればか、来たな。」

——奏クン^{ヒーロー}」

先程まで愉快そうにしていた顔から笑みが消えた。

不幸の鳥 鴉が飛び立ち漆黒の羽を撒き散らす。その場に先程までの人影は
消えていた。

第五十六話 不幸の象徴

アカツキは戦場を燕のように突き抜ける。

向かう先はアキバの中枢ギルド会館。そこにはリーゼ、キョウゴ、千菜、クイン等が待機している。この盤上で繰り広げられる数奇な戦いに終止符を打つために待ち構えている。万難を排して終わらせる駒を握り締めて潰されてしまいそうになる重圧に耐えている。

だからアカツキは彼女らのために、共に闘う仲間のために〈口伝〉を発動させる。

息を潜めるように自身の存在をこの戦場から極限まで薄めるようにアカツキは意識を独立させる。アカツキの視点が、気配が、存在がこの戦場の零度の空気に散っていく。アカツキが意識を戦場に散り沈みこめるほどアカツキの姿をした実体のない影が生まれ殺人鬼を翻弄し切り刻んでいた。

〈隠遁〉。それはリーゼと千菜から伝えられた幾多もの〈口伝〉のただのひとつも身につけることが出来なかったアカツキが自身の力で編み出した〈口伝〉。本来なら戦闘中に使えない〈追跡者〉のスキルである〈陰行術〉を無理やり戦闘中に発動させることで〈幻惑歩方〉、一〈鬼門変幻〉を組み合わせることで攻撃を受けることのない実体なき無数の分身を作り出すアカツキだけの〈口伝〉^{特別}。

「くだらない」

その特別をアカツキはたった一言で切り捨てる。いままで切望して渴望し続けてきた力をまるでそんな価値のないものだと言わんばかりに切って捨てた。

〈口伝〉は特別なものなんかじゃ決していない。今ならアカツキにもわかる。力を望むのにはなにか理由があつて力を求めることそのものが理由になつてはいけないことを。

理由なき力は自身の内側ではなく外側に求めることになる。それは空虚な中身から力をひき出すことなんてできないゆえの必然であり、己の内から引き出すことのできない力は自ずと外に求められることになる。それはもう自分の力でも、願いでも無いだろ

う。そんなものなんの価値もありはしない。

だからアカツキは〈口伝〉という幻想を求めていた自分をくだらなくと切って捨てる。そんなものを追う暇があるのなら一歩でも多く前に進め、ひと振りでも多く剣を振え、一つでも多く障害を切り捨てろ。一心不乱に前へ進もうとする人間にしか力はない。力を探して立ち止まるようになつたらならないやつに力は従わないしついでこない、助けなどするものか。

「ふっ」

アカツキが呼吸を一泊挟む瞬間に縦横無尽に殺人鬼を翻弄していたアカツキの分身が消えた。〈シヤドウニラーク隠遁〉が発動できるのはアカツキが呼吸を止め戦場に溶け込んでいる僅かな時間の間だけ。

その僅かな空白を空虚な怪物は見逃さなかった。アキバでも単体戦闘能力で三本の指に入る千葉をもひるませた野生の獣のごとき俊敏性が牙を剥いた。しっかりと間合いをとったアカツキの僅かな停止を見逃さず動き出しをさせまいと言わんばかりに猛烈な冷気をぶつけた。その冷気は小柄なアカツキではしっかりと踏ん張らなければ一瞬で吹き飛ばされてしまうであろうほどの勢いで殺人鬼の意思通りにアカツキは動きを止め続けざる負えなかった。

歴戦の経験を積んだ衛士がその隙を見逃すようなポカをやるようにはならずもなく、アカツキの邪魔にならないように、しかし回復を十全に行えるギリギリの範囲で控えていたマリエールの下まで距離を一瞬で詰め、その氷の一太刀をもってしてマリエールに襲いかかった。

「きゃー」

「くっ、マリエールさん！」

アカツキがそれでも冷気の暴風から抜け出しマリエールを守ろうと殺人鬼に背後から刀の一突きを浴びせるがそれでも殺人鬼は止まることなくマリエールをその妖刀から吹き出す冷気の暴風で殴りけ自身を貫き止めようとしたアカツキの手から刀すらも冷気で飲み込み掠め取った。

「しまっ……！」

『アカツキ、伏せなさい』

刹那、絶望を覚悟しかけたアカツキの意識がそんなものはなかったかのように覚醒する。殺人鬼が振るおうとする攻撃の方向など気にも止めることもなくアカツキは全力をもってその小柄な身体をさらに折りたたんで身を小さくする。次の瞬間には紅い一筋の流星が殺人鬼を吹き飛ばした。

身を屈めてその瞬間を視認しなかったアカツキでも自分の頭上を凄まじい熱量が通過したことと追撃を加えようとしていた殺人鬼が凄まじい勢いで爆音と共に吹き飛ばされていったことはわかった。

『ヒット。アカツキさん今すぐ走り出して、タゲはまだ切り替わっていない』

「無茶苦茶だな」

パーティーチャットを通して張りのある声がかつキへと指示を飛ばす。クインの声だ。ならばついさっきの埒外じみた一撃は共にいる千葉の狙撃だろう。クインの〈君と歩く永久の道〉で共有した視界を通して弓で狙撃してくれたのだろう。いくら特技による補正がかかるからといって無茶苦茶だ。

『まぐれ当たりだ、威嚇射撃のつもりだったけど当たった。正直こっちもびっくりしてる。狙撃でのサポートは期待しないで欲しい』

『アカツキ、折れてないわよね？。貴女のためにみんなが走ってるわ、だから貴女も走りなさい。大丈夫、武器は届けさせる』
「は?。」

『責任を取らさせてあげるの、今アメノマの多々良が刀を持ってそっちに向かつてるわ。知らなかったとはいえ、知らぬ存ぜぬで通すわけにはいかないでしょう』

「な、何を言っている!?!多々良殿は」

無茶の上に無茶を重ねてきた。多々良はアカツキがよく行く武器屋アメノマの店主だ。〈刀匠〉として彼女が打つ刀は質の高い物が多く愛用者があり彼女の経営する店アメノマには一流の刀が並んでいた。

その中のひと振りに紛れ込んでいたのが今回の一件の元凶のひとつへ霜刀 百魔丸だ。もちろん多々良本人は〈霜刀〉のフレイバー

テキストが具現化して殺人鬼が生まれるなんてことを知っていたわけではない。彼女になんらかの咎があるわけではないのだ。

『いいから走りなさいな、追ってくるわよ殺人鬼。心配しなくても、ナズナさんらも一緒に向かってるから。ヒーラーはマリエルさんとナズナさんはスイッチして。』

それにね、みんなで背負うんでしょう？あの子だけ仲間はずれはかわいそうじゃない。ちゃんと気持ちには応えなきゃ』

千菜の言葉にアカツキはぐうのねも出せなくなる。咎はなからうと本人がそうしたい、責任をとりたいたいと言うならば。

「アカツキちゃん行って！ウチなら大丈夫」

マリエールの声に踏ん切りがついたアカツキは駆け出す。タゲはまだ自分が取っている、殺人鬼が撤退したマリエルの方を追うことはないだろう。リーゼから通行ルートの指示が指示されルートの組み直しがなされる。少し遠回りになってしまったがヒーラーと合流しなければ目的地まで殺人鬼を引き回すことはできないだろうからやむを得なかった。

戦場は着実に終局へと向かう。



アキバの街全域に張られた大規模都市防衛結界の中に侵入するには〈冒険者〉であっても街の東西南北に構える門を通ることではか足を踏み入れることはできない。その中のひとつである南門に夜間外出禁止令の発令されたアキバの街の中であってはならないふたつの人影があった。それは空気の読めない不真面目な街の住人か、こんな年の瀬の時期の真夜中に街へたどり着いた変わり者の風来坊かは傍目には測り兼ねる。だがそれでもその二人が顔見知り程度には関係があることは分かりえた。

「こんばんわ、マイクロフトさん」

「やー、こんばんわー奏クン。久しぶりだねー。髪伸びた？装備も一新しちやって、イメチェンかな？」

ひとりはまだ若い。ぱつと見は二十そこそこだろう。随分な旅路を経たのかもともとそういうことを気にしない性分なのか髪は整えられることもなく伸ばし放題になっている。それとは対照的に服装の方は随分と豪華絢爛に派手ではあるがこの世界では装備品の耐久値に状態は引つ張られるので汚れの一つもないのはまだ納得はいくものだった。その対照的な風貌よりも視線を引かれるのは腰に差した二本の刀と背に背負う長杖の方だ。刀は鞘に収まっているし長杖の方も背負われた状態では正面からはつきりと視認することはできないがそれでも強大な魔力が漏れ出しているのが感じられる。普通では笑いものにされるような理に適わない武器数だが青年には妙に様になっている。青年がそうある姿は自然で、そうある様にまるで大樹のような存在感を發揮していた。

そして青年に対する相手の年齢はうかがい知れない。それは至極まっとうでその相手が猫人族であったからだ。銀の毛並みに金の眼、手持ち無沙汰なのかその両手は真っ黒なローブの中へ突っ込まれている。

「悪いんですけどちょっと急いでるんで後にしてもらえます？殺人鬼がどんなものかと思っただけ、こんな巨大で濁った霊気放っておけるわけがない」

「まあ待ちな。今行けば殺人鬼を相手どっている彼女らの邪魔になる。殺人鬼の正体は死戦士ルグリウスの怨霊だ。君もルグリウスの特製は知っているだろうあれは大人数で囲えば囲うほど力を強大にしていく」

「：ルグリウス。なるほど、だからこの冷氣か」

「彼女たちには彼女たちの作戦や段取りがあるんだ。後から来た君が幅を利かせるなよ、台無しにする気かい？」

的確で残酷な指摘をマイクロフトは奏にぶつける。お前の出番はここにはないと、邪魔をするなど隠すこともなく奏が積んできたであろう力を否定するように言葉を投げかけた。それに奏が憤りの表情を見せることはなかった。

「じゃあ、ルグリウスの能力範囲外から遠目に見よう、それなら問題な

い。

アンタの台本にはしつかり乗ってやるから安心しろよ。だが奏僂百恵の影響力を舐めない方がいい、殺人鬼の寄り代でルグリウスが復活しているならうちの姉の影響力はドンピシャだ。

……最悪レイドチームが全滅するぞ」

マイクロフトの目が僅かに見開く。その動きに含まれる意味合いは動揺か驚きかそれとも愉悦か。

そんなマイクロフトを剣呑な目つきで奏は睨む。それは全てを見透かしたような眼だ目の前にいる銀色の猫人族の男が何を考えているか見通したそういう眼。

「……これは驚いた」

「俺の眼は悪い大人の悪巧みの天敵なんだろう？アンタの言葉だ。別に驚くことじゃない」

ローブの中に突っ込まれていた手が引き抜かれて白手袋に包まれた手でパチンと指を鳴らした。すると街灯に照らされて伸びていたマイクロフトの影法師から泡立つように異形の形をしたなにかが形どられていく。それは鴉だ、足を三本持った異形の姿。名を八咫鳥。不幸の象徴であり同族食いの強者だ。

「行くか。空なら奴にも百恵ちゃんにも気付くまい。君がボクを信用できないなら無理強いはしないが、勝手百恵ちゃんに見つかっておっぱじめられてもボクとしては迷惑だ」

「行くよ、あいにく飛行手段は今使えなくてね。ただ、俺が行くと言ったらすぐに下ろせ。下ろさなかつたらアンタを斬り落としてクッションにしても下へ降りるぞ」

「いいだろう」

マイクロフトが呼び出した巨鳥がメキメキと肉と皮が割け骨が砕けるような音を出して二つに分かれていく。頭が裂けその裂けた場所から再生していく。結果生まれたのは元の巨鳥と寸分違わない漆黒の八咫の鳥だ。

奏とマイクロフトはそれぞれその飛び立つ黒の鳥の背に乗りアキバの街の上空へと飛び立った。

戦場へ不幸の象徴が近づいていく。その末に行き着く運命はいか
ようなものか。それは神のみぞ知り得ることだろう。

第五十七話 終わらせる

エンバートⅡネルレスは段々と朦朧となつていく自我の中でも確かな違和感を感じていた。ルグリウスの精神に侵食される中でも確かに感じる違和感、むしろその違和感自身がルグリウスの精神に飲まれれば飲まれるほど増していく。

その違和感の対象はこの街にいるひとつの存在。自分と似て非なる気配ではあるがその気配の正体の力量は自身を同等か上回るであることが対峙することなくネルレスにはわかる。またその気配の正体に遭遇してしまえば自身の正気が保てなくなることがわかった。

それはただ一度その気配の存在と下水道でほんの僅かな時間対峙しただけでわかった。金髪金眼の美しい女だ、その女とルグリウスの記憶の中のものであろう裏切り者の女と重なり憎悪が噴き出していく。下水道での僅かな時間の会合でネルレスの意識はルグリウスに大幅に飲み込まれ本能的な撤退の意思に従わずそのまま対峙を続けていけばそのままルグリウスに全てを乗っ取られていただろう。

今でさえ段々と意識は朦朧としてきており飲み込まれるのは時間の問題ではあつただろうが、その存在と出会うことがいかに致命的であるかという衛士としての直感がネルレスの精神を保たせていた。

『ネルレス、代われ。お前では荷が重かろう、ストウイナウはわたしがこの手で殺す』

「待て、お前は出てくるなルグリウス。お前の言うストウイナウという女は後回しだ。今は目の前の小娘どもを」

『代われ、代われ、代われ、よこせ、よこせ、ヨコセ、キエロ、キエロ、キエロ』

「うるさいっ!!邪魔をするなっ!!」

頭の中で反響するルグリウスの声を怒鳴り散らすことでかき消そうとする。だがその声は消えることはない。段々とネルレスの残った自我も飲まれていく。ネルレスは頭をふるった。ルグリウスは自分ではない。

いつのまにか相手取っていた〈冒険者〉の数は一人から二人、二人から三人と増えていく。

大したこともできやしないというのにそれでも先ほどから対峙し続けている一人の〈冒険者〉の娘を生かそうと立ち向かってくる。ひとつひとつは大したこともない、〈動力甲冑〉とルグリウスの力を持つ殺人鬼との力の差は大人と子供ほどの力の差がある。それでも邪魔だ。

その何人もの〈冒険者〉たちが殺人鬼の行く手を阻む中で殺人鬼の放つ殺意に溺れた吹雪が吹き荒れる中で短い棒状のものが回転しながら視線の先にいる殺人鬼が追い続ける〈冒険者〉の少女に投げつけられた。

「もってけ」

「――めいとう・はがねむし鳴刀・喰鉄虫」

「じゃない……。〈喰鉄虫・多々良〉。打ち直し」

少女がその短刀を鞘から僅かに抜くことで吹雪の中でも確かに光る乱れ刃の刀身が露になった。それは殺人鬼が〈霜刀・白魔丸〉を手に入れた店に並び置かれていた刀。

だが細部が異なる、長さが違う、握りも違う。

まるでたつたひとりのために刀を調節して合わせてあるかのよう
に、変わっていた。

「こんなのっ、払えないっ」「勝って」

アメノマの店主の多々良が普段の眠たげな声とは違う強い響きが
泣きそうになるアカツキの声にかぶさるように言った。

「ここまで走って、勝てなかったら割に合わない。

だから、その刀で、私の刀で、アレを倒して」

これ以上の言葉は必要なかった。多々良にアカツキは強い領きを
返して身をひるがえし殺人鬼へと一直線に駆けた。

そしてそんな中でも自我をズルズルと飲み込まれていく殺人鬼ネルレス
の事などまるで構わず自身や感じている気配と比べれば羽虫のよう
な存在でしかない〈冒険者〉たちが鬱陶しくも攻撃を仕掛けてくる。

それを邪魔だとなぎ払おうとしてもその小さな邪魔者は羽のようにふわりと振るった刃を掠めて飛び退いてしまう。先ほどまで回復を受けていたアカツキの一撃が殺人鬼の一撃と重なり合い鋼つを食い破るようなつんぎく音が響き渡る。

それでも、殺人鬼はその巨体を強引に寄せて羽のように飛び回るアカツキにその必殺の一撃を当てようとする。それは空中のアカツキにとってはかわしような位置での一撃。しかしアカツキはその一撃をなんなく跳ね上がりかわして見せた。その挙動はまるで空中のあるはずのない足場を蹴ったかのような動きだった。

「なーにしてんない。やっぱり身近に詰め甘いやつが多いと似てくるものなのかねえ」

飛び出してきたのはナズナだった。殺人鬼の一撃を躲して本来の目的地へと走ろうとするアカツキの隣へと殺人鬼の刃を踏み台にして距離を取り、高下駄を履いているとは思えない俊敏な動きで追走してくる。

「さあて、シロエの後輩ってんならアタシの後輩みたいなもんでもある。ソウジに心配かけるわけにもいかないしアタシも一肌脱ごうか」
アカツキを救ったのはナズナだった。それは本来ならばダメージ遮断呪文として攻撃を遮る「壁」として作用するはずの障壁を「足場」として活用する業。それがナズナの口伝〈天促通〉だった。

ナズナは進む道のいたるところに張り巡らせるようにダメージ遮断呪文を配置していく。その増えていく足場は殺人鬼の攻撃を躲す助けとなり余裕を生み攻撃のチャンスをさらに増やしていく。

そしてついに、アカツキたちはたどり着く。気の遠くなるような死を率いた剣戟と命を連れ去る吹雪に耐え抜きそこに殺人鬼を連れ込む。

そこは御前だ。それまでの冷徹な凍てつく風とは真逆の蒸発しそうな熱量を放つ紅の姫の間である。

「待っていたわ、よくも姫の友達をいじめてくれたな、殺人鬼」

アキバという大都市の中心、ギルド会館が眼前に建つ巨大な広場、

空気を歪める熱と万象一切を灰塵と帰す大炎を爆発させ大小二つの薙刀を構える覇極の姫がそこにはいた。



クインの目の前で千菜の持つふた振りの薙刀から重圧を感じるほどの大炎とそれに準ずる膨大な熱量が噴出する。渦巻く焰は空気を焦がし近くに寄れば呼吸するだけで喉を焼かれてしまうだろう。それすらもものともすることなく顔色のひとつ変えずに殺人鬼を睨み据える千菜にクインは絶対的な信頼と敬意の延長線上にある畏怖を持っている。

『接触』

殺人鬼との接触。殺人鬼と千菜の視線が交差する。その次の瞬間には千菜の放つ大炎と熱に対抗しえるだけの巨大な氷塊の壁と冷気が殺人鬼の〈霜刀・百魔丸〉から吐き出される。それは一度千菜と相対しその身を焼き尽くすだけの炎とただただ埒外じみた純粋な力を体感した者の反応として当然の帰結である。

しかもそれが最初から全開で躊躇いも容赦もなく自分に振るわれようとすれば考えるまでもなく本能のままにそれを回避しようとする。英雄としての天賦の才ともいえる野生の戦闘本能に任せた戦い方をする殺人鬼であるならばなおさらに、だ。

だが、それこそが全てクインの術中に中にある。

『接触』。クインが放ったその一言は殺人鬼が全て思惑のままに逃げ場のない落とし穴へとかかった瞬間であるとレイドメンバー全員に伝えられる。

クインのその一言で準備していた全ての仕掛けが作動されるのだ。

レイネシアと供贄一族の長である董星の手によってアキバの街の地下描かれる巨大な都市魔法陣への魔力供給が十数年の機能停止と引き換えに絶たれ都市防衛結界及び〈動力甲冑〉の機能が完全に停止させられる。

広場を囲むように立ち並ぶ背の高いビル群のひとつの屋上に陣

取ったアキバの街トップギルドへD・D・Dの誇る^{ソールサラー}妖術師リーゼが放つ自由落下による射程無視の広範囲氷攻撃魔法へフリージングライナー。

本来であればダンジョンやフィールドで使えば二十メートルの範囲の相手を押し流す氷混じりの水流は自由落下によつて射程を大きく伸ばし、千葉の大炎と莫大な熱から自身の身を護るために放出した氷塊と冷気を飲み込み凍てつき^{ムーブルアーマー}へ動力甲冑による補助もなくなった殺人鬼の全身を氷の柱の中に閉じ込める。

「チェックメイトだ」

クインはリーゼのような大規模戦闘に精通する程に戦術面に長けているわけではない。千葉や戦闘系ギルドの面々のように高い戦闘能力を持っているわけではない。

だがその身は探偵、心理戦においてのプロフェッショナル。

クインは後押ししただけ。リーゼの立てた作戦で十分に策としては成り立っていた。だから殺人鬼を仕留める最後の局面を確定にした。ただの一手で望みの局面にたどり着けばで確実に全てを絡め取る。「犯人はあなたです」と勝利宣言をあげる。

探偵は解決編に入ってしまったえば負けることなんて絶対にありえない。

「終わった、のか？」

「うん、これでおしまい。あとからこの冰山の中から^{霜刀・白魔丸}だけを回収すればいい」

殺人鬼から発せられた莫大な冷気と広範囲氷魔法へフリージングライナーが互いに氷結することで出来上がった大規模な、冰山といつてしまっても構わない大きさの氷の塊を見上げながらこぼれたアカツキの言葉にクインが言葉を返す。段々と各地に散らばっていたレイドメンバーたちも集まり始めその巨大な氷塊に思い思いの反応を見せる。

「わたしをただの惹きつけだけに使うなんて贅沢したんだから終わってくれなきゃ困るよ」

千菜も姫モードから普段の雰囲気と口調に戻り、クインとアカツキの二人に後ろから抱きしめる。ぎゅー、と少しばかり苦しいくらいだがアカツキはそれが嬉しい。そんな三人に気づいて他のメンバーたちも三人の下へと集まりハイタッチやハグをしていく。

みんなと触れ合う中で、そのぬくもりの中でアカツキは自分が欲していたものを、見いだせた気がした。

「まいったな、これは驚いた。」

まさか詰めの部分をごここまで完璧にこなすなんて、僕が出てこないといけなくなるなんて……ほんととはこんなお膳立てしないで出てきてくれたらよかったのに」

金髪金眼の女だった。その絹糸のような髪の毛の一本一本が月の光に照らされて惹きつけるように風に揺らされる。その視線の先はついききほどまで暴虐の嵐を振りまいた殺人鬼に向けられている。その女の歩みは一步一步確実に殺人鬼が凍りつかされている氷塊に進められていた。

「千菜…あの人を殺人鬼に近づけさせるな!」「わかってるわよ!」

千菜とクインは既に臨戦態勢に入っていた。先程までの和やかな雰囲気から抜け出しきれない周囲の反応を置き去りにし二人だけが武器を取る。さしたる確信があるわけではない、がその女を、その傑物を、奏儂百恵だけはあの化物に近づけさせてはいけないと直感的に判断した。

千菜は躊躇の一つもなく前へ飛び出し百恵へ向けて薙刀を振り下ろし、クインは千菜に向けてありったけの補助をやつぎはぎに投射していった。

だが、その千菜の渾身の一撃も百恵は長い長い太刀を抜き放ち受け止めてみせた。太刀と薙刀がぶつかる瞬間には炎と衝撃波が大気を揺らす。

「なにする気よ!? 姉さん!」

「ごめんね、千菜、今はあなたに構ってあげれないの」

千菜の視界から百恵の姿が消える。百恵が消えることで抑えを失った千菜の炎と斬撃が地面を割り殺人鬼が張り巡らせた氷と降り積もる雪を溶かす。百恵の実体がなかったわけではない、千菜の振るつた一撃には確かに手応えがあった。ならば千菜はこのやり口を知っている。〈神祇官〉の兄がPVPの時によく使う手だった、〈飛梅の術〉での背後への瞬間移動。

「千菜、氷塊に!」

クインの声に反応するまでもなく千菜は背後を振り向く。背後には太刀でこちらに切り掛ろうとする百恵の姿はあらず氷塊に向けて拳を振りぬこう百恵がいた。

薙刀で熱線を飛ばそうとするがそれでも間に合わず見上げるほどに大きかった氷塊はたったひとつの拳に砕かれ中に閉じ込められていた殺人鬼はその氷河の堅牢から解放された。

「起きなさい殺人鬼。シリアルキラーあなたの中のルグリウスに用がある」

「……あ、つく……」

「身体の方はもう限界ね、大地人の身古の丈来に合種わない力カなんか手を出すからこうなる」

百恵はどこか憐れむような目で殺人鬼ネルレスを見ながら片腕だけで殺人鬼の身体を持ち上げる。無理矢理に身体を起こされた殺人鬼はうめき声をあげながらも動かない四肢の代わりに仮面の割れ頭になった濁ったその目で百恵を睨みつけた。四肢は動かなくなろうともその手には〈霜刀・百魔丸〉が握られていた。

「……ス……トウイ……ナ……ウ……?」

「そう、私がストウイナウ。あなたを殺した裏切り者の女よ、愚かで哀れな英雄様? 私たちを呪うその狂気随分と矮小なものなのね、その程度で災厄を振り向こうなんてさすがエツゾの英雄、死んでなおお優し

すつ、決していいものじゃありません。千菜さんをメイン盾にして戦闘態勢に入ってください！回復は二枚！」

その場でいち早く混乱から冷静さを取り戻したリーゼの指示にその場の全員が我を取り戻し、宙に浮く刀へ視線を向けたまま散らばっていく。一番前には千菜が薙刀を構え、ナズナがダメージ遮断呪文を、マリエールが反応起動回復呪文を千菜にかけた。アカツキも千菜の一步下がった場所で短刀を構え、クインがそのアカツキにも事前にパフをかけていく。

「D・D・Dの参謀さん、その判断は正しい。けど残念、認識は間違ってる。」

呪いの類？それは浅慮ね、その刀は元を正せばエツゾの大英雄が持っていた由緒正しい刀よ」

金髪の女がそう口にした。その言葉の意図を頭の端に引つかかりを覚えて思考を割こうとした時だった。カタカタと震えていた刀が動いた、尋常ではない速度で。

その不意の挙動に対応できたものはただの一人もおらず持ち主のいない刃にアカツキの小柄な身体が真後ろへ吹き飛ばされた。

「アカツキっ」

クインがアカツキの吹き飛ばされた方向を向こうと身体を捻らせを背後を振り向こうとすると誰かに突き飛ばされた。次の瞬間には耳をつんざくような金属同士がぶつかり合う音が耳につく。

「なにしてんのっ!!敵から目を逸らさないで！」

千菜の怒号を尻餅をついた態勢から聞かされる。戦場慣れしないクインを庇い千菜が宙に浮く刀とつばぜり合う。拮抗していた中で刀の方が揺らいだ。それはまるで力を他所に受け流すような動きで、殺人鬼がやっていた力任せの獣のようなそれとは違い技術を感じるような動き。千菜の態勢が僅かに前のめりに崩れた。それでも問題はなかった。相手が宙に浮くだけの刀だったのなら。

拳で殴られたような鈍い痛みが千菜の腹を襲った。続いて後頭部を上から殴られるような衝撃が続く。その二つの鈍痛に耐え切れず千菜の片膝が雪の地面につかされた。

「うっ」

戦闘能力のほとんどを攻撃に集中させている千菜はそれだけ防衛が平均の〈サムライ武士〉より低い。本来のレベル90の〈サムライ武士〉の耐久力であれば怯みはしても十分に立て直せる程度の衝撃だっただろう、だが圧倒的な攻撃力の引換として失ったその防御の低さが、ここで致命的な隙を作った。

今にも止めを刺そうとせんばかりに刀が真っ直ぐに天を向く。

リーゼの魔法がそれを止めようと刀へ殺到する。ナズナの〈ダメージ遮断呪文〉が千菜を守ろうと詠唱される。吹き飛ばされた場から復帰したアカツキが刃を止めようと雪の地面を蹴る。クインが〈エンチャント術師〉の雀の涙ほどにもならない魔法で攻撃を止めようとする。そのどれもが間に合わない、届きはしない。絶望死が振り下ろされる。

「黄金世界は死を拒絶する」

懐かしい声が聞こえた気がした。

絶望死が弾かれる。そんなものは認めないと。この世界に絶望はいらない。

その願いは、希望を世界に強制する。希望に満ちた世界を作り上げる。

「〈黄金領域〉」

千菜とクインを黄金の球体が包んでいた。千菜とクインが見上げればひとつ。大きな背中がそこにあつた。

「悪い、千菜、クイン、遅くなった。大丈夫、俺が終わらせるから」

第五十八話 大丈夫。

「俺が終わらせる」

奏は背中を見せたまま強い言葉を口にした。その風貌も言葉に混じる強さも以前の彼の名残は残していても随分と変わっていた。

「兄さん？」

「なんだよ、実の兄の顔まで忘れたのか？ 悲しいなー、兄ちゃん悲しいぞ。まあ、あとでお仕置きでもなんでもされてやるからちよつと待つてろ。」

クイン、千菜と一緒にここを離れてくれるか、他の連中もできるだけ離れるようにな」

「そんな無謀だ！ 奏！ いくらなんでも」

「大丈夫、もう勝負はついてる。むしろ人が多いと万が一があるんだよ、英雄ルグリウスの場合はない」

「ルグリウス…？」

「そ、あれはルグリウスが使ってた刀だろ？ なら担い手はルグリウス以外にはありえないじゃないか。見えなくてもな。」

姉ちゃんに憑いてる神様の神気にあてられて半ば無理やりに限界してはいるが、アストラル系幽霊系相手なら俺の得意分野だ。陰陽師肉体もない刀に残った残留思念じや力も劣化してる。まあ、さすがにこれだけ周囲に人がいればステータスがかなり上がっちゃいるがルグリウスから離れれば落ちる」

奏が制するように上げていた左腕を下ろし黄金の結界を解いて千菜とクインの方を振り向く。少し見ないうちにまるで女のように肩より伸びた長い黒髪が揺れた。少しだが背も伸びているように見えた。本来へ大災害後のこの世界でここまで大きな身体の変化は起きない。それ相応の事を経験してきたのだろう、装備もほとんど一新されていてマナが溢れている。

「今結界を解いたらー」

「大丈夫だつてば、クイン少し昔みたいに戻ったか？ まあそつちの方がいいと思うけど。」

言っただろ、もう勝負はついてる」

奏は刀に背を向けたまま二度目の言葉を口にする。

「…銀色の腕だ」

千菜がポツリと呟いた。千菜の視線の先には何本かの白銀の腕が浮いているのが見えた。彫刻で削り出されたような肘から先しかない半透明の白銀の腕。その腕が刀の周囲のなにかをつかむようにしている。

「魂そのものをに触れる腕だアストラル系幽霊系ならその効果は肉体のあるものより数段高い効果を発揮する、五本も揃えれば逃げるどころか動くことすらままならぬ拘束特化の腕」

奏の新しい〈口伝〉なのだろう。その拘束力はさることながら、その腕に掴まれたことで姿を見ることが出来なかつた存在が千菜たちにも見え始めてきている。本来の英雄ルグリウスの風貌がうつすらとしかし確かに視認できつつある。

ならば奏の言い分もまっとうなものだろう。ルグリウスの『周囲にいる人間の数に比例してそのステータスを上昇させる』という特性を持つのならむやみやたらにステータスを上げてしまうレイドメンバーは邪魔でしかないだろう。

クインは千菜に肩を貸しながらこの場から去るために立ち上がる。それに満足したように笑った奏は背を向ける。

その笑顔だけでクインは十分だと思えた。体も心も随分と変わってしまったのだろう、それでもその笑顔はいつも見ていたものと変わらない。

根底が変わっていないのなら、大丈夫。そう、思えた。

(奏は魂に触れる腕と口にした。)

魂に触れこちら側に引き寄せる、失ったものを必死につかみとろうとするように伸ばされる腕なのだろう。失いたくないものを離さないよう握り締めるために手に入れたその白銀の腕はとても綺麗だ。

叶うなら、その願いに手が届きますように)

ルグリウスの方へ向き直った奏は笑顔を消し敵を睨み据え刀を抜く。

抜かれるのはヤマトの神格が一柱龍神アサハナの靈氣と体の一部から作り上げられた^{フアンタズマ}の神刀。うつすらと紅色の差すその刀身にこの場にいる者全ての目を惹きつけ奪う。紅の羽織を身にまといその刀で空を薙ぐその動作一つで澱んでいた場のマナが安定する。「今、解放してやるからな」

(英雄なんて呼ばれてたアンタが、信じていた人に裏切られて狂気に蝕まれて、屈辱以上のなんでもないだろう。

…だから他人行儀に同情くらいはしてやるよ)

実体なき身体を押さえつける無数の白銀の腕が言葉に反応するようにして一層として押さえ込む力を強め、それとともに双鞭には滴る血とは真逆の薄青く輝くエフェクトが灯ったことで終幕の意思を告げる。

月の儂げな光が銀の刀身へと飲まれ煌きゆつくりと動き停止へと動いた光は一瞬の静へと至った後、軌跡へと変わった。

二つの軌跡がルグリウスの動かぬ身体をひと呼吸のうちに斬った。ルグリウスの身体と空への境界からは未だに残る軌跡の光が漏れ出す。それは落魄の光。魂が旅立つ時だけに自然と漏らすことが許される美しくどこか悲しさを残す光の粒子。

(感謝する)

落魄の光を靈体から文字通り削り出すルグリウスが言葉が紡がれた。もう白銀の手は拘束を解いている。ルグリウスの目には生前そうであったであろう英雄らしい強く意思のある光がたしかに宿っていたからだ。

「うちの姉が無礼なことをした」

(気にするな。いいように使われる方が悪いのだ。自分の死から学んだ教訓としては少し割に合わないが。

さて、もう時間がない。もうすこし次代の英雄と話してみたかったが…、それも詮無きこと)

(わたしは失敗した。今思えば、ストウイナウがわたしを裏切ったのにも理由があったのかもしれない。わたしは巨人の手から^民大地^草人を

守ることだけで皆を救っていた気になっていた、周りの人間をよく見ていなかった。顔を知る人間はいても、その個人がなにが好きでなにが嫌いか、簡単なことだというのにそれを知っている人間だって両の手で事足りるくらいしかいなかったかもしれない。

英傑に酔っていた英雄の末路は等しく裏切りでの滅びだ。だから君は失敗するなよ、先人の失敗談から学んでくれ。これより先の未来に輝かしい栄光と何者にも奪うことのできない幸福があらんことを」「ああ、失敗なんかしねえよ。間違えても取り返しがつかなくなる前にひっぱり上げてくれる仲間が両手じやたりないくらい俺にはいる。

「あんたと同じ轍を踏むようなバカはやらない」

もうルグリウスの体には構成する魔力が残っていないのだろう、体がもうほとんど見えなくなってしまうているし感じる存在そのものが薄い。

それでもルグリウスは最後には笑っていた。生前できなかった、英雄らしく豪胆な笑顔を見せて終わりを迎えることを選んだのだった。

「終わったぞ、決着つけようか、姉ちゃん」

ルグリウスは消滅した。残るは乱入者である百恵だけだ。当の百恵はルグリウスの消滅になんの関心も興味もなかったらしくのんきにあくびを欠いていた。事の終わりに気がついた百恵はじめんに突き刺していた太刀を抜き肩に預け奏に視線を合わせた。緩んでいた雰囲気一気に鋭さが宿る。

「それじゃあ、聞こうか。」

「お前はなんのために闘おうとする？」

「仲間のため」

「奏は即答した。」

その答えに百恵は心底落胆したように舌打ちをうち、怒りを隠そうともせずに地面を蹴る。

その何気ない動作ひとつで地面をえぐり、改めてその身体一つに〈大規模戦闘級〉の力を内包する〈神憑き〉という百恵の〈口伝〉とその異常性に奏は畏怖を覚える。

「そうじゃない、そうじゃないんだってば！なんでわかんないかな！それじゃダメなんだってば、カナミちゃんの時と何一つ変わっちゃいない！他人が一番で自分が一番にならない理由なんてものは妥協しか生まないんだ、中途半端な成果は自分だけじゃなくてその周囲の間まで不幸にするってなんで気づけない！」

「最後まで聞けよ」

奏は百恵の言葉になにも反論をぶつけないこともなくそう返す。その手に持つ神刀を鞘に収め左手をかざしてへ口伝を発動させる。

「世界は嘘を許容する」

奏から黄金の膜が世界を侵食するように広がっていく。その速度は速く百恵まで飲み込まんとする速度で展開していった。これはへ黄金領域へならば問題ない、結界に弾かれようとそれで敗北することは絶対にありえないからだ。

だが百恵はそれに触れることはあつてはならないと思つた。なにが根拠があるわけではなく、直感で背後に跳ぼうとして、跳べなかつた。誰かに背中を押されるような感触を感じその黄金の結界に触れて、飲み込まれた。

「なにを、したの？」

自身の背中を押した存在についてのことではない。それは先ほどレグリウスを押さえつけていた白銀の腕と同じものだということがあたりがつくからだ。問題はそこではない。

問題は、百恵が自身に憑かせていた神霊の存在を自身の内側に感じることができないこと、この一点に他ならない。へ神憑きが百恵の意思に関係なく解けていることだ。

「俺のへ口伝はさ、心の象徴なんだよ。人の心なんていくつもの側面がある、俺のへ口伝もそれとおんなじ。」

へ黄金領域も俺の本来のへ口伝の一側面でしかなかった。俺の心の中にいる仲間ひとりひとりと共有したい世界を具現化する。それが俺のへ口伝」

「なるほど、自身にとって都合のいい世界を再現するへ口伝ってことね、八枝にとって都合のいい現実を相手に強要する。だから私のへ口

伝も弾かれた」

「間違っちゃいない、でも勘違いしてる。

確かに俺は前と変わらないよ。結局姉ちゃんみたいな完璧超人にはなれないだろうさ、精々完璧凡人がいいところだろう。俺にできることはあくまで周りの連中にもできること。俺は特別なんかじゃない」

自分は姉のような特別な存在ではないのだろう。だからその身の丈に合わない願いに登ろうとして高みから突き落とされた。

「でもな、俺の中の仲間たちまで譲るつもりは毛頭ない」

それでも、特別にはなれなくても、自分にとって特別なことは絶対にあるのだ。それまで諦めることはない。

死という絶対の別れをその眼ではつきりと誰よりも確実に突きつけられ、最後は一人になってしまうということを誰よりも知っている青年の願い。

それはただ仲間たちと共に笑い合う心^{理想}の世界を守ることだけ。

「この結界の名は〈偽全死合〉。結界の内側にいる者全て使用者本人であろうと例外なく魔法と特技の使用を不可能にする結界。俺にとって姉ちゃんは超えるべき存在だ。だからどんな手段を使っても勝負執念の果ての世界。」

言っただろ？この結界^{世界}は誰かと共有したい世界の再現なんだって」
奏は堂々と宣言した。天秤祭の夜のような根拠のない宣言とは違うはつきりとした自信の上から断言される言葉。

その言葉に満足気に百恵は笑った。やつと戻ったと他人のためにでなく、自身のために立ち上がれるようになった、と。

「そうだね。もう殺人鬼^{抜け殻}じゃあ戦えそうにないし、もとよりこの結界の中に入ってくることもすら出来ないだろう。」

ボクの〈神憑き〉も本当に発動できない。八枝の本気が見れたことだしめつけものとするか。しょうがないか、わかった、私の負けでいい」

「嫌だ。誰が許すかくそ姉貴が。そんなもん都合が良すぎんだろ」

けれど奏は許さない。

わかつているからだ。

なにを？

姉の不器用な思惑をだ

「嘘つくなよ。最初からこうするつもりだったんだろ。バレバレなんだよこのブラコン姉が俺が姉ちゃんに勝とうと意思を見せたらそれで目的達成か？下手に戦ってまた自信をなくされるのは困るってか？舐めんよ。」

——俺はきちんと姉ちゃんに勝ちたいんだ。花を持たされてやるつもりなんてあるもんか」

そんなもん店先にでも飾つとけ、俺が欲しいのはアンタが膝をついて俺がそれを見下ろす光景だけだ

安っぽい挑発にしか聞こえない言葉だがそれを言ったときの奏の顔は笑ってはいなかった。目も口も油断など微塵も感じられないほどに陰しく引き締まりただただ百恵を睨み据えている。

「ふふふつ、あつははははははつ！

言うじやないかこの愚弟が。姉の気づかいを素直に受け取っておけばいいものを、いいよ。相手してあげる。ただし負けたからって泣かないでね愛する弟が」

「姉ちゃんのそのありがた迷惑なお節介、俺が愉快に快活に高らかに高笑ってやるよ。」

——そして感謝もしてやるよ、ありがとな」

百恵のここにきてやつとみせた微笑以外の獰猛な笑みを浮かべた表情に奏も初めて笑みを返した。やつと本気で相手をする気になったか、と。対等に立ち会うことには成功した。あとは勝ってみせるだけだがそこからがまた難儀なものだ。

奏が言葉を言い終えた次の瞬間には相対する二人は自分の愛刀を抜き放ち、二人が立っていた位置のちょうど中間で刀をぶつけていた。

耳をつんざくような鋭い金属音が結界の中を飛び回る。

そのまま1合、2合、3合、刀をぶつけ合うたびに目を覆いたくなるような赤と青の混じりあった火花が散り両者の踏む地面は踏み込みの深さにより強く削られる。

そんな耳を覆いたくなるほどの金属音をまるで聴こえていないかのように二人はその場でつばぜり合いを始める。

結界の外から二人の剣劇を眺めることしかできないアカツキたち
レイドチーム

その鬼気迫る迫力に誰もが呼吸を忘れてしまいそうになり気づくと瞬きもせずに剣閃に釘付けにされている。

二人の目で追うことも難しい剣戟はまるで蛍火のような無数の残光だけを残して無数に増えては消えていく。その様は場違いにも美しいと感じてしまう

「激ヤバですわ…あれと互角に打ち合うなんて」

リーゼの本音がポツリと漏れる。主であるクラスティが認めていた逸材であることは知っていた。しかし普段はヘラヘラとしニヤニヤとして自分をからかってくる存在だった。

ティーパーティ
〈茶 会〉の頃の数多の噂は耳にしていたし、大災害以降もチョウシの町の防衛戦の参謀役を務め実力は本物だと理解していた。けれど、ここまで凄い存在だとは思わなかったのだ。

そんな圧倒されるリーゼに支えられている千葉が言葉を返す。視線はまっすぐに自分の姉兄の戦いに向けたままで。

「いや、兄さんの方が押してるわ」

両者ともほんの僅かにも動くことなく拮抗したつばぜり合いが数秒あった後、

先にその場から飛び退いたのは百恵の方であった。

「剣術はこの十七年間どんな日だろうと稽古を欠かしたことは無かったんだよ。まったく…皮肉だろ？」

諦めることのきつかけになつたものが唯一の可能性だなんて、自虐的な言葉を吐きながらも笑いながら奏は言う。笑うのだ。剣戟の最

中に掠められた刀傷から血を流しながらも、実の姉と斬り合いながらも、殺し合いながらも、笑うのだ。

その笑顔は荒々しくギラギラとしていて楽しげだった。

この結界は特技や魔法を封じ、その上狭い。

どうしたとしても戦闘方法は近接戦闘になってしまう。そうなる
と勝敗をわける要因は絞られていく。

百恵の装備は奏の装備と比べると一段見劣りしてしまうものだ。
質が低いわけではなく勿論一流の部類に入る良い装備ではある。だ
が、奏が^{ティーパーティー}茶会時代に仲間たちと集めた超一流の武器や新しい龍神
の宝物庫に眠っていた神具にはどうしても劣ってしまっていた。

本気になった奏の剣術は千葉に匹敵するほどの力を感じさせられ
てしまうほどに驚異的だった。ついていけないという程の力の差は
ないが自分の方が剣技においては劣っている。さっきの殺人鬼に浴
びせた二撃を観察し、この何合かつばぜり合いで百恵はそれに確信
を感じた。

圧倒的に百恵は自分の不利な状況を体感させられた。

これが競うことに、勝つことに食欲さを取り戻した奏倉八枝の本
気。

秋頃とはまるで一刀の重さが違う。一瞬でも気を抜けば一気に押
し込まれてしまうだろう。けれど、だからどうした。

「あはははっ!! 楽しいねえ! 八枝エ!!」

こんなビリビリと負けそうな勝負なんて初めてかもしれないっ!

だが、だからこそ、ここで負けるのは姉の面子に関わるねえっ!!」

百恵も笑う。実の弟を殺しておきながら、もう一度殺そうと刀を向
けて笑うのだ。

「来いよお!!、キチガイ姉貴イ!」

もっと楽しもうじゃねえかあ!」

百恵が刀を振りかぶり次に放ったのは太刀をフェイントにした蹴
り上げだった。

剣術で勝てない、そこは認めよう。

でもそれは勝負とは関係ない、これは殺し合いだ。殺し合いにあるのは結果だけ。

生きるか死ぬか、ただそれだけ。

別に大した作戦を立てる必要もない。まるでそう言わんばかりの流れるような自然な動きだしだった。

蹴り上げはすんでのところで奏の髪を掠めてかわされる。

だが、そこから止まる半端は百恵にない。

蹴り上げの勢いのままにそのままもう片方の足も弧を描くように蹴り上げる。今度の蹴りは奏の左手により捕まり防がれる。

身体は両足を上げたことで宙に浮いている。そこを逃さん奏の刀が横風ぎに振り抜かれるが、百恵は右手に持っていた刀を放し、両手を雪の溶けた地面についた反動をそのままいかして身体をはねあげる。チリつと左手の爪を掠める刀に臆することなく奏の頭上を舞い背後に両の手から着地する。

刀を振り抜きすぐさま後ろを振り向くことのできない無防備な奏の背中を目掛けて身体を捻って蹴りを放った。蹴りは奏の後頭部に直撃し脳を揺らす。

さらに追撃として宙に投げ出された両足を遊ばせることなく地面についた両手を交わらせた状態から解放する急速な回転を生んだ身体から二股に分かれた足はまるで竜巻に飲まれた丸太のように回転し一撃二激と食らわせてみせた。

ここから生み出されるのは決定的な隙。揺らされた脳ではどんな達人だろうが人間の構造をしている以上は思考は停止せざるおえない。

百恵は奏の背中中の腰に刺さっているもう一本の刀を抜いて奏へと突き刺した。

「惜しかったな、姉ちゃん。その刀折れてんだ。そして、やっと捕まえた」

その黒刀はポツキリと根本から折れていた。

今まで奏を支えてきた漆黒の刀は無惨にも見る影もなく折れていた。

刃は奏に刺さることなく、鈍い痛みだけを与える程度にしかあたはず、今度は百恵の決定的な百恵の隙だけが生まれることになった。

百恵の黒刀を握る手はがちりと奏によって押さえられた。

その黒の刃は折れてもなお、主人の窮地をこれまでのように救った。

今度の太刀はかわせない。

そう示さんばかりにギリギリと百恵の白く細い腕を締め付ける奏の右手そして刀を持つ左手

「ああ、惜しかった。あとすこしでお前は私に勝てた」

ニヤリと笑う百恵に言い知れぬ危機感を覚えた奏の行動は迅速を通り越し反射のそれと変わらなかった。百恵は虚勢で笑うようなことは絶対にしらない。虚勢を張る必要なんてないほどに天才は高潔で強いから。

そんな奏の反射からの一閃が百恵にあとほんの少しで届こうとしたとき、腕を押さえ込まれた百恵と押さえ込んだ奏を切り裂きくような痛烈な閃光と結界の中を覆い尽くさんばかりの大きな爆風が襲った。

そして、黄金の結界は跡形もなく空へと溶けた。

爆風で覆われた戦場のその先を見通せる者は一人としていない。

第五十九話 あの日見たもうひとつの光景

確かに奏僂八枝という人間は人の十倍は敗北を経験してきたと断言できるだろう。そしてその敗北の大半は外敵に対してでも他人からでもなく他でもない身内の者たちから与えられた雪辱だった。

最初に自身と姉を比べた。姉は万芸に秀でどんなことも苦もなくこなしてみせた、それを鼻にかけることもせず優しく守ってくれた。

そんな姉に憧れて、目指して、焦がれて、挫折した。これが一度目の敗北。

姉と自身では根本的な資質が違ったことに気が付けなかった。あらゆる分野を学んでひとつ、またひとつと勝てないと見切りをつけた。

勉強では勝てなかった、しょうがない。スポーツでは勝てなかった、しょうがない。料理でも勝てなかった、しょうがない。音楽では勝てなかった、しょうがない。もの書きでも勝てなかった、しょうがない。

もう勝負していないものなんてないんじゃないか？そこまでいつてしまった。途中でやめておけばよかったものを引き際も弁えず挑み続けた。

あとひとつだけは残っていた。祖父から教え込まれている剣術だけは祖父から止められまだ一度も真剣勝負はしたことがなかった。

そして、負けた。

そこであきらめがついたのだろう、諦めざる負えなかっただけにほかならないが。道化もここに極まった、完全無欠のなりそこない。

あとは千葉が代わりにやってくれる、今度は姉のいない世界に逃げた。

行き着いた先がへエルダーテイルだった。そこから先は楽しかった。姉のいない世界は楽しかった。姉と比べられることがなくなつた世界はいままで見えていなかった色に満ちていた。

そしてカナミと出会った。

奏儂百恵には届敗かなかった。奏儂千菜には勝敗てなかつた。赤道一姫には看破敗された。カナミには伝敗えれなかつた。忘れることのない敗北の数々を積み重ねる生き方だった。

そして自分自身が否定敗した。

ミノリやトウヤを救おうと思った。ルンデルハウスを救おうと思った。彼らの不幸を利用して彼らから信頼を勝ち取った。

天秤祭でアキバの街はいくつもの危機が重なつた。そのうちひとつを解決した。無償の善意と事件を知る街他の住人は褒めたたえた。

違う、それらは全部打算に満ちている。あまつさえも、自分よりも弱いものたちを自分のプライドを保つために利用した。敗北の惨めさを自身よりも弱い者たちに力を顕示することで洗い流した。己が振るう力の向きは優しさであろうと勇氣暴であろうと強者ではなく弱者のみに向けられている。

そこに善意なんてものはない。全ての行為は偽善でできている。

樹海の奥地、神の社で夢を見た。いつか見た夏の海と季節は反転して冬の夜空。

空気の澄んだ空いっぱいには散りばめられた星たちが結び合いくつもの星座を形作っていた。それをすっかり葉を落とした木の枝の隙間から眺める光景。

そこにあつたのは今は死んだ老人と今は愚かに生き続ける孫のふたりだけだった。

『八枝よ、剣士というのは生まれながらにして矛盾を抱えているのだ。何かを守り慈しむことができる人間は強い。これは剣士としての高みへとのぼり詰めるために必要な理由だ。

理由がないものに戦うことはできないのだからのお。理由を持たずに闘うことができる人間などそれは獣と変わりない。"なんのため

めに戦うのか"これが剣士の芯となる。

だがのう、ここで矛盾が生まれてしまうのが人の、いや、剣士の未熟なところなのかの。

余計なことを考えてしまえば剣に雑念が、迷いが孕んでしまうのよ、剣士としての高みに登るための下地が出来上がった瞬間に剣士として完成することはできなくなってしまうとは、……いやはや、皮肉な話よ。

だから、この奥義はある、お前はお前のままでいい。お前が心から剣に全てを預けることができれば自ずと奥義へとお前の剣は昇華する。剣と己を一身と据えるのよ。

だから、八枝よ、お前は自分の思うままに生きなさい。お前が自由に生きることが何よりも大事なことなのだから。剣士としてあらなくともよい。お前が大切なものといっしょにあれば儂の心から望むことなのじゃよ』

脳裏にはある冬の夜に道場の縁側で月と星を眺めながら語っていた祖父の姿。

くだらない。心の底からそう思う。勝手に勘違いして、勝手に諦めて、本当に滑稽さもここに極まっていたのだろう。誰でもいいから笑ってもらいたいものだ。

それでも、奏僂百恵は見捨てなかつた。奏僂千葉は慕い続けてくれた。赤道一姫は伝えてくれた。カナミは共に歩いてくれた。みんなは共に笑ってくれた。

それは正しかったのだろうか？

その行いが偽善と打算に満ちていようと、その行いの果てに守れた笑顔があつたのなら、完全には遠く及ばない未熟な力で守れるものがあつたのなら、それは正しかったと言い張れる。

敗北と共にそれ以上の幸福を得た。なにも間違つてなんかいなかった。敗北以上のものを見ていなかっただけ。俺の在り方は否定されてなんかいなかった。

これだけあれば戦える。

これだけ失いたくないものがあるのなら、離れたくない人が居るの

なら、俺はどんなものとも戦える。

どれだけ葉傷が散つろうとも、無半骨端で不格好数多な枝技を伸ばそう。
伸積ばんだした枝努力が折敗られようと、曲どがりんなく手ねをつ使っててでも上強へくと伸なびろよう。
結果、朽ちてしまつてもそこに後悔はないだろう。きつと次に繋げ
る芽仲が息間吹がくいる。

第六十話 投影剣宣

熱と風の暴風が奏と百恵の両方を包み込む。爆風の元は奏の真後ろの地面。仕込まれていたのは〈陰陽札〉。百恵が奏の太刀を避けて跳ぶときにバレないように仕込んだ罠。

特技は使えない。魔法も使えない。

けれど、魔法の品はどうだろうか？装備の効果が発動できているなら〈陰陽札〉も使えるに決まっているのじゃないか？

百恵のサブ職業も奏と同職の〈陰陽師〉。そしてレベル90の数少ないプレイヤーの一人。

賭けは百恵の勝ちだった。

奏を倒しきり奏を盾にした状態でギリギリ自分が耐えきる火力の爆発を受けた百恵はゴロゴロと硬い地面を転がった。

「ケホッ、ケホッ」

焼けつくような熱量に喉を軽く焼かれながらも上半身だけを起す百恵。爆発によって生まれた土煙と黒煙が視界を遮り先を見ることは出来ない。火力過多にも思える爆風だったが用心にこしたことはないと思つた。

満身創痍に近い百恵はこれからのことを考える。

奏とここまでのことをやってしまえばもう奏とも千菜とも仲直りなんてことは出来ないだろう。絶縁する他ないのだ。

寧ろ、自分を二度も殺した上にさらにもう一回殺しかけたのだから許してくれる方がどうかしている。アキバの街にはいられない、かといってミナミに戻ったとしてもやることなどないのだ、情報封鎖を利用するために長く滞在していたが、あそこは百恵にとっても居心地がいいところではなかった。

百恵がそんなことに思考を巡らしているところで煙の中から影が現れる

一つの影が現れる。

それは奏

刀も持っていない

服ももう左半身はその細く締まった肉体を露にしてみました。し袴もボロボロで見る影もないが、立っていた。

目をギラギラと燦然と輝かせてその眼の輝きを一切失うことなく「どうやって・・・!」

煙が晴れる。

そこには一本杖が地面へと刺さっていた。細く真つ白な長杖その存在感はまるで大樹のものと遜色なくつい錯覚してしまえば動きを止めて見蕩れてしまいそうな神々しい光を放っていた。

〈真光とどき満ちた全式の儀式杖〉からは放たれる光は使用者を包んで守る加護の光

突き立てるだけで効果を發揮し百恵の陰陽札から障壁で守り満身創痕の体を少しずつ回復していく。

「やっとなかったよ」

「?」

「むかし、じいさんが言っていた、お前は姉を越えられるつてな。

んなわけねえだろつてその時は思ってた。根拠もへったくれもないじいさんの優しさからくる言葉だと思ってた。

でも今なら姉ちゃんを越えられそうだ。じいさんの言っていた理由がわかった気がする」

「舐めるなよ愚弟が、わたしにはお前じゃ勝てやしない」

百恵のそんな言葉を受けるも聞こえていないかのようには奏は目の前に落ちた刀を拾い一瞥するだけに留める。百恵はもう〈神憑き〉は使えない。〈神憑き〉に弱点をあえてあげるとすれば〈神降ろしの儀〉にはキャストタイムが存在するということだ。僅か数秒とも言える時間とはいえ知っていれば十分に何かしらの手は打てるしあの身体で神格を憑かせるような無理がそうそうきくはずもない。

奏は両手で折れた愛刀をしっかりと握りしめ腰を深く落とす

百恵も無言のままに立ち上がり長い長い太刀を構える

刃の折れた愛刀を握る手に力が籠る。思い起こすのは亡き祖父の立ち振舞い、何度も真似てきた理想の太刀筋

奏の思惑を察したかのように百恵は苛立ったようにただ一言言い放った。

「じいさまの真似事なんてできるわけないだろう」

（そうだ——じいさんといっしょじゃない。そんなものできるわけがない）

奏は奏という一個人でしかないのだから。経験も強さも技術も価値観も考えも思いも何もかも違いすぎる。奏の持っているものは奏自身のものでしかない

力も、想いも、思考も、言葉も、

斬るという意思だけを残して、全部を愛刀に明け渡せ。斬り伏せるという一動だけを残して

「複雑怪奇、重ねて歪むは枯れ木の枝、枝を照らすは月の光」

夜の海は寂しく、僅かな星の光も代わり映えせず、他愛ない。

されど、黎明は終わり日は昇る。

群青は紅へ、道は白へ。

葉は落ちて、新芽は疼いて蕾育む。

知多少の別れ、涙は渴く。

響かせよう、そして聞け、

蒼天揺らす高笑い

「たとえ折れて曲がって朽ちようと、

その心は変わリエない」

奏の詠唱に応えて、否、明け渡された奏の純粋な想いに黒刀は応える。

『夜の空を照らし続ける月の光と会うことのできない者へと募らせる
想いが混じりあい1本の黒刀となった

想いに比例し刀の力は強く強く純度を増していく』

折れてしまった刀の断面から純度の高い透き通った黒水晶のような半透明の刃が蘇る。

それと同時にフレーザーバーテキストは新たな文へと書き変わっていく。

『折れようとも曲がろうともその想いに比例し刀の純度は増し何度でも主人の力となるために舞い戻る。淡くとも弱くとも主人の心があ
る限りその献身が途絶えることは絶対にありえない』

黒刀は主人の言葉に応えて蘇る。

「この土壇場で新しい〈口伝〉まで編み出したか。いいだろう、その儂
い刃もわたしが全身全霊をもって完膚なきまでにへし折ろう」
希望

「それは無理だ。」

この刃は心の具象、俺が諦めない限り折れようと、曲がろうと、朽
ちようと、何度だつて蘇る。手足を斬り落されようと、心臓を穿たれ
ようと、俺がことごとくをもつてして叩き潰そう。

俺はもう二度と自分の在り方まで迷わない」

返されるのは確かな決意。これ以上の問答は無粋でしかないし意
味など一片たりともありはしない。あとは斬った張ったの大立ち回
り。互いに剣を交え合わせ勝った方が正しさを貫く権利をえる。も
うそれだけ。

二人の剣士が同時に地を踏み切った。

黒と白の剣閃は淀みなく流れるように交差し、二人の傷の具合から
は考えられないような耳をつんざくような衝突音が響く。

（実体はあるのかいや、それよりも厄介なのは…間合いが想像以上に
掴みづらい）

半透明の透けた刃は奏が振るう速度の域までいくと視認するのが
ほぼ不可能な領域まで昇華されていた。元々黒刀というのは光を反
射せずに間合いを掴みにくくするのが特性のひとつだ。それはある
程度の達人になれば剣を何度か合わせることで間合いを掴むような
芸当もできるのだが、あくまでもある程度の憶測がついている状態
のこと。最初から検討もついでいない状態から手探りで間合いを測
るのは至難の技だった。

奏の刺突が牽制に差し込まれ間合いの測れていない百恵は距離を
開けさせられざるおえなくなり後ろへとバックステップでめいっば
いに飛び退く。次の左からの斬り上げを防御しようと太刀を滑り込
ませた。しかしその刃を止めることは叶わなかった。

黒刀の半透明の刃が白の刃と交差することはなく、すり抜けたのだ。すんでのところで避けるが完璧に避けることは叶わずに左腕を黒刀が切り裂いた。

「つつー！」

(透過までするのか!?)

「逃がすかああああっ!!」

斬られた左腕を庇いながらなけなしのMPを使いきり、緊急遮断呪文〈四方拝〉を張って二太刀目を防いだ。どうやら〈四方拝〉まではすり抜けることは出来ないらしくガラスの割れるような酷い音が響かせるだけで、長い太刀を横風ぎに払うことで無理矢理間合いをこじ開けた。〈四方拝〉の障壁は二太刀目がどうやらクリティカルだったらしく半壊までさせられていた。ただの通常攻撃なら〈四方拝〉がクリティカルを出していたところであと一撃でも加われれば砕けるような状態まで持つてかれるようなことはなかっただろうから、おそらく奏は自身の攻撃力を八秒間だけ飛躍的に底上げする〈討伐の加護〉を使っていたのだろう。無理矢理にでも距離をこじ開けられたのは百恵にとって大きかった。

(左手の親指の感覚がなくなってる)

「ヤバイね、どうも。認めよう。お前は、私より強い」

百恵の体から一気に魔力が滝のように噴き出した。そんな魔力が百恵に本来残っているはずもなくすぐに奏には〈神憑き〉を発動させようとしているのがわかった。

「だからこそ負けるのは姉の面子に関わるよ」

ボロボロのからだで〈神憑き〉を使うことがとれだけ危ういか。それでもここままでやらなければやられるというところまで百恵は奏に追い詰められた。

奏の強さを認めたときと同じ言葉をもう一度告げる。けれど今度は同じ言葉でもまったく意味は異なる。今度の言葉はただの意地だけが籠った言葉だったからだ。だからこそ今更奏もそれに動揺をみせることも百恵の身体を案じることをすることはしない。

もともと〈神憑き〉を封じた状態での勝ちを本当の勝ちと捉えてい

いものかと奏は甘いことが思いつかなかったわけではない。こうなったのなら願ってもない展開でしかなかった。本来望んでいた状態で勝負ができる。きつと一合が顛界だろう、お互いに

「すう…ふっ」

奏はひとつの呼吸を差し込む。次には〈神祇官〉^{カンナギ}の使える限りの補助魔法をありつけたけ付与する。お互いにMPはほぼ尽きた。HPも二割をきりお互いそれ以上に数値の上とは別で身体の限界が近かった。

訪れたのは静寂。

誰もが次の衝突が最後になると固唾を呑み、呼吸を忘れてまでも見守ることしか出来なかった。

（刀の透過は見抜かれた。きつともう剣圧だけで防がれるだろう。それ以前に俺と姉ちゃんじゃ間合いが違いすぎる…それでも、姉ちゃんの限界はひと振りだ。確実に決めるにはできるだけ近距離で、躲しよりのなく、そして〈飛梅の術〉で俺が間合いに入りきれない距離8メートル）

間合いに入るまでにかかった歩数は6歩分その間に奏が入れたフェイクはその数12、七歩目で間合いに入った瞬間に全てのフェイクを完璧に見切ってみせた百恵からの斬撃が空気を切り裂きながら飛んでくる。七歩目で踏み込んだ足で全力で横へと跳んだが本来ならそれでも躲せない。白の斬撃はいとも容易く奏の右足を膝から下まで斬りさいた。限界だったのだろう、その一閃は奏が覚悟していたそれよりは威力は低く片足で被害が済む程度に遅かった。それでも、死にはしなかったがこれで勝負はついただろう。

死にはしなかった。ただそれだけ、片足が落とされてしまえば機動力を失うどころかこのまま横っ飛びの体勢から着地もままならないだろう。戦闘続行は不可能だ。

だからまだ終わってはいない

死ななければ何とでもなる

「〈飛梅の術〉っ！」

ふっ、と奏の宙に浮いていた身体が消えた。否、瞬間移動したのだ、

百恵の背後へと飛んだ。

「うまい、そして速い…、がそれでも遅い」

そこには奏の攻撃をまるで読んでいたかのように右手で刀を構え居合いの構えをとる百恵がいた

(左手を捨てたのかっ…！)

百恵の左手はぐっしやぐしやにまるで粉碎骨折でもしたかのようにひしやげ、そして血を垂れ流すようにして力の籠らない形で放り出されていた。百恵の身体は限界がきていた。大きすぎる力で振るわれた反動に身体が耐え切れなかったのだろう。二本目の刃を振るうのが限界だった。手刀で奏の足を斬るのが限界だったのだ。

居合いに両手が使われることはない。不完全な居合い。けれどもそれゆえに建を切られて不十分な左手は捨てて最高速度を出せる居合いを百恵は選んだのだ。奏が確実に一撃を凌ぎきると確信して。

(届かねえ…あと一歩が足りない…)

百恵の白銀の軌跡が肉薄する。やはりとどかなかった。あと一歩踏み込めていれば変わっていた。空中では一歩踏み込むための、ましてや踏み止まるための足場すら存在しない。

「あと一歩がっ、必要なんだ！」

無意識になのか確かな意思を持つてなのか、研鑽の末に自在にどんなタイミングであろうとどんな場所にも展開できるようになった〈襖の障壁〉を展開する。ただし、展開したのは刀の軌道を遮るようではなく、“あと一歩”と切望した足元へと。

奏はその小さなそれでも確かな手応えを返してくれた足場を全力で踏み抜き跳んだ。

白銀の三日月は軌跡だけを残して空を斬る。その先に広がる地面へと底の見えない深い傷跡を刻みながらも奏の身体を捉えることは叶わなかった。

「おおちいろいろおおおオオオ!!」

空を爆風に飲まれた木の葉のように舞い、それでも体を目一杯の力で黒刀を持つ左腕を不自然なまでに捻る奏の眼光がほんの一瞬だけ刀を振り切り無防備を晒した百恵と交差して、振り抜かれた黒の新月

が神の身体を地へとその身を砕かんばかりに勢いよく落とした。

訪れたのは静寂

勝負が終わったことが誰の目にも明らかになったとしてもそこに音が空気を揺らすことはなかった。

その場にいる二十数名の誰もが停止しその行く末を見守ることだけしかできなかった。千菜もリーゼもアカツキも満身創痕の今ならあの化物を倒せる、なんという思考には至りもできず、ただただ呆然と見守っていた。その中でもクイン一人は違っていた。決着がついたことを悟ったクインはすぐさまに奏の元へと駆け出した。普段なら走ることもなんて滅多にすることがない彼女が挟られ凍りつかされたことで荒れに荒れてしまった地面に何度かつまづきながらもそれでも誰よりもはやく駆けた。

それを機にして他の者たちの時も波をうったように動き出す。

「兄さんっ！」

「奏さん！」

「奏！」

一斉に千菜たちが倒れた奏の元へと駆け出す。

「いつててて…」

悪いヒール頼めるかな…正直、MPも身体も限界だ下手したらこのまま神殿行きになりそうだ。左足の出血でもう意識が飛ぶ」

「ナズナさん！」

「はいよおわかってるって〜」

本当にわかつているのかいないのかリーゼの掛け声に間延びした返事を返すナズナ

「奏くアンタあんな土壇場で〈天則通〉を差し込むなんてわかってんじゃない。よくやったよ」

「〈天則通〉？なにそれ、俺最後は本能だけで動いてた感じだからいまいちなにしたか覚えてないんですけど」

「そこは、あの時はこれを狙ってましたって言っときやいいんだよ」

「ナズナさんっやめたげてっ！奏さんゲキヤバですっ！ボロボロだからダメージと回復でパラレルせず回復に集中してあげてください」

いっ！」

グリグリと背中を下駄で踏みながら回復の光を当てるナズナ。

ナズナの手荒いヒールに当てられながらもなんとか身体を起こせる程度に回復した奏は身体を起こしながら隣に倒れる姉に向かって言葉かけた。

「いつまで気絶したふりなんてしてんだよ、最後のは峰打ちだし俺の〈全式の儀式杖〉が回復させてんだからとつくに身体くらいなら起こせんだろ」

「……バレてたか」

「「なっ!?!」」

「待った待った！みんな武器は収めてくれ、頼む。というかアカツキちゃん、そのクナイの量はシャレにならない。…隣の俺も危ない」
「しかし……」

「もう僕に戦意なんて微塵もないよ、君たちと戦うための力なんて残っちゃいない。むしろ僕は今すぐ君たちに土下座を決めて靴を舐めるくらいのはしたい気分だ」

「やめるバカ姉」

ピシヤリと声を揃えて姉に冷たい視線を向ける千菜と奏

「それよりも、だ。」

俺の勝ちでいいよな？姉ちゃん」

〈全式の儀式杖〉の効果は味方にしか効果はない。

その効果の範囲は奏の認識によるさじ加減でしかないのだ。ただ姉に自分の勝利を認めさせるため、ただそれだけであっさりと奏は百恵の傷を癒した。

その言葉に百恵はきよとんと千菜に似たコバルトの猫目で奏をすこしの間見つめたあと柔らかく微笑んだ。

「やっぱり甘っちょろいなあ…、参った。

今回は私の負けでいい」

アキバの街を巻き込むほどの大きな姉弟喧嘩。様々な人やものを巻き込みながらも天才の姉を高笑いする弟が十年越しの念願叶って

負かすことでここに終幕した。

第六十一話 結末

「はい、これでおしまい」

回復呪文の光が消えナズナが手荒く奏の背中を叩く。それに小さな悲鳴をあげながらも奏は立ち上がって身体の細かな調子を確認する。

「大丈夫か？カナ坊。もう足痛くないか？」

「うん、大丈夫。一時はちよつと安静にしとかなきゃかもだけど、〈冒険者〉の身体ならすぐよくなるでしょ」

「ほうかあ、よかったあ。おかえり、カナ坊」

「ただいまマリエちゃん。心配かけました」

少し涙目になりながら奏の顔を覗き込むマリエールを安心させるように奏はピースサインをしてにこりと笑う。それを見て安心したのか感極まったのか奏に抱きつき頬ずりする。相変わらずのギルマスの反応を嬉しく思いながら、柔らかなその感触よりも傷口に響く痛みの方が痛くてしようがないので本当に惜しみながらもやんわりと押し戻す。

そんな中で、こつそりとナズナが耳打ちしてきた。

「奏、アンタ、どんな無茶をやってきたんだい。歯科医助手専門外のアタシでもわ

かるよ、身体中ボロボロで無理やりここまで持たせた感じじゃないか、その身体一時どころかしばらくは本当に絶対安静にしとかなしいけないよ」

「……やっぱりわかりますか」

「特に聞くことはしないけどさ、これ以上心配かけるんじゃないよ。最近の千葉やマリエールの様子といたらもう、ひどいもんだったよ。心ここにあらずって感じでさあ」

ぐりぐりと脇腹をつねって奏に注意するナズナ。こればかりは文句のひとつも反抗もするわけにもいかないので奏は素直にされるがままになる。それをじーつと見つめる視線にナズナは気づく。

「ああ……、もうひとり表面上はなんとか取り繕ってた娘がいたねえ」

「え、なんか言いました？」

「…半端な対応はすんなってことだよ」

「イタいっつー！」

どすつと手刀を脇腹に突き刺す。そのいつもならされない理不尽な暴力はナズナなりの奏に対するけじめお仕置のつけさせ方きなのだろう。脇腹を抑えてうずくまる奏のことなんて知ったことではないとひらひらと手を振って怪我の具合が良くなったらソウジロウにも顔を見せるよう伝えて奏から離れていくナズナ。

「……わかってますよ、ったく。絶妙に加減しないんだよなあ、あの人。」

クイン！」

「ひゃいー！」

「あとで話したいことがあるんだけど、いいか？」

「わ、わわ、わかった」

わかっているのかわかっていないのかいまいち要領を得ないが一応返事はしたので奏は良しとする。それよりも今はまだやらなければいけないことがある。

「さて、百恵さん、でよろしいですか。あなたを拘束及び監禁させてもらいます」

「わかりました、謹んでお受けいたします」

リーゼの凜とした声がある場ではよく通る。奏と千菜をなんとか視線にいれないようにしているところかどうかにも彼女らしい。ひとりポツンとへ全式の儀式杖の回復を受けている百恵も自身の拘束と監禁に対してひとつの抗議もすることなく素直に受諾する。

「気にしなくていい。当たり前前のことを言ってるんだ、リーゼちゃんが正しい」

奏も千菜も抗議する様子はなく、ただその行く末を見守るだけに徹しようとしていた。

「え？ええ、カナ坊、ええのん？実のお姉さんやろ」

マリエールらしい言葉ではあったがこればかりはどうしようもないことだった。やってしまった事が大きすぎる。

「どういう意図があったのかは測りかねます。しかしこの方がレイド

攻略の邪魔をしたのは動かしようのない事実です。結果はどうあれ、百恵さんがルグリウスを解放し千菜さんは命を危険に晒された。レイドチームももしかすれば全滅していたかもしれません。奏さんとの戦闘は私闘で片付けたとしてもその事実はごまかしようがありませんアキバの街を危機に晒したその責任はとってもらわなくてははいけません」

奏と千菜の前で『罪』という言葉を使わないのもリーゼの優しさなのだろう、その優しさをこれ幸いと奏も言葉を差し込んだ。

「擁護するわけじゃないし拘束、監禁大いにしてもらって構わないんだがひとつだけ注釈させてもらっていいかな？」

「なんででしょう」

「ルグリウスはあのまま放置していてもいずれ自然消滅していた。寄り代がなくなっていた状態で生前に近い戦闘能力を維持していたんだ、夜が明ける前には消えていただろう」

あくまで個人としてでなく現場の一専門家の意見として聞いてくれ前置きを入れることも忘れはしなかった。

「そうですか、一応報告には加味しておきます」

「いや、本当に煮るなり焼くなり好きにしてください」

「なんで最後にそんなこと言っちゃうの!?お姉ちゃんのために擁護頑張つてよー」

言い訳も抵抗もするつもりはないらしいが見捨てられるのは悲しいらしい、詰め寄ることはしないが奏の足に絡みつく。まるで別れて出ていこうとする彼氏を必死に引きとめようとする女のようなだ。

「姉さんわたしが危ない時助けようとしてくれなかったからなあ」

「したよー!しようとしたけど奏が上から降ってくるのが見えたからやめただけでー」

「やつぱりお兄ちゃんがナンバーワンだよね」

散々、いままでやられた分の仕返しとばかりにばつさりと切り捨てていく奏と千菜。それにさめざめと涙を流す百恵。仲のいい姉弟姉妹の光景だというのにどうにも内容が生々しい。

「あの、異議なしでいいのならちやつちやと連行してもよろしいです

か？」

散々に姉をいじめる弟妹の凶に気を遣う気も失せたのかそれとも姉の方がなんだか不遇に見えたのかさつきと百恵を連れて行こうとするリーゼ。

だが奏はそれを人差し指を立てひとつの提案をすることで制した。

「まあ、待つてよ。リーゼちゃん、最後に今回の黒幕の意見を聞こうぜ」

「そうだねー、事が全部終わってからでも判断は遅くないと思うよ、
〈D・D・D〉の参謀さん」

その声は誰もいない暗闇から当たり前のように響いた。まるでどこであろうと付きまとう影の底から聞こえるようなその声にリーゼの顔が僅かに引きつる。

「今回の一件、裏で糸を引いていたのはボクだ。そして幕を引くのもボクでなくてはいけない」

ビルとビルの間、影と影が重なり合い生まれた暗闇の中から人影が出てくる。銀色の星屑のような光を返す毛並みに暗闇の中にあっても光を放っていた金色の眼をした猫人族〈円卓会議〉十三人の代表のひとつりマイクロフトがその場に立っていた。

「奏クン、その光消してくれないかなー。その光は少しボクたちには刺激が強い」

「……」

奏はマイクロフトに言われた通り黙って〈全式の儀式杖〉が放つ聖光を収めメニュー画面を操作して杖をしまう。

「すまない、でもこれは必要なことだ」

マイクロフトが言葉を言い終えたと同時にマイクロフトの背後の暗闇から無数の黒い塊が飛び出し座り込む百恵へと殺到しその身体へと入り込んでいく。その黒い塊の正体は鴉、ただし普通の鴉ではなく足を三本持った異形の鴉たち。

「ああ、うううっ、くっ」

無数の異物が身体の中へと入り込んでいくのに対して大きな悲鳴

をあげることがないことが百恵の精神力の強さを表していたがその身体は変化していた。美しかった金髪がみるみるうちに色が抜け雪のような死人のような白髪へと変わっていった。身体の方も細くなっていき耐え切れず倒れ込みそうになるところを優しく奏が抱きとめた。

「マイクロフトさん！これはどういうことですか！

「理由は話す。だからそのお姫様を押しさえ込むことを先にしてくれないかな」

百恵の変貌具合を見て血相を変えて問いただすリーゼにマイクロフトは顔色のひとつも変えることなくそれよりも別のものを見て指さした。指差した方向からは離れていても焼かれていまうのではないかという熱気。

「マイクロフト!!姉さんになにをしたああ!!!」

自分に向けられているわけではない殺気、それでもなお気圧されるほどの圧力。今にも飛びかからんとする千葉を押さえ込んでいるのはクインと何十本もの白銀の腕だった。その殺気を一番に受けているはずのマイクロフトはただただ千葉を見つめるだけでなにか言葉をかける様子もない。

そんな中で奏がふらふらと立ち上がり修羅のような形相で拘束を解こうと暴れる千葉の元へと歩みを進める。

「ごめんな、ちよつと眠っててくれ」

ただ悔しそうに申し訳なさそうに奏は拳を握り千葉の腹へと拳を打ち込んで千葉を気絶させ倒れ込もうとする千葉を抱き止め力いっぱい抱きしめる。

「んっ……んっ……」

意識を手放した千葉をマリエールとクインに預け、マイクロフトの方は一瞥することもせず横たわる百恵の元へと戻る奏。

「……マイクロフトさん、ちゃんと説明していただけますね？」

リーゼだけでなく周囲から浴びせられる厳しい視線。奏がどうしようもない程の妹想いの男だということは周知の事実、その奏にここ

までさせた意味、説明しないわけにはいかないだろう。

「今回の一件、ボクが糸を引くきっかけになつたのは奏クンからの依頼からだ。『実の姉の行方を探って欲しい』人探なんてよくある依頼だったしほかならぬ奏クンの頼みだった、引き受けた。実際問題として少々手こずりはしたが百恵チャン、そこに眠る彼女を見つめることはできた」

淀みない口調で淡々と語っていくマイクロフト。

「ただ、そこでひとつの問題が発生した。彼女が奏クンたちと再開することを拒んだことだ、彼女はこの世界で奏クンの人間的欠落を治すために動いていたからだ。そこまでなら別にいい、弟想いの姉の行動で片付けられる。依頼失敗の報告書を引き下げて身を引くこともできる。」

だが、その手段が問題だった。詳しくは省くけど彼女がその手段を実行するために手に入れた力は決して個人が所有していい力ではなかった」

神格をその身に宿し^{レギオンレイドラング}へ大規模戦闘級の戦闘能力をたつたひとりの人間が所有すること。それは個人の枠組みを超えて周囲に与える影響があまりにも大きすぎる。

「たつたひとりの所有する、しかも制約のひとつもないデメリットなしで振るうことができる兵器なんてものがあれば、それは戦争の火種にしかならない」

「兵器だなんて人をなんだと…」

「恐怖を感じなかったかい？彼女のたつたひとつの拳でビルと同じ大きさの氷塊が砕け散り、もう闘うことも出来なかった殺人鬼は復活した。」

恐れを感じなかったというのならそれこそ君たちは奏クンの欠落なんて問題にならない程の人間として欠落を負っている。今すぐにも奏クンと同じ目にでも合うといい、彼の十分の一くらいは恐怖を感じれるだろう」

その言葉は問答無用で僅かばかりでも反感を覚えているものたちの反抗の意思を折っていく。誰もが身に覚えがあるからだ、だから誰

も倒れる百恵と姉を大事そうに抱きしめる奏の近くに近づけずにいる。

「百歩譲ってボクたち〈冒険者〉はいいだろう。遠巻きに迫害でもしていればいい、いざとなればレイドチームでも組んでまるでレイドにでも挑むかのように討ち取ればいい。」

だが大地人は違う。彼らにとつて死の価値観はボクらよりもより身近だ、良くも悪くも。死が身近だからこそ命をボクたちよりも大事に思うものもいれば殺すことに躊躇を覚えないものもいる。戦争を忌避する傾向がボクたちよりも薄い」

同じ人間ではあつても〈冒険者〉と大地人その価値観の差は大きい。それはたかだか一年やそこらで全て分かり合うことは不可能なほどにだ。

「この世界はボクたちだけじゃ生きていけないことは明白だ。果たして大地人が戦争を始めたとして、ボクたちは無関心を貫けるだろうか？ 仮に彼女が戦争に巻き込まれ手駒にされて多くの命が散ることになる可能性が決してないと言い切れるだろうか。」

そんなことを考えなければいけないほど彼女の持つ特異性は異常すぎる。封印して使い物にならないようにしなければならぬほど」

マイクロフトが放つたのはその力を使うどころか発動することすら危うくさせる重度の呪い。神格をその体に宿す彼女には通るはずはなかったために彼女の計画の手助けをし奏が百恵を討つことで弱るのを待たなければならなかった。殺人鬼のおかげで都市の防衛結界が消え一番弱りきった街中で呪いを施せたのは嬉しい誤算だった。

「あなたの言い分はわかりました。独断行動であつたことは問題に上げざるおえないので〈円卓会議〉には報告することになります。あなたが街の中でそこまで危険なものを使ったこともありますし、あなたも拘束せざるおえません。」

最悪〈モルグ街の安楽椅子〉は〈円卓会議〉から除籍も免れないと考えておいてください」

頭の中で分かっているけどどこか納得のいかない終わり方に吐き捨てるように言葉を紡ぎマイクロフトを拘束することを告げる。

「わかっているさ。結局ボクは彼女の願いを完璧には叶えさせてあげられなかった。どんな罰でも受け入れよう」

「奏さん、一応あなたのお姉さんも拘束しなければいけません。私はマイクロフトさんを連行しますので百恵さんはあなたが連れてきてください。時間はどれだけかかっても構いませんので」

「悪い、恩に着る」

そういつてリーゼはマイクロフトを連れ去っていった。他のメンバーたちもそれを見て去っていく。奏と百恵、二人だけが残されたところで奏は口を開く。

「まったく、わかっていたけど難儀なもんだな、姉ちゃん」

「うん、困ったね。体中気だるくてしようがないや」

うつすらと目を開く百恵が奏の言葉に返事を返す。

「ちよつと散歩でもするか」

「そうだね」

奏は百恵をその背中に担いで歩き出す。少しだけほんの少しだけ。人の身で神になろうとした女は罰を受けた。それでもほんの少しは救われてもいいだろう。

秋頃には出来なかった話をしよう。積み積もった話をしよう。吹き抜ける風は冷たかったけれどお互いに触れ合う体は暖かかった。

第六十二話 君と共に歩くのは永久の道

月の光は綺麗だった。

その光は太陽の光を月面が反射しているだけの所詮は偽物の光でしかないのだけれど、奏はその偽物の光に何度も救われてきた。見上げる度に形を変える月は涙を溜める目を隠すために見上げ、その光を見ているうちに涙はいつのまにか消えている。隣にいる泣かせた張本人たちにはバレていたのかもしれないが。

白亜の大理石が淡い月の光を反射するテラスで奏は月夜を見上げる。

夜はとつくの昔に深けている。殺人鬼を止め、ルグリウスを解放し、奏姉百恵にも勝利した。そして百恵も奏も自身の強さと弱さに対して罰を受けた。

この一夜で随分と色々変わってしまった、立場も関係も。しばらくは大きな変化が続くだろう、それだけの事をした。

しばらくすれば地平線の向こうから太陽が昇り始めるだろう。それだというのに不思議と眠気の方はなかった。これからのことが不安なわけではないがそれでも今夜の出来事で熱に浮かされているのかもしれない。否、まだこの夜にやっておかないといけないことがあるのかもしれない。

「奏」

名前を呼ばれた。透き通るようなすりと溶け込んでしまうような声。奏が振り向いて視線の先に立っていたのは自身の羽織る羽織と同じくらい紅い外套を羽織る黒髪の少女。

「クイン、いいのか？レイドの祝勝会なんじゃないのか？」

「話があるっていったのは奏じゃないか、それに今回の一番の功労者がいないのに祝勝会なんて変な話じゃない？」

以前のような自身に溢れ満ちたような口調はなりをひそめているがだからといって奏はそこに違和感を感じることはなかった。むしろ今の方が懐にすとおちる、以前の話し方がおかしかつたわけではない。けれど今の話し方を聞いてしまうともう前の口調に違和感

を感じてしまうかもしれない。

「女の子だらけのパジャマパーティーに男の俺がどう参加しろってんだ、どうせ参加してもすぐにどこかにふけこむのがオチだ」

「奏は知らない女の子にはセクハラしないもんな」

「まるで俺が知り合いの女の子にはセクハラしてるみたいな言い方はやめてくれ」

「え？自覚ないの？」

「ごめんなさい」

目のハイライトを消しながら首を傾げながら聞いてくるクインに恐怖を覚え反射的に謝ってる奏。そのまま蛇に睨まれた蛙のように身動きひとつもせず隣へと歩いてくるクインを見つめている奏がおかしかったのか感情ひとつ感じさせなかった表情を崩してはにかむクイン。

「ふふっ、冗談だよ。ただするんだったらわたしだけにしておいた方がいい、ミノリちゃんは優しいから許してくれてるかもしれないけどいつか愛想をつかされるよ」

「いや、最近のミノリはなんだか俺をいいように操るコツを掴んできているから無問題な気がする」

「師匠の尊厳というか年上の尊厳としていいのか、それ…？」

多分そういうのは割と前からかなぐり捨てている気がするよ、そんな風に奏は冷え切って触れるのも戸惑う手すりに背中を預ける。体重を預けてただ上を向いて星が瞬く空を見上げる。

「姉ちゃんへのコンプレックスの裏返しだったんだよ。トウヤとミノリから見た俺が姉ちゃんと同じように自分よりもずっと上の存在だなんて思っただけじゃなかったから特別扱いしてたんだと思う、たぶん」

だから、特にミノリのことを猫可愛がりしていた。姉という存在が既に奏にとってはコンプレックスだったから。もちろんただ純粋にミノリが可愛くてしようがなかったのもあるだろう、奏という男だから絶対。

「百恵さんはどうなったの？」

「あのあと、とりあえずへD・D・Dで身柄を引き取るようになったよ。細かいことはへ円卓の方で裁決がとられるだろうさ」

あのあとしばらくは奏は百恵をおぶって街を歩いて回った。どこか行き先を持っていたわけではなくただ気の向くまま歩いて回って色んな話をした。流石に疲れ果てたのか、いや百恵が気力で持たせていたのが尽きたのだろう、途中で奏の背中で静かに寝息をたて始めた。

リーゼは律儀に奏たちを待っていたらしく第一声に「遅いですっ」と奏に苦言を呈しはしたけれども次には「お疲れ様でした」と奏に頭を下げた。そんなリーゼに礼を言って奏は百恵をへD・D・Dへと預けた。

とりあえず百恵の身柄は丁重に扱われるようだ。マイクロフトが百恵にかけて呪いのせいで百恵が弱りきっているためであるのが一番の理由ではあるが。

「ただ、マイクロフトさんがかけた呪いの重度がどれくらいのものがまだイマイチはつきりしないんだ。ステータス情報だけでもいくつもバッドステータスが重なってるのはわかるんだけど、それ以外にもテキストになってないところにも悪影響が出てる」

美しかった金髪も真っ白になり果てた。へエルダーテイルの頃のアバターをモデルに大きな変質を起こさない身体で髪の毛一本も残さず灰のように真っ白になるほどの変質だ。自身の肉体を無理やり強制回復させ身体を変質させてしまった奏からしてみてもその深刻さを重く見ざる負えなかった。

「そのおかげでといったら皮肉な話だけど先に罰を受けてるようなものだからこの街から追い出されることはない、と思う」

不幸中の幸いというべきか、怪我の功名というのだろうか。呪いをかけられたことで、先んじて罰を受け不本意な、言ってしまうえば都合の悪い罰は受けずに済みそうである。散々に駈けずりまわってやつと見つけた姉と喧嘩して仲直りした途端に、さようなら、というのは奏としてもしたくなかった。

「そっか、よかったな。ま、わたしたちもそう人のことを心配してる暇

はないんだけどね」

「ごめんな、俺のせいみたいなんだ」

「いいよ、〈モルグ街〉はもともとただの変わり者ばかりのアパートメントみたいなものだった。仕事だって回されてきた最低限のものしかしていない。〈円卓〉から外されても〈円卓〉は機能するさ」

形式上では〈モルグ街の安楽椅子〉は円卓に席を残し続けるだろう、ただ信用は失ってしまった、捜査機関として一番に大事にするべき信用が失墜した。依頼する側からしてみれば個人ならともかくギルドという枠組みでは依頼をすることに躊躇をおぼえる状態になってしまっただろう。〈円卓〉としてはおおぴらに使うわけにはいかなくなるだろう。ようはクインたちからすれば食い扶持が潰れたわけだ。

「あーあ、これでわたしも路頭に迷うことになるのかなあ。誰か責任とってくれないかなあ」

じつと奏の顔を下から覗き込むような姿勢で見つめるクイン。ふたりの視線がお互いの眼で絡み合う。

いつのまにか心地いい程度に吹いていた髪を揺らすそよ風はやんでいてテラスから見える地平線の先は少しずつ飲み込むような黒から群青へと変わろうとしていた。

「ヒメ、俺は今から最低なことを言うから我慢出来なかったら思いっきり殴ってくれ」

「どうしたの？」

クインは表情を変えなかった。この先に望まぬ結末があるかもしれない中で変わらずに真っ直ぐに奏の眼を見返した。静かに全部、教えて欲しいとそう答えた。

「俺は、カナミのことが大好きだった、初めて人をあれだけ好きになれた。カナミのためならなんだってできると思えるくらい。」

でも、いい加減諦めないといけないと思った。あいつにはあいつの幸せがあつて俺なんかはその幸せに割り込んで、あいつの優しさに甘える権利はもう俺にはないから、散々俺はあいつの優しさに甘えさせてもらったから」

初めて恋焦がれて、誰よりも好きな人で、どうしようもなく手の届

かない高嶺の花だった。諦めなくちやいけないとわかっていたけれど、ずっと見つめていたかった。

でもそれも終わらせた。

「終わらせたんだ、この気持ちにも終わりをつけさせた。

でもさ、ヒメに好きって言ってもらって、嬉しくて暖かい気持ちになつて愛おしいと感じたけれど、それと同時に俺は俺が信用できなかった。ただ、自分が傷ついた傷をヒメで埋めようとしてるだけなんじゃないかって、ただ一方的にヒメの好意を受け取るだけでないも返すことをしないんじゃないかって思った。散々自分の都合のいい世界だけを見てきた俺がヒメを傷つけることをしてしまふんじゃないかと思った。

結局俺はいままでの人生自分しか愛してこなかった。人の愛し方なんてわかつちやいない」

だんだんと空は群青から赤へと変わっていく。しんみりと冷たい冷気だけを放っていた大理石の床もその明かりに照らされて白へと変わっていく。

「それでも、俺はヒメのことが好きなんだ。こんな俺でも、それでも好きだと言ってくれるか？」

光が地平線からこぼれ出す。赤かった空も青さが澄み渡っていく。雲の白が映えるように浮かんだ。黎明は終りを告げようとしていた、夜が明けて日が昇るようとしていた。光に照らされた奏の顔は真っ赤に染まっている。

「ほんとに、さいていだ」

クインが奏の胸ぐらを強く掴んだ。ぐいつと着物の衿を引き込み奏の顔を引き付ける。

僅かな自己嫌悪と後悔に浸りながら顔に来るであろう衝撃に身構えようと目をつむった奏に次の瞬間、顔に触れたのは小さな柔らかな感触だけだった。

触れられたのは殴りやすい頬ではなくて唇、触れられるときには甘い柑橘系の匂いが香り、小さな柔らかいなが一瞬だけ奏の唇に触れて離れた。掴まれていた衿も離されてトトつとステップを刻むよ

うにクインは離れてしまう。

「えへへ、わたしも八枝のこと大好き」

細く白い人差し指で唇をなでるような仕草をとりながら開けた距離を自分で詰めて呆然とする奏の顔の前まで自分の顔を近づけるクイン。昇る太陽に負けないくらいに顔を真っ赤に染めながらクインはいっぱいいっぱいに満開の笑顔を咲かせてそう答えた。

夜は明けて日は昇る。登ってくる朝焼けの光はきらきらと輝きながらも暖かでそれに照らされるひとつの影を優しく包み込む。これから先の未来にきつと幸福がありますようにそう囁くようにやんでいたはずの風が優しく吹いた。

第六笑 愉快に響くが高笑い

第六十三話 早起きは三文の得されど時は金なり

「か、…さん、かな…さん、おき…ください…」

「むにや?」

目を覚ますと半裸姿であられもない格好の彼女が隣に寝ていた。ということが勿論あるわけもなく、(むしろそんなことがあった日には寝起きから頬に真っ赤な紅葉マークを頂戴することになるだろう) 眠気眼をこすりながら見つめた先にはギルドメンバー、俺と同じ^{カンナギ}〈神祇官〉の女の子明日架ちゃんがいた。

「おはよう、明日架ちゃん…」

どうやら、わざわざ起こしに来てくれたらしい。勝手にどこかにいなくなつて久方ぶりに帰ってきてここ最近はずつと起こしてもらっている。我ながら随分と面の皮が厚いものだ。

「まだ、身体の調子は戻りませんか?」

「んー…、だいぶマシにはなつてきてるんだけどねえ、どうにも自分じゃ起きれない、本当に年上としてのメンツがたたないんだけど明日も起こしてもらっていい?」

「もうっ…、奏さんのメンツなんてあつてないようなものなんですから、どんどん頼ってください」

「あれ?おかしいな、あくびの涙がとまらないや」

やっぱり、いろんなところに結構ガタがきているらしい。大概のことがひと段落したらこのざまだ。身体の節々が痛いし、どうにも頭も重い。おまけに眼がかすんでなんにも悲しくなんかないのに涙がとまらない。ギルドでの立ち位置も最底辺に落ちてしまつてるじゃないか。

「ふふっ、冗談です。じゃあ明日はアシリンにモーニングコールへ行くように言っておきますね」

「……できるだけ優しく起こすように言つていてね」

小さく笑う明日架ちゃんに一応釘をさしておく。小さい子は時に

突拍子もないことをするからな、アシユリンはいい子だけど周りがどんな悪知恵を吹き込むかわからない。飛燕あたりは耳元でシンバルでも叩いて起こせばいいとでも言うかも知れない。

「それじゃあ、お邪魔しました」

「うん、わざわざ起こしにきてくれてありがとうね」

「いえいえ、どういたしまして。あ、それと！」

部屋から出ていこうとする明日架ちゃんがぱちりと、胸の前で両手を叩いてなにかを思い出したかのような動きをする。なんだろうか、ここ二ヶ月仕事をサボった分の罰だろうか？ トイレ掃除一ヶ月くらいならまあ、引き受けようじゃないか。

「ヘンリエツタさんが朝ごはんを食べたらきてくれていってました」

「りよーかい。伝言確かに受け取りました」

よかった、流石にそこまで俺のギルド内での立場は落ち込んでるわけではないようだ。

ヘンリエツタさんからの呼び出しか、なんだろう？ 帰ってきてからは怒られるような悪さはしてないはず…だよな？ ペこりと一礼して部屋から出ていく明日架ちゃんを尻目に頭の中を探ってみるがやっぱり思い当たる節はない。でもなあ、知らないところで勝手に因縁作っちゃうって最近やっとなんか自覚したからなあ。あるんだろうなあ、なにか。

朝から眠気も吹き飛ぶ爽やかなのか憂鬱なのかイマイチ容量を得ない気持ちにさせてもらったところで、洗面台へと向かう。今日も今日とて〈三日月同盟〉のギルドホームは変わらず朝から（といってももう9時を回ろうとしている）賑やかだ。

そう思いながら廊下を歩いていると前からアシユリンが歩いてくるのが見えた。ヘンリエツタさんが用意したたくさんのリボンやフリルをあしらった可愛らしいワンピースを着てととと歩く狼牙族の女の子。彼女もちやうど俺に気づいたらしく、大きな笑顔を咲かせたかと思うと駆け寄って飛びついてきた。

「おっと、っと」

小さな女の子と言っても（冒険者）。その身軽な身体を大きく弾ませて胸に飛び込んでくるアシュリンを少しよろめきながらも受け止める。

「おはようです！奏お兄さん！」

「おはようアシュリン。だめだぞ、いきなり人に飛びついたりしたら、危ないだろ？」

「えへへ、ごめんなさいです」

抱き上げているアシュリンに注意はするが、にこにこ嬉しそうに笑う彼女にあまり強く言い聞かせることはできない。困ったものだ。

「事案発生だ」

「うるせーぞ、飛燕。どこから湧いて出た」

本当にどこから湧いて出てきたのかいつのまにか隣にはいつも通りの気だるそうな目でこちらを指差す狐尾族の青年が。

「またまた、そんな風に頬もゆるゆるでにやにやしながら注意しても説得力なんて皆無っすよ。傍から見たらただのロリコ…」

「よつと」

「いったああ。今足払いした！凶星を突かれたから暴力に出た！」

だまらっしやい。いいんだよ、子供のうちは元気が一番なんだから。アシュリンだってもうちよつと大きくなったら勝手に落ち着いてくるんだよ。

あれ、でも千葉はあの歳でもまだ抱きついてくるよな？やっぱりちゃんと注意しておいた方がいいのだろうか…、でもなあ、あんまり厳しくしてアシュリンに嫌われたくないもんなあ。

今嫌われてしまったらこのあともずっと嫌われたまんまになりそうだ。挙句の果てに俺の言うことを聞かなくなってしまうアシュリンがグレてしまって飛燕みたいな目の下に分厚いクマをつくって死んだ魚のような目になってしまったら…。

「アシュリン、ずっと奏お兄さんのことを好きでいてくれな？」

「？はいです」

「やっぱりまごう事なきの変態ロリコンじゃないっすか」

「俺はお前みたいな見た目で損をする奴筆頭のような人間にアシュリ

ンをしたくないんだ」

「おつとそこから先は戦争つすよ、中身でがっかりする奴筆頭」

戦争？本気で言つてやがるのか？お前ごときでは役不足よ！私に戦いを挑みたければ奏四天王に戦いを挑んで勝利を掴んでからにするのだな。

「四天王？そんなんいるんすか？」

「忠実なる〈暗殺者〉弧猿。頼んだら多分手伝つてはくれる〈腹黒メガネ〉シロエ。変態仲間〈おパンツの騎士〉直継。そして前者の三人と俺を含んだ戦力でも手も足も出ないし、頭も上がらない四天王最強の〈覇姫〉千葉」

「それ、千葉さんひとりでよくね？」

「むしろ俺が四天王のひとりでよくね？」

千葉には勝てないよ、だつて妹だもん。

俺の肩書きなんてせいぜい、四天王最強のお兄ちゃん（笑）くらいが妥当だろう、役不足もここに極まれりだよ。実力不足じゃなくて格不足つてあたりが手に負えない。

そもそもヘタレ代表の集まりみたいな男連中が千葉に勝てるかよ、ゲル状の暗黒物質ダークマターにされる。

今は何やら料理スキルなしでもキャベツの千切りくらいはできるらしいからゲルにはされずにこんがり肉が出来上がるかもしれないが、人肉なんて食べれそうなのは俺の知ってる中ではアサハナ様くらいだろう。

どんなわたしをた・べ・て、だ。

人身御供にしてもあまりにも品が無いだろう。

— 閑話休題 —

「じゃあ、アシュリン、もういきなり人に飛びつくことはしちやだめだぞ？」

「はいです」

「飛燕、お前もそろそろ行った方がいいんじゃないやねーの？さつき玄関で小竜が待ってるのを見たぞ」

「おつと、いっけね。また噛み付かれる」

抱き抱えていたアシユリンを下ろしながら二人にそう伝えるとアシユリンはにこにことうなずき、飛燕は無愛想な顔を少し歪めてめんどくさそうに小走りに玄関の方へと走っていった。今から狩りにでも出かけるのだろうか。

アシユリンと飛燕と別れて洗面所へと向かい、顔を洗うついでに少しばかり身だしなみを整える。着物を寝巻きにしてるせいもあるのだろうか少しばかり着衣が乱れている。

そりゃあ、こんな格好でギルドホールをうろちよろしければ、俺のメンツなんてあつてないようなものだよな。しかもそれを女の子に普通に見せてしまってるんだから中身が残念なんて飛燕ごときに言われるのか。というか、クインしかり千葉しかり明日架ちゃんしかり、俺は女の子に寝顔を簡単に見せすぎな気がする、〈ゾーン設定〉見直すべきか…。

「でもマリエちゃんよりはマシか」

「zzzz……」

隣には器用に歯ブラシを咥え立ったまま眠りこけている敬愛すべきギルドマスターの姿があった。関西生まれの人間は日常的にボケをかまさないと生きていけないのだろうか？ 偏見かもしれないけど東側の人間にも変な奴がいけないわけではないけれどどこまで露骨に笑いを取りにくるのは大阪の人間だけじゃないの？

「ほらマリエちゃん、昨日遅くまで書類と格闘してたのは知ってるけどこんなところで寝ちゃだめだって。ああもう、歯ブラシも咥えたまま立ったまま寝るなんて器用な真似して」

「んんう、カナ坊かあ、今日も早起きやなあ」

「いやいや、どちらかというとおそようって感じの時刻だし」

歯ブラシを咥えさせたままはさすがに危ないのでマリエちゃんの口から歯ブラシを引っ抜いて、コップに注いだ水で口の中をゆすがせる。

そのまま半分眠ったままのマリエちゃんを背中におぶって洗面所を出る。背中でのんきに寝息をたてるマリエちゃんを自室に運ぶため道中で見つけたリリアナに手伝いを頼んだ。いくらマリエちゃん

とはいえ男ひとりに自室に入られるのは嫌…、かどわかはおいておいて問題があるだろう。

「はい、マリエちゃん。ベッドはこっちだよお」

ばふつとダイナミックにベッドに倒れこむよう寝転がる彼女にリアナが掛け布団をかける。すると気持ちよさそうにマリエちゃんは顔をほころばせた。

「ありがとうなあ。リリアナあ、カナ坊う」

「どういたしまして」

マリエちゃんにはその返事が聞こえているのかいないのか、定かでない様子だったのでリアナと一緒に部屋を出ようとする。

「そろそろ、俺も仕事の手伝いに復帰した方がいいな」

「それなら多分、大丈夫ですよ。ここ二ヶ月くらいで奏さんがいなくても〆三日月同盟〃は十分に回るようになってますから。マリエールさんののは別件です」

「うん、なんかもうなんとなくは察しがついてたよ、みんな結構怒ってるだろ」

なんとなくはわかっていた。最初の方はなんにもお咎めなしでみんなにここへ迎え入れてくれた上に、俺がアサハナ様のところで無理に身体を回復させ続けた後遺症のせいで一時絶対安静にしくちやいけないこともあつさりを受け入れてくれた。帰ってきてから一週間が経とうとしているがまるで老後のおじいちゃんみたいな生活を送っている自信がある。

「うーん？まあ怒ってはいますよ。それと同じくらいにはみんな喜んではいますけど」

「喜んでる？なに？ストレスのはけ口見つけちゃった的な？」

「なんでそんな卑屈になるんですか…。違いますよ、普段頼みごとをしない奏さんが珍しくここ一週間ずつとわたしたちに頼りきりじゃないですか」

「いや、珍しくって…。俺は結構迷惑かけてばっかりだったと思うけど」

俺の詰めの甘さは折り紙つきだ。大抵のことはやってのける自信

はあるが、俺一人でやったことはどこか抜けている。

「そうですね、奏さんは誰かの手伝いばかりしてきて自分でなにかするってことはなかったじゃないですか、それがいいことでも悪いことでも。奇抜で能力は高くても欲がなかったんですよ。」

それが今ではわたしたちに頼りつきりで、休んでばかり。クインさんとイチヤイチャしたり、〈記録の地平線〉^{ログ・ホライズン}に遊びに行っただきりで夜遅くに帰ってきたり、散々すぎ放題なんですから。怒ると同時に安心してしまいましたよ」

それは姉ちゃんにも言われたことだ、俺の行動原理は自分の居場所^世を守ることにしかない。

以前は他人からの評価で自分の世界を維持し続けることに固執した、世界を崩されないように大事に大事に見守り続けていたようなものだ。壊れそうなところを補強して、手に負えないところは切り捨て新しいものに組み替えた。

今は違う。俺が守りたい世界^{居場所}には俺以外にも世界^{居場所}を守ろうとしている仲間がいることに気づいた。世界が広がった。俺以外にもそんな奴らがいてくれるならそれはとても頼もしいことだろう。一人で担いでいたものを他の仲間と一緒に担いでくれる。それなら自身^{居場所}のことに興味ではじめる、欲が出て我が儘になる。

それがいい変化なのか悪い変化なのかはまだ俺にはわからないけれどそれでも一緒にいてくれる仲間がいてくれることに気づけたことはとても嬉しいことだ。

「おいおい、リリアナ。あんまりそんなこと男相手に言うものじゃないぞ」

「奏さんは絶対に手なんか出してこないって信じてますからだいいじょうぶです。」

口ではなんだかんだといっても中学生にならない娘にはそんなことしないしちよつとのボディタッチだって誰も奏さんからされたことないこと〈三日月同盟〉の女の子たちはみんな知ってるんですから。むしろ女の子から触られる方が多いでしょう？奏さん割と慣れてる

ように見えてちよろいですから」

「ど、ど、童貞ちやうわっ」

「誰もそんなこと言ってますんから」

な、なんだと？へ三日月同盟の女の子らにはそこまで情報共有されてちよろいなんて不名誉な共通認識をされているのか？まことに遺憾である。

「なんならわたしの好きなどころ触っていいですよ。胸でもおしりでもお好きなどころをどうぞ」

エルフ耳の女の子リリアナは赤紫のローブでわかりづらくともしっかりと女性らしい膨らみを見せてつけてそんなことを言っている。この娘はこんなに度胸のある娘だったか!?

いや、違う。これは単に俺を舐めてるだけだ。俺が触れるわけがないとタカをくくっているんだ。

「ふ、リリアナ悪いが俺はお前のその意外と着やせするナイスバディには興味がないんだ」

「なっなんですってー?」

リリアナはスタイルがいい。普段は体の線が出にくい服を着ているせいでわかりにくいがへ軽食販売店クレセントムーンの制服を身にまとった時には高校生ながらマリエちゃんやヘンリエッタさん大人の雰囲気を持つ二人に迫る勢いであろうプロポーシヨンの良さを発揮してみせたのだ。元から着こなしの良さもあるのだろう、サブ職の〈裁縫師〉として自分で作った服を着込んだリリアナはとても様になってる。へ三日月同盟の一のおしゃれさん、ファッションリーダー的な立ち位置になるだろう。

しかしそれでも答えはNOだ。リリアナはショックを受けたように両手でその体を抱きしめる。しかしあえて言わせてもらおう。

「俺には可愛い彼女がいるからな」

「どうも朝からごちそうさまです」「いえいえお粗末様です」

いえーいと、まっすぐ伸ばした手同士を叩いてハイタッチする。

「もう何回くらいキスしたんですか？夕日の見える浜辺なんかで愛を確かめるように何度も何度も、なんて…、きやー」

「期待を裏切るようで悪いんだけどそんな砂糖のハチミツ漬けのよう
なあまあまラブロマンスはしたことないや……」

「え？ないんですか？」

「ないない」

「あんなみんなの前でもこれみよがしにぴったりとくつついてソ
ファーで頭をあずけ合いながら寝てたりしてるの？みんなが気ま
ずくて共有スペースなのに入れないようになってるの？」

えー、普段そんな気遣いしないんだから別にそんな気を遣わなくて
いいくていいのに。

「一回だけだよ。付き合ってるからってそんなホイホイするもんじゃ
ないだろ」

「なんでですか？」

「なんでですかって…、あいつ赤面症だから二人きりだと顔真っ赤で
こっちが手を出すのが申し訳ないくらいなんだ。むしろ人が周りに
いるほうが大丈夫っていうか、なんなんだろうな？告白の時なんかは
俺より度胸あったのに」

「あー、そういえばクインさんってそういう方でしたねえ。スイツチ
のオンオフが極端に上手いせいで普段オフの時は超奥手ってことですか、
あざといです、可愛すぎでしょう。

最近クインさん、奏さんの前では前みたいな口調で喋らないでしょ
う？」

言われて思い返してみればそうかもしれない。帰ってきてから口
調が変わっていたからあえて口にはしなかったけど俺の前と他の奴
がいるのと同じや確か口調が違うかも知れない。千葉あたりと一緒に
いるときもそうだったから気づけなかった。

「ああ、前と比べたら砕けたというか丸くなったというか」

「愛されていますねえ、ゾツコンですねえ、もうラブズツキュんって感じ
ですねえ」

ラブズツキュんって…、古くせえ。ニヤリと若干胡散臭い笑みを浮
かべてリリアナが面白がってるのはよくわかる。女の子は恋バナ好
きだよな、知ってるよ。ミノリや五十鈴ちゃんにも根掘り葉掘り聞か

れたもん。

「リリアナ、そろそろ朝ごはん食べに行ってくるわ」

あまり深入りされるのは面倒だ、長話になりかねない。ここは逃げるが勝ちというものだろう。

「あつ！奏さん、まだ聞きたいことが…」

知らん。恋バナならギルマスとか戦闘班の班長とかおパンツ騎士の三角関係、ロリコンメガネと合法違法の女の子たちの三角関係とかもつと面白いのが転がってるだろう。そつちで我慢していてくれ

◆◆◆

「ごめん、ギョロフ、セコンド。みんなにいじめられてた」

食堂に入り厨房前の椅子に腰掛けて新聞を読むギョロフとテーブルに置くノートに献立らしきものを書き込んでいる△三日月同盟△のコック兄弟に話しかける。

「奏、お前はそういう説明足らずのところがあるから変な噂を立てられるんだと思うぞ」

「どうせ、楽しくおしゃべりしてただけでしょう。ボクたちが待つている間に」

「いや、悪い。今回は半分くらいは本当なんだ。みんな俺を泣かせにくる、あとは自業自得であってるけど」

呆れたようなポーズを揃ってやるコック兄弟ではあるがさつきと厨房に戻っていく。十分もすれば朝ごはんが目の前のテーブルに並ぶのだった。相変わらずウチのシェフたちの作る飯は美味いな。素人の作る料理とはやっぱり違う。流石実家がレストランだけはあ
る。

「そしてなにより白米が上手い」

「そりやそうさ。白米が不味くちや料理全体の味の半分は落ちちまう。白米だからこそ一番に気を使うのがプロの料理人の仕事なのさ」
「このれんこんのきんぴらも美味しい。朝ごはんはやっぱりこれだよ
ね」

褒めれば褒めるほどウチの料理人たちは次の料理を良くしてくる。最近では師匠だけでなく色んなギルドの料理人たちと集まって意見

交換会なるものを開いていると聞いている。美味しい食事が街に広がっていくのは良きことなり。

「朝ごはんの途中にお邪魔しますよ」

耳障りのいい凜とした声が食堂の入口から聞こえてきた。入口の方を見てみるといつものデキる女の空気を醸し出す〈三日月同盟〉の会計担当ヘンリエッタさんが立っていた。

ヘンリエッタさんはギローフにコップをひとつ出してくれるように頼み、ギローフの出した湯呑に俺が急須に入っている緑茶を注ぎ込む。緑茶に関してだけは淹れるのは俺の仕事だ、おいしい緑茶の淹れ方、注ぎ方にはコツがある。

「おいしい」

「それはよかった。少し待ってくださいね、すぐ食べ終わりますから」
「そんなに急がなくても構いませんよ。いつも言ってるじゃないですか正しい食事も鍛錬のうちだって。そんな急ぐ話でもありません」

食事も鍛錬。これはうちでは当たり前のことだった、なにせ日常生活そのものをルーティンにするのだから。食事どころか一日中修行しかしていないといっても過言ではない。むしろ食事を鍛錬のうち数えるのはアスリートや武術家と呼ばれるような人種にとっては当たり前のものだと思う。

「ごちそうさまでした」

「お粗末様でした」

「なんでヘンリエッタさんが言うんですか」

「あれだけ見ていて気持ちのいい食べ方を見せられれば誰でも言いたくなりますよ」

ヘンリエッタさんはそんなことを言いながら俺が朝ごはんを食べているうちに皮をむき終えたみかんの一粒を口の中に放り込む。

「そういえば、俺になんか用事があったんですよね、どんなお仕置きですか」

「してほしいというならしますけど、それはまた今度。」

供贄一族の董星様から奏に会えないかと打診が入っているんです
「供贄一族の頭領から？……ああ、都市防衛結界の復旧についてか」

「察しがよくて助かります。都市防衛結界の修復には十年単位でかかると予想されています。とは言っても〈円卓〉としても供贄一族としてもはやく復旧できるのであればそれに越したことはありませんからね。結界術の専門家の意見が聞きたいそうです」

アプローチとしてはいいんだろが、正直俺が力になれるかどうかはわからないな。一流の〈陰陽師〉として名前は通ってるらしいけどいかんせん元はちよつと靈感があるだけの日本人だ。知識だつて最低限身につけたばかりでもつと学ばなくちゃいけないことが山ほどある。

「あんまり、期待はしないで欲しいですねえ、こつちが勉強させてもらうくらいの気概でいいんだつたら行きますけど」

「それで構いません。どうせ十年そこそこはかかると最初に宣言されてそれを飲んでるんです。うまくいったらラツキーくらいにしかみんな考えていませんよ。好きに生きてくださいまし」

それじゃあ、着替えたら顔合わせくらいしてきますかね。

董星さんつて一回くらいしか顔を合わせたことしかなかったんだけど、仲良くなれるかね。鉄仮面だからな、あの人。三佐と一緒に意外と甘党だったりしたら会話も合わせやすいんだけど。

「何言ってるんですか、今日は行きませんよ」

「え、駄目なんですか」

「駄目なんですかって…、奏、最近ちよつと気が抜けすぎてるんじゃないかもしれませんか。まったく、本題はこれからです。席にもどりなさいな」

本題？まだなにかあるのか、都市防衛結界の復旧作業の手伝いなんて結構な大事だと思っただけだな。これより重要イベント？

「今日は十二月三十一日、大晦日です。それに明日はあなたの誕生日でしょう？」

みんな今夜のパーティーの準備とあなたへのプレゼントの準備でてんてこ舞いなんですよ」

そういえばそうだった、どうりでみんな浮き足立っている。アサハ

ナ様のところにていたせいで感覚がマヒしてた上に最近まともに日付を見る生活をしてこなかった。食って寝て好きな時にことをして好きな場所にいた。そりゃあわからなくもなる、なにせ誕生日なんて正月よりも特別なものじゃなかったんだから。

時は金なり、そして信頼も金なりだ。

第六十四話 罪人の近況

ヘンリエツタから聞かれた。誕生日プレゼントは何がいい？と。それに奏はなにもいらないと答えた。普通にのんびりとした正月が過ごせればそれでいい。しいていうならお年玉で渡すお金の工面をしてもらえる助かる。

その程度でよかった、他の面々にもそう伝えて欲しい、年の瀬でお金も余裕がないのにそんなものに使う金が勿体無いと気を遣ってでも本心からそう思っていた。

ぶっちゃけこの年で誕生日プレゼントとかどういふ顔をして受け取ればいいかわからないからなのだが。

「まあ、お年玉の融通は本当にそれでいいのか疑問に思わなくもないですがいいでしょう。でも誕生日くらい少しくらい無理を通してもいいのですよ」

「壊れた魔法マジックバックの鞆マジックバックの代わりの新しい魔法マジックバックの鞆マジックバックが欲しいとは思いはしますけど…、そこはそう簡単に手に入るものじゃなくて、自分で手に入るから意味のあるものでしょう。

年をこたつの中でこせるだけで本望です。生きてて寝正月を体験できるとは思ってたからですから自分の誕生日よりそっちの方が楽しみです」

「そういえば実家は神社でしたね」

「ええ、毎年三途の川の一步手前までは足を運びますから。今年は閻魔様に挨拶参りに行かなくて良さそうホツとしてますよ」

元から誕生日なんて実家が神社である奏にはあつてないようなものだった。印象に残るのはせいぜいお年玉の中身が姉や妹よりも多かったことくらいだろう、ケーキも大晦日に食べていた。三ヶ日は神社にとつては休みにならないのだ。あつちの世界ではいつもそうだった、なんで正月にしかも神社の家に生まれてしまったのだろうか。こればかりは自分の生まれを呪ったこともある。

「そう思うとテンション上嫌がらせがってきた、姉ちゃんに自慢嫌がらせしに行こうか

な」

「あら、もうお姉さんとの面会はお許しが出たんですか」

「はい、昨日リーゼちゃんから連絡をもらいました。体調は最悪らしいですけど、もう会う分には構わないそうです。〈円卓〉からの処分も下りましたしね」

そんなことをうきうきとした顔で口走りながら奏は席を立つ。ヘンリエッタは姉に会いに行こうと楽しそうにする奏を見て微笑みながら奏と千菜の実姉の近況を聞いた。

「アイザックが引き取り手に名乗り出るとは思いませんでした」

本来百恵の身元を預かる予定だった〈D・D・D〉が諸事情でギルド内部に問題が発生し、〈円卓会議〉からの仕事に対応することができなくなった。それに関して奏が言えることはない、正確には奏が口出しできる範疇を超えてしまっている。〈D・D・D〉が機能停止することの影響は受けるしその問題に一番に矢面に立つことになるリーゼのことを心配する部分はあるがこればかりはどうしようもなかった。

「〈黒剣騎士団〉は良くも悪くも武闘派ですし、男性ばかりですからちゃんと女性としての最低限保たれるべき生活を送れるか百恵さんが心配ですね」

「大丈夫ですよ、うちの姉は炊事洗濯なんでもできますから、むしろ〈西風〉じゃ甘やかされるからちようどいい。

…もしもの時もソウジロウは身内と女に甘いからこそこんなとこダメです、けどアイザックならあれを押さえ込める。〈ホネスティ〉もなくはないですけど、今も昔もあそこは生粋の武闘派じゃないですからダメでしょう」

アイザックがなにを思っただけで百恵の預かりを請け負ったのかはわからない。だが客観的にみればその結果は決して悪いものではなかった。

「また、そんなことを言って…。」

奏、百恵さんは実のお姉さんでしょう、『もしもの時』なんてそんな風に言うのは感心しません」

「言わなくちやいけないんですよ。本当の最期を何度も看取ってきた人間が人殺しを許容してしまつたら誰よりもだめでしよう。」

ま、お互い無茶苦茶やり合つて良くも悪くも我が儘押し付けあうのが俺たち姉弟ですから。気を抜けば寝首を掻かれるを地で行くんです、千葉も俺も姉ちゃんも。若干俺が割を喰つてる気がしなくもないけど……、とにかくいいように使つて使われる仲、これくらい日常茶飯事なんですよ。だからこ掛け値なく大好きで信頼できるんですけどね」

真面目な顔で奏を諫めようとするヘンリエッタに奏は譲ることのできない確固たる意思をもつて反論する。その顔に普段の誰にでも警戒感を持たせない柔らかな雰囲気はない。けれど最後にはふざけた口調でお茶を濁すようなことをのたまうのだ。

死の先を見ることができる人間と本当の死を見ることができない人間。どちらも本来なら見なくていい人間の死の先を知っている人間であつてもその価値観はどうしようもなく相容れない。

「それじゃ、行つてきますね。帰つてきたらお金の相談乗つて下さいよ」

奏は話しを締めくくり終わつてから自分の話したことに気恥ずかしさを覚えたのかヘンリエッタに死活問題であるお年玉大人の見栄の相談について一言言つてそそくさと食堂を後にしようとした。そんな奏の背中にヘンリエッタは言葉を投げかけた。

「奏、今夜はあなたはそれどころじゃないかもしれないかもしれませんよ?」

「割を喰つていると思つているのはあなただけじゃないつてことです」

それ以上ヘンリエッタが何かを言うことはなくただにこにここと微笑みだけだった。



奏天儂百恵はオールラウオンダー肌な人間だ。できないことはないなんというのはいすぎかもしれないがやろうと思つてできなかったことはきつとなかつた。お完ー壁る凡らう人んだーな奏とは大きく違う。

彼女が持ち得ないものがあるとするならば凡人故に持ち得るものだろう。現状をそのまま許容しきるだけの脆弱さが彼女にはない。才能がある人間は上を目指す権利を持っているとはよく言ったもので、才能ある人間は勝手に上を目指すものだ、彼らに権利なんてものを持つているなんて意識はない。

つまり、現状を固定化されてしまうかどうかどうしようもなくなってしまふのだ。

「奏、もうここやだ……。なんでもするから、なんでもするから、なにかやらせておくれ」

「うん、思ってた以上に応えてるのはよくわかった。だから軽々しく“なんでもする”なんて口走らないでくれ、今の一言でモテない男は反応しちまうんだ」

サツと目をあさつての方向にそらす〈黒剣騎士団〉の面々を尻目に奏はすがりつく姉をなだめようとする。どうにも男ばかりの〈黒剣〉の面々の行動は姉から見ると見てもやもやするらしい。けれど一応は謹慎観察処分にある百恵がなにかをするわけにもいかずただ眺めているだけしかできない悶々とした日々を過ごしているらしい。奏の姉である百恵も奏と同じで根は世話焼きのお節介なのだろう。

「僕のためになにかしてくれようっていう気持ちはすごく嬉しいんだけど、女慣れしてない人ばかりでいちいちチヨイスがズレてるのよ。暇つぶしにってデコトラ馬車のカタログ持ってこられたときはどうしようかと思ったよ、意外と面白かったよっ、もう」

「やった！ほら見る俺のセンスは正解だったろ？」

「ちくしよう、だったら今度イタ馬車のカタログもらってくるか…？」

「あっ、お前抜けがけ禁止だったろが」

『世にも奇妙になる薬全集』、『レイネシア姫フィギア』、『万能十二香辛料セット』……、これで、勝つるっ！」

(全員ねえよ)

ギルメンにちゃんと罪状が伝わっているのかどうか心配になってしまふような緩さだった。

「じゃあなにか？手持ち無沙汰すぎる上にここのメンツのやることな

すこと見ていてヒヤヒヤするからここには居たくないか？それはちよつと無理だぞ、一応罰としてここに監禁されてるわけだから」

「いや、違う。ここにははすごく満足してる。みんないい人だし」

背後では感涙の涙を流しながら男たちが空をも付き穿たんばかりに拳を突き上げている。今の彼らなら避雷針の代わりにもなるだろう、二人はそれをスルーだ。

「だから恩返しじゃないけどご奉仕がしたいんだよ。ほら奉仕活動つてやつ？手持ち無沙汰で日がな一日ベッドの上つてのはこの呪いで動けないことよりも辛いんだ」

呪いで動けなくなっている時も呪いが緩まりある程度の自由が利くときに何もやることなくただベッドで過ごす時間も違いはない。百恵にはその現状があまりにも許容できない、いままでやってきたことができなくなつて生きているのか実感が感じられなくなつてしまった。

「ご奉仕！ご奉仕ですか!?マジで!？」

「ならばこのネイビーメイド服を着てください!」

「割烹着もありますよ!」

「ナース服も!」

「ええーい、黙れ!この年中発情期の男どもが!さつきから後ろの方でガヤガヤ騒ぎやがって、真面目な話してんだろうが」

「二お前には言われたくねえよ」

「やっぱり〈黒剣騎士団〉に預けず 〈西風〉に預けるべきか…」

「よし表でな」

「よし刀抜きな」

「秘蔵のレイネシア姫のブロマイドはいかがかな?」

拳で語り合おうとするものに、本気で屈服させようとするもの、買収しようとする知能犯。バカばかりだ。

「いいじゃねえか、やらせてやれよ」

一触即発の空気が流れる中で野太い乱雑な声が届いた。その声の主はこのギルドキャツスの主であり百恵の身柄を預かると発言したアイザック。アイザックはやる気まんまんに意気込むギルメンを

押さえ込み一喝して下がらせる。ぶうぶうと文句を言いながらも男どもはどこかへ下がっていった。

「アイザック」

「なんだよ」

「お前も俺の姉ちゃんメイド服がみたいわけ…?」

「そつちじゃねえよ!!」

まるでゴミでも見るかのような目で勝手な勘違いを盲信する奏だったがアイザックの部下である連中の反応を目の前で見せられていたとなると納得できない反応ではなかった。そのことを言うことができる上司が世の中にとのくらしいいるのかは分からないが、部下の失態は上司の失態でもある。

「お前の姉貴の奉仕活動だ。前からお前どころ〈三日月〉のセララって娘いたただろ、あいつを見てて高レベルの〈家政婦〉が欲しかったんだ。お前の姉貴なんだ、どーせおおかたの雑務はできんだろ。ただで万能メイドが手に入るならこれ以上はねえだろ」

「アイザック君、一応彼女はうちの監視預かりという立場です。そのように働かせるのは問題になります」

「ああ? いいじゃねえか、本人が働きたいって言うんだからやらせてやれば。こつちがなにか不利益被るわけでもねえし」

〈黒剣騎士団〉の参謀担当であるレザリックがアイザックの言葉に待ったをかけた。レザリックの意見は至極全うなもので身柄を預かっているからこそその人権を尊重しなければならぬ。ミナミのような独裁政権を敷いているならばいざ知らずアキバの街を統治するのは〈円卓会議〉という合議制自治組織である、人の善意で成り立ち運営されるべき組織だ。罪人の扱いとはいえその人物の人としての権利をないがしろにすることは許されないのだ。

奏としては姉の望みを通させてやりたいという思いもある。だが本人が望んでいることだとしても外からはそう見えないのが事実なのだ。

「ええ、だからタダ働きさせるのが問題なんです。きちんとお給金を出さなければ」

「なんだよ、回りくどい言い方しやがって。賛成なら最初っからそう言えつての。おう構わねえよ給金くらいポンと出してやれ。うちの財布事情はお前に全部任してんだ」

「レザリックさん」

なんとありがたい話なのか。殺人、アキバの街の転覆加担を行った人間に対しての待遇としては破格の待遇だった。けれど……。

(これで〈黒剣〉は矯正されるな、俺しーらね)

奏は知っていた。百恵はストイックさは他人にも敵しいことを。お節介で世話焼き上手のスパルタメイド。きつと〈黒剣騎士団〉は幸か不幸か寝坊のひとつもできない超健全真面目ギルドになることだろう。

心の内でそんなことを考えながら奏は苦笑いを浮かべておくだけだった。

第六十五話 お礼参り

盤をひっくり返したような波乱の五月を乗り越え安定と変化の夏を過ごし根を下ろすことのできる地盤を秋に感じその地盤に潜む危うさを見出した冬の中、冒険者たちは新たな年の始まりを迎えていた。

年が明けたからといって何かが劇的に変わったわけではないのだがそこはそれ、新たな年の始まったというだけでめでたい。何かと忙しなかった一年から次の一年が始まるのを祝って冒険者の街アキバは賑わっていた。住人たちの顔は皆が皆ほころんでいる。

もちろんそれは、アキバの街を取り仕切る十三のギルドのひとつ〈三日月同盟〉であろうと例外ではなかった。

「新年やー！めでたい！めでたい！みんなおいでおいで！お年玉あげるでー！」

「マリエ、今から初詣に出かけるんですからそれが終わってからにしてくださいまし。支度が進まないでしょう」

本来メンバーのハメを外しすぎたりしないよう嗜める役割のギルドマスターが一番ハメを外しているっぽいことがこのギルドらしいといえばらしいという光景だった。

「あら、そういえば奏を朝から見てませんね。まだ起きてきてないんですか？

寝正月を過ごすなんて言うてはいてもさすがにもう起きてきてるでしょう」

「カナ坊なら朝早くに出かけて行ったよ？」

ギルメンの年少組に囲まれながらお年玉を配るマリエールはヘンリエッタの問いに何気なしに応えるが、その返答を聞いたヘンリエッタはどうしても昨日の奏の相談マジックバックごとを踏まえて邪推せざるおえない。生々しい話ではあるのだが魔法の鞆を失った奏のお財布事情はなかなかに厳しいものがあつたのだ。

「まさか、お年玉を用意できなかつたなんてくだらない理由での逃走なんて言いませんよね…。」

「兄さんならちゃんとお年玉を用意しきって朝のうちに配り終えてますよ。枕元にお年玉袋を置いてくとかサンタクロスみたいなマネしてますけど」

ヘンリエッタの予測する最悪の未来を晴れ着に着替えた千菜が否定する。奏が帰ってきてから献身的に奏のリハビリに貢献してきた彼女は今は一緒に行動をしているわけではなかったらしくふてくされたような声でヘンリエッタに兄のずれた所業を告白した。

どうやらヘンリエッタの考えた情けない予想は幸いにはずれたようであつたが、しかし、それはそれでまたヘンリエッタの脳裏に新たな疑問が沸いてくる。

「お年玉袋を枕元に置いていくつて、奏は随分と早くにでかけたようですね。千菜、行き先は聞いていますか？」

すると、千菜は苦虫を噛み潰したような表情をするとヘンリエッタの質問に答えた。

「クインとのデートですよ、デート。しかも龍神様に会いにいくつて。私でもまだ紹介してもらつてないのに、もう冠婚葬祭の予定でも立ててるんじゃないんですかっ！」

「さすがにそれは気がはやいでしょう…。というかクインさんなら彼女になつても構わないつて言つていたじゃありませんか」

「それはそれっ、これはこれですっ」

どうにもふてくされ方が尋常ではない様子から千菜が晴れ着の支度でもしている時に部屋に奏がお年玉を置きにやつてきたのだろうとヘンリエッタはあたりを付ける。

着替え中にも勝手に入ってきた奏を着替えを終えることもなく千菜が問い詰めただろう様子が目に浮かぶし自分も連れて行けと千菜が言ったことも予想がつく。

しかし奏はそれを断つたのだろう。彼女と一緒にクインに行くからお前はダメだとも言つて妹のおねだりを無下にした。兄のことが大好きでしようがない妹にはふてくされるに十分な理由だ。

「あなたもそろそろ兄離れする時かもしれないですねえ」

「私にべつたりだったのは兄さんの方です！」

「べったりしてる自覚があるならけっこうですよ」

少しづつ少しづつ彼と周りの関係は変わっていく。

けれど、どうにもあまり変わりそうになさそうな関係がここには一つ。

◆◆◆

年が明けたというだけで気持ちというのは晴れ晴れとするものであり普段から見ている景色も心なしかいつもよりも違って見える。高速で澄み渡る空を飛ぶグリフォンの背であればそれは格別のものだろう。それが好きな人と一緒であればさらに特別なものだろう。

「ねえ、八枝」

「んー?」

奏の背の方から風を切る音とは違う確かな呼びかけが彼の耳に届く。冬ともなるとグリフォンに乗っての移動はどうしても空の上の冷たい風は寒くてかなわないので厚着に厚着を重ねて耳まで毛皮の類で包んでしまうのだがそれで周囲の音まで聞こえなくしてしまうような、デート中に彼女の声を聞き逃してしまうような阿呆ではないのがこの男だ。

「今更言うのも、というか私が言うのもなんなんだけど、本当に千菜も一緒に来なくて良かったの? 私は初対面だけど千菜はそうじゃないんでしょ?」

「正直迷いはしたけど、いいんだよ。アサハナ様に会うんだったらまず最初はお前を先に会わせなかったんだよ。これから先のことを考えたなら尚更な」

奏が後ろを振り向くことをしたわけではなかったがクインは彼の言葉がいたって真面目に真剣に答えていることを感じた。

(そ、それは、かかっ冠婚葬祭的な意味で!? 神様にいの一番に紹介したってそういうこと!?)

いやいやまさかあ、付き合ってたまだ一ヶ月だし。キ、キスだってた一回だけだし…。

あれ、でも八枝って龍神の眷属になったって言っていたような…。眷属ってことは龍神様は八枝の親みたいなものになるわけじゃ…。

つまり、今回は親への紹介みたいなもの!?)

もちろん、彼女が感じた彼の言葉の正直さは本当かもしれないが、言葉の真意がそうであるかは知れたものではない。探偵モードならいざ知らず、彼女が持っている回路はシリアス回路だけではない。いやんいやんと真つ赤な頬に手を添えて頭を振る彼女の乙女回路はファンタズマ〈幻想級〉だ。

「ヒメ、あんまり後ろで暴れんなよ。しつかり捕まっていなくて落ちちまうぞ。」

「はい、旦那様。」
「？」

ぎゅつと奏の背に幸せそうな顔で抱きつく彼女の顔を見れば彼女の自慢の彼氏はその幸せすぎる勘違いに気づくことはできるのであろうが、いかんせん彼はグリフォンを操っている真つ最中である。残念なことに彼がその顔を見ることはできないし、付け加えるなら今の彼が彼女の勘違いを指摘するかと問われればきつとしないであろうことは最近の彼らを見てきた人間なら容易に想像のつくところだ。クインの勘違いもわからなくもない、かもしれないくらいには彼らは仲睦まじい。

お互いに好き好んで生きている。お互い好きないように生きている。それは百恵が弟に願った在り方なのかもしれない。

「そろそろ降りるぞ。」

グリフォンは高度を下げていき一つの集落に降り立った。冒険者の住む街とは違いそこは大地人の住む街、アサクサの街。奏が最初に根をおろした街。

見慣れているのか街の人々がグリフォンが降り立ったことに驚いている様子はない。〈大災害〉後は奏や千葉がちよこちよこと今と同じように突然空から降りたつからだろう。にこやかに手を振っている人間すらもいる。

振られる手やかかけられる声に返事を返しながら奏は目的の場所へと向かっていく。

行き着く先は街の広場。その場にはあらかじめ連絡を入れていた

待ち人が二人。

「どうも、明けましておめでとうございませす。おやつさん、おばさん。いやアサハナ様と呼んだほうがいいですか？」

彼女と彼は奏と千菜を最初に受け入れた大地人。

「やつぱり、バレちゃったのね。でも、わたしはお母様と同じであつて同じじゃないの、だからハナさんとも呼んでちょうだい。」

この世界で最初に親密になつて名前も知らなかつた人。

おかしかつたのにその疑問を感じすらしなかつたのは明らかかな異常だつた。暗示の類であるのか精神誘導の類なのか、どちらにしても今の今まで気づきもしなかつた。〈冒険者〉にそんなことができるのはそれこそ神様かなにだけだろう。

「たはは、じゃあハナさん、教えてください。おやつさんも〈古来種〉とかなにか？」

「いや、俺はただの大地人だよ。しがな大地人さ、名前はとうの昔に捨てたがね。今まで通りおやつさんとでも呼んでくれ」

懐かしむようになにかを思い出すおやつさんの顔は穏やかだ。名前を捨てたという言葉から測れる尺度はわからない。身分を捨てたという意味なのか、それとも…。

和やかに笑うハナは悪びれるそぶりもなくこの人が名前を失くしたのはわたしのせいなのよ、なんて自慢する。それがとても幸せそうに見える。

「アサハナ様に俺が会えたのもハナさんのおかげですか？」

「そうね、秋頃に会つた時、奏くんに見えたものだからちよつと助けになればと思つただけだ。思つてた以上に縁を作つちやつたみたいね、おかげで私たちの正体もバレちゃつて。孫の顔見せついでに文句でも言いに行こうかしら」

龍神アサハナも同じことを言つていたことを奏は口にはしない。気をきかせてかこちらの会話に入らず少し離れたところにいるクインのこともある、本題から逸れてあまり彼女を仲間はずれにし続けるたまま長話を続けるのは本意ではなかつた。

「ごめんなさいね、騙すつもりはなかつただけだ。奏くんはどうし

てもそういうのに敏感だったみたいだから。私もパパも身分も何もかも捨てた身だった、あまり正体を探られるようなことはあまりされたくなかったの。

お母様に会いに行きたいのでしょ？そちらの女の子の紹介かしら？」

なにやら愉快そうに笑うハナの視線の先には奏が連れてきた千葉妹以外の女の子。その視線に気がついたのかクインはぺこりとおじぎをする。それが気に入ったのかおやつさんの方は奏の肩を抱き肘で脇腹をつく。いい娘を見つけたな、なんて小声で言うが見つつけられていたのは奏の方だ。それでも嬉しいものは嬉しく照れくさかった。

「はは、そんなに甘い展開だけで進めたらよかったんですけどね、それはおいおい。今回は新年の挨拶と報告が半分。相談が半分って感じです。もちろんハナさんとおやつさんに会うのも目的の一つでしたけどね」

「嬉しいことを言ってくれる。アサハナ様にもよろしく言っておいてくれ。俺の伝言にアサハナ様がどんな顔をするか正直予想もつかんが」

「それじゃあ、用意をしましょうか。といってもすぐにいけるけれどどうする？」

その言葉は奏には意外だった。結界に入る手法は前回のものを採用するとして結界の張られたフジの樹海の中に入らずとも外から干渉する手段はないかとアテを探しにきたのだが嬉しい誤算であった。

「いけるんだったら今すぐにでも。」

クイン！」

「終わったのか。」

ご主人、ご婦人、初めましてへモルグ街の安楽椅子のクインといえます。若輩ではありますけれどもどうぞ奏共々よろしくお願いたい」

奏に呼ばれたクインは二人に挨拶をする。口調は奏と二人でいるときは違う外向き用。丁寧至極、奏としてはこの口調も自分以外の前でもやめさせたいと感じはするが今のところどうにも直せそうに

ない。ロールプレイをやめさせようというのもなかなか勝手がすぎると以前の奏ならあきらめるだろうが今の奏は前と違って幾分か自分勝手になりつつあった。

奏はクインを後ろから抱きしめる。優しく頭を撫でながら逃げられないように体を密着させて抱きしめる。

「ひゃい!? 奏!? なに? なに? こんな人前でそんなことしたらダメだつて」

「慣れない人には硬いやつですけど、ほんとはこんな感じでかわいいやつなんです。な、ヒメ。」

それじゃあこのままでいいんで送ってもらえますか」

いつもどおりに顔を真っ赤にして暴れるクインではあるがもちろん奏の拘束から、もとい抱きしめから逃れられることはかなわないのだから撫でられるままに撫でられるしかない。そんなクインが平静を保っていられるはずもなく素をさらけ出す。いつもの奏の前や干菜の前でいる赤道一姫だ。

クインを後ろから抱きしめているのが思いのほか気分がよかったのか離す気も失せてしまった奏はこのままアサハナの神域まで送ってくれるようにハナへと頼む。

「がはははっは、奏、前々から思っていたがお前は英雄の素質があるな！」

「最高よ、奏くん。いい男になったわね。さすが龍神の眷属です。わたしは龍神の娘として成長した奏くんを誇りに思います。」

それじゃあ、いつてらっしやいお母様によろしくね」

二人の視界が真っ白に染まる。

少しの浮遊感と虚脱感。そして壁を越える感覚、それは正しい結界の通り抜け方。奏にとっては懐かしい感覚だった。